

---

# ぶれしす

みずきなな

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ぶれしす

### 【Nコード】

N07720

### 【作者名】

みずきなな

### 【あらすじ】

妹の綾香が飛行機事故にあつた…生死が不明な妹の綾香…そんなこんなで凹んでいた俺にさらなる災難が降りそそいだ。なんと俺は夏休みの学校である事故に巻きこまれて死んでしまったのだ。事故の当事者は慌てて俺を魔法で生き返らせた。それがなんと俺を妹の綾香と勘違いしてだ…

妹の『綾香』として生き返った『悟』が元の自分に戻るまでを描いた小説です。『悟』は『綾香』になる事によって今まで経験した事の無い学園生活・私生活・そして恋愛を経験してゆきます。果た

して無事に元の姿に戻る事は出来るのでしょうか？

内容は結構軽いノリだったたり重いノリだったりとかなり変化します。好き嫌いがハッキリする小説だと思います。

## 第1話 この世の中の信じられない事実（前書き）

作者のみずきなな（男）です。この作品が初投稿です。

この小説の舞台は現代の高校ですが、内容は現代社会ではありえない事ばかり書いております。

そんなに危ない表現はしておりませんが、多少は表現的にえっちな部分？（15禁までいかないと思うレベル）があるかもしれませんが。露骨な描写などしてませんが、気になる方は注意して下さい。

ストーリーはありきたりかもしれませんが、まあ自己満足なのでOKとしてください。

実はこういう現代・学園ものを舞台にした小説？を書くのは初めてです。

文法などは工業高校卒業の私には無理です！誤字脱字なんてあたりまえ！っていう寛大な気持ちでお読みください。

スーパライトノベル  
超軽小説だと思って書いています。ようするには深く考えないで読んで欲しいという事です。宜しく願います。

## 第1話 この世の中の信じられない事実

夏休みに入った七月のある日、俺は両親と一緒に彩北高校へとやってきました。

この高校は俺と妹が通学している高校で規模もそれほど大きくはない普通の進学校だ。

妹の綾香は俺の二つ下で今年この高校に入学したばかりだった。

俺はこの高校の三年で、綾香は一年という事になる。

綾香は結構成績もよかつたらしいので、俺と同じ高校じゃなくつてもよかつた。

しかし、綾香は何故かこの高校を選んだ。

まあ兄としては嬉しいのだが…

しかし…

今日ここ何をしに来たのかと言うと…

それは…妹の綾香の事について学校へ報告あつて来たんだ…

実を言うと妹の綾香が死んだ…らしい…

飛行機事故だった…昨日までは生存者を捜索していたのが…  
ついに打ち切られてしまった…

妹は亡骸すら見つからなかった…だから実感があまりない…  
でも…生存している可能性はほぼ0だと言う話だ。

綾香は高校に入学してとても嬉しそうだったのに、まさか…こんな事になるなんて…

そう…あれは夏休みに入ってまだ数日しか経っていなかったある日…

あの日俺と綾香と両親は山口に住んでいる祖父母の家に三年ぶりに帰省する事になっていた。

俺は高校三年で受験を控えていたが、俺は勉強なんて嫌いだし、別に田舎に帰省したからといって成績が変化するとはとても思っていないかった。

去年は綾香の受験、一昨年は家庭の事情、という風に三年も帰省してないから久々に帰省しようと思った訳だ。

本当は家族全員で一緒の飛行機で帰省する予定だったのだが、全員のスケジュールを合わせられなく先に綾香だけが帰省する事になった。

俺は綾香の出発した二日後に、両親は早めの夏休みを取ってつと言っても四日後の出発予定だった。  
今考えるとなんでわざわざ家族がばらばらに帰る必要があったのだろうか…

今でも思い出す…あの日…

俺は帰省の為に妹の綾香がまとめた荷物をもって玄関にいたんだ。

「お兄ちゃん、荷物を持ってきてくれてありがとう！」

綾香は笑顔でお礼を言った。

実の妹ながらかわいい…

身長は142センチしかなく幼児体型で胸もそんなにはない。

正直言うと小学生に見えてしまうくらいのコンパクトさだ。

しかし、肩まで伸びたストレートの黒髪につぶらな瞳。

まだ大人にはなりきれない体つきがなんとも言えないかわいさを感じさせる…

いつもワンピースやスカートの時が多く、パンツを履いている姿を見た事がない。

それは多分、俺が綾香のパンツ姿が嫌いだったことが要因のような気もする。

肌は色白でつやつや…なんていうか、お人形のような感じがする。

お前の妹にしておくのはもったいない…とよく知り合いに言われるが…まったくその通りかもしれない…うーむ

「いや、別にいいよ、この程度」

「本当に助かったよ」

ほら、この笑顔ときたもんだ…

「学校みんなはお兄ちゃんの事を怖いっていうけど、なんでかな」

綾香は首を傾げながら変な質問をしてきた。

「そりゃ髪も茶色く染めてるし、こんな格好しいてるからだろ？」

「ふーん…別に髪が茶色くっただって怖くないと思うけど」

「そりゃ妹にまで怖がられたら嫌だぞ？何だよ、突然そんな事を聞きやがって」

「え？ううん…あ、そくだ！お兄ちゃんは好きな人いるの？」

「何を唐突に聞くんだ！？そんなのいるはずないだろ！」

どうしたんだ？突然そんな事を聞いてくるなんて？？  
それに何だその本当に？と言わんばかり表情は…

「へーそうなんだ…そろそろ彼女の一人くらいいてもいいんじゃないの？」

「ま、まてよ！そういう綾香はどうなんだよ！」

「私は…秘密だよ！でもね、きつとお兄ちゃんを好きな子はいると思うよ」

綾香は笑顔で俺に向かって言った。何だ？何か確信でもあるのか？しかし…

「え！？そんな事ないだろ？俺はもてないからな」

綾香は俺のをじっと見ると微笑んだ。そして荷物を持つと玄関を出た。

「お、おい！綾香！」

「へへ…この話はまた今度ね…じゃあ私いくね！お兄ちゃんも早く来てね」

「ああ、わかった、二日後には俺もいくから」

「うん、わかった！先におばあちゃんの家で待ってるね！」



笑顔の綾香はそう言って朝早くに家を出て行った。

その日の夕方だった。家に一本の電話があった。

内容は綾香の乗った飛行機が墜落したって。

正直俺はすぐには信じれなかった。

だいたい飛行機なんて電車より安全なんじゃないのか？

今の現代で飛行機事故とかあるのか！？

そう思いながら電話応対する母親を横目にテレビをつけた。

テレビでは飛行機墜落事故のニュースが。嘘じゃなかったのかよ…

飛行機はエンジントラブルで着陸寸前で瀬戸内海に墜落したらし

い…

そんな馬鹿な…

でも、もしかすると助かった人もいるらしいし…綾香も…

綾香：あいつは運がいいから助かってるかもしれない。

そついう気持ちがある時にはまだあったんだ。

その日の夜、両親と一緒に東京へと向かった。

そこで綾香が飛行機に乗ったのかをまずは確認した。

飛行機の搭乗者リストに姫宮綾香の名前があった。

そして救出された人の名簿に名前はなかった…

生存の希望はほぼなくなった。あとは奇跡を待つだけだ…

何で…いきなりこんな事になるんだよ!!!

俺が引き留めておけばよかったのか…くそう…

今朝の綾香の笑顔が思い浮かんだ…

妹は…綾香は…まだ十五歳だったのに…人生も今からだっていうのに…

俺は…くそ。

そして最後の希望だった捜索も先日ついに打ち切られた。

俺は両親と一緒に学校の校門をくぐった。

夏休みの静かな校庭を歩く。

俺の横を両親は沈んだ顔をして歩いていった。

両親は綾香の事故について学校と相談らしいが、こんな調子で大丈夫か？

心配だったので取りあえず学校まで一緒に来たが…

でも俺も傍から見ると沈んだ顔で歩いてるんだろ…

自分でもわかる…当たり前か…実の妹が死んだかもしれないんだ…

俺はふと母親の鞆の中に目を向けた。

すると鞆の中に綾香の生徒手帳があるのが見えた

俺は母親に言っつてその生徒手帳を手にとって開いて見た。

まだ新しい生徒手帳。その中に学生証明書が入っている…

学生証明書には笑顔の綾香の写真があった…

「これ、俺が持っていていい？」

俺は両親にそう言っつて、生徒手帳をズボンのポケットに入れた。

校舎に入った所で、両親は職員室へ用事をすませに行くと言っつ。

俺も一緒に行くか聞かれたが、正直もう綾香の話聞きたくない。だから一緒に行くのはやめておいた。

俺は何となく校舎内を歩いている。

そう言えば両親は用事を済ませたら家にそのまま戻ると言ったな。

俺も校舎内をすこし歩いたら戻ろうかな…

俺はこの校舎で綾香と思い出をつくっていた訳ではない。

だが夏の人がほとんどいない校舎内はどこか寂しく、なんとなくだが俺に綾香を思い出させた。

ガタン！！！！バン！！！！

ものすごい音がした。

俺は慌てて音がした方向を見ると特別実験室という部屋から女性  
が飛び出して何処かへ走って行った。

あれ？今走って行ったのは…あれは確か…歴史の北本先生か？

北本 絵里 今年の春からこの学校に来て歴史を教えている先生だ。

年齢は怖くて聞けないが独身だったはず。

スタイルは良いのだが彼氏もいないっぽい。あくまでも俺の予想だが…

正直あの先生は何を考えてるのが良くわからない。

北本先生はたまに変な事を言う時があつて怖い。すごくとっつきずらい先生だ。

あれ？おかしいな…北本先生は理科の先生じゃないだろ？なんで実験室から？

俺は不思議に思っても実験室の扉の前に立った。

までよ…そういえば、俺は高校三年になるのにこの部屋に入った事がないな。

というよりは、この部屋はいつも鍵がかかっていて入れないんだよな。

誰かにはここの教室は使われてないって聞いたんだけどなあ…

入った事のない部屋だと何だか興味が沸く。

どうせ北本先生だ、戻ってきて怒られても怖くなんかないし、ちよつとだけ教室の中を見てみよう…

俺はそう思い込み、勝手に教室の中に入った。

そこで見た光景は…

中央のテーブルにはいくつもの試験管が並び、真ん中では火のついたままのアルコールランプがある。

そしてその上にはフラスコが置いてある…

フラスコの中にはどうみても怪しい黄色い液が入っていた。

あの先生はこの部屋で何をやってたんだ？

何かの実験か？それにしても歴史の先生がなんで実験なんかするんだ？

ん？何だあれは？

よく見ればフラスコの横には何か本みたいなのが…

怪しい本だな…あの先生がやってる事にすこし興味がある、先生が戻ってくるまでにここを出ればいいだろうし、本の内容を確認してやろう。

俺は中央のテーブルへと歩みよった。

ぐつぐつぐつ！！！

フラスコ内の黄色い液がかなり煮え立っている。  
なんだこの鼻をつくような臭いは…

アンモニアにも似た異臭を放つその液はまさに毒といった感じだ。  
マジで危ない液にしかみえない。まあ俺には関係のない事だった…  
俺は鼻をつまみながら机の上にある本を手を取った。  
本のページを適当に開くとそのには怪しい文字がいっぱい書いて  
ある。

何だ？英語か？読めない文字だな…  
つまんねーな…もういいや俺は本を机の上に置いた。

その瞬間だった

ドガーーーーー！！！！！！

いきなり激しい爆発音が聞こえたかと思うと瞬間的に目の前が真  
っ白になった…  
そして意識が遠のいていった……………

…

うーん

あれ…俺…

ベッドに…寝てる…

何が…あつたんだっけ…

俺は…何をしてたんだっけ…

あれ…人の気配？誰かいるのか？

「あーもう…すつごく失敗…でもまさか生徒が実験室に入ってたなんて…で、でも…私の魔法でなんとか蘇生させたしあとは、何ごともなかったかのように済ませれば…」

誰かの声が聞こえる…

「目が覚めたら…よし…これでOKだ」

何処かで聞き覚えのある声だ…俺はゆっくりと目を開いた。

ここは？どこだ？俺は周囲を見渡した。

どうやら俺は保健室にいるようだった。

そして俺の横には椅子に座った北本先生がいる。

「あ、あら！気がついたみたいね！姫宮さん」

俺の名前を呼んでいる。

「あ、あなたはね、実験室の前の廊下を歩いててね、実験室のガス爆発に巻き込まれて…で、でも！大丈夫よ！無事よ、無事よ、怪我

もなかったし」

廊下？ガス爆発？そうだったっけ…なんか実験室の中にフラスコがあつて…それが…

「ば、爆発の勢いで、飛ばされて頭でも打つたみたいなの。それで、ちよつと気を失つてたみたいだからここに私が運んできたのよ！」

あれ？そうだったっけ…確かに気を失つてたけど…でも何だ？この先生は？

表情はとてもひきつってるし…おかしいぞ

「そ、そう！あなた！もう夕方だし！け、怪我也なかったからもう帰っていいわよ！ね、姫宮綾香さん」

「え！？」

俺は驚いて声を出した。

「あら？どうしたの姫宮さん??？」

今この先生……妹の名前で俺を呼んだ???

「え？いや…今…」

「だからもう帰っていいのよ？姫宮綾香さん」

「北本先生、今…俺の事を妹の名前で呼んだ？」

「え!？」

「俺……………姫宮悟だけど？」

北本先生が硬直している。

「あの????先生？」

ガラガラ!!ドアの開く音が聞こえた  
そして保健の桶川先生が入って来た。

「北本先生、姫宮さんは気がつきました？」

北本先生は固まった表情のまま桶川先生の方角を見た。

「え…ええ…だ、だ、大丈夫です」

「そう、それは良かったわ、それじゃあ…ちょっと体の具合を見て  
見ましようかね」

桶川先生が俺に触れそうとしたとき、俺と桶川先生の間を割って  
入った

「だ、大丈夫みたいです！私ちょっと姫宮さんに話があるので！」

何だ？俺は別に話なんかないぞ？

「え？俺はべつに…もっ…」

「姫宮さん！行きましようね！」



「え？ちよつと北本先生！！！」

北本先生はすごい形相で俺の口を塞ぐと桶川先生の話も聞かずにそのまま俺を抱えて保健室を出た。

あれ？俺なんで北本先生に抱えられてるんだ！？

保健室を出た北本先生は周囲に人がいないのを確認すると廊下を走り出した。

俺もなるがままに先生に連れていかれてゆく。

そして先生は進路指導室へと入って鍵を閉めた。

「ふう…一安心」

そう言つと先生は俺を床に下ろした。

「先生！？何するんだよ！？」

北本先生がおかしい！？何だ？

「ひ、姫宮……………さん？」

「な、なんだよ…」

「本当に貴方は一年の姫宮綾香さんじゃないの？」

「だからな…俺は三年の悟だ。兄の方だよ、妹は…」

ここで俺は何かの違和感に気がついた。声が俺の声じゃない…気がする。

それに…服…これ…女子の制服じゃないか…

「ああ…大失敗だわ…」

先生は頭をかかえて床にへたりと座り込んだ。

「あ、あの！？俺なんなんだ？この格好は？この声は！？」

先生は半場諦めの表情で俺に言った。

「そのまんまですよ…今の貴方は姫宮綾香だから」

な、何だと！？綾香？意味がわからない事を言う先生だ。

「あのな…言いたくないけど、妹の綾香はな…先日飛行機事故で死んだんだよ…」

それを聞くと北本先生は再び頭を抱えて落ち込んだ。

「何という事でしょうか…私としたことが…」

俺は状況がよくつかめなかった。

とりあえず今わかるのは俺が女の格好をしてるという事だ。

何で俺がこんな格好を…俺はこんな女装の趣味なんかない！！

どんな格好になってるんだよ…くそっ…

そっだ！生徒指導室には鏡があったんだ。

見たくないが、とりあえずは今の格好を確認するか。

俺は全身を写す事が出来るくらいの大きさの鏡の前に立った。

そしてその鏡に映った自分を見た。

「……………」

俺は絶句した…

鏡の中に…綾香がいた…

え？綾香？何だこれ！？

北本先生は絶句して動けない俺を見て言った。

「ごめんね…貴方が姫宮綾香の生徒手帳をもつてたから…つい姫宮綾香で蘇生しちゃったわ」

何これ…蘇生って！？何？

「姫宮さん、そこ座って」

もう何だかよくわからないが、とりあえず話を聞くしかない…俺は言われるがままに椅子に座った。北本先生がすごく真剣な顔で俺に言う。

「よく聞いてよ、先生は今からすごく重要な事を話します」

俺はとりあえずうなずいた。

「よし、いい子ね…まず…こうなったいきさつから話すわよ…」

「さつき…ガス爆発といったけれど、あれは私の魔法実験のミスだったの！ちよつと薬の配合をミスってね…」

「ちゃんと配合間違えは直そうと思って、足りない材料を取りに行こうとしたのよ？そうしたら私が戻る前に爆発しちゃったみたいで…」

「でね…貴方はその爆発に巻き込まれて、私が爆発に気がついて実験室に戻った時にはほぼ即死状態だったわ…」

「え！？即死って？俺死んじゃったの？」

「黙って！聞きなさい！！！！」

「あ、はい…」

「それで私は焦ったわけ…まさか魔法実験を高校でやって、そこに生徒が入ってきて、爆発に巻き込まれて、死んじゃうとかそんな事があったら私は魔法の世界から永久追放されてしまう！！！！ってね」

「あの…魔法とか…話が見えないんだけど…」

「黙って！いちいち反応しないでいいわ！聞きなさい！！！！」

「す、すみません」

「そこで考えたの、この事件をうやむやにするにはどうすればいいのか！そうしたら思いついたわ！全魔法力を使って貴方を蘇生すればいいって！！！！」

「そうして爆発はガスのせいになればどうにかなるんじゃないかってね…」

「でも…貴方はまっくらこげでさ、性別すら区別が不可能状態だった訳、で調べたらたまたま実験室の入口に落ちていた姫宮綾香の生徒手帳！」

「助かったーと思ったわ！もう私は無我夢中で蘇生術を試みたの！今まで何年もかかって溜めた魔法力を全部使い果たしちゃったけど成功したの！でも貴方は体の組織がぼろぼろだったから原子のレベルからの蘇生が必要だったので組織から組み替えたわけ！だ、大丈夫よ、体重も身長も身体測定結果を見てから蘇生させましたし！あと…声は私の記憶から綾香さんのデータを引き出して完璧に仕上げたわ！！！！そうよ！もう貴方は真正銘の姫宮綾香として復活を果たしたの！なおかつさっきの事件はなかった事に！ってなる訳だったのよ…とほほ」

という事は何か？

俺は北本先生がやってた魔法実験の失敗で爆発して死んじゃって、でも北本先生が魔法

使いだっただから蘇生で生き返らしてもらった。

しかし落ちていた生徒手帳が妹の綾香のだったから先生は間違っ  
て綾香で蘇生した。

……………

ありえない…

この現代社会において魔法とか蘇生とか…

まず非現実的だし、そんなものが存在するのならば絶対に噂にもなるはずだ。

蘇生とかそんなのあつたら医者なんか必要ないじゃないか！

綾香の乗ったの飛行機だつて墜落しなくても済んだかもしれないんだぞ！

そうしたら綾香だつて助かつてるはずだ！

だまされるな悟！これはビックリテレビか何かだ！！！！

どこかにカメラが！！！！それにしても何で俺を…

「先生、そんな冗談はいいからさ、俺を元に戻してよ、これは特殊メイクか何かなんだろう？それにしても妹の格好にするとか信じられないよ」

「本当にあなたは理解力がないのね、綾香さん、あ、違つたわ…悟君か…だから言ってるでしょ？貴方は悟君かもしれないけど、綾香さんで生き返つたんだつて」

そんな馬鹿な事を何度も言われても信じられない。

馬鹿馬鹿しい！！！何考えてるんだこの先生は！

こつなつたらとりあえずこの学生服は脱ぐ！！！！

はずかしいからな、何で俺が女性の学生服をきなきゃいけないんだよ！

俺は学生服のボタンに手をあてて上着を取った。

そしてシャツも脱いでやるうかと思ひボタンに手をかけた…

一つ一つとボタンをはずすと…ブラジャー…まで…

「おい！先生！ちょっとまって！俺はこんな趣味はないぞ！何だよ？これ！俺に女装させて面白いか？こんなブラジャーまでつけやがって！！！」

なんだ？中に何は入れてるんだ？そう言つて俺はブラジャーの上

から胸を触った。

ぷに……ぷにゅ……

あれ…何これ…この柔らかい感触は…それにこの触ってる感触と触られてる感触がはつきりと…

「だから言ってるじゃないの…貴方は綾香さんなの！女なの！」

「し、信じれらるか！！そんな事が！！そ、そうだ！シ、シリコンか何かだろ！だがな！男の証がちゃんと俺にはあるんだ！！」

そう言っつて俺は慌てて下を確認した。

「…え………ない………んだけど…」

「あーあ…もう…何度言えればいいの？貴方は姫宮綾香だっつていつてるでしょ？たとえ中身が悟君であっても体は完璧に姫宮綾香なんだからね」

嘘…でしょ……

マジで俺は妹の綾香になっちゃったのかよ！！！！

マジ？何これ…俺は…妹の綾香になつたの???

え？じゃ、じゃあ俺はどうすればいいわけ？

妹は死んだんだよ？なのに生きてるって事になるの？

じゃあ俺は？悟の体はどこいったの？え？両親にどう言えばいいんだ！？

これからどうすればいいんだ？

「せ、先生！元に！俺は悟に戻れないのか！？」

「そうね…戻れない事もないわよ」

「た、助かった…このままじゃどうしようもないからな…  
こんな格好で家にも帰れないし、ふう…」

「でもね…私が数年がかりで蓄積した魔法力をさっきの蘇生術につかっってしまったから…体の原子のレベルからの再蘇生とか…何年かかるだろうなあ…正直言つとあれって蘇生より難しいし…」

「え？今なんと言いましたか…気のせいですよね…」

「せ、先生…い、今さ…何年もかかるとかいったか？」

「ええ、言っただわよ？多分…最低でも五年から長いと三十年かな？うーん…魔法力さえ溜めればすぐにでも再蘇生が可能なんだけどね、でも今は無理ね！」

「終わった…俺は終わったよ…」

「何世界が終わったかのような顔してんの？」

「あんたのせいだろうがああああ！！」

「そうだ！貴方の妹さんって飛行機事故でなくなったのよね？」

「いきなり不謹慎な事をつけつけと聞き始めるんだ…この先生は…」



「ねえ？それで亡骸って…みつかったの？」

くそ…何でそんな事聞きやがるんだよ…

「ま、まだだ…けど」

先生がいきなり笑顔になった

「じゃあ大丈夫！貴方は飛行機事故から生還した事にすればいいのよ！…！！！」

何だそれ？生還した事について俺に妹になれっていうのか？俺はどうするんだよ！悟は？？

「ま、待って！俺は妹の綾香になって、飛行機事故で死んでなかった事にするのか？え？じゃあ俺はどうするんだ？悟はこの学校で神隠しにでもあつて行方不明になったって事にでもするのか？」

まさかそれはないだろ？？常識的に考えてもないだろ？？  
もつといい方法あるだろ！

「いいアイデアね！そうね、そうしましょう！」

「ま、まてよ……」

「あ、あれよ！貴方が言った神隠しって結構現代社会でもあるじゃないの！私が魔法でなんとかするわ」

「え？魔法ってなんだよ？魔法力はもうないってさっき言わなかったか？？」

「ああ、蘇生魔法は無理つて事よ、簡単にいうと蘇生が一万の魔法力だとするとこれは五程度で出来るからね」

「……なんだよそれ」

「じゃあ神隠しをしようか！」

「あ、いや…ないと思います…神隠しとか…」

「だめよ！このままじゃ収拾がつかなくなるわ！」

原因はあんただろ！あんただろおおお！！

「何泣いてるの？まあ女の子だし、別に泣いてもいいけどね」

こいつは駄目だ…もう情けなくって涙でてるんだよ…

「あ…そうだ…悟君に…じゃない…今後は綾香さんって言わないとまずいわね…綾香さんに言っておくけど、今日の件は他言しちゃだめよ？絶対だよ？」

「え？何でだよ…」

「簡単に話すとね…他の人間にばれると貴方もこの世界から永久追放されるわよ」

「ちよつとまって！俺は被害者なんだぞ？なんで!？」

「この現代社会においては魔法の存在、それは絶対に秘密なのよ」

「絶対に秘密とか言ってるんで実験室の鍵しめないで、それも学校で実験するんだよ！」

「そ、それは…だ、誰もこないと思ったからよ！」

「信じられん…で？絶対秘密だから？その存在がばれたら俺も追放ってこと？」

「そつよ！私はこの世界に修行で来てるから余計にね！」

「修行って…なんで修行で学校の先生なんかやってるんだよ」

「ふふ…なんとなくよ」

「……………」

何だこの先生…

でも…信じたくないけど…体は本当に完全に妹…いや女の子になってるし…

やっぱ……………信じたくなくっても信じるしかないのか…

ああ…なんだこれ…あああ……………もう…

「綾香さん、悟君の失踪は私がなんとか演出するから、貴方はとりあえず生きてたっていう事にするのよ！わかったわね！！あと、今日の事は絶対に内緒だからね！わかったわね！！絶対よ！」

正直先生の方が秘密守れるかが不安だ…

結局俺は妹の格好のまま家へと向かっている。

俺はあと後も北本先生と話をした。

魔法の事もそうだけど、ここでは話せないような事もいっぱい聞いた。

とりあえず結論からすると、俺は当分は姫宮綾香で生きていくしかないようだ。

何年先になるかはわからないけれど、悟に戻れる希望は多少はあるらしい。

それにもしかするともっと早く戻れるかもしれないも言ってた。

しかし…問題はいっぱいある。

もし、本当の綾香が生きていたらどうするのか。

そして、俺が悟に戻ったら今のこの俺（綾香）はどうするのか。考えるだけでも頭がいたい…

一番被害？を少なくするには早く悟に戻って、申し訳ないが綾香

（俺じゃないけど今は俺）を神隠しにあってもらうしかないか…

それにしても先生は流石魔女というか…

俺にそっくりの人形を作ってまじで校庭で、それも生徒のいる前で消しやがった…

あれみたら本当に神隠しだと思うな…知ってた俺ですらびっくりしたし…

しかし…あんなすごい魔法使えるのに蘇生魔法ってそんなすごい魔法なのか？

何年もかかるなんてどんだけなんだよ！

と考えていると家についちゃったな…

よし…覚悟を決めてはいるぞ！

ガチャ！！

俺は覚悟を決めて玄関に入った。すると玄関には丁度母親がいた。

「そうなんです…行方不明に…何か手がかりがあったら…」

どこかに電話をしている様子だな。

「母さん、ただいま…」

玄関にいた母親は俺の声にすぐに反応してこちらを見た。

「え！あ…綾ちゃん！？綾ちゃんなの！？」

母さんは驚いた表情のまましばらく俺を見ていた…  
そして涙を流しながら俺に言った。

「あ…綾ちゃん…生きてたのね…嬉しい」

うわ…すっごい泣いてるし。

「お、お父さん！！綾ちゃんが！綾ちゃんが帰ってきたわよ！！！！  
綾ちゃんが！！」

母さんはぼろぼろと泣きながら居間へと走っていった。  
するとすぐに父さんがすごい勢いで出て来た。

「綾香！綾香！生きてたのか…よかった…よかった…」

両親は俺を抱きしめたままずっと泣いていた…

「綾香…綾香がせつかく戻ってきたのに…悟が…お兄ちゃんがいなくなっただ…」

父さんは悔しそうに俺に言った。

「悟、綾ちゃんが戻ってきたわよ…早く戻ってきて…」

母さんも泣きながら言った

「ごめんな…俺は…悟という名前の俺は戻ってこないんだ…  
本当は俺はここにいるよ！俺が悟だよって言いたいけど…  
くそう…言つと駄目なんだよな…」

両親にすら隠さないと駄目なのかよ…凄い嫌悪感に襲われる…

俺は両親にすごく喜ばれそして妹の綾香の部屋へと入った。

これからは妹の綾香として生きてゆくのか…

どうなるやら…

続く

## 第1話 この世の中の信じられない事実（後書き）

いかがでしたでしょうか？前書きにも書きましたが、文法などはこれが限界です。この先の話までお読みになる場合は誤字脱字があった場合はご指摘をお願いします。又、ご感想なども是非お願いします。

## 第2話 新しい朝からの急展開！？

うーん…朝か…

何だか昨日はすごい夢を見たような気がする…

そう、俺が妹の綾香になるとかそんな夢だった…

学校で爆発に巻き込まれて、俺は蘇生魔法で生き返って、そして  
俺が妹になって…

そんなくだらない夢だったな…

俺はそんな事を考えながら自分の胸元を見た。

…

とりあえず頬をつねった。

痛い…

ち！違う！…い、痛くないぞ…

夢だ…そう、これは夢だ！

とりあえず深呼吸をしてベッドから起き上がると今度は部屋にある  
姿見に自分の姿を映し出した。

…

どこからどう見ても鏡の中にいるのは妹の綾香だ…

周囲を見渡す…やっぱり…ここはどうみても妹の部屋だ。

ふう…やっぱり夢じゃないな…俺は昨日、妹の綾香になっちまった  
のか…

俺は深い溜息をつきベッドに座った。

ん…何だ？なんだか体がべたべたしてきもち悪いぞ。

あ、そういえば昨日は風呂も入ってないな…なんて汚いんだ！

昨日、家にもどって来た時間が遅かったのと、妹の綾香になった  
シヨックでお風呂も入らないで寝たんだった。

このきもちの悪い汗をかいたままの体だと流石になあ…

よし…



俺はバスタオルを片手にお風呂に向かった…

階段を下りるとそこが玄関だ。玄関からから右手がリビングでキッチンとは繋がっている。

そしてキッチンの横が洗面所だ。リビングに入るとキッチンで母さんが皿を片付けているのが見えた。

俺はリビングの壁に掛けてある時計を見た。

もう十四時か…え！？もう昼過ぎてるじゃないか！

寝すぎた…

「お、おはよう、母さん」

俺は母さんに普通に挨拶を試してみた。

「あら、綾ちゃん、おはよう、昨日はよく眠れた？眠れたわよね、もうこんな時間だしね」

うーむ…反応は普通だな。特にかわった反応はない…

「うん…ちょっと寝すぎちゃった」

「でも、本当によかったわ…お母さんね、綾ちゃんが本当に死んじやったかと思って、本当に…もう…生きててよかったわ…」

そう言つと母さんは目を手で覆い泣き出してしまった。いかん！母さんがいきなり泣き始めたぞ…

「だ、大丈夫だよ！俺は生きてるから！」

母さんは泣きながら驚いた表情をで俺の方を見た。

「あ、綾ちゃん？今…俺とか言った？どうしたの？」

しまった…俺は綾香だったんだ…つい俺とか言ってしまった！

「あ、え、ご、ごめんね、ちょっと私…記憶がおかしくなっちゃてるのかな…」

そ、そうだ！記憶喪失という事にしようって昨日、北本先生と話たばっかだ。

「え？記憶って？もしかして…記憶喪失なの？」

母さんはすごく驚いた表情で俺を見ている。

「うん…そうかも…所々の記憶がないの…」

「た、大変！病院にいかなきゃ！！」

母さんは慌ててエプロンを取るとキッチンから出て行くこうとしている。

ちょっとまって！病院なんていいから！な、なんとかしなきゃ…

「わ、私は大丈夫、きつと一時的なものだと思っの…だってすごく怖かったんだもん。そのせいだと思うから、ほらお母さんだって覚えてるし！」

「そ、そうよね…色々あったものね…なにより貴方が生きてるほう

が大事よ…でも具合が悪かったりしたらすぐにお母さんに言ってね…」

母さんは納得した表情で俺を笑顔で見ている。

よかった…母さんがこういう性格で…助かった…

「うん、ありがとう」

よし、この場はなんとか凌いだぞ…

「でも…せっかく綾ちゃんが戻ってきたのに…悟がね…もう…何で戻って来ないの…」

母さんはまた涙を浮かべた。

「大丈夫だよ！お、お兄ちゃんはきつと大丈夫だよ！死んだ訳じゃないんでしょ？だったらきつと生きているよ！きつといつか私みたいに戻ってくるよ」

こ、これでどうだ？実際ここに生きてるんだし、嘘じゃない！

「うん…そうよね…綾ちゃんが戻ってきたんだもんね…悟もきつと戻ってくるよね」

「そうだよ！元気だして、お母さん」

「ありがとうね、綾ちゃん…色々あったばかりなのに氣遣いさせちゃったわね、お母さんもう大丈夫だからね」

よし、これで大丈夫かな？しかし…もしも俺が悟だぞって言った

らどつという顔をするんだろつな…

すつごい驚くかな？いや…たぶん信じないんだろつな。

俺の気が狂ったとでも言いそうだな…普通はそう思うよな…

「あら？綾ちゃんお風呂に入るの？お湯入ってないわよ？入れようか？」

「いや、いいよ、シャワーだけだから」

「そつ？それならいいけど…」

俺はそう言つて脱衣所に入った。

まずはパジャマを脱いで…なんだかここにきて緊張し始めた。

下着を脱ぐつと…下着…つてことは裸になるのか…

うーん…なんか恥ずかしいな…

で、でも…よく考えてみる悟よ、この体は別に綾香本人の体じゃないんだし…

そつだ！俺の体だ！気にしないでもいいんだ！

そつ思つておこつ。でも俺は何故か目を閉じて下着を脱いだ。

しかし目をつぶつたままでは浴室には入れない…

仕方なく俺は目を開けた。

そしてふと横を見ると洗面化粧台の鏡に映つた俺（綾香）の姿が見えた。

あ、綾香の裸！？鏡に映つた綾香（俺）の顔が赤面しているのがわかる。

駄目だ…気にしないようにしないと…よ、よし…裸から意識を反らそつ！

そつだ！別の事を考えればいいんだ。

確か北本先生は身体測定のデータを元にしたって言ったけど…  
そう考えると実際の綾香って結構幼児体型なんだな…胸はAカッ  
プなのかな？

うわー！結局くだらない事を考えてしまっている！  
し、しかしこの胸のサイズは小さいのかな普通かな？  
俺は何気なしに胸に手をあてて触ってみた。

ぷに…ぷに…微妙な弾力が…へ、変な感じだな…  
な！何をしてるんだ！これじゃ俺は変人じゃないか！！  
駄目だ、気にしちゃだめだ！

そうだ！今から成長するんだ！きつとそうだ！ いや！そんな事  
じゃない！  
くそ、余計に恥ずかしくなったぞ！おい！

落ち着け…俺…これから当分付き合っただけでゆく体だぞ！  
こんな事でどうするんだ！ふうふう…  
俺は何度が深呼吸をした。  
よーし…すこし落ち着いたかな…

でも…なんか…この肌…すごくすべすべだな…いいな…  
俺は洗面の鏡にむかって笑顔を作ってみた。  
うわ…か、かわいい…  
おい…違っただろ…俺はまた何を考えてるんだよ！このままじゃ本  
当に変人路線に行ってしまう！

とりあえずシャワーだ！シャワー！まったく…  
結局すごく疲れるシャワータイムだった…

ブイイイイン！

ふう…まさかシャワーを浴びるだけでもあんなに大変とは…  
しかし…なんて面倒なんだよ…ドライヤー！  
髪が長すぎて洗うのも大変だったけど、ドライヤーで髪を乾かす  
のも大変だ！

いつそバツサリと切ってしまいたいが…やめておこう…  
あまり変な事をするとか怪しいとか狂ったとか思われるだろうし…

あとあれだ…下着だよ…特にブラジャー！つけづらい！  
でもまあ…慣れれば大丈夫か…

ブイイン！！

これから当分は女として生きていけないうけないんだし、多少  
は女性についても勉強しないとイケないのかな…いちいち人に聞け  
ないしなあ…

仕方ないな…今度、北本先生にでも聞いてみようかな。

ブイイイイン！！

よし！終わった！さらさらの髪！我ながら良い出来だな！

次は…服つと…これでいいか…よしよつと。

パンツ…ない…ジーンズもない…おい！スカート系しかないじゃ  
ないか！

もしかして…俺がスカート姿の綾香が好きだと言ったからか？  
…なんて素直な妹だろう…なんか慣れていなくて嫌だがスカート  
を履こう…

俺は仕方なくスカートを履いた。何かすーすーする…仕方ない。  
よし、これでいいか…一応鏡みるか…鏡つと…どれどれ…

…  
うわ！かわいい…

あ、綾香ってやっぱりかわいいな…

……い、いかん！何を見とれてるんだ！

こんな俺でいいのか…悟に戻った後が心配になってきたぞ…

「綾ちゃんー綾ちゃん」

ん？母さんが俺を呼んでる？何だろう…

「はい、何？」

「先生からお電話よー」

ん？先生？

「はい、わかった！すぐいくねー」

先生つて…まさか…俺は急いで階段を下りた。

「ほら、電話保留にしてあるから」

俺は受話器を取った。

「もしもし？姫宮綾香ですけど…」

「あーもしもしー？北本ですが」

げ…北本先生じゃないか…まあ多分そうかと思っただけ…

「あ、はい…なんでしょう？」

「あのね…ちょっと学校に来てもらえる？」

先生の声のトーンがちょっと低いけど…何かあったのかな…

「え？学校ですか？」

「そうよ、申し訳ないけどすぐに来てくれる？すごく重要な事を伝えたいの」

え！？？すごく重要な事だつて！？何かあったのかな…  
しかし重要って言うなら行かなきゃいけないだろ。

「あ、はい…わかりました…すぐ行きます」

「じゃあ、特別実験室に来てね…」

がちやー！！

「え？先生！特別実験室って！？」

って…電話もう切れてるし…切るの早すぎ！

でも…一体なんだ？何の用事なんだ？？？



重要な話し…取りあえずは行ってみるしかないかな…

「どうしたの？綾ちゃん？」

「あ、うん、ちょっと学校に行ってくる」

「え？今から？」

「うん、急いで行ってくるから」

俺はすぐに準備をすると綾香の自転車に乗り学校へ向かった。

自転車で走る事十五分、俺は学校に辿りついた。

北本先生もいきなり家に呼び出し電話するとは何を考えてるんだ…まったく…

それにしても…声が暗かったし、重要な事って言ってたけど…本当に何かあったのか？

もしかして俺に、もう悟には戻れない！とかいう事実を伝えたいとかないよな！？

うわー想像するだけでも嫌だな。

よし…ついた。

シャーカシャン

俺は駐輪場に自転車を置くと周囲を見渡した。

正直知り合いには逢いたくない。  
俺の知り合いはどうせ綾香を知らないし、どうでもいいが、綾香の知り合いには絶対に逢いたくない。  
声を掛けられても、俺は綾香の友達とかほぼ知らないからな…  
俺は誰も居ないのを確認してから校舎に入った。  
校舎の中でも周囲を見渡して誰もいない事を確認する。  
そして人気の無い廊下を歩き、昨日のあの事件が起こった特別実験室の前まで来た。

実験室の前に立って俺は驚いた。  
あんなに大爆発だったのに…何も壊れてないし…  
その形跡すらないじゃないか…  
どうなってるんだ？

俺は特別実験室の扉に手をかけた。  
開く…鍵はかかっていないようだ。

俺は実験室の扉を開くと一歩中に入った。  
そして周囲を見渡して再び驚いた。  
実験室も外と同じで、まったく壊れた形跡がない…  
ガス爆発のせいにしたっていつてたけど…これじゃ何もなかったのと同じだな。

ほんの小規模のガス爆発にしたのか？うーん…  
しかし…どうやったんだろうな？  
どうやってこの部屋を修復してごまかしたんだ？

「早く中に入って、姫宮さん」

北本先生の声だ。

おっとつと…誰かに見つかったら一大事だ…  
俺は実験室の扉を閉めた。

よく見ると北本先生の横にもう一人誰かがいる!？  
何でここに北本先生以外の人間がいるんだ？

「そこに座って」

北本先生は元気のない声で言った。

俺は言われる通りに椅子に腰掛けた。そして北本先生を見る…

北本先生の横に怪しい白衣を着た男性が立っている。

身長は175センチくらいかな？痩せてて黒縁の眼鏡をかけている。

誰だ？見たことないぞ？この学校の先生じゃないな。

俺は視線を男の顔に向けた。するとその男と目が合った…

じーと見られる…何だ？すごい見られてるんだけど…

本当に誰だ？魔法がばれちゃ駄目なんだろ？ここに人がいてもいいの？

う…まだ見てる…俺は耐えられなくなり目を逸らした。

気になって仕方がない…取りあえず北本先生に聞いてみるか。

「き、北本先生、この方は誰…じゃないや…どなたですか？」

危ない…いつもの話し方をする所だった…

「ああ、この人はね、私の知り合いよ」

そう言いながら北本先生はその男を見た。

「え？先生のですか？」

「ええ…そうよ」

北本先生がそう言うと、その男はようやくと口を開いた。

「なるほどね…君が姫宮悟君か…今は綾香さんだっけ？」

へ？何だ？俺の事知ってるじゃないか！？じゃあ俺は普通の話し方でいいのか。

って違う！そうじゃない！

他人に魔法がばれたら追放になるとか北本先生は言ってなかったか??

これってすごくまずいんじゃないか???

「北本先生！ちょっと！どついう事だ！？何で俺の事知ってるんだ」

北本先生は大きな溜息をついた。

「ちょ、ちょっと説明してくれよ!!」

北本先生は再度白衣の男性の顔を見た。

白衣の男も北本先生を見返した。そして何かの合図なのか小さく頷いた。

「えつとね…あのね…ばれちゃったんだ…」

北本先生はとても残念そうに言った。

「ばれちゃったって…どういう事ですか…」

「魔法管理局にばれちゃったんだ…」

北本先生は白衣の男をちらつと見た。この男に関係がある事なのだろうか？

「魔法管理局？何だ…その魔法管理局って」

「この世界の警察みたいなもんかな」

「それってかなりやばいんじゃないのか…」

その魔法管理局にばれたって事は…もしや…先生は魔法界から追放！？そして俺はこの世界から！？

ひどい！そんなのひどい…俺は何も悪い事してないのに…

それに俺はまだ青春をエンジョイしてないのに！恋愛するとか！彼女をつくるとか！デートするとか！

「大丈夫だよ、姫宮綾香君」

白衣の男がにこやかな表情で俺に向かって言った。

「え、大丈夫って？」

「君にはなんの処罰もないから」

「君にはって？俺には処分はないけど？まさか北本先生には…」

「そうだね、君にはないが、絵里には処罰があるよ」

「やっぱり…：もしか追放なのか！？そうなる俺はどうなるんだ！？」

「え！？という事は北本先生は魔法界から永久追放！？」

白衣の男は焦った俺を見てクスクスと笑った

「な、何がおかしいんだよ！」

「いや、その焦った顔がね、北本先生が追放されて自分は元に戻れなくなるの！？って顔に見えたからつい笑ってしまったんだ。申し訳ない」

「何だこいつ…：ちょっとむかつく！」

「戻れなくなるの？って…俺が心配するのは当たり前だろ！」

「まあ、意気消沈してる絵里に代わって僕から説明しておく、君は元の悟君に戻る権利がある。権利というよりはそれが当たり前だからね。だいたい今回の事件は絵里が全て悪いからな。だから君は元に戻る。あと絵里は追放はされない」

「お！？元に戻るって！もしかしてさっそく元に戻るのか！？  
それに北本先生も追放もされないっていうしな。」

「俺は元に戻るのか！？今か！？今なのか？？」

「いや、今ではないよ」

「え…じゃあいつだよ」

「今ではないと言う理由は、再蘇生は高等魔術というのとは関係なく、一度蘇生をした術者（絵里）が対象者（悟）に魔法を使わないと効力が発揮出来ないという所だな」

「という事は、北本先生じゃないと俺を元に戻せないって事か？」

「ああ、そういう事だな」

「あつ…じゃあ何年先になっちゃんだよ…」

「そこは今から説明する。ちょっと待ってくれ」

そう言うと白衣の男は横に置いてある黒い鞆から黄色いカードと取り出した。

「絵里から話を聞いてるかと思うが、普通に魔法力を貯めるとかなりの時間がかかってしまう。しかし我ら魔法管理局もこの状況を何年も放置は出来ない。だから今回は特別にこのカードを使う」

白衣の男が持つカードはどうみても金属製の普通のカードに見える。  
カードを使うっていうけど、そのカードで何をするんだ???

「このカードを君に埋め込み、そして君が魔法力を溜めるんだ」

まるでそれが当たり前前の事かのようにその男は言った。

「え！？何！？俺に埋め込んで俺が溜める！？」

「そうだ、この世界では俺達みたいな魔法世界の人間は魔法力が溜まりづらくなっている。だが、実は魔法力は人間でも溜める事が出来るんだ。魔法使いがある一人の人間に対して自分の代行で魔法力を溜める事をお願い出来るシステムがある」

「え…そんなのがあるのか??」

「ああ、ただし…この方法を取ると術者はそのカードを回収するまでは魔法が一切使用出来なくなるといいうリスクがあるんだ」

「うーむ…で？どうするんだよ…体に埋め込むとか怖いんだけど」

「そこは大丈夫だ、あつと言う間に終るし、痛みもないし生活に支障もない」

「なるほど…」

「あとな…絵里は十年の魔法禁止処分になったんだ」

「え！？魔法禁止！？」

「こんな些細な問題では追放にならないが、やはり問題は問題だからな」

「まで！些細つて言うが俺にとってはかなり重要な問題だぞ！俺は一回死んでるんだぞ！あと、北本先生が魔法が使えなかつたら俺は元に戻れないんじゃないのか！？」



「まあまあ、そこは大丈夫だ、再蘇生に必要な魔法力が溜まったら、絵里に再蘇生の魔法を唱えさせる。これは特別に承諾がすでにとれている事だ。だから君に魔法力を溜めてもらおうとしてるんだろ？」

「む…でもな、魔法力ってそう簡単に溜まるのか？何年もかかるんじゃないのか？」

「魔法力というのは一種の生命力みたいなもんだ。だから君が楽しく普通に生活していればそのうち溜まる。多分長くても二年だろう」

「おお！二年！二年か！」

「二年で戻れるのか！俺は！！！」

「ん？いや、最短だと一年で戻れる可能性もある」

「うおお！一年！」

「やるぞ！やる！戻れるならやる！」

「まあ焦るな、あれだぞ？楽しくだぞ？じめーとしてたら二年いや下手するとそれ以上かかるからな」

「わかった！もう今時点ですっごい楽しい！嬉しい！」

「ふむ…じゃあ早速…」

「よし！いつでも来い！」

「の前に、あと一つ言っておく事があった」

「な、何だよ！早く言え！」

「もし、このカードを体に入れている状態で蘇生魔法の事がばれたら、君に存在は消え去る」

「え！？」

「君がこの世の中から消えるだけだ」

「消えるだけって…」

「うーん…存在が消滅するって言えばいいのか？この世界からね。まあ言わなきゃいいんだ気にするな」

消滅…でもよく考えるよ…今まで言われてたのは、ばれたら追放だったし、消滅でも追放でもこの世界にいなくなるのは違い。もういい、色々言ってる場合じゃない。

「わ、わかった…やるよ…」

「よし、じゃあやるか…」

そう言う男は黄色いカードを北本先生に渡した。

北本先生は暗い表情でカードを受け取ると俺の前に立った。

「まさかこんなに早くばれるなんてね…でも仕方ないわね…」

ばれるって…あんたが悪いんだろ！！それに俺は二年で戻れる方が嬉しいんだ！

何年も待つてるのはごめんだ！

「北本先生！早くしてくれ」

北本先生は何か念仏か呪文かそのようなものを唱えた。

するカードが光った！！まるで魔法みたいだ…あ、魔法か…

「いくわよ」

先生は黄色いカードを俺の胸に差し込む。

すると服の上からなのにカードがゆっくりと体の中へと吸い込まれてゆく…

なんていう不思議な光景だろう…

「これでOKよ…あーあ…魔法使えなくなっちゃったわ」

「どれ…ちょっといいかな」

白衣の男が俺の横に来ていきなり胸を触った。

ぷにぷに…

触られる感触が…って！

今俺は女だぞ！！何躊躇もなくこいつ触ってるんだよ。

「な、何するんだ！いやらしい！」

俺は慌てて野木の手を払った！

「ん？何だ？ちゃんとカードが入ったか確認しただけだろ？だいた  
いお前それほど胸はないじゃないか」

なんとという失礼な言葉だ…

「すっごいあるとは言わないけれど一応あるんだ！」

「あと、君の中身って男だろ？何を気にしてるんだよ…顔まで赤くしてさ、まさか女になりたかったとか？」

「な、何を言ってるんだ！俺は男だ、男に戻るんだよ！だいたいあんたは名前も教えないで何様なんだ！」

「おや、そっかそっか、僕は名前言ってなかったか」

「普通は最初に自己紹介するだろ！！」

「そっだね、ごめんごめん、じゃあ自己紹介しておくよ。僕の名前は野木一郎だ」

なんていう普通の名前だ…てっきりすっごい名前なのかと思っていた。

「あ、そっだ、僕は二学期からこの学校の先生やるからね」

そ、そっか…この学校の先生…え？先生！？

「え！？何それ？」

「二人の監視でね…君はわかるだろ？絵里もな」

野木という男は笑顔で北本先生を見た。

「わ、わかってるわよ…私が悪いんだもん。仕方ないわね」

「という事だよ、姫宮綾香君」

なんかよくわからないが、はっきりした事は二年後には俺が悟に戻れるのと、それまでは野木といういやらしい男が俺と北本先生の二人を監視するという事…

とりあえず希望が見えた！これでなんとか俺も生きてゆけるな…しかし…この二人はどういう関係なんだ？知り合いつばいのは確かなんだけどな…

まあいいか…

「姫宮君」

ん？何だ？

「あ、はい」

「今日はもういいから、姫宮君は帰っていいよ」

え？何だかもう用なしだよって感じの言い方だな…なんかむかつく。

でもまあここに居ても仕方ないし、帰るか。

「わかった、じゃあ戻るから」

「気をつけて家まで戻るんだぞ？」

ん？一応はこいつは俺を心配してくれるのか？

「あ、大丈夫、俺の家は結構近いから」

「そうか、うん、じゃあまた」

「それじゃまた！」

俺は教室を出た。

教室の外に出た時に僅かにだけ教室の中から北本先生の声が聞こえた。

「…兄さ…だもん…か」

俺は戻れる事の嬉しさのせいもあり、あまり気にせず校舎を後にした。

続く

### 第3話 予想せぬ来訪者達

あの事件から二週間が過ぎた…

俺は妹の部屋で窓からぼーと空を眺めている。

綾香は何処で何をしてるんだろうな…

ここ最近になって落ち着いてきたせいもあり、一人っきりになると妹の綾香の事ばかり考えている気がする…

前までは俺が綾香が生きてると信じていた事と、俺のあの爆発事故の件で頭がいっぱいだつたせいで冷静に物事を考えられなかった。

だけど最近はこの環境にも落ち着いてきたお陰で、考える時間を取る余裕も出来た。

俺が間違つて綾香として生き返ってしまったせいで、両親もそして周囲もみんな綾香が本当はいないなんてまったく思っていない…でも…本当は綾香は…この場所にはいないんだよ…

ここに居るのは偽者の俺なんだからな…

俺は最近になって多少だが綾香の部屋を物色するようになった。

最初はあまりいじるのも駄目なんだろうと思っていたが、綾香の思いつきの部屋でもあるし、綾香がどんな生活をしてたのかにも興味を沸かせていた。

ふと本棚に入っているピンクのアルバムに手がのびた。

そのアルバムをおもむろに開くと、丁度そのページには俺と綾香のツーショット写真が…これは1年前の旅行の時の写真だ…

写真の横には付箋で作ったメモと一緒に挟んであって、【お兄ちゃんと一緒にまたいこうね!】と書いてあった。

綾香は本当に死んでしまったのだろうか…

いや、俺は信じたい…生きているって…

それからしばらく俺はアルバムを見ていた…  
目に熱いものがこみあげてくるのがわかる…

アルバムには水滴がいくつももこぼれ落ちている…  
俺はアルバムの水滴を拭くと元の本棚に戻した。

あー駄目だ…俺がこんな事でどうするんだ！俺が元気出さないで  
どうするんだ！

いつ綾香が戻ってきてもいいようにがんばらないと！  
待てよ…いきなり戻ってこられるとそれはそれで困るな…  
でも…生きているなら戻って来てほしい…複雑な気分だ。

俺は窓を閉めてクッションの上に座った。

よし、気分を変えて別の事をしよう！

とは言ってもまさか一人じゃ外に遊びには出られないしなあ。

かと言って知り合いに電話を出来るはずもないしな。

仕方ないから俺の部屋に行ってゲームでも持ってこようかな…

でも綾香ってゲームをしないんだよな。

綾香がゲームをやっているとおかしいかな？怪しいかな？

まあどうせ見られるにしても両親だけだし、別に怪しまないかな。

うーん…やっぱり今日はやめておこうかな…

ピンポーン！ピンポーン！

呼び鈴の音が聞こえた。誰かお客さんかな？

まあいいや、ほっておけば母さんが対応してくれるだろう。

本当に今日は何しようかな…やっぱりゲームかな…

「あやかー」



そんな事を考えていると一階の方から俺を呼ぶ声が聞こえた気がした。

ダダダダ！！！！！

なんだ？すごい勢いで階段を駆け上がってくる音がするぞ！？  
そう考えている最中にバンという音とともに部屋のドアがすごい勢いで開いた！

そして一人の女の子がものすごい勢いで部屋に突入してきた。

え？何だ！？誰だ！？

「綾香！」

その子は躊躇なく俺に抱きついた！

「綾香だ！綾香、生きてたんだ！！！！よかったー」

な、何だ？いきなり抱きついてきたぞ！？しかも顔が俺の顔にすっごく近い！

なんだこの状況は！？自分でも自分がかかなり動揺しているのがわかる。

と、とりあえず誰なのかを聞いてみよう。

「ちょっと待って！ど、どなたですか？？」

綾香の友達か！？

「えー！！綾香、どうしたの？私だよ？佳奈だよ！忘れちゃったの？

それに目と顔が真っ赤

だよ？熱でもあるの？」

悲しそうな顔でそう言った佳奈という子はさらに顔を寄せてきた。待って！顔が近い！そんなに寄られるともっと顔が赤くなるじゃないか！

あと、忘れたの？と言ってるけど、忘れてない！知らないという方が正しい！

「ねえ…綾香…」

いきなり抱きついてきた女の子に気を取られていると、またドアの開く音がした。

そして部屋にはさらに二人ほど女の子が入って来た。

おいおい…何人来てるんだ！？

よく見ると入って来た2人は見覚えがある子だ。

一人は俺のダチの妹だな？確か…真理子ちゃんっていつたっけ？

もう一人は綾香の中学校からの友達で、ここ最近は何度が家に遊びに来てる茜ちゃんだ。

「佳奈！いきなり突入してどうするのよ！ちょっとは考えてよ。ねえ真理子」

茜ちゃんはショートヘアでスポーツが得意そうで活発な女の子だ。Tシャツにショートパンツというボーイッシュな格好が俺には好印象だ。

一度もまともに話をした事がないが、家に遊びに来たときはいつも笑顔で挨拶をしてくれる。

俺は最近になって茜ちゃんの事がすこし気になっていた。こんな子と仲良くなればいいのになって…まあ俺の勝手な想いだが。

「ほら、佳奈！綾香に抱きつかないの、離れて！」

茜ちゃんは俺に抱きついている佳奈ちゃんの腕を掴んで引っ張った。

「やめてよー茜…あーん…綾香あ」

佳奈ちゃんは引きずられるように俺から引き離された。

助かった…あのままだと俺はどうなっていた事やら…

お陰で、やっと佳奈という子を確認が出来た…近すぎると凝視する事も出来ないからな。

抱きついてた佳奈という子は髪をサイドにまとめていて、服装や格好はすこし大人ぶった感じはするが仕草や体型はまだまだ子供っぽさが残っている。

俺は校則違反をして髪を茶色く染めていたが、この子は髪の色素が薄いのだろうか、すこし茶色かかっている。俺から見ると真理子ちゃんと茜ちゃんのほうが大人なイメージだ。

しかし全体のイメージからすると痩せぎでもなくていい感じだとは思っている。

こういう子も俺は嫌いじゃない。しかし、突然抱きつくのはやめてほしいが…

「佳奈はちょっと慌てすぎよ、まだおばさまに挨拶してた途中じゃないのよ、挨拶の途中で人の家にづかづか上がりこんじゃ駄目ですよ」

この子は俺のダチの妹で真理子ちゃんだ。

長い黒髪がすつごく綺麗だ…腰のあたりまで伸びている。  
しかし・・・手入れが大変そうだな。俺は絶対に髪は伸ばさないぞ。

容姿は抜群だな…胸なんか…もうこれ以上は成長しなくっていいんじゃないか…

それに比べて綾香は…

三人とも綾香の友達で、俺にいきなり抱きついてたのが佳奈ちゃん…

それであとの二人が茜ちゃんと真理子ちゃんだな。

しかし、綾香の友達は綺麗かわいいかのどちらかだな…

もちろん俺の中のナンバー1は茜ちゃんだが。

「引つ張らないでよ茜！別にいいじゃん！私は早く綾香に逢いたかっただけんだもん」

佳奈という子は残念そうに呟いている。

「あ！そうだ！茜！真理子！聞いてよ！綾香が私の事わかんないんだって…忘れちゃったんだって…」

その言葉に茜ちゃんと真理子ちゃんが反応して俺の方を見た。

「え？それって本当？綾香、私よ、茜だよ？忘れたの？」

茜ちゃんが信じられないという表情で寄ってきた。

大丈夫、茜ちゃんは覚えている。しかし…どうしようかな…

三人とも名前だけ覚えてるといふ事に見ようか。

「名前は忘れてないよ…えっと…佳奈ちゃんと…茜ちゃんと…真理

子ちゃん…だよ…ごめんなさい、私ね、昔の事が思い出せないの…だから名前くらいしか覚えてないの…ごめんなさい…」

これでなんとかなるかな？

「え…マジ！？もしかして記憶喪失なの？綾香…かわいそう…」

さっきまですっごく元気だったはずの佳奈ちゃんがいきなり泣きそうな顔になった…

これは困る…しかし、女の子ってこんなもんなのか！？

「あ、あの…私は大丈夫だから…佳奈ちゃん…お願いだからそんな顔しないで…」

俺が佳奈ちゃんを懸命に慰めていると、真理子ちゃんが俺の前に座った。

「綾香は飛行機事故にあったんだよ…大丈夫、きつとショックでそうなってるだけだよ、そのうちきつと思い出せるわよ…それに記憶がどうこうより、私には綾香が生きてただけでも十分すぎるもん。すっごい心配だったんだよ」

真理子ちゃん…本当に心配してたって顔してるな…

「ありがとう…でも…私…昔の事を何も覚えてないし…」

「いいよ、無理に思い出さなくても。あのね、私達はね全員綾香の友達だったんだよ…名前しか覚えてないみたいだけど…」

茜ちゃんも俺の横に座った。

「綾香…記憶が無くなっても私達はずっと綾香の友達だから！大丈夫！」

茜ちゃんが笑顔で俺を励ましてくれてる…

何だよ…綾香はいい友達をもってるじゃないか…

しかし…横ではついに佳奈ちゃんが泣き始めた。

「うん…ありがと…茜ちゃん。佳奈ちゃん、私は大丈夫だから泣かなくてもいいよ」

「ぐずぐず…うん…そうだよ…泣いてばかりじゃ駄目だよ…じやあ…取りあえず買い物にいこうか…」

え！？俺は唐突に買い物に行こうとか言われてかなり驚いた。それに何？佳奈ちゃん…さっきまで泣いてたのに、もう笑っているし…

この子よくわかんないぞ…

「佳奈！？突然何を言い出すの？私達は今日は綾香に逢いに来ただけでしょ？駄目だよ！綾香だってまだ本調子じゃないだろうし…」

真理子ちゃんも佳奈ちゃんの突然の買い物行こう発言にかなり驚いている。

俺は考えた…断るのは簡単だけど、しかし、これから先はこの子達とも付き合っていないといけないんだ。

という事はだ…今日はどうせ暇だし、一緒に買い物に行くのもいいかもしれない。

何事も経験だろうし、女の子としての行動の勉強になるかもしれないしな。

「わ、私はいいよ、買い物に行っても。買い物で気分転換すれば記憶もすこしは戻るかもしれないし…」

俺の言葉を聞いて佳奈ちゃんはすごく喜んでる。

「やった！ほら！綾香もいくってさ！茜だって綾香と買い物行きたいでしょ？」

「う、うーん、綾香がいいなら…私は一緒に行ってもいいけど…」

茜はちよつと困った表情を見せて呟いた。

「大丈夫よ茜！綾香がいいよって言ったんだから、行こう、行こう！早くいこー」

佳奈ちゃんは早く行きたくって仕方ない様子だな。

「本当にいいの？綾香、無理しなくってもいいんだよ？」

真理子ちゃんが心配そうな表情で俺を見る。

なんて優しい子なんだろう、あの勉強馬鹿な貴裕の妹とは思えない優しさだな。

あいつにはもったいないくらいいい妹だ！って何処かで聞いたなこのフレーズ…

あまりみんなを心配をさせるのも悪いし、よし…じゃあさっさと買い物いくか！

「私は大丈夫だよ。心配しなくっていいから買い物に行こう！」

「本当に？でも綾香が言うんだしね…それじゃあ…行こうか？」

真理子ちゃんはそう言うのとやっと笑顔を浮かべてくれた。

「やった！真理子！茜！綾香！いくぞーれっつこー」

佳奈ちゃんは…うん、よくわかった、こういう子だとよく理解したよ…

こうして四人で買い物に行く事になった。

自転車で俺たち四人は買い物に向かっている。

「どうする？タイエーでもいく？でもあそこのタイエーって何もな  
いっけ？いつそ電車でどっかいく？ねえ！綾香！何処に行きたい所  
ある？買いたい物は？何したい！？」

佳奈ちゃんって元気だな…でも実は俺…こういうガンガン行こう  
ぜタイプの子はすっごく苦手なんだよな…なんていうかついゆけな  
いというか…うーん贅沢かな？

「ちょっと、佳奈、はしゃぎすぎだよ？綾香の体の事も少しくらい  
考えてあげなよ」

それに比べると真理子ちゃんは落ち着いてるよな、本当に貴裕の  
妹にしておくのは勿体

ないくらいだ。でもまあ綾香も俺の妹にしておくのは勿体無いと



言われてたしな…

「佳奈、私は綾香の体の事を考えるとあまり遠くには行かない方がいいと思うんだ。私はタイイーで買い物でいいじゃないかと思うよ」

茜ちゃんは見た目は活発そうだけど、思ったよりも大人しいんだな…

俺が彼女にするなら、やっぱりこういう感じの子がいいな。

茜ちゃんは彼氏いるのかな…って！何を考えてるんだ、俺は！  
だいたい、茜ちゃんが俺のに彼女になつてくれる訳ないだろ。

まあ…綾香のままじゃ彼女という以前の問題なんだが…

そうこうしてるうちに俺たちはタイイーの駐輪場についた。

そこに自転車を置いてすこし離れた入口へと向かう。

しかし…なんだ…友達と並んでわかったけど、綾香…おまえって身長低いな…

前から普通より低いとは思ってたけど、友達は三人とも綾香よりも背が高いじゃないか！

茜ちゃんが一番綾香に近い身長だけど…それでも十分高く感じるし…

こ、これが身長142センチの世界かよ…低い…低すぎる…

まてよ…女の子が相手でこれだろ？男と並んだらどうなるんだ！？

…  
…  
考えるのはよそう…どうせ男の横になんて立たないんだし…

「あそこの角曲がると入口だよー！皆走れー！」

佳奈ちゃんは嬉しそうに入口に向かって走っていった。

なんて元気な子なんだ。でもこっちを見ながら走っててあぶなっ

かしいな…

「佳奈！余所見して走ってるよ！！」

「そつだよ、真理子の言う通りだよ、急がなくてもいいんだよ」

だが佳奈ちゃんは聞く耳を持ってないらしい…おもいつきり走ってるし…

「えーだつてー早くお店に入りたいじゃん！」

余所見をして走っている佳奈の前に、角から曲がってきた二人の男の姿が見えた。

やばい、このままじゃぶつかるぞ！？

「佳奈ちゃん！危ない！前に人がいるよ！」

俺は咄嗟に叫んだ。

「え！？前？あ！」

ドン！

佳奈ちゃんは勢いよく男にぶつかって尻餅をついた。

「いったーい…」

真理子が慌てて佳奈の横に走ってゆく。

「ほら！佳奈が余所見してるから！」

そう言つと真理子ちゃんは佳奈の手を引つ張つて起こした。

「なんだよ、ガキ！余所見してんじゃねーよ！」

男のうちの一人が不機嫌そうな顔をして佳奈に文句を言った。

「ガキ？何言つてるのよ！あんたがいきなり前に出てくるからぶつかつたんじゃん！」

ちよつと待つて！ここは佳奈ちゃんが悪い！素直にあやまつたほうがいいぞ。

そんな言い方をすると…ほら、男が睨んでるじゃないか！

「おい、何だ？何逆ギレしてんだよ！」

ほら…怒らせた…つて何だ！？

良く見ればこの二人！三年B組の清水大二郎と桜井正雄じゃないか！

まったくこんな所に二人で何やってんだ？

大二郎と正雄は北彩高校の三年で元の俺【悟】とは面識がある。

というか…二人はずつと付き合いがあつて、大二郎は俺の友達で正雄は俺の親友だ。

二人とも空手部に所属しているが、ほとんど部活には顔を出していない。

簡単に言つと運動部所属だが本当は帰宅部つてやつだ。俺も同じだが…

まあ俺と正雄はちよつとある事があつて部活動が出来ない状態なんだが。

大二郎は身長180センチの巨体で、体格もかなりいい…

本気で空手をやれば絶対に強くなれるだろうに、もったいない。

あと、別に格好が悪い訳では無いが女には縁が無いらしい。

しかしでかいな…今の俺には見上げるような感じだ。

正雄は大二郎とは違い格好もいいし体格もいい、身長も175センチと結構普通にあるし、女性にも結構もてる。

「なによ！切れてるのはあんた達でしょ！」

佳奈ちゃんはまる大二郎に喧嘩を売るような発言をしている。

「おいおい大二郎、ガキなんて相手すんなよ、貴裕の妹もいるじゃねーか。俺は先に行ってるぞ？」

そう言うと正雄は佳奈の相手をせず一人で駐輪場ほ方へと歩いて行った。

俺の横を過ぎる時に一瞬俺を見てた気がするが、気のせいかな？

正雄が先に行ったのに大二郎はじつと佳奈を睨んで動こうとしない。

それを見て判断したのか、真理子が大二郎に謝った。

「清水先輩ごめんなさい、この子が余所見してぶつかっちゃって…」

しかし大二郎に謝る真理子を佳奈は不機嫌そうに見ている。

「何よ、真理子！何を謝ってるの！私は悪くないもん！」

「いやいや…普通に考えても佳奈ちゃんが悪い…」

佳奈ちゃんも早く謝ったほうがいいぞ。

「佳奈、真理子の言う通りだよ、佳奈が余所見をしてたからぶつかったってしまったんでしょ？今日は綾香ちゃんもいるんだよ？ちゃんと謝って早くお店の中に入ろうよ」

そうだ！その通りだ！茜ちゃんナイスフォローだ！

「ちえ…仕方ないなあ…謝ってあげるよ！ぶつかってごめんなさい！…これでいい？」

佳奈はまるで悪くなかったかのような態度で大二郎に謝った。

その謝り方は違うだろ…もつとちゃんと謝らないと…

まあしかし、まあこれで大二郎も許すか？あいつだって大人だろ  
うし…

「あー？何を言ってるんだ？そんな謝り方で俺を馬鹿にしてるのか？」

大二郎の機嫌がさらに悪くなってるぞ…

しかし大二郎、こつちが悪いかもしれないけど、一応は謝ってるんだから許すくらい心のゆとりが持てないのか…俺ならすぐ許すぞ！かわいい子は特にだ！

「すみません、私達、急いであるから…本当にごめんなさい、行くっ、佳奈」

その場から逃げたかったのか真理子ちゃんもちよつと強引だな…

「こら待てよ！いくら貴裕の妹だからって俺をなめてるのか？ちゃんとそいつに謝らせるよ！」

大二郎は立ち去ろうとした真理子の腕を持つと強く引つ張った！

「きゃー」

大二郎に無理に引つ張られた真理子はバランスを崩して地面に転がった！

「ちょっと！何してんのよ！真理子が怪我をしたらどうするのよ！」

佳奈は大二郎に文句を言いながら転げた真理子を抱えるように起こそうと近寄った。

「うっせーな！元を言えばおめーが悪いんだろっが！」

真理子を起こそうとした佳奈に向かって大二郎は蹴りをいれた。

「きゃー」

蹴られた佳奈はバランスを崩して右肩から地面に叩きつけられた。

「うっ…痛いよ…」

佳奈が右肩を押さえたまま地面に横たわっている…

これは流石にひどい…いくらこちらが悪いと言っても女の子に手足を上げるなんて男がする事じゃない！

俺は大二郎を睨みながら前に出ようとした時、俺の前に茜が立った。

「ちょっと…これってひどいんじゃないの？」

茜は大二郎に向かって怒鳴った。俺はいきなりの茜の行動に正直びっくりした。

「何だ？お前も蹴りたいのか？」

「本当の男だったら、女の子にそんな事しちゃ駄目なんだよ！」

「何だそりゃ？そんなルール誰が決めたんだよ！ごら！」

大二郎はさらに不機嫌そうな顔で茜を睨んだ。

「い、いくら睨んでもだめだからね！」

怯まない茜ちゃんは…すごいなこの子。

「うぜえよ…お前も…」

大二郎はそう呟くとすごい勢いで茜に向かって走ってきた！

大二郎の奴、何があったのか知らないけど、今やって事は男として許されねーぞ！

確かに佳奈ちゃんが悪かったかも知れないが、流石に俺もここまでするとか、大二郎の肩を持つにきはなれねー！

「茜ちゃんどいて！俺の後ろに隠れてろ！」

俺は茜ちゃんの肩を叩きながら言った。

「え！？綾香ちゃん！？俺って…わ、わかった」

茜ちゃんは素直に俺の後ろへと下がった。

「何だてめー！小学生のガキみたいなのが出てきやがって！！どけチビ！ぶつとばすぞ」

チビ！？ムカついた！今の言葉を本当の綾香に向かって言ったとすれば、俺は大二郎をぶつとばすだろう。

しかし、今の俺は綾香だ！妹に言ったのも同じだ！よつてを大二郎！ぶつとばす！

「チビ！どかねーお前が悪いんだからな！おりゃ！」

大二郎は俺に向かって右足で前蹴りをして来た！

俺が素人だと思ってるのだろうか。蹴りは単調で甘い！

だいたい走りながら前蹴りなんか身長の高い俺に対して通用すると思ってるのか？

今の俺は身長がお前より三十八センチも低いんだぞ。うまく蹴りが当たらなきゃバランスを崩すだけだ。

俺の目の前にまで大二郎の右脚が迫った！

「馬鹿大二郎！」

俺は怒鳴りながら大二郎の右脚に左手の手の甲を思い切り当てて左へと流した。

くそ…思った以上に蹴りが重い…けどいける！

左手の甲で押し当てて左へとながすと俺はそのまま反時計回りに一回転した。そして大二郎の懐に入る！



「な！？何！？」

右脚を流された大二郎は右前方のめりに体勢を崩した！  
慌てた大二郎はそれを懸命に立て直そうとする！

「男が女に手を、じゃない足を出すからこうなるんだよ！」

俺は思いつきり左肘を大二郎の顎あごに向かって突き上げた！

「おりゃあああ！」

バランスを崩した大二郎の顎を俺の左肘が捉える！

「じふ！」

鈍い音とともに大二郎はそのまま後ろに仰け反るように倒れた。  
そして大二郎は完全にのびてしまった。

「な、何だ大二郎！？どうした！？」

そこに大二郎が来るのが遅かったのを心配してかはわからないが、  
正雄が戻ってきた。

正雄がそこで目にした光景は綾香にのされた大二郎の姿…

「何だ？このチビっこが大二郎を！？」

正雄はまさかという表情で俺を見ながら言った。

「お、お前もやるか！？」

俺は正雄を睨んだ。

「おいおいそんなに睨むなよ、俺はそんなつもりはない」

「だ、大二郎が悪いんだからな…女の子に手じゃない…足を出したんだ」

正雄はのびている大二郎を見た。

「なるほど…今日の大二郎なら考えられるな。しかしそんな体つきで大二郎をこんなにするなんてね…怖いねー最近の女の子は…で、お前は悟の妹のдарろ？」

「え？」

何だこいつは！何で正雄が綾香を知ってるんだ？空手道場に綾香は来た事ないはずなのに。

「そ、それがどうした」

「そうそう、悟が行方不明になったんだってな」

こいつ…俺が行方不明になった事も知ってるのか。

「煩いな、今はそんな話はしたくないんだよ！」

俺は正雄から視線を反らすと、何故か声を張り上げてしまった。

「まあいいや、取りあえずその口調はやめろよ。女らしくないぞ？お前は大人しくしてりゃそこそこかわいいんだからな」

「そう言いながら正雄は俺の頭をぼんぼんと軽く叩いた。

「な！？何しやがる！」

俺は正雄の顔を見上げながらもう一度睨んだ。

こいつの行動が妙にムカつた。綾香をガキみたいな扱いしやが  
つて…

友達の妹なんだぞ？もつと違う接し方があるだろうが！

「うわ、こえーな…そんな顔するなよ。まあいい…よしと…しか  
し大二郎も完全にのびてんな…よいしょと…」

正雄は気絶している大二郎を肩に抱えた。

「重いなこいつ…じゃあな！大二郎が迷惑かけてごめんな」

正雄はそう言うと大二郎を抱えて数歩ほど進んだ。  
しかしそこで止まって再度こちらを振り向いた。

「じゃあまたな！悟の妹」

「え…」

何で俺だけなんだよ！

「は、早くいけよ！馬鹿野郎！」

正雄は俺の言葉を聞くと笑いながら大二郎を連れて駐輪場の方に  
歩いて行った。

「ふう…そうだ、みんな大丈夫か？」

そう言っつて3人を見た…あれ？皆の様子がおかしい…

なんかきよとんとして俺を見てるぞ…あ！しまった！俺は今綾香なんだ…

やばい！素の俺に戻ってしまった…今のはどう見ても怪しい行動だよな…

どうしよう…まさか中身が俺【悟】だっけな？

「あ、綾香…綾香！」

佳奈ちゃんが立ち上がってすごい勢いで俺に向かってきた。

「は、はい!？」

俺が動揺していると佳奈ちゃんはいきなり俺に抱きついてきた！

佳奈ちゃん！なんですぐ抱きつくの!？

ちよつと待って！また胸が俺の顔にあつたてる！苦しい！離して！

「すごい！すごいよ！綾香！すごい！」

「か、佳奈ちゃん!？離してよ、苦しいよー」

胸があたつてとは言えなかった…

「綾香？ほ、本当に綾香なの？今のは綾香がやったの？」

うわ…真理子ちゃん…すごい驚いた表情で俺を見てるぞ…

どうしよう…えっと…

「あ、あのこれは…わ、わ、私は」

「綾香…運動はいまいちだし、武道とかそんなのもしてなかったよね？今のは何？さっきの清水先輩は兄と一緒にずっと前から空手をやってるのよ？何で運動も出来ない綾香なのに…」

まさか…真理子ちゃんは俺を疑ってるのか！？

「綾香の言葉使いだっておかしいし…本当に綾香なの？」

やばい、もう完全に疑われる…

「まってよ真理子、綾香は…私を助けてくれたんだよ！それだけだよ…」

あ、茜ちゃん…俺をかばってくれるのか…よ、よし…

「わ、私…今何をしてたのかよくわからないの…体が勝手に動いて…どうなっちゃったんだろ…怖い…うう…」

咄嗟に俺は顔を俯けて泣きそうなふりをした。

「あ、綾香…で、でも…今までの綾香とは全然違って…私すごく驚いたの…だから…」

真理子ちゃんは困った表情で俺を見ている。

「いいじゃん…そんなのどうでもいいじゃん…だって見てよ！どう

みても綾香だよ！もしかして真理子はこの綾香が偽者だって疑ってるの？ほら見てよ！綾香だよ！私達の友達の綾香だよ！」

茜ちゃんが一生懸命に真理子ちゃんに向かって叫んでいる。

「あ、茜…ごめん」

真理子は目を閉じると深呼吸を数回した。  
すると落ち着きを取り戻したのか表情が元に戻った。

「そうよね…うん…ごめん…私びっくりしちゃった…綾香は綾香だよね」

ふう…なんとかなったか…茜ちゃんにお礼いっておかないと…

「茜ちゃん…ありがとう…私…茜ちゃんを助けたくて夢中で…」

「うん、私の方こそありがとうね、綾香が…私を助けてくれたから…怪我しないですんだよ…」

茜はすこし照れた表情で言った。

「綾香！やっぱりすっごい！綾香！佳奈は感動したよ！」

ぎゅううううう！うわ！また顔に胸が！うわ！

そうだ！俺は佳奈ちゃんに抱きしめられてたんだ！

っていつか！締め付けがさっきよりも…お願いだから胸を顔にあってないで…

「綾香、大好き！佳奈はずっと綾香と一緒にいるからね！」

か、佳奈ちゃん…もしかして危ない系か！？俺はそんな趣味はないぞ…

「綾香ちゃん…私ね…さっきの綾香を見てて、綾香のお兄さんの姫宮先輩を思い出しちゃったよ…」

茜が小声で俺にむかって呟いた。

え！？今のつてどつてどういう意味だ！？茜ちゃん！？俺を思い出したつて何だそれ！？

佳奈ちゃんも今の茜の話を聞いてしまったのか、俺を抱きしめる力が抜けたかわりに茜の方をじつと見ている。

「え？何！今の茜の発言は何！？小声だったけど聞こえたよ！茜つてもしかして…姫宮先輩の事が好きだったの？ねえ！」

すつごく楽しそうに佳奈ちゃんは茜ちゃんに迫った。

おかげで俺から離れてくれた。

「わ、私は…そんなんじゃないよ…別に」

茜ちゃんはそう言いながら、真つ赤な顔で佳奈から顔を背けた。

「あー！顔まで赤くしちゃって、怪しいなあ…」

佳奈は茜の顔を横から覗きこんだ。

「やめなよ、佳奈！茜がいやがつてるでしょ。別にいいじゃんそんな事は。あなただってそういう風にされるといやでしょ？」

そう言いながら真理子は佳奈を茜から引き離した。

「う、うん…わ、わかったよ…ごめん茜、悪かったよ」

佳奈は真理子に怒られて少しは反省したみたいだ。

「うづん…いいよ別に…」

そう言いながら茜は今度は俺の方を見た。

「綾香、さっきの人が姫宮先輩が行方不明って言ってたけど…あれって本当？」

「うづん…聞いてた…どうしよう…しかし、いつかばれるんだしな…  
今ここで話しておいたほうがいいかもしれないな。」

「あ…あのね…実は…」

俺はここで三人に悟が行方不明になった事実を伝えた。

三人はかなり驚いた表情をしていた。

その後、茜ちゃんは気分が悪くなったと言って一人で家に戻った。  
俺は送るよって言ったけど一人で大丈夫だからって言って戻って  
いってしまった。

仕方ないので俺は佳奈ちゃんと真理子ちゃんと三人で買い物をした。

ほとんど佳奈ちゃんの行く方向について行っただけで、自分から  
何をすると言う事はま

ったくなかったし、ずっと佳奈ちゃんが一人で話しをしていて、  
それはまるでラジ

オのような感じだった。よく話す子だ…正直ついていけてなかつ



たけど…

数時間の買い物を終えると現地で解散になった。  
俺は二人に手をふる。自転車で自宅へと向かう。

しかし気になるのは茜ちゃんだ…

気分が悪いって言ってたけど、大丈夫だろうか…

あと俺（悟）の事を…まさかな…

あとは大二郎と正雄だ。あの二人は何を考えているのだろうか。  
まったく…

続く

## 第4話 嵐の始業式！？ 前編

ついに来た二学期の始業式の日

俺は朝食を食べ終わると、登校の準備をする為に自分？の部屋に戻ってきた。

そして俺はクローゼットからクリーニング済みの彩北高校の制服を取り出した。

この制服はもちろん綾香の制服だ。

この学校の制服はグレーに赤ラインのチェックのスカート、上は夏の場合にはブラウスの上に白いサマーベストを着る。冬は紺色のブレザーを羽織る。

男子はネクタイ、女子にはリボンがあり、ここがワンポイントらしい…。

しかし、蘇生で復活していたときにこの制服を着ていた時は驚いた。

マジで女装でもさせられたのかと思っていたが…再びこの制服を着るなんて…

仕方ない…これが綾香になっている今の俺の制服なんだよな…

正直、女性物の普段着すら抵抗があったのに制服となるとかなり抵抗がある。

俺が制服を着るのを躊躇っているともう家を出ないといけない時間になっていた。

「や、やばい！遅刻する！」

俺は慌てて制服に着替えてから姿見で確認をする。

髪型…OK…制服…OK…リボン…OK…よし…大丈夫そうだな。

しかし…かわいいな…制服姿の綾香も…

…  
やばい…注意しないと…俺は今確実に危ない方向に進んでいるか  
もしれない…

ふと時計を見ると七時四十分になっていた。やばい！時間がない  
んだ！

俺は慌てて家を飛び出すと自転車に乗り猛スピードで学校へ急い  
だ。

俺の本気の漕ぎにかかれば学校なんてすぐだった。

思ったよりも早く学校に到着！自転車を駐輪場にとめると下駄箱  
へ向かう。

この学校は駐輪場から下駄箱まですこし距離があるんだよな…

雨が降るとこの距離が苦痛に感じるんだ。

周囲に登校している生徒達を見ると不安になってきた…

大丈夫か…俺は綾香としてちゃんとクラスに馴染めるのか…くそ  
…すぐくドキドキする…

俺はクラスメイトの名前だって、佳奈ちゃんと真理子ちゃんと茜  
ちゃんの三人以外はほぼ知らないし、綾香がどんな感じでみんなと  
接していたのかもわからない…

本当に記憶喪失って事にして、当分の間つき通すしかないんだよ  
な…

俺は下駄箱に辿りつくと、上履きに履き替えようと下駄箱に手を  
かけた。

「ちょっと君…」

ん？聞いたことのある男の声がした。そして俺は声のする方を見た。

そこには俺（悟）のクラスメイトの三年A組の宮代貴裕の姿があった。

宮代貴裕は真理子ちゃんの兄貴で俺（悟）と同じ学級で小学校から知っている仲だ。

真面目で優等生…それでもってスポーツ万能…くそ、神様って不公平だ。

で、今の俺に何の用事だろう…

「君、姫宮悟の妹だよな？確か綾香ちゃんだっけ？」

「ええ、そうです」

「ここは三年の下駄箱だよ？」

げ…しまった…確かにここは三年A組の下駄箱じゃないか…

俺は何も考えないで歩いていたら三年A組の下駄箱にきてしまったのか…

「あ、ああ…そうですよね、えっと、私、兄の下駄箱をちょっと見たくって」

ものすごい無理がある言い訳をしている気がする。

「そっか、悟の下駄箱を見に来たのか…確か…悟は行方不明になっただんだよね…」

貴裕は沈んだ表情で言った。

あれ…ごまかそうとして言ったのに…何かちょっと違う反応になったぞ。

「は、はい…で、でもきつと生きてるって私は信じてるんです！」

「綾香ちゃんは強いね、僕も信じるよ、あいつは絶対に生きてるって。悟は雑草よりも生命力がありそうだなもんな」

俺の言葉が効いたのが？貴裕は笑顔で俺に話してきたぞ。

すこし余計な事も言っているのがむかつくが…

それでも心配してくれている貴裕を見ると、事実を隠してる自分に嫌悪感を感じる。

俺が悟だよ、生きてるからって言っやりたいな…でも仕方ないよな…

「じゃ、じゃあ…私は一年の下駄箱に戻るのぞ」

「ああ、じゃあまたね。あ！そうだ、何か困った事があつたら妹にでもいいし僕にでもいいから相談してくれ」

そう言つと貴裕は校舎の中に入って行つた。俺も早く戻らないと時間がない…

俺は一年の下駄箱に行こうと出入り口へと向いた時、目の前に人影が現れた。

「お！悟の妹じゃないか！」

げ…正雄…面倒な奴に出会つたな…

「よう…姫宮綾香」

うわ…大二郎までいる…新学期の朝から馬鹿二人組と逢ってしまったとは…

「お、おはようございます」

俺は一応挨拶だけするとその場から逃げたくって、大二郎の右脇を抜けようとした。

しかし大二郎は左腕を伸ばして邪魔して通行を妨げた。

「な、何ですか？通して下さい。もしかしてこの前の事を怒ってるんですか！」

邪魔をされた事にすこし苛立った俺は思わず大きな声を出した。  
俺達のやりとりに気がついた周囲の三年生が俺達三人を見ている。  
やばい…これは目立つ…

「いや、俺は怒ってはいない…そういう事じゃないんだ」

「じゃあ、そこを通してもらえませんか？」

俺は大二郎の手を持って払いのけた。

「まあ待てよ、姫宮綾香！大二郎は今日お前に大事な用事があるんだと」

そう言つと正雄が俺の肩に手をかけた。

「私には用事なんてありません！」

俺は正雄の手も払いのけた！  
何を考えてるんだ、こいつらは！

「姫宮綾香、待ってくれ！本当に俺は…お前に用事があるんだ！本当は後でお前を捜しに行こうかと思ってたんだが、ここで逢ったのも何かの縁だし」

大二郎はそう言うといきなり俺の両肩を持った。そして俺をじつと見つめる。

ま、待て！俺は男になんてまるで興味はないし、そんなに見つめるんじゃない！

それに後で俺を捜してまで何を言いたかったんだよ！その前にこの手を離せ！

周囲の三年生がじろじろと見ていてかなりはずかしいじゃないか。

「は、離してください！」

大二郎は俺の言葉を完全に無視している。なんて奴だ…

「もう！一体何なんですか！言いたい事があるならさっさと言うて下さい！」

大二郎は頷いた。

う、頷くな！俺は大二郎には用事はないし！っていうかマジで時間もないんだよ！

そう思い大二郎を見ると…うわ…すごく真剣な目で俺を見ている…それに横に立っている正雄がすごく楽しそうな表情だ…

なんかすごく嫌な予感がする…

「姫宮綾香！」

「え！？は、はい？」

「俺の気持ちを言うぞ！この前の一件で俺は…俺は、お前に惚れた！強くてかわいいお前に惚れたんだ！好きだ！この俺と付き合ってくれ！！」

「え！？」

大二郎は真剣な顔をして、よりによって大声で俺に向かって告白をした。

なんで俺が告白されないといけないんだ！それも下駄箱で！大二郎に！？

周囲で他の三年生が取り囲んで俺達を見ている…恥ずかしい…

くそ…正雄の野郎、ニヤニヤしながら俺を見やがって…

やばい、きつと変な事を言われたから恥ずかしくて顔が赤くなってるぞ！

こんな顔しているとすごい勘違いされるじゃないか！この場から早く逃げないと…

「どうだ？姫宮綾香、俺と付き合ってくれないか？」

周囲の三年生のささやき声が俺に聞こえてくる…

「ねえ、すごいね、二学期始業式の日に告白だって」

「あの大二郎が告白してんよ！それも一年相手だって」

「うわーまじ？こんな場所で？信じられない」

「あの子は一年の姫宮さんだよな？確か悟君の妹で飛行機事故から



生きて帰ったって」

「大二郎って根性あるな…結果どうなんだ？」

うわ…これは困った…と、とりあえずは断るぞ！

「無理！こゝ、断る！」

「何だと！？姫宮綾香！俺じゃ駄目なのか！」

うわ…すごい迫力だ…

「だ、駄目っていつか…そういう問題じゃない！」

「じゃあ何なんだよ！言え！どうすればいいんだ！」

「じ、自分で考えろ！」

何だこの断り方…俺は断り慣れてないからな…仕方ない、逃げよう！

俺は屈んで大二郎の手を外すとその場から急いで走り去った。  
後ろから大二郎の叫び声が聞こえる。

「姫宮綾香あ！俺はあきらめないぞ！」

あー恥ずかしい！もうお願いだから俺の事はあきらめてほしいよ…  
っていつか相手しないでほしい…あーもう…二学期早々から大問題発生かよ…

俺はなんとか一年の下駄箱にたどりついた…そして妹の下駄箱を  
探す…

確か…ここらへんだったような…一年B組と…

あつたあつた！よし、時間もなし、早く上履きに履き替えて中  
に入ろう！

そう思つて下駄箱を開けると中には黄色い封筒が入っている…  
ちよつと待つて…これつて…何だよ…まさか…

俺は封筒を取つて宛名を見た。 姫宮綾香様…俺宛だ…というか妹  
宛だな…

「あれ！綾香！ラブレター？」

後ろからいきなり声をかけてきたのは佳奈ちゃんだ。

「あ、おはよう、佳奈ちゃん」

「おっはよー！二期早々からラブレター貰うとかさ、綾香やるね  
」

佳奈ちゃんはすつごく楽しそうだ…

俺は全然楽しくないよ…さっきも色々あつたし…

「い、いや…私こつこの困るし…」

キーンコーンカーンコーン

ホームルームの始業チャイムが鳴った。

「やっぱり！もうこんな時間じゃん！綾香！急ごう！」

「う、うん」

俺は手紙を鞆の中に入れてと佳奈ちゃん二人で急いで教室へと向かった。

教室に到着すると俺はいきなり女子生徒に囲まれた。

今日はホームルームがないらしく、始業式が先らしい。

だから始業式まですこしだけ時間があるらしいのだ。

だからといって何で俺に群れる！

「綾香ちゃんって飛行機事故から生きて戻ったんだって？すっごい  
いい」

「ねーねー墜落ってどうだった？怖かった？」

「綾香のお兄さんが行方不明になったって本当？」

「記憶喪失になったって噂聞いたんだけど？どうなの？」

「ねえ！今日さ、三年の清水先輩に告白されてたでしょ！綾香どう  
思ってるの？」

そんなに同時に聞かれても聞き取れないし、答えられないよ！

もう、お願いだからそっとしておいてよ…

「え、えっと…私は…」

何をどう答えていいのか本当にわからない…困った…

「ちよつと！綾香が困ってるじゃないの！あのね、聞いていい事と悪いことがあるでしょ？どうしてそんなに何も考えずに聞けるの？綾香はすっごい大変だったんだよ？まだ心に傷だつて残ってるかもしれないんだよ？やめなさいよ！」

俺が後ろを振り返るとそこには真理子ちゃんが立っていた。

真理子ちゃんは腕を組んで俺を囲んでいる女子生徒を睨んでる。

「そ、そうよね…ごめん綾香…」

「うん…そうよね…私も悪かったよ…ごめんね綾ちゃん」

女子生徒達は真理子の一言とその表情を見て全員席に戻って行った。

ふう…助かった…流石だ真理子ちゃん…

「助かったよ、真理子ちゃん」

「まったくみんなデリカシーがないっていうかね…」

真理子はそう言いながらまだ教室中に睨みをきかしてくれていた。本当にこの子はいいい子だな…そうだ！そう言えば…茜ちゃんは？

俺は教室を見渡した。すると茜ちゃんは自分の机に座ってぼーっとしてる。

俺がずっと見ているとようやっと気がついたみたいで手をふつてくれた。

俺も茜ちゃんに手をふり返した。どうしたのかな…茜ちゃんの元気がない…

今日だって挨拶もしてないし…

「みんな！そろそろ移動しましょう！」

真理子がそう言うとクラス全員が体育館へと移動し始めた。

俺もクラスメイトと一緒に体育館へと移動した。

始業式は長い…くだらない話も多い…正直昔の俺ならすっぱかしてた。

しかし、今は綾香だ…仕方ないから参加している。

そろそろ時間も時間だし、もうすこしで終わるかな？

「最後に教頭先生から…」

おお、やつと最後だ！

「この学校でこの春から5ヶ月ほど教鞭をとっていましたが八月いっぱい退職されました」

え！？俺は教頭先生の言葉にすごく驚いた。

な！？なんだと！？北本先生が辞めた！？俺はそんな話は聞いてないぞ！

どうなるんだ？北本先生が居なくなったらどうやって元の悟に戻るんだ！？

再蘇生魔法を唱えられるのって北本先生じゃなかったのか！？

くそ！野木！俺に何も知らせてくれなかったな！あとで問い詰め

てやる！

で…野木はちゃんといえるのか？野木まで居なかったら俺は終わるんだけど…

「北本先生は先般の事情があるとの事で、最後の挨拶をして頂けなく、とても残念に思いますが皆さんは先生の事を覚えておいて頂きたいと思っています」

うーむ…しかし、北本先生に何があったというのだ…

いきなり学校を辞めちゃうなんて…

「次に、新しくこの学校で教鞭をとって頂く先生をご紹介します。野木先生です」

お、野木はちゃんと残ったのか。野木までいなくなったら俺はマジで終わるしな。

「野木一郎です。主に科学を担当します。他にも理数系は得意としますので何か質問等がありましたら遠慮なく聞いて下さい。よろしくお願いします」

け…何が理数系だ格好つけやがって…くそ…

「以上で始業式と全体朝礼を終わります」

やっと終わった…俺はクラスのみんなと一緒に教室へ戻った。

始業式の日だけは学校が早く終わる。昼には終わるので今日は授業もない。

二時限目はHRだ。早く終わらないかな…もう今日は疲れたし…もう戻りたいよ…

ふう…本当に疲れた…

俺が机に俯せになっているとガラガラという教室の扉を開ける音が聞こえた。

顔を上げると担任の先生と一緒に女の子が入ってきた…

「ホームルームを始めますよ、えーと、まず始めにこのクラスに新しく入る、皆さんの新しいお友達を紹介しますね」

この時期に転校生？一年のそれも二学期に？

「初めまして、野木絵理沙っていいいます。両親の仕事の関係で中学三年までアメリカに住んでいました。でも、高校からは日本で学びたいと思っていましたので戻ってきました」

絵理沙の自己紹介にクラス中が響めいている。

ふーん…帰国子女か…珍しい…そんな子がうちの学校に入ったのか…

しかし、この野木絵理沙という子はハーフなのかな？

髪は茶色だし、瞳も茶色だな…肌は色白だし…

身長は165センチくらいあるかな？スタイルもばつぐんだし…

日本人っぽさがない。

海外にいたって言ってたけど、モデルでもやってたのかな？

「えっと…名前からわかるかもしれないんですが、私は科学の野木先生の妹です」

クラス中から今度は驚きの声があがる。

え！？ちよつと待て！まさかと思つてたけど何だそれ！？野木の妹だと！？

じゃあこの子も魔法使いなのか？

「よく聞かれますが私は純粋な日本人です。海外でモデルの仕事なんかもしてません」

なんだ…まるで俺の考えを読み取つたかのような話だな…

「皆さん、日本に不慣れな私ですがよろしくおねがいします」

野木絵理沙の自己紹介が終わつた。

「えーと…じゃあ…席ね…そうね、姫宮さんの隣りでいいかな」

え…俺の隣？確かに…右隣りの席があいてる…

「はい、わかりました」

絵理沙は笑顔で俺の横まで歩いて来た。

そして何故だろう？俺を見ると満面の笑顔で挨拶をしてきた。

「よろしくね、姫宮さん」

「あ、はい、よろしくね」



絵理沙は先生に指示された席に座った…この子が野木の妹…本当にかな？

俺が絵理沙を見ていると絵理沙は笑顔で俺の机の上を指さした。指をさされた机の上の隅には小さな紙が置いてある。

あれ？なんだ？この机の上の紙は…

もしかしてさっき挨拶したときに絵理沙さんが置いたのか？

俺は絵理沙の顔を見ながら、その紙をちらちらと見せた。

絵理沙は一度頷くと満面の笑みを浮かべた…どうやら絵理沙さんが置いたようだな…

俺はゆっくりとその紙を開いた。すると中にはこう書いてある。

姫宮さんへ

今日の放課後屋上で待つてますね。 絵理沙

さて…なんだ？この手紙は…屋上？まさかこの子も危ない趣味の子か？

い、いや違うだろ？初対面だぞ？初対面だよな…多分そうだし…

しかし、さてよ…なんでこの子は俺の名前を知ってるんだ？

そうか！野木か！あいつから聞いたのか！！だから知ってるのか！

という事は…俺の秘密も知ってるっていう事か！？いいのか？

妹だからって知れてもいい事なのか！さてよ…本当に野木の妹かわからないぞ…

こんな子があいつの妹なはずがない！似てないし！

ま、まあ…仕方ないし…放課後に直接聞けばわかるかな…

やっと終わった…これで帰れる…と思ったけど帰れないんだっ  
た…

屋上に行かないと…

「綾香！一緒に帰らない？」

佳奈ちゃんが声をかけてきた。

「ごめん、ちょっと用事があった…」

「えーそうなの？残念！いっしょに買い物でもいこうかと思ったの  
に…」

佳奈ちゃんはとても残念そうに帰って行った。

そう言えば茜ちゃんは？教室を見渡したが茜ちゃんの姿はなかつ  
た…

もう帰っちゃったのかな…茜ちゃん…

挨拶もないなんて…どうしちゃったんだろう…

俺は帰り支度をしてから屋上へと上がった。

屋上なんか滅多に出た事はない。それにしても何故に屋上なのだ  
ろうか…

屋上へと出る鋼鉄製のドアをあけるとそこには絵理沙さんの姿が  
あった。

「ごめんね絵理沙さん、遅くなっちゃって…」

「ううん、大丈夫よ、私も今さっき来た所だから」

またあの笑顔で返されてしまった…

「で？何の用事かな…」

「えっとね…私…綾香ちゃんに確認したい事があって…」

確認…って何ろう…変な事じゃないよな…

「か、確認って何？」

「綾香ちゃんって…」

綾香ちゃんって…俺の中に緊張が走る…

「食べ物は何が好き？」

ドテ…って心の中でこけたよ…マジで拍子抜けの質問すぎた…

「た、食べ物？って…そんな事を聞くためにわざわざ？」

「え？悪かったかな？」

悪くはないけど、一体何の意味があつてそんな質問を…

「い、いや…悪くないよ…えっと、私は…そうね…ラーメンとか好きかな」

あ、しまった！思わず俺が素で好きなもの言ってしまった…

「へー悟君はラーメンが好きなんだ」

「うん、私はラーメンが好きだよ…え…」

おい！今悟君って言わなかったか？言ったぞ、確かに言ったぞ！  
という事は…え！？なんだ！？やつぱりばれてるのか！

俺はもしかするとこの世から消滅！？いやだあ！野木！野木！こ  
ら野木！

「何だよ、綾香君、心に中で叫ばないでくれるか？」

俺はその声に驚いた。そして慌てて振り返るとそこには野木の姿  
があった。

「ちよつと！野木、これどついう事だよ！？あと人の心の中を探ら  
ないでくれ！」

二人の野木は大笑いしている…

「あははは…おもしろいな悟君は、じゃないや綾香ちゃんは」

野木が俺の頭をなでなでしながら言った。

「やめてください…」

絵理沙もひいひいとお腹を抱えて笑っている。

なんだこの二人は！正直かなりむかつく！！！！

「これはどついう事なんだ？ちゃんと説明してくれよ！」

絵理沙は笑うのをやめると俺の横にきて耳元で囁いた。

「私よ…北本恵理よ」

俺はその一言にかなり動揺した。

「き、き、北本！？先生！？」

「しー大きいよ声が…これからは小さい声でね。流石にばれるとやばいのよ」

「あ、うん…」

何だと…この子があの北本恵理だと！？どうなってるんだ？

「どうしたの？鳩が豆鉄砲を喰らったかのような顔してるわね」

「そ、そりゃそうだろ！驚いて当たり前だ！」

「あはは…大丈夫よ、こうなった経緯はちゃんと話してあげるから。だからその物陰にいこうか」

絵理沙と俺と野木は物陰に集まった。

この三人が集まってる姿を誰かに見られるとすつごく怪しいぞ…  
新任の先生と転校生と俺とか…組み合わせが…いいのか？こんなので…

「あのね、私はあなたにカードを挿したじゃないの」

「ああ、あれか…」

確かに以前、俺に黄色いカードを挿したな…

「それで、その日から私は魔法が使えなくなった訳」

「確か、そんな事を言ってたな」

「で、どうなったかというと、魔法で北本絵理に化けてたのが化けれなくなったの」

「え？ちよつと待て！あれって化けてた姿！？変身してたってこと？」

「そうね、それに近いかな？魔法使いだもの…素顔でいるわけないじゃない」

「じゃ、じゃあ今の姿は？」

「これが私の本当の姿だよ。どう？結構いい感じでしょ？惚れた？  
そう言つと絵理沙は長いきれいな髪をさつと右手でかき上げた…  
確かに綺麗だけど…だまされるな！こいつはあの北本恵理だ！

「だ、誰がお前になんて惚れるか！」

「あーら…残念ね…」

何だ…本当に残念そうだぞ…何か言い方が悪かったかな…  
ち、違つ！そうじゃない…

「でも、魔法使いがこの世界に素顔でいちゃ駄目なんだろ？いいの

かよ？」

俺がそう言っていると絵理沙はすこし寂しそうな表情を浮かべた。

「本当は駄目だけど…私は魔法界にも戻れないの…これも罰だから…」

そうだったんだ…そうとは知らず…

「よ、ようするに魔法が使えなくなっただから絵理沙は本当の姿に戻ってしまった。それでその姿でこの世界にいないとだめだから生徒としてこの学校に入った？」

「そうね、そんな感じね」

さて…そうになると絵理沙って実は本当の俺よりも年下なのか！？

「絵理沙、ちょっと確認したいんだが…絵理沙は年齢いくつなんだ？？十五歳なのか？」

絵理沙はすこし考えてから答えた。

「そうね…見た目は十五、六歳かな…」

「見た目…って本当は違うのか？」

「そんなの内緒だよ。女の子に年齢聞いちゃだめだよ」

絵理沙はまたあの笑みを浮かべて俺にむかって言った。

年齢聞いちゃだめって…まだ若いんだし…いいんじゃないか…

まさか…実は結構年齢がいつてるとか？でも本来の自分の姿があれだろ…

うーむ…謎だ…謎すぎるな…

「しかし、なんで野木の妹として入ったんだ？別に普通に入ればいいだろ？」

「え？だって私は本当に野木一郎の妹だもん」

絵理沙はそう言つと野木の方を見た。

「な…ん…だ…と…本当に…妹…だと!？」

野木は自慢げな笑顔で俺を見ている。

「おやおや？綾香君、絵理沙が僕の妹だと何か問題でもあるのかな？」

何の悪気もない野木…まあそりゃそうだろう…

別に絵理沙が野木の本当の妹でも問題って訳じゃないからな…

しかし妙にむかつくのは何故だ…

「も、問題は…ない…」

「そうだろ？」

野木はすっごい胸をはっている。くそ…なんだこいつ…いちいち感に障るような態度をとりやがって…

「ねえ…綾香ちゃん」



俺が野木を睨んでいると、絵理沙がまじめな表情で俺の方を見た。

「え？」

そして絵理沙は突然俺の顔を持つと自分の顔に近寄せた。

「ちょ！何するんだ！？や、やめろ！俺はそんな趣味はもっていない」

「ははは…別に何もしないわよ…ただね…」

そう言つと絵理沙は俺の目をじつと見つめる…俺は思わず目を反らした。

すると絵理沙は俺の耳元で小さい声で囁いた。

「こんな私だけ…よろしくね…悟君…」

俺はその言葉を聞いて何故か背筋がぞつとした。

「それじゃまたね、綾香ちゃん！」

絵理沙は言いたい事だけ言つとさつさと屋上から出ていった。

野木が俺の方をじつと見ている。

「な、なんだよ」

「絵理沙はつよがっているが、実はものすごく不安なはずなんだよ。魔法界にも戻れず、今は人間と同じ能力しかない…何かあっても自

分を守る魔法すらも使えない…だから俺はそばにおいてやりたかったんだ。兄としてな…君もわかるだろ？」

野木はすぐまじめな表情で俺に言った。

確かに野木の言いたい事はわかる…俺も妹を守りたいと思っている。

同じ立場ならば野木と同じような行動に出たかもしれない。

「わかった…俺も…協力するよ」

「すまない…ありがとう。君には迷惑をかけているというのに…本当に申し訳ない…」

野木は俺に深々と頭を下げた…本気で妹の事を考えているんだとわかった…

「わかったから…頭を上げて…」

野木は頭をあげた。そして俺の方をじっと見ている…

野木がいきなり両手で俺の両胸を掴みにかかった！予想外の行動に俺は動けなかった。

「うむ…残念、成長してないか…」

何だこの変態は！…いきなり俺の胸を掴みやがって！…！！

「ちょ！何しやがる！この変態！…！」

俺は野木の両腕をおもいつきり叩き落とした。

「痛いな綾香君…いやね、前回逢った七月より胸が成長したような気がしてな…それで確認したかったんだ」

「そ、そんなもんいちいち確認するんじゃないー！」

「ははは…すまないな…つい気になってな…」

「だいたい俺の中身は男だぞ！？わかってるのかよ！」

「もちろんだとも！」

すっごい自信まんまんに言い切られた…

「こ、こんな所を人に見られたら、あんたが困るだけだぞ！学校をクビになるぞ！？」

「そうだな！それは困る！！！今度は人目を気にする事にしよう」

「そっいつ問題じゃねえ！」

何だよ！結局は野木ってこっついうやつなのか！

妹想いのいい兄貴かと一瞬錯覚してしまった！油断してはいけなかった！

こいつにはいつ襲われるかわからん…マジで注意しないと…

「という事だ！それじゃあ僕も戻るから、絵理沙をよろしくな」

「ちよ、ちよつと！野木！」

野木は振り返る事もなく屋上から出て行った。

うーむ…すごい展開になってきたぞ…  
目まぐるしいというか…なんて一日なんだ…

ここでふと思い出した！そうだ！大二郎！

あいつ、もしかして玄関で待ち伏せとかしてないよな！？

怖い！あー怖い！ど、どうしよう…もしも待ち伏せされてたら…  
た、たぶん大丈夫だよな…とりあえず家に帰ろう！

俺はかなり慌てていたのか屋上のドアの枠に脚がひっかかりこけてしまった…

そして鞆の中身がどわーと踊り場に撒き散らされた…

ああ…もう…俺は何をしてるんだ…

散らかった鞆の中身を片付けていると…

あ！この封筒！そこに今朝下駄箱に入っていた封筒が…

そ、そういえばこれもあったんだ…うーん…どうしようか…捨てようかな…

で、でも…一応は中を見ないとなあ…

俺はとりあえず鞆の中身を集めると階段に座って黄色い封筒を開けてみた。

封筒の外には姫宮綾香様とは書いてあるが、差出人が書いてない…中には白い便せんがはいっており、何か書いてある。あたりまえか…

えっと…

姫宮綾香様

僕は姫宮綾香さんがずっと前から好きでした…

いつもあなたの事を想って胸が張り裂けそうな思いをしています。

やっぱりラブレターだったか…

綾香って結構人気あるじゃないか…くそ！

で…続きは…

でも直接告白する勇氣もなく、手紙を書かせて頂きました。

きっと僕に告発する勇氣が出たら…

おい…告白が告発になってるぞ…俺は訴えられるのかよ。

勇氣が出たらその時は姫宮綾香さんへ直接僕の気持ちを伝えます。

終わり？差出人名なし？

何だ？この手紙は！？漢字は間違ってるし！出す前にちゃんと確認しろよ…

しかし誰だ？これじゃ誰が差出人がわかんねーぞ…わかんねー分怖いな…

まあ手紙でしか告白出来ない奴だろうから、直接は何もして来ないだろうけどな。

俺は手紙を鞆にしまうと階段を下りて下駄箱まで行った。

よし、下駄箱には大二郎はいない様子だ…いまのうちだ！

俺は自転車に乗ると急いで家へと向かった。

続く

## 第5話 嵐の始業式！？ 後編

もう少して家につくぞ・・・俺は家の方を見た。

すると家の前に誰かがいるのが見える。あれ？誰だ？

俺はすこし急いで自転車を漕ぐとようやく人影がはっきり見えてきた。

あれ？茜ちゃんじゃないか！何で俺の家の前にいるんだ？

「茜ちゃん！？どうしたの？」

俺は門の前で待っている茜ちゃんの前で自転車を降りた。

「あ、綾香…ごめんね…突然きちゃって…」

茜ちゃんはすごく申し訳なさそうな顔をしている。

「大丈夫だよ、でも前もって言うてくれればもっと早く戻ってきたのに」

「ご、ごめんね…少し寄ってみて綾香がいなかったら帰ろうかと思っただから…今、ちよつと待っても綾香が戻ってこなかったから帰ろうかと思ってたんだ」

そう言ってるわりには結構ここで待っていた感じがする…

俺は学校で茜ちゃんが俺より先に教室を出たのを確認した。

その後に俺は絵理沙の待ってる屋上に行った…

そう考えると結構な時間が経っているはずだ。

こんなに待ってるなんていったい何の用事だろう…

「こんな所で話すのもあれだし、とりあえず中に入ってよ！」

「え…でも…」

俺はもじもじしている茜ちゃんの手を持って引つ張った：

あ…勢いで手を持ってしまった…い、いいんだ！今の俺は綾香だ！という事は女同士だ！友達同士だ！よしOK…という事にしておこっ…

「い、いいから、入ってよ！」

「あ、うん…」

俺は茜ちゃんを玄関の前まで連れてゆき、急いで自転車を車庫に置いた。

そして玄関で待っていた茜ちゃんを家の中に入れた。

今日は両親がいないので気兼ねなく茜ちゃんを中に入れられる。

俺は自分の、じゃない…綾香の部屋に茜ちゃんを連れて入った。

茜ちゃんは部屋の中に入ると、俺が用意したクッションに座ったまま黙ったまま俯いて黙っている…

「どうしたの？茜ちゃん…何かあったの？私でよかつたら相談にのるよ？今日だって私に用事があつて来たんでしょ？」

夏休みのあの日に突然気分が悪くなって家に帰った茜ちゃん…

それ以来まったく話しをしていない…きっと何かがあるんだろう。

「うん…でも…本当に…もういいんだよ」

本当は茜ちゃんは何かを言いたいんだな…でも言いたくない気持

ちもあるのか…

何だろっ…もういいんだよなんて投げやりな感じだし…

こんなに元気のない茜ちゃんを見てるのは…俺はつらいよ…

「茜ちゃん…私が帰って来るのをずっと待ってたんでしょ？私にはわかるもん…お願い…言いたい事があるなら言って」

俺は真面目な顔で茜ちゃんを見た。

「あはは…さすが綾香…ずっと待ってたのわかってたんだね…」

笑い声にも元気が感じられない…

「お願い…私、そんな元気の無い茜ちゃんを見てられないよ…」

「…………綾香はやっぱりやさしいね…………たぶん…綾香が記憶喪失になる前に話した事…忘れてるよね…もし忘れてるならもう話すのはやめとこっと思ってたけど…でも…やっぱりもう一度話そうかな…」

飛行機事故に遭う前に一度綾香は聞いている話なのか。綾香は茜ちゃんに何を言われたんだろう？

おっと…ここは聞いておかないといけないよな…

「う、うん…わかった…私でよかったですらもう一度話してもらえるかな…」

「うん……………」

そうは言ったが、茜ちゃんは言葉に詰まって話が出来ない…

沈黙の時間が数分ほど過ぎた…そして茜ちゃんは大きく深呼吸を



した。  
目を閉じて何度か深呼吸をした茜ちゃんは少し落ち着いたのか、  
ゆっくりと話を始めた。

「わ…私ね…綾香のお兄さんが…姫宮先輩が好きなんだ…」

え！？茜ちゃんの発言を聞いた瞬間にまるで雷が直撃したかのよ  
うなものすごい衝撃が俺の中に走った。

今日は大二郎に告白されたり、ラブレターが下駄箱に入っていたり、  
北本先生が野木絵理沙だったり、野木の馬鹿に胸を揉まれたりとか  
色々あったが、それ以上の衝撃だ。

いやまて！もしかして聞き間違いかもしれない…

「えつと…私のお兄ちゃんって…悟お兄ちゃんが好きだった事？」

「うん…そうだよ…やっぱり覚えてないんだね…綾香が飛行機に乗  
る前に話したんだよ…姫宮先輩が好きなんだって…」

うわあああ！マジかよ！茜ちゃんが！？

そ、そう言えば！綾香が飛行機に乗る前に、帰省するあの日の朝  
に俺に言った言葉…

『きつとお兄ちゃんを好きな子はいると思うよ』

あれはこういう事だったんだ…俺の事が好きな子って茜ちゃんだ  
っただ…

で…でも…今俺は綾香だし…

「茜ちゃん…」

「でも、先輩が行方不明になっちゃったから…綾香もきつとこんな話を聞くとお兄さんの事を思い出してしまうだろうし…辛くなるんじゃないかなって思ったの…だから話すのやめとこうって思ったの…」

茜ちゃんはすごく悲しそうな表情で俺に言った。

綾香にすっごく気をつかってくれてたんだ…俺が綾香だと思って…

「うっん、話してくれてありがとう。私、大丈夫だから…茜ちゃん…元気出して」

「綾香…ありがとう…でも…でも…私は駄目だった…行方不明って聞いてからも何も考えられなくなって…だから…綾香に…綾香にだけはもう一度話をしたかったの…色々聞いて欲しかったの…本当にごめんね…」

「うっん…大丈夫だよ…話してくれてありがとう…」

「綾香…先輩がいなくなっちゃったよ…私はまだ何も伝えてないのに…お礼も言えてないのに…いなくなっちゃったよ…うっ…綾香あ…」

今にも泣き出しそうな茜ちゃんを俺は思わず抱きしめてしまった…こ、これは不可抗力だぞ！やましい気持ちは…な、ない…はず…ちなみに、お礼って何だろうか…？まあいいや…

「茜ちゃん…」

茜ちゃんは俺の胸の中で泣きだした…あのいつも元気な茜ちゃんが…泣いてる…

何だよこれ…俺どうすればいいんだよ…こついつ時って何すればいいんだ!?

俺は茜ちゃんの前にいるし、生きてるのに…それを伝えられないなんて…

つらい…よ、よし!こつなったら!

「茜ちゃん、私ね…本当はお兄ちゃんが生きてるって知ってるんだよ…」

これで…どうだ…って…いいのか…こんな事言って…

でも、茜ちゃんの為だ!ここにいる綾香(俺)は悟だって言わなきゃ大丈夫だろう。

「え…綾香?先輩が生きてるって…それって…」

茜ちゃんが涙を流しながら顔を上げた。

「お兄ちゃんはね…生きてるよ…本当だよ…」

「ほ、本当?生きてるって?あ、綾香ちゃん?本当に?」

茜ちゃんがすごく真剣な顔で俺に向かって言った。

「う、うん…」

「ほ、本当に姫宮先輩は生きてるの?」

茜ちゃんは何度も聞きなおした。

俺は何度でも生きてるよって言ってあげた。だんだんと茜ちゃんに笑顔が戻る。

笑顔が戻ったのはいいけど…どう説明するかな…困ったな…えつと…そ、そつだ！

「私ね、飛行が機墜落して記憶喪失になってから…あれから色々普通じゃない事がわかるようになったの…それで、その一つがね…お兄ちゃんの気配を感じられるようになったの…」

うわ…なにこの非現実的な説明…すごい嘘っぽい。嘘だけど…

「え！？そんな事つてあるの！？」

あれ…思った以上に茜ちゃんが食いついてきたぞ…

「う、うん…私がこの家に戻ってきた日の夜、寝てる時に夢の中で私に声をかけてくれたんだ…お兄ちゃんが…それで私にこう言ったんだよ…俺は生きてるからな。綾香は心配するなよつて…私は聞いたんだよ！本当に？つて…そうしたらもう一度言ったの、俺は絶対に生きて戻るからつて」

作り話すぎだけど…俺が生きてるのは当たつてる。戻るのも当たつてる…はず…

「そつなんだ！だから綾香はそんなに元気なんだね！」

茜ちゃんすつごくうれしそつだ…

「うん、そつだよ！私は信じてるから！あの夢の中の事を！そしてお兄ちゃんが生きてるつて事をね。あと、私はお兄ちゃんが何処かで生きてるつて…感じるの…場所はわからないけど…」

ここにいますけどね…

「私も信じるよ！先輩が生きてるって信じるよ！」

茜ちゃんの目が輝いてる…表情も生き生きしてきた…

作り話でも何でもいいじゃないか！茜ちゃんが元気になるんだから。

「うん！信じてたら絶対に良いことあるよ！私だって飛行機事故から戻ってこれたんだよ」

これはかなり説得力あるだろう。

「うん！綾香も戻ってきたんだもん！先輩もきつと戻ってくるよね！」

「もちろん！きつと戻ってくるよ！奇跡ってあるもん！」

よかった…茜ちゃんがすごく元気になった…

何気なく言っただけど…奇跡…か…ここに俺がいるのも奇跡だしな…

「綾香、私ね、先輩が戻ったらちゃんと告白するね！あの日から私はずつと先輩が好きだったんですって！もう逃げないから！」

告白！その告白される本人がここにいるんだけど…

茜ちゃんの顔を見てるだけでもすっごい胸がドキドキする…くそーでも…茜ちゃんはなんで俺を好きになったんだ？？？あの日からって？あの日ってなんだろう。

「あ、茜ちゃん…そのあの日って？」

「あれ？そつか、それも覚えてないんだ…じゃあもう一度話すね…あれは一年前なんだけどね…そう、中学校最後の夏休みだった」

「私はその日、自転車で急いで駅まで向かっていったの」

「急がないと…電車に間に合わない…今日はお姉ちゃんの手術の日なんだ…お姉ちゃんの入院してる病院はバスでしか行けないからこの電車を逃すと間に合わなくなっちゃう。急ごうって！それで私は勢いよくペダルを踏んだの。その時だった」

「ガシャーン！っていう激しい音と共に私は自転車から放り出された。運が悪かったのかな…自転車のチェーンがいきなり切れてしまつて勢いよく私は転けてしまったの」

「痛い…私は痛みをこらえて立ち上がった。目の前にはチェーンが切れてハンドルが曲がった自転車が転がってたんだ…」

「これじゃ間に合わないよ…」

「私は泣きそうになりながら壊れた自転車を起こしてた…」

「その時ね、誰かが私に声をかけてきたの。『おい、お前大丈夫か？』って」

「そして『その自転車壊れてるじゃないか、お前どっか行くのか？』って言われたの…」

「私はその人を見たの。そうしたら髪が茶色のあやしいお兄さんだった。私は正直何をされるのかわからないし、怖くって思わず逃げ

るように自転車を駅の方に押し込んだ…でも自転車が壊れてるからすぐにまた転げちゃったんだけどね…」

「そうしたら『おい大丈夫か？もしかして…お前は駅に行きたいのか？』って聞かれて…私は怖々と頷いたんだ…そうしたら…『何か急いでるんだろ…俺、お前のずっと後ろから見ただけ…べ、別に追っかけてた訳じゃないぞ！俺は妹を迎えに行くところだったんだ！駅までな』って言って私の自転車を見たの…『その自転車じゃ駅まで行くのは無理だな…』って言われて何だかすごく悲しくなって…私泣いちゃった…」

確かにあった…思い出した…あの時の女の子って茜ちゃんだったんだ…

すごく身長も伸びて…髪型とかも変わってたから気がつかなかった…  
でもよく見れば面影はそのままだな…  
今までわからないなんて…俺って結構ダメな奴だな…

「私は自転車…壊れちゃって…駅まで行けない…って言って泣いてた…そうしたらその人は…『よし、お前！俺の後ろに乗れ！早く乗れ！』そう言いながら私の手を引っ張ったんだ…」

確かに…そう言った記憶がある…格好つけて…

「そして強引に私を後ろに乗せたの…私もなんでかな…後ろに乗っちゃった…」

「私は二人乗りは違反なんだよ！って言ったんだよ。でもその人はすこし後ろを振り向いたけど何も言わずにずっと走ったんだ…すごい一生懸命に走ってくれたんだ…そして駅についた…」 本当に二

人乗りは駄目だよ

「駅についた時にその人は言ったの、『まだ間に合う！電車に間に合うから急げ！』って…でね、私はお礼も忘れて急いで電車に乗った…そのお陰でお姉ちゃんの手術にも間に合ったよ…」

そうか…完全に思い出したぞ…

あの時は困ってる茜ちゃんを見てほっておけなかったんだよ…半分は格好つけもあったけど…でも困ってる妹を見てるような気がしたんだ…

「私も思い出したよ…お兄ちゃんに聞いた事があるよ…その話…」

「え？聞いた事あるって…お兄ちゃんに聞いたって前言ってなかったよね？」

あら…そうか、この話は一度茜ちゃんが綾香に話してるんだ…

俺が知ってるから聞いたことあるよ…ってつい言っちゃったけど、本当の綾香は知らないもんな…でもまあごまかせるだろ…

「たぶん…思い出せなかっただけじゃないかな…私は記憶喪失になっただけから逆に忘れてた記憶をいきなり思い出せたりしてるんだよ…」

「そうなんだね…そんな事もあるのね…」

茜ちゃんは話を続けた。

「お姉ちゃんの手術も無事に終わって、私はその日の夜に駅に両親と一緒に戻ってきたの…それで壊れた自転車を取りに両親と一緒に自転車を置いておいた場所に行ったら…そこには夜で真っ暗なのに



懐中電灯の光だけを頼りに一生懸命に自転車を修理してるその人がいたんだ…私驚いちゃった…だって夜の十一時だったんだよ」

覚えてる…駅まで送った時は無我夢中だったけど、駅でよく見るとかわいい子だったからついつい自転車を修理して格好つけようかと思つて…うわ…すごい不純な動機だった記憶があるぞ…

「それでね、その人は結局自転車を修理出来なくつて、『ごめん、修理出来なかった』つて言つてすごい勢いで逃げていったんだよね…」

そつだ…修理が結局出来なくつてすつげー恥ずかしかつたんだよな…

女の子と両親も一緒だったし…思わず逃げてしまつたんだ…

「私はどうしてもお礼が言いたくつて…ずっとその人を探したんだよね。でもなかなか出会えなくつて…でね！北彩高校に入学して見つけたの！同じ高校の三年生だったの！その後には実はその人が綾香のお兄ちゃんだつてわかつて正直びっくりしちゃつたよ」

そつなのか…俺もびっくりした…綾香の友達だったとは…

「そつか…でもそんな事で好きになつちやうの？お兄ちゃんの事…」

「何でかな…最初は好きとかいう気持ちはなかつたんだけど…ただお礼が言いたいなつて思つてただけなんだけど…でも、ずっと考えてたら頭の中から離れなくなつちやつて…考えれば考えるほど胸が苦しくなつちやつて…この学校に入学してから余計に…いつもお礼言いたかつたのに…目の前に先輩がいると何も言えなくつて…気がついたら私…」

茜ちゃんは自分の胸を押さえながら下を向いた…

なるほど…家に遊びに来た時もいつも俺には挨拶だけだったし…

そういう事か…

しかしひどいな俺は…茜ちゃんの事をまったく思い出さないなんて…

「私…おかしいかな…こんな事で人を好きになるって…」

「ううん！おかしくないよ…茜ちゃんは全然おかしくないよ、でも…茜ちゃんみたいないい子はお兄ちゃんにはもつたいないよ…」

うわ…何だ！？俺は自分で自分を否定するのか！！

「そんな事ないよ、先輩のほうが私にはもつたいないくらい…」

何ていう事でしょう！こんな事を言われる日があるなんて！生きててよかった！

しかし…俺は今、綾香なんだよな…

「そ、そっか！うん、お兄ちゃん…はやく戻ってくるといいな」

「うん！早く戻ってきてくれないかなあ」

その時に茜ちゃんの笑顔はとても可愛くって素敵だった…

その後、元気になった茜ちゃんと夕方まで話をした。

話せば話すほどいい子だなんて…そう実感した。

「ありがとう…綾香…私ね…先輩が戻るまで待つてるよ…」

「うん…きつと戻ってくるよ…」

あーもう…俺はここにいるのに…

「綾香…前にも聞いたんだけど…綾香は私を応援してくれる?」

夕日を背にして茜ちゃんが言った。

「うん…応援するよ」

俺は思わずそう答えた…

そして茜ちゃんは家へと戻って行った。

まさか…茜ちゃんが俺の事を好きだったなんて…

くそう…俺はここに…でも俺は綾香になっ…

俺は決めたぞ…茜ちゃんが俺の事をずっと想ってくれているなんてどうでもいい…

今は綾香の姿だから、とにかく元気にいてくれるように支えてあげよう…

それしか今の俺には出来ないから…

そして…もし俺が元に戻った時も茜ちゃんが俺を好きだったら…

その時は…

よし!戻るぞ!絶対に戻るぞ!!目標が出来たぞ!

ピンポン

なんだ?こんな時間にお客さんかな…

今日は両親がいないから…俺が出ないといけない…  
色々あって疲れるんだけどなあ…変な訪問販売だったらいやだな  
あ…

「はい？どなたですか？」

俺は玄関ドアを開いた。すると何処かで見たような女の子が…

「はい！綾香ちゃん」

そこには絵理沙がいた…って！！何しに来たんだよ！

「はい…って…何でお前がここにいるんだよ…何で俺の家を知って  
るんだよ！」

「え？お兄ちゃん先生だから住所なんてすぐわかるわよ？ああ、大  
丈夫！ちよつとね、遊びにきたただだからさ」

絵理沙はやけに楽しそうに俺を見ている。

俺は正直今日は色々ありすぎてもう誰も相手にしたくない。

「ちよつと今日は疲れてるんだよね…じゃあまた明日ね…」

俺はドアを閉めようとした。

半分閉まりかけたドアを強引に入ってこようとする絵理沙。

「ちよつと！何？こんなかわいい子が折角遊びにきてあげたのに！  
何？その態度」

誰も遊びに来てくれって言ってないし、もう五時だぞ？こんな時

間に遊びになんか普通は来ないだろ…

「別に遊びに来てって言った記憶はない。また明日逢えるじゃないか…遊ぶのは今日じゃなくってもいいだろ？」

俺は再びドアを閉めようとした。しかしドアが閉まらない…

びくともしなくなったぞ…何だこれは！？俺はドアの隙間から外を見た…すると…

「やあ、綾香君」

うわ！野木…なんだよ…何でお前までいるんだ！

「野木先生、女子生徒の家に用事もないのにこんな時間にくるのは駄目だと思います、じゃあまた明日」

俺は再度ドアを閉めようとするがまったく動かない。

それどころかドアはいきなり全開になった…野木の魔法か？これは…

「いやいや、魔法じゃないよ、単なる家庭訪問だよ！ははは」

嘘をつくのと人の心を読むのはやめる！あと、高校一年の妹と一緒に女子生徒、それも担任じゃない生徒の家庭訪問をする教師がどこの世界に存在するんだ…

「今日は両親もおりませんし、嘘つきな変態先生は嫌いです。さよなら…」

「さて！綾香君！今日君は妹の為に協力するって言ってたじゃない

か！」

「それはそれ、これはこれ…だいたいなんでこれが協力なんですか」

「絵理沙が綾香君の部屋を見たいという事に対する協力だ」

「それって今日じゃなくってもいいですよね…」

「いや、思い立ったが吉日と言っだろう！」

「そういう事にそのことわざを当てはめるのはどうかと思います…」

つて！辺りを見渡たすと絵理沙がいない！まさか！

俺は慌てて自分の部屋じゃな…綾香の部屋に戻った。  
ドアを開けるとそこには…

「おじゃましてまーす」

絵理沙はちゃっかりと部屋に入っていた…それもちゃんと綾香の  
部屋に…

「あの…もういいでしょ？部屋も見られた事だし…」

「うーん、悟君は私には全然優しくくないなあ」

何故俺が絵理沙に優しくしてあげないといけないんだ…

俺をこんな目に合わせてる張本人だろうが…

「へえ…ここが綾香ちゃんの部屋ねえ」

「絵理沙はきよろきよると部屋中を見渡している…」

「何だよ…何をきよろきよろ見てるんだよ」

「うっん…結構女の子っぽい部屋にしてるんだなあって思って」

「元々が妹の部屋だ！女の子っぽくって当たり前だろ！」

そう言ってる横でドアの開く音がした…野木まで部屋に入ってきた…

「こら！女の子の部屋に勝手に入るな！」

くそー！なんなんだよこの二人は…

「いやいや…綾香君、実は…ここに来たのは遊びではないのだ」

野木はニヤニヤとしている。信用出来ない…

「私は貴方を信用出来ません、出て行って下さい」

「ひどいな綾香君、僕は嘘はつかない」

どこがだ…嘘をつきまくってるじゃないか。

「それじゃあ何をしにきたんだよ！」

「ふふふ…君の体内に入れたカードだが、魔法力がいくつ溜まっているかがわからないだろ？君はその数値が知りたくないかい？」

むむ…確かに…カードを入れた果たしてどの程度魔法力が溜まっているのかがまったくわからない…知りたいと言えば知りたい。

「そのカードに溜まった魔法力を見られる装置を持って来たんだ」

何だと！？そうならそうと先に言えばいいのに…何故言わないんだ…

こいつら完全に俺で遊んでるだろ…

「そうなのか、まあ…それは俺も欲しいけど…何で今ごろ？もっと早く渡してくれてもいいんじゃないのか？」

「いやいや、発注してただけど、品切れでね、今日やっと届いたんだよ」

発注って…これって量販されてるものなかよ…

「そう！これだよ！これ！」

そう言つと野木は四角い目覚まし時計のようなものを鞆から取り出した。

それには五桁の数値が出るようになっていて、今は00000になっっている。

上には赤いボタンがあつてまるで目覚ましのストップスイッチみたいだ。

「で？その目覚ましみたいなのを使ってどうやればいいんだ？」

「まずこの上のボタンを押してくれたまえ」



「これか？」

俺は言うがままに赤いボタンを押した。するとがちゃがちゃとデジタルが動き出す。

そして033333で止まった。

「おおおおおー！」

野木が大声を上げる。

「どうした！？これがどうかしたのか？」

「33333のぞろ目じゃないか！すごいぞー！」

「何！？33333だと何か良いことが！？？」

「無いー！」

また自信満々に言われた…

「で…この数字が魔法力なのか？」

「そこからは私が教えてあげるね」

そう言うと絵理沙がその装置を持って俺の前に来た。

「この数値が魔法力ではないのよ。実際の魔法力を設定数値で割ったものが出るの」

「ん？どういう意味だ？」

「この数値が9999999999になったら目的の魔法に対する魔法力が溜まったという事になるって事なのよ。だからレベルの低い魔法ほどあつという間に9999999999になるの」

「なるほど…じゃあ再蘇生魔法に対する魔法力は少ししか溜まってないって事なのか？」

「そうね…あまり溜まってないわね…綾香ちゃんはあまり楽しい夏休みを過ごしてなかったでしょ？」

うーむ…言われてみれば夏休みなんて一つも楽しくなかったな…一度だけ綾香の友達と買い物に行っただけど、あとは引きこもりだったし…

「確かに…楽しい夏休みじゃなかった…」

「でしょ？だから魔法力があまり溜まってないんだよ。言われたでしょ？楽しくって」

「なるほど…でもなあ…楽しくってそんなに出来るもんじゃないぞ？」

「そこはがんばるしかないよね…私も手伝うからさ。色々とね…えへへ…」

えへへって…な、何を手伝うんだ！？

「そうそう、綾香君！僕は君の成長記録をつけようかと思っているんだ。えへへ」

えへへって！？俺は咄嗟に自分の両胸を両腕で押さえて隠した…

「綾香君、何をしてるんだい？別に僕は君の胸の成長記録ばかりを  
つけ…」

ボゴ！！鈍い音がしたと思ったら野木の顔面に絵理沙の拳がめり  
こんでいる…

「おーにーいーちゃーん！そういう変態じみた事は今後しないでね  
！」

な、なんだ…絵理沙…顔が笑顔なのにひくひくしてるんですけど  
…すごい怖いよ…

それにそのパンチはかなり痛いだろ…いいのか？実の兄貴だろ…

「絵…理沙…何を…ぐう」

野木は鼻血を出しながら倒れた。

「あ、綾香ちゃん、あはは…まああれだよ、これで数値がわかるか  
ら！今後は確認しながら溜めるといいよ。この馬鹿兄貴は私が責任  
をもって監視するからさ」

監視つて…確か…絵理沙が監視される方なんじゃなかったっけ…  
それにしても野木…妹にコテンパンにやられてどうする…

「あ、うん…ありがとう…今度からちゃんと確認するよ…」

「じゃ、じゃあ私達はそろそろ帰るね！」

「あ、うん、わかった、わざわざ持ってきてくれてありがとう……」

「うん、それじゃあね！お兄ちゃん！行くよ！早く！」

そういつと絵理沙は倒れている野木を強引に起こした。

「ぐう…絵理沙、ま、まで！まだ僕の目的が達成されていな…」

鼻血を押さえながら言つてた野木がいきなり黙つた。

野木の視線を追つとそこには拳をふるわせる絵理沙が…

「何？お・に・い・ちゃ・ん？もう用事は終わったよね？…戻るわよ…」

絵理沙の野木に対する接し方が妙に怖い…

「あ、はい…戻ります…」

野木がやけに素直に絵理沙の言う事をきいた。

絵理沙は野木の手を引つ張ると窓際に行った。

そして野木が窓枠に触ると窓が一瞬光つた。

ガラガラ…絵理沙が窓を開く…

「じゃねーまた明日ねーほら！兄貴が先にいけよ！」

「え、絵理沙！押すな！」

絵理沙と野木は窓の中に入って消えた…窓…に！？

え？何だ？これ何だよ？窓に入って消えた！？まさかドラ もんのどこでも アか！？

よく考えればあの二人はどこに住んでるんだ！？異次元？うーん…ま、まあ…深く考えるのはよそう…頭が痛くなる…

俺は絵理沙と野木が置いていった魔法力メーターを見た。

まだ3333か…絵理沙の言う999999には果てしなく遠いな…しかし、これであといくつ溜めればいいのかわかるようになったし、目標を持って生活も出来る。

そう悟に戻って茜ちゃんに告白されるという目標！ははは！は…そうだ！

そう言えばあいつら玄関から入ったはずだぞ？

あいつら靴は！まさか忘れてとかないよか？魔法使いだぞ？きつと転送か何かで…

俺が慌てて玄関に行くと…玄関にはしつかりと2人の靴が残っていた…おいおい…

こうしてドタバタだった2学期の初日は終わった。

続く

## 第6話 へすとふれんど！

始業式から数日経った放課後…

「ふう…」

「綾香、どうしたの？そんなに深いため息をついちゃって…」

ふと声のする方向を見るとそこにはいつの間にか茜ちゃんが立っていた。

茜ちゃんはあれから元気になった様子で俺は一安心だ。

でもこっちはまだ問題が残っている…

しかし、俺の問題は他人に相談するような事でもない。

男ならば自分で解決しないとダメだろう。そう思っていたが…

「あ…茜ちゃん…別に何でもないよ」

「ふーん…でもさっきの顔って、あーあー…嫌だなあって顔だったよ？」

茜ちゃんはよく見てるなあ…それとも俺が表情に出やすいだけなのか？

とりあえずこの場はなんとかやり過ごそう…

「え…そういう風に見えた？気のせいだと思うよ」

「そういう風にしか見えなかったよ？ねえ、何かあるの？もしかして毎日下駄箱にラブレターが入ってるのか？」

「え…な、何それ！？毎日ラブレターって…」

「え、違うの？えっと…前、佳奈ちゃんが言ってたから…綾香が始業式の日ラブレター貰ったって…あ、大丈夫よ！知ってるのは私と真理子ちゃん位だと思うし」

真理子ちゃんも知ってるのか…佳奈ちゃん…おしゃべりだな…

「いや、違うの…ラブレターなんてかわいいもんだよ…それにあれ以来ラブレターは一度も入ってないし」

「え？それじゃ何なの？」

「ふう…大丈夫、生命にかかわるような一大事じゃないし…私もう帰るね」

「あ、綾香？」

「茜ちゃん、また明日ね」

俺は鞆を持って教室を出た。

俺はいつも一人で家に帰る。茜ちゃんは部活をしているから俺と一緒に帰れない。

真理子ちゃんは生徒会の手伝い、佳奈ちゃんは…何時も気がつく  
と教室にいない…

絵理沙は授業が終わると必ずあの実験室へ行ってしまふ。

あの中で何をしているのだろうか…まあ行きたくもないし、知りたくもないが。

とりあえず、知っている人間とはいつも一緒に帰れないのだ。

「ふう…本当に疲れる…明日こそは諦めてくれるだろうか…いつも朝だけで、下校の時にいないのは救いだけど」

俺はうつな気分で家に戻った。

朝が来た…すつごく目覚めも悪い…

いつものように支度をして俺は自転車に乗り学校へと向かう。そして駐輪場に自転車を置くと下駄箱へ…

「ふう…」

気が重い…下駄箱に行きたくない…でもまさか登校拒否するのもな…今は綾香だし…

「綾香！おはよう！」

「うわあ!？」

後ろからいきなり大きな声で挨拶をされて俺は思わず声をあげてしまった。

振り返るとそこには元気いっぱいな茜ちゃんがいる。

「な、何よ綾香！いきなり大きな声出してびっくりしたなあ…」



びっくりしたのはこっちもだ。いきなり声をかけられてすぐくび  
つくりした。

「綾香どうしたの？今日も元気ないじゃないの？」

「え？うん…まあ色々あるから…で？茜ちゃんなんでここに？」

いつも茜ちゃんは俺よりも先に登校しているはずなのに…

「んー…綾香を待ってたの」

「え！？私を？」

「そっだよ…で？何があるの？昨日も何も話してくれないし…二  
学期が始まってからずっとこの調子じゃないの。授業中とかは何も  
なさそうだし、きつと登校か下校に何かあるんでしょ？」

相変わらずなかなかするどいな…茜ちゃんは…

でも、やつぱり、こういう事は他人には相談しない方がいいと思  
ってるんだけど…

「え…えっと…でも…茜ちゃんは別に関係ないし…」

「綾香！何？関係ないって！何かあるなら言ってよ！私達は友達だ  
よね？」

茜ちゃんはすこし大きめな声で怒鳴ると俺を睨んだ。

いつも優しい茜ちゃんが少し怖い…

茜ちゃんは俺がはつきり言わないからイライラしているのだろう  
か、体が小刻みに揺れている。

「で、でもね…」

「でもねって何よ！ずるいよね綾香って…私の相談には乗るのに自分の相談を私にしてくれないとか…すぐくずるい！そんなに私は相談出来ない事なの！？」

「え…べ…別に…私は相談なんて…」

茜ちゃんが俺の言葉を遮るように怒鳴った！

「あー！もう！綾香！言いなさい！何があるのよ！」

うわ…怖い…こ、これは言った方がいいかな…

周囲の生徒も何だ？という表情で俺達を見ているし。

「わ、わかったから、茜ちゃん、言うよ、言うから」

「よしよし…で？何があつたの綾香？」

ふう…茜ちゃんが普通に戻った…よかった…

しかしなあ…本当は言いたくなかつただけ…まあ仕方ないか…

「茜ちゃん、こっち来て…」

俺は茜をつれて下駄箱の入口が見える校舎の角まで行った。

「茜ちゃん、ちょっと待ってね」

「うん」

俺は校舎の陰からゆっくりと顔を出して下駄箱の入口を見た。

「やっぱり今日もいた！」

俺はそう言つと同時に急いで顔を引つ込めた。

「え？何？何がいたの？」

茜ちゃんが平然と校舎の陰からはみ出て下駄箱を見た。

「あやかー？下駄箱の入口に誰かいるの？」

うわー茜ちゃん！？声が大きい！

（ちょっと！茜ちゃん！）

俺は慌てて茜ちゃんの手を引つ張つて校舎の陰に戻す。

（駄目だよ！下駄箱から見える場所に出たら！）

（え？何で？どうして？）

（あのね、下駄箱の入口に3年生の男子がいなかった？背の高い…）

茜ちゃんは再び校舎の陰からそつと下駄箱の入口を見た。

（あーいるいる！あの人かな、確か…空手部の人？）

（そう！その人、清水先輩って言うんだけどさ…）

茜ちゃんは清水先輩と聞いただけで何かがわかった様子でこう言った。

(ああ、綾香ちゃんに始業式の日の下駄箱で大声で告白してきたあの3年生ね)

(そう！下駄箱で人の事も考えないでいきなり告白してきた馬鹿な人！)

(綾香、馬鹿は言い過ぎだと思っよ…)

(…………でも…あの人しつこすぎるし…)

(ふーん…ん…ま、まさか！毎日あそこに待ち伏せしてるの？)

茜ちゃんはようやくわかったようだ…

(そう！そうなの！最初は絡まれても無視して横を通過してたんだけど、そのうち諦めるだろうと思ってたら清水先輩って思った以上に諦めの悪いタイプで…私は毎日絡まれるのがつらいから、最近チャイムがなるぎりぎりまでここに隠れてるんだ…)

本当は大二郎に蹴りとパンチを入れて二度と俺に近寄らないようにしてやりたいが、流石に綾香の姿だとそれは出来ないしな…

(えー！？何それ！？バツチリストーカーじゃないの…)

(でしょ…私、こんな身近にストーカーがいるなんて思わなかった…)

(よし！私も待ち伏せとか嫌いだし！私に任せておいて！)

そう言つと茜ちゃんは下駄箱の方へと歩いて行つた。

俺は校舎の陰からそつと顔を出して様子を伺う。

話声は聞こえないが、茜ちゃんが大二郎に何か話しかけているのがわかる。

大二郎が首を傾げている…あれ？頷いた…なんか嬉しそうになつたぞ…

何を話してるんだ！？

そしてそれからしばらくして大二郎がいなくなった。

会話が終わつた茜ちゃんは笑顔で俺の所まで戻つてきた。

「綾香！もう大丈夫だよ！これで朝の待ち伏せはなくなったはずよ」

茜ちゃん大二郎に何を言つたのだろうか…

ともあれ助かつたのは確かだが。

「ありがとう、それで…茜ちゃん…清水先輩に何を言つたの？」

「え？えつと…別に大した事じゃないから！」

「い、いや…気になるんだけど」

「えー…気になる？気にしないでいいと思つよ」

「待つて！教えて！」

あ、茜ちゃん…何で目を反らすの！？まさか変な事を言つてない

よね…

「あ、綾香…そ、そろそろ時間だよ！早く教室入らないと！」

話題を反らした…故意に反らしたな！

「ダメ！教えて！」

俺は茜ちゃんを睨んだ。

「わ、わかったわよ…」

茜ちゃんは俺をちらちら見ている…怪しすぎる…

「えっと…あ、綾香と付き合いたかったら…綾香に認められるくらい強くなりなさい…って言った」

「……………そ、それだけ？」

「…今度の空手の大会で優勝したら綾香とデートさせてあげるって…」

「……………茜ちゃん…ちょっと…何を言ってるの…」

「ダメ…だった？」

「……………」

ダメっというか…そういう問題以前になんていう事を言うんだ…  
大二郎がまさか優勝はしないだろうけど…

もしも、万が一でも大二郎が優勝とかしたら…俺は大二郎とデート！？

嫌だ！男とデートとか！気持ち悪い…手を握られたらどうしよう…絶対に殺す！

やめよう…考えるだけでも背筋がぞつとする…

「どうしたの綾香？顔色が悪いよ？」

茜ちゃんのせいだろ…

「あ、綾香、そ、そろそろ時間よ！早く入ろう！」

校舎の時計を見ると本当に時間になっていた…

「う…うん…い…うか…」

大二郎の待ち伏せが無くなったのは良いが…

まあ…大丈夫かなあ…不安だ…

お昼休み

クラスの女の子が数人俺の前やって来た。何の用事だろうか？

「姫宮さん！姫宮さんってさー最近何かイメージ変わったわよねー」

「うんうん、私もそう思うー」

「え！？な、何を唐突にそんな事を言うんだ！？」

「え？そ、そうかな？」

「なんて言えばいいのかな、一学期まではすっごく大人しくって、あまり目立たなかったたっていうか…」

「そうよねーなんかねーあれだよ、あれー、お人形みたいな感じ？」

まあ…妹はもともと大人しい方だったかも知れないな…

「でも今の姫宮さんってすっごい元気で、活発で、イメージががらっと変わったよね」

「うんうん！いまの姫宮さんってかわったー」

「あ、え、そうかな…多分…記憶喪失になってからかな…へ、変？私は変かな？」

「別に私は変だとは思わないけど？私は今の姫宮さんは前よりイメージいいと思うよ」

「えー？そう？私はすっごく変わって違和感あるんだけど、別に嫌って事じゃないけどさー前の大人しいイメージが好きかも」

「あはは…」

「じゃあね！姫宮さん！」

「また後でねー」

言いたい事を言い終わったクラスの女の子は教室を出て行った。

何だったんだ…今のは…



今、俺はがんばって綾香を演じてるけど、本物の綾香とはやっぱり違うように見えるのかな…

という事は他のクラスメイトからも同じように変わったって思われているのかな…

しかし、口調とか態度とか気をつけていても、性格までは変えられないし…

綾香とそっくりそのままの人間になるなんて無理に決まってる…  
そうだと…ちょっと真理子ちゃんに聞いてみよう。

「ねえ…真理子ちゃん…」

「何？」

「私って…口調とか…態度とか…前と比べて変かな…」

「前って記憶喪失になる前と比べてってこと？」

「うん」

真理子ちゃんは教室を見渡した。

「綾香、誰かに変って言われたの!？」

「あ…うん…そうなんだ」

「そっか…確かに私も前の綾香とは違うと思うよ」

げふん…やっぱり違うのか!？」

「でもね…私は夏休みのあの事件の時に茜に言われた事…その通り

だと思っただ」

あ…俺が大二郎をのした時か…

「綾香がどう変わっても綾香なんだよ！だって綾香はこの世の中に一人しかいなんだもん」

真理子は笑顔で俺に言った。俺は何だかすこし安心した…でも…俺って実は偽物なんだよな…

「ありがとう…真理子ちゃん」

「綾香…変だとか変わったとか言われても気にしないのが一番だよ。綾香は綾香なんだし」

そう言いながら笑顔の真理子ちゃんが俺の頭をなでてくれた…

「うん…そうする」

「ふふ…あと、よかったね！ストーカーがいなくなってる」

「え！？」

何だ！？朝の件かな！？真理子ちゃんが何で知ってるんだ！？

「ごめんね、最近の綾香って元気がなかったじゃないの。だから茜がに聞いたんだ、まさか清水先輩がストーカーだったなんてね…綾香も災難だったね」

いつの間にか大二郎はストーカーでひどいやつっぽくなって…

「でもよかったね…本当に最近元気なかったから私も心配してたんだよね」

「うん、茜ちゃんのおかげで…朝の待ち伏せはなくなったよ…」

「だけど、俺はでっかい不発弾を抱えてしまった気分だけ…」

「ねえ綾香、何かあったら私にも相談してよね、私だって相談に乗るんだからね？綾香にはいつも元気な笑顔でいて欲しいし！」

茜ちゃんも真理子ちゃんも綾香の事をこんなに心配してくれてるんだ…

いいな…綾香は…やっぱり綾香の人間性がこんなにいい人達を呼び寄せるのか…

俺は何も無い奴だった…無理につっぱってみせてもただ虚しいだけ…

ただ喧嘩が強くなりたいたいで空手をやって…目立ちたいが為だけに髪を染めて…

「どうしたの？綾香？ぼーとしちゃって」

はっとして目の前を見ると、真理子ちゃんの顔がいつの間にか俺の顔の前に！？

「うわー！」

俺は思わず後ろに仰け反った。

「何？綾香…変なの…」

「い、いや…真理子ちゃんの顔がいきなり目の前にあったから…」

「ふーん…まあいいわ！とにかく！綾香はいつも元気でいてね！」

「うん、わかった！ありがとう！真理子ちゃん」

「それじゃね！」

真理子ちゃんは教室を出て行った。

放課後

やっと一日が終わった…

今日は大二郎の朝の待ち伏せ行為も一応は終わったし、茜ちゃんも真理子ちゃんも俺を心配してくれてたってわかったし、いい日だったな…多分…

「姫宮さん、また明日ねー」

クラスメイトの子が挨拶をして帰って行く。

「またねー！」

俺は笑顔で挨拶を仕返した。

「あーやーかー」

「この声は佳奈ちゃん？声の方向を向くとそこには佳奈ちゃんがいる。」

「あれ？佳奈ちゃん今日はまだ帰らないの？」

「うん、だって今日は綾香と帰るんだもん！」

「え？」

何だ？今日は俺と帰る？何かあるのか！？

「最近さ…綾香って一緒に帰ってくれないんだもん」

待って…俺が気がつくといつも佳奈ちゃんがいないんじゃないか…別に俺は避けてなんかないぞ！

「そ、そうだっけ…」

「今日は一緒に帰れる？帰れるよね？」

その祈るような表情はやめて…ま、まあいいか…たまには一緒に帰っても…

「あ、うん…いいよ」

「じゃあ！帰りにファーストフード店にいこうよ！」

佳奈ちゃん…いきなりすっごい笑顔になったぞ…  
しかし…やっぱり寄り道するんだ…

「あ、うん、いいよ」

俺は珍しくも佳奈ちゃんと一緒に帰る…っていうか…

佳奈ちゃん！そっちは俺の家とは逆じゃん！あー家が遠くなるー！

そして俺は家と逆方向のファーストフード店へやってきた。

こんな所まで来てしまった…帰るのが大変だ…

「ねえ！綾香！綾香は何が食べたい？飲み物どうする？」

うーん…取りあえずどうするか…お腹も減ってないし…

まあ…俺はいつも頼んでるポテトとコーラのセットでいいか…

「私は…ポテトとコーラでいいかな」

「OK！まかせておいて！綾香は席確保よろしく！クーポン用意しなきゃ！ほら！綾香！席！席！」

佳奈は鞆から携帯を取り出すと、操作しながらレジへと歩いて行った。

そして俺は言われるがままに席を確保しておいた。

「おまたー！鬼盛りポテチとこれでもかーコーラ！」

佳奈ちゃんがコーラのBIGサイズとポテト山盛りを持って席についた…

ちょ、ちよつと待て！なんだそのボリュームは…俺はそんなの頼んだ記憶ないぞ…

「か、佳奈ちゃん…ちょ、ちよつと多そうだね…」

「そう？このくらい普通に食べれるし、飲めるよね？あ！そうだ！今日は私のおごりよ！遠慮無く食べてね！」

え？おごりって？佳奈ちゃんの？でもそれは悪いしな…払おう。

「いいよ、お金払うよ。いくら？」

「私がおごるって言うてるでしょ！いいの…！」

佳奈ちゃんの性格からしてもこうなると絶対にお金は受け取って  
くれないな…

仕方ない…今日はおごってもらっておごりっ…

「あ、ありがとう…」

「さあ！食べよう！…」

俺はポテトを二つ三つほど取ると口に入れた。  
そしてコーラをストローで飲んだ。

「ねー綾香？」

「え？何？」

「綾香ってさー」

「う、うん」

「ポテト嫌いだったよね？」

「え…!?!」

そ、そう言えば…綾香ってポテト食べないんだ!忘れてた…

「あとさ…炭酸飲料とか飲まないよね?」

「え!?!」

そ、そうだ!綾香は炭酸飲料を飲まないんだ…

俺とした事が…何でこんな初步的な綾香の好き嫌いを忘れてしま  
うんだ…

俺は恐る恐る佳奈ちゃんを見た…

すると目を細めてニヤリとした表情で俺を見ている佳奈ちゃんが…  
も、もしや…佳奈ちゃんは俺を疑ってるのか!?!実は綾香じゃな  
いんじゃないかとか…

な、何か言わないと…

「わ、私ね、記憶喪失になってから嫌いなものも忘れたんだ!」

うわ…なんて都合のよい記憶喪失だろう…

「ふーん…」

「お…おかしいかな…」

そりやおかしいよな…きつと本当に?嘘でしょ?とか言うつんだろ  
うな…



「おかしくないよ！うん！そういうのあるよね！うん！あるある！あはははは」

佳奈ちゃんは俺の肩をばんばん叩くと大笑いした。

「え？あ、うん、あるよね…あはは…」

俺は笑えないんですけど…

でも…佳奈ちゃんって…いい性格だよ…本当によかったここに居るのが佳奈ちゃん…別の子とかだったらもうどうなってたか…

「いいな！記憶喪失！私も色々忘れて嫌いな物とか苦手な物とかなくしたいな！私って実は犬が苦手なんだよね！犬ってさーかわいいけどさー大きい犬って怖くない？私は一回噛まれちゃってからもう犬に近寄れなくなっちゃったんだよ…でも好きなんだよ？本当だからね！だからそういうのも忘れたいし…」

「あ、そ、そうなんだ…」

「でねー猫はつていうと、今は家で飼ってないけど、昔は猫を飼っててさーでねー私の大事なバッグで爪を研いじやったの！もう腹がたつてねー！もう猫なんて飼わない！って思ったんだけどーだけどねー死んじゃったらもう悲しくって…すっごい泣いちゃって、だからまた猫飼いたいなーって思ってたりするんだけど…」

「へ、へえ…」

その後は一方的に佳奈ちゃんが話しを聞いていた。前の買い物の時もそうだったが、まるでラジオのDJのごとく、ずーと話を続けていた。ここまでくると関心してしまう…

おまけにあんなに山のようなポテトをほぼすべて佳奈ちゃんが食べ尽くした…佳奈ちゃんのその体型でそのポテト量…一体どこに収納されるのだろうか…

3時間後…話たい事を言い尽くしたのか、俺はやっと解放された…  
うーん…俺は…ホントこの子は苦手だ…

「佳奈ちゃん、今日はごちそうさまでした」

「ううん！いいのいいの！じゃあまた明日学校でね！」

「うん…また明日ね」

俺が自転車に乗ろうとした時に、佳奈ちゃんがすこし照れながら俺に向かって言った。

「綾香…よかったよ…綾香が元気になって…」

「え？」

「始業式の日から昨日までずっと元気なかったから…私なりに心配してたんだよ…」

え…じゃあ今日一緒に帰ろうって言ったのは…

「でも本当、元気になったみたいだし！本当よかった！またね！」

佳奈ちゃんはそう言つとさっさと帰って行った。

綾香：お前は本当にいい友達ばっか持ってるな…

続く

## 第7話 生命の灯火

五時限目は俺が大嫌いな数学だ…

「…でありますので、この式については…」

よくわかんねー数字とか並べやがって…なんでこんなに難しい公式をわざわざ覚えなければならんだ？正直、計算機やパソコンの世の中だし、今頃こんな公式を覚えなくても自動計算でいいじゃないか。くそーつまんねーし…早くおわんねーかな…

俺はその後、数学の授業などまったく聞かないで別の事ばかり考えていた。

ガタン！絵理沙の席の方から音が？ふと我に返って横を見ると絵理沙が何やら教壇の方を指さしながら口をぱくぱくさせてる…ん…前？見る？…俺は慌てて前を見た。

「姫宮さん！聞こえてますか？」

うわ！どうやら先生はずっと俺を呼んでいたようだ。

クラス中の視線も俺に集まっているぞ！やばい！俺は慌てて席を立った。

「は、はい！すみません」

横を見ると絵理沙は呆れた表情で俺を見ている…

「姫宮さん？もっと集中して話を聞いてください！」

「はい…すみませんでした」

やばいやばい…絵理沙が教えてくれなかったら怒鳴られてた所だった…

今は綾香なのにそんな事してたらダメだろ…今度は注意しよう…

「では、姫宮さん、周辺の長さが二十センチの長方形があります。縦の長さをxセンチとしたとき、長方形の面積をy平方センチとします。yを求める二次関数は？」

な…なんだその呪文は…俺は魔法使いじゃないぞ…

えっと…y〓わかりません…違う…y〓やんぐあすばら…違う…俺が頭を悩ませていると絵理沙がノートを机の陰から見せてきているのに気がついた。

え？何…ノートの端っこに《y〓 - x<sup>2</sup>乗 + 10x (0 < x < 10)》と書いてある…

それを言えばいいって事なのか？多分そうだな…よし…

「えっと…y〓 - x<sup>2</sup>乗 + 10x (0 < x < 10)です…」

「はいそうですね、姫宮さん正解です。座ってください。皆さんそれを…」

助かった…意味はわからなかったけど正解だったようだ…

再び絵理沙の方を見た。すると今度は別の事が紙に書いてあるぞ？

《何？何やつてるのよ！馬鹿じゃないの！》

うわ…そんな事をわざわざ書かなくてもいいじゃないか…ん？続きがあるな…

《そんな馬鹿な君に伝えたい事があります。今日の放課後に第二

校舎の三階書庫で待ってるから！絶対に来てね！》

第二校舎…だと？俺は第二校舎自体にそうそう行く事がないからな…

ええと…三階に書庫…あつたような気もするな…

しかし何の話だ…特別実験室じゃダメな話なのか？まあ…行けばわかるか…

そして放課後

絵理沙は何時ものように手早く鞆を持つと教室を出て行った。

相変わらず教室を出てゆくのはクラスでトップだ…

クラスメイトに軽い挨拶をする程度で会話などまったくくない…

絵理沙は先に第二校舎に行つて待ってるのか？

仕方がない…俺も行くか…俺が席を立とうとした時、佳奈ちゃんが目の前に走つて来た。

「綾香！」

佳奈ちゃんは相変わらず元気いっぱいだな。

「ねえ！今日一緒に帰らない？」

あちゃ…今日は絵理沙と約束してるからなあ…どうしよう…

折角誘ってくれてるのになあ…でも今日は…また今度ねって言うおうかな…

俺が悩んでいると、教室の後ろから佳奈を呼ぶ声かした。

「佳奈！何してるの？今日は先生に呼ばれてるんじゃないの？佳奈は体育對抗祭の実行委員になっただんでしょ？」

この声は真理子ちゃんだ。

真理子ちゃんの声聞いて佳奈ちゃんのはつとした表情になった。

「あ！そうだった！忘れてた！真理子ありがとー！ごめーん…綾香…また今度ね」

そう言うと佳奈ちゃんは自分の席の戻ってノートを持つと慌てて教室を出て行った。

そうか…そろそろ体育對抗祭の季節か…それにしても佳奈ちゃんが実行委員とか…信じられないな…そんなの興味なさそうなのに…

「まったくね…佳奈はすぐ忘れるんだもん…困っちゃうよね、綾香」

気がつくとも真理子ちゃんが俺の横に立っていた。

「あ、そうだねー困っちゃうよね…はは…でも、佳奈ちゃんって体育對抗祭の実行委員になっただんだ？すごいね…そういうのやりそうに見えないのに」

「え？そんなの佳奈が進んでやるはずないじゃないの…担任の先生にやらされてるのよ…あの子って何もやらないから、それで担任の先生が佳奈を体育對抗祭の実行委員に推薦したのよ」

「ああ…そうなんだ」

そう言えば…綾香って何か委員とかしてるのか？別に綾香も何もしてない気もするんだけどな…言われた事もないし、いいだろ…  
だがよかった…体育對抗祭の委員だなんて、面倒な事を俺に頼ま  
れなくて…

「さて…私も体育對抗祭の事で生徒会に用事があるし、今度落ち着  
いて時間が出来たらみんなと一緒に帰ろうね！綾香」

「あ、うん…またね」

真理子は笑顔で手を振ると、教室を出て行った。

……さて…俺は第二校舎に行こうか…

俺は新校舎から第二校舎へと繋がっている渡り廊下を歩いて寂れ  
た第二校舎に入った。

この校舎は古く、殆どの部屋が既に使われていない。この校舎で  
使われているのは一階にある会議室と二階にある音楽室と視聴覚室  
程度だろうか。

そう言えば二階の空き部屋を文化部の一部が使っているか…

三階にある部屋はすべてが倉庫にしか使われてないはずだ…

俺は二階から三階へとあがる。二階には多少だが生徒もいた、し  
かし三階には人影はまったく見えない…

昼間でも不気味なのに夜にこの校舎に入ったらどれほど恐ろしい  
だろう…

しかし絵理沙は何故こんな場所に俺を呼ぶんだ…



三階の突き当たりの一つ前の部屋のガラス戸に書庫と書いてある張り紙を見つけた。

すっごく怪しい部屋だ…何ていうか…入口のガラス戸が真っ暗だ…という事は中はカーテンが閉まっているか、または物がいっぱい光が差してないという事だな…

俺はこういう場所はあまり好きではない…だ…だが…仕方ない…入ろう…

俺はゆっくりとガラス戸をあけた…

「お、おじやましまーす…」

…俺は何を言ってるんだ…ここは家じゃないだろう…誰も返事する訳ない…

「どうぞー」

え…ちょっと!?!?…誰だ!?!?…これは絵理沙の声だよな…でもどうぞーって…お前の家か…ここは…

「おーい!絵理沙?何処だ?」

部屋の中に入った俺はガラス戸を閉めた。すると部屋の中は予想した通りにほとんど真っ暗になってしまった。ガラス戸から入る僅かな光だけが部屋の中を照らす。

俺は周囲をよく見渡してみたが、殆ど何も見えない状態だ。

「綾香ちゃん、入口から真っ直ぐ行った所の左手に掃除道具入れがあるから、そこの扉をあけてね」

え?また声か?絵理沙は何処にいるんだ!?!?声はするが人影が見

えないぞ…

だが言われる通りに進むしかない…真っ直ぐに行った左に…これか…

薄暗い中に僅かにだがスチール製の掃除道具入れが確認出来る。

俺は言われた通りに古びた掃除道具入れを開いた。

その瞬間…一瞬光に包まれたかと思うと俺は何処かの家の玄関にいる…

何だ！？玄関だ！？？どうなってるんだ！

俺が玄関で混乱していると奥からジャージ姿というラフな格好をした絵理沙が出て来た。

「やっと来た！待ってたよ」

「お、おい！やっと来たって！？絵理沙！ここは何処だ！？それにもう着替えてるのか？早いな…それもジャージとか…」

「え？何処ってここは私の家だよ？それに着替えなんて一瞬で終わるじゃん。ジャージは楽だよ？」

絵理沙は笑顔で答えた。

「い、いや…確か書庫の掃除道具入れだったはずだ…掃除道具入れの中に玄関があるとかありえないだろ！？それに何でお前の家に俺が来ないと行けないんだよ！」

絵理沙は俺が動揺している姿を楽しそうに見ている。

「あはは…とりあえず上がってよ、ちゃんと説明はするから」

俺はおどおどしながら靴を脱いで家の中へと入って行った。

よく見れば普通のマンションっぽい…3LDKくらい広さがあり  
そうだ…

この広さからするとここに絵理沙が一人で暮らしている訳じゃな  
いだろ…

という事は…野木と一緒になのか！？兄弟だから問題ないのか！？  
俺は兄弟であっても野木と一緒にには生活したくはない！

「どうぞ、そのソファアに座って」

リビングには立派なソファアが置いてある。ゆうに5人くらいは  
座れるだろう…

あとでっかい液晶テレビに高そうなテーブル…なんて贅沢な暮ら  
しだ…

俺は部屋を見渡しながらソファアにゆっくりと座った。

ふわ…なんだこの感触は…これが高級ソファアってやつなのか！？  
なんて座り心地の良いソファアなんだ…うらやましい…  
ってそうじゃない！別にお宅拝見じゃないんだ…

「で…絵理沙、さっきの事の説明と何故ここに俺を呼んだのかの説  
明をしてくれ」

「あーちよつと待ってね…」

絵理沙はキッチンに行くと用意してあったのだろうか、ホットコ  
ーヒーとクッキーを俺の前のテーブルに置いた。

絵理沙、俺がコーヒーが好きなのを良く知ってるな…いや、たま  
たまか…

そして絵理沙は自分のマグカップを持ったままで俺の右横に座っ  
た。

「おい、ちょっと待て…なぜ俺の横に座る…」

絵理沙が満面の笑みで俺を見た…やめろその笑顔は…

「ええとね…横に座るのは意味はないよ？座りたかったから座っただけだよ？あーコーヒー飲んでね！クッキーもおいしいよ！」

「でも…ちょっと近すぎないか？」

「え？そうかな？いいじゃないの、別に女の子同士なんだしさ」

確かに見た目は女の子だが…俺の中身が女じゃねー！

「おい！俺は男だ！」

「でも今は女の子だよ」

ああ言えばこう言われる…くそ…ダメだ…言い合いするのも疲れ…取りあえずは先に説明を聞こう…

「わかった…もういい…説明をしてくれ…」

「あはは…はいはい、えつとね…まず、あの掃除道具入れからこのマンションに魔法で繋がってるの」

「おい…何で掃除道具入れからなんだよ…」

「うーん…それは多分…あそこが一番人目に付きづらいから？」

確かに…あの真っ暗な書庫に入って、わざわざ掃除道具入れを開けるやつは居ないよな…

「前にさ、綾香ちゃんの家窓から私とあいつが出て行った事あるでしょ？」

あつた…あのどこでも アミたいなのかと思ったあれだ…

「ああいう感じで、あそこの扉を開けるとここに転送される仕組みなんだよ」

ほう…俺は魔法使いだと知っているから信用するが、普通ならこんな非現実的な話なんて絶対に信じないよな…しかし…あそこを開けるとここにくると言う事は、誰かが間違つて開けるとここに来てしまうという事なのか！？もし、あそこを間違つて他の生徒とかが開けたらどうなるんだ？

「あのね、万が一掃除道具入れを他人が開けたとしても、通れる人を限定してあるから大丈夫なの」

なるほど…って俺が心に思ってた事を読んだのか！？あれ…

「ちなみに、綾香ちゃんはちゃんと通れるようにしてあるから…何時でもこれるよ」

「いや…別に用事はないし…」

「用事なくても何時でも来ていいんだよ？」

待て…本当にウェルカム状態なのかよ！でも野木と一緒に住んで

るんだろ？万が一でも野木が居たら俺は…やっぱり絶対に来ない！

「いや、用事があっても来たくない！」

「ああ、あいつがいるから？大丈夫よ、ここに戻ってくるのは寝るときだけだし」

ん…また俺の考えてる事に対する答え…なんかさつきから心を読まれてないか？これ？

「絵理沙、さつきから俺の心を読んでたりしてないか？」

「え？私は今は魔法を使えないんだよ？だから人の心を読めるはずないじゃないの。というかね、人の心を読める魔法使いつてすごい訳、だから私は魔法が使えたとしても人の心は読めないの。もし私に人の心を読めたら、保健室で綾香ちゃんが思っていた事を先読み出来てたはずでしょ？」

「確かに…でも野木は…何度も俺の心を読んでるぞ…」

「だってあいつだけは…人の心を読めるから…」

何だと？野木だけが人の心を読めるのか…そんなにすごいのかあいつ？

「えっと、話を戻すけど、ここに入れるのは私と…綾香ちゃんかあいつだけなの」

「あいつってやっぱり野木だよな？」

「そつだよ…」

何だろうか…絵理沙は野木の話になるとすごく不機嫌になる…  
兄弟でも不仲なのか？でもそつは見えないんだけどな…

「わかった…で？ここに呼んだ訳は？」

絵理沙は立ち上がるとテレビボードの引き出しの中から透明な水晶玉を取り出した。

水晶玉つて…占いでもしてくれるのであろうか…

「占いじゃないわよ…」

う…心を読まなくてもここまで俺の考えを読まれていると…恐ろしい…

「で…その水晶玉で何をするんだ…」

「何をするって事はないよ、これを持っていたほうが説明しやすいから出しただけよ」

絵理沙は水晶玉をテーブルの上に置くと再び俺の右横に座った。  
それも前よりも近い所に…わざわざ俺の近くに座る必要はないだろ…

俺はあまりの近さに思わず左へと移動した。移動した俺を見た絵理沙が不満そうな表情を浮かべている…

「綾香ちゃん、何で逃げるのよ…」

「俺は逃げてない…ちょっと狭かったから移動しただけだ…」

おい…何で俺が言い訳しないとイケないんだ！

「そ、それはいいだろ？早く説明してくれよ…」

「…はいはい！わかったわよ、説明するね！」

何故に口調まで強くなるんだ…俺は何も悪い事なんかしていないだろ…

「ええと…実はこの水晶の中、中央付近に僅かに灯火が見えるのわかる？」

俺はよく水晶玉を覗き込んだ…なるほど…中心にすごく小さくいが、蠟燭の火のようなものがあるのが見える…

「あの小さいオレンジ色の蠟燭の火みたいなのか？」

「そう、あれよ…このオレンジ色の火が…」

ふと絵理沙の顔を見た、すると絵理沙の表情はいつの間にか真剣な表情になっている。

「生命の灯火よ…」

「え？生命！？って命？そのままか…で？これってまさか？妹の綾香のか！？」

俺はここに絵理沙が呼んだ理由はきつとこの灯火を見せる為で、それは綾香の灯火で、綾香が生きてる事を俺に伝える為なんだらう



と予測した。

「え？ええ、そうよ…」

その予想は見事に的中したらしい。絵理沙は少し不満げだ…

「と…いう事は？綾香は生きてる！？そういう事か！？」

「そ、そうだけど、待ってよ！まずはこの魔法の仕組みから説明させてよ！まったく…順番というものを考えてよね…」

「え…順番って…いや…はい…」

俺は正直そんなのどうでもいいんだけど…

「これは…あいつの魔法で、この水晶玉に生命力を調べたいその対象となる人物の一部を入れればその人物の生命力と状態を判断するというものなの。但し、効果は限定的で、調べられる期間は約30日程度。おまけでもあまりにも水晶から対象となる人物の距離が離れているとダメなの。ちなみにここは埼玉県だからほぼ日本の中心よね、だからここからだとい応日本国内程度なら調べられるわけ」

うーん…あいつって野木だろ…野木の魔法で…この水晶玉に綾香の一部…って！？」

「待て！綾香の一部ってなんだよ…どこでそんなもん？」

「え？前に綾香ちゃんの部屋に遊びに行った時だよ、あいつがいっぱい部屋にあった髪の毛を取ってきてたよ。綾香ちゃん（悟君）のも混じってたけど、それはたぶんあいつが今も大事に持ってると思

「うよ」

げ…何だそれ…やっぱり野木は変人だ…しかし、綾香の髪の毛が欲しいのなら俺に言えばいいのに何故言わないんだ…

「綾香ちゃん、何であの時に俺に言わなかったんだ？とか思ったでしょ…あのね…こっそり取って来たのは…もしも綾香ちゃんの…待って！ややこしいから綾香ちゃん（悟君）は悟君って呼ぶからね、綾香ちゃんっていうのは本物の綾香ちゃんね」

「あ、ああ、わかった」

「もしも水晶玉の話しをして悟君に期待させちゃって、それで水晶玉に綾香ちゃんの生命の灯火が現れなかったら…悟君にどう伝えればいいのかなくなるでしょ？だから…こっそりもって来ちゃったんだ」

「なるほど…そうか…俺に気を使ってくれてたんだ…」

「あいつは変人だけど…でも…一応…だし」

ん？何か言っただけど何だ？聞こえなかったぞ？

「え？野木が何だって？よく聞こえなかった…」

「え、いや、気にしない方がいいと思うよ。ええと…でね、何でだろ…あいつが直接悟君に言えばいいのに、何でか知らないけど私から説明してほしいって」

「なるほど…だから自宅なのか？」

「そうね…それもあるけど、この水晶玉は学校に持っていけないから、だからここに来てもらったの」

「なるほどな…」

「それで、悟君の言う通りだよ…綾香ちゃんは生きてるのよ…」

絵理沙がすごく優しい表情で俺に言った…

「綾香が…生きてる…」

何だろう…絵理沙に綾香が生きてるよって言われた今になってようやく実感が湧いてきた…

そうなんだ…俺は正直ほぼ諦めてたんだ…でも綾香は生きている…生きてるんだ…よかった…本当によかった…

何だ？走馬燈のように妹の事が頭に浮かぶ…いろんな思い出が、綾香の笑顔が思い浮かぶ…ああ…綾香に逢いたいな…

「絵理沙…すまん…嬉しいのに…何でだろう…涙が…くそ…」

何分ほど経ったのだろうか…ふと気がつく俺は声を出して泣いていたみたいだった…

柔らかい感触が俺の顔に…あれ？よく見れば絵理沙が…俺を抱きしめてくれている…

え！？何時の間に！？どうなってるんだ！

「悟君…よかったね…でもね…それは…」

「え…それは…？」

俺は涙を拭うと顔を上げて絵理沙の顔を見た。

「綾香ちゃんが戻って来る可能性もあるって事なのよね…」

そつだ…綾香がどこかで生きてという事は、この世の中には綾香が二人存在しているんだ…という事は…ここに綾香が戻ってきたら…偽物の俺は…

どうすれば良いんだ…戻ってきて欲しいけど…急に戻って来ても困る…

「でもね…悟君…このオレンジの灯火でわかるんだけど、今の綾香ちゃんは日本でもかなり遠い場所に存在していて、そして…」

絵理沙は俺をぎゅっと抱きしめた…

おい！絵理沙！俺をぎゅっと抱きしめるのはやめろ！何かこの柔らかい感触ががが！

何時だ！いつ絵理沙は俺を抱きしめたんだ…綾香の体ってちっちゃいからすごくすっぱりはまってるし！

「お、おい！絵理沙！そう言えば何時から俺を抱いているんだよ！」

「だって…悟君の泣き顔があまりにも可愛すぎて…声を出して泣いた時に…」

「え、絵理沙、もう…いいから…本当！大丈夫！だから離してくれ」

俺は絵理沙に抱きしめられているのが恥ずかしくなって絵理沙か

ら離れた…

「あはは…また泣きたくなったら言うてね。私の胸で泣かせてあげ・る」

「ちょ、ちょっと待て！もうないない！今後はそんな事は無いから大丈夫！」

何だかすつごく動揺してしまつた…恐ろしい…

正気の時にそんな事されたら俺の精神が崩壊する…今の一瞬でも危険だつたのに。

絵理沙は先程の話が続けた。

「綾香ちゃんは…記憶喪失になつてるんと思うの…」

「え？記憶喪失？何でそう思うんだ？」

「ええとね…絶対とは言えないけど、通常の精神力を保つてる健全な人の灯火は赤なの、青だと病で黄色だと危険な状態…例えば怪我とかね、オレンジは特殊な状態で精神的に健全とは判断できない状態…あと灯火も激しく揺れていて心が安定してない…たぶん記憶喪失か又はそれに近い精神状態だろうと思う」

魔法…やっぱり魔法つてすごいな…こんな事までわかるなんて…

「そうか…本当に記憶喪失だから戻つてこないのか…」

「そうね、あの事故からもうすぐ二ヶ月だよな？記憶がちゃんとあれば普通に家まで戻つてくると思うんだよね。あと、前に悟君が言

ったよね？救出された人のリストに入ってた…記憶があれば後から警察にでも名乗り出られるはずだし、多分事故の瞬間から記憶がないと推測されるわ」

確かに絵理沙の言う通りだ…記憶があれば住所も電話番号もわかるだろうし…

「でも、記憶喪失であっても、救出されてたら身元を捜すのが普通じゃないか？」

「それもそうね…それじゃあ…何かがあって救出されなかったけど誰かに助けられた？って事になるのかか？でも何にせよ綾香ちゃんは存在しているし、生きているから！悟君！安心して」

「安心か…あ、その水晶…何処に綾香がいるのかまではわからないのか？」

「うん…そこまでは無理なんだ…」

絵理沙は申し訳なさそうな表情になった…そうか…無理か…

「そうか…でも…ありがとう…絵理沙…本当によかった…今日は最高に良いことが聞けたよ」

「ううん…私は何もしてないよ、あいつが勝手にやってる事の報告だし…あと一つだけ言っておくよ」

「え？なんだ？」

「魔法の水晶玉は…今回だけだから…もうすぐ効果は切れちゃうけ

ど、これってすごい貴重品でそうそうは手に入らないものなんだ…  
ごめんなさい」

そんな高価な物を俺の為に…

「いや…十分すぎるよ、俺には綾香が生きていたっていう事実がわかった事がなによりもよかった事だし、知りたかった事だ…ありがとう」

「あいつにも伝えておくわね…悟君がすごく喜んでいたって…」

何故絵理沙は野木の事をあいつって言うんだろ…野木と一緒に時には兄貴とかお兄ちゃんとか呼んでるんだが…

「そう言えば絵理沙、なんで野木の事をあいつとか言うんだ？」

「ん…別に…あいつだからかな…」

おい…それは答えになってないぞ！

「そっか…」

ふう…そう言えば話に夢中で喉がからからだ…そう言えば…さっき絵理沙が入れてくれたコーヒーがあったな。

俺はさっき絵理沙が入れてくれたコーヒーを一口飲んだ。

「あ、冷めてるでしょ？入れ直すよ？」

絵理沙はソファを立とうとしたが俺は引き留めた。

「いや、いいよいいよ、このコーヒーは冷めてもおいしいんだな？」

「そう？それはあいつが…このコーヒーが多分好きだと思っからって…」

「ぶ！な、何だ？野木がか？」

「うん…」

何だ…野木がなんで俺の好きなコーヒーとか…うわ！ますます気持ち悪い…

だ、だけど…コーヒーは確かにうまいし…もったいないから飲んでおこう…

俺は冷めたコーヒーを一気に飲み干した。

「ふう…：絵理沙、いつ本当の綾香が戻ってくるかはわからない事は変わらないんだよな？よし、俺は早く魔法力を溜める努力をするよ…」

「もし、綾香ちゃんが戻ってきてても…ここにきていいからね…」

「え！？な？何？」

「だって…行くところなくなるでしょ？だからここにきてもいいから…大丈夫よ、こうなったのは私の責任…だから私が貴方を守ってあげる…」

おいおい…ちょっと待て！？ここに一緒に住むという事は…野木も…うわー！考えたたくない…それに絵理沙とも一緒なんだろう？う



わー別の意味で危ない！

責任取ってくれるのはいいんだけど…でも…そういう状況になったら…俺はどうするのかな…い、今は考えるのはやめておこう…

「そ、その時は相談するから」

「うん…相談してね！」

「あと…今すぐには無理だけど…俺が元に戻る魔法力が溜まったら…妹を…綾香を捜しに行きたい…絶対に見つけない…」

「うん、その時は私も手伝うからね…綾香ちゃん…見つけようね」

絵理沙はそう言うと笑顔で俺を見た…なんだこいつ…まるで天使みたいな笑顔しやがって…こう見ると…絵理沙って結構…かわいいじゃないか…

って…何を意識してるんだ！？俺は目を合わせるのも恥ずかしくなっただけに正面を向いてしまった。

「どうしたの？悟君？」

「どうもしてない！そ、そろそろ帰る」

「え？もう帰るの？」

今度はさっきとは一転してすごく寂しそうな表情になったぞ…

「あーあ、残念…私はもうすこし話したかったなあ」

「う…ごめん…また来るから…」

「うん、わかった…気をつけて戻ってね」

「ああ…」

俺は玄関まで行くと、靴を履いた。そして玄関の取っ手に手をかけた所である事を思い出した。

「おい…絵理沙、確認しておく忘れてたが、ここから出ると何処に繋がってるんだ…」

そうだ！俺は書庫からここに来たんだ…ここを出たら書庫なのかそれとも他の場所なのか…かなり重要な事だ！

「え？大丈夫よ、書庫に繋いであるから」

なるほど…じゃあ大丈夫か…ふう…まだ教室に鞆も置いたままだしな…

「あ、そうだ…この前俺の窓から帰ったじゃないか。あれって…まだ繋がってるのか？」

「ああ、あれは一時的だからもう繋がってないよ？」

「そうか…」

よかった…しかし便利だなこれも…魔法ってすごいな…

「絵理沙、今日は本当にありがとうな！じゃあ、また明日！」

「うっん、それじゃあね！悟君、また明日ね！」

俺は玄関扉を開いた。その瞬間、ここに飛ばされた時のように一瞬だが光に包まれた。

そして気がつく俺は書庫に居た。後ろを振り返るとそこには掃除道具入れが…

しかし…まさかここから毎日学校に通ってるのか？わかんねーな…聞き忘れた…  
そうだとしたら教室まで三分で行けるぞ！？いいな…

しかし、野木の馬鹿もすこしはいいところあるんだな…綾香の消息を捜してくれてたなんて…本当に最近の良い事が結構いっぱいだよ！？綾香も生きてるし、俺は一年で元に戻れるし、茜ちゃんは俺の事を好きだと言ってってくれてるし、真理子ちゃんも佳奈ちゃんもいい友達だしな…俺はそんな事を考えながら何の躊躇もなく廊下へと出た。

ドン！書庫を出た瞬間に右から来た何か俺にぶつかってきた！俺はいきなりの事もあって、受け身も出来ずに勢いよく廊下に転がった。

「痛い…」

俺はすぐにぶつかって来た奴を見た…その瞬間に固まった…

「ひ、姫宮綾香！？何でここにいるんだ！？」

俺にぶつかってきたのは大二郎だった…

「だ、大二郎！？じゃなくなつて…清水先輩！？」

ん？何だ？どうした？よく見れば大二郎の顔が赤いぞ…何か怪しい…

俺は大二郎の視線を追って見た…そこは…お、俺のスカート…な！うわ！捲れてるじゃないか！という事は俺の…

大二郎め！何を見てるんだ！俺は捲れたスカート慌てて直した。

「ば！馬鹿！大二郎のえっち！見るな！」

あれ、自分の顔が熱い…まさか赤面してる！？

な、何で俺がスカートの中を見られて赤面して、それも大二郎にえっちとか言ってるんだ！？これじゃ女みたいじゃないか！

やばい…女を演じた期間が長すぎてちよっと思考が女になってきているかもしれない…

ダメだぞ！悟！男を維持して女っぽくだ…

「み、見てない！俺は何も見えてないぞ！」

大二郎の顔も真っ赤だぞ…絶対に見ただろ！！よーし…

「せ、先輩…私の…今日の下着の色って似合ってる？」

言葉の尻を仕掛けてみてやる！どうだ！！

「お、おお…俺は…白は清潔感もあって似合ってる…うわ！ああ！しまった！」

引つかかった！大二郎…やっぱり見てたじゃないか…

というか何だ？こいつすごく面白いな…すごい単純すぎるし。

こつという奴はころっと悪い女に騙されるんだろつな…かわいそう

になぁ…

って！違うだろ！やばい…まただ…俺も男だ…何を大二郎をからかって面白いとか？！

やばい…これはやばい…落ち着け…よし…まずは立ち上がれ悟よ！

俺はスカートに付いたほこりをはたいて立ち上がった。

「清水先輩！もう二度と見ないで下さいね！」

「べ、別に故意でやったんじゃない…す、すまん…気をつける」

確かに故意ではなく事故だな、だから許してやってるんだ。

それにしても大二郎が素直に謝ってきたぞ？前とは全然違うな…しかし大二郎のやつ…ここで何をしてたんだ？

「で？清水先輩はここで何をしてたんですか？」

「あ、俺は…今日は武道館が剣道の試合でつかえねーから…ここで自主トレしてたんだ」

何だと！あの大二郎が自主トレだと！？

「こ、こんな所で自主トレですか！？」

「ああ、ここは人がいねーしな、少々走っても先公にもばれないしな、丁度いいんだ」

なるほど…普通はここに先生や生徒がいるなんて無いからな…

「そんなんですか、それじゃ私は行くから…」

「ちょっと待て！姫宮綾香！」

「な、何ですか？私はあまり時間が…」

俺は家に早く帰りたいんだよ！

「ひ、姫宮綾香、ここで何をしてたんだ？書庫の中から出てくるなんて…」

「別に、何もしてないです！荷物を置きに来ただけです！もういいですか？」

「あ、あと一つだけだ！」

「はい！？何ですか！？？」

「お、俺は絶対に…絶対に姫宮綾香に相応しい男になる！練習して10月の大会で優勝出来るようにがんばるからな！言いたいのはそれだけだ！」

げ！そ、そうだ…大会に優勝したら…俺と…うわああああ！

ここであれは嘘だって言えばいいのだろうが…

でも…茜ちゃんが言ったにせよ一応は約束だよな…今更嘘でしたとか…ダメだよな…

くそ…とりあえずここから逃げよう…

「……………」

俺は無言で大二郎の横を過ぎて階段の方向へと歩いた。  
背中越しに大二郎の声が聞こえる。

「姫宮綾香！本気だからな！」

くそ…恥ずかしい……………馬鹿大二郎が…

俺は何故か大二郎が気になって振り返った。

大二郎は既に一番突き当たりで腕立てを始めている。

俺は…結構あいつとの付き合いも長い…でも、あいつがこんなに一生懸命に物事に取り組んでる所見た事がない。それほどまでに…綾香が好きなのか？

いや…あいつが本当に好きなのは妹の綾香じゃない…綾香の格好をしている俺…

でもすまん…大二郎の期待には添えない…俺は男なんだよ…

そう考えながら俺は懸命にトレーニングをしている大二郎をしばらく見ていた。

がんばってる大二郎…真剣な顔をしてるとあいつも結構いい男じゃないか…

あのままがんばればきつと別の彼女だって出来るだろうに…

「おい！清水大二郎！」

腕立てをしていた大二郎は俺の声に反応して腕立てをやめた。そしてこちらを見た。

「大会…がんばれよ！」

そう言った瞬間に俺は急いで階段を下りていった。

がんばれよ！って言った後…大二郎がすごく笑顔になってたよ  
うな気もする…

待てよ…つい男として応援するつもりで言ったが…もしかして言  
わない方がよかったかも知れない？今の俺は綾香なんだよな…考え  
ろ！俺が茜ちゃんにがんばれって言われると…俺は？絶対になんか  
る！だよな…やばい…火に油を注いだかもしれん…まさか…優勝  
はしないだろな！？

あーあ…綾香が生きてるといいことがあったばかりで、俺は  
ちよつと気分が良かったのかもしれない…

巨大な不発弾を何時爆発するかわからない本当の爆弾にしちゃっ  
たかな…

ふう…俺は深い溜息をつきながら教室へ入った。

もう既に教室には誰もいない…真理子ちゃんの鞆もない…

俺は帰り支度をして家へと帰宅した。

なんか今日は複雑な気持ちだな…

続く



## 第8話 激突！体育対抗祭 前編

来週ついにやって来る…

超面倒くさい行事…そう…体育対抗祭だ…

この彩北高校では九月末に全校生徒が参加する体育対抗祭というのをやる。

これは普通の運動会とは違う。競技を順番に行って点数をつけるというものではない。

この学校には各学年にA・B・C・Dの四クラスがある。

それを縦割にしてクラスを引っ付けて、一年・二年・三年のA組で赤という感じにする。

そして何種類もあるスポーツ競技の中から各クラスで代表者を決めて四色で対抗戦をするというものだ。

たとえば野球だと、一年から四人・二年から四人・三年から四人で十二人を出す。

その十二人で協力して他の組を倒すのだ。但し、その競技の部活動をしている人間は半数しか参加出来ない。野球の場合だと野球部は学年で四人のうち二人はOKという事なのだ。よってだいたいの人が部活をしている競技の代表になっている。

ちなみにこの体育対抗祭の締め括りは四チーム対抗の騎馬戦だ…

高校にもなつて騎馬戦とか…まったく…

俺はスポーツは嫌いじゃないが、こういうイベント的なものは嫌いだ。

悟だつた3年までの間にこの体育対抗祭に参加などした事はない！

しかし…今年は綾香の姿での参加…さすがにさぼる訳にもいかな  
い…

「ええと…各競技の参加者なんですが、現在はこのようなになってます。何がご意見はありますか？」

学級委員長の真理子は各競技に参加する選手の選出をしている。隣りでは実行委員の佳奈が選手の推薦をしている。推薦というのは各競技に必ずしもやりたい人間が出てくる訳ではない。その場合には佳奈は強制的に推薦が出来るのだ。

体育對抗祭実行委員の推薦はよほどの事が無い限りは断れない。推薦されたくない人は先にやりたい競技を言っておけば大丈夫だ。

「皆さん良いようなので、これでいきますね」

「では、女子バスケットボールの選手ですが…やりたい方はいますか？」

バスケットか…俺は身長がなさすぎて無理だな…  
それにしても人気ないのか？誰も手を上げないぞ…

「誰もいませんか？」

真理子ちゃんは教室中を見渡している。

「誰も居ないようなので、杉戸さん、推薦をお願いします」

佳奈ちゃんは今までの選抜されたメンバー表と生徒のリストを見

比べている。

そしてしばらく考えた後に推薦する人を言った。

「えっと、女子バスケットは野木さんでお願いしまーす！」

「え！？」

絵理沙が思わず声を上げた。

「野木さんは他の競技にも出てないし、部活もやってないよねー？  
いいよね？私が参加するアーチエリーはやってくれないでしょ？私  
は本当はアーチエリーなんてやりたくないのに…交換してくれるな  
ら私がバスケットしてもいいよ！」

そう言えばさっきアーチエリーの選手を一人決めるのが大変だっ  
たんだよな…

推薦しても全員が嫌だっていうしな…

生徒同士が喧嘩になりそうになったから仕方なく佳奈ちゃんがや  
る事になったんだ。

「え、えっと…あ、そうだ！姫宮さんとかは？」

絵理沙は咄嗟に俺の名前を言った。

おい…絵理沙…何で俺なんだ…

「え？あや…じゃない…姫宮さんは正直ちっこすぎ！ダメです」

う…っ…すごいストレートに言われた…

「うーん…はい…わかりました…やります…」

絵理沙は諦めたのかOKをした。

「では女子バスケットは野木さんで決定しまーす！」

「では…」

それから後も何競技かの代表を決めてようやっと全競技の代表が決定した。

「以上で終了です！やった！終わった！みんなおつかれー」

ふう… やっと終わったか…

「ねえ、綾香ちゃんは結局何も参加しないの？」

絵理沙がなんで俺は参加しないのかと言わんばかりの表情で俺に聞いてきた。

何故参加しないのか？それは本物の綾香は正直スポーツは得意ではないからだ。

それはクラスのみんなが周知な事なので、今回も特にどのスポーツへの推薦もなく補欠で落ち着いている。

「え？だって…私は運動が苦手だし…」

「運動が苦手ねえ…へえ…そっか…」

絵理沙は疑いの眼差しで俺を見ている…やめろ！その目は！

「あ！そうだ！再度確認するけど、姫宮さん、一ノ割さん、新田さ

ん、以上の三人は補欠だからね！競技に欠員が出た場合はよろしくね！」

ちなみに補欠は名前の通りで補欠だ。ただ、どの競技であっても欠員が出た場合には補欠から競技参加者を出さないといけない。補欠以外からは補充が出来ない仕組みなのだ。なので三人の補欠うちの最低一人は運動センスが良い人を用意しておく事があたり前になっている。

今回の補欠の一ノ割さんも新田さんも運動が出来る人だ。という事で、俺の出番などない予定だ。

「はい、ではこれで終わりますね」

真理子ちゃんの号令でHRが終わった。

放課後…

「綾香ちゃん」

鞆を持って廊下を歩いていると後ろから絵理沙が声をかけてきた。珍しい、クラストップで帰宅する絵理沙が何の用事だ？

「何ですか？絵理沙さん」

流石に人前だと俺は絵理沙は呼び捨てにはしない。そこらはちゃんと考えているのだ！

「綾香ちゃん、ちょっと時間あるかな？あるよね！」

そう言うと絵理沙は躊躇もなく俺の手を取った。

「え！？何！？」

俺は絵理沙に手を引つ張られ半分強引に特別実験室に連れていかれた。

特別実験室…よく考えればこの教室に入るのは実に久しぶりだな…正直あまり入りたくはないのだが…でも野木がいるのならこの前の妹の件のお礼をまだしてないし…仕方ないか…俺は絵理沙と一緒に中に入った。

「お！綾香君！なんだい？僕に逢いに来たのかい？」

馬鹿の野木がすぐに反応してるぞ…

「おい、何で俺がお前に逢いにくるんだよ」

「冷たいな…僕は何時でも君を待っているのに」

うわ…きもちわるいな…待つなよ…

「待つな、待たなくていい、わかったか？」

「よし、じゃあこうしよう！君は何時でもここに来てもいいから！」

来ない…絶対に来ない…来たくない…

「いや、それもいいから…」

野木はすごく残念そうな表情で俺を見ている。

仕方ないだろ？何も無いのに野木に逢いにくるとか…恐ろしい…

あ、そうだ…妹の件はお礼を言っておかないとな…

「そうだ…野木…この前の妹の件…本当にうれしかったよ…ありがとう…」

「ああ、あれか…絵理沙が君（悟）を君の妹の姫宮綾香と間違って生き返らせてしまったら？君を元の悟君に戻す前に本物の姫宮綾香が生きているかは確認する必要があったからな…それで喜んで貰えたのであれば僕はすごく嬉しいよ。やった甲斐があったというものだ」

おや…普通の反応だな…いつもこうならいいんだが。

「本当にありがとう…水晶玉だって高価らしいじゃないか…」

「ああ、大丈夫だよ、代金は綾香君の体で払って貰えればね…ふふ」

え！？冗談か？……………いや…そのいやらしい両手の動きは…

こいつマジで体で払えとか思ってるのか！？ありえる…野木ならありえるぞ。

くそ…やっぱりそういう奴だったのか！

「ちょっと待て！おい！こら野木！何だそれは！代金請求されるのかよ！それも体でって何だよ！いやらしい！変態！すげべ！」

俺はその時に野木の視線が俺の胸にきている事に気が付いた。俺

は咄嗟に両手で両胸を隠した…確かこのシチュエーションは前にもあつたな…

「こら！どこ見てるんだよ！見るな！」

一瞬でも妹を捜してくれる良い奴だと思つた俺が馬鹿だつた…

「ん？いや、久々に綾香君に逢つたような気がしたからさ、君のこ指摘通り流石に直接触ると駄目だから観察だけでも思つてね。しかし…相変わらず成長してないようだね…それに何だい？そんな女らしい仕草は…やっぱり女の子になりたいのかい？」

「馬鹿か！俺は男だ！誰が女になりたんだ！男に戻りたいんだ！」

俺が野木に向かつて怒鳴っていると絵理沙はゆっくりと野木の方へと歩いて行つた。

「お・に・い・ちゃ・ん…」

え…何…この恐ろしい声…え、絵理沙！？

絵理沙は野木の目の前に立つと右拳を振るわせて野木を睨んだ…野木はびくりとして怪しい動きをさせていた両手を下げる。

「……………すべて冗談だよ綾香君…もちろん代金なんていらぬよ、はは…」

野木…お前つて奴は…兄貴なのになんでこんなに妹に弱いんだよ…

「前にも言ったよね…変な事はしないでねって…じゃないと…わか  
つてる？」



「わ、わかつてる…」

野木は怯えるように部屋の隅へと下がって行った。  
まあこれでしばらくは大人しくなるかな…

「あ、そうだ…絵理沙？話って何だ？」

ここには絵理沙の話を聞きに来たんだ。すっかり忘れてた…

「ああ、話ね…綾香ちゃん、ソファーに座ろうか…」

俺は実験室の中央にあるソファーに座った。

あれ？今日の絵理沙は俺の正面に座ったぞ…横じゃないのか…  
って何だ？別に正面でもいいじゃないか…

「綾香ちゃん、えっとね、特にすごい用事でもないんだけど…」

「え？じゃあなんでこんな場所に連れてくるんだ？」

「えっと…だって、『絵理沙さん』とかそういう呼ばれ方は嫌だし、  
女の子口調は綾香ちゃんには似合わないし…あと…教室だとゆっく  
り話せないし…」

うーむ…確かに女の子の口調は俺も好きじゃない、というか自分で話  
してて気持ちわるいと思う事すらある…

「教室でゆっくり話せないのはわかるが、俺は今綾香なんだぞ？い  
くら女の子口調が嫌でも男口調で話しは出来ないだろ」

「それはそうだけど…」

カチャ…何だ？俺の目の前のテーブルの上には突然コーヒーとケーキが…

見上げると野木が笑顔で俺を見ている…

「綾香君、さつきは悪かったね。このケーキはお詫びだから、さあ食べてよ！飲み物は確かコーヒーが好きだったよね？」

「え？ああ、コーヒー…好きだけど…」

絵理沙の家に遊びに行った時に、野木が俺がコーヒー好きだって教えたとか…

確かそれっぽい事を言ってたよな…

「おい野木、何で俺がコーヒー好きだって知ってるんだよ」

「ん？ああ、それは君とすれ違う時とかにすこしづつ心を読んだりしててね！あはは！君の趣味とか好みとかに興味があるからさ」

そういう事か…こいつは影のストーカーだったのか…

「野木い！お前はストーカーか！何ですれ違いの時にまで俺の心を読む！」

「え？いいじゃないか…僕と君との仲なんだし…ね？綾香君…」

「ぐぶ！鈍い音が聞こえたかと思うと絵理沙の右拳が野木のみぞおちに…」

野木は前のめりになり苦痛の表情を浮かべている。

「お兄ちゃん…言ったよね…変な事はするなって！」

ドガ！再び鈍い音が…絵理沙のとどめの左アッパーが決まったら  
しい…

野木は空中をきりもみしながら舞っている…

「ふ…え、絵理沙…」

ドサ…痛そうなお音がした。床に横たわった野木は気を失っている…  
さつきもそうだけど、すっげーな…絵理沙…って…

「まったく！何をやってるんだか！いつつもいつつも…あ…」

俺が絵理沙をきよんとした表情で見ていると、絵理沙と目が合  
った。

絵理沙は振り上げた左拳を恥ずかしそうに仕舞った。

「あ、ごめんねーあはは…この変態兄貴は私が監視するって言った  
のにねーあはは…」

やっぱり絵理沙は野木には遠慮しない…というかいつもすっごい  
行動に出る…

俺は助かるんだけど…不思議な兄弟だな…

「え、えつと…で…何の話だっけ…絵理沙」

「いや！綾香ちゃん！あれだよ！私って普段は結構大人しい方なん  
だよ？マンションでは大人しかったでしょ？あれがいつもの私なん  
だよ！？」

何だ…どうしたんだ？俺の話聞いてないのか？

一生懸命に自己アピールしてるし…別にそんな事は言わなくてもいいのに…

俺はさっきの行動は野木に対しての行動であって、いつも絵理沙があんな事をするとか別に思っていないのにな。

「おい、俺はそんな事は聞いてないぞ？で、何の話だっけ…」

絵理沙ははつとした表情で俺に言った。

「え！あ！ごめん…どうしたんだろ私…えっと…話ね、話っと」

「あ、あれよ！今度の体育對抗祭は気をつけてね」

「え？それってどういう事だ？」

「えっと…今の綾香ちゃんの運動能力の基本性能は悟君がベースなの、だから男子まではいかなくても普通の女子よりはかなり運動も出来るはずなんだよね。ああ、そっか悟君って空手とかやってたからもしかすると下手な男子よりもずっと運動能力があるかも…」

「だから？俺にあまり本気になるなって事か？」

「まあ…そっね…」

「大丈夫だよ、俺は補欠だし、やる気なんてまったくくないから」

「そっか！それだといいいんだけどね…」

「でも、俺が活躍したら何か問題あるのか？」

「うーん…いや…別に何もないけど…今でもクラスの中の数人は綾香ちゃんも昔とは変わったって思ってる人がいるでしょ？運動も今までの綾香ちゃんとあまりにも違ったらおかしいって思う人もいっぱい出てくるのかなって…そうしたらこれから先、楽しく生活出来なくなっちゃうかもしれないでしょ？」

なるほど…絵理沙の言う事も一理あるな…

「確かに…綾香が前と変わったって思ってる子はいるみたいだしな」

「うん、もし生活環境が悪くなると魔法力も溜まりづらくなるから

…」

「ああ、そうだな…楽しく生活をしないといけないんだもん…納得」

「そ、それだけだよ…」

「わかった、注意するよ」

そうは言ったが、俺はこれまでに数度ほど素に戻った事がある…頭に血が上ると我を忘れてしまうから…性格は直せないし、真面目に注意しないとそのうちとんでもない事になりかねない…

「それじゃ、もういいのか？」

「あ、うん」

俺は席を立とうとしたが目の前に置いてあるケーキとコーヒーに

目がいった。

実は俺はケーキが大好きだ…

野木の野郎はこういう事もきっちりサーチしてやがるんだな…  
まったくもって変態だ…

あれ…これって…駅前のあのおいしいケーキ屋のだよな…

……………もつたいない…

「絵理沙」

「え？何？」

「このケーキとコーヒーって毒とか入ってないよな？」

「これに？ちよつと待ってね」

そう言うつと絵理沙はコーヒーを一口飲みケーキを一口食べた。つ  
て！何！毒味！？

「あー大丈夫みたいよ」

おい…もし本当に毒が入ってたらどうするんだよ…まったく…

「そ、そうか…」

「食べれば？綾香ちゃん、毒は入ってないよ、大丈夫だから」

これって絵理沙の使ったフォークだよな…あと絵理沙が飲んだコ  
ーヒーを…

おい…これって…かかか…かん…かんせつ…

「どうしたの？綾香ちゃん？顔が赤いけど？」

絵理沙は俺の目を見た。俺はつい目を逸らしてしまった！

「ああ！ぷぷぷ…ははは」

絵理沙は俺の考えを察したのかいきなり大笑いした。

「な、何だよ！もういい！いらない！もう行く」

「ちょっと待つてよ！大丈夫だよ」

絵理沙はそう言うのと奥の野木専用と書いてある木製の引き出しからフォークを持ってきた。そして自分が使ったフォークを新しいフォークにかえた。

「これでいい？コーヒーは私が飲んだ場所で飲まなきゃいいでしょう？」

うーむ…俺の考える事って単純すぎるのか、また絵理沙にばれた。しかし、ここまでやってくれてやっぱりいらない！とも言いつらないな…

「…まあ…そうだな…ひ、一口だけ…食べてみる」

そう言うって俺はケーキを一口食べた…

う…うまい…くそう…野木め！このケーキの選定は褒めてやろう…

結局俺はケーキを全部食べてコーヒーを全部飲んだ…

「…どう？おいしいかった？」

絵理沙がいつものやさしい笑顔で俺を見ている…

「あ、うん…おいしかった…」

絵理沙…俺が食べるのを見てて何がそんなに楽しいんだろ…  
そんなに笑顔で俺を見なくてもいいのに…

いつもそうだよな…人事なのにそれほど嬉しい事なのか？

「綾香ちゃん、あいつが起きる前に早く出たほうがいいよ」

「あ、ああ…そうだな…それじゃ」

まあいいか…よし、野木が起きる前にここを出よう。

俺は野木が起きる前に実験室を後にした。

そしてついにやってきた！  
体育對抗祭の日！

しかし俺は補欠！よって何もする事がない！やったぜ自由だ！

でも一日中遊んでる訳にもいかないしな…どうしようかな…

バレーボールの選手の茜ちゃんを応援するか…テニスの真理子ちゃんか…それともアーチェリーの佳奈ちゃんか…ってなんでこの学校アーチェリーとかあるんだ？

何？オリンピック競技だから？ふーん…でもフェンシングがない



ぞ！

え？そんな事は気にするな？って俺は誰と話しをしてるんだ…怪しいぞ俺…

しかし…佳奈ちゃんって…アーチエリーできんの！？まったく想像できないぞ。

まあ仕方ないよな…実行委員だからやらなきゃいけないようになったんだし。

うーん…そうだな…応援するなら…やっぱり茜ちゃんだよな！よし…茜ちゃんを応援に行こう。

俺はバレーボールの試合が行われる予定の体育館へと移動した。

正面玄関から体育館へと入るとそこには絵理沙が…

絵理沙は俺に気がついたらしく嬉しそうな表情で俺の所まで来た。

「あ、綾香ちゃん！応援にきてくれたの？」

応援って…そういえば俺は絵理沙の事をすっかり忘れた…絵理沙って何の競技だっけ…

「え…あ…えっと」

「むーあーそうか…私じゃなくなつて越谷さん（茜ちゃん）の応援なのね」

絵理沙はすっごく不満そうな顔で俺を睨んだ。

というか…俺が茜ちゃんの所に来たとか何でわかるんだ！？

やっぱり野木の情報だよな…あいつめ…

「え、えっと…絵理沙さんってなんの競技だっけ？」

「え？私が出る競技すら覚えてないの！？ひどいよ…」

やばい…絵理沙が本当に寂しそうな顔になったぞ…

えっと何だっけ…えっと…そ、そうだ！思い出した！バスケットボールだ！

「い、いや！忘れてないよ！そう！バスケットボールでしょ！」

「ふん…どうせ今思い出したんでしょ？忘れるとか最悪だよね！まあいいわよ…ちなみに私達の試合が終わってからバレーの試合だからね、先に私の試合をみてよね！あと、ちゃんと応援するんだぞ！」

そう言うつと絵理沙はバスケットコートの中に入って行った。

うーむ…仕方ない…どうせバスケットが終わらないとバレーが始まらないし、絵理沙も応援するか…

俺はバスケットコートの横に座った。

しかし…絵理沙はバスケットボールなんて出来るのか？あいつ魔法使いだろ？魔法の世界にもバスケットボールとかあるのか？

俺のイメージだと魔法を使ったスポーツとか、そう！あのハリータターのあのなんだろう幕にのってやるのとか！ああいうのが魔法世界のスポーツじゃないのか？違うか？

「あ！綾香！何してるのー？」

俺がバスケットコート横の横に座って変な事を考えていたら、そこに茜ちゃんがやってきた。

「あ！茜ちゃん！バレーの試合の応援に来たよ！」

「わー！ありがとう綾香！今、B組（白）はちよつと他の競技で負けるから…このバスケットの試合とバレーは勝たないとね…」

そう言つと茜ちゃんは俺の横に座つた。

「あ、うん、そうだよね」

俺は順位なんてまったく気にしてないんだけどな…

「私の出るバレーの試合はこの後だから、綾香は野木さんが出るバスケツトボールも応援するんでしょ？」

「え？あ、うん…応援するよ」

別に絵理沙が出るからつて事じゃないんだけどなあ…

「ねえ綾香、野木さんつて運動とかどうなんだろ？バスケツトボール得意なのかな？」

「え？何でそんな事を私に聞くの？」

「だつて綾香は野木さんと仲良しでしょ」

え…そういう風に見えるのか？俺と絵理沙つて…

「ま、まあ…席が隣りだからね…すこし話すくらいだよ」

「ふーん…そうなの？野木さんつてクラスの人とあまり話さないし…唯一話しているのつて綾香くらいでしょ？横から見ててもすつごく仲よさそうだし…で？どうなの？知ってる？」

うーん…どうなんだろうな？正直、俺は絵理沙が運動している姿を見たことはない。

最近の体育も各競技の練習で俺はまったく見てない…正直わからないぞ…

俺もどうなんだろうって思ってるくらいだしな…

「ごめん…どうなんだろうね…私もわからないんだ…」

「そっかー、でも野木さんって運動出来そうだし、きっとがんばってくれるよね！あ！試合が始まるよ」

ピー！バスケットの試合が始まった…

ちなみに体育對抗祭は通常40分の試合が半分の20分になる。

試合が始まってびっくりだった…

「すっごいね…野木さん…」

「うん…」

茜ちゃんも俺も絵理沙に釘付けだった…

絵理沙のセンターライン付近からの綺麗な三ポイントシュート…

高校生とは思えない俊敏な動き…ディフェンスも絵理沙を止められない。

正直かなり一方的な試合運びでその試合はB組（白）の勝利で終わった。

「綾香…すごかったね…野木さん…」

「うん…すごかったね…絵理沙さんがあんなに上手いなってね…」

試合が終わり絵理沙が俺に気がついて笑顔で走って来た。

「綾香ちゃん！どうだった？私がんばってたでしょー」

「あ、うん…すごかったよ…」

「ふう…暑いなー…運動した後だからなー」

そう言つと絵理沙は俺の前でいきなりパタパタと体操着の裾を持つて扇ぎだした…

おい…お腹が見えるぞ…

「え、絵理沙さん…暑くつても…ここで扇がなくなつても…ほら…お腹見えるよ…」

「え？何？別に男がいる訳でもないし、見えてもいいでしょ？」

そう言つと今度は俺の前で前屈みになった…

そして体操服の襟を持つとわざとらしく引つ張つて中を覗く…

「あーいっぱい汗かいちゃてるし！下着までびっしょりだ…綾香ちゃん見る？」

ちよつと待て！何で俺が見るとか…ない！ないだろう！俺は思わず目を逸らした。

「い、いや…いいよ…そ、れより早く汗を拭いたほうがいいよ…」

くそう…絵理沙め…絶対に俺に対する嫌がらせだろ！

「ふふ…綾香ちゃんってかわいいね」

絵理沙は楽しげな顔で俺を見ている…やっぱりこいつ楽しんでるな…

「やっぱり綾香と野木さんと仲良しよねえ…」

茜ちゃんは勝手に納得している…っていうか誤解してるぞ！

これは仲良くしてるんじゃないかって絵理沙から嫌がらせを受けてるんだ…

「あ！そうだ！野木さん！さっきの試合！すごかったー！野木さんって頭もいいのに運動センスも抜群なんだね！」

茜ちゃんは嬉しそうそう言いながら絵理沙の手を握った。

「え…そうかな？こ、越谷さんありがとう…」

絵理沙は茜ちゃんの予想外の行動にちょっと焦っているようだ。

「野木さんはバスケットボールって前からやってたの？」

「え？ううん…やってないよ…」

「えー！やってなくてあの動きが出来るの！？やっぱりすごい！」

「そ、そうかな？」

「あの！野木さんって部活とか入ってるの？」

「え…別に…入っていないけど？」

「じゃあ！バレー部に入らない？野木さんだったらきっと運動センスいいし！絶対にバレーも出来ると思うよ！」

な、何だ！？いきなり茜ちゃんが勧誘活動を始めたぞ…

「え…でも私は…部活とか…あまり…」

「もったいないよ！野木さんほどの運動センスがあれば本当に一年生でレギュラーだってなれるかもしれないのに！」

「あ…そ、そうかな…」

あの絵理沙が押されてるし、あのおどおどした表情がすごく面白いな。

しかし、茜ちゃんってすごいな…

「おーい！あかねー！バレーの試合はじまるよー」

どうやら次のバレーの試合の準備が出来たらしい。

「あ…じゃあ…野木さん！考えておいてね！綾香！私もがんばってくるね！」

そう言って茜ちゃんは準備が整ったバレーコートに走って行った。茜ちゃんが立ち去ると絵理沙はほっとした表情で俺を見た。

「あーびつくりした…ねえ…綾香ちゃん…越谷さんって…あんな子だったの？」

「うー…うーん…今日はちょっといつもより元気かも…」

「そっか…綾香ちゃんはその子の事がねえ…なるほどね…」

突然何を言い出すんだ絵理沙は！？それもこんな場所で。

「絵理沙、ちよ、今その話は…」

「はは…そうね、よし！私も越谷さんを応援しよう」と

俺と絵理沙の二人はバレーの試合が始まるのを待った…

そしてしばらくして試合開始の時間が来た。

しかしここで大問題が発生した！！

続く



## 第9話 激突！体育對抗祭 中編

B組（白）のバレーメンバーが一人集まらないので心配をしていたら、なんと階段で転んで怪我をして保険室へ運ばれていたらしい…バレーは六人しか選手が選ばれていない。だから一人でも欠けると試合が出来ない。

もしも試合が不可能な場合はバレーに限らず相手の不戦勝になる。B組（白）のバレーの代表選手は急遽バレーの出来る二年生の補欠を捜した。しかし補欠の人員が見つからない…仕方ないので三年生の補欠を捜すも見つからない…

先生達も焦りだした様子で、だんだんと体育館内が騒がしくなってきた。

どうやら試合を早く開始しないと今日中に全試合が終わらないらしい。

だからなのか先生はあと三分で代わりの選手を見つけるとか言っている…

三分って…インスタントラーメンじゃないんだし…

うーん…補欠か…って！そうだ！しまった！俺は補欠要員だ！

ここに居るのがばれたらやばいぞ…よしここは取りあえず…逃げよう…

折角補欠になって体育對抗祭に参加しなくてもいいと思ったのに、ここで見つかったら強制参加になってしまう可能性がある…

俺ははゆっくりと立ち上がった。

「あれ？綾香ちゃんどうしたの？何処か行くの？」

げ…そうだ絵理沙が横に居たんだ…くそ、こんな所で俺の名前を

呼ぶな！

俺が補欠だつてばれたらどうするんだ！と思っ

「綾香あ！」

茜ちゃんが息を切らしながら俺の所に向かつて走つて来た。

うわ！茜ちゃんだ…やばい…もしかして…

「はあはあ…あ、綾香つて確か補欠だよね…」

やっぱり…確かに俺は補欠だよ…

「う、うん…そうかも…」

「先生！見つけましたー！補欠要員です！一年生でもいいですかー」

うわ！ちょっと待って！

「あ、茜ちゃん！まだ私やるつて言つてないのに！？それに私バレーとか…」

「ダメ！綾香しかいないんだもん！来て！」

茜ちゃんは俺の手を持つと強引に引つ張つた。

横では絵理沙が苦笑しながら俺を見ている…

「あは…そつか…そうだったよね…仕方ないよね、綾香ちゃん行つてらっしゃい…がんばってね…」

絵理沙…今頃気がついても遅いよ…

俺は結局は茜ちゃんに強引にコートまで連れて行かれてしまった…

仕方ないな…ここまで来たらやるしかないか…

で…こつちのチーム構成は三年生が2人、二年生が一人、一年生が私を入れて三人か…

ん？一番背の高い三年生の女子が俺の事を見てるぞ…この子は三年B組だよな？B組にこんな子いたっけ…覚えてないな…

それにしてもでかいな…身長は180近いし、体格もすごいいい…

筋肉質の体つきで褐色の肌がすごく健康そうなイメージだし…

髪はすごく短くしていて、男性物の服でも似合いそうな感じだな。

「ねえ茜、この子…バレー出来るの？」

その三年生が心配そうに俺を見ているぞ。

うーむ…そりゃこんなに身長が小さくて小柄だとバレーが出来るのか不安だよな…

「あ、綾香は大丈夫…だと思えます…多分…」

多分って…茜ちゃんもすごく自信がなさそうだ…

すると別の三年生の女子が話しを始めた。

「そうだ、今さっき聞いたんだけど、B組（白）はさっきバスケット勝ったから最下位から三位まで順位あがってるって…今は二位との差が殆どないから、ここでバレーが勝てば二位になる…優勝も見えるかもよ」

「そうか…それじゃここは絶対に勝たないとな…勝つよ！みんな！」

バレー部の三年生の女子がみんなに向かって檄を入れた。

すると何故か、全員が一斉に俺を見る…おいおい…

「よし、取りあえずは五人だと思ってがんばろう…こっちは三人がバレー部だからなんとかいけるかもしれない…」

おい…こら！その言い方ってまさか俺は戦力に入っていないのか？

「ごめんね…綾香…私もフォロースするからがんばろうね…」

茜ちゃんが小声で俺に呟いた…茜ちゃんまで…

よし…こうなったら俺もがんばって…って…まてよ…

絵理沙と話したんだよな…あまり目立つなって…

うーむ…そ、そこそこがんばろう…

ピー！試合が始まった。

体育対抗祭でのバレーは普通の試合より短く3セットマッチで2セット先に取った方が勝ちになる。

ちなみに俺はバレーボールの試合の経験は殆どない！だから試合の最初の方は体育で習った基礎程度のレベルのレーシーブやトスで対応していた。

しかし思った以上に動けるな…体が軽いし小回りが効く…

やっぱりスポーツは楽しいぞ。だからなのか試合中にバレー部員の動きも研究している自分がいる。

バレー部員は流石にうまい…よし…そうか…なるほど！おお！アタックは気持ちよさそうだな…

そういえば昔、悟だった時に遊びでだが数回ほどアタックしたよ  
うな記憶もあるな。

しかしこの身長だと…まあ無理をする必要はないか…

「綾香、思ったより動けてるね！よかった…」

俺は無難に試合をこなしていた。お陰でなんとか茜ちゃんの顔を  
つぶさなくて済みそうだけど…

しかし三人のバレー部以外、俺を除くメンバーの二人がひどく下  
手だった…

これは俺が心配されるレベルじゃない…なんとかなっているのも  
バレー部の三人のおかげだ…

結局B組（白）は第一セットを取ったが、第二セットを落とすした。

そしてラストの第三セットが始まった。

これに勝った方がポイントをゲット出来る。

しかし試合が始まると…やっぱりだ…相手はこのチームの穴をつ  
いてくる…もちろん俺じゃないぞ！

こちらのメンバーでもうちのクラスの子…確か大袋さんだっけ…  
この子はレシーブがすごく下手だ…ほぼミスしている…

だから、サーブとアタックでこの子は集中攻撃されている。

茜ちゃんと二年生のバレー部員がフォローするがやはり限界はあ  
る。

得点はあつと言つ間に7対11になった…やばいなこの調子だと  
負ける…

バシーン！すごい音がした！大袋さんの代わりにレシーブを受けようとした茜ちゃんが大袋さんと一緒に倒れている…

大袋さんはすぐに立ち上がったが、茜ちゃんがなかなか立ち上がらない…

「先生！越谷さんが他の生徒とぶつかって…」

三年生が先生の所に行こうとした時に、茜ちゃんは立ち上がった。

「わ、私は大丈夫です…」

そう言いながら右足を引きずってる…ぶつかった時に足首を捻ったのか…

「ちよつとタイム！」

バレー部の三年生がタイムをかけた。そしてメンバー全員を集めた…

「越谷さん、大丈夫？さっきので足首を痛めてないか？」

茜ちゃんの表情はとても険しい…

「その顔じゃやはり大丈夫じゃなさそうだな…」

流石は三年生だ、表情を見るだけでもう茜ちゃんが限界だと気がついたらしい…

他のメンバーも意気消沈している…

「だ、大丈夫です！まだやれます…」

茜ちゃんは額に汗を浮かべて苦痛の表情で言った。

「もうダメじゃない？茜も怪我しちゃったら勝てないよ…どうせ負けだよ…」

茜を見ていたバレー部の二年生の女子が言った。

「私もそう思うよ…ダメだよ…もういいじゃん…別に…私はもういいや」

さつき茜ちゃんにぶつかっただうちのクラスの大袋さんが言った…  
何だろつか…すぐムカつく…俺はこういう投げやりな態度は大嫌いだ…

「いいじゃん、どうせ遊びなんだしさ、もう負けでいいじゃん」

三年の女子が言った…

超ムカついた…プチ…俺の中で何かが切れる音がした…

「おい…何がもうダメなんだよ？まだ試合には負けてねーだろ！何だお前ら？こんなに茜ちゃんや三年生のバレー部の人もがんばってるんだぞ！！何がダメなんだよ！俺はそういう言い方ですぐ諦める奴は大嫌いなんだよ！！」

俺は思わず素に戻って体育館中に響くほどの大声で怒鳴った。

「あ、綾香！俺って！？どうしたの？ちょっと！」

茜ちゃんが俺を止めに入った。けど頭に血が上ってる俺はまだまだ言い足りない。

「おい！その三年！こつち見ろよ！おい！遊び？ああ、遊びかもしんねーよ！だけど遊びだって一生懸命にやらなきゃいけない時だつてあるだろ！」

「おい！言つとくがな、俺だってバレーは得意じゃないんだよ！みんなの足を引っ張らないようにがんばってるんだよ！ふざけるなよ！」

「さつき勝てないよどうせって言ったそのバレー部の二年！お前だよ！お前！何がどうせ勝てないだ！最後までやらないで諦めんなよ！それと茜ちゃんにぶつかったお前だよ！大袋！お前のフォロースをする為に茜ちゃんが無理しすぎた結果がこれだよ！わかってんのか！おい！何だ？下向きやがって！何か文句あれば言えよ！ほら！言え！」

「綾香！どうしちゃったの！綾香…もういいから…やめて…」

茜ちゃんが俺にしがみつき今にも泣きそふな顔で俺を止めようとしている。

「おい！もういい！わかったから落ち着け！！！」

バレー部の三年生の女子は俺の目の前に立つと俺に向かって怒鳴った。

俺はその一言で我に返った…

そして俺にしがみついて懸命に止めようとしている茜ちゃんを見た…

よく見れば茜ちゃんは…泣いていた…俺に怒鳴られた三人も涙目



になっている…

「もう…いいから…綾香…ぐす…」

「あ、茜ちゃん…」

やってしまった…いくら頭に血が上ったからって…無茶くちや言い過ぎた…

おまけに俺とか言っちゃってた気がするし…やばい…ああ…どうしよう…

メンバー全員がシーンと静まり返っている…それどころか体育館内が静まり返っている…

やばい…取りあえず謝っておこう…

「う、ごめんなさい…私…言い過ぎました」

何だか泣きたい気分になってきたぞ俺…

そう思っているとあの大きな三年生が俺の頭に手を乗せてきた…この人はさつき俺に怒鳴ってくれたバレー部の三年生。

「君は名前は確か…綾香さんだっけ？綾香さんはすごいな…あんなに熱くなれるなんてな…私もね、さつき綾香さんと同じような事を丁度言いたかったんだ。どうだ？みんな？補欠で参加してくれた一年生がこんなになんばってるのに、それでもがんばろうって思わない訳か？」

先ほどまで下を向いていたメンバーがゆっくりと顔を上げた。

「ごめんなさい…私…なんか…本当にごめんなさい…」

どうせ遊びなんだしと言っていた三年生の女子がみんなに頭を下  
げた…

「私…私が下手だから…越谷さんが一生懸命にがんばってくれてた  
のに…ごめんなさい…」

大袋さんも頭を下げて謝った。

「私も…どうで負けるなんて…私はバレー部なのに…本当はこの試  
合に勝ちたいのに…部長、ごめんなさい…、茜ちゃん…ごめんね…」

バレー部の二年生の女子も謝った。

「みんな、絶対に勝てる！とは言いきれないけど、でもね、最後ま  
でがんばろうよ、一生懸命やろうよ。ほら、茜ももう泣くな、大丈  
夫だよ、みんなまだがんばれるから」

バレー部の三年生はそう言って全員の手を握って廻った。

「この日の為だけのチームだけど、最後までみんなでがんばろうな」

「…はい！」「」

すごいな…この人…もう全員を纏めちゃったぞ…

俺なんて怒鳴ってただけだ…恥ずかしい…

俺は茜ちゃんを見た。茜ちゃんはもう泣き止んでいる…よかった…

さっきは茜ちゃんにも迷惑かけちゃったな…

(茜ちゃん…さっきはごめんね…)

俺は小声で茜ちゃんに謝った。

(え？綾香…ううん…別にいいんだよ…あの時は私も気が動転しちゃって…)

(いやダメだよ…あんなの怒鳴っただけだもん…私つい頭に血が上っちゃって…本当にごめん…)

(本当にいいのよ、綾香は一生懸命だったからみんなのあの発言に怒ったんでしょ)

茜ちゃんはそう言つと笑顔を返してくれた。

やっぱり茜ちゃんっていい子だなあ…

俺にはもつたない…ってまだ俺のものじゃないな…

(あ、あの…あそこの大きい三年生…バレー部の人だよね…)

(うん…野田先輩って言うの…バレー部の部長だよ)

(やっぱり…そうなんだ…やっぱり部長をしてるだけはあるね…よし！私…言ってみるよ)

(え？綾香？何を言うの？)

「野田先輩、次のローテーションで私が前衛になります…だから、私にボールを集めてみて貰えませんか！」

野田先輩は驚いた表情で俺を見た。

「え？何？綾香さんに？別に綾香さんは下手じゃないけど…でもその身長でアタックとか打つ気？ちよつとそれは無理があるんじゃないのか？」

みんながそれは流石に無理だろうという表情で俺を見ているな…  
まあ。普通はそう思つよな…でもな！

「やって見ないとわかりません！私を信じて！一度でいいから信じて！」

また熱くなり俺は大声で怒鳴ってしまった…やばい…俺って学習能力がないな…

ほら、全員が驚いた表情で俺を見ている。

しかし…なんかこの展開って、熱血バレーボール漫画みたいだな…

それでも俺はこの試合は勝ちたい！漫画みたくても熱血でもなんでもいいんだ！

「私は…綾香を信じます！野田先輩！綾香を信じて下さい」

茜ちゃん…

野田先輩は俺を見ながら少し考えている…

「私も綾香さんを信じたいです！」

「私もです！」

「きつとこの子ならやってくれるはずです！」

大袋さん…それに二年生の…名前わからないけど…皆、ありがとう…

しかし…本当に熱血バレーボール漫画っぽい展開になったぞ…

「うん…わかったよ…綾香さんを信じよう…みんな！」

う、うーん…そこまで信用しなくっても…

ここまでいったら本当に勝たないと駄目だよな…

試合が再開した…

相手のサーブから再開だ！

ボールは茜ちゃんの所へ！怪我をしているから狙われたのか？しかし茜ちゃんは苦痛の表情をつかべながらもうまくレシーブした。

そのボールをセッターの野田先輩がうまく俺に合わせてトスを上げられる！

ネットの高さは体育對抗祭用で二メートル十センチ…通常の高校生公式よりは十センチ低い。だけど俺（綾香）は身長が142センチ…差は68センチ…十分高い…

しかし俺は助走をつけて全力でジャンプした！俺には届くんだ！俺は思い切り仰け反ると全体重を乗せてボールを叩く！

「おりゃあああ！」

ドカン！大きな音がしたかと思うとボールは相手のコートの中に落ちていた！

相手はまさか俺がアタックをしてくるなんてこれっぽっちも思っ  
てなかったのだろう。

きょとんとした表情で俺を見ている。ざまあみる！

しかし、アタック…決まったらすっごい気持ちいいな！

「お、おい…あのさっき怒鳴ってたちっこいのがすげーアタックしたぞ…」

「なんだよあのジャンプ力……」

「あれって…一年の姫宮だよな？あいつあんなに運動できたのか！？」

外野の男子が俺のすばらしいプレーに驚いている。この調子ならいける！

それからメンバー皆でがんばった！一生懸命に！

一度はデュースになったがそれでも最後は勢いがある方が強い！

こちらのサーブ！しかし相手はうまくレシーブ！

そしてセッターがボールを浮かすとアタッカーが速攻でアタックをして来た！

こちらのブロックは間に合わずボールは大袋さんの所へ向かう…

茜ちゃんはボールを追ったが足の痛みで転げてしまった！

それを見ていた大袋さんが真剣な顔つきでボールを見つめる。

「大丈夫よ茜！私にだって出来るはず！」

バス！鈍い音がした！

「きゃー！」

大袋さんはボールを受けた反動で転がった。

でもボールは死んでない！あの大袋さんが敵のアタックをまとも  
にレシーブで返した！

ふわふわと浮いたボール…やばいコートの外に出る！

俺は猛スピードで走って転がりながらも右手でボールを拾った！

後は…

「野田先輩!!」

野田先輩はすでにバツクアタックの体制だ！  
しかしボールはかなり低い位置にあがっている…

「大丈夫だ！任せろ！」

ドン！野田先輩の巧みなバツクアタックが相手のコートに突き刺さった！

ピー！試合終了！

17対15でB組（白）の勝利です。

「勝った…勝ったぞ！」

勝利が決まった！チームの全員はコートの中央へ集まって抱き合  
って喜んだ！

俺も女子に混じってつい一緒に喜んでしまった…いかん…何をし  
てるんだ俺は…

そして全員で握手をした後に即席チームは解散した。

俺は体育館の端っこへ歩いて行った。そして一気に押し寄せる疲  
労感で床に転がった…

流石にこの体で全力で動くとその反動も激しいな…しばらくは激  
しく動けないかな…

「綾香！やった！綾香やったよ！」

茜ちゃんがすごく嬉しそうに歩いて来た。

今もすこし足を引きずってたけど…足首は大丈夫なのかな…

「綾香？大丈夫？すごく辛そうな顔だよ？」

俺の心配を余所に茜ちゃんは俺を心配してくれている…

「あ、うん…ちょっと疲れただけ…」

「そっだよね…すごくがんばったもんね……………」

茜ちゃんは優しいな…すぐに人の事を考えてくれる…俺なんかの事まで…

「ねえ…綾香…」

茜ちゃんがすごく真面目な顔をして俺を見た…何だろう…

「な、何？茜ちゃん」

「前に…夏休みに私を守ってくれた時も…あんな感じだったよね…」

え…あ、大二郎のあの事件か…

「え…あは…そっだったっけ…」

「何だろうね…ああいう綾香を見ると…私、姫宮先輩を思い出したちゃうんだ」

な、何で！？俺を思い出すって…俺っていつもあんな感じだったっけ…



それとも行動がすごく男っぽくってバレかけてるのか!?

「え?そ、そうかな...たぶん兄妹だから少し似てるのかな...」

「あはは...そっか...そうだよね、ごめんね!私って何言ってるんだろね...綾香は先輩じゃないのに」

.....ふう...ばれてはいないようだな...まあそう簡単にばれるはずもないしな...

しかし、言ってる事は間違いない、今の綾香は悟で正解だ...  
やっぱり、早く魔法力を溜めて、妹を捜し出して早く元に戻らないとな!

あ!そ、そうだ!茜ちゃんの足の事忘れた!

「そ、そういえば、茜ちゃん、足首は大丈夫なの?」

「え?ああ...大丈夫!って言いたいけど...結構ダメかも...」

何だ...良く見れば靴下の上からでも腫れてるのがわかるぞ!?

「ねえ!すごい腫れてるよ!早く保健室行ったほうがいいよ!」

「え...でもどうしよう...午後の部...私は騎馬戦で上に乗る予定なのに...」

そんなに足首が腫れてて騎馬戦なんて出来るはずがない!

茜ちゃんがすごく困った表情を見せてるし、こうなったら俺が代わるしかない...

「わ、私がやるよ...騎馬戦」

「え！？でも大丈夫？綾香すつごく疲れてそうだけど？」

「大丈夫だよ、休めばなんとかなるよ…それより茜ちゃんは早く保健室に」

茜ちゃんは人の心配をする前に自分の事も少しは考えてほしい！行かないなら俺が連れていく！俺がゆっくり立ち上がると後ろから声を掛けられた。

「綾香さん！」

え？この声は…もしかして…

「あ、野田部長！」

茜ちゃんは俺よりも先にその声に反応した。

俺の後ろには野田部長が立っている。俺に何の用事だろう…

「綾香さん、あなた凄かったよ…今日はあなたのお陰で勝てたようなもんだ…」

え？わざわざそんな事を言いに？しかし、そう言われるとすつごく照れるな…

「しかしさっきの男みたいな口調になった時はびっくりしたな」

う…あれはすつごく後悔してるんだ…失敗したって…

「ねえ茜、綾香さんは部活とか入ってるの？」

「え？綾香って…部活やってないよね？」

「え？あ…入ってはないですけど…」

「そうか！もしよかったらバレエ部に入らないか？」

「げ…今度は俺が勧誘されてるぞ！それも部長に！」

「綾香！バレエいいよ！面白いよ！一緒にやらない？」

「う…茜ちゃんまで…バレエか…別に部活をやりたくない訳じゃないけど…でも今の俺は本物の綾香じゃないし、戻って来た事を考えると下手に部活なんて出来ないんだよな…」

「う、ごめんなさい…私は…」

「ははは！そうか！まあ気が向いたらいつでも来てくれ、綾香さんなら大歓迎だよ」

野田先輩はそう言いながら茜の足を見た。

「おい茜、足首…腫れてるな、保険室に行くぞ、私の背中に乗れ」

「お、流石野田先輩だ、ちゃんと茜の事も見てたんだな…」

「え？でも…私…」

「でもじゃない！私は部長だぞ？」

「あ…はい…すみません…」

茜ちゃんは素直に野田先輩の背中に負ぶさった。  
ふう…これで茜ちゃんは大丈夫だな…

「茜ちゃん、ちゃんと怪我は治してね…」

「うん、綾香も…ごめんね…騎馬戦お願いね…」

「うん！大丈夫だから！じゃあ野田先輩…茜ちゃんをお願いします」

「ああ、わかった、綾香さんまた後でね」

そう言つと野田先輩は茜をおんぶして保健室へ歩いて行った。

しかし…後で？つて何だろう…まあいいか…

野田先輩っていうか、野田さんは俺（悟）と同じ学年なんだよな。  
まったく知らなかったな…あんな子がB組にいたなんて…まあし  
かし無事に終わってよかった…

「綾香ちゃん！」

今度は絵理沙がやってきたぞ…もう疲れてるのに…

「絵理沙さん、私今すごく疲れてるんだ…だからすこし休ませて…」

「いいよ、休みながら聞いても。綾香、すこし頑張りすぎだよ…」

「え？頑張り過ぎちゃった？」

「そうね、ちょっと目立ちすぎだね…正直言つと怒って怒鳴ってた

時にすごく目立って、試合の最後の方もすごく目立ってたよ。  
注目的っていつやつね」

「うわーやっぱりそうか…やばい…目立ちすぎたかも…何してるんだよ俺は…」

絵理沙に忠告されてたのに…

「う、ごめん…忠告されてたのに…」

「うん…でもね…」

「でも？」

絵理沙がまたあの笑顔で俺を見ている…

「綾香ちゃんらしくて…すごく…格好良かったよ…」

「な、何だ！？格好良かった！？そんな事を絵理沙に今まで言われた事ないぞ！？」

「そ、そうかなあ…別に格好いいなんてないでしょ？」

「ううん…格好良かったよ…私は…そういう綾香ちゃんがね…す…なんだ」

「え…声が小さすぎて最後の方が聞こえなかったぞ…何て言ったんだ？」

「絵理沙？そういう綾香ちゃんがね…の後…何て言ったの？聞こえなかったの」

「な、何でもないよ！」

どう見ても何でもなくなさそうだぞ！俺に話せないような事なのか！？

「あ、綾香ちゃん！午前の部は終わりだし、先に教室に戻ってるね！」

そう言つと絵理沙は俺を置いて先に体育館を出て行った。

絵理沙！？どうしたんだろぅ…あまり気にしないほうがいいかな？

よし、あまり考えるのをよそう…ただでさえ疲れてるんだし…

ふう…まだ十二時なのに何だか色々と疲れたな…精神的にも肉体的にも…

体育對抗祭 午前の部は終了した。

休憩を挟んで午後の部がスタートする！

続く

## 第10話 激突！体育對抗祭 後編

体育對抗祭の午後の部が始まった。

午後の部の競技はかなり行われるのだが、俺は誰の応援にも行かずに人目につかない体育用具倉庫の中で休んでいる。

何故かと言うと俺は補欠だから目立つ所にいるといつ欠員の出た競技に引つ張られるかわからないからだ。

午前中に全力でバレーボールをプレイしたせいで体力は殆ど残ってない。もしも今から別の競技に連れていかれると騎馬戦の前に最悪のコンディションになる…間違いない…

それにしても久々だなここに来るのも…

綾香になつてからは全く来なくなつたが、悟の時はよくここで授業をサボってたな…

体育用具倉庫は十畳くらいの広さで少々石灰っぱさがあるし汚い。床はコンクリートのひんやりした感覚があり、そしてこのボール等の皮の匂い…普通の女子なら絶対に好まない場所だが俺はこの場所が結構好きだ。

しかし、毎回の事だが体育用のマットは固くて横になつてもいまいち落ち着けない…もともと寝る用ではないし、贅沢は言ってもらえないが…

そうそう、茜ちゃんはやっぱり捻挫だった…骨には異常ないらしいけど、無理したから結構腫れてたよな…まったくもう…

………

一人でぼーと体育用具入れの中で待つているのも疲れる…

いつもなら寝てしまつんだが、今日は騎馬戦の開始時間にはここを出ないといけないので寝る訳にはいかない。

俺は騎馬戦の開始時間を頭の中で確認した。

騎馬戦って確か最後だったしな、確か午後二時半だったよな…

今は何時だ？俺は体育用具入れの小さい窓からは校舎の時計を見た。  
た。

今は…一時五十分か…結構いい時間になってたんだな。

という事はもうすぐ集合か…よし！そろそろ行くかな。

俺は広げたマットを畳むと体育用具倉庫を出ようと扉に手をかけた。  
た。

するとギギギという金属音がしたかと思うと扉を開いた。

誰かが外から扉を開けたのか？

俺は開いた扉から外を見た。すると外には三年生の男の子が三人…全員知ってる奴だ。

こいつら三年D組の奴らで大和田、川間、牛島、通称三D馬鹿三人組だ、こういう奴らは相手をするのも面倒だな。

「あれ？ここでサボろうと思ったたら中から一年の女が出て来たぞ」

さつき扉を開いた大和田が俺を見ながら言った。

「お？本当だな、お前こんな所で何してたんだよ」

川間はそう言つと俺の近くに寄つてきやがった。

「ちょっと用事があつて来てただけです」

「ん…おい？こいつ悟の妹じゃないか？そうだよな？おい、お前、悟は見つかったのかよ！」

牛島は綾香の事を知っていたのか。しかしうざいし馴れ馴れしい



なこいつら。

「先輩達には関係ないじゃないですか。ほっといて下さい！」

「おー何を怒ってるの？それにしてもお前ちっこいねー中学生？いや小学生みたいだな？」

牛島は俺の全身を上から下まで見ながら言った。

牛島の野郎、俺の胸で視線が止まってるぞ！見るな！

男なんてどいつもこいつもいやらしいな…という俺も男なんだがな…

「マジでちっこいよなー身長何センチだ？」

川間の野郎！チビのくせしやがって何を言ってるんだ！といっても160センチくらいはあるが…

しかし！お前には言われたくはない！

マジでむかつく…くそ…今すぐに全員殴ってやりたい！だが俺はそんなに暇じゃないんだよ。

「どいて下さい！私、急いでるんです」

そう言って俺は三人の間を小走りで抜けようとした。

しかし、俺を相手にするのが面白いのが三人は俺の行く手を塞いだ。

「おいおい、質問に答えてから行けよ」

牛島はそう言つと俺の左手を強引に持った。こいつ、俺の許可もなしに何しやがる！

「何ですか！離して下さい！答えるも必要はないでしょ」

俺は牛島の手を振り払おうとしたが、強く持たれていて離れない。思いつきり殴ってやればいいんだろが…ダメだ我慢だ…

「おい！先輩の質問には答えるよ！」

今度は背後にいた大和田がいきなり俺の背中を勢いよく押した！俺はその反動で前のめりになり転げそうになったがなんとか踏ん張って耐えた。

女の子に向かって何しやがるんだ！？俺じゃなかったら転げてたぞ！？

「何をするんですか！やめてください！」

しかし我慢だ…ここで怒ったら午前中の二の舞だし、騎馬戦にも間に合わなくなる…

茜ちゃんと約束したじゃないか…騎馬戦は代わりに出るって…俺は自分で自分にそう言い聞かせた。

「あれ？びびっちゃって質問に答えられないんですか？姫宮の妹さん？」

くそ…好き放題言いやがって！お前らごときにびびってねーって言うんだ！

くっそーイライラするな…茜ちゃん、ごめん！俺もうダメだ…我慢できねー！

俺は右手の拳を握りしめた。その時！

「おい！お前ら！何やってんだよ！牛島、その手は何だ？」

え？この声は正雄！？

俺が声のする方向を見るとこちら向かって歩いて来る正雄がいた。

「え？何だよ！正雄じゃねーかよ…」

牛島は俺の手を離した。牛島、こいつ正雄にびびってやがるな？  
まあ三馬鹿よりも正雄の方が強いしな、この反応が普通か。

で？正雄はこんな場所に何をしに来たんだ？体育用具倉庫でサボりか？

何をしに来たにしても正雄のお陰で助かったんだけどな。

「おい、悟の妹、迎えに来たぞ」

そうか、俺の迎えか…え？何だ！？迎えに来たって！？

「え？何だよ！正雄お前こいつをどっかに連れて行く気か？」

「正雄、悟の妹とここで待ち合わせだったのか？」

「まさかなーこいつは女っ気もないガキだぞ。正雄は女にもてるしそれはねーよな」

何だ？この三馬鹿どもめ…言いたい事いいやがって…

「ああ、姫宮とここで待ち合わせだったんだ。悪いのかよ？」

え！？ちょ！何だ正雄！？俺は待ち合わせた覚えはないぞ！？

「え…な、なんだよ…ま、まさかお前ら付き合ってるのか？」

「マジでここで待ち合わせだったのかよ！？嘘だろ？」

「ま、まで…悟の妹もよく見れば可愛いじゃないか…有り得るぞ！」

何を言い出すんだ三馬鹿！俺が正雄と付き合つとかあるはずないだろ！

正雄もこつちを見るな！なんだその笑顔は！寄るな！寄って来るな！

つて…あ…

気が付くと正雄は俺の目の前に立っていた。

そして正雄は躊躇もなく俺の左手を握った。

正雄は俺の手を握ると三馬鹿に向かって強い口調で言い放った。

「ああ、俺と姫宮は付き合っている。何か文句があるのか？」

え…付き合つて…つて！ぎゃあああああ！正雄まつて！何だそれ！

あ、あと手！手だ！俺は男と手を繋ぐ趣味は持ち合わせてないんだ！

「そ、そうか…悪かったな、お前の彼女にちよっかい出してよ…」

「お、おい！中に入って寝ようぜ！」

「あ、ああ…正雄、またな」

三馬鹿は体育用具倉庫に入って扉を中から閉めた…

そしてこの場所には俺と正雄の二人きりになった…というか手をそろそろ…

「さ、桜井先輩！手…」

「あ、ああ、すまん…」

正雄はすこし慌てた表情で俺の手を離した。

「あの…桜井先輩！？今のって…どういう事ですか！？」

説明しろよ、どういう事だよ…どうしてあんな事をしたんだ！

左手に正雄の手の感触が残っててきもち悪いぞ…

「あれだ、姫宮、さっき言ってた事は言葉のあやだ…あいつらを相手にするのが面倒だったからな。ああ言えばすぐに諦めるかと思っただ、手を握ったのは勢いだすまん」

それにしてもあそこまで言う必要はないだろうし、勢いで手を握る必要もないんじゃないのか…

「私…突然あんな事を言われて…びつくりしました…」

あれ…ちょっと待って！顔がまた熱いぞ…俺ってまた赤面してるのか！？

ダメだ！これじゃあまるで女の反応じゃないか！

本当に駄目だ！このままじゃ俺は女になってしまっ…

違う！そうじゃないんだ！これは恥ずかしいから赤面してるだけなんだ！…と、とにかく落ち着こう…

「ははははは、顔が赤いぞ？照れてるのか？お前の反応って結構かわいいよな」

くそー！むかつく！俺は男だ！男に向かってかわいいとか言うな！

また顔が熱く…あー何だかすごく悲しくなって来た…俺って何なんだよ…

「で…本題だが、お前は騎馬戦に出るんだろ？」

え？何で正雄は俺が騎馬戦に出るとか知ってるんだ？

「え？あ、はい…でも何で知ってるんですか？」

「ああ、さつき越谷から直接聞いた。あいつ右足首を捻挫したんだろ？だからお前が代わるってな…それで何処にいるか聞いたらここで隠れてるとか…お前…真面目そうなのにな」

そつだ…茜ちゃんには言っておいたんだ…この場所を。

「えっと…ちよっと午前中に体力使っちゃって…すこし休まないと騎馬戦に参加出来ないから…」

「そつか…まあいい、俺はそんな事は気にしてないしな。それじゃあ行こうか…」

それにしても正雄の奴、躊躇なく俺と付き合ってるとか言いやがって…

までよ…そういう事を普段から言いなれてるって事なのか？

平気で女の子の手も握れるのか？取り合えず俺とは人種が違うんだな…これは確定だ。

待てよ…あの三馬鹿には確実に俺と正雄が付き合ってるって思われたんじゃないのか！？

これって結構やばいんじゃないのか？

「桜井先輩、そう言えばさつき私と付き合ってるとか言っていましたよね？あれってまずいと思うんですけど？」

「ああ、大丈夫だよ、もしもその事を誰かに聞かれたらすぐに別れ

たつて言えばいいだろ」

「そういう問題なのかよ…」

しかしそう簡単に処理されるとそれはそれで何か寂しいものがないや、ない！絶対ない！

ふう…まあ誰にも見られてないし、どうにかなるだろ…

「そ、そうですね…」

「何だ姫宮？なんなら俺と本当に付き合ってみるか？」

「え！？」

俺はその言葉にかなり動揺して、思わず立ち止まると正雄の方を見た。

「ちょ、ちょっと待てよ！冗談はよせ！大二郎でさえ大変なのに正雄まで！？」

「お、俺は男だぞ！無理！本当に無理！くそ…」

「ははは！冗談だよ、そんなに驚いた顔すんなよ」

「いや…普通は驚くだろ？俺が本当の女でもたぶん驚くぞ？」

「でも冗談か…マジでびっくりする…」

「まあ…そんな事したら大二郎に怒られちゃうから…」

「そうそう大二郎に…って！その言い方だと大二郎が怒らきゃ俺と付き合いたいのか！？おい！」

「あれ？正雄は平然とした顔してやがる…また冗談だったのか？わかんね…」

しかし、俺がこんなに混乱するのは恋愛経験の差なのか？  
くそ…すつごく精神的に疲れた…寿命が縮む…

メイニングラウンド…騎馬戦会場に到着

「おい…正雄…越谷の代わりに騎馬の上に乗る人間連れて来るって  
言ってたけど…それって…ひ、姫宮綾香かよ!？」

大二郎が俺を見てすごく動揺している。

俺も驚いたんだ…こんなメンバーだとは…大二郎・正雄・そして  
まさかの野田先輩…

確かに男女混合とは言ってたけど…茜ちゃんにメンバー聞いてお  
けばよかった…

野田先輩はこのメンバーだと知っていたからさっきまた後でいっ  
て言ったのか。

「何だ？大二郎は綾香さんと知り合いなのか？」

野田先輩は大二郎と俺の関係を知らないからな…

「ま、まあな…す、す、すこしだけだ」

おい大二郎…目の焦点が合っていないぞ…何をおどおどしてるんだ  
よ…

横では正雄が大二郎の事をすごく楽しそうに見ているし…



「へえ、私もさつきバレーでこの子と知り合いになったんだ。じゃあ全員が知ってるメンバーって事だね」

「ま、まあそうなるな…」

「よし！じゃあ騎馬を組む順番だけど、一番前はもちろん大二郎ね、右は私で左は正雄ね。騎乗するのはもちろん綾香さん」

異論はない。このメンバーだとそうなるだろうからな…

「よし…今B組（白）は2位だから、騎馬戦で勝てば1位だ！がんばろう！」

野田先輩は気合いが入ってるなあ…しかし野田先輩って女らしくないというか…男勝りというか…見た目通りというか…でも俺ってこういう女性がいいと思うが。

『みなさん、騎馬を組んで下さい』

準備放送がかかった…

「よし！騎馬を組むぞ！」

今気がついたけど、野田先輩が仕切ってる…

やっぱり野田先輩ってリーダー気質を持ち合わせてるんだな…

野田先輩の号令で大二郎と正雄と野田先輩とで騎馬を作った。

「よし、綾香さん、乗っていいよ」

俺は三人の組んだ騎馬の上にあがる。そして三人がゆっくりと立ち上がった。

うわ…すごい…高いぞ…大二郎も野田先輩も180センチあるしな…

俺が大二郎の肩から片手をはずして調整したと同時に正雄が腕の位置をすこし調整した。

その拍子に騎馬が少し揺れた。俺は思わず前のめりになって大二郎の頭に胸からぶつかった…

その瞬間、大二郎がびくりと動いた…こいつ俺の胸に即反応しやがった…

まあ俺が動いて当たった訳だから文句も言えないが…

「清水先輩…今のは事故です。でも変な事は考えないで下さいね…」

しかし一応は言っておこう…

「わ、わかってる！」

今の大二郎と俺とのやり取りを聞いた野田先輩が正雄に話しかけた。

「おい桜井、もしかして大二郎って…綾香さんの事が好きなのか？」

すごくストレートに聞いているな…

「ん？そのままだろ？見ててわかんねーのか？」

「ふーん…なるほど…大二郎が始業式の日誰かに告白したって言うてたけど、相手は綾香さんだったのか」

「おい！野田！今その話かんけーねーだろ！」

「大二郎、何を照れてるんだよ、いいじゃないか、一緒に騎馬戦が出来るんだぞ？最高だろ」

野田先輩は大二郎が俺の事を好きだとわかるとニヤニヤしながら大二郎を弄ってる…

しかし…あの大二郎も今や弄られキャラになったのか…

「野田！お前…くそ…正雄もよけーな事を言っなよ！」

大二郎はすごく動揺してるな…

「おお、すまんすまん」

正雄…まったく悪気がないな…

『開戦まであと20秒です』

「おっと…桜井、大二郎、馬鹿話はあとにするよ…」

もうすぐで開戦だ。俺は取りあえず周囲の騎馬を見て比較した。

この騎馬は最高に強そうだ…しかしどう見ても騎乗している俺が弱そうだよな…ちっこいし…

まず狙われるとすれば俺だよな…いくら騎馬が強くても騎乗者がダメなら終わりだし…

もう一度周囲を見渡すと敵チームが俺を見てるのがわかる…

結構騎乗者が男子の騎馬も多いな？ん…そうか…別に男子が上でもいいのか…男性二人・女性二人の構成さえ守れば…

まあ俺は男相手でも腕力で負ける気はしい！しかし…腕の長さは100%負けるな…

『開戦の準備をしてください！』

「よし！いいか姫宮綾香！」

ずっと思っていたけど大二郎にいちいち姫宮綾香とフルネームで呼ばれるのがうざい…

「清水先輩、今度から姫宮って呼び捨てでいいですから…」

「え！？お、おう…いくぞ！ひ、姫宮！」

ふう…疲れる奴だな…

『よいい！スタート！』

号令とともに四チームの騎馬が一斉に動き出す！

大二郎はいきなり吠えながら敵陣のど真ん中に突っ込んでゆく！

「こら！大二郎！作戦は！？」

野田先輩が大二郎に怒鳴った。

「お！すまん！つい…よし！右に旋回して敵陣の裏にまわるぞ！取りあえず敵の騎馬をぶつ潰す！」

何という作戦だ…騎馬戦のルールを解ってるのか！？

開始から一分経過

この騎馬は強かった…迫り来る騎馬を次々に潰してゆく！

そして、俺は敵の帽子を一つも取ってない…敵の騎馬だけは7個はつぶした…

おいおい…帽子とって無いから得点になってないぞ！意味がない！…！

「清水先輩！私に帽子をとらせて下さい！相手の騎馬を潰さないで！敵の帽子を取らないと得点にならないですよ！」

「お？そうなのか！？わかった！」

そうなのか？って…やっぱルールを知らなかったのか？無いだろ…普通…

ほら！野田先輩と正雄は今の大二郎の反応を見てすっごく楽しそうだぞ。

そうか…大二郎だけは知らなかったという事か…

その後は大二郎は我慢してるのか、一応は敵の騎馬をつぶさなくなっただけ…

そして…よし！まず一つめの帽子をゲット！続けて二つめ！

騎馬が安定しているお陰もあって順調に二つの帽子をゲット！

「おい、囲まれてるぞ…！」

正雄が後ろを見ながら言った。

確かに…いつの間にか周囲を5つくらいの騎馬に囲まれている…っていつかB組の、味方の騎馬は！？近くにいないじゃないか？全滅したのか！？

「清水先輩！スピードを出して左斜め前の敵の騎馬の横を通過して！」

「おう！」

こちらの騎馬はすごい勢いで敵騎馬に突っ込む！そして横を通過する瞬間に俺は帽子を取る！

三つ！四つ！五つ！…

よし…作戦はうまくいってる…そろそろ時間も終わりだろうし…このまま逃げ切れば…

その時に横から衝撃が！

「おい！横だ！横から二騎ほど突っ込んできやがった！この騎馬をつぶす気だ！」

正雄が叫んだ！

騎馬が潰れば俺が取った帽子五つは得点にならなくなる…

この騎馬と相打ちで潰して得点を取らせない作戦か！？

「俺様がそう簡単に潰れるかよ！」

大二郎は右方向へと方向転換をして突っ込んで来た騎馬に抵抗している。

俺に出来るのは衝撃で落馬しないようにするのと、帽子を取られないようにする事だ…

残念ながら突っ込んで来た二騎の騎馬は騎乗が男子で俺とは身長差がある…

よつするに俺の手は届かないんだ…

「お前らぶつ潰す！！！」

大二郎はそう言うと敵の騎馬の中央に割り込んだ！

その瞬間に敵の騎馬が一旗ほど崩れる！騎乗している男子が騎馬から落ちる！

「いいぞ大二郎！」

「危ない！姫宮！避ける！」

正雄の声がした瞬間に俺は後ろを見た。

その瞬間！後ろの騎馬から男子生徒が俺に向かってダイビングしてきた！

こんなの避けられるはずねーだろ！卑怯すぎるぞこいつら！

俺の上に男子生徒が覆い被さると、騎馬はバランスを失って崩れる！

「ひ、姫宮！」

俺はバランスを崩して後頭部から地面に落下してゆく……やばい……このままじゃ地面に……受け身を……ダメだ男子生徒が邪魔だ……その瞬間に激しい衝撃が後頭部に……ドサ……

……

……  
「ひい」

……

あれ…

俺はどうしたんだろう…

確か騎馬戦…してて…

「姫宮さん？」

誰かが俺を呼んでる？ここは…どこだ？この感触はベット？この感じ…記憶がある…

俺はゆっくりと目を開けた…そして周囲を見渡す…ここは…保険室…

え？保険室！？何でこんな所に！？

「姫宮さん、気がついた？」

俺は保険室のベットに横になっていた。そしてベットの横には白衣姿の桶川先生がいる。

「あ、あの？私…確か騎馬戦やって…」

「そうよ、姫宮さんは騎馬戦で騎馬から落ちて地面に頭をぶつて気を失ってたのよ？」

そ、そうだ！思い出した。確か卑怯な男子が俺にダイビングしてきて…

騎馬がバランスを崩して、俺は地面に落下して…そこで気を失ったのか！？

「姫宮さん、主治医の先生にさっき見て貰ったけど、軽い脳震盪だつて。よく寝てたのは疲れがあったみたい」



「あの…じゃあ…あれからずっと私はここに寝てたんですか？」

「そうよ？今は夕方の六時よ」

「え！？六時！？」

俺は驚いて窓から外を見た。すると辺りは薄暗くなっている…  
体育對抗祭どころか一日が終わろうとしているじゃないか！  
そ、そうだ！結果は？順位はどうなったんだ？

「あの！？結果はどうなったんですか？」

「え？体育對抗祭の？」

「はい、そうです！」

「ええと…一位がC組（黄）で二位がB組（白）、三位がA組（赤）、四位がD組（青）ね…騎馬戦で一位なら姫宮さんのB組（白）が逆転してたって言ってたわ、残念ね」

そうか…やっぱり逆転出来なかったのか…俺が落ちなきや…

「話は変わるけどね…姫宮さん、貴方を運んで来たのは清水君なのよ？」

「え！？清水先輩が私を？」

大二郎が運んできた！？という事は俺は大二郎に抱きかかえられたのか！？

「すごい形相で貴方を抱えて保険室に飛び込んできたのよ？びつくりしたわ」

うわ… 大二郎… でも… 俺を心配してくれたの事だしな…

「…そ、そうですか」

「あとね、その後に来るわ来るわ！姫宮さんのお友達。貴方ってすごく人気があるのね」

え？お友達？えっと… 俺ってそんなに人気あったっけ… 誰が来たんだ？

「あの… 誰が来てたんですか？」

「え？ああ、ええとね、清水君以外に越谷さん、宮代さん、杉戸さん、桜井君、野田さん、あと… 野木さんも、みんなさっきまでここに居たのよ？優しいお友達ばかりなのね」

うわ… 何だ俺の知り合いがほぼフルメンバーだな… それもこんな狭い場所にそんなに人がいたのか。

しかし、みんな俺を心配してくれて… 心配かけちゃって…

今度みんなにお礼を言っておかないとなあ…

「姫宮さん、もう大丈夫だと思うけど、今日は早めに家に帰って休んだほうがいいわ。帰宅時間が遅くなる事はご自宅には電話はしてあるから大丈夫よ」

「あ、はい… ありがとうございます」

俺は保険室を後にした。

校舎内を見渡すとまだ体育對抗祭の後片付けをしている生徒と先生が結構いるみたいだ。

俺は廊下を歩いて一階にある一年B組の教室の前まで行った。

教室の電気がついている…誰かいるのかな…俺は教室の後ろの入口から中に入った。

「あ！綾香ちゃん、おかえり」

教室には既に制服に着替えている絵理沙が一人、俺の席に座っている…

「絵理沙…もしかして…俺を待ってたのか？」

「うん、どうせ私の家はすぐそこだし…」

…確かに…あそこはすごく近い…でもあそこは家と言ってもいいのか？

でも何で絵理沙は俺を待ってたんだろう…

「絵理沙…何で俺を待ってたんだ？先帰ればいいのに」

「え？何でだろうね…多分…綾香ちゃんが心配だったからじゃないかな…」

そう言った時の絵理沙の表情は本当に俺を心配してたように思えた。

「……………そうか、心配かけてごめん」

「うっん、綾香ちゃんが元気そうだから…私安心した」

絵理沙はにこりと優しく微笑んだ。

「今日は…色々と疲れちゃったな…こんなに疲れたのは久しぶりだ」

「あはは、綾香ちゃんは何でもがんばりすぎだよ…バレエも騎馬戦も…」

「そう言えばバレエも騎馬戦も目立ちすぎたよな…」

絵理沙は席を立つと教壇の方へと歩いて行った。そして教壇に立つといきなり俺を指差した。

「姫宮綾香君！」

「え？は、はい」

「私はね、綾香ちゃんに対するみんなの態度や表情でわかったんだ…みんなにとつての綾香ちゃんは…今の綾香ちゃん、そう、悟君なんだよね…もちろん無闇に目立つのはダメだけど…でも、普通にがんばって目立つてもそれは綾香ちゃんがんばったって思われていいだけだし…そんな綾香ちゃんを怪しむ人なんて誰もいなかった…」

「でも、バレエの時に素に戻って怒鳴ったりもしたぞ」

「うん、そうだね…流石に素に戻るのにはダメだと思う…だからそこは頑張って我慢しないとね。あれは何度も繰り返すとちよつと怪しまれちゃうよね」

「やっぱりそうだよな…そこは注意する…」

絵理沙はじつと俺の事を見ている…しばらくして絵理沙は軽く溜息をついた。

「ふう…よし…私はそろそろ帰るね」

そう言うと絵理沙は教壇から教室の前方向の出入口へと歩いて行く。

「え、絵理沙？」

「また…明日ね…綾香ちゃん…」

絵理沙そう言って俺の方を一瞬見ると教室の扉を開けて出て行った。

何だ…絵理沙の奴、突然出て行きやがって…

俺は絵理沙の席から立ち上がると自分の席の横に掛けてある袋から制服を取り出した。

ん？誰だ？俺は教室の後ろに誰かが居るのに気がついた。

後ろを見ると後ろ側の出入口の横に一人の女子生徒が立っている。

茶色い髪に赤い瞳…なんだろう…良く見ればなんだか絵理沙に似ているな…

身長も同じくらいだし…体格体型もほぼ同じ…この子は一体誰なんだ？

俺は何度か見直したが絵理沙ではない…でも似てる…兄弟なのか？そんな話は聞いた事ないぞ…

じゃあ絵理沙に化した魔法使いなのか…その可能性はあるが…

でもなんでここに居るんだ？しかもこの学校の制服を着ているぞ？

「だけど今まで校内で一度も見た事がないな…よし…」

「あ、あの…」

俺は勇気を出して女子生徒に声をかけてみた。

するとその女子生徒は無言で教室を出て行った…

何だったんだろうか…不思議な子だったな…

さてよ？よく考えたら…絵理沙との会話とかすべて聞かれた！？

やばい！俺は悟君とか言われたし、男口調でおもいつきり話して  
た気がするぞ！？

俺は慌てて女子生徒を追って教室を出た。

しかし廊下にその女子生徒の姿はなかった…ものの数秒の間に廊  
下から消えた…

待てよ…そうだ、よく考えてみる？あの絵理沙が人の気配に気が  
つかない訳がない…

だから絵理沙が居た時にはあの女子生徒は居なかったという事だ  
よな？

じゃあさっきの会話は聞かれてはいないのか？

多分そうだよな…絵理沙は教壇に立っていて教室中を見渡せたは  
ずだ…

「綾香！綾香だ！よかったー！大丈夫だったんだねー」

俺が廊下でそんな事を考えていると後ろの方から佳奈ちゃんの声  
がした。

振り返ってみると両手を広げて俺に向かってくる佳奈ちゃんの姿  
が見える！

「か、佳奈ちゃん！？」

やばい！これは抱きつかれるパターン！避けなければ！

「あーやーかあ！」

佳奈ちゃんは予想通りに俺に向かって抱きついてきた！

しかし俺はすばやく身をかわした！佳奈ちゃんの抱きつき攻撃は空をきつた…

「綾香あ…なんで避けるのよお…」

佳奈ちゃんはすごく不満そうな顔で俺を見ている。

「え、いや…ごめん…騎馬戦を思い出して…」

すごく無理な言い訳だな…

「あ！そっかーあるある！あるよねー！」

それで納得できるの？佳奈ちゃん…君はすばらしい女の子だよ…

「ふう…やっと片付けが終わったよ！もう！面倒だったな！」

「え？あ…お疲れ様…」

そうだ！もしかするとさっきの女子生徒は佳奈ちゃんのいた方向に行ったのかも…

一応聞いてみようか…

「あ、あの…今ここに来るまでの間に、女子生徒とすれ違わなかつ

た？」

「え？女子生徒？うーん…第二校舎に歩いて行く野木さんは見た！」

絵理沙を？本当の絵理沙なのかな？

「それって本物の絵理沙さんだった？」

「え？何それ？偽物の野木さんがいるの？私ちゃんと挨拶したし本物だと思うよ？」

しまった…すっごく変な質問をしてしまった…  
でも挨拶をしたくらいなんだから本物なんだろうな…

「ごめんね、変な質問しちゃったね」

「あはは！あるある！そういうのあるよ！」

佳奈ちゃん…ある意味ここまで脳天気だと恐ろしさすら感じるよ…

「ねえ！綾香！そういう事だから帰ろう！」

何がそういう事なんだろうか…まあいいや…あの女子生徒の事は  
気になるけど…今日は帰ろう…

「うん、帰ろうか…」

俺は佳奈ちゃんと一緒に下駄箱まで行った。

そこまで行くと佳奈ちゃんがすごい笑顔になった。



「あれ？茜と真理子じゃん！何してんのー」

茜ちゃん？真理子ちゃん？あ！本当だ！二人が下駄箱にいる。

佳奈ちゃんは茜ちゃんと真理子ちゃんの姿を見つけたから笑顔になつたのか…

あれ？よく見ればおまけで大二郎と正雄…あ！野田先輩までいる！？

「おお！姫宮！」

大二郎は俺の姿を見つけると真っ先に反応した。

「あ！綾香！よかった！目が覚めたのね」

茜ちゃん…俺はすぐに茜ちゃんの右足首をみた。すると右足首に包帯が巻いてあった。

すごく痛そうだ…大丈夫かな…

「茜ちゃん…足…」

「え？ああ、大丈夫！軽い捻挫だし、もう腫れも引いてきたから」

そうか…ふう…良かった…

気がつくともみんなが俺のそばに寄って来ていた。みんな俺が心配でここで待ってくれていたらしい。

俺は悟の時にはこんなに心配された事がない…正直何てお礼を言えばいいのか戸惑った。

俺は慣れない口調でみんなにお礼を言った。

するといきなり大二郎と正雄と野田先輩が三人で騎馬戦の件で俺

に頭を下げて謝ってきた…

そんな頭を下げられても…だいたいあれは三人が悪い訳じゃない…  
相手が無理矢理に俺に向かってダイビングとしてきたのが悪い。  
だから俺に謝る必要なんてないのに。

そう思ったから俺は言った。

「頭を上げてください！騎馬戦は先輩達が悪いんじゃないです！そんな風に謝らないで下さい！私は大丈夫ですから」

「先輩、私もそう思いますよ…あれは先輩達のせいではないですよ」

俺に続けて真理子ちゃんが笑顔で言った。

しかし、三人の表情は硬いままだ…こういう表情をした大二郎や  
正雄、野田先輩は見たくない。

「私は、清水先輩や桜井先輩や野田先輩と一緒に騎馬戦が出来て本当によかったって思ってます…本当にすごく楽しかったです！だから…笑って下さい」

俺らしからぬ台詞にすこし恥ずかしくなったけど、その一言で正  
雄が、茜ちゃんが、そしてみんながやっとなつてくれた。や  
っぱりみんなには笑顔が一番似合っているな…

しかし、大二郎がすこし涙目になっていたのには俺もびっくりだ  
った。

大二郎って結構ナイーブなのか？その体格で？すっごい違和感あ  
るぞ！

その後はそんなこんなで時間も遅いという事ですぐに解散になっ  
た。

そして全員が挨拶をして、そして各自家路へとついた…

今日は色々大変だったなあ…でも何でだろう？すっかり疲れて大変だったのに、すごく充実した一日だった気がする。

そうだ！俺は本気で楽しかったんだ！そう、本気で…

ちえ…学校ってこんなに楽しいのかよ！悟の時は俺は損をしていたのかもな…

ふう…これが災い転じてなんとやらっていうやつなのか？

その時の俺は先ほどの謎の女子生徒の事などすっかり忘れていた。

こうして体育對抗祭は終わった。

続く

## 第11話 秋だ！手紙大作戦！？

九月最大のイベントである体育対抗祭が終わった。

早いもので俺が綾香になってから二ヶ月が経過した。

最初はどのような事やらと心配したが、最近はクラスメイトの名前も覚えたり、友達も増えたり、なんとなく学園生活を楽しめてる気がする。

しかし、最近気が付いた難題がある、俺は姿形は女なのだが中身は完全なる男だ。

だから女子生徒とまったく話題が合わない。合わないというよりは話の内容ほぼ解らないと言った方が正しいかもしれない。それもあり俺は率先して話さない。

しかし！俺には佳奈ちゃんという全自動おしゃべり装置が存在するのですごく助かっている！

おっと、そんな事を考えていると時間がどんどん経過してゆく。

綾香の姿で遅刻はしないようにしないと…急いで着替えよう…

今日から十月だ。十月一日からは衣替えで今日から紺のブレザーを羽織る事になる。

俺は早速クローゼットから紺色のブレザーを取り出して羽織ってみた。

リボンとブレザーを整えて姿見の前に立つ。

姿见到映る俺の姿というか、見た目は綾香…綾香はやっぱりかわいい…

本当ならば鏡越しでこの姿を見るのではなく、綾香がこの制服を着ている姿を悟として見たかった…

まあ、綾香は生きてるんだし…戻って来れば見れるじゃないか…

俺は自分にそう言い聞かせると学校に向かった。

秋晴れで雲一つ……あるけど、まあいい……取り合えず良い天気だ。

俺は自転車を漕いで、特に何事もなく学校の駐輪場へ到着した。自転車を指定の場所に置くのと下駄箱へと歩いて行く。

何だか周囲の感じがいつもとは違う感じがする……生徒がみんなブレザーを着ているからかな……

サマーベストをみんなが着ていた時は白色だったせいもあって夏のイメージが強かったが、やはり紺色のブレザーになると秋になったんだなと感じる。

俺はゆっくりと外通路を歩きながら周囲を見ていた。すると下駄箱の入口で茜ちゃんの姿を見つけた。

おや？いつももつと早い時間に登校してるはずなのにな……

「茜ちゃん！おはよう！」

俺は少し大きめの声で茜ちゃんに挨拶を試してみた。

すると茜ちゃんはすぐに俺に気が付いて手を振りながら挨拶を返してくれた。

「あ！綾香、おはよう！」

おお、ブレザー姿の茜ちゃんもかわいい……とても似合ってるなあ……早く悟に戻って茜ちゃんと一緒に登校とか……あ……家の方向違うから無理か……

でも帰りに一緒に何処かに……あ……茜ちゃんは部活に入ってるからな……

って……俺は何を妄想してるんだ……こんな朝から……それにしても今日は登校が遅いけど何かあったのかな？

「茜ちゃん、今日は遅いね？どうしたの？」

「あ、うん…実はブレザーをどこに仕舞ったのか忘れちゃって…」

茜ちゃんはすこし恥ずかしそうに言った。かわゆい…

「そうだったんだ…私のイメージだと茜ちゃんってしっかりしてて几帳面そうだから、それって意外」

「え？わ、私は別に几帳面じゃないし、しっかりもしてないよ？」

俺のイメージだと几帳面そうに見えるんだけど…制服だってきちんと着こなしているし。

本当に几帳面じゃない人は制服の着方もだらしないからな。

「そうかな？いつもちゃんとしてるし、私よりも几帳面だと思うけど」

「でも、綾香の方が几帳面だと思うよ？すつごく部屋とか綺麗にしてるし、私なんて…」

「え？そうかな？」

あの部屋は本物の綾香が綺麗にしていただけなんだよな…

汚くすると戻ってきた時に怒られそうだし、あの状態を維持してるだけだ。

「うん！そう思っよ」

「そんな事ないよ？じゃあ…今度茜ちゃんの家遊びに行こうかな」

ってドサクサに紛れて俺は何を言ってるんだろっ…いやしかし、家の場所すら知らないし、そうだ！それを確認すると思えば…

「えー！駄目！絶対駄目！来ちゃだめ！」

茜ちゃんは首と右手を左右に振りながらおもいつき拒んだ。

え…そんな俺にに来て欲しくないのか？俺が嫌いなのか？

いやそれはないよなあ…今の俺は綾香な訳だし…

じゃあ純粹に来て欲しくないのか？という事は本当に部屋が散らかってるのか？

でもまあここまで拒むんだし…少し残念だけど諦めよう…

「え…うん、わかった…」

「あの…綾香にそんな残念そうな顔をされちゃうと…そ、そのうち呼ぶから！ね？」

茜ちゃんがすごく申し訳なさそうに俺に言った。

あれ…俺ってそんなに残念そうな顔をしたか！？

もしかして俺って綾香になってから感情が表情に出やすくなってるかもな…すぐ赤面するし…

まあそのお陰でそのうちだけでも茜ちゃんの家と呼んでくれる事になったんだし、その日を楽しみに待っておこう！

「ごめんね、そんな顔したつもりなんだけど…楽しみに待ってるね！遊びに行けるの！」

「うん！ごめんね…」

俺達はそんな話をしながら下駄箱まで歩いた。そして俺はいつものように下駄箱を開けた。その瞬間にバサバサという激しい音とともに何通もの手紙が下駄箱から床に落ちる。

「え！？な、何だこれ！」

俺は何が起こったのかよく理解が出来ていない。わかっているのは俺の下駄箱に大量の手紙が入っていたという事だ。そしてそれは今床に散乱している。

「あ、綾香…何その手紙！？すごいね量ね…」

茜ちゃんは目を点にして落ちた大量の手紙を見ている。

「おお！綾香すつごーい！今月はすごい量のラブレターだねー」

後ろから佳奈ちゃんの声がしたかと思うと、いきなり後ろから抱きつかれた。

背中にふにやりとした感覚が…って！ちょっとまって！背中に胸があたつてるって！

「か、佳奈ちゃん！離れて！離れて！」

「え？なんでー？」

胸の感触がががが…佳奈ちゃん…動かなくていいです…

「お願い、そんなに胸…じゃない…体を押しつけないで…」

「えー？何でー？綾香の顔が赤いよ？もしかして重い？私が重いのか？」



！？そうなの！？」

また赤面してるのか…しかしそれは佳奈ちゃんが重いからじゃない！

佳奈ちゃん相手ってやつぱり疲れるな…

あ！俺が佳奈ちゃんの相手をしている間に茜ちゃんが慌てて床に落ちた手紙をかき集めくれている。

俺が落としたのに茜ちゃんに拾わせる訳には…それに気が付くと周囲の生徒が俺達を取り囲むようにして見ているぞ。これは確実に注目的になってる！？やばい…本当に早く拾わなきゃ！  
っていつか佳奈ちゃん、本当に邪魔だ！

「お願い！佳奈ちゃん！離して、私も早く拾わないと！」

俺は体を左右にくねらせて強引に佳奈ちゃんから離れた。

「あ！綾香が逃げた！」

よし！うまく抜けられたぞ…

「ご、ごめんね、茜ちゃん」

「はい、もう拾い集め終わったよ」

遅かった…結局茜ちゃんに全部拾ってもらってしまった。

笑顔で俺に手紙の束を渡してくれる茜ちゃん…俺は茜ちゃんから手紙を受け取ると周囲の視線も気になってしまい無造作に鞆の中に詰め込んだ。

それを見ていた佳奈ちゃんは腕組みをしながら俺に向かって言った。

「やっぱりあれよね！二学期から綾香って良い意味で変わったしさ！最近目立ってるし！男子の注目も集めてるし！体育對抗祭の時の活躍とかさ、そのちっこくてかわいらしい見た目とのギャップがうけてるみたいだし」

いつでも佳奈ちゃんはすっごく楽しそうだよな…

俺は全然楽しくないぞ…こんな事になるなら悟の方が楽だ…こんな事あり得ないし…

そう言えば前にクラスの女の子にも綾香は変わったって言われたよな。

やっぱり俺はいくら綾香の真似事をしていても本当綾香にはなれない。そりゃ当たり前だ…俺は悟だ。

でも、昨日絵理沙が言った事…『みんなにとつての綾香ちゃんは…今の綾香ちゃん、そう、悟君なんだよね…』そうか、そうだよな…今の綾香は俺なんだ…

変だと思う人間がいたとしても、ここまでばれてない訳だし、この先よほど変な事をしない限りはばれる事はないだろう。

しかし！ばれないのは良いのだが、何だこの手紙は！別に俺は人気者になりたい訳じゃないぞ？目立ちたかった訳でもないぞ？おかしい…どうしてこうなったんだ…

「……………おい！綾香あ！おい！反応ないよー！ラブレター貰いすぎて壊れたの？」

え？佳奈ちゃんの声！？

俺は佳奈ちゃんの声で我に返った。すると俺の顔の前に佳奈ちゃんの顔が！？

「うわー！ー！」

俺は驚いて思わず後ろに下がった。佳奈ちゃんもかなりびっくりしている。

「うわー！じゃないよ！綾香がいきなり大きい声を出すから私がびっくりしたじゃん！」

「ご、ごめん佳奈ちゃん。ちょっと手紙の多さに動揺しちゃって…考え込んだじゃったんだ」

と言いつつおこづ…

「なるほどね！ある！ある！あるよねー！考えちゃうよね！」

佳奈ちゃんは俺の肩をぽんぽんと叩きながら笑顔でそう言った。

佳奈ちゃんは疑うっていう事を知らないのか？まあいいけど…

あれ？確か佳奈ちゃんは前回の始業式の日には俺がラブレターを貰った時にもいたぞ？

もしかして俺がラブレターを今日貰うって知っていた？

「ねえ佳奈ちゃん？始業式の日にはラブレターもらった時から今日まで何も入ってなかったのに、何で今日いきなりこんなに手紙が入ってるのかな？」

「えー？綾香知らないの？この学校はね！毎月一日がラブレターの日なんだよ！」

何だそれは…誰がそんな事を決めたんだよ！毎月一日とか何かの感謝デーかよ…

俺は二年間この学校に通っていたがそんなのは知らないし初耳だぞ？

「そんなの知らないよ？そんなのあったの？」

「うん！あったんだよ？私は毎月一日に女子生徒の誰が何通のラブレターを貰うかが楽しみでここに居るんだよね！」

佳奈ちゃん、妙な事を楽しみにしないほうがいいと思うんだけど…他人がラブレターを貰うのを見て何が楽しいのやら…

佳奈ちゃんが今度は茜ちゃんにいきなり背後から抱きついた。

「茜！茜はどうか？入ってるかもよー？見てみて！」

「え？は、入ってないよ、私はもてないもん！何を言ってるの佳奈ったら」

茜ちゃんは苦笑しながら自分の下駄箱を開けた。下駄箱を開けた所で茜ちゃんが固まった。

「どうしたの？茜？どれどれー？」

佳奈ちゃんは茜ちゃんから離れると、今度は茜ちゃんの前に出て下駄箱を覗き込んだ。

「あ！あるじゃん！一通だけど入ってるじゃん茜！よかったね…あれ？あーかーねー？綾香といい、茜といい、なんでこんな事で固まるかなあ…茜！あかねー！」

佳奈ちゃんは茜ちゃんの両肩を持って揺らした。茜ちゃんが勢いよく前後に揺れている…

二度、三度と揺らされた所で茜ちゃんはやっと反応した。

「え？あ！こ、これは何かの間違いだと思っただ！？」

茜ちゃんの気が動転している…見ていなくてもすごくよくわかる。

しかし待てよ？よく考えると茜ちゃんがラブレターを貰ったって事だよな！？

もし万が一でもそのラブレターの相手とうまくいったら…俺は彼氏候補から落選！？うわあああ

「と、とりあえず…その手紙の内容を見て見たら？」

俺も動揺してる…何を言ってるんだ…見させてどうする！

「よかったねえ、茜にもやっと春が来るのか…」

佳奈ちゃんは腕を組みながらうんうんと一人で頷いている。

茜ちゃんに春が！？って今来る必要はない！俺が戻れば茜ちゃんには必然と春が来るはずなんだ！

という事は佳奈ちゃんは知らないんだよね…

茜ちゃんは手紙の宛先が自分だと確認したらしい。

その場で内容は確認しないで鞆の中にそのラブレターを入れた。

その時の茜ちゃんの表情はすこし困ったようにも見えた。

「そ、そう言う佳奈はどうなの？佳奈はラブレター入ってなかったの？」

茜ちゃんは無理に作った笑顔で佳奈ちゃんに聞いた。  
その質問をされた佳奈ちゃんの表情が一気に暗くなった…

「はは…世の中の男共は見る目がないのよ…こんなに可愛い子がこの学校にいるのに…それもフリーなのに…まったく…ふう…」

ラブレターは入っていなかったらしい…

「おはよう」

え？この声は？俺が声のする方向を見るとそこには絵理沙がいる！？

あれ？絵理沙って第二校舎から通ってるんじゃないのか！？何でここここ？

「野木さん、おはよう！」

俺は変な疑問を抱いていたせいで挨拶を返すのが遅れたが、茜ちゃんはすぐに挨拶を返した。

「茜ちゃんおはよう」

「え、絵理沙さん、おはよう」

俺も慌てて挨拶を返した。

「おはよう、綾香ちゃん」

絵理沙は挨拶を済ませると何気ない表情で下駄箱を開けた。  
すると中には数通のラブレターが…って…絵理沙にも入ってるの

か!?

絵理沙はその手紙を無表情で取ると鞆の中に入れた。そして一人で教室の方へと歩いて行った。まったく動揺どころか驚きすら感じてなかったな…

「おい綾香！時間だよ！行くよ」

佳奈ちゃん？気がつく茜ちゃんと佳奈ちゃんが廊下の先へ行っていた。

俺は慌てて上履きを履くと教室へと向かった。

今日の授業も無事に終わった…

「じゃあまた明日ね、綾香ちゃん」

「あ、うんまたね」

そう言ってからふと横を見ると絵理沙は今日もクラスストップで教室を出て行く。

相変わらず速いな…しかし俺はそんな事に気を取られている暇は無い。

鞆の中にある手紙が気になって仕方ないのだ。

さて…どこで確認するかが…そうだな…人が来ない場所…

あそこか、屋上だ。あそこなら人は来ないだろう。俺は屋上で手紙を確認する事にした。

俺はクラスメイトに声を掛けられる前に教室を出た。

そして廊下を早歩きで歩いていると目の前から二年生の女子生徒が…

「姫宮さん！」

俺はびっくりした。いきなりその二年生は笑顔で俺に声をかけてきたのだ。

「え？はい？」

知らない生徒だな…俺に何の用事だ？

「私は二年B組の羽生っていうんだけど！ねえ！私の手紙読んでくれた？」

え？何だ？手紙って？もしかして今朝貰った手紙の事なのか？もしそうだとすると…どうしよう…と考えていると…

「あれ？まだ読んでないんだ？まあいいよ！率直に言つと、私は上級生だけど、姫宮さんとお友達になりたいの！体育對抗祭で貴方の事見てたら気に入っちゃったんだ！ねえ？いい？だめ？」

突然のお友達になりたい宣言だ…気に入っちゃったって…まあ拒む必要もないからいいけど…  
というよりは拒むと後が面倒な気がしてならない…こんな感じだしな。

「あ、はい、いいですよ」

「うわ！やった！これからよろしくねー！じゃあまたねー」



女子生徒は両手を挙げて喜んだ。そして嬉しそうに廊下を歩いて行った。

あれ…行ってしまった…OKすればそれでいいのかよ…

うーん…手紙か…やっぱりこの鞆の中の一つなのかな？

もしもそうだとすると今朝貰った手紙の全部が全部ラブレターじゃないって事か？

「綾香さん！」

俺が廊下の真ん中で考え事していると聞き覚えのある声が…ふと顔を上げるとそこには野田先輩が…

「野田先輩？どうしたんですか？」

「何をこんな廊下のご真ん中で考え事してるの？」

「え？いや、色々あります…ははは」

「今日は何か変ね？まあいいわ、今朝下駄箱に入れておいた手紙？見てくれた？」

え？野田先輩が手紙を俺に？でもまさか野田先輩が俺に友達になつてはないよな？

今でも十分仲良しだと俺は思っているし…

「えっと…まだ読んでないんです…」

「あ、そうなんだ？まあいいか…内容はバレー部に入らないか！だからさ、私ね、綾香さんがどうしても諦めきれないんだ！」

うわ…バレー部への勧誘だ…野田先輩ってまだ俺をバレー部に入りたいのか…

「え、えつと…考えておきます」

「おお！本当？ちゃんと考えておいてよ！また今度聞きに来るからね、じゃあまた！」

そう言つと野田先輩は笑顔のまま廊下を歩いて行つた。

これで手紙の内容が二つ確定した…そして二通ともラブレターでないのも確定した。

これは多分だが、佳奈ちゃんの言っているラブレターの日って違うな…

よし、屋上に行ってから全部の手紙の内容を確認しなきゃ…

俺は急いで屋上へ向かつた。

そういえば久々の屋上だな…

屋上へ上がるのはあの始業式以来だ…

俺は階段を上がりながら始業式の日を思い出していた。

俺は始業式の日に入生転入の絵理沙が北本先生だとか野木が絵理沙の兄貴だとか知つたんだよな…

あれからもう一ヶ月か…月日が流れるのはやっぱり速いよな…

そんな事を考えているといつの間にか屋上へ出る鋼鉄製の扉の前

についていた。

扉には鍵が… かつてない… 開いてるって事は外に誰かいるのか？  
まさか絵理沙とか？ 俺はゆっくりと鋼鉄製の扉を開けて屋上へと  
出た。

周囲を見渡したが誰もいない… そりゃそうか… こんな場所にいる  
はずないよな…

俺はドアを出てすぐのコンクリートのブロックに腰を掛けた。

そして鞆を置くと中から手紙を取りだした。全部で十八通もある  
じゃないか…

白い封筒やらかわいいものやら多種多様な手紙…

俺は順番に手紙の内容を確認す事にした。

っと… まずこれは… 黄色い封筒だ。内容は…

私は一年D組の新井恵です。体育對抗祭のバレエは感動しました。  
クラスは違いますが是非お友達になってほしいです。

……… 何だこれは… これもお友達になってよか…

次… ピンクの… って色で男じゃないってわかる… 男が差し出し人  
だと… きもい…

私は三年B組の梅郷秋子と言います。

貴方の運動センスの良さに本当にすごいと思いました。

そこでお願ひがあります。私達のアーチアリー部に是非入って  
ください。

廃部の危機なんです。貴方ならばきっとやってくれるはずです！  
宜しく願ひします。

……… こいつ、俺が悟だった時のクラスメイトの梅郷じゃないか…

あいつってアーチエリー部だったのか…眼鏡かけててガリ勉っぽいし、部活なんてやってないと思ってたぞ？しかし、アーチエリーとはまた渋い…まあ入らないけどな。期待もされたくないし…

次は…この青いやつ！これこそ…

その手紙もお友達になつてよ手紙だった…

……おい待てよ…十八通中の十二通が女子生徒からのお友達になつて&ファンになりましたの手紙…五通が部活の勧誘やらの手紙…

男からの手紙がないぞ…ラブレターがないぞ…！！

これはどういう事だ！何だかいつぱいくじを引いたのに全部ティッシュだった気分だぞ！

……って待て…いや…いいんだよ。俺は何を期待してたんだ？ラブレターなんて無くていいんだ！

危ない危ない…やはり女の時間が長いから…女としての気持ちまで芽生えてきたのか？

うわあああ！ないない！ない！ない！俺は男だ！

ふう…落ち着け悟…

よし…最後の一通だ…これを読んでミッション終了だ。

姫宮綾香様

僕は姫宮綾香さんが好きです。この前の体育對抗祭での姫宮さんは素敵でした。

ああいう姫宮さんもいいなってます。がんばる姫宮さんを見ていて僕は勘当しました。

きつといつか僕の方から告発します。待っておいってください。

…これ書いたのって始業式の時のラブレターの奴じゃないのか…

何だこの内容は…今度は俺が何故か知らないけど勘当されるらしい…

俺とお前は親子じゃないだろ…おい…

おまけにまた告発か？告白だろ？勘当された上に告発されるって嫌だな…現実にあつたら。

よほど仲の良くない家族なんだろうな…って無意味な事を考えてしまった…

最後の手紙はラブレターだったな…また差出人はないけど…

何だろうか…俺の心の中でラブレターが入っててよかったって思う気持ちか…

ない！ない！俺は男だつて！くそー！

何だろうか…自分で自分が疲れるぞ。

し、しかし、結果は男からは一通だけで一安心だ！という事にしておこう…

しかし、佳奈ちゃんの言つてた毎月一日は感謝デーじゃない…ラブレターの曰つて何なんだ？

やっぱりと言うか、まったく違うじゃないか！単純にお手紙の日の事なのか？

ふう…何だか朝あんなに恥ずかしい思いをして、授業中には手紙の中身が気になって仕方なかった自分が馬鹿らしい…というより馬鹿だ…

あーあ…まあいいや…帰ろうつと…

俺は立ち上がると鋼鉄製ドアのドアノブに手をかけた。

すると横からドスンと何か落ちてきたような音がした。

俺は慌てて音がした方を見るとそこには絵理沙が！？こいつ一体何処から現れたんだ！

「え、絵理沙!？」

絵理沙は誰もいないと思っていたのか、俺がいるのが解るとかなり驚いた表情をしている。

「あ、綾香ちゃん!？何でここに!？」

「絵理沙だつてこんな場所で何してるんだ?つていうか!絵理沙は何処に居たんだよ!」

「あそこ…」

絵理沙が指差したのは貯水タンクのある階段室の上の部分…

あんな場所に上がったのか…どおりで俺も気がつかなかったはずだ…

と言うよりさ…あの場所は結構高いぞ?本当にあそこから飛び降りたのか?

ま、まあ…絵理沙は魔法使いだし…つて三メートル以上はありそうだ…

今の俺にはあそこに登るのも飛び降りるのも無理だな…

「で?あんな場所で何をしてた?」

絵理沙は口を尖らせたままで質問に答えようとしない。だが何となく俺は何をしていたのかが解った。

「朝の手紙を確認してたんだろ?」

絵理沙の表情が変わった。凶星だな…

「で？どうだったんだ？ラブレターだったのか？」

「何で綾香ちゃんに教えないといけないのよ！それとも何？私がいもらった手紙の内容が気になる訳？」

「何だ何だ？すこしご機嫌斜めだな…これは俺と同じでラブレターじゃなかったのか？気になるな…」

「ああ、気になる」

「え！？そ、それってどういう意味よ」

「絵理沙が動揺している？何に動揺してるんだ？」

「意味？そのまんまだろ？内容が気になるからだよ。絵理沙が貰った手紙の」

「絵理沙は頭を斜めに傾げたまますこし考えたとおもむろに鞆の中から手紙を三通ほど取り出した。」

「これが私の貰った手紙よ」

「俺が貰ったカラフルな手紙とは違い、絵理沙の手紙はどれもきちんとしている印象を受けた。」

「それって…全部男からか？」

「うん…」

絵理沙は躊躇せずそう答えた。三通全部が男からの手紙…やっぱり絵理沙はもてるんだな…そりゃスタイルもいいし、勉強もスポーツも万能だし…見た目も…か、かわいいし…くそ…悪いところが見えない…

「絵理沙って人気あるんだ…」

俺は思わず元気の無い声でそう言ってしまった。

「え？何？綾香ちゃんは私がラブレター貰うのが嫌なの？」

すこしだけ絵理沙が嬉しそうにそう言った。

「違う！そうじゃない！」

「じゃあ…嬉しい？」

「嬉しくもない！何で俺にそんな事を聞くんだ」

「別に…」

絵理沙の表情がいつの間にかいつもの表情に戻っている。

よつするには俺に絵理沙がラブレターを貰うのが嫌だと言ってもらいたいのか？

何でだよ…こいつ…俺に気がある訳じゃないだろうし…

ま、まさか？いやないない…あるはずない…だいたい男（悟）の俺には出会ってもないし、そうなる要因がまったくない！俺は何を考えているんだ…

「で、それどうするんだ？手紙を出した相手と逢うのか？」



「まさかあ！無視よ！無視！私はあまり人と接点を取るべきじゃないからね」

「無視するのなら、なんでわざわざこんな場所で手紙を確認するんだ？」

「そりゃ…私だって女の子だし…手紙の内容は気になるし…それに…この手紙を見ている姿をあまり他人にも見られたくないし…」

「じゃあ、家で見ればいいじゃないか」

「ダメなの！家はダメ！絶対ダメ」

野木か？野木にばれると嫌なのか！？まあ嫌だろうな…

「まあいいや…そろそろ下りようか？」

「え？ちょっと待ってよ！私の事ばかり聞いて！綾香のあの大量の手紙！内容どうだったのよ」

絵理沙は少し怒りぎみの口調で俺につっかかってきた。

「あれ？絵理沙は俺が貰った手紙の内容が気になるの？」

ちよつと意地悪っぽく言ってみた。

「き…気になるわよ…悪い？」

絵理沙はすこし顔を少し赤らめながら俺に向かって言った。

って何で顔が赤くなるんだ…そんなに恥ずかしいかよ……………  
もしかしてやつぱり俺に？いや、違う…さっきも考えたけど、そ  
うなる要因がない！

「わかった、絵理沙に手紙の内容を教える」

俺は絵理沙に全部の手紙の内容を話した。

するとさっきまで顔を赤らめてすこしおどおどしていた絵理沙が  
急に大笑いした。

「というか…そこまで笑わないでいいだろうが！」

「おつかしー！男子生徒からの手紙って一通だったんだ？でもすこ  
いねー綾香ちゃん…そんなに女子に大人気だなんて…もしかして…  
中身が男だから！？なんちゃって」

確かにこれが悟の時だったら俺もモテモテだ！って喜んだかもし  
れないが…

今は綾香の姿だぞ…この姿で女子にもって喜ぶとか絶対はない…  
あ！そうだ…茜ちゃんの貰ったあの手紙…ラブレターだったのか  
な…

気になる…今度そつと聞いてみよう。

俺がそんな事を考えていると絵理沙は屋上の出入口の鋼鉄製のド  
アを開けた。

「よーし！私はそろそろ家に帰るね！それじゃまた明日ねー」

絵理沙はそう言うと笑顔で校舎へと入って行ってしまった。変わ  
らず自己中心な奴だな…

仕方ない…俺仕も屋上から校舎の中へと入った。

一応階段の下の方を見たが、もう絵理沙の姿はない…  
ふう…先ほどのラブレターの件もあって、少し気が抜けたな…

俺は階段を一気に一階まで下りるとそのまま下駄箱へ向かった。  
すると下駄箱でめずらしく真理子ちゃんに出会った。

真理子ちゃんは右手に鞆を持っていてもう靴を履いている。

家に帰るのかな？そんな事を考えていると真理子ちゃんも俺に気が付いて笑顔で声をかけてきた。

「あ、綾香じゃないの。今から帰るの？」

「あ、うん」

「そっか！私も今から帰る所なんだ」

珍しいな、真理子ちゃんがこんな時間に帰るなんて。

真理子ちゃんは生徒会の手伝いもあるから、何時もはもう少し遅い時間に帰っているはずなんだけどな…

「珍しいね、こんな時間に真理子ちゃんが帰れるなんて」

「今日は生徒会の手伝いもないんだ。綾香、久々に一緒に帰ろうか？」

「うん」

真理子ちゃんと帰るのは本当に久々だ…九月の初めに何度か一緒に帰っただけだ。

実は仲良し三人組、佳奈ちゃん、真理子ちゃん、茜ちゃんが一番に家が近いのは真理子ちゃんなのだ。

だけど一番話をしていないのも真理子ちゃんなのだ。

俺は真理子ちゃんと一緒に田んぼ道を自転車の家へと向かった。久々に真理子ちゃんとゆっくりと話をしながら帰る。

真理子ちゃんは普段は真面目だけど、本当はすこし砕けた感じで話が出来るともいい子だ。

俺は真理子ちゃんの兄貴の貴裕と昔から仲が良かったせいもあって、かなり小さい頃から真理子ちゃんを知っている。だからか真理子ちゃんがこんなにかわいいのに恋愛感情が沸かなかったのかもしれない。

もし中学生くらいから出会っていれば俺の中の真理子ちゃんに対する感情も変わっていたのかもしれない。

もしかすると好きになった相手も茜ちゃんではなくって、真理子ちゃんになつてたかも…でも彼女にするには今の俺には勿体ないくらいだし、貴裕が許さないだろうが…

って何を考えているんだ！待て、待て悟よ…お前の本命は茜ちゃんだろ？

少しでもそんな事を考えてどうするんだ！この浮気もの！

ふう…いかんいかん…しかしまあ男なんてそんなもんだよな…

家の近くまで来た。俺は真理子ちゃんに挨拶をすると別れた。

俺は真理子ちゃんと話して幾つかの情報を得た。

一つ目は毎月一日は手紙の日だが、あれはごく一部の人がそういう事になればと今現段階で広め中だという事だ。と言うことは噂を広めようとしている人物の一人が佳奈ちゃんだというのは確定だな。しかし、そんな日を作って何が楽しいのだろうか？

二つ目は明後日の日曜日に空手の大会があつて大二郎が出場するらしい…

大二郎には悪いが、俺はどうでもいい。しかし優勝だけはするなと言つておく。

最後は三年生の間では俺が正雄と付き合つている事になつていらしい…

おかしい…正雄は俺と別れたという事にするからとか言つてたはずなのに…

くそ正雄め！嘘つきやがったな。

それに何だ？今度の空手の大会で大二郎が優勝したら大二郎と付き合う事になつてる？

付き合つて何だ！茜ちゃんの約束はデートだ…本当はデートすら嫌だが万が一優勝しても一回だけなら仕方ないか…つて思つてる。あれ？待てよ？仕方ないだろ…これは勝手に茜ちゃんが決めた事だぞ？なんだか最近俺つて優しくなつてるよな…自分でそう思う…

しかし、噂が広まつたままだと現在の俺（綾香）は正雄とも付き合い合つてるし、空手大会を優勝したら大二郎とも付き合つとか…二股をかける女！？このままじゃ綾香のイメージが…

これは早期に打開策を打ち出さないと…

よし、家についた。玄関を開けて…あれ？鍵が閉まっているぞ？俺は鍵を開けて中へと入つた…誰もいない…あれ？おかしいな…母さんはどこだ？

俺は靴を脱いでリビングに入った。するとリビングテーブルの上に手紙が…

綾香へ、悟の事で警察に行つてきます。遅くなるかもしれないので夕食は作っておきました。冷蔵庫の中に入っているので暖めて食

べてください。 母より

げ…俺の事で警察！？そ、そうか…俺ってまだ行方不明のままだった…

世間では俺の行方不明事件は何の解決もしていないんだ！

どうしよう。そっだ…野木に相談しよう…

って！何で野木なんだ…すぐに頭に浮かんだのが野木だったぞ…

でも…変態でいやらしいけど…実際は頼れる人があいつしかいないからな…

悔しい…くそー！よ、よし…油断しないで行こう…

俺は早速制服から私服へ着替えると家を出て学校へ向かった。

続く

## 第12話 星空の見える場所から…

特別実験室：俺は入口の扉の前で唾を飲み込んだ。そしてある程度の覚悟を決めて中に入った。

開けた瞬間に部屋の中に居た野木がこちらを見る。

「おお！綾香君じゃないか！僕にわざわざ逢いに来てくれたのかい？」

やっぱり野木は相変わらずの反応だった。

普通ならば誰か野木なんか逢いに何か来るかよ！と言う所だが…今日は違う。

そつだ、俺は今日は野木に相談があつて来たんだ。

「ああ、今日は野木に逢いに来た」

そつ言つと俺は野木の反応を伺つた。俺は野木の野郎がきつとすごく嬉しいかと思つていた。

だが、俺の予想を覆して先ほどまでのにやついた顔が消えて真面目な表情になつた。

「…綾香君、どうしたんだい？何かあつたのかい？」

やっぱり、野木は魔法管理局の魔法使いというだけはある。俺を見て用事もなく来たのではないと解つたらしいな。いつもはただの変態だが、やる時にはやる人間だな…いや魔法使いだな…

「絵理沙に行方不明にしてもらつた俺、姫宮悟を両親が捜しているんだ」

俺がそう言つと野木は首を傾げた。

「ご両親が悟君を捜している？それは当たり前前の事じゃないのかな？悟君は行方不明になつてるのだからね」

「それはそうだが…でもな、最近俺の両親は元気がないんだ。土日は殆ど外出しているし…きつと俺を捜しに行つてるんじゃないかって…それで俺を見つけれないから…」

「なるほどね…でもそれも今更じゃないかい？君のご両親はずっと前から悟君の行方を捜していたんだろ？」

「そ…それはそうだろうけど…」

確かに野木の言う通りだ…大分前からきつと俺の事を捜していたんだ…当たり前か…

くそう、俺は自分の事ばかり考えていて両親の事を考えてなかった…いやよく見てすら無かった。

野木は自分の机の上にあるポットからコーヒーカップへとコーヒーを注いだ。そしてそれを中央にあるテーブルに置く。

「綾香君、そんな顔をしないで…話を聞いてあげるからソファに座つてコーヒーでも飲んでくれ」

「……………」

俺は何も答えられずにソファに座つた…そして目の前にあるコーヒーに目をやる。



あれ？待てよ…なんでコーヒーが準備されてるんだ？もしかして野木はここに俺が来るのがわかっていたのか？俺はソファアの横に立っている野木を見上げた。野木は笑みを浮かべてこちらを見ている。

「野木…もしかして…お前は俺の心を読んでいたのか？ここに俺が来るのがわかってたのか？」

野木は落ち着いてその質問に答える。

「いや…そうじゃないよ？ただ、僕はいつでも君を受け入れられる体制にしているだけだよ…それは遊びに来た場合でも…今回のように相談に来た場合でもね」

野木は真面目な表情でそう言うとポットの置いてある机まで戻って自分のコーヒーカップにコーヒーを注いだ。俺は不真面目な野木に慣れてしまったせいもあって何だかこういう野木には違和感を感じてしまう…

「そ、そうか…」

野木はコーヒーを入れたコーヒーカップを持って再びソファアの横まで来た。

「で？綾香君はどうしたいと思っているんだい？」

野木はとても落ち着いていた表情で俺に向かって言った。

くそ…俺は何て言えばいいんだよ…

俺が言葉に詰まっていると野木から話を始める。

「そうだな…綾香君のご両親を安心させてあげたいのなら、悟君が生きているけど何らかの事情で戻れないという証拠を見せてあげればいいんじゃないのかな？」

まだ何も言っていないのに野木の野郎は俺の考えを的確に当ててきやがった。

まあ…俺の考えは単純だし、考えそうな事はすぐにわかるんだろ  
うな…

「ああ、野木の言う通りだよ。俺は両親を安心させてあげたいと思ってる…でもどうやってその証拠を両親に見せるんだ？まさか写真を送るとか手紙を送るとかする気か？」

野木はニヤリと笑みを浮かべた。

「そうすればいいんじゃないのかい？写真と手紙を送る…」

「そうすればって…手紙と写真を送れるって事は、家に戻れないのはおかしいって事になるんじゃないのか？そこはどう説明するんだよ？」

野木は微笑を浮かべたまま部屋の一番奥にある自分の机に歩いてゆく。そして椅子に座ってこちらを見て言った。

「そうだね…こうすればいいよ、悟君は記憶喪失だった、そして最近になって記憶が戻った。しかし、記憶は戻ったが帰れない理由がある。だがその理由は両親にはちゃんと伝えておきたい。だから手紙を送った…」

む…また記憶喪失か…そんな理由でいいのか？だが…しかし、こ

のままほっておいても俺（悟）は綾香に姿を変えてここに居る訳でいくら捜しても見つかるはずがない…

元気が無くなつてゆく両親は見ていられないし…そのうち周囲もあまりにも俺の行方不明の日数が長くて騒ぎ出すかもしれないし…野木の言う通りにするのがいいのかもしれないな…

「じゃあ…それを実行するにはどうすればいいんだ？その記憶喪失だった俺が何処から手紙を送るんだよ？まさか海外からか？」

「馬鹿だね、海外から手紙なんて出してどうするんだい？自力で戻れる距離じゃないと説得力が無いんじゃないのかな？逆に心配させってしまう事にもなりかねない」

「ば、馬鹿！？じゃあどこがいいんだよ！言ってみろ」

「まあまあ…怒らない怒らない、折角の可愛い顔が台無しになるよ。そうだね…北海道なんていいんじゃないか？手紙の内容は…」

そつ言つと野木は引き出しから便箋を取り出して手紙を書き出した。

手紙の内容を考えながらなのにもかかわらず、ものの数分で野木は手紙を書き終わった。

そしておれを俺に手渡す。俺はその便箋に書かれた手紙の内容を読んだ…

父さん、母さんへ

悟です。急に居なくなつてしまつて心配をかけてごめん。俺は何故だか知らないけど俺は今北海道にいる。先日まで記憶があやふやで記憶喪失だったらしいのだが、今になって記憶が戻ってきた。本当は電話でもすればいいんだが、ごめん、直接話すと何も言えなく

なりそうだから手紙にする。今俺はある牧場の手伝いをしているんだ。記憶がなかった俺を暖かく迎えてくれた人がいる牧場だ。この家族はとてもよい人達で、俺はここで色々な事を学んだ。そして記憶が戻った今も俺はここにもうすこし居たいなと思っている。妹の綾香の事は心配だけど、でも俺は綾香が何処かで生きていると信じているから。大丈夫だ、きつと綾香は戻ってくる。俺の事は心配しないで！写真もつけておくと、また手紙も出す！そして俺自身が成長したらきつと戻るから。それじゃあまた。悟

俺が読み終わったのを察したのか、いつの間にかまた目の前のソファーに野木が座っていて俺に手紙の内容を聞いてきた。

「どう？内容はおかしくないかい？」

「どうだと言われても…なんだこのドラマのような展開の手紙は…俺はこんなキャラじゃない…と思う…でもまあいいのか？」

「いや…いいんだけど…なんか違和感がないか？」

「仕方ないよ、このくらいの内容にしないと説得力もないからね」

「う…まあ…そうかな…で？手紙に内容はこれでいいとしても…どうするんだ？」

野木は便箋とボールペンを俺の目の前に置いた。

「じゃあ、これをこの便箋に写してもらえるかな？」

「え？俺が！？俺は今綾香だぞ！？」

「そつだね、でも中身は悟君だよな？じゃあ書き方も悟君のまんま  
だと思っんだ」

確かに…言われてみればそうかも…綾香の字を知っているが、今俺の書いている字は綾香の字じゃない…俺の字だな…

「解った…」

俺は野木の書いた手紙を便箋に書き写した。

「よし、終わったぞ？これをどうすればいいんだ？」

「一応、確認させてもらっていいかな？」

俺は野木に便箋を手渡した。野木は手紙の内容を確認すると、ソファーから立ち上がって部屋の隅にある掃除用具入れの前まで行った。そして掃除道具入れの扉をあけると中から箒を取り出した。

箒だと？まさか箒で空を飛んで北海道まで行くなんて馬鹿な事は言わないよな？

「綾香君、今から箒で空を飛んで北海道に行くぞ？」

俺は頭を抱えた。

「どうした？頭をかかえて？早くしたほうがいいだろ？さあ！ここ  
うか」

「待て！今からか？もう夕方だぞ？俺が家戻らないと両親が余計に  
心配するだろ？」

野木は笑顔で俺の横まで来るとぼんと頭を叩いた。

「大丈夫、綾香君の家には寄るから。そしてご両親にはちょっと綾香君をお借りしますって言うから」

え、いや違う…そういう事じゃない…何だそれ…俺は物か…  
だいたい両親がそんなんでOKするはずない…

野木は俺がそんな事を考え込んでいる途中でいきなり俺の脇を片手で抱えて箒に跨がった。

そしていきなり窓に向かって突進！！

「うわ！野木！何するんだよ！それに窓！ぶつかる！」

俺は目を閉じた！が…ぶつかった衝撃などまったくくない…

恐る恐る目を開けると既に学校の外…それも空中！？俺は空を飛んでる？マジか…

俺は野木に出会ってから野木の魔法をまともに見た事がなかった。  
絵理沙の魔法は直接じゃないが、俺が今ここに存在しているから蘇生の魔法を使ったんだとわかる…

今日、俺はついに野木がまともな魔法を使うのを目にしてみました…それも箒で空を飛ぶといういかにも魔法使いらしい魔法…

「箒で空を飛ぶのは初めてかい？」

「当たり前じゃないか！箒で空なんて飛ばないし、じゃない…普通の人間は飛ばないんだよ！あと、なんで箒なんだよ！箒じゃないと空を飛ばないのか？」

「ん？ああ、別に箒じゃなくても飛べるよ」

「……………え」

「いや…この世界だと魔法使いは箒で空を飛ぶように設定されてるようなので、その期待に応えたんだが？気に入らなかったかい？」

「別にそんな設定はない！期待もしてない！俺としてはこんな抱えられていつ落ちるかわからない状態よりは、絨毯とかの上に乗ったほうがいい……」

「ああ、大丈夫だよ、君を持っている手を離しても君は落下しないから。この箒の周りは一種のバリアみたいなもので覆われていて、外部から僕たちは見えないし、中からも出られないんだよ…そう…密室だ……」

「そうなのか…なるほど…だがそのバリアというのは見た目は透明なんだな…」

「まともに地面を見ると体に震えがくるほど怖い…野木が抱えてくれていないと不安で仕方ないな…」

「バリアだつて何かあつて消えたら俺は地面に向かって落下だろ？そうしたら俺は地面に叩き…想像するだけでも恐ろしい…」

「…さて…野木の最後に言った密室という言葉も恐ろしいぞ…おい…」

「わ、わかつたけど…一つ言つぞ！いやらしい事すんなよ」

「ははは、僕がそんな事をすると思つかい？」

「野木は笑顔で俺を見ている…解ってるのかこいつは…お前がすぐにそんな事をするから言ってるんだよ！！前科あるだろうが！と言いたいのが疲れるからやめよう…」

「そうだ…俺は今綾香の姿だけ…写真はどうするんだ？」

「おい、俺は今綾香の姿だけど、悟の姿で写真がいるんだろ？どうするんだよ」

「ん？ああ、それは大丈夫、現地で話すから…」

「現地！？現地って北海道か？」

「ああ、そつだよ」

現地で…何で今言えないんだよ…

俺達は家に到着…到着まで約2分…すごく早い…魔法ってすごく便利だな…

野木は躊躇なくインターホンのボタンを押した。  
するとインターホンから母さんの声がする。警察から戻ったのか…思ったより早かったな…

「私、彩北高校の教諭しております野木と申します」

「あ、はい、お待ちください…」

玄関の明かりが付くと玄関ドアが開いて中から母さんが出て来た。

「はい？野木先生ですか？何のご用でしょう？あら？綾ちゃん？ど



うしたの？」

野木は俺には見せた事のないほどの真面目な表情で母さんと話を始める。

「この度、姫宮綾香さんが天体観測部に入部されました、それで今日の夜に天体観測部での泊まり込み合宿を予定していたのですが…ご両親様にお話を忘れてしまったという事で、私が直接ご説明にまいました」

なんとという先生トーク…野木…お前演技うますぎるだろ…あ、そうだこいつ先生だ…

「あら？そつなの綾ちゃん」

母さんはすこし驚いた表情をすると俺の方を見た。

「あ、うん…ごめんなさい…言い忘れちゃった…あ！そうだ！お兄ちゃんどうだった？警察行ったんでしょ？」

一応、俺の事も聞いておこう……どういふ状況か多少はわかるかもしれないしな…

「ああ…警察に行ったけど、見つかったのは悟じゃなかったわ……ふう……まったく何処に行っちゃったんだろね、お兄ちゃんは」

母親は俯き加減でそう言った。

「お母さん、大丈夫ですよ。こういうと無責任と思われるかもしれませんが、私は悟君が絶対に生きていていつか戻ってくる」と

信じています！姫宮さんからも悟君の話はよく聞きます。妹想いの良いお兄さんだったと…元気を出してください！」

野木は力強く、どこか暖かい言葉遣いで母に向かってそう行つた。母は顔を上げてると野木に向かってお礼を言った。

「ありがとうございます。私達家族も生きていますと信じてます。そして戻って来ると信じています」

母さん…

「母さん、私もお兄ちゃんは生きてるって信じてるからね。信じて待とうよ」

「そうね、そうだよ。うん、そうするわ」

母さんはすこし笑ってくれた。すこし元気が出たみたいだな。早く作戦を実行してもっと元気になって貰わないと…

「母さん、話…戻っちゃうけど…天体観測の事を言い忘れててごめんなさい…」

俺はそう言って母さんに頭を下げた。

「私が責任をもって姫宮さんをお預かりしますので…合宿に参加させてあげてはダメでしょうか？他の部員も姫宮さんの参加を望んでおります」

母さんは野木の表情を見た後で俺の顔をじっと見た。

「先生、励まして頂いたのに申し訳ありませんが、綾香は事故で記憶があやふやになった事もあります…正直あまり外泊なんかさせたくないのです…」

俺（綾香）の事を心配をしてくれてるのか…でも今回は絶対に行かないといけないんだ。

「母さん、私ね、参加したいの！みんなと一緒に天体観測したいな…記憶がなくなってからずっと不安だったけど、今やっと学校にも慣れて…楽しくなってきた所なの…お願い…」

母さんは俺の方を見ながらすこし考えこんだ。そして小さく何度か頷くと野木に向かって言った。

「わかりました…野木先生、綾香を宜しくお願いします…」

「はい、お任せ下さい！私がちゃんとして姫宮さんを見えますから」

「ありがとうございます…」

こうして俺の天体観測…じゃない…北海道行きが確定した…って！待て！そうだ！箒で北海道って軽く考えたけど…到着まで何分かかるんだよ！

そうだ！あれだよ！野木のどこでもアミたいなあの魔法でいいじゃないか！

母さんの前じゃ言えないし…後で言おう…ずっと野木と一緒にいつのもなんとなく嫌だしな…

俺は部屋で防寒準備を万端にしてから外に出た。

外では母さんと野木が待っている。母さんは俺の側に寄ると笑顔で言った。

「綾ちゃん、風邪ひかないようにね」

「うん…」

俺は母さんに手を振って別れた。

野木と並んで歩く…俺が男と並んで歩いてる…相手は野木だが…  
こうして歩きながら野木を見上げると…やっぱり大きい…

カップルで歩く時って女はこういうふうにも男を見上げているのか？まあ野田先輩のような例外もあるけどな…顔の位置も結構上の方なんだな…へえ…

「どうした？僕の顔になにかついてるかい？」

しまった！野木の顔をじーと見ててしまった！

「な、何でもない！」

「そうか…それじゃそろそろ飛ぶぞ？」

あれ？何だ？その気が抜けるような反応は？何時ものように変態オーラを出して僕の事が好きなんじゃないかい！とか言わないのか…

「ほらほら！今度は抱えて飛ぶ訳にもいかないから、僕が箆に跨がったら後ろに座って」

「あ、わかった…」

俺が箒に跨ろうとしたら野木が止めた。

「あ！まっけてくれ、これ置いて…あと別に跨がなくていいから普通に座って。あと、お尻が痛くなったり疲れたらすぐに声を掛けてくれよ？」

野木は箒の部分に魔法で出したクッションのようなものを置いた。何だ…すごい野木が優しいぞ…おかしい…気持ち悪い…

「野木…変な事考えてないよな…」

「ん？何でだい？」

「いつもの野木らしくない…」

野木は俺がそう言うと言と声を出して笑った。

「ははは、僕が単なる変態かと思うのかい？僕は優しくって頼りになっ  
て気配りも出来る変態だよ？」

へえ…そうなんだ…っていうか何だよその優しくって頼りになっ  
て気配りの出来る変態って…

「ほら！そんな怪訝そうな顔をしないで、乗った乗った！早く行っ  
てさっさと戻ってこよう」

「ちょ…わかったよ…」

えっと…普通に座るってどうするんか？自転車の後ろとかに横向  
いて座るあれか？あれはいやだな…女っぽいしな…よし普通に跨る

う。俺は箒に跨ると野木の腰に手を回した…

この座り方も結局は女ポジション全開だな…なんか無性に恥ずかしい…

「よし！行くぞ！ゴー！」

野木のかけ声と同時に箒はすごい勢いで高度をあげてゆく。

下に見える町がどんどん小さくなる…すごい…俺って結構すごい体験してるのかも…

出発してから約一時間…最初はどんなに苦痛かと思っただが、野木の用意したクッションの座りごちがかなりいい…それにバリアのお陰なのか風などの影響がまったくくない…要するにバリアの中は無風なのだ…しかしここはどこだ？真っ暗で何もわからんぞ…

あ！そうだ！どこでもド の事を聞くの忘れてた！

「野木！」

「ん？何だ？」

「出発してから言うのもなんなんだが…何で箒で飛んで行く必要があるんだ？あどこで ドアみたいな魔法じゃダメだったのか？」

「ああ、あの魔法か…あの魔法は移動距離制限があるから北海道とか遠い場所だと無理なんだよね」

「う…そうなのか…」

簡単に無理とか言われたな…まあそうだよな…あの魔法で北海道とか行けるのならいくら野木といえどもあの魔法で北海道に行けるって教えてくれるだろうし…

「しかし、綾香君の側にこんなに居られるなんて…初めてだね」

そう言う野木の声はとてもやさしく感じた…そう、絵理沙の声の優しさに似ている…兄弟だしな…そうだよな…しかし！まだ確実に野木を信用した訳じゃないぞ…長時間一緒にいる分何があるかわからない…

「へ、変な事を考えるなよ？」

「あはは、僕は信用ないね」

何を今更…信用されないような事をしていたのは野木じゃないか…

出発してから二時間たった…流石に俺も疲れてきたな…  
野木は大丈夫なのか？…って何故俺が野木の心配を…

「綾香君」

「え!？」

「よし…もうすこしで北海道だよ？」

びっくりした…心を読まれてて、心配してくれてるんだ！とか言われるのかと思った…

しかし何だよ！おい！もう北海道とか飛行機なみに早いじゃねーかよ！

「おい！早すぎないか？」

「僕の魔法力はすさまじいからね…ふふ…」

何だこの自信満々の態度は…こいつマジですごい魔法使いなのか！？

しかし、こんな早くついてどうするんだ？真夜中で真っ暗すぎて写真も取れないだろうし…

あと、どうするんだ今晚の宿とか…まさか…何処かに二人で泊まり！？

しまった！そこまで考えていなかった…いくら俺が元男だと言っても、現在は女だ！

男女！それも先生と生徒が…うわー！だめだー！

「そうした？綾香君？顔が赤いが…」

うわー野木！何でこっちを見てるんだよ！

くそー俺の馬鹿！なんで想像だけで顔を赤らめて…また女っぽい反応をしてしまったぞ…

俺は男だ…落ち着け…悟…

最近ホントにやばいぞ…俺の中の何かが変わってしまったのか？それとも姿が女だと心も女っぽくなるものなのか？取りあえず何



か言い返さないとな…

「き、気のせいだ!」

…なんとという言い返しだ…

「あははは」

俺の反応が面白かったのか野木が笑い出した。笑うなよ野木…

「早く着きすぎてどうするんだろ?夜だし写真も撮れないし…今晚はどうする気だろう?まさか二人でどこかに泊まりなのかなとか考えていたんだろ?」

こいつ…俺の心を読みやがった?

「言っておくけど、僕は君の心を読んでないよ?飛行魔法は結構な魔法力を使うからね…飛行しながら他の魔法効果を維持するのは結構辛いんだよね…そう…変身もね…」

な…読んでないのに俺の考えはバレバレなのかよ!まあ、顔を赤らめてれば変な想像をしているのってばれだしな…

しかし、何だ?飛行魔法って結構大変なのか?アニメとかで魔法使いはそんな大変そうに空なんて飛んでないぞ?実際の飛行魔法は大変なのか…それで?飛行しながら他の魔法を維持するのは大変?変身も?

絵理沙が北本先生になつてた時のように野木も変身しているんだよな…本当の野木ってどんな姿なんだろ…

「大丈夫、変身魔法を解くような事はないから」

ぐ…俺はそんなに考えを読みやすいか…魔法で心を読まなくても余裕なのかよ！

「で…早く着きすぎてどうするの…」

素直に聞くからもういい…

「ん？言ったじゃないか？天体観測をするんだよ…今日は良い天気だ…星も綺麗だ…北海道は空気も澄んでいて綺麗だから星がよく見える…」

天体観測！？天体観測は単なる外出する為の言い訳じゃないのか？本当に天体観測なんかする気なのか？

「え？天体観測って…言い訳なんじゃ？」

「半分はね…でもほら見てごらんよ…この星空…綺麗じゃないか…手を伸ばせば届きそうだよ…綾香君は星は嫌いかい？」

「別に…そんな訳じゃ…」

野木は意外に乙女チックなんだな…俺はなんとなく空を見上げた…そこには…

すごい…本当にすごい星空だ…埼玉にいたときなんてこんなに綺麗な星空を見た事なんてなかった…

「綺麗だろ？もう少しで富良野だよ…そこで僕と二人で天体観測をしようか」

もうすぐ富良野って…いつの間に!?!さっきはもうすぐ北海道だ  
って言ってたのに!?!

そんな事を考えていると篝はゆっくりと下降を始めた…

「よし…下りるよ…」

俺は何故か北海道の富良野まで来て野木と二人で天体観測をして  
いる…

おかしい…北海道に来た理由は、俺が生きている証拠としての写  
真を撮り、それを手紙と一緒に両親宛に投函する為なのに…

何故俺は野木と二人で本当に天体観測をしているのか…

「綾香君?どうしたんだい?ほら綺麗だろ…」

「え?あ…うん…綺麗だな…」

二人で草原に並んで天体観測か…

……待てよ…男女が二人で天体観測!?もしかして…これはデー  
トっていうやつなのか?

いや、待て…おれは中身が男だ…野木も男だから…これはデー  
トじゃないよな!

いや!しかし、俺は今女だから…だからやっぱりデート!?初デ  
イトは茜ちゃんと二人でって決めていたのに!

「うわー!こんなの嫌だ!」

俺は思わず声を出してしまった。野木は驚きもせず、逆に呆れた表情で俺を見ている。

「ふう…また変な事を考えてるのかい？いつも大変だね…綾香君は」  
くそー何だかそんなに落ち着いて言われるとムカツク！

こんな事になったのも元はと言えばお前の妹の絵理沙が俺を間違  
って妹の綾香で生き返られたのから始まつてるんだろ！？あれが無  
ければこんなに悩みの多い女にはならなかった…じゃない男だ、俺  
は男なんだよ！ふう…

しかし…何でだろう？よく考えてみればなんで俺は絵理沙を恨ん  
でないんだ？

野木も本気で嫌いにならないんだろう？俺ってやっぱり優しいのか  
な…

自分で自分もよく解らないな…まあ恨んでも仕方ないけどな。

「二つ言っておくよ？一つ目、これは天体観測であってデートでは  
ない。二つ目、君はとてもやさしいよ…僕は最初、恨まれても仕方  
ない事と思っていたからね…」

え！？…心を読まないでもそこまでわかるのか！？

「すまない…君の考えが強いから、僕に中に勝手に流れ込む…もっ  
と優しく考えてくれないか？」

え…何だよそれ…流れ込むって…それに優しく考えるってどうす  
るんだよ！

「おい、流れ込むって何だよ…心を読むのってというのは魔法じゃな  
いのか？」

野木は溜息をついた…

「これは…本当は魔法なんかじゃないんだ。これは僕の素質というか、生まれ持ったこの能力を持ち合わせているんだ。」

野木は再び溜息をつくと今度は星空を見上げた。

「今のようになんか落ち着いた状況だと周囲の人々の考えが自然と僕の中に流れ込んでくる…僕はこの能力に対して制御出来るのはなるべく自分で心を読みにいかない…それだけなんだよね…でも、一つ助かっているのは他の魔法を使っていればこの能力は発動しない…それだけかな」

「そうだったのか…野木は無理に心を読みにいってる訳じゃないのか…」

「しかし、こんな事を聞いたらこれから先怒鳴れなくなるじゃないか…」

「すまん野木、今までそんな事とも知らずに何度も怒鳴った…」

「いや、いい…それが普通の反応だ。誰も心の中を覗かれたり知られたりして気持ちいいとか嬉しいって思う人間はいないだろ？」

「まあ…そうだな」

「絵理沙はこんな僕が嫌いなんだよね…僕は絵理沙の考えすらわかっってしまうから」

「……………絵理沙…だからあんなに野木の事を嫌っているのか…」

「ごめん、くだらない話ばかりしてしまつて…ほら！流れ星だよ…人間は流れ星が消えるまでにお問い合わせをすれば願いが叶うつていうんだろ？」

「あ…ああ…そういうのもあるかもな…」

「あ、また流れ星だよ」

野木は流れ星をじつと見つめている…

「ん？どうしたんだい？君はお願いしないのかい？越谷茜ともっと仲良くなれるようにとか？」

君はお願いつてこいつ何かお願いでもしたのか？

お願いか…茜ちゃんね…そりゃもと仲良く…つて！野木！やつぱり知つてたのか！

体育對抗祭の前に絵理沙に教えただろ！

「おい！なんで俺が茜ちゃんの事を…知ってるんだよ…」

「ああ、最初に出会つた頃、君の中から僕に流れ込んできたんだ。これは不可抗力だよ？」

「野木は不可抗力かもしれないけど、俺が茜ちゃんの事を好きだつて…絵理沙に教えただろ」

「どうだったかな…忘れてしまつたよ…それよりほら！また流れ星だよ」

くそ…誤魔化しやがった…絵理沙の教えたのは絶対に野木だ…  
まあしかし終わった事だ…いちいち怒っても仕方ないな…

「おい、野木…お前さっき何かお願いしたのかよ…」

「ああ…お願いしたよ？君の妹、姫宮綾香さんが早く戻ってきますように…そして君が早く悟君に戻れますように…ってね」

野木は笑顔で即答した。

「え…」

本気で言ってるのかよ…こいつ…本当だとするといい奴すぎるだろ…

「ふう…ちょっと寒くなってきたな…ほら」

野木はそういつと羽織っていたコートを脱いで俺の背中から掛けてくれた…

何だこのシュチュエーションは…ドラマでよくあるぞ…こついの…

この後二人は良い雰囲気になって…うわ！

「お、おい！何だよ！別にこんな事をしなくっても俺は平気だ！それに俺は男だ！気にするな！」

俺は慌ててコートを取ると野木に返そうとした。

「何を真つ赤な顔してるのかな？また変な事を考えていたのかい？僕は今魔法で体を温めているから大丈夫だよ？」

「べ、別に変な事なんか考えてない…」

くそ…考えてたなんて言えるかよ…

「ほら、綾香君、十月初旬といつても北海道は寒いだろ？コートをちゃんと羽織って…僕は魔法を使う事で君の心を読まないようにしているんだから…あと綾香君に風邪をひかれても困からね」

「え！？………そうか…コート…ありがとう…」

そついわれると返すに返せないじゃないか…

「綾香君、ほら…ちゃんと天体観測してないじゃないか…折角なんだから星空を見てごらんよ」

そつ言つて野木が星空を指差した。俺は言われるがままに星空を見上げた。

本当に綺麗だな…手を伸ばせば届きそうだ…俺は届くはずもない星空に手を伸ばした。

すると目の前に流れ星が…俺は流れ星に願いをかけた…もちろん綾香が無事に戻ってくるようにと…

その後野木は俺に星座について話をしてくれた。

星座について語る野木はまるで子供のようにはしゃぎ、そして何処とも無く子供な印象を受けた。



「うーん…」

俺はゆっくりと目を開いた…ここは？どこだっけ？  
ただっ広い草原のご真ん中に俺はいる…  
そして横には…

「やあ、綾香君おはよう…ちょうど夜明けだ…写真を撮るにはいい時間だね」

野木！まさかずっと起きてたのか！？

「おい…野木…まさかお前寝てないのか？」

「ああ、寝てないよ？寝ると変身魔法が解けるからね…」

「そ、そうか…」

こいつ…自分の変身が解けた姿をそんなにも俺に見せたくないのか？

まで…疑う訳じゃないが…俺は何かされた形跡がないかを確認した。

ふう…見たところ変な事もされていなさそうだ…

「よし！早朝の牧場！良い感じじゃないか…早速写真を撮ろうか？手紙はもう昨日つくったしね…」

「待て！俺は今悟じゃないぞ？どうするんだ？」

野木は立ち上がると俺の頭に手を乗せて目を閉じた…

そして多分だけど呪文を唱えた…すると…なんだ？俺が大きくなつてゆく！？

「よし…これで綾香君は見た目だけ悟君だ…」

「え？」

野木は何処からともなく手鏡を出すと俺に見せた。

「うわ！俺だ！声まで戻ってるぞ！？」

「君の奥底にある悟君としてのデータを引き出して、悟君に変身させてみた」

「すげー！こんな魔法が使えるなら最初から言えばいいじゃないか！」

俺は嬉しくなつてその場から移動した。その瞬間に野木の手が俺の体から離れた。

すると俺の身長が急に縮まったような…

「あー…僕の魔力で姿を変えてるから、僕から離れると元の綾香君の姿に戻ってしまうよ？」

「え…そうなのか…」

ずっと悟の姿じゃいけないのかよ…まあそうだよな…ずっと悟の姿でいられるのなら、もつと先に教えてくれただろうしな…

「さあ、写真を撮るよ？ほいっと」

その瞬間…野木が牛になった…おい…それも何故に乳牛なんだよ…

「農家と言えば乳牛だ！さあ！写真を撮るぞ！」

牛の姿、それも女声で話すなよ…って雌牛だから女声なのか…  
しかし…何でも変身出来るんだな…関心する。

「僕に右手をかけて、笑顔で…東に見える木の方を見て」

「おい、野木、カメラはどうするんだ！？野木の言う方向には何も  
ないぞ！」

「大丈夫だよ！」

「え？」

「さあ！格好つけてー！はい！チーズ！」

俺は慌てて笑顔をつくるった…本当に写真が撮れているのか？  
と思っていると野木が元の姿？に戻った…

そして野木は右手からいきなり写真を出した。まるで魔法のよう  
に…そうか魔法か…

「ほら！撮れた！ばっちりだね」

野木の手元にある写真には、悟が乳牛の世話をしている写真が…  
っておいまて…

俺はさっきそんな格好をしてないし、なんだよこれ？

「これは思念合成写真！妄想シリーズだ！ははは！」

「何だよそれ…」

「僕の周囲のフィールドに存在するデータを複写して、魔法力で多次元のフィールドに移し、そこで再度構成を組み直し、自分の好みで、そう、こちらでいう合成写真を作るんだ」

「よくわからないけど、すごい技術なんだな…じゃない魔法なんだな…」

「これで全部OKかな？じゃあ郵便局に投函してから戻ろうか…」

しかし…今更だけど、こんな手紙を俺の親が信じるのかな…

そこまで考えていなかった…仕方ない、手紙の到着と同時に俺がすごい喜んで信用させるしかないか…そうだな…

俺はすべての用事を済ませると埼玉の自宅へと向かう…

今度は昼間の飛行だ。行きのそうだったが、帰りもまったくもって快適だ…

バリアの中だと日差しも暑く感じない。俺はこちよい揺れと、疲れもあつてうとうとと眠ってしまった…

…  
…

途中でうつすらと覚ました…何か…俺の顔にあたる…髪？何だろ

う…

俺はほぼ働いていないであろう思考のままうつすらと目を開けて野木を見た…

…あれ…野木？じゃない？誰だ…そこには野木じゃない誰かが…茶色い長い髪…

しかし顔を確認する前に俺は再び眠りに落ちた…

…

「綾香君！ついたぞ？」

俺は野木の声で目を覚ました！

つてここは俺の部屋じゃないか！なんで俺の部屋に居るんだよ！おまけに野木までいるし！

「あれ？何で俺の部屋にいるんだ？何でだよ」

「え？戻ってきたのはいいんだが、君が寝ていたから仕方なく…」

「仕方なく？」

「窓をすり抜けて侵入した！そして君をベッドに寝かせてあげたのだ！そつとやさしくね」

野木がすごくいやらしい顔をしている…こいつ…

「触ったのか？おい！体に触ったのか！」

「そりゃ触らないとベッドに寝かせられないじゃないか」

く…ま、まあ…今回は許してやろう…俺の為にがんばってくれたんだ…

「僕はすばらしい発見をしたんだよ！綾香君！」

「発見！？な、何なんだよ」

野木の眼鏡が一瞬光ったように見えた…そして野木は俺の胸を指差すところ言った。

「君の胸が成長している！さっき確認の為に触ったから絶対に成長しているよ！安心してくれ！」

俺は顔が急に熱くなった。そしてそれと同時に両手で胸を隠した。

「ごーごら！何やってんだよ！今回の件ですごく良い奴だと思ったのによっぱり変態だったのか！」

「何を言ってるんだい？僕は前からこんな人物だが？」

「そんな事を威張って言うな！」

「では綾香君！用事も終わったし僕は戻るからね！それでは！」

野木は立ち上がると前のように窓に手を当てた…そして窓を開けて中に入っていった。

俺はその時の野木の苦痛の表情を見逃さなかった…あいつ…今回がんばりすぎたんじゃないのか？

すごく疲れていたのに、俺にそれを悟られないようにわざと最後にこんな話題を持ってきたのか？

だが真相を聞こうにももう野木は部屋にはいなかった…

しかし！目の前の床にあるこれはなんだ！目の前には箒があった…

「何だよ！箒が置きっぱなしじゃねーかよ！いらねーよ…」

くそ…こんなもん忘れて行きやがって…俺は箒を持つと部屋の端に立てかけた。

箒を立てかけた瞬間に何かを思いだした…

そうだ…帰りの飛行中…俺は一瞬目を覚まして…野木が…別人になつてたような…

茶色の長い髪だった…あれが野木の本当の姿なのか？顔まで見れなかったけど…

絵理沙と兄弟だからな…髪の色が同じなのは理解できるが…あいつロングなんだ…

俺はロングの男って…でもあの顔立ちだと似合いそうだよな…まあいいや…

あいつがどんな姿だろうが俺には関係ない…  
しかし疲れたな…まだ眠いぞ…よしもう一度寝よう…

待て！よく考えたら母さんと父さんは俺が家にもう戻ってるって知ってるのか！？

野木の野郎は窓から入ったって言ったよな！？

俺は慌てて階段を駆け下りた！すると両親の姿は無く、テーブルの上に手紙が…

また…両親は警察か…大丈夫、もう少しで行かなくてよくなるからな。

俺は手紙が無事に到着する事を祈りつつ部屋に戻った。

続  
く



### 第13話 野木と絵理沙と謎の女子生徒の関係 前編

ドタバタした週末が終わり月曜日がやってきた。

先週、北海道から投函した手紙は多分あと数日もすれば家に届くはずだ。

しかし…手紙が届いたらといって母さんや父さんは元気を出してくれるだろうか…

正直うまくいくか心配だったりする。

だが、元気を出してもらう為にわざわざ北海道まで行ったんだ。もしダメだとらショックが大きいぞ。これは絶対に成功させないとな…

よし、手紙が届いたら俺も綾香として両親と一緒に喜ぶしかないな。

そうすればきっと上手く行くはずだ！

俺はそんな事を考えながら制服に着替えた。着替え終わるといつものように姿見を見る。

髪型…制服…リボン…

「よし…これでOK」

全てを整えて終わると俺は鞆を持って部屋を出た。

俺は階段を下りるといつものようにリビングを覗き込む。

そこには、いつものように朝食の片付けを終えた母さんがいる。

「あら？もう学校に行く時間なのね」

母さんは壁時計を確認すると笑顔でそう言った。

前まで何も感じていなかった母さんの笑顔。

でもこの笑顔は多分本当に心の底から出ている笑顔ではない。

きつと母さんは俺（悟）の事が心配で仕方ないのだからな…

でもそんな事を今考えていても仕方ない…大丈夫だ。きつと手紙がくれば本当の笑顔になる。

俺は自分にそう言い聞かせた。

「綾ちゃん、忘れものない？大丈夫？」

「うん、大丈夫だよ」

そして俺もいつものように笑顔で返事を返した。

ちなみに、昔の俺（悟の時）は登校時に親に挨拶などした事はない。

俺が母さんに挨拶をし始めたのは、綾香がいつも笑顔で両親に挨拶をしていたからだ。

綾香になつてきているのだからという理由で仕方なく挨拶をするようにしたはずだったのだが…

最初は小っ恥ずかしくて毎日が苦痛だった。

しかし慣れた今となつては挨拶をするのが普通になつてしまつて…  
いる…それどころか挨拶をしないと何かをやり忘れた感じすらするようになった。

うーむ…俺って確か硬派な不良を目指していたはずなのに…硬派どころか健全な真面目少女になつてしまった…まあ仕方ないか…今は綾香なんだしな。

とは言いつつも悟の姿に戻つても俺はきつと挨拶をするだろうな。

あれ…これじゃ真面目でさわやかな不良になるのか？そんな不良なんていないよな…

っていつかそんなの不良じゃないじゃないか…まあいい、戻ってから考える！そうだ！そうしよう。

「綾ちゃん？綾ちゃん？どうしたの？」

おっと…くだらない事を考えすぎた…

「え？なんでもないよ」

「そう？それならいいけど…」

「それじゃ行ってくるね」

俺はそう言うのと靴を素早く履いて玄関を勢いよく飛び出した。

今日も良い天気だな…

俺は車庫に置いてある自転車に乗りいつもの登校路をいつものように学校へと向かう。

すっかり周囲は秋模様だ…田んぼも知らない間に稲刈りが終わっている。

俺が田んぼの方を見ていると風がピュウと吹き抜けた。

その瞬間に全身に震えが走る。

うわ、寒いなあ…

先週までは残暑も厳しくって本当に秋は来るのかと思っていたくらいなのに、いきなり気温がぐっと下がったなあ。

再び風が吹き抜けた。

くそ…露出している足がやたら寒い…

俺は肌けた足を見ながら思った。女って大変なんだな…

しかし…今この気温ですら寒いと感じる状態で冬になったらどうすればいいんだ？

どう考えても肌がこんなに露出しているしむちゃくちゃ寒いだろ…

俺は女として冬を越えた事がないから対策がわかんねーぞ！？俺は寒いのが苦手なんだ！

でも誰に聞くんだ…防寒対策とか…本物の綾香なら防寒対策なんて知ってて当然だし…

という事は…仕方ないな…そのうち絵理沙にでも聞いてみるか…

しかし、男なのに何でこんな心配しなきゃいけないんだよ…

まったたく…

学校に到着した。

俺はいつものように駐輪場に自転車を置くと下駄箱へと向かう。

そして自分の下駄箱まで行き、上履きを取った所で後ろに人の気配を感じて振り返った。

すると真後ろには図体のでかい男が！？

俺は一瞬びっくりして固まってしまった…何だ！？もしかして…俺がゆっくりと顔を上げてみると図体のでかい男の正体はやっぱり大二郎だった。

しかし大二郎の顔は緊張をしているのだろうか、笑顔がまったくない。

それにしても一体何の用事だ？こんな朝っぱらから…  
俺はこんな場所で何か事を言われると大迷惑なんだが…  
また前みたいに注目を集めるのはごめんだぞ。

その時、俺はふと先週真理子ちゃんに教えて貰ったある事を思い出した。

そう言えば大二郎のやつ…この前空手大会があつたんだ。

ま、まさか！？大二郎が空手大会で優勝したのか？

いや、まて…もし優勝していたらもつと嬉しそうな顔をするよな…  
…こんな表情のはずがない…

いや…解らないぞ…俺に優勝報告をするのにすごく緊張しているだけかもしれない…

色々な考えが頭の中に浮かんでは消える…

あーダメだ！くそ！こうなつたら直接聞く！それが一番早い！

俺は真意を確認すべく大二郎に声をかけてみる事にした。

とはいいつつ遠回しに聞こう…俺が大二郎の事を気にしてると思われたくない。

「あの…清水先輩、何が私に用事ですか？」

俺がそう言うと大二郎は小さく頷いた。

そしてふうと小さな溜息をついた後にいきなり大声で俺の名前を叫んだ。

「姫宮綾香！！」

大二郎の声が周囲に響く。馬鹿！何やってんだよ！

さっきまであんなに緊張して無言だったのにいきなり大声でフルネームで呼び捨てか！

俺が慌てて周囲を見渡すと予想通りに俺達は登校してきた生徒達の注目の的になっている。

やばい、また注目の的になってるじゃないか！

また何か大声出されたらやばい。取りあえず大声出すなと文句を言わないと。

「あの！先輩、声が大きいですよ」

俺はむっとした表情をわざと作ると、きつめだが少し声を押さえて大二郎に言った。

大二郎は周囲を俺に言われてから周囲を見渡すと、しまったという表情を浮かべた。

「す、すまん…」

大二郎は今度は流石に小さな声で俺に謝った。

「で…要件は何ですか？」

大二郎は周囲を気にしながら少しトーンを落とした声で俺に向かって話し出す。

「聞いてくれよ、俺…空手大会の決勝までいったぞ…」

そう言った大二郎の表情には笑みが浮かんでいる。

決勝…決勝までいったのか？って待てよ…優勝したじゃないのか？決勝？

確か大会は一日で終わるはずなのに終わらなかったのか？

「決勝ですか？決勝戦は行われなかったんですか？」

「そうだ。色々あって決勝戦は今週末の土曜日の開催になった…」

色々っていうのが多少気になるが、取りあえずは決勝戦が順延になつたらしいな…

で…大二郎は俺にその報告の来たのか…そんな報告の為にわざわざ来なくてもいいのに。

まあ大二郎にとっては俺とデートが出来るか出来ないかの一大事だしな…

つて！そうだった！デート！どうせ優勝なんで出来ないって軽く考えていたけど、大二郎が決勝まで残つたという事は…もしかすると優勝の可能性があるって事だよな！？

そりゃ大二郎は空手のセンスが確かにありそうだったが、こんなに短期間に地域の大会で決勝まで残るとは…予想外だ…

もし優勝したら俺は約束通り、大二郎と本当にデートをしなければいけないのか！？

頭の中に大二郎とデートをする俺の姿を思い浮かべてみる…

デートと言えば…

駅前で待ち合わせ、一緒に映画、一緒にランチ、そして帰りに手を繋いで良い雰囲気になつて…

うわ…嫌だ！そんなの嫌だああああ！

何で俺が大二郎とデートなんか…俺は男だ！見かけは女でも中身は男なんだ！

とは言つてもなあ…茜ちゃんが約束してしまつた事だ…流石に男として約束を破る事は出来ない…となると…今出来るのは大二郎には申し訳ないが、決勝戦で負けてもらう事しかないな…

「おい？姫宮？」

「そうですか…決勝まで残ったんですか…」

おれはつい残念そうな声で言ってしまった。  
すると大二郎は俺の返事を聞いて少し悲しそうな表情になる。

「やっぱり姫宮は俺が決勝まで残っても嬉しくないのか…」

そう言った大二郎から笑みが消えていた。

しかし、大二郎には申し訳ないが俺にとって嬉しい報告ではない。  
だけど…折角決勝戦までいったんだし、大二郎のやる気を削ぐの  
もかわいそうだ…

デートはしたくないが、ここは大人の対応をしておくか…俺は大  
二郎と違って大人なんだ。

「いえ、そんな事ないですよ。決勝戦がんばってくださいね」

そう思って俺は笑顔でそう言ってやった。

すると大二郎はすごく嬉しそうな表情に変わる。  
なんて単純な奴だろう…やっぱりこいつは絶対に女に騙されるタ  
イプだな…

俺が苦笑を浮かべていると大二郎はいきなり俺の両肩を持った。

「な、何ですか？」

「姫宮！俺は絶対優勝するからな！お前の為に！そして…優勝した  
ら約束通り俺と付き合ってくれ！」

「え！？」



ちよつと待て！突然何を言い出すかと思つたら！？それにまた大声出しゃがって！

俺はデートする約束はしたが、付き合うなんて約束をした覚えはないぞ！？

俺は再び慌てて周囲を見渡した。するとやはりというか再び生徒達に囲まれている。

折角、生徒が散らばっていったのに…この馬鹿！

「何だ？清水先輩が空手大会に優勝したら姫宮と付き合う約束なのか？」

「また姫宮さんが清水先輩に告白されてるよ…」

「あれ？確か姫宮さんって桜井先輩と付き合ってるんじゃない？」

ほら…色々な声が聞こえてくるし…くそ…やばいぞ…

俺としたことが、大人の対応だったつもりが墓穴を掘ったか…

それに何だよ？俺が正雄と付き合ってる噂まで広まっているのか？

取りあえずは、この場の問題を解決しないと…

この馬鹿にそんな約束はしてない！って言つてやらないとな。

「ちよつとごめんなさい！」

そう思っていた所で、俺達を取り囲む生徒の後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

俺が声の方向を見てみると同時に生徒の間を割るようにして茜ちゃんが見れた。

「清水先輩！ちよつと！今大声で言つてた事！」

茜ちゃんは現れたかと思つたら、両方の腰に手を当てると少し怒

った表情で大二郎に向かって言った。

「私との約束は付き合つとかそういう約束じゃないですよ？何を言ってるんですか？」

大二郎は頭を右手でかくと首を傾げた。

「あれ？違つたか？確か…お前とそういう約束した記憶があるんだが」

「違います！あの時は…」

そこまえ言つと茜ちゃんは周囲にきよるきよると見渡した。

茜ちゃんは周囲の生徒の事を気にしたのでろう、大二郎に向かって右手でこつちにきてと動作をすると、再び生徒の間を割つて下駄箱の隅のほうへ大二郎を連れて行った。俺は慌てて二人に付いて行く。

茜ちゃんは再度周囲を見渡してそれほど生徒がいないのを確認すると、大二郎に向かって小声で言った。

「清水先輩、綾香と付き合いたって…という気持ちはわかりますが、私とした約束は空手大会に優勝したら綾香とデートが出来る権利一回だけです」

茜ちゃん…その気持ちはわかるって…俺は別にわかってほしくはないんだが…

「そ、そうだったっけ？」

「そうですね。私はそういう約束をしたんです。それに優勝してないんだから綾香には近寄らないでください！優勝しない限りは近寄らないって約束じゃないですか」

「いや、しかし…決勝までいった報告はしておこうかなと」

「男ならちゃんと約束を守ってください！」

茜ちゃんは学年も体格も上の大二郎にズバズバと言いたい事を言っている。

やる時はやる子だと思ってたけど…なんかかっこいいぞ…流石俺が好きになった子だ…

大二郎はというと、茜ちゃんが苦手なのか苦笑を浮かべながら首を左右に傾げている。

その動作がものすごく怪しい…

「約束は守ってるつもりなんだが…」

「言い訳は聞きません！そういう事ですので！行こう、綾香」

茜ちゃんは俺の手を持つと大二郎を放置したままその場から立ち去った。

大二郎からだいぶ離れた所で茜ちゃんは小さく溜息をついた。

どうやら気を張っていたらしい。そりゃそうだよな、男で体格のいい先輩を相手にあれだけの事を言ったんだし…

「ありがとう…茜ちゃん」

俺は取り合えずお礼を言った。

「下駄箱の周りに人だかりが出来てたから何かと思ったら、清水先輩の声が聞こえてきてびっくりしちゃったよ」

茜ちゃんは笑顔でそう言い返した。

「私も突然大二郎…じゃないや…清水先輩が来てびっくりしちゃった」

「そうなの！？まったく…清水先輩ったら…綾香には近寄らないって約束したのにね」

「また来たら私に言ってね。私から清水先輩に言うから」

茜ちゃんはそう言ってにこりと微笑んだ。

「え、でも…茜ちゃんに悪いし…」

「綾香？今回の件は私に責任あるから…あの時は勢いで約束しちゃったけど…本当は綾香にちゃんと聞いてから約束すればよかった…ううん、約束なんてしなきゃよかった」

茜ちゃんは先ほどとは打って変わっていきなり意気消沈したような表情に変わる。

「ううん、いいいいいよ。清水先輩はああいう性格だし、あの約束がなかったら今でもしつこく毎日告白されていたかもしれないもん」

「ありがとう綾香、綾香ってやっぱり優しいね…」

え？俺が？優しいとかない…優しいのは茜ちゃんの方だ。

「そんな事ないよ、茜ちゃんのほうが優しいよ」

「え？私が？そんな事ないよ…あ…そうだ、一つ聞いてもいいかな」

茜ちゃんはすこし真面目な表情でそう言って俺の方を見る。

「え？うんいいけど？」

「あの…綾香は…桜井先輩と付き合ってるんでしょ」

…待て！茜ちゃんが変な勘違いをしてる！今すぐに誤解を解かないと！

「待って！それ違うよ、私は桜井先輩と付き合ってるんじゃないよ！あれはデマなの！嘘なの！」

茜ちゃんはあれ？という表情で俺を見た。

「そうなの？私はてつきり綾香と桜井先輩が付き合い始めたかと思ってた…私は何で綾香が桜井先輩と付き合うのかなって不思議に思ってたんだけど」

「でしょ？私が桜井先輩と付き合いはずないし、誰かと付き合い時には絶対に茜ちゃんに言うもん。だいたい誰から聞いたの？私が桜井先輩と付き合ってるって」

「私は野田先輩から聞いたよ」

え？野田先輩だつて！？やばいそこまで噂が広まってるのか！早急に対応しないと大変な事になりそうだ。

「野田先輩…もう！桜井先輩に言わなきゃ。変な噂を広めないでつて…」

「ごめんね綾香…先に聞けばよかったね」

「うっん、茜ちゃんは悪くないもん。気にしないでいいよ」

どうやら茜ちゃんには俺と正雄が付き合っていないと理解してもらえたらしい。茜ちゃんは物わかりが良くて助かる…

「よかった…私、綾香が桜井先輩と付き合ってるのに清水先輩とあんな約束しちゃっていいのかなって心配しちゃったよ…」

そんな変な心配してくれてたのか…真面目だな茜ちゃんは。

「あ！いたいた！茜！綾香！何やってるの？もう始業時間だよ！」

どこからか真理子ちゃんの声が聞こえる。教室の方が？

教室の方を見ると、そこには真理子ちゃんがいる。

「早く二人とも教室に入って！先生来るわよ」

話に夢中になっていたら、そんな時間になっていたのか！俺と茜ちゃんは急いで教室へ入った。

今日の一時限目の授業は理科だ。

という事は野木か…

俺は鞆から教科書とノートを出して机の上へと置く。すると絵理沙が俺の方をじっと見ているのに気が付いた。

何だ？絵理沙の奴ちらちらこつちを見やがって…

俺は絵理沙に声を掛けてみた。

「絵理沙さん？どうしたの？」

絵理沙は俺と視線を一瞬合わせたかと思っただけすぐに逸らした。

そして「何でもない…」と言うと教壇の方へ顔を向けた。

絵理沙は俺に何か聞きたそうな感じがするんだけど…もしかして北海道に行った件かな…

そんな事を考えていたら一時限目の始業のベルが鳴った。

数分が経過…

おかしい…とつづくに授業が始まる時間なのに野木が現れない…

あいつが授業に遅れるとか今まで無かった…

俺はちらりと絵理沙の方を見た。絵理沙の表情はいたって冷静で、野木が来ない事を知っているようにも見えない。

絵理沙は野木が来ない原因が何かを知ってるんじゃないのか？

もしかしてさっき俺を見て居たのは、それを俺に伝えたかったからか？

いや、そうだったらさつきあんな態度はせずに俺に伝えただろうか？

野木が授業にこない原因は俺と北海道に行った事が関係あるのだから？

俺が再び絵理沙に視線を向けると、その瞬間にガラガラと教室のドアが開く音がする。

視線を開いたドアの方へと向けた。ドアを入れて来たのは野木では無くクラスの担任の先生だ。先生はここまで急いで来たのか少し息を切らしている。先生は教室の入口付近で二・三度深呼吸をすると教壇の前へと進んで行った。そして教壇に立つを教室を見渡しながら言う。

「ええと、今日の一時限目は理科でしたが野木先生が急遽お休みになった為に自習とします！皆さんはこの用意しましたプリントで中間テスト対策の勉強をして下さい」

クラスがどよめいた。それは野木が休みだという事と自習と言いながらも中間テスト対策の勉強をしないといけないという事だろう。

まあ俺はテストは嫌いだし、プリントなんてやるつもりは全くない。

「はい！皆さん静かに！プリントを配りますよ」

そうやって先生は自習用のプリントを配り出した。そしてプリントを配り終わると静かに自習するようにと言い残して教室を出て行った。

しかし、先生が居ない教室で静かに勉強なんか普通しないだろう。この学校はそういうガリ勉強徒ばかりな学校じゃない。俺も勉強



は嫌いだ。

俺がそう思っていると案の定男子生徒が私語を始めた。

真理子ちゃんは私語を止めてちゃんと自習するようにと言っているが收拾はつきそうもない…

すこし騒がしくなった教室で俺は色々と考え事をしていた。

コツ…俺の席の上に丸まった白い紙が転がる…

俺はふと絵理沙を見ると指で紙を開くと仕草をしている。

先生がいないのだから直接話してもいいんじゃないのか？話たらずい事なのか？

そう思いながら俺は丸まった紙を開いてみた。

すると中には《あいつと何処に行ってたのよ！》と書いてあるじゃないか…

何だ？野木は絵理沙には何も話して無かったのか？

俺は紙に《野木に何も聞いてないのか？》と聞いて絵理沙の机へと紙を投げた。

絵理沙が紙の内容を見るとすぐに返事を書いて紙を戻して来た。

《何も聞いてない。帰って来た日からずっと家で寝てる。何があったのか教えて》

何だと！？あの日からずっと寝てるって…

そうだ、野木が俺の部屋から出て行く時のあの表情…

すごく疲れてそうに見えたのは…やっぱりすごく疲れてたのかよ…

俺の為にがんばってくれるのはいいが、こういう風に隠されるの

はすつごく嫌だ。

くそ、なんか嫌悪感に襲われる。

ホント野木の野郎は何で言ってくれないんだよ。

最初に飛んで行くとすごく疲れるんだ。とか言えばあんな強行策に出なかつたし、休憩だつて入れたのに…

別に一緒に部屋じゃなかつたら一泊くらいしてもよかつたんだ。

俺は野木と北海道に行った事実を紙に書いて絵理沙に向かって投げた。

絵理沙はその紙を取るとすぐに広げて読む。

そして内容を読み終えると小さく溜息をついたように見えた。

絵理沙はこちらをちらりと見ると今度は新しい紙にまた何かを書き始めている。

そしてまた俺の机の上に投げた。

《わかつた…教えてくれてありがとう》

読み終わってからすぐに絵理沙の方を見たが、絵理沙はこちらを見してくれない。

ちよつと考え込むような表情を見せて教壇の方をすつと見ている。

絵理沙も野木の事が心配なのか？やっぱり兄弟だしそれが普通だよな…

そう思っている俺も野木が心配になってきた。

俺はおもむろに机からノートを出しそれを千切るとその紙に《野木が心配だから逢いたいんだけど》と書いて丸めて絵理沙の机の上に投げた。

絵理沙はこちらを見ていなかったが、流石に紙には気が付いた様子で転がった紙を手にとるとこちらをちらりと見た。

俺は絵理沙に読めという仕草を見ると、絵理沙は紙を広げて読み始める。

そして読み終わるとこちらを見た。

俺がまだ見ている事を確認すると右手と左手の人差し指で小さくバツをつくった。

声には出さないが、口の動きがダメと言っているようにも見える。どうやら野木とは違ってはダメらしい…

しかしダメと言われても、はいそうですかと言うような素直な俺ではない。

今日の放課後にでも逢いに行こう。

野木が休んだのは俺にも原因がある訳だしな。

放課後

俺が机を片付けていると珍しく絵理沙が声を掛けて来た。多分、俺が野木に逢いに行くのを阻止するつもりだろう。

「綾香ちゃん」

「何ですか？」

「今日は本当にダメだからね」

ほらきた。俺に野木と逢ってはダメだと言いたいらしい。

「え？何でダメなの？」

「何でもダメなの！」

何だそれは…子供が断る時の理由じゃあるまいし…よし、ここは取りあえず…

「ふーん…わかった…」

こう言っただけで大丈夫だろう。でも俺は逢いに行くがな。

「ふーんとか言っても来るつもりでしょ？本当にダメだからね！」

くそ…ばれてる…俺は信用されてないのか？

「わ、わかったって言うてるでしょ」

「本当？信じるからね！それじゃ私は帰るから」

何だかここまで言われるとちょっとムカつくぞ…そうだ…少しからかってやる…

「私、本当は絵理沙さんに逢いにいきたくったのになあ…」

俺が冗談でそう言った瞬間に鞆に手を掛けていた絵理沙が固まった。

そしてゆっくりと俺の方を見る。

「な、何を言ってるのよ!? そ、そんな事を言ってもダメなんだから!」

何だ!? 何か動揺してるぞ…

「ぜ、絶対ダメだからね! じゃ、じゃあまたね!」

絵理沙は少し慌て鞆を持った。そして一度は教室を出ようとしたが再び戻ってきた。

「あれ? どうしたの?」

「あのね… また今度なら… 遊びに来てもいいから…」

絵理沙は俺と目を合わさないようにぼそりとそう言った。

な… 絵理沙!? よく見ればすこし照れているようにも見える…

軽い冗談のつもりが、かなり大きく引っかかってしまったぞ… っていうかマジ絵理沙って俺の事を?

わかんね… 俺が冗談を言ったってわかっててわざとこっぴどい態度に出たのか…

本気で俺の事を気にしているのか… 流石にこれは直接聞けない…

あーくそう… 変な事を言うんじゃないかな…

何かじつと見られてるし、返事だけしておこう。

「う、うん、また遊びにいくね」

「うん… それじゃあ… またね、綾香ちゃん」

「じゃあまたね…」

絵理沙はそそくさと教室を出て行った。

ふう…行ったか…うーん…何だか余計な問題を増やしてしまったような気がするぞ…

…もし何でだか知らないが絵理沙が俺の事を気にかけてたとすると…

俺は茜ちゃんが好きな訳で…でも別に絵理沙が嫌いな訳ではないが…

あーもう考えるのやめた！これは考えるべきじゃない！

俺は自分で自分にそう言い聞かせた。

よし、取りあえず絵理沙は帰ったし…俺も野木を探しに行く準備しよう…

と思ったら…

「あーやーかー！ねーねー！綾香」

この声は！佳奈ちゃん！？

ゆっくりと声がした方向へと顔を向けるとすでに目の前に佳奈ち

ゃんが！

その瞬間！俺はいきなり抱きつかれてしまった！

「やったー！綾香を捕まえたー！」

そう言いながら佳奈ちゃんは俺の腕にぎゅっぎゅっうと胸を押しあてる。

な！？しまった！油断した！最近このシチュエーションが無かったから警戒してなかった…

「ねえ綾香あ？今日って何か用事ある？ねーねー最近一緒にどこも

いってないじゃん！だからさーたまにはどこか行かない？」

取り合えず言いたいのは胸を押し当てるのはやめて欲しい…  
あと顔も接近しすぎ！もっと離れて！

「どうしたの綾香？顔が赤いよー？」

佳奈ちゃんが胸を押し当ててるからじゃん！とは言えない…  
そうだ！俺は今日野木に逢いに行かないといけないんだ。  
こんな事してる…じゃない、されてる場合じゃないぞ。  
申し訳ないけど断ろう。

「えっと…ちよつと風邪ぎみで熱があるかも…だからごめん…」

我ながらすばらしい言い訳だ…

「えー…折角どっかいこうかと思ったのに…風邪なの？そっかあ」

「本当にごめんね…」

「いいよ！いいよ！うん！風邪が治ったらいいこーねー」

そう言つと佳奈ちゃんは俺から離れて真理子ちゃんの方へと走って行った。

「ねー真理子！今日ひまー？」

ふう…助かった…久々だったから避けられなかったし…思いつき  
り抱きしめられてしまったな…

……腕にまだ胸のやわらかい感触が残ってるぞ…

佳奈ちゃん前より胸が大きくなったのかなあ…前よりも感触が…  
って！違う違う！何を考えてるんだ俺は…

「えー？暇じゃないのー？ざーんねーん！」

真理子ちゃんにも断られたのか？

しかし、すごい佳奈ちゃんって…俺もあれくらいポジティブに  
なりたいよ。

教室の時計をふと見るともう15分も経っている。

やばい、時間がなくなる前に行かないと…

俺は教室のみんなに帰る素振りを見せて教室を出て行った。

教室は出たもののどうしよか…

第二校舎の書庫からあいつの家に直接行くか…

いや、待てよ…家にはきつと絵理沙がいるはずだ。

もし野木が起きていて既に家に居なかったら？それはそれで絵理  
沙に捕まりそうだな…

さっきの態度からみても絵理沙に逢いに来たと言えば絵理沙は怒  
らなさそうだけど…

ダメだ…何だかそうするとすごく危険な感じがする…

それに一度捕まると野木を探す時間がなくなりそうだ。

よし、可能性は低いかもしれないけど先に学校内を探してみよう。

まずは特別実験室に行ってみるか。家は…最後だな…

俺は廊下を歩いているとふと今朝の事を思い出して立ち止まった。  
そうだ！正雄の件もあったんだな…あれはどうするかな？

ほっとく訳にも行かないけど今日は取り合えず野木に逢うのが優  
先だな。



途中で正雄を見つけたら文句を言おう。いなかったらまた明日にでも文句を言えればいいか…

俺は再び特別実験室へと向かって歩き出した。

よし、この角を曲がれば特別実験室だ…俺は廊下を左へと折れた。そして特別実験室のある廊下へと出る。

俺が廊下に出たその瞬間、ガラガラという音がしたかと思うと特別実験室から一人の女子生徒が出て来た。

あれ？絵理沙？何でここに？

俺はてっきり絵理沙が出て来たのかと思った。しかし、よく見れば特別実験室から出てきた少女は絵理沙にとっても似ているが絵理沙ではない。

何処かで見たとような記憶があるな…この女子生徒は…

思い出したぞ！そうだ！あの時の…体育對抗祭の時に教室にいたあの女子生徒だ！

しかし、何で特別実験室から出て来たんだ？あの女は何者なんだ！？

俺は野木に逢いに来た事を忘れてその女子生徒を追っかけた。

その女子生徒は俺の存在にすぐに気がついた様子で、こちらを伺いながら小走りで逃げて行く。

なんで逃げるんだ？あの子は絵理沙や野木と関係があるのか？いや、どう考えても関係ない訳がない…

絶対に何か関係があるんだ！直接聞いてやる！

その女子生徒は特別実験室のある廊下から階段へ向かう。

そして勢いよく階段を上がって行った。

俺も特別実験室の前を通過すると急いで階段を上げる。

何だこの女は！俺が本気で追っかけているのにまったく追いつかないじゃないか。

俺はそれでも懸命に追っかけた。そして俺は息を切らせながら最上階まで上ってきた。

廊下へ出て左右を見渡す。しかしそこにあの女子生徒の姿はない…何処へ？俺は再び階段へと戻った。

もしかして屋上か！？しかし、屋上に行っても出口が一箇所だぞ？逃げ場を失うだけだろ…

しかし、この校舎ではここにしか階段はないし、という事は屋上まで上がったとしか考えられないのだ。

よし…

俺は階段を屋上へと駆け上がる。

はあはあ…よし…屋上だ…俺はドアを開くと外へ飛び出した。

屋上に出た俺はすぐにあの女子生徒を見つけた。

グラウンドが見える南側のフェンスの前にあの女子生徒が立っている。

そしてこちらをじっと見ている…まるで俺を待っていたかのように…

良く見れば絵理沙に似たその女子生徒は息をまったく切らしてない。

信じられない。あんなスピードで階段を駆け上がったのに…この女は何者なんだ…

俺はゆっくりとその女子生徒に近寄って行った。

続く

第13話 野木と絵理沙と謎の女子生徒の関係 前編（後書き）

次回投稿まで少しお待ちください。

今はシビアですが、ここを抜ければ落ち着く予定です。多分…

第14話 野木と絵理沙と謎の女子生徒の関係 後編

俺はゆっくりと女子生徒へと歩み寄る。

女子生徒はすこし笑みを浮かべてこちらを見ている。

ドキドキ…

俺は緊張しているのか自分の心臓の鼓動が体を伝わるのが解る…

この女は誰なんだ…

俺の目の前にいる絵理沙に凄く似ているこの女子生徒の正体は…  
この学校の制服を着ているが、多分この女はこの学校の生徒ではない。

それにしてもあの吸い込まれそうな透き通った赤い瞳…不思議な何かを感じる…

この女、絶対に野木や絵理沙と関わり合いのある人物だろう…きっと魔法使いだ…

………

徐々にその女子生徒との距離が縮んでゆく…

さつきから感じているこの不思議な感覚…どこかで…

俺はふと似た感覚を思い出した…これは？まさか…この女は…そうなのか！？

俺の中で思った事、それは…

こいつは…もしかして野木じゃないのか？

どこかで感じた感覚だと思ったが…これは野木と一緒にいた時の感じと似ている。

そう思ったが次の瞬間にはそれを否定する考えが浮かぶ。

いや待てよ…こいつは女だぞ…野木は男だよな…

でも野木は魔法使いだ…牛にだって変身出来たんだぞ？男にだって容易に変身出来るだろう…

いや待て？逆に野木がこの姿に変身してる可能性もあるのか！？いや待てよ…もしかして野木じゃないのかもしれない。

くそ…一瞬は決定的かと思った俺の考えだが、考えれば考えるほど違うんじゃないかと思ってしまう…

そう考えているうちに俺はその女子生徒にあと二メートルの距離にまで来ていた。

目の前まで来たのはいいが緊張で声が出ない…

俺は唾を飲み込むとなんとか落ち着こうとした。

その時、目の前にいる女子生徒が先に話しかけてきた。

「何を緊張してるんだい？姫宮悟君」

その一言に俺は驚いて、そして一步退いた。俺の心臓の鼓動は激しさを増す。

こ、この口調は…こいつ…やっぱり野木！？

しかし確信が持てない俺は聞く事すら出来ない…

「どうしたんだい？今の僕は君の心が読めない状態だから絶対とは言えないけど、君の考えは合ってると思うんだけど？」

何だと？俺の考えが合っているって？

しかし、俺はあまりにも考えすぎてどれが合っているのかわかんねえ

「おや…そんな顔をして…考えすぎてしまったのかな？ふう…君の困った顔をあまりみたくないし…」

そう言つとその女は俺に向かつて歩きだし、俺との距離を数十センチにまで詰めてきた。

そしてその女は先ほどまでの冷たい笑顔とは打って変わり、優しい笑顔で俺の目を見つめながら言った。

「僕だよ、野木一郎だよ」

その女は自分の事を野木一郎だと言つた。

え？何だと？野木なのか！？本当なのか？嘘だろ…

野木かもしれないと予測していたのにも関わらず実際に野木だと言われるとさつきまではそうかと思つていても信じられなくなる。

「あれ？驚いたかい？ごめんごめん…驚かそうなんて思つてなかったんだ」

野木だと言つたその女は優しい笑顔のままそうと言つた。

「ほ、本当に野木…なのか？」

その女は俺の質問に答えずにくるり反転するとグラウンドの方へ歩いて行つた。

そしてフェンスの前まで行くと「うーん」と大きく背伸びをしてから顔だけをこちらに向けて言った。

「悟君、僕が君に嘘をつく理由があるかな？」

俺はその女の目を見た。嘘をついているようにはとても見えない…

しかしだ…何で今になつて俺に正体を明かすんだ？このタイミングで俺に正体を明かす意図は何なんだ？それに何で今まで男の姿だったんだ？何で先生だったんだ？

俺は野木だと確信した瞬間から別の疑問が大量に脳裏に浮かんでは消える。

「おいおい悟君、そんなに悩まないでくれよ、僕には僕の都合があつて今まで隠していたのだからさ」

その女は俺の心を見透かしたかのようにそう言った。

「だけどあれだぞ！いきなり目の前の女が僕は野木だよって言われて、はいそうですかって言えるとも思ってるのか？」

俺が強めな口調でそう言うとその女は腕を組んですこし首を傾ける。

「まあ確かにね…いきなり言われたら驚くよね」

「そうだろ？俺ももしかすると野木なんじゃないかなって思ってたけど、まさか本当に野木だったなんて…まだ半分しか信じられないぞ…」

俺の困っている表情がおかしいのか、野木と名乗った女はいきなり笑い出した。

「あははは！」

「笑うな！」

俺が怒鳴ると「ごめんごめん」と笑顔で謝ってきた。

野木なのであろうその女は正体を明かしたにも関わらず何の緊張感も感じていない様子だ。

それどころか今の表情は野木一郎の時よりも明るく感じる。

「おい…、何て呼べばいいんだよ…の…野木って呼んでいいのかよ」

「ああ、今まで通り野木でいいよ」

「野木…何で俺に正体をばらしたんだよ。いいのか？」

野木はにこりと微笑むと突然俺の手を取った。

「え！？な、何だよ？何をするんだ！？」

俺がその行動にびっくりしていると、野木は何を言わずに俺の手を引っぱって屋上の入口近くにある座れそうなコンクリートの台の前まで連れて行った。

「ここに座ろうか？」

「ここに座ろうかって…」

目の前にあるコンクリートは確かに座れそうではあるが、幅が一メートルくらいしかない。

これに二人で座るとかなり密着、ようするにべったり引っ付いた状態になる。

男の野木ならまだしも今は女だぞ？何で俺がべったり二人でここに座らないといけないんだよ。

俺がそう考えている間に野木は先に座っていた。

「どうしたんだい？早く僕の横に座って」

座りたくないけど、取りあえずは座らないと話が始まらなそうだ



な…

そう思った俺は仕方なく野木の言われるがままコンクリートに腰掛けた。

やっぱりべったりだった…

「おい！狭すぎるぞ！それに近すぎるぞ！」

俺がそう言うと野木は「別にいいじゃないか？女同士なんだし」と笑っている。

その時に風が吹き抜けた…そして野木の髪がふわりと俺の顔にあたった…

この髪感覚は…確か…

そうだ、北海道から戻る時に野木が…この時に俺はこの女は野木だと確信した。

「悟君…」

「何だよ…」

「僕が女だったって知った今、どんな感じだい？」

「え？」

俺は予想外の質問に少し戸惑った。突然女だったと知ってどんな感じか？何だそれは…

「どんな感じって…そりゃ驚いた…でも、野木は魔法使いなんだしこういうのもあるんじゃないかって思ってる…」

「へえ、君は不思議な奴だな？」

俺が真面目に答えているのに野木にいきなり不思議な奴と言われた！

「おい！それはどついつ意味だよ？じゃあどついつ風に答えて欲しいんだよ！」

「いや、僕も別に特別な答えを求めていた訳じゃないから正解はないんだけどね」

「何だよそれ…」

「さつき答える時、悟君は本当に僕が野木だって信じた様子だったからね」

「信じるも何も俺はお前が野木だって確信しているからな…」

俺がそう言つと野木は一瞬驚いたような様子を見せたがすぐに元の柔らかい表情に戻った。

「そっか…確信してる…ね」

野木はゆっくりと立ち上がると空を見上げた。

「ははは、変な質問をして申し訳なかったね！」

野木はそう言つて数歩前になるとくるりと左に半回転して俺の方を向いた。

「さて！何で僕が君の目の前に野木一郎の姿で現れたのか？今になって正体を教えたのは何故か？を話してあげるよ」

野木は笑顔でそう言った。

しかし何だか妙に野木のテンションが高い…

「まずは野木一郎の姿で君の前に現れた理由だけど」

「ああ…」

「ここは気になるポイントだな…理由は何だ…深い意味でもあるのか！？」

「僕はどうせ正体を隠して君の前に出るんだっいたら男性の姿の方がいいかって思ったんだ。僕は男に変身するのが趣味だから男の姿の方がしっくりくるしね」

ちよつと待て！何だそれは！

あまりにも想定外の答えに俺は心の中で転けてしまった…

「おい！男に変身するのが趣味だから俺の前に男の姿で現れたって！？嘘だろ？」

「え？何か悪いかな？」

「男に変身する事は悪いとは言わない。しかし！男に変身する事が趣味という事には賛同できない！危ない奴がする事だろそれ？この人間の世界でも男が女の格好したり、女が男の格好をしたりするが、俺はそういう奴と友達になりたいと思わないぞ！」

「へえ…じゃあ君の好きな越谷茜が男装が趣味だったらその瞬間に嫌いになるかい？」

何だよその例は？あり得ないだろそんなの！

「おい、茜ちゃんはそういう事をする子じゃないぞ！何を言ってるんだ！」

「例えだよ、例え、ムキにならないでくれよ。どうなんだい？」

「こつも冷静に応答されると調子が狂う…」

くそ…うーん…そうだな…

「そ、それは…その時になってみないとわからない…」

「あははは、悟君は矛盾してて楽しいな」

野木はお腹を抱えて大笑いした。

くそーこいつムカツク！

「笑うな！取りあえずお前が妙な質問をするから俺の考えを言っただけだろ？俺は男装とか女装とか好きじゃないって言ったんだよ！」

「でも、そういう君だって今は女になってるじゃないか？」

「待て！これは絵理沙が魔法で俺を綾香と間違っして生き返らせたからだろうが！！俺のせいじゃないぞ！」

俺はついムキになって怒鳴った。そんな俺を見ながら野木は再び笑いだした。

「あはははは！面白いな悟君は」

うがああ！こいつ超ムカツク！くそー！

「あーわかった！わかった！野木は趣味で俺の前に男の姿で現れたんだな！もういいよ！」

俺は半分切れるると野木にそう言ってやった。

すると瞬間に野木から笑顔が消えた。そしてふうと小さく溜息をついた。

「ごめん：僕が男性教師として君の前に現れた事は、本当はちゃんとした理由があるんだ」

「え！？」

ちゃんとした理由だと！？何だよそれは：最初から言えよ。

「僕が君の心を分析した結果、男・年上に対する抵抗の方が低いとわかった。だから男、それも教師になつたんだ。別に絵理沙が教師をしてたから真似て教師になつた訳ではない。僕はこれでも悟君の監視役なんだよ。君に嫌われてしまつたら元も子もないから野木一郎の格好で君の前に現れた」

なるほど：一応は考があつて野木一郎の姿で：しかし一つ突っ込めるとすると、俺は出会つてからすぐに野木を嫌つてたと思うぞ。

「なるほど：野木、理由があるならちゃんと最初から言えよ……」

「ごめん、君と話すのが楽しくってね、つい…」

野木は本当に申し訳なさそうにそう言った。

「もういい…わかったよ…さっきの男装が趣味っていうのも冗談なんだな」

「いや、それは間違いなく僕の趣味だよ」

「……………」

男の姿だろうが女の姿だろうが、やっぱり野木と話すのは疲れる…

「さて、次に何で今になって悟君に正体を明かしたのかだけど」

これには何か深い理由があるのか？この前の一件との絡みか？それとも別の何か？

「それは単純に悟君に正体を隠しきれない状況になったからだよ」

「え？それはどういう意味だ？」

何だ？別に深い意味はないのか？

「ちょっとね、僕の魔法力が尽きてしまって魔法が一切使えない状況になっているんだ。ちょっと無茶をしすぎちゃってね」

「それって…もしかして…北海道に俺を連れて行ったせいかな？」

「原因はそうだけど…でもね、悟君は悪くないよ。僕の魔力消費計

算のミスだ」

「いや、でも…俺があんな相談をしたから…だから野木は…」

「僕は悟君が元の姿に戻るまで協力する義務があるんだ。あれくらいはやってあげて当たり前だよ」

「そうなのか…」

「だけど何でだろうね…あの時の僕は君には正体を知られたくないと心の何処かで思ってしまった…余計な魔力を使いすぎた。結局そのせいでこうして正体を明かす羽目になってるのにな」

「おい、そういえば魔法使いは人間に正体がばれちゃダメなんじゃないのか？だから野木は俺に正体をばらしたくなかったんじゃないのか？」

「いや、悟君であれば最初から正体をばらしても問題はなかったんだ…君はすでに絵理沙が魔法使いだって知っている訳だ。要するに魔法の存在も知っているからね」

「確かに知ってるけど…魔法の存在を知っていたらいいのか？」

「そうだよ？じゃなきゃこんなに簡単に正体をばらすはずないじゃないか。僕はそんなに馬鹿じゃないよ？」

「そ、そうか…へえ…それにしても野木、今更こう言うのもなんだけど本当に絵理沙にそっくりだな…まるで双子みたいじゃないか」

「双子みたい？当たり前じゃないか僕と絵理沙は双子だよ？」

「…そうか…そうだよな…え？マジで双子!？」

「うん」

やっぱり双子なのかよ。確かにそっくりすぎるよな…違うのは瞳の色と声の質が多少かな…

これで双子じゃないって言う方が違和感あるか…そうだよな…

しかし、良く見れば本当にそっくりだ…スタイルも抜群だし…綺麗だし…赤い瞳も魅力的だ…

もったいないな…女のままであれば相当もてるだろうに…

その時！ボタン！という音とともに屋上の鋼鉄製のドアが勢いよく開いた！

「はあはあはあはあ…」

ドアが開くと同時に校舎の中から絵理沙が飛び出して来た！

絵理沙はすぐに周囲を見渡すとすぐに俺達を発見しようだ。

はあはあと息を切らしながら俺と野木を睨んでいるぞ…

「はあはあ…ふう…こんな所に居たんだね…それもそんな格好で…」

なんでここに絵理沙まで来るんだ？それも何故かかなりご機嫌斜めだぞ…

俺は目の前に立っている野木の表情を見ると野木の表情が強ばっている…

これはいつもの野木が絵理沙に怯える表情と同じだ。

「どういう事？私には何も言ってなかったよね？北海道に綾香ちゃ



んと一緒に行く事も…私に黙って本当の姿を綾香ちゃんに教える事も…」

絵理沙はうつむき加減で体を小刻みに震わせながらそう言った。

「いや！待て絵理沙！今日は別に本当に本当の姿を悟君に教えるつもりなんてなかったんだ！これはなりゆきで…」

「何？悟君だなんてなれなれしく呼んじやって…あんた何様？」

いつもの絵理沙じゃない…怖い…絵理沙が怖いぞ…

「べ、別に悟君は悟君なんだし、悟君って呼んでもいいじゃないか！？それにいつも僕はそう呼んでるぞ？」

絵理沙は無言でずんずんと野木の前まで歩いて行くと、いきなり野木の胸ぐらを掴んだ。

「え？何ですって？だいたい、私は輝星花きせいに家で大人しくしてなさいって言ったでしょ！何で学校に来てるのよ！それも私の制服を勝手に着て！魔力が尽きて何も出来ないのに学校にくるとか馬鹿じゃないの？で？何？悟君に見つかったから正体をばらしたって事？ねえ！」

絵理沙がすごい剣幕で野木に怒鳴った。

「待て、絵理沙！それは言い過ぎじゃないのか？僕にだってやりたいた事はあるんだ！実験室に用事があったからたまたま学校に行っただけだ！別に悟君に正体をばらそうとか思ってた学校に行った訳じゃない！たまたま悟君に見つかったってしまっただけから正体を教えてあげよ

うと思っただけじゃないか！僕が悟君に正体をばらすと何か問題があるのかい？僕が女だという事実を悟君に教えて、絵理沙から悟君を奪い取るとでも思ったのかい？」

野木が絵理沙にそう言った瞬間に絵理沙の顔が真っ赤になった。

「な！なに言ってるのよ馬鹿！」

そう怒鳴ったと同時に絵理沙が俺の方に視線を向けた…

俺と一瞬視線が合ったかと思うとすぐに視線を外した。絵理沙の赤い顔がさらに赤くなる。

何だ？何だ？絵理沙…お前…本気で俺の事が！？

「輝星花の馬鹿！なんで悟君がいる前でそんな事を言うのよ！」

絵理沙はすこし泣きそうな表情で野木に向かって怒鳴った！

野木は困惑した表情で絵理沙の前に立っている。

何だ…俺はどうすればいいんだ！？

「う、ごめん、絵理沙…ちょっと言い過ぎた…」

絵理沙は野木の制服から手を離れた。

「…もういい…悟君にばれちゃったじゃないのよ…どうしてくれるのよ…」

正面きつては言えないけど、多分一番困っているのは俺だと思っ  
んだ…

正直、絵理沙が俺を好きだとしてもどう対応すればいいのかまっ

たくわからん…

野木が実は女だったって事も俺にとつては結構な事件だったのに、こんな状態になってもうどうすればいいのさ状態だぞ…

そんな困惑している俺に向かって絵理沙がダメ撃ち攻撃を仕掛けてきた。

「悟君…もうばれちゃったから言っておくけど…私は君の事が好きだからね…」

絵理沙は突然俺に告白すると俺の返事も聞かず、そして顔も見ずにグラウンド側のフェンスに向かって走って行った。

そして思いっきりジャンプすると2メートルはある柵をゆうに越えてフェンスの向こう側へと消えていった…

え？越えていった？って！待て！ここは屋上だぞ！あいつ何をやってるんだ！

「絵理沙！」

俺は絵理沙の名前を叫びながら慌ててフェンスの横まで走って行った！

そしてフェンスの下を覗き込むとそこには地面に丁度着地した絵理沙の姿が…

え！？おいおい…ここは屋上だぞ！？なんでこんな場所から飛び降りて平気なんだよ…

魔法でも使ったのか！？あ、そっか絵理沙は魔法使いだっ…

いや待て！絵理沙は今魔法は使えないはずだぞ！？

何という事だ…魔法使いの基本性能はこれほどのものだったとは…もはや運動能力が高いとかそういう次元を越えてるだろ…

「ふう…行ったか…一時はどうなるかと思ったよ…」

俺が驚愕の表情でフェンスから下を覗き込んでいると、後ろから気が抜けた野木の声が聞こえる。

そつだ、まだ野木がここには残っていたんだ…

「おい！野木！絵理沙がここから飛び降りたのにまったく驚かないのか？」

野木は驚く様子もなく俺の横まで歩いて来るとフェンス越しに下を覗き込んだ。

「まあ、この高さなら平気じゃないかな？」

と素っ気無く言った。どうやらこの程度は平気らしい…

なんか頭が痛くなってきたぞ…もういい…もう気にしないようにしよう…

「そつか…まあ人間じゃないしね…もういい…」

俺がそう言つて野木を見ると野木が頭を俺に向かって下げている。何だ？何をしてるんだ？

「色々申し訳ない…色々迷惑をかけてしまつて…」

野木は俺に向かって頭を下げたままそう言った。

こんな場所で頭を下げられても俺は困るぞ！？

「別にいいよ、頭を上げるよ…悪い事した訳じゃないだろ？」

俺がそう言つと野木はゆっくりと頭をあげた。

「悟君、もう少し時間をもらっていいかな…もう少し話をしたいんだ…」

「わかった…いいよ…」

俺と野木は再びコンクリートへ座った。

しまった…何気なくまた座ってしまった…また密着してしまった…

「悟君」

「え？あ？何だよ」

「僕はね、絵理沙の双子の姉なんだ。悟君が見てもわかるように、姉と言っても生まれた時間が絵理沙よりも早かっただけで正直いつて色々な面で絵理沙には頭があげられない」

「まあ…それはなんとなくわかる」

「あと…絵理沙は北海道で話したと思うけど、僕の心を読む能力を嫌っている。そして僕の存在も好きじゃないと思う」

「そうなのか？嫌ってはないだろ？実の姉なんだしさ？俺は妹が大好きだし、妹も…多分俺が好きだと思っぞ…」

「そんな君達兄弟が羨ましいよ…僕らはそんな関係じゃない…絵理沙が僕を嫌っている理由の一つは、僕と絵理沙は双子なのに何故か両親は僕ばかりを英才養育した事なんだ…」

「何故か両親の心は読めなかったから何故僕に対してそうしたのかの理由は僕には未だにわからない…でもそのせいもあって僕は早い

時期から変身能力を含めた高度な魔法が使えるようになり、そして魔法管理局には最年少で入る事が出来た」

「へえ… やっぱりお前はすごいんだな… で？ 絵理沙は？」

「絵理沙かい？ 絵理沙は僕みたいな特別な事はなく、まったく違う環境で普通に女の子として育てられた… それで絵理沙は両親が僕と絵理沙を差別していると思ったみたいなんだ。だから余計に絵理沙は僕の事を嫌っているんだよ」

「なるほど… お前の家庭環境って複雑なんだな…」

「そうなんだよね… かなり複雑なんだよ」

「そうだ… ずっと気になってたんだけど… その口調はなんだ？ 僕とか男みたいな口調だけ？」

「ああ、この口調かい？ うーん… 僕は両親の教育方針で幼少の時期から男に変身する訓練をさせられていたからね… もうこの口調が癖になっちゃったよ」

「小さい時から男に変身の訓練！？ なんで小さい時から男に変身なんて…」

「さあ… 多分だけど両親は本当は男の子が欲しかったんじゃないのかな？ だから僕は男として、絵理沙は女として育てられたんだと思う」

「男として育てられたとか… お前って苦労してるんだな…」

「別に同情なんてしないでいいよ？僕は別になんとも思っていないし…この口調だってもう慣れちゃったし…」

そう言った輝星花（野木）の表情に笑みは無くなっていた。きつと何にも思っていないなんて嘘だろうな。

「ああ、そうだ…聞かれる前に言っておくけど、僕の本当の名前はかがやくほしにはな（輝星花）って書いてきらりって言うんだ。でも正直いってこの名前は好きじゃない…星を見るのは好きだけど、僕自身は輝く星になんてなれない…だからこの名前は忘れていいから…」

「何を言ってるんだよ、俺は…俺は別に、あれだ、そういう口調の女もべつにいいと思うぞ。輝星花っていう名前だっかわいじやないか…俺は好きだぞその名前…そうだ！お前が女の時は輝星花って呼ぶからな」

俺がそう言つと輝星花は驚いた表情で俺を見た。

「な、何だよ！何かおれは悪い事でも言ったか！？」

戸惑う俺を見て輝星花はクスクスと笑つと俺の耳元で囁いた。

「優しいんだね…ありがとう…悟君」

俺は輝星花に優しい言葉でそう言われた瞬間、ドキツとしてしまった。

やばい、何だ！？すっげードキドキしたぞ…まさか顔も赤くなつてたりするのか？

俺は最近こつというシチュエーションが苦手なんだよ…

「悟君？何を顔を赤らめているんだい？まさか僕に惚れちゃったかな？」

輝星花はすこし微笑ながらそう言った。

くそ…どうしたんだよ俺は！すぐ女みたいに赤くなりやがって…  
って何だ！？俺が輝星花に惚れる！？ないない！

「ば、馬鹿言うな！何で俺がき…輝星花なんか惚れなきゃ…お、俺は茜ちゃんが一番なんだ！」

「あれ？冗談だよ、冗談に決まってるじゃないか。僕は君に惚れられても困るしね」

「何だよ！俺じゃ輝星花には役不足な相手だっていうのか？」

「いや、違うよ？そういう事じゃない。君がいいのなら僕はいつでも受け入れる…」

「あー！まで！もういい！それ以上言うな！あと、そういう冗談はもう一切言うんじゃないぞ！わかったな！」

俺は咄嗟に大きい声を出して輝星花の話をかき消した。

やばいやばい…こいつ、さらっと言いやがって…きっと今でも顔が熱いという事は赤いのに…

「あははは、楽しいな悟君は」

輝星花は笑いながら立ち上がった。



そして屋上の真ん中にいくと両手を広げて空を見上げながらくるくると回りだす。

「おい？何をやってるんだ？」

「別に深い意味はないよ…一度やってみたかったんだ…こうやって回りながら空を見るの…男の姿でこんな事をしたらおかしいからね」

女の姿でも十分おかしいだろ…しかし、別に回る事はダメとは言わないけど、ちょっと勢いがありすぎないか？そんなに勢いよく回ると…

「おいおい！そんなに勢いよく回ったら目が回るぞ？」

「そうだね…確かに…」

そう言うのと輝星花は回るのをやめた。

しかし目が回ったのかすこしふらついて倒れそうになっている。

馬鹿！だから勢いがよすぎだって言ったのに！

俺は咄嗟に輝星花の横まで走ると体を支えようと腕を伸ばした。

しかし輝星花は俺が来るとは思っていなかったようで、俺にぶつかると覆いかぶさって抱きつく形になり一緒に倒れた。

俺の左肩の上に輝星花の顔が…そして髪がふわりと俺の顔にあたる…

輝星花から女の子らしいいい匂いがする…

まで…俺の胸になにかこう柔らかい感触があたっているぞ…

どう考えてもこの感触は…輝星花の…うわー！

「ちよ、ちよっと！輝星花きせい離れて！」

俺は慌ててそう言った。

「う、ごめん、悟君」

そう言うと輝星花きせいは慌てて俺から離れて立ち上がった。そして俺も急いで立ち上がった。

「危ない、危ない…こんな所を絵理沙に見られたら、僕は殺されちゃうよ」

「え？そんなに絵理沙が怖いのか？でもまあ絵理沙はもうここにはいないし、見られてないから大丈夫だろ？」

俺ががそう言うとは処からとも無く声が…

「見てたけどね…」

その声を聞いた瞬間に輝星花きせいの表情が固まった。

俺は慌てて声のする方向をみた。すると棟屋の上の貯水タンクの上に絵理沙が…

おい…お前はさっき屋上から飛び降りたはずじゃないのか？

何でそんな場所にいるんだよ！お前は忍者か！

怖いぞ…絵理沙、今日のお前は怖いぞ…

「今までの行動を見てた…やっぱり輝星花きせいは悟君といい関係になりたかったんだね」

絵理沙は輝星花を上から睨みながら怒りに満ちた声で言った。

「いや違う！僕は別に悟君とは何も無いし、いい関係になりたいとも思っていない！」

絵理沙は躊躇する事もなく勢いよくジャンプして輝星花の前に着地した。

勢いよくジャンプして下りる時に下着が丸見えだったけど…

怖いから言わないでおこう…今の絵理沙に言ったら俺が殺されそうだ…

「言い訳は聞かないよ…輝星花」

そう言うと同時に絵理沙の右拳が輝星花の腹部に向かって放たれる！

当たったかと思われたが、なんと輝星花が受け止めた！？

「やるわね輝星花！でもこれはどう！」

そう言って今度は左拳を振り上げた。

「絵理沙！冷静になれ！僕が悟君を好きになるはずないだろ？勘違いだ」

輝星花の話など聞く様子も無く、絵理沙は勢いよく左手を輝星花の右肩に振り下ろした。

今度は流石に避けられずに右肩に拳が当たる。そして輝星花の顔が苦痛に歪んだ。

「言い訳は聞かないって言ったでしょ…さっきそのコンクリート

に座って悟君の頬にキスしてたでしょ！私見てたんだから！」

キス？さっきって？あ…もしかして…さっき耳元に顔を近づけた時のあれか？

絵理沙からはキスしてるように見えたのか？

「待て！僕はキスなんかしてない！」

「それにさっきはくるくると馬鹿みたいに回ってふらついた振りをしてわざと悟君に抱きつたでしょ！それも輝星花が悟君を押し倒して！」

「あれは僕がふらついたのを悟君が助けてくれた時に起こった事故だ！わざとじゃない！」

「やだ！そんな嘘ついてもダメ！絶対に許さないからね！」

絵理沙は一步後ろに下がると勢いよく輝星花に向かって突進した。その瞬間に輝星花の姿が消える。

ガシャーンという音が聞こえたかと思うと絵理沙は勢い余ってフエンスにぶつかった。

「ま、魔法？魔力が尽きてたんじゃないの？輝星花！何処いったのよ！出て来なさいよ！」

周囲をキョロキョロと輝星花を捜している絵理沙：

しかしやばいな、おもいつきり俺と輝星花の関係を勘違いされてる…

これはちゃんと誤解を解いておかなきゃ今度は俺が危険な状況に追い込まれそうだ。

「おい絵理沙！」

俺が絵理沙を呼ぶと絵理沙ははっとした表情で俺を見た。そして何故か顔が真っ赤になる。

「わ、私、何してるんだろ！？ご、ごめんね…輝星花と二人つきりだったのに邪魔しちゃったね！あはは…」

勘違いもここまでくるとすごいな…

「おいおい待てよ。俺は輝星花とはキスもしていないし、さっきのは輝星花の馬鹿がくるくる勢いよく回って、目までまわしやがったから仕方なく助けてやろうとしたらあんな風になったんだ。勝手に変な想像とかしないでくれよ」

絵理沙は俺をきよんとした表情で見ている。

「だから、絵理沙の思い込みと勘違いだっって言ってるんだよ！俺と野木、いや輝星花とはまったく何も無い！」

絵理沙は俺の言葉を聞くと下を向いた。

そして無言でゆっくりと屋上のドアへ向かって歩き出した。

「おい！絵理沙！おい！何処いくんだよ」

俺の引きとめにも応じずに絵理沙は結局屋上から出て行ってしまった…

何なんだあいつは…

しかし困ったな…あいつが俺の事をどれほど想ってくれているのわかってしまったかもしれない。

俺はどうすればいいんだ？俺には茜ちゃんがいるのに…

「ふう…助かったよ…」

いつの間にか俺の横には輝星花きせいけいが立っている。

「おい、確か魔法が使えないんじゃないのか？」

「あはは…絵理沙のお陰でほんの少しだけ回復し始めた魔力を全部使ってしまったよ…おかげであと数日はこの姿のままかなあ」

「え？全部使い切ったって…そんなんでいいのかよ？授業はどうするんだよ？」

「仕方ないよ…魔力がなきゃ僕もただの人間と同じだ…あの薬は使えないし…」

「あの薬？」

「あ、いや、気にしないでいいよ。取り合えずはここにいるといっ絵理沙が戻ってくるかわからないから…また今度ゆっくりと話をしよう」

「ああ、そつだな」

「じゃあ僕は戻るからね」

「ああ…」

「あ！そうだ！」

「何だ！？何だよ」

「悟君、やっぱり君の胸は大きくなってたよ。さっき倒れた時にわかったから」

何だこいつ！？いきなり何を言い出すんだよ！

俺は慌てて胸を両手で押さえた。

「あははは、何してるんだい？もうさっき確認したから今更触ったりしない」

「そういう問題じゃねー！俺の胸なんか関係ないだろ！いちいち報告しなくてもいい！」

「何でだい？折角成長してるのに…認めなよ、君は今女なんだよ？」

「俺はもともと男だ！」

「強情だな…まあいいや…それじゃ僕は行くからね」

そう言つと輝星花は周囲に絵理沙がいない事を確認すると屋上から出て行った。

ふう…行ったか…

俺はさっきまで座っていたコンクリートに再び座った。

緊張感が無くなったせいかとどっと疲れが押し寄せてくる。

すっげー疲れた…

しかし…野木の正体が体育對抗祭の時に見たあの謎の女子生徒だ  
ったとか…

絵理沙と双子だとか、絵理沙が俺の事を本当に好きだったとか…  
ここ数日は色々な事が起こりすぎだぞ…

まだ北海道から出した俺の手紙も届いていないのに…

これで少しは落ち着いてくれるのか？まだ問題が起こるのか？

そうだ…これだけじゃない、正雄とか大二郎の問題もあったんだ…  
くそ…考えるだけでも頭が痛くなる。

そ、そうだ…そろそろ帰らないと…手紙が来てるかもしれない…  
あー疲れた…

俺は意気消沈しつつ屋上から出て行った。

続く



第14話 野木と絵理沙と謎の女子生徒の関係 後編（後書き）

文章が長くなってしまい申し訳ありません。

しかし…この小説も落ち着きそうで落ち着かないですね…

考えている事を文章で表現するのが難しくって…短く纏めるのも難しい…

最初から読み始めた方でもっとコメディ的な展開やシリアスな展開を望んでいた方。すみません、中途半端です。

さて、次回からは少しだけ書き方を変えて、綾香ではない視点でも話を進めまてゆきます。あくまでも予定ですが。

最後に

ここまで読んで頂いた方、ありがとうございます。最後までお付き合い頂ければ幸いです。又、こうなったらいいのに等の意見ありましたら是非宜しくお願いします。

番外編？ それぞれの想い（前書き）

今回の小説は絵理沙と茜と桜井がメインです。

読まなくても次の小説は普通に読めるはずで

あまり3人の気持ちを知りたくない方は読まなくてもかまいません。

番外編？ それぞれの想い

薄暗くなったマンションの一室。

西日の差し込むリビングの窓辺に絵理沙は制服のまま、一人顔をうつ伏せて足を抱え込むように座り込んでいる。

私はどうしてあんな事を言ってしまったんだろう…

絵理沙は先ほど屋上で綾香、いや悟に告白をしてしまった事を思い出していた。

そしてどうしてあの時に好きだと言ってしまったのかと考え込んでいた。

確かに私は悟君の事が前から少しは気になっていたけれど…

絵理沙はふと悟を気に掛け始めた切っ掛けの日を思い出した。

そう、あの事故から数日経った夏休みのあの日…あの日の出来事があったから私は悟君に興味が沸いたんだ。だからこの世界に残った…

でも…

何故だろう？

私はいつの間にも悟君に対してこんな気持ちになったのだろうか？

こつこつと気持ちが起こらないように、私は悟君と接点をなるべく持たないようにしていたはずなのに…

そうよ…おかしいよ…考えてみなよ？私は悟君を…悟君を殺しちやっただ加害者だよ…悟君は被害者なんだよ？

こんな気持ちになるなんておかしいでしょ？うん、そうだよ…私  
っておかしいよ…

………何だよ…本当に何で…

絵理沙は俯せていた顔をゆっくり上げた。

そして薄暗くなった部屋の中を見渡しながら今日の行動を思い出  
して見る。

私は…そう…今日…学校を終わってこの部屋に戻って来たら自分  
の部屋で寝ていたはずの輝星花が居なくなってたんだ…

私は具合が悪いまま外出した輝星花が心配で輝星花を探しに再び  
学校へ戻った。

特別実験室を覗いたけれどそこには輝星花は居なかった。

実験室を出て廊下を歩いていた時に私はふと思った。そうだ、も  
しかして屋上かも？

何故屋上だと思ったのかは解らないけど、直感でそう思った。  
そして屋上へ行くとそこには予想通りに輝星花が居た…

私は驚いた、屋上には輝星花だけじゃなくって悟君までいたから。  
そして輝星花は野木一郎の姿では無く本当の姿を…女性である輝  
星花としての姿を悟君に見せていた…

最近は何も教えてくれなくなっていた輝星花。

気が付けばいつも悟君と一緒にいるし、そして一緒に行動してい  
る。

何でだろう？私は自分から悟君を遠ざけていたはずなのに、なの  
に屋上で悟君と一緒にいる輝星花を見た瞬間に嫉妬心が沸いて冷静  
さを失ってしまった…そして私は屋上で輝星花にあたった。

私と口論になったその時に輝星花が私に向かって言った一言。

『僕が女だという事実を悟君に教えて、絵理沙から悟君を奪い取るとでも思ったのかい』

その言葉を聞いて私は我に戻った…そして動揺しそして気が付いた。

私は…輝星花の言う通り、輝星花に悟君を取られたくないと思っ  
ていたんだと。

他の誰かが悟君に近寄ってゆくのは何にも思わないのに、輝星花にだけは悟君を取られたくないって思った。

いや待って…本当に輝星花にだけなの？本当にそうなのかな？

私は茜ちゃんの事も考えてみた…

じゃあ茜ちゃんと悟君が一緒になってもいいの？

考えれば考えるほどいいよと思う気持ちよりも嫌だという気持ちの方が強く心に沸いてくる。

そっか、結局私は誰にも悟君を取られたくないと思ってるのか…

あはは…ダメね…こんな事を考えている自分が嫌になる…

ああどうしよう…胸が苦しいよ…悟君の事を考えるだけで…

やっぱり私は本当に悟君が好きになっちゃったみたいだ…

「何でこうなったの…私はもうダメかもしれないよ…悟君…」

「絵理沙…」

誰も居ないはずの部屋の中から輝星花きせいの声が聞こえた。

私ははっとして頭を上げた。すると目の前にはいつの間にか輝星花きせいが立っている。

その表情はとても申し訳なさそうであり、そして寂しそうに見えた。

「輝星花きせい…帰って来てたんだ…」

「ああ…今帰って来たばかりだよ」

「あっそう…」

私はそっけなく返事をすると再び俯いた。

「絵理沙…まさか絵理沙がそこまで綾香君、いや悟君の事を想っていたなんて…」

「…」

「絵理沙の横に座ってもいいかな…」

私は何も返事をしなかったけど、輝星花きせいは私の横へと座った。

ちらりと輝星花きせいを横目で見ると私を心配そうに見ていた。

「絵理沙…」

「私だって…自分が悟君の事を好きだったなんて気が付いてなかった…違う、気が付かないように心の奥に気持ちを抑え込んでいたのかも…でも…さっき輝星花きせいと悟君と一緒に居て…私はその気持ちを抑えられなくなった…」

「僕が…悟君と一緒に居たから…」

「そうよ…私は悟君と一緒に居る輝星花きせいに嫉妬した…」

「嫉妬…絵理沙、言っておくけど僕は悟君を好きになる事もないし、もちろん誰から奪う気なんてない」

「でも…輝星花きせいは自分では気が付いていないかもしれないけど、輝星花きせいもきつと悟君の事を気にかけているはず…」

輝星花きせいは険しい表情で私の方を見ている。

「輝星花きせいは…野木一郎の姿の時もそうだったけど、さっきも悟君と一緒にいてとても楽しそうだった」

「でもそれは単純に僕が悟君といて楽しいと感じていただけだよ…」

「違う！私には解る！だって！だって私達は双子なんだよ！」

輝星花きせいは黙ってすこし考え込むと天井を見上げた。

「そうだね、絵理沙の言う通りで確かに悟君の事は嫌いじゃない…」

「ほら…」

「でも…それだけだよ…本当だ…それ以上は何もない。考えてみよ、僕は絵理沙と悟君の監視に来てるんだ。悟君に対して特別な感情が沸くなんてありえない」

輝星花はそう言つとゆつくりと立ち上がった。  
そしてキッチンの方へと歩いてゆく。

「少し喉が渴いたし、ちょっとお茶でも入れようか？」

私は何も答えずにその場にじつと座っていた。

「絵理沙はストレートティでいいのかな…」

輝星花は私の返事を少し待っていたが、待っても返事は来ないと思つたのだらう、手際良くストレートティを入れ始めた。そしてティーカップに紅茶を注ぐ。

輝星花は両手で二つのティーカップを持って再び私の元へと戻つて来た。

「ほら、飲んで…」

そう言つて暖かい紅茶の入つたティーカップを私に向かって差し出す。

私は無言で受け取つた。

私はこういふ気使いが出来る輝星花が正直嫌いだった。

別に気使いされるのが嫌いなんじゃない。何もかもが私よりも完璧な輝星花が嫌いだった…

「絵理沙？」

「何よ…」

「あまり深刻に考え込まない方がいいよ」



「私だってそう出来るのならそうしてるよ…」

さつき私は輝星花に双子だから考えている事は同じ様に言った。ただ現実には私と輝星花の性格はまったく違う。そして私は輝星花みたいに割り切って行動が出来る性格じゃない。

深く考え込まない方がいいと輝星花は簡単に言うけど、私には言われてすぐに出来るはずもない…

だけど…輝星花は輝星花なりに私に気を使ってくれているのだから。

私は輝星花が悟君の事を気にかけているって言ったけど、例えば気になっていたりしても輝星花は自分で言う通りで悟君を好きになんてならないんだろうな。でなければ魔法監視官になんてなれない…私は結局は輝星花の様にはなれないんだ。魔法監視官にも向いてない…

あーもう…考えれば考えるほど本当に自分が嫌になる。

ふとティーカップを持つ手に紅茶のぬくもりが伝わってくる。

私は輝星花の用意してくれ紅茶を口に運んだ。

…おいしい…ふつ…

「絵理沙…少しは落ち着いたかい？」

輝星花は紅茶を飲んでいる私を見てそう言った。

「少しは…」

「よかった…」

「ねえ、輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>…」

「何<sup>なに</sup>だい？」

「私はどうすればいいのかな…悟<sup>ご</sup>君<sup>くん</sup>にあんな事を言<sup>い</sup>ってしま<sup>ま</sup>って…」

私がそう聞<sup>き</sup>くと輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>は私<sup>わたし</sup>の方<sup>かた</sup>を真<sup>ま</sup>剣<sup>けん</sup>な眼<sup>まなこ</sup>差<sup>さ</sup>しで見た。

「絵<sup>え</sup>理<sup>り</sup>沙<sup>さ</sup>、僕<sup>ぼく</sup>の意<sup>い</sup>見<sup>けん</sup>を言<sup>い</sup>つてもい<sup>い</sup>のかい？もしかすると絵<sup>え</sup>理<sup>り</sup>沙<sup>さ</sup>を傷<sup>や</sup>つ<sup>つ</sup>けるかもし<sup>し</sup>れない」

何<sup>なに</sup>となくだけど、輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>の言<sup>い</sup>いた<sup>い</sup>事<sup>こと</sup>が想<sup>さう</sup>像<sup>ざう</sup>で<sup>で</sup>き<sup>き</sup>る。  
だ<sup>だ</sup>け<sup>け</sup>ど<sup>ど</sup>覚<sup>かく</sup>悟<sup>ご</sup>して意<sup>い</sup>見<sup>けん</sup>を聞<sup>き</sup>く事<sup>こと</sup>にし<sup>し</sup>た。

「いいわ…言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>て…私<sup>わたし</sup>は何<sup>なに</sup>を言<sup>い</sup>わ<sup>わ</sup>れ<sup>れ</sup>ても大<sup>だい</sup>丈<sup>ぢやう</sup>夫<sup>ふ</sup>だ<sup>だ</sup>か<sup>か</sup>ら」

「本<sup>ほん</sup>当<sup>たう</sup>にか<sup>か</sup>い？」

私<sup>わたし</sup>は小<sup>こ</sup>さ<sup>さ</sup>く頷<sup>うなづ</sup>いた。

「…そ<sup>そ</sup>つ<sup>つ</sup>か、わ<sup>わ</sup>か<sup>か</sup>つ<sup>つ</sup>た、じ<sup>じ</sup>ゃ<sup>ゃ</sup>あ<sup>あ</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>よ」

そ<sup>そ</sup>う<sup>う</sup>言<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>と輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>はゆ<sup>ゆ</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>と話<sup>わ</sup>始<sup>はじ</sup>め<sup>め</sup>る。

「まず最<sup>ま</sup>初<sup>はつ</sup>に…僕<sup>ぼく</sup>た<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>魔<sup>ま</sup>法<sup>ぽう</sup>世<sup>せい</sup>界<sup>かい</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>間<sup>ま</sup>は<sup>は</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>本<sup>ほん</sup>質<sup>しつ</sup>を<sup>を</sup>見<sup>み</sup>抜<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>能<sup>のう</sup>力<sup>りき</sup>を<sup>を</sup>大<sup>だい</sup>なり<sup>り</sup>小<sup>せう</sup>なり<sup>り</sup>持<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>生<sup>な</sup>ま<sup>ま</sup>れ<sup>れ</sup>て<sup>て</sup>く<sup>く</sup>る。<sup>だ</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>僕<sup>ぼく</sup>た<sup>た</sup>ち<sup>ち</sup>は<sup>は</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>容<sup>よう</sup>姿<sup>そ</sup>を<sup>を</sup>好<sup>この</sup>き<sup>き</sup>に<sup>に</sup>なる<sup>る</sup>の<sup>の</sup>で<sup>で</sup>は<sup>は</sup>無<sup>む</sup>く、<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>の<sup>の</sup>本<sup>ほん</sup>質<sup>しつ</sup>を<sup>を</sup>好<sup>この</sup>き<sup>き</sup>に<sup>に</sup>なる<sup>る</sup>傾<sup>けい</sup>向<sup>かう</sup>に<sup>に</sup>あ<sup>あ</sup>る。<sup>そ</sup>れ<sup>れ</sup>は<sup>は</sup>知<sup>ち</sup>つ<sup>つ</sup>て<sup>て</sup>る<sup>る</sup>よ<sup>よ</sup>ね？」

「うん」

「だから絵理沙が悟君を好きになったのは、悟君の本質を好きになつたという事だ」

「そうなのかな…」

「そうだよ。だから僕は絵理沙が悟君に抱く恋愛感情は否定しなし嫌いになれとも言わない」

「うん…」

「だけど絵理沙が抱く恋愛感情をこれ以上悟君に対して表に出さないようにしたほうがいい」

「え…」

「僕達は魔法世界の人間だ、だからこの世界の人間とは何があるかと結ばれる事など無い。絵理沙の悟君に対する気持ちが大きくなればなるほど後で受けるショックは大きくなる」

「…」

「まだ悟君は絵理沙に告白されただけで、絵理沙を好きだとは言っている訳じゃない。要するには相思相愛の関係ではないという事だ。それに越谷茜という悟君を好きな女性が存在している。もちろん絵理沙が知っている通りで悟君も越谷茜が好きだ。要するに悟君には相思相愛の相手が存在しているって事だ」

「解ってるよ…」

「解っているなら尚更だ。絵理沙、辛いかも知れないが…絵理沙の抱く悟君に対する恋愛感情は心の奥に仕舞い込んでおくべきだ。ただ絵理沙は好きだと言う気持ちに気が付いたばかりだ。だから気持ちの持ちようですごくにかなると思う」

輝星花は厳しい表情のまま私の方を見た。

私は目が合った瞬間、つい目を逸らしてしまった。

「もし…もしも本当に辛いのであれば絵理沙は先に魔法世界に戻ってもいい、いや、本当はその方がいいかもしれない…」

「…」

「僕の考えは以上だ。僕は悟君とは割り切って付き合うつもりだ」

私はゆっくり輝星花の方へ顔を上げた。

再び目が合った瞬間に輝星花は厳しい表情からやさしい笑顔に変わった。

「絵理沙、解ったかな？僕の言いたい事が」

「わ、私は…」

輝星花の言いたい事はよく解かった…私を心配している気持ちもよく解った。

私だって輝星花と同じ事を思っていた。でも…

私は悟君と出合った時から今までの事を、短い間だったけども私なりに楽しかった日々を思い出した…

やっぱり悟君を思う度に胸が締め付けられるように苦しくなる…

ダメだな私って…

「絵理沙？」

「あははは…輝星花、私はダメみたい…やっぱり私は悟君が好き。私は悟君を想う気持ちを心の奥になんて仕舞えないし、悟君を残して魔法世界にも戻りたくない」

私がそう言つと輝星花の顔色が変わった。

「何を言ってるんだ！駄目だ絵理沙！僕の言ってる事が解ってるんじゃないのか？」

「解ってるよ！」

「だったら！…！」

輝星花は話している途中で私の表情を見て言葉に詰まった。

私の顔を何かが伝ってゆくのわかる…  
そしてそれはポタリと床に落ちてゆく…

「やっぱり絵理沙はこの世界に残るべきではなかったんだ…今からでも遅くない、魔法世界に戻ったほうがいい…」

輝星花は私に向かってそう言った。

でもいくら輝星花がいくら私にそう言っても私は戻るつもりなどない。

「嫌だよ…」

「嫌じゃない！言う事を…言う事を聞いてくれ」

「だから…嫌だって…言ってるでしょ…」

私はハンカチを取り出して瞳から溢れ出てくる液体を懸命に拭いた。

「僕は…僕はそんな辛そうな絵理沙を見たくない！お願いだから戻ってくれ！いや、戻れ！」

そう…そうなんだよ…前からそうだった。

いつも何かある度に輝星花は私に命令をする。

結局は最後には自分の考えを私に押し付けようとする…

人前では私より弱い素振りを見せても結局は私より強く出る。

心を読んで人の弱みを突いてくる…

いつも私はここで負けていた。結局は輝星花の意見に従っていた。

でも今回は輝星花の言う事は聞かない…

「何よ！輝星花はいつもそう！最後にはそうやって私に命令して！私の事は私が決める！私は輝星花の物じゃないのよ！もう輝星花の意見には従わない！」

輝星花は私が怒鳴ると驚いた表情で私を見た。私が反抗した事にかなりびっくりした様だった。

「え、絵理沙？我俣を言ってどうするんだ？自分でも解ってるんだろ？このまま居たらもっと深みに嵌って…一番苦しむのは結局は絵理沙なんだぞ？」

先ほどとは打って変わって輝星花は悲しそうな声でそう言った。

「輝星花、私だってそんな事は解ってるって言ってるでしょ……」

「じゃあ尚更……」

「言ったでしょ……自分の事くらい自分で解決する！だから……だからもう輝星花は私に構わなくなっつていいから」

「絵理沙……僕は……」

輝星花は再び言葉を失った。

「ありがとう、輝星花……いつも心配してくれているのは解ってるけど、もう私も大人なの。余計な気を使い過ぎないでいいから……自分の責任は自分で取るから」

「そうか……」

「大丈夫よ、私は悟君を好きだけど……大丈夫……深みに嵌ったりはしない……私は悟君が元の姿に戻るまで見守りたいだけ」

「でも……出来るのかい？そんな事が」

「……解らない……でも……悟君のいるこの世界に私は残りたい」

「そうか……絵理沙がそこまで言うなら……でも、もしも絵理沙が……」

「いい！言わなくてもいい！解ってるから……もしも無理だと思ったら魔法世界に戻るから」

「…そうか」

私は部活を終えて着替え終わると部室から出ようと扉の方へと歩いて行く。

そして部室から出る前には必ず挨拶をする。

私はいつもの様に挨拶をした。

「お疲れ様でした！お先に失礼します」

「おう！お疲れ！」

「おつかれさまー」

「お疲れー」

私が挨拶をすると部室に残っていた野田先輩を含むバレー部員全員が笑顔で挨拶を返してくれた。

そして私は一度会釈をしてから扉を開けて外に出ようとしたその時…

「あ！茜！ちょっと待ってくれ！」

部室から出る寸前で後ろから野田先輩の声が聞かけられた。私が後ろを振り向くとそこには野田先輩が立っている。

「野田先輩？どうしたんですか？」



私が野田先輩にそう聞くと野田先輩は苦笑を浮かべた。  
何だろう？何か私がやり残した事とかあったっけ…

考えてみたけど思い当たる節はない…

特にやり忘れた事なんかはないと思うけど…そう考えていると野田先輩が私に話かけてきた。

「茜、あれだ、綾香さんはどうだ？」

「どうだった？もしかしてバレエ部に綾香が入らないかって事ですか？」

「そう！綾香さんバレエ部に入ってくれないかな？」

なるほど…そういう事だったのか…私が綾香を説得しているとも思ったのかな？

それにしても野田先輩はまだ諦めてないんだ…野田先輩ってよほど綾香を気に入ったんだなあ…

でも綾香はバレエなんてやる気無さそうだったし…そもそも部活なんてやる気無さそうだしなあ

私がいくら説得しても駄目だと思っただよね…野田先輩には申し訳ないけど。

「えっと…何だかやる気があまりない様子だったし…」

私がそう言うと野田先輩はすこしがっかりした表情で私を見た。

「野田先輩、まだバレエ部に入らないって決まった訳じゃないですし…そんなに気を落とさなくても」

「そうか、そうだよな？よし！持久戦になっても綾香さんはバレー部に入部して貰うぞ！」

そう言っつて野田先輩は自分の顔の前で右手をぐつと握り締めた。

すっごい意気込んでる…

でもいくら持久戦をしてもちよつと綾香を説得するのは難しいかもしれないですよ？

とは今は言えないよね…

「そ、それじゃあ失礼します」

「あ、お疲れ様！引き留めてごめんな」

「いえ、大丈夫です」

野田先輩がロッカーに戻ろうと歩き出した時、私はふと今朝の綾香との会話を思い出した。

そうだ！綾香と桜井先輩の事！野田先輩にも変な噂を広めないでっつて言っつておかなきゃ！忘れてた…

「野田先輩！」

私が野田先輩を呼ぶと野田先輩は「え？」という表情で振り向いた。

「あの！綾香と桜井先輩の事なんですけど」

私は思わず大きな声で言っつてしまった、そして部室にいた全員が

私の方を向く。

「あーそれか！あれって嘘なんだよな？知ってるよ」

野田先輩は周囲を気にする事もなく大きな声でそう言った。

私の心の中でえ？という気持ちが始く…

確か前に野田先輩がここで桜井先輩と綾香が付き合ってるって言うたのに…

何で嘘とかいきなり言うのかな？もしかして…

「茜、綾香さんと桜井が付き合ってるって嘘なんだろう？今日、桜井本人に直接聞いたら付き合っていないって言うたぞ」

「え？直接聞いたんですか？」

「ああ、聞いた。あの二人が付き合ってるって噂だぞ？そりゃ気になるだろう？」

「うわ…野田先輩ってすごいな…よくストレートに聞けると思う。私はとてもじゃないけど聞けないよ…」

「大丈夫！大丈夫！ああいう噂はすぐに消えるよ。茜が心配しなくても大丈夫だ。おい！みんなも聞いただろ？昨日私が言ったあの二人の噂はごめん！嘘だったから。噂を広めないでくれよ」

「あの…先輩？」

「これでいいだろ？あははは」

野田先輩は笑いながらロッカーへと戻って行った。

なんだ…そつか…よかった…桜井先輩はちゃんと嘘だって野田先輩には言ってくれたんだ。

私は少し安心した気持ちで部室から出た。

そして体育館の横の通路を経由して本校舎へと戻る渡り廊下へ向かって歩いてゆく。

私が渡り廊下から本校舎へと入った廊下で桜井先輩を見つけた。

あれ？あれは桜井先輩？なんでこんな時間にここに居るんだろ？確か桜井先輩は空手部を辞めたはずじゃないのかな？

何してたんだろ？

でも私が気にするような事じゃないよね。綾香の噂も嘘だって言ってくれたんだし。

もう時間も時間だから早く帰ろうっと。

私は桜井先輩が居る方向とは反対方向にある下駄箱へ向かって歩き出した。

数歩進んだ時に私の頭の中に少し疑問が浮かんだ。

そういえば…野田先輩は桜井先輩から噂が嘘だって直接聞いたって言ってたよね？

という事は直接聞かない限りは付き合っていないって誰にも言っていないって事なのかな？

私は後ろを振り返った。

すると私の後ろ数メートルの所を桜井先輩がこっちへ向かって歩いて来ていた。

多分下駄箱に向かっているんだろ？

私が桜井先輩を見ると桜井先輩も私を見る。そして目が合った…

思わず私は目を逸らす。

何で目を逸らしてるのよ…聞かなきゃ…噂の事…綾香と約束したんだし…

私の心臓は今朝の清水先輩の前に飛び出した時以上にドキドキしている。

私は数度深呼吸をして顔を上げた。  
すると目の前に桜井先輩が立っている！

「うわ！」

私は思わずビククリして声を出してしまった。

「君は確か…一年の越谷だっけ？」

桜井先輩に声を掛けようとしたはずなのに逆に先に声を掛けられてしまった…

「は、はい、そうです」

「俺に何か用事か？」

え！？何で私が用事があるって解ったんだろう…

「え！？な、何で私が先輩に用事があるって解ったんですか」

私が驚いてそう言うと桜井先輩は「ふう」と溜息を吐いてから言った。

「越谷がいかにも俺に用事があるぞ！って顔で見てたからだろ？」

「え？私そんな顔で見てました？」

「ああ、そんな顔で見てた」

私はどうやら考えている事が顔に出やすいらしい…

でもいいや、桜井先輩に声を掛けようと思ってたんだし…

「私は先輩に用事があって…えっと…」

なんかうまく言い出せない…私はどうも桜井先輩の様なタイプは  
苦手…

こつ…女の子と話なれてそうで…プレイボーイっぽくて…

桜井先輩は髪を右手で掻き上げて私をじっと見ている。

「で？何だよ用事って？黙っててもわかんねーぞ？俺は超能力者じゃない」

そつだよ、聞かなきゃ…

「え、えっと…綾香の事です」

私が綾香という名前を出した瞬間、一瞬だけ桜井先輩の表情が変わった。

「姫宮の妹の事？もしかして俺と姫宮の妹が付き合ってるって噂の事か？」

桜井先輩は私の聞きたい事を解っていた様だった。  
それはそうか…私が先輩に用事ってそれ以外考えられないし…

「そうです。綾香と桜井先輩が付き合ってるって噂がありますよね。あれは綾香が嘘だって言ってたんですけど、本当に嘘なんですか？あと、嘘なら早く噂が広まらないようにして下さい」

桜井先輩は黙って私の話を聞いている。

私が少し視線を上げて桜井先輩の瞳を見ると、その瞳はじつと私の事を見ていた。

そしてまた目が合った…思わず私はドキッとしてまた目を逸らしてしまった。

「そ、そんなに私の事を見ないで下さい！」

私は思わずそう言った。

「おいおい？俺は真剣に越谷の話を聞いてるんだぞ？何で俺がお前に怒られなきゃいけないんだよ？」

「別に怒ってなんかないです…」

私はそれ以上何も言えなくなってしまうた。

その後の数秒間の沈黙がすごく長く感じた。何だか息の詰まるような感じがする。

私は大きく深呼吸をしてゆっくりと顔を上げた。

すると桜井先輩は先ほどまでの少し怖い表情ではなく、すこし寂しそうな顔になっている。

「そうだな…姫宮の妹にも嘘だって言うからって約束してたんだよ

な…解ったよ、ちゃんと噂が消えるようにするから。それでいいだろ？」

桜井先輩はそう言うのと私の右横を通りすぎて下駄箱へと向かって行った。

「え？ちょっと待ってください！」

私は思わず桜井先輩を追いかけた。

「何だよ？噂は嘘だって言えはいいんだろ？」

何だろう？確かに桜井先輩の言うとおりそれでいいんだけど…  
何かが私の心の中で引っかかっている。

「それでいいんですけど…」

「じゃあ付いて来るなよ」

「私も下駄箱に行くんです」

「…」

私は桜井先輩の後ろを付いて下駄箱まで歩いた。

先ほど会話した場所から下駄箱まで四十メートル位あっただろうが、私達に会話は無かった。そして下駄箱に到着。

「俺の下駄箱はあっちだから…じゃあな越谷」

桜井先輩は三年の下駄箱へと歩いて行こうとした。



「ちょ、ちょっと待って下さい！」

私は思わず桜井先輩を引き留めた。

すると桜井先輩は立ち止まり私の方へ振り向いた。

「ん？何だよ？もう用事ないだろ？」

桜井先輩は少しムツとした表情で私を見ている。

しつこいとも思われたのかな…でも…

そう…私は…さっきの桜井先輩の表情を見て聞きたかったんだ…

「答えなくてもいいです…一つ質問させて下さい」

「何だよ…」

「実際はどうなんですか？桜井先輩は綾香の事をどう思っているんですか？」

私の質問で桜井先輩の表情が明らかに変化した！

「俺は…別に姫宮の妹の事なんか何とも思っていない」

明らかに表情とは違う答えだ…私はそう感じた。

好きとかそういう感情なのかは解らないけど…桜井先輩は綾香の事が気になっているんだ…

そうなのか…だから桜井先輩は綾香と付き合ってる噂…嘘だけど嘘にしたくなかったんだ…

「解りました。ありがとうございます」

私はお辞儀をすると一年の下駄箱へと歩いて行った。  
数メートル進んだ所で後ろを振り返ると、桜井先輩はまささっき  
の場所に居る。  
そしてこちらをじっと見ている。

私は再び軽くお辞儀をしてその場を後にした。

私は駐輪場に移動して自転車に乗ると自宅へと向かって田んぼ道  
を進む。

すっかり日も落ちて吹き抜ける風がとても冷たい。

「寒い」

思わずそう声が出るほど最近の朝夕は寒くなった。  
しばらく進んだ頃に脳裏に先ほどの桜井先輩の顔を思い出した。  
その瞬間に清水先輩の顔が…そして綾香の顔も…

「はあ…」

思わず溜息が漏れた…

どうしよう…まさか桜井先輩まで綾香の事を気に掛けるみたい  
だよ！

なんて言えないし…ふう…

でも…桜井先輩は綾香に対して直接何かを伝えた訳でもないし、  
綾香に好意があるって言った訳じゃない。そうよ、私だってさっき  
の桜井先輩の表情を見て勝手にそう思い込んだだけだし…

ただの思い込みかもしれない。

私は自分で自分をそう納得させた。

続  
く

## 第15話 ぶるぶれむれぞりゅーしょん？

夕暮れの西日の差し込む田んぼ道を俺は家へと向かっている。

俺の心境は複雑だ…

本来ならば今日には家に届いているであろう北海道から出した手紙の事が気になるのだろうが、正直さつき屋上であった出来事の方が気になって頭から離れない。

俺の頭の中では何度も顔を赤らめた絵理沙が俺に告白したシーンがリピートされる。

俺はこれまでに何度となく絵理沙が俺に対して好意を抱いているのではないだろうかと思つた事はあつた。でもそれは俺の勝手な思い込みであつて、絵理沙が本当に俺に対して好意を抱くなんてありえないと思ひ込んでいた。

しかし、違つた…絵理沙は本当に俺に対して好意を抱いていた…

ただ、理由、そう…何故俺に対して好意を抱いてくれているのが解らない。

確かに二学期に入り、絵理沙がクラスメイトとして入学してきてから一緒に居る時間が増えてからは会話をするようにはなつた。だけれど必要最低限の話をする程度で、個人的な話なんか殆どなかつた気がする。

絵理沙の方を見るとよく俺の方を見ていたのは事実かもしれない…

実はその頃から俺に好意を持っていたのだろうか？

例えそうだとしても今度は切つ掛けがまつたくわからない…

体育祭の前くらいからだろうか？授業の合間の休み時間にも話すようになったのは…

普段の絵理沙との会話からは俺に好意を抱いてるなん想像も出来なかった。

俺はふと気が付くと何時の間にか家の前まで戻って来ている。

考え耽っている間に家に戻って来てたのか…しかし…何で俺は絵理沙の事ばかり考えてるんだ…

俺は自分に問いただす…

おい悟…お前は絵理沙の事をどうこう思ってる訳じゃないんだろ？絵理沙はお前を間違いであっても殺した魔法使いなんだぞ？憎くはないのか？

しかし『絵理沙は嫌いだ』とか『絵理沙が憎い』なんて答えは出て来ない。

じゃあ何だ？悟は絵理沙の事が好きなのか？あの女に好意を抱いているのか？

しかし『そうだ、好きだ』という答えも出てこない。

それじゃあ一体何なんだ？

…取りあえず言えるのは…何故とは言えないが、あの事件の事を俺はもう既に許しているらしい。

あとは…今考えると俺は絵理沙の事を異性（女性）として意識して見ていなかったという事。

俺は…だから何も感じてなかったただけなのか？なんとも言えない複雑な心境になった…

俺はしばらくの間、家の前で考え耽っていた。

すると道路を挟んだ向かいの家に夕刊を届けるバイクがやって来る。

そして配達員は夕刊をポストに投げ込むとブウウンと音を出し

ながらバイクを走らせて何処かへ消えた。

そうだった…何を俺はさっきから考え込んでるんだ？今考えたつてまとまる事じゃないだろ？まずは手紙の確認じゃないのか？

俺はそそくさと自転車を駐車場に置くとまずはポストを確認する。しかしポストの中には何も入っていない。

あれ？何も入っていないな…まだ届いていないのか？それとも既に…

俺は玄関ドアをゆっくりと開けて家の中へと入って行った。

「ただいまあ…」

玄関はいつもも点いているはずの照明の明かりが点いてなくすこし薄暗く物音すらしていない。

リビングのドアのガラス部分から明かりが漏れていないからリビングも照明が点いていないのだろう。

キッチンの照明が点いた場合も少しは照明の光が漏れてくるはず…

「母さん居ないの？」

返事も無いし…母さんはいないのかな？でも玄関には鍵が掛かってなかったし…

俺はリビングの扉をそつと開けて覗き込んだ。

リビングには誰もいない…

俺はリビングの照明のスイッチを入れてからキッチンの方を見た。するとダイニングで椅子に座りテーブルうつ伏せになっている母さんが…

え？何だ？どうしたんだ？何かあったのか？

俺は慌てて母さんの側に駆け寄った。

「母さん？どうしたの？ねえ！」

そう言っただけで母さんの体を揺さぶると『うーん』と言いながら母さんはゆっくりと顔を上げた。

「母さん？どうしたの？大丈夫？体調でも悪いの？」

母さんは俺の声に反応して俺の顔を見た。

「あら…綾ちゃん、帰ってたの？あれ！お母さん寝ちゃってたのね」

「え？寝てただけ？」

「ごめんね…何時のまにか寝ちゃったみたい…」

どうやら母さんは単純に寝ていただけらしい…と思ったなら母さんがうつ伏せていた場所には北海道から送った手紙と写真がある！俺が写真と手紙に目をやると母さんはそれに気が付いたらしく、俺の視線を追ってテーブルの上にある手紙を見るとそれを手に取った。

「あ…これ？綾ちゃん、綾ちゃんにも言っただけじゃないとね」

母さん冷静にそう言った。そして手紙と写真を俺に手渡そうとする。

「ほら、これ…お兄ちゃんからの手紙よ…読んでごらんさい」

キタ！このシチュエーション…よ、よし…ここは驚いて…

「え！？お、お兄ちゃんから？」

俺は手紙を手に取ってから読むふりをした。

母さんは俺が手紙を読む姿を見ながらこう言った。

「綾ちゃん…悟が…お兄ちゃんが生きてたよ…お兄ちゃん…手紙に書いてあったけど、記憶がなくなってたんだって…」

「そ…そうみたいね」

「今は北海道に居るみたいね…」

「う、うん…」

「何だかやりたい事を見つけられたみたいだからすぐには戻って来ないみたい…」

「あ…うん…そうみたいね…」

「今すぐにもお母さん…お兄ちゃんに…悟に逢いに行きたい…」

！？げ…そ、そうか…そこまで思ってなかった！これで今度は北海道に探しに行くとか、警察に捜して貰うとかしたらあまり意味はないんじゃないか！？

「で、でも母さん、お兄ちゃん…」と俺が言いかけた時に母さんは「でも、納得出来たら戻ってくるみたいだから…お母さんはお兄ちゃんを信じて待つ事にするわ…」



え？あ…良かった…探しには行かないみたいだ…

「け、警察はどうするの？」

「警察？ああ、捜索願いの事？ご迷惑を掛けてもいけないし、捜索願いは一旦取り下げて貰う事にするわ」

ふう…取りあえずは作戦通りに進んだ…

「母さん…手紙と写真…返すね…これは母さんが持ってた…お兄ちゃんはきつと戻って来るから…私も信じてるから」

「うん、母さんも信じてる…」

俺から手紙を受け取った母さんが薄っすらと涙を浮かべているのがわかった。

そして母さんはいきなりポロポロと涙を零し泣き始めた。

「ごめんね…綾ちゃん…お母さんお兄ちゃんが生きて嬉しはずなのに…」

母さんが持つている手紙をよく見ると僅かだが涙の跡だろうか？染みが出来ていた。

そうか…母さんはこの手紙を見て泣いていたのか…それで泣きつかれて眠っちゃったんだ…

「ううん…本当によかったね…母さん…お兄ちゃん生きて…」

母さんはエプロンで涙を拭いながら「うんうん」と何度も頷いた。

本当によかった…母さんもこれで少しは安心してくれたらろう…  
母さんが泣いてる姿も殆ど見たことは無いけど、こんなに嬉しそ  
うな母さんを見るのも本当に久しぶりだな…

「綾ちゃん…」

「え？何？」

「綾ちゃんは…お兄ちゃんが生きてるってずっと信じていたの？」

俺は母さんに予想だもしていない質問をされてしまった。

だがはつきりと言える。悟は俺だ。ここに存在しているし、生き  
ている。

「うん。私は信じてたよ。生きてるって…」

俺は自信を持ってそう言った。

すると母さんは微笑みながら「そっか、うん」と言って椅子から  
立ち上がった。

そして同時にリビングの壁掛け時計が六時の時報を鳴らす。

「あら！もうこんな時間！大変！晩御飯の準備しなきゃ！」

母さんはまさか六時になっているとは知らなかったであろう。

突然バタバタと動き始めた。

そしてダイニングとキッチンの照明を点けるとダイニングテーブ  
ルの上を慌てて片付ける。

「綾ちゃんごめんね！晩御飯までにちょっと時間かかるかも」

そう言って冷蔵庫を開ける母さん。

母さんは慌てていたのか、冷蔵庫をガサガサと探っている途中で豆腐を床に落とした。

豆腐は見事に床で砕け散った。床が豆腐がグチャグチャだ…

「もう…何してるのかしらね…」

母さんは冷蔵庫を閉めると床にしゃがみ込み壊れた豆腐をビニール袋に入れる。

「わ、私も手伝うよ」

思わず俺はそう言って母さんの横に駆け寄ってしゃがみこんだ。

今の母さんはどうみても冷静じゃない。そりゃそうだよな…行方不明の息子から突然手紙が来て、そして疲れて寝てしまう程に泣いたのだらうし…

「え？綾ちゃんどうしたの？別に手伝ってくれなくっても大丈夫よ？」

「う…うん…でも…手伝う」

母さんが驚くのも当たり前まえだ。俺は綾香になってから一度も手伝うなんて言った事がなかった。

それは別に綾香が手伝いをしていなかったからではない。綾香はちゃんと家事のお手伝いもしていた。

しかし、俺が綾香になってからは出来るだけ余計な事をするべきではないと思って手伝うという事はしていなかったんだ。まあ面倒だったというのも多少はあるが…

待て…いや…まあ単純に手伝いたくなかっただけかもしれない…でも、今の俺が母さんにしてあげられる事は簡単なお手伝い位しか思い浮かばない。

俺は母さんと二人で床掃除を終えた。

ビニール袋をゴミ袋に入れると再び母さんは冷蔵庫を開ける。

そして中から今度は落とさないように慎重に豆腐を取り出した。

「母さん、私…料理も手伝おうか？」

俺は母さんにそう聞いた。

すると母さんは不思議そうな俺を見る。

「え？本当に今日はどうしたの？」

「あ…うん…たまにはお手伝いしようかなって…駄目かな」

「え？駄目じゃないわよ？でもどうしようかな…綾ちゃんはお料理少しは出来るようになったの？」

「え？あ…料理？えっと…」

そうだった…妹の綾香は不得意な教科が無かったのだが、唯一料理だけは苦手だったんだ。

何っていうのだろうか、綾香の作る料理は見た目は良いのだが味が…

多分俺が思うには料理の味付けセンスが無いのだろう…だから母さんは料理の手伝いだけは綾香にはお願いしてなかったんだ。すっかり忘れてた。

綾香は綾香なりにこつそりと料理を勉強していた様子だったがなかなか上達しなかったな…何度か俺も食わされて大変な目にあった事も…

しかし唯一俺が綾香の料理でうまいと思ったのは…そうだ、あの飛行機事故の数日前に母さんが居なかった時に綾香がつくってくれた味噌汁とごはんと…野菜炒めだ。

単純な料理だったけど…あの時には驚く程に上達していたな…俺が居ない間にも料理の練習をしていたのだろうか…

あの時に俺に向かって「お兄ちゃんおいしい？」って笑顔で聞いてきたから、俺は「ああ、うまいぞ！綾香にしてはな」って言ったんだ。

すると綾香はとびっきりの優しい笑みを浮かべて「よかった！でも綾香にしてはっていうのが余計だよ」っ言っただんだ…

…綾香…何処に居るんだよ…

「ねえ？どうかしたの？綾ちゃん大丈夫？自信ないのならお母さんが作るからいいのよ？」

おっと…しまった…ついつい綾香の事を思い出してた…大丈夫！綾香も生きてるんだ！

お手伝いか…どうしよう…でもまあいいよな、あの日の野菜炒めと味噌汁はうまかったんだ。手伝おう。

「あ、ううん！大丈夫だよ！」

俺はそう言うつとブレザーを脱いでリビングのソファに置いた。そして腕捲りをしてキッチンに向かった。

食事が終わり俺は二階の綾香の部屋に戻った。

それにしても母さんはすっごく驚いていたなあ…

「綾ちゃん！？どうしたの？すっごく美味しいわよ！？」だって…  
ちよっとやり過ぎたかもしれない…

綾香は料理が苦手だったかもしれないが、実は俺は料理が得意なんだ。

俺が中学校三年になるまで両親は共働きだった。だから俺が何時も晩ご飯の準備をしていたんだ。

ほぼ毎日の様に料理をしていれば必然的にある程度は出来るようになる。

簡単な料理であれば今でも一人で作る自信はあった。

それに今日は麻婆豆腐だったからなあ…それも麻婆豆腐の元を水で溶かして混ぜて入れるだけの。

あれなら普通は誰でも作れる。逆に言えばどうすればまずく作れるのかが聞きたい。

しかし、それすら出来ないのが綾香だったんだ…

だから母さんはあんなに驚いてたんだろうな…マジである意味失敗したかな？

もつと下手っぽく料理すればよかったのか？まあ俺が偽物の綾香だと疑われる事は無いだろうが…

綾香が戻ってきたら母さんには内緒でちよっと料理を教えてやるかな。

そんな事を考えながらふと机の上を見ると赤い四角い箱の上に埃が…

そしてその埃を被った赤い箱には『13221』と数字が並んでいる。

あ、そうだ…最近魔法力がどのくらい貯まったのチェックをしてなかったな…

俺は学習機の椅子に座ると赤い箱を取り、上のボタンをぽちっと押した。

するとカウンターがぐるぐると回転を始める。

カウンターは右から順番にカチカチと音を立てて止まっていった。

完全に止まった時、俺はその数値を見てびっくりした。

『25549』!?!?!

何だ?いきなりすごい数値が伸びてるぞ!?

確か野木は『99999』で再蘇生の魔法が使えるとか言ってたよな…

そう考えると?九月末で『13221』だったんだぞ?

十日位で『12328』も魔法力が溜まったという事なのか?

不思議だ…どうしてこんなにいきなり溜まったんだ?

最近あった出来事が原因か!?俺の心理状況とか影響するとか言ってた気もするし…

えっと…最近あった出来事…それも近々に?

大二郎にまた告白された?違うよな…俺にとってはいい出来事じゃない…

北海道に行った?これはどうなんだ?

野木一郎が輝<sup>ま</sup>星<sup>し</sup>花<sup>か</sup>だって知った。これは多少影響がありそうだな。

あとは…

絵理沙…だよな…絵理沙に告白された…

その瞬間、また告白シーンが俺の頭の中でリピートされた。

「悟君…もつばれちゃったから言っておくけど…私は君の事が好きだからね…」

そう言った瞬間の絵理沙を俺はしっかりと見ていたんだ…

顔を赤らめて俺から視線を外してすこし緊張した声で言った…

ドクンドクン…

急に俺の心臓の鼓動が強くなる。

あれ…どうしたんだ…あの時には何ともなかったのに…何で急に今頃…

俺は右手の手のひらを胸に当てた…

ドクドクドク…

心臓の鼓動が手にひらに伝わる…

やばい…俺すっげードキドキしてるぞ…

俺は絵理沙の顔を思い浮かべる…すると心臓の音はさらに激しさを増す。

何だよ…おいおい…胸が苦しい…くそ…まさか…俺は絵理沙を…

いや…そんな事はない。俺には茜ちゃんが…

俺は茜ちゃんを思い浮かべようとすると、浮かんでくるのは絵理沙の顔ばかり…

くそ…おかしい…

しかし、不思議なのは絵理沙が好きだという感情は浮かんで来な



い事だ…

不思議な感覚だ…今の俺は絵理沙を意識しているのは否定出来ないのに。

…

そうか…ただ単に驚いているだけなのか？緊張しているだけなのか？

落ち着こう…とにかく…

俺は深く深く深呼吸を何度もした…

朝が来た…

やばい…寝不足だ…

昨日は気持ちが高ぶってしまったせいか、なかなか寝られなかった。

しかし朝起きてみると不思議な程に落ち着いている。

昨日のドキドキが嘘の様だ…

やっぱり単純に緊張していただけなのかな？

俺は朝食を食べ終わると制服へと着替えて学校へ向かった。

今日も良い天気だな…でもって風が強い…よって寒い…これは気温の問題じゃない…これはやっぱりはき慣れていないスカートせいだ…

そつえば寒さ対策を絵理沙に聞こうかと思ってたんだ…

って…しまった…折角忘れたのに…俺の脳裏に絵理沙の昨日の告

白が再び…

その瞬間に先ほどまで感じてた寒さは何処へやら飛んでしまつて、学校につくまでずつと絵理沙の事が頭から離れなかつた…

そしてそのまま学校へ着くと俺は緊張しながら教室へ向かう。

絵理沙にまず何で言えばいいんだ…どういふ風に会話すればいいんだ…

俺は絵理沙の顔を正面から見られるだろうか…

絵理沙はどんな反応するのだろうか？というか絵理沙は来てるのか？そんな事ばかりを考えながら緊張したままの俺は教室へ入った。

教室に入って真つ先に俺は絵理沙の席を確認する。

するとそこには絵理沙が座っている。当たり前なのだが…

そしていきなり絵理沙と目が合った…すると絵理沙がいつもの天使の様な笑顔でにこりと微笑んだ。その瞬間にグサ！と俺の胸に何か突き刺さる…

ぐ…くそ…絵理沙の奴…何時にも増してかわいいじゃねーか…

「おっはー！綾香！」

いきなり後方から迫る気配！これは！俺は素早く左へと身をかわした！

その瞬間に俺の右横を両手を広げた佳奈ちゃんが勢いよく通過する。

佳奈ちゃんは俺を行きすぎると急停止して振り返った。

「ひつどい！避けないでよー！もう少しで教壇にぶつかる所だったじゃこ」

「え？あ…ごめんね、何かこう…思わず避けちゃった」

っていうか…いきなり後方から抱きつこうとする佳奈ちゃんに問題があると思うんだが…

「あれ？どうしたの？綾香？熱？」

「え？」

突然佳奈ちゃんは俺の目の前まで歩いてくると手を俺の額に当たった。

「んー別に熱は無さそうだね！少し顔が赤かったからさ！」

え？顔が…って…もしかして…俺は絵理沙のあの笑顔で顔を赤らめたのか！？

「え？あ…うん、大丈夫」

「ふーん…まあ体調悪かったら休んだ方がいいよーあはは」

佳奈ちゃんは言う事だけ言い終わると自分の席へと歩いて行ってしまった…

俺はちらりと絵理沙を見た。すると絵理沙はじっと俺の方を見ている。

見られてる…くそ…目が合うと顔が赤くなるっばいから目を合わせないようにしよう…

俺はドキドキしながら自分の机へと歩いて言った。そして席へと

座る。

「おはよう綾香ちゃん」

俺が席に座ると絵理沙が俺に挨拶をして来た。

「お、おはよう、野木さん」

俺はそう言いながらつい絵理沙の顔を見てまた再び目が合ってしまった。

「綾香ちゃん？どうしたの？体調でも悪いの？」

え？何だ…絵理沙のこの反応は…

「え？いや、何でもないよ」

「いつもの元気な綾香ちゃんらしくないよ？」

絵理沙は首を傾げながらそう言った。

な、何だ！？本当にどうなってるんだ！？この絵理沙の態度、表情は！？

昨日の出来事が嘘のそうに感じるほど、今までとは何も変わらな  
い絵理沙がそのに居る…

普通に考えてもあんな事があった翌日に普段通りに出来るなんて  
ないだろ…

待て…こいつは魔法使いだ…魔法で何とかしたのか？それともそ  
ういう素質を持ち合わせてるのか？

「ねえ？綾香ちゃん？本当に大丈夫？」

「あ、ご、ごめんね…大丈夫だから」

俺はそう言っつて絵理沙から視線を外した。

何だよ…緊張している俺が馬鹿みたいじゃないか…

俺はちらりと絵理沙を見ると絵理沙と三度目みたひが合った。

絵理沙はニコリと微笑むと教壇の方へ視線を移した。

よく解らなくなったけど、普段通りにしてて良いみたいだな…  
よし…がんばって落ち着こう…

今日の授業は何事も無くすべて終わった。

何事も無くというよりはほぼ何も覚えていないと言った方が正しいかもしれない…

しかし流石の俺もやっと落ち着いた…もう絵理沙を見ても平気だ…  
…しかし昨日の事はもう思い出さないようにしよう…あれは良くない記憶だ…

ちなみにその日、やはり輝星花きせいは…じゃない野木一郎は休みだった。

今日一日だけが休みなのかと思ったら一週間も休むらしい。  
という事は来週の月曜までは学校に来ないという事だな。

担任の先生によれば、インフルエンザになったとかいう理由らしい。  
まあ実際は魔法力が回復しないから一郎に変身出来ないからだ  
が。

しかし一週間も休まないといけない程に消耗してたのかよ…  
…そうか…という事は輝星花は一週間程は学校に来ないんだよな？  
という事は今度学校に来る時は完全に野木一郎の姿って事か…  
まあ輝星花の姿が見られないのは残念だけど仕方ないな…  
…って！何で俺が輝星花の姿が見られないと残念なんだよ！？  
絵理沙もだが輝星花も綺麗で可愛かったし…口調さえ直せば本当に  
素敵な女の子のになあ…もったいない…  
しかしこの双子は卑怯だな…二人とも身長は高すぎず丁度いい、  
スタイルは抜群で頭脳明細でおまけに魔法使い！まるで漫画の主人  
公並に条件が揃いすぎだろ。

「綾香ちゃん、私帰るからね」

俺が考え耽っていると絵理沙の声が聞こえた。

俺は咄嗟に声のした方を見ると既に絵理沙はブレザーを着て鞆を  
持って俺の机の横に立っていた。

「あ、うん、またね」

俺がそう言った時だった。

「まって！野木さん！」

あれ？この声は茜ちゃん？

絵理沙は「え？」と言うとその場に立ち止まった。

気がつく茜ちゃんが何時のまにか俺の目の前に立っている。

「越谷さん、何か私に用事？」

「うん…あのね…野木さん、今週の土曜日は暇？」

「え？私？」

「あ…綾香は土曜日って予定ある？」

な、何だ？茜ちゃんは突然どうしたんだろう？ちなみに俺は土曜日と言わず、ほぼ毎日が暇なんだだけど…

「えっと…私は暇だよ？どうしたの？」

取りあえず俺はそう答えた。

「野木さん？土曜日に何か用事がある？」

絵理沙は考え込んでいる。

「茜ちゃんどうしたの？土曜日に何かあるの？」

俺がそう聞くと茜ちゃんはすこし照れた表情で言った。

「え？えっとね…三人で大宮にでも行かないかなーって…」

珍しい、茜ちゃんが何処かに行こうって誘うなんて…それも真理子ちゃんや佳奈ちゃんじゃなくって俺と絵理沙を誘うなんて。

「え？べ、私は別にいいけど、真理子ちゃんと佳奈ちゃんは誘わないの？それに部活もあるんじゃないの？」

「真理子ちゃん是用事があるんだって、佳奈ちゃんはもう先約がいるらしくって…だから二人は行けないんだって。でも最初は五人で

行くことと思ってたから、どっちにしても誘ったんだよ？ちなみに部活は今度の土曜日は久々に休みなんだよ」

なるほどね…それなら何となく合点がいくな。

だが、なんで絵理沙を誘うんだ？もしかすると仲良くなりたいたいかな？それともバレー部に勧誘？しかしまあ絵理沙はきつと断るだろう。

絵理沙が何処かに外出したとか見た事も聞いた事もないし、人間と関わり合うとは思えないからな。

「あ…別にいいよ？野木さん…用事あるのならいいよ？」

「えっと…私は…」

絵理沙は俺の顔をちらりと見た。

何だ？俺に意見を言っしてほしいのか？

「えっと…野木さんが一緒に行きたいのなら行けばいいと思うよ？」

俺は絵理沙に向かってそう言った。

すると絵理沙が俺の予想を覆す回答を茜ちゃんに向かって言った。

「あの…茜ちゃん…私はまだ日本の事がよくわからないけど…一緒に連れていってくれるの？」

え！？絵理沙！？行くのか？なんという予想外の答え！しかし、人間とかかわりあっていいのか？

「もちろん！私がちゃんと案内してあげる！って言っても大宮だからただけだね」



茜ちゃんは笑顔でそう言った。

「それじゃあ…私も行こうかな…」

絵理沙はニコリと微笑みながらそう言った。

「やった！行こう！綾香！野木さんも来るって！」

「あ…あ、うん…」

まさか…絵理沙と一緒に行くって言うとは…おまけに普通の人間も一緒にだぞ？

魔法使いだという事さえバレなければいいのか？

だけど、監視中なんだろう？学校から出てもいいのか？

それに…いや、きつともう何もないだろ…深く考えるのは止めよう。

「野木さん！ありがとう！」

茜ちゃんはすごく嬉しそうにそう言うと絵理沙の手を強引に持つて握手した。

その瞬間に絵理沙の手から鞆が床に落ちた。

「あー！ごーごめんね！」

茜ちゃんは慌てて鞆を拾いあげると申し訳なさそうに絵理沙に鞆を渡した。

「え？いいのいいの、私が油断して鞆を手から離しちゃったから」

「本当にごめんね…大事な物入ってなかった？」

「本当に大丈夫だよ？じゃあ、今度の土曜日よね？楽しみにしてるね」

そう言つと絵理沙は手を振りながら教室を出て行つた。

「ねえ綾香…」

「え？何？」

「野木さんって思ったよりいい人だよね…」

茜ちゃんはそう言つて俺の方を見た。

「そ、そうだね」

「じゃあ私も部活があるから！またね！綾香」

「あ…うん…またね」

うーん…結局三人で大宮に行く事になつてしまった。

俺と絵理沙と茜ちゃんという不思議な組み合わせで…大丈夫かなあ…

まあ絵理沙は昨日の告白が嘘の様に普段通りに戻つてるし、茜ちゃんも元々心配ない子だし、大丈夫か…俺も普段気にせずに普段通りにすれば…

俺は机を片づけると鞆を手に持って教室から外へと出た。

すると先ほど教室を飛び出した茜ちゃんが息を切らせながら俺に向かって走ってくる。

「綾香！まってー」

「え？」

俺は立ち止まって茜ちゃんが来るのを待った。

「はあはあ…ごめんね…はあはあ…」

茜ちゃんは息を切らせながらそう言つと二・三度深呼吸をして呼吸を整えた。

「茜ちゃんどうしたの？」

「はあはあ…言い忘れた…はあはあ…事があつて…」

「言い忘れた？つて？何？」

「ふうふう…あのね、桜井先輩の噂の事だけ…」

そつだ！そついうえばそついうのもあつたんだ…大二郎の件もあるんだ…

いかん…最近一つの事を考えると他の事をすぐに忘れる…違う！色々な事があり過ぎてこんな事になつてるんだ！

「ねえ綾香？」

あ、そつだ…茜ちゃんと話をしてる途中だった。

「あ、ごめんね」

「ううん、いいけど…どうしたの？何か考えてたみたいけど？もしかして桜井先輩の事？」

「え？いや違うよ。桜井先輩の事じゃないから…別に気にしないでいいよ」

「本当に？本当にそうならいいけど…」

「本当！本当！心配いらなから。で？桜井先輩の噂がどうしたの？」

「あ！そうそう！桜井先輩の噂だけど…」

茜ちゃんは周囲をキョロキョロと見渡して誰も居ないのを確認した。そして俺の耳元で小声で言った。

「もう大丈夫だよ、桜井先輩に昨日直接言っておいたからね。噂をこれ以上広めないでって」

「え！」

俺は思わず大きな声を出してしまった。

「ちょっと、綾香…声大きいよ…」

「い、ごめんね…」

「もうこれ以上噂は広がらないと思うし、これで落ち着くと思うよ」

「そっか…よかった…ありがとう、茜ちゃん」

これで問題が一つ解決された…よかった…

俺はほっと胸を撫で下ろした。

ふと茜ちゃんの顔を見ると…あれ？何だか冴えない表情だな？

「茜ちゃん？どうしたの？」

「え？あ…うん、何でもないの。わ、私は部活に行かなきゃ！じゃあまたねー」

そう言つと茜ちゃんは廊下を走って行ってしまった…

何だろう？あの表情…何か他にも言いたい事でもあったのかな？  
ついでだから何で絵理沙を大宮に誘ったのか聞こうと思ったのに…  
まあ取りあえずは正雄と付き合ってる噂はこれで沈静化しそうだ  
し、よかったよかった…

俺は駐輪場まで歩いてゆき、自転車で家へ向かって走りだした。  
そしてそのまま何事も無く帰宅した。

次の日もその次の日も何事も無い平穏な日だった。

正雄との噂もほとんど聞かなくなつたし、絵理沙も普通な感じに  
戻つたままだ。

あんなに色々な事が数日のうちに起こりまくっていたのに…  
まあ人生って色々あるし…こういう事もあるか…

というか今俺が過ごしているこの何事もない生活が普通なんじゃないのか？ そうだよな…

もしかすると俺はハプニング慣れしてしまっただけ刺激を求めているのか！？

…無いな… まあこのまま何事も無く魔法力を貯めて男に戻って、綾香を見つけて普段通りの生活に戻るんだ…

そしてあっという間に土曜日がやって来た！

続く

番外編？ 僕の苦悩と絵理沙の笑顔（前書き）

この話は野木輝星花ノギキヒツが主役です。主に絵理沙とのやり取りがメインで15話と16話との中間の話になります。注意として…この話を読んでから16話を読むのもありますが、私としては16話を読んだからこの話を読む方が面白いのではないかなと思います。但し、そこは読者の皆様の自由です。後、この話を読まなくても続きを読むにあたり何の弊害もありません。ですので読まない！という選択もあります。普通にUPしている小説よりも短めです。

番外編？ 僕の苦悩と絵理沙の笑顔

それは僕がそろそろ寝ようかと思ってベットメイクをしている時だった。

「相談があるの……」

絵理沙は突然部屋に入って来たかと思うと僕に向かってそう言った。

何だろうか？絵理沙が僕の部屋に入って来るなんて珍しい。それも相談があるなんて……

その時に僕の頭を少しの不安がよぎった……

「どうしたんだい？」

「あのね……今度の土曜日に悟君とクラスメイトの越谷さんと私と三人でお出かけしてもいいかな？」

「お出かけ？それはどういう事だい？」

「だから……三人で買い物に行くって事」

「買い物……それで何処まで買い物に行くのかな？」

「ええと……大宮かな？」

「大宮？……大宮！？」

大宮と言えば僕らの住んでいる……確か埼玉という県の県庁所在地



じゃないか？

という事はこの街から出ると言う事なのか！？僕は慌てた。

僕たち魔法世界の人間は魔法結界で包まれた街、要するには今住んでいるこの街に居る事により魔力を消費せずに済んでいる。

ちなみにだが魔法結界は強大な魔力を持った魔法使いの存在が必要であり、現にこの街にも一人存在している。その魔法使いの魔力により結界は維持されているのだ。

しかしこの前、僕は悟君と北海道に行く為に自らその結界から出てしまった。

今ままで僕は何度か人間界に来ているが、結界からは一度も外には出た事がなかった。

だから僕は結界の外に出るとあそこまで魔力を消費し、そしてこれ程まで回復しないとはいなかったのだ…

正直に言うと僕の考えが甘かった…北海道から戻る時には少量の魔力しか消費しない変身すらも解けてしまい、生まれて初めて魔力の限界を感じ、そして最後に魔力が尽きた。

そして僕は未だに魔力が殆ど回復していない…

しかし絵理沙がもし結界の外に出たとしても生命に関わるような事はない。

現在の絵理沙は魔法を封印されている状態である為に魔力も消費しない。

問題は僕の方にある…結界内であれば今の殆ど魔力の無い僕でも絵理沙を最少の魔力で監視する事が可能だが、絵理沙がもしもこの結界から外に出てしまった場合はかなりの魔力を消費しなければ僕は絵理沙を監視する事が出来なくなる。

今の僕ではとてもじゃないがそれは無理だ…そうなると僕はかな

り困る。

絵理沙の監視を怠ってしまうと魔法管理局の人間として失格だからだ。

「何を言ってるんだ！？絵理沙は知っているだろ？僕たちはこの街から、いや、この魔法結界から外には出ては駄目なんだよ？」

絵理沙は怪訝けげんそうな顔をして言った。

「でも…それは魔法を使う場合でしょ？私がこの世界に来る時に聞いたのは結界外での魔力消費の多さ、そして回復機能が働かないって事。別に外に出ても死ぬ事なんてないでしょ？私は魔法結界の外に出ては駄目とは聞いてないよ？」

「確かに生命に危険が及ぶ訳ではないし、結界外に出ては駄目というルールがある訳でもない…」

「じゃあ問題ないでしょ？」

絵理沙は何も解ってないな…

「絵理沙、僕がこの世界に来た一つの理由が絵理沙の監視だと言う事をわかっているのかい？」

絵理沙は小さく頷いた。

「解っているのなら…今の僕の状況を見れば僕が今どういう状態なのか解ってるだろ？」

「解ってるわよ…でも…」

「でもじゃない！僕が絵理沙の監視が出来ないような場所に行かないでくれ」

僕がそう言うのと絵理沙は肩を振るわせて僕を睨んだ。

「な、何だい？僕は間違った事は言っていないぞ！」

「輝星花きせいって勝手だよね！何よ！輝星花きせいが勝手に悟君ごと一緒に北海道に行つて魔力が尽きたんでしょ！だから私を遠隔監視えんかくが出来なくなつたんじゃないのよ！」

絵理沙はすごい剣幕で僕を怒鳴った。しかし絵理沙の言う事は決して間違つてはいない。

「し、しかし…」

「何がしかしよ！輝星花きせいのせいで私が越谷こさんや悟君ごとお買い物に行けないなんて…納得出来ない！私はお買い物に行くからね！」

駄目だ…これは完全に僕が不利な状況だぞ…どうする…

「僕が勝手な行動をした事は謝る。だけど僕は絵理沙を監視しないと駄目な…」

僕が話している途中に絵理沙は平気で割り込んで怒鳴った。

「何が監視よ！そんなに監視がしたいのなら私について来ればいいじゃないのよ！」

「え…僕が？絵理沙について行くのかい？」

「そうよ！私について来てよ！輝星花きせいかだって好きな事をしたんだから私だって好きな事をしてもいいでしょ！」

ふう…こうなってしまった絵理沙はもう止められないか…  
しかし、ここで素直に認めてしまつと僕の立場が…よし…

「そ…そうだな…絵理沙の言いたい事は解つたよ。すこし考えさせてくれ」

僕がそう言つと絵理沙は全身をふるふると震わせながら僕の前にまで迫つて来た。

そして絵理沙は僕の顎を右手の人差し指でグイと持ち上げると僕を思いきり睨んだ。

「考える余地なんてないよね？輝星花きせいかお姉ちゃん…」

いつもであればここのう状況からでも口で言い負かす事も出来たのだが…

今日は僕が圧倒的不利だ…色々な面で絵理沙に文句を言えない状態になっている。

「どうなの？お姉ちゃん？」

く…今回は僕の負け…か…

「解つた…」

結局僕にはその言葉しか選択肢がなかった。

絵理沙は僕のその言葉に反応して不気味な笑みを浮かべる。

怖い…僕はたまに絵理沙に恐怖を感じる事がある…

希にだが絵理沙の奥底にある見えない力…僕には無い凄まじい魔力を感じるのだ。

絵理沙は今は魔法を使えない。なのにも関わらず学校の屋上から飛び降りても大丈夫だったり、無意識に筋力を操作してすごいスピードで移動したりしている…これも絵理沙の潜在能力の一種なのだ…  
絵理沙がもしもその潜在能力に目覚めた時、僕は絵理沙に全ての面において敵わなくなるだろう…

「やった！OKなんだよね？土曜日が楽しみだなー」

絵理沙は先程までの激怒が嘘のようにはしゃいでいる。

「しかし…こんな事を聞くのも何なんだが…悟君も一緒なんだろう？  
絵理沙は…大丈夫なのかい？」

余計な事なのかもしれないが、僕はストレートに質問をした。  
さきほどまではしゃいでいた絵理沙がぴたりと止まった。そして僕の方を真顔で見る。

「大丈夫よ…私は…悟君を見守るって決めたから」

その表情は硬く決意した表情だった…

「そうか…それならいいんだ…」

「うん…本当に大丈夫だから…それじゃおやすみ」

絵理沙はそう言って部屋を出て行った。

でも今の顔…まだ悟君の事が好きなんだな…絵理沙…

朝起きてみると絵理沙はもう学校へ行っていた。  
いつもよりも一時間も早い…何があるんだ…

僕は絵理沙を遠隔監視しているが、それは絵理沙の行動についてだけだ。

どの場所に絵理沙が居るのか程度なら解るが、それ以上の事は解らない。

何の為に早く学校に行ったのか少し考えてはみたが、すぐ無意味だと判断した。

僕は魔力が戻らない。だから野木一郎になれないし学校にも行けない。

仕方ないので僕は変身薬の錠剤化の研究の続きをする事にした。

そして夕方…

ボタン！と玄関の開く音が聞こえた。それと同時に絵理沙の声がした。

「だいたいまー」

絵理沙は昨日の不機嫌さが嘘のように楽しそうだ。

「輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>！越谷さんに言っておいたからね！お姉ちゃんも一緒に行くって。そうしたらOKだって」

絵理沙は笑顔で僕に向かってそう言った。

僕はその言葉に動揺して手に持っていた金属製の計量スプーンを思わず床に落とした。

「え？待ってくれ！僕は絵理沙にこっさりついて行くんじゃないのかい？」

「何を言ってるのよ？私と一緒に行くんだよ？」

僕は絵理沙達を遠目に監視しようかと思っていた。しかし絵理沙は僕を買い物に行くメンバーとして一緒に行くと考えていたのだ。

「ええええええ！待ってくれ！僕は…まさかこの姿で一緒に行くのかい？」

「そうよ？それしかないでしょ？」

僕の額を嫌な汗が流れる…

「僕は…それは…ま、まずいだろっ」

「大丈夫よ、輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>が野木一郎だってばれるはずないでしょ？だって悟君も一緒なんだよ？悟君がばらすなんて考えられないし」

「確かに悟君は僕の正体を話さないだろうし、僕が野木一郎だとは

そう簡単にはばれないと思うけど…だが…」

絵理沙は呆れた表情で僕を見た。

「輝星<sup>じゆんせい</sup>花<sup>はな</sup>ってこういう事は慎重<sup>しんじゆう</sup>だよ…慎重<sup>しんじゆう</sup>っていうよりは考えすぎ<sup>すぎ</sup>よね」

そういう絵理沙はその慎重さに欠けていて、何も考えていないから色々な問題を起こすんだよ…

しかし…どうしたものかな…魔力が回復すれば出来れば変身してついでに行きたいと思っただけ…まったくその気配はないし…おまけに絵理沙達と一緒に…

「ほら！そんなに考え込まないの！大丈夫よ」

絵理沙はなんて楽観的なんだ…僕は頭が痛い…

「ふう…それで？僕は絵理沙の制服でも着て行けばいいのかい？」

「え？何を言ってるのよ！制服じゃ駄目だよ！輝星<sup>じゆんせい</sup>花<sup>はな</sup>は女の子なんだからちゃんと女らしい服を着なさい！」

「え！？僕が女の子の格好！？そんな事を言われても僕は女性らしい服なんて持ってない！だから無理だ！」

「無理じゃない！もう！解ったよ！私が用意するから！それを着てよね…！」

絵理沙はそう言うと鞆をソファーに投げて制服のままマンションから出て行った。



何だあれは…しかし…僕が女の格好だと？生まれてこの方女らしい格好なんて…三歳位まではしてたかもしれないが…それからはずっと男として育ったから…今更女の格好なんて…

女…女…嫌だ…どうするかな…絵理沙に今から行かないなんて…  
…言えないな…

どちらにせよ監視しないとイケないんだし…

絵理沙は何処まで行ったんだ…

僕は僅かに蓄積した魔力を消費して絵理沙の位置を確認した。

…隣駅まで行ってるじゃないか…まったく…そこまでしなくても…

きつと絵理沙は僕に着せる服を買いに行ってるのだろう。

しかし、僕はどんな格好をさせられるんだ？考えるだけでも恐ろしい…

僕はそんな事ばかりを考えてしまい、研究に身が入らないまま夕方になった。

ボタン！と玄関の開く音がした。絵理沙が帰って来たらしいな…僕がリビングに入って来た絵理沙を見ると右手に紙袋を下げている…

「輝星花お姉ちゃんただいま！」

絵理沙は嬉しそうに僕にそう言った。

お姉ちゃん…か…

絵理沙が僕をお姉ちゃんと呼ぶ時は、絵理沙がかなりご機嫌な時  
かかなり激怒している時かどちらかだ。

今日はどつやら前者らしい…

「おかえり…で…その紙袋はなんだい？」

僕が絵理沙の紙袋を指差すと絵理沙はニヤリと微笑んだ。

「これは輝<sup>ま</sup>星<sup>じ</sup>花<sup>か</sup>の明日のお出かけ用の服だよ」

やっぱり…本当に買って来たのか…

「ど、どんな服なんだい？」

僕が紙袋に手を伸ばすと絵理沙はひょいと紙袋を頭の上に乗せた。

「駄目！みちやだめ！明日になったら見せてあげるから」

「おいおい…僕はそれを見る権利があるだろ？僕が着るんだろ？」

「駄目って言ったなら駄目なの！じゃあ私は部屋に行くから」

「あ！ちよ、ちよっと待って！」

絵理沙は僕の制止を聞かずに自分の部屋へ入ってしまった。

何だか…すごく楽しそうだったな…僕にどんな格好をさせようと思っっているんだ？

その後、絵理沙は部屋から出て来ると楽しそうに夕食を食べ、鼻歌を歌いながらお風呂に入った。

僕の不安をよそに絵理沙は寝るまでご機嫌だった…

そして朝…

僕は絵理沙の用意した今まで着た事のない女の子らしい服を着た…  
…というか着させられた。

たぶん僕の着たこの服はワンピースとかいうものだろ…僕はファッションに興味が無いのでなんとなくでしかわからない…

まあそんな事なんて何でもいい…そして僕は絵理沙に言われるがままに椅子に座った。

すると事もあるうか絵理沙は僕に化粧をし始めた。僕は慌てて止めさせようとしたが、「今日は女の子でお出かけなんだから化粧くらいしなさい！」と一喝されてしまった…

そして僕の全ての準備が完了…

絵理沙はご機嫌な表情で僕の目の前に姿見を持って来た。

「ねえねえ早く鏡見て！きつと驚くよ！それにしても…きんじ輝星花って思った以上に可愛いんだね？びっくりしちゃった！」

絵理沙は楽しそうにそう言った。

何が可愛いんだ…僕はそういうキャラじゃないんだ…

そう思いながら僕は姿見を覗き込む…するとそこに映っていたのは…  
…は…

「え！？こ、これが僕なのか？」

僕は自分の目を疑った。というのも鏡に映っていたのはとても僕

とは思えないほどに可愛らしい女の子だったのだ…

「驚いたでしょ？ やっぱり私達って双子ね！ 私も結構イケてるかなーって思ったけど輝星花もかなり良い感じだね。ずっと女の子でいたほうがいいんじゃないの？」

絵理沙は楽しそうに言った。

僕は…正直どうしてこうなったのかを教えて欲しかった…僕はこの世界へ来る時、まさかこんな格好をする、いや、させられるなんて想像すらしてなかった。

「あれ？ 輝星花何で顔が赤くなってるの？」

「え？」

僕は鏡の中の自分を見た。すると顔を赤らめている女の子が…何という事だ…僕は今この格好を恥ずかしいと思ひ赤面しているではないか！

「ふふーん…輝星花もやっぱり女の子なんだねー可愛くなって恥ずかしいんだ？」

絵理沙は楽しそうにそう言う。

「…」

何か言い返してやりたかったが何も言葉が浮かんで来ない…

「よし！あとは…輝星花！その口調はやめてよね？ 皆と一緒にの時はちゃんと女の子っぽく話すんだよ？」

「え？待ってくれ！何で僕が女っぽく話さないといけないんだ！」

「何でって？今日の輝星花きりしは私のお姉ちゃんとして私達と一緒に出かけするんだよ？女の子が女らしく話さないでどうするのよ」

「だ…だけど僕は…」

「ほら！僕は禁止！私って言いなさい！」

危険だ…昨日から圧倒的に絵理沙に押されている…僕ともある者が…

「僕は…」

「だから僕って言わないのって言うてるでしょ？」

駄目だ…仕方がない…やりたくないが…

「私は…えっと…こんな感じですか？」

「うん！良い感じ！あとはすこしトーンが低いからもうちょっとあげてみて」

「絵理沙、こんな感じですか？」

「いい！いいよ！もう完璧に女の子！」

何が完璧なんだ…僕は元々一応女だ…ただこんな格好をした事がないだけじゃないか…

ふう…ああ…情けない…

僕はふと時計を見た。するともう八時を廻っている。

「絵理沙？もう八時だぞ？」

「あ！もうこんな時間！私も準備しなきゃ！」

絵理沙はドタバタと自分の準備を始めた。

ふう…もうここまで来てしまったからには引き返せないが…  
しかし…本当にどうしてこうなってしまったんだ…

絵理沙の準備が終わった。

そして僕たちは玄関から外に出た。

「さあ、行くこうか…気は進まないが…」

「何を言ってるのよ？ちゃんとしてよね？悟君達と一緒にになったら  
口調もさっきの様にしてね？」

「ああ…解ってるよ」

僕たちはエレベーターに乗り込んだ。

そして一階へと下るエレベーターの中で絵理沙が聞こえるか聞こえないかくらいの小声で言った。

「輝星花、今日は本当にお姉ちゃんだね…なんか…嬉しいな」

「え？」

「何でもないよ！今日は女らしくだよ？宜しくね」

今…聞きづらかったが、僕が本当にお姉ちゃんだから嬉しいとか  
言った気が…

それって…もしかして…絵理沙は僕と…姉としての僕と一緒に外  
出とかしてみたかったのか？

そう言えばこの姿で絵理沙と一緒に何処かに行った記憶なんてな  
いな…

……………今日のこの買い物…もしかして絵理沙は僕と一緒に買い物  
に行ける様に仕組んだのか？

まさか…ありえないな…そんな事は…大体意味がない。

エレベーターは一階に到着した。そして扉が開く。

絵理沙はエレベーターの扉が開くと同時に飛び出した。

「キラ輝星花早く！もう時間ぎりぎりなんだよ！」

おいおい…それは絵理沙が僕にはわかりかまっついていて自分の準備  
の時間を考えて無かったからだろ？まったく…

「早く！」

「解ったから…ちゃんと時間は計算してある。僕の計算だと今から  
出ればまだ十分に間に合う」

「え？そつなの？でもきつと二人とも待ってと思うから、早く行こ  
う！」

本当に嬉しそうだな…絵理沙…

「解ったよ…すこし急ごうか…」

僕たちは待ち合わせの駅へと向かった。

……しかし…僕のこんな姿を悟君に見られるなんて嫌だな…やっぱり気が重い…

一六話に続く



番外編？ 僕の苦悩と絵理沙の笑顔（後書き）

いかがだったでしょうか？ こういう合間小説の構想は1話から数話分はあるのですが実際は執筆しておらず公開までいってません。それを読めば絵理沙が悟に好意を抱いた切欠もわかるかもしれません。ご希望があれば時期を見て執筆しUPも考えようかと思えます。それでは引き続き『ぷれしす』を宜しくお願いします。

## 第16話 大宮バトル!? 救世主は俺だ! 前編

ついに土曜日がやってきた。

俺は朝食を食べ終えて綾香の部屋に戻って来ている。

まさか茜ちゃんと絵理沙と三人で大宮に遊びに行く事になるなんてな…

綾香になった時はどうやって生活していけば良いのかすごく悩んでいたのが嘘の様だ…今はでは綾香として普通に茜ちゃん達と接する事が出来る。

しかし、昔の俺ならば女の子、それも好きな子と一緒に出かけなんて事になったら、前日の夜は緊張で眠れない…ってなつてたはずなんだが…

今回はそんな事はまったく無かったよな。それどころか逆にぐっすりと眠れてしまったくらいだ…やっぱり綾香としての生活に慣れたからか? だから女が苦手じゃなくなってきたのかもしれないな。まあともあれいっぱい寝れたお陰で今日は気分が爽快だ。

俺はそんな事を考えながら窓を開けると空を見上げた。今日は秋晴れで風も無くとても暖かい。

いい天気だな…今日は暖かいしそれほど厚着をしてゆく必要はないな…

俺は窓を閉めると洋服ダンスへ向かった。頭の中で何を着てゆこうかと考えながら妹の洋服ダンスを開ける。

今俺が何気なく開けている妹の洋服ダンス…最初はこのダンスを開けるのにはかなりの抵抗があった。しかし今ではすっかり自分の

物の様になっている。実はつい先日このタンスの中の全ての服を一度試着してみた。結構俺ごみみの服が多かったという印象だ。しかし中には俺の知らない服も結構あって少し驚いた。

後は、やっぱりというか綾香はズボン系の服を持っていなかった。俺の言動のせいなのかは知らないが、ここまで徹底して持っていない思わなかった。

唯一あったのは学校のジャージのズボンだけだ。

ちなみに今日着てゆこうかと思っているワンピースも俺は綾香が着ている所を実際には見た事がなかったものだ。いつ買ったのかも知らない。

俺は洋服ダンスの中からそのお気に入りワンピースを取り出した。そして着替えてると姿見で服装の確認をし、髪をついでに整えついでに軽くリップクリームを塗った。

出発準備万端になった所で時間を確認すると時計は八時四十五分になっている。待ち合わせ時間は九時半だ。

ちなみに今日の待ち合わせの駅は近くの私鉄の駅では無く、少し離れたJRの駅でそこまで行くには自転車で約二十分くらいかかる。出るにはちよつと早いな。しかしここに居ても仕方無いし。俺は少し考えてやはり出かける事にした。

俺は「いつてきまーす」と母さんに声をかけて自転車で駅へ向かう。

なんて暖かい日なんだ。学校へ行く日はいつも寒いのに。いつもこんな暖かい日でいる！って言うんだよ！と無理な事を願ってみる。

しかし、風を切つて走るのって気持ちいいよな！気分爽快になれるよな！このままサイクリングにでも行きたい気分だ。

順調に漕いでいると俺はふと思った。全力で駅まで漕ぐと何分で

到着出来るんだ？

悟の時は最高記録が十分だが、綾香だとどうなんだろう？よし！  
何分で駅まで漕げるかチャレンジだ！

「うおおおお！」

俺は自転車を力いっぱい漕ぎスピードを上げた。

「はあはあ……」

俺は息切れしていた。そう、思いっきり自転車を漕いだからだ。  
しかし俺の凄い自転車漕ぎテクニクとママチャリとは思えない  
程のハイスピード走行のお陰でなんと十一分で到着した！

これはすごい！すばらしい記録だ！今度綾香に教えてやろう！  
俺が綾香だった時にJRの駅まで自転車で十一分で到着したんだ  
ぞ！って……そんな事を言えるはずねえじゃないかよ！俺は超無意味  
な事をしてしまったのかもしれない……

と……まあそれはいいとして……

うーん……それほど余裕を持ったつもりじゃなかったのだが……やっ  
ぱりと言うか、集合時間の三十分前に着いてしまったじゃないか。

俺は周囲を見渡して見たがもちろん二人は来てない……気配すらな  
い。

仕方ないな……待つか……

俺は待ち合わせの場所で二人を待つ事にした。

待ち合わせの駅は夏休みに茜ちゃん達と来たタイエーの横にある。まだ朝も早いのと土曜日という事もあって駅前には殆ど人はいない。

ちなみにこの駅前にはコンビニも無く、そこで待つ事も出来ない…超暇だな…

数分経って再度一度周囲を見たがやはり気配すら無い。

ふと気が付くと先程までは誰も居なかったのに、何時のまにか隣りに女の子が立っていた。

見た感じからすると俺と同じ高校生か？その子は時計をちらちらと見て少しソワソワしている。

俺と同じで誰かと待ち合わせなのだろうか？友達とかな？それともデート？そう思っていると女の子はいきなり笑顔になり右手を大きく振った。

俺は女の子の視線の先を見た。すると別の女の子が手を振りながら走ってくる。友達か…

「もう！遅刻だよ！」と待っていた子が言う。「ごめんごめん…」ともう一人の女の子が言った。そして二人は仲良く駅へと消えて行った。

仲良くお出かけか…女っていう生き物は女同士でよくお出かけとかするものなのか？

俺は友達と一緒に何処に行くと殆ど無かったが…待てよ…俺が単純に友達と遊んでいなかっただけか？

ふと辺りを見渡すと先程までは数人程度は居たはずの人もほとんど消えてゆき、周囲に俺以外に誰もいなくなつた…

しかし…何で俺はこんな早い時間から、それも一番に待ち合わせ場所に居るんだっけ？

いつもの俺はどちらかと言えばさっきの遅れていた女の子の方だよな…自慢じゃないが結構時間にルーズだ。俺が男だった時には待ち合わせ時間のギリギリに到着するのが当たり前だった。なのにその俺がこんなに早く着くとか…俺ってやっぱり変わったよなあ…

うーん…暇なせいもあつて色々な事を考えてしまつぞ。

まだかな…

待つ事が慣れていない俺は数分ごとに辺りを確認する。しかし相変わらず視界に二人の姿はない。

あーあ…ギリギリに来ればよかった…

今更そう思つても来てしまつたものは仕方がない。

くそ…おい俺つてもしかして茜ちゃんや絵理沙とお出かけが出来るから嬉しくてこんなに早く来てたりしてるのか？そりゃ茜ちゃんと絵理沙がセットで俺とお出かけなんて考えられないシチュエーションになつているが…しかし、それほど嬉しい！つて事もないよなあ…

いや待てよ…そうは思つても実は嬉しいのかも！？実際、茜ちゃんとお出かけするのって夏休み以来で久々だし…私服姿だつてその時に一度見ただけで今日はどんなに可愛いの格好で来るのかなつてちよつと期待はしている…

それに…絵理沙の私服姿も見たことないから絵理沙もどんな格好で来るのだらうつて興味がある。

……おい悟…何だかんだと言っても結局は今日のお出かけを一番楽しみにしてるのはお前なんじゃないのか？

俺は自分にそう問いかけた。そして俺の結論はと言うと…『その通りかも』

いかん…正直かなり楽しみだぞ…

ま、待て悟、お前が一番楽しみみて駄目だろ！？ま、待てよ……そうか…きつと女の子と一緒に出かけだからだ！そうだよ…俺は元々男なんだから女の子とお出かけするのが楽しみって当たり前だよ…

という事はだぞ？……もしかするとこれってデート…なのか？いや待て…今の俺は女になってる訳で…という事はデートにはならないのか？でもあれだよな？絵理沙は中身が男だって知ってるわけ…あーややこしい！

そんなくだらない事を考えていると誰かが俺の肩をぼんぼんと叩いた。

わ！誰だ！？

「え、絵理沙？」

俺は驚いて咄嗟に後ろを振り返った、するとそこには笑顔の茜ちゃん立っていた。

「おっはよー綾香」

茜ちゃんは何時もの笑顔で俺に元気に挨拶をしてきた。

「あーお、おはよう、茜ちゃん」

「綾香ごめんね、野木さんじゃ無くて」

「え？茜ちゃん？」

あれ…俺つてさつき振り返った時…咄嗟に『絵理沙？』とか言っ  
てたかもしれない？

「え？あ、えっと…絵理沙さんの名前を出したのは別に意味あるわ  
けじゃないからね！」

「あははは、どうしたの綾香？そんな事で慌てちゃって。おかしー  
よ？」

茜ちゃんは笑顔でそう言った。

「え…いや…あはは、そくだよね？ちょっとびっくりしちゃって」

「綾香つたらもー！落ち着きなさい！」

「は、はい…」

うーん…俺とした事が…しかし…

俺は茜ちゃんの私服姿を見た。うわー…茜ちゃん可愛いなあ…

今日の茜ちゃんの格好は上が赤系のチェック柄のプリントチュニ  
ックで下にはジーンズだ。夏のTシャツ姿もいいけど、こういう格  
好もいいなあ…

茜ちゃんの服装は派手さは無いけど落ち着いてる。俺は結構こう  
いう服装は好きなんだよな。やっぱり私服姿の茜ちゃんは可愛い…



俺はこんなに可愛い子に好かれてるなんて…

正直言つて俺には勿体ないくらいだよな…ってまだ俺の彼女って訳じゃないか。

「綾香、もしかして結構待ってたの？」

「ううん…大丈夫、私も今さっき来た所だから」

「よかったー！何だか待ってたような感じだったから…それにしても相変わらず早いね。まだ約束の時間の二十分前だよ？綾香って本当に約束時間は守るよね」

茜ちゃんは俺がここに先に居た事が当たり前のようにそう言った。

え？そうなのか？俺はたまたまこの時間に来てただけなんだけど…綾香ってそんなに約束時間を守ってたっけな…

よく考えてみると俺と綾香と何処かで待ち合わせをしても綾香の方が絶対に先にいた…

そうか、俺がいつも時間ギリギリだから綾香が早い時間から待ってたっていう感じがなかっただけか…綾香の奴も俺が遅刻しても怒らないから何分待ってたのか解らなかったしな。

しかし…今度から約束したら時間は厳守だな…俺は今綾香なんだからな…とは言つても俺にはちよつと厳しいよな…今日ここにこの時間に居るのが奇跡のようなものだし…

「綾香、その服可愛いねー！そのベージュのワンピースにカーディガンすっごく似合ってるよ！」

茜ちゃんが俺の格好を褒めてくれた。

「え？あ…そっかな…ありがとう」

茜ちゃんは俺の回りをくると一周しながらジロジロと俺の服装を確認している。

「綾香、これって去年私と大宮に行った時に買ったやつだよ？やつぱり可愛いねー！私もあの時から絶対に似合ってたよって思ってたんだよね」

え？これって茜ちゃんと綾香と一緒に買い物に行ったときに買ったものなのか？知らなかった…が…取りあえずは…

「えっと…そうだったっけ…私よく覚えてないの…ごめんね」

「あ、ごめん…そっか…綾香は昔の記憶思い出せない所があるんだっけ…ごめんね…私あまり考えないで言っちゃった」

茜ちゃんはすごく申し訳なさそうな顔で俺に謝った。

「ううん、大丈夫！そんなのいちいち気にしてたら話なんて出来ないよ？だから気にしないで！それよりもどんどん言っただけ…もっといっぱい色々な事を思い出したいから」

俺がそう言うと茜ちゃんは「うん、わかった！」と笑顔で返事をした。

そうこうしている間に待ち合わせ時間まであと五分になっている。しかし今だに絵理沙は来ない…

「そろそろ時間だね…野木さん来るかな？」

俺が茜ちゃんにそう言つと茜ちゃんは何かを思い出したのか「あ  
！」と声を上げた。

「茜ちゃんどうしたの？」

「えつとね…綾香に言い忘れてたんだけど…」

「え？何？言い忘れてた？つて何？」

「えつとね…」

茜ちゃんが話を始めようとしたと同時に「おはよう！」と声が聞  
えた。そして突然俺と茜ちゃんの間で絵理沙が割り込んで来た！

「うわ！」

俺は絵理沙が目の前に現れるなんて予想していなかったのもあつ  
て思わず驚いて数歩後退した。

「あ、おはよう、野木さん」

しかし茜ちゃんは寸前で絵理沙に気がついたのだろうか？驚く様  
子も無く笑顔で普通に絵理沙に挨拶をしている。

「おはよう、越谷さん」

絵理沙も笑顔で茜ちゃんに挨拶を返した。

「それにしても綾香ちゃん…驚かせた訳でもないのにそんなに驚く  
なんてヒドいなあ…」

絵理沙は俺の方を向いてちょっと不満そうにそう言った。

何を言ってるんだこいつは…十分に驚かせてるじゃないか…

お前がいきなり目の前に現れたからびっくりしたんだろ！って言うてやりたい…が、茜ちゃんも居るし、ここは大人しく…

「え…ごめん、いきなり目の前に出て来たから本当にびっくりしちゃって…」

「そうなの？私は少し離れてた所から一度は二人に声をかけたんだよ？でも気がついてくれないから…あ！そっか！綾香ちゃんも越谷さんも会話に夢中だったんでしょ」

「え？あ…そ、そうかも…ごめんね」

「私も寸前まで野木さんに気がつかなくてごめんなさい」

俺が絵理沙に謝ると一緒に茜ちゃんも絵理沙に謝った。

「べ、別に謝らなくてもいいよ…二人とも悪い事をしていた訳じゃないし…」

絵理沙は謝られ慣れていないのか、すこし照れた表情を浮かべながら言った。

ここで俺は絵理沙の私服姿に目がいった。初めて見る絵理沙の私服…

絵理沙は青のプリントTシャツの上に黒のライダースジャケット、下はストレートジーンズを履いている。

こんなボーイッシュな格好も似合うんだ…悔しいけどかなり格好いいじゃないか…

しかし、私服姿の絵理沙はスタイルが良いのあるが、ぱっと見ただけじゃとてもじゃないが高校一年には見えない…十分大人でも通用しそうだ。

とは言っても絵理沙が本当に高校一年なのか怪しい所もあるんだけどな。

ふと絵理沙の方を見た時、俺は絵理沙の後ろにもう一人女性が立っている事に気が付いた。

あれ？絵理沙の後ろにいる女性は誰なんだ？なんで絵理沙の後ろに立ってるんだろう？単純に立ってるだけかな？

俺がその女性の顔を確認しようと思ったが、絵理沙が邪魔で顔を確かめ出来ない。

まあいいや他人だろうし…そう思っていたら絵理沙がその女性の方へ振り返り声をかけた。

え？何だ？その女性は絵理沙の知り合いなのか？

絵理沙の知り合？知り合いというと…俺の頭の中にふとある人物の顔が思い浮かんだ。というよりもそいつしか思い浮かばない。

ま、まさか！無いよな…こんな場所に来てるなんて有り得ないよな…でももしかすると…

俺がその女性の顔を確認しようとして数歩後移動した時、茜ちゃんがその女性にお辞儀をした。そしてその女性も軽く頭を下げる。

茜ちゃんも知り合い？俺がそう思った時、女性が頭を上げて顔が確認出来た…俺の予想は的中していた。

「野木さん、この方がお姉さんだよね」

「うん」

お姉さん…俺は近くに寄りその女性の顔をもう一度確認してみた。間違いない…この茶色い髪に赤い瞳をした絵理沙と同じ顔立ちの女は…

「初めまして、私は野木さんのクラスメイトで越谷茜です。今日は宜しく願います。」

「初めまして、絵理沙の姉で野木輝星花です。こちらこそ宜しく願います」

何で輝星花がここに居るんだよ！

ズガン！俺はでっかいハンマーで頭を殴られたような衝撃に襲われた…

おいおい…何でお前がここに居るんだよ…そして何だその格好は！？その口調は！？

俺の目の前には俺が想像した事もない本当の『女の子』の輝星花が居た。

輝星花はアーガイル柄のノルディックパープルのフレアワンピースに黒のレギンス、そしてブラウンのクシュクシュブーツを履いている。そして事もあろうか薄くではあるが化粧までしているのだ！

何だその可愛い格好は…本当に輝星花なのか？俺は何度も顔を確認した。しかし前にいる女の子はやっぱり輝星花だった。

動揺した俺は思わず頭を抱えてしまった。

「どうしたの綾香？頭を抱えて？頭痛？」

茜ちゃんが頭を抱えている俺を見て心配したのか、声をかけてきた。

「い、いやちょっと…少し目眩が…だ、大丈夫だから」

「本当？大丈夫？顔色も少し良く無いような…」

心配そうに茜ちゃんが俺を見ている。

「う、うん…本当に大丈夫だから…心配しないでいいよ」

「綾香がそういうなら…本当に具合が悪かったら言っただけ？」

そう言つと茜ちゃんは心配そうに俺を見ながらも輝星花と話を始めた。

しかし、何て言えばいいのだろうか？俺の前にいる輝星花…

何故今日ここに居るのかという事は後で考えらるとして、今日の服がとても似合っていて可愛いのだ…

制服姿の輝星花も可愛いと思つたが、それどころの騒ぎじゃない…だが、俺の中での輝星花のイメージと今日の輝星花のギャップが凄まじい。

俺が白衣姿の野木一郎ばかり見ている、そちらの印象が強いからだろうか？

こんな可愛い格好の輝星花なんて輝星花じゃない！と思つてしま

う位だ…

…待てよ？何で俺は絵理沙の私服姿にギャップを感じないのに輝星花の格好にこんなギャップを感じてるんだ？絵理沙の私服姿だつて今日始めて見たんだし、輝星花の制服姿だつて見た事があるじゃないか…

そりゃ野木一郎の印象は強いが、輝星花の女性としての姿だつて知らないつて訳じゃないんだ…

そうか！口調だ…絵理沙の口調は普段通りだ…しかし輝星花の口調がまったく違うからか！女らしい話し方…そうだ、今日の輝星花は屋上で話しをした時と声のトーンまで変えている！

俺はちらりと輝星花を見た。すると輝星花は俺をじつと見ている。そして俺と視線が合うとニコリと微笑んだ。俺は思わず動揺して目を反らしてしまった…

ドキ！今すっぱードキツとしたぞ…

何で俺に向かって微笑むんだよ！くそ…笑顔もドキツとするほど可愛いじゃねーか…

………輝星花の笑顔でドキツとした自分が何だか悔しかった。

そつだよ…何で輝星花がここにいるんだ？考えられるとすれば、絵理沙を一人で外出させない為か？監視の為なのか？それにしても輝星花の姿で来る必要は無いんじゃないか？それもそんな可愛らしい格好で…

野木一郎の姿とは言わないが別の誰かに変身すればいいじゃないか。

…もしかしてまだ魔力が回復してないのか？まあいい…後で直接聞いてみるか…



「越谷さん、今日はすみません…私も行きたいなんて突然言っ  
まっつて…」

「いえ、別に大丈夫ですよ！あの…野木さんにお姉さんは病弱で滅  
多に外出が出来なかつたつて聞いてます。それなら体調が良い時に  
外出しないとまた外出が出来なつてしまいますから」

「ありがとうございます」

「途中で気分が悪くなつたら言つて下さいね？無理はしないで下  
さいね」

「はい、お気づき頂きありがとうございます」

何というガチガチした固い会話だ…しかも輝星花が病弱？顔色も  
抜群に良いしどこが病弱なんだか…設定に無理があるだろ…

しかし輝星花の違和感のあるその口調…どうにかならないのか…  
聞きなれてないから気持ち悪いぞ。

そんなガチガチの二人のやりとりを見ていた絵理沙は呆れた表情  
で「ふう」と大きく溜息をついた。そして茜ちゃんに向かって言っ  
た。

「茜ちゃん、そんなに気を使わなくても大丈夫だからね？輝星花の  
病気はもうほぼ完治してるから心配しなくても大丈夫だよ。あと輝  
星花は私の姉だけど双子だから歳は茜ちゃんとも一緒なんだよ？そ  
んなに固くなつて敬語なんて使わなくてもいいんだからね？」

「そうですよ越谷さん。私も高校に行けていたら同じ学年なんです

から、そんなに固くならないくださいね」

「え？あ…そうだよ…うん、わかりました」

そう言つと茜ちゃん是不意に俺の方を見た。

「綾香、目眩は大丈夫？」

「あ、うん、大丈夫」

なんだ…いきなり見るから何かと思つた…

「あのね綾香…さっき言いかけた事だけど…もう解っちゃったかと思つんだけど、今日は野木さんのお姉さんも一緒に来るって事だったんだ…言つて忘れててごめんね」

確かに言つのはすつごく遅すぎるしもう解つてるけど…

「あ、そうだったの？大丈夫だよ。私は別に気にしてないし、絵理沙さんのお姉さんなら私も歓迎するよ」

とか言つておけばいいか…

俺は再び輝星花をちらりと見た。するとまだ俺をじつと見ているじゃないか。

輝星花と視線が合った。すると輝星花は満面の笑みで俺に向かって挨拶してきやがった。

「綾香さん、今日は宜しくお願ひしますね」

お前になんてお願いされたく無い！と言ってやりたい…

しかし何だよ…俺にもその笑顔にその口調かよ…まあ茜ちゃんが居るから仕方ないが…

それにしてもこの姉妹はやっぱり卑怯だぞ…絵理沙は前々から可愛いと思ってたがまさか輝星花までここまで可愛いとは…

二人ともこれで魔法使いじゃなく性格が抜群に良かったら…すぐくもてるだろうになあ…

「はい…宜しくお願いします」

「あれ？あれれ？もしかしてお姉さんは綾香を知ってるんですか？」

輝星花が何の抵抗も無く俺に挨拶をしてきたせいだろうか、茜ちゃんも首を傾げながら輝星花にそう聞いた。

「ええ、実は綾香さんには一度お会いした事があるんです」

輝星花は笑顔でそう言った。

ここで俺に振るか…えっと…ここはどう答えればいいんだ？取りあえず以前から知り合いだって事が解ればいいだよな？

「う、うん、そうなの…前に一度会った事があるの」

「へえ…そうだったんだ…」

「あのね、私が一回だけ綾香ちゃんを自宅に招待した事があって…その時に紹介したの」

絵理沙が咄嗟にそう言った。

「ふーん…でも良かった！私って綾香にお姉さんが来るって言ったしね」

「あはは…私も良かった…のかな…」

俺は取り合えずそう言うのと再び輝星花をちらり見た。

何故だろう、今日の俺の視線はついつい輝星花の方へといつてしまふ。

まさか俺は本当に輝星花なのか疑う程に女の子らしい格好をしたこいつの事が気になっているのか？

そんな事を考えながらまた俺はまた輝星花の方を見た。すると輝星花も俺の方を見た。

やばい…ちよっと見すぎてるな…俺が輝星花をチラチラ見てるなんて思われたくないぞ…あいつの事だきつと何かのネタにするだろ。もしかすると強請られるかもしれない！やばい、やばいぞ…見ないようにしないと。

俺は輝星花の視線をかわすように咄嗟に下を向いた。

そつだよ…輝星花が気になるのはきつと物珍しいからだ。

もう十分に見たじゃないか…悟、もう見るのはやめとけよ？俺は自分にそう言い聞かせた。

「綾香ちゃん？突然俯いたかと思ったら何をぶつぶつ言ってるの？」

俺が下を向いているといきなり絵理沙が覗き込んで来た。

絵理沙の顔が俺の目の前に！

「うわー！」

俺は驚いてよろよろと後ろに数歩後退してしまった。

「綾香ちゃん…今日はやけに私にびっくりしてない？」

確かに…今日はやけに絵理沙にびっくりしてる……というかお前がそういうタイミングでいきなり現れるからだろ！

「綾香どうしたの？大丈夫？」

茜ちゃんが心配そうに言った。やばい…茜ちゃんがまた心配してる…

「え、うん…大丈夫！」

「そう？それならいいけど…今日の綾香ってちょっと変だよね…」

「え？えっと…普通だよ？」

やばい…このメンバーだと素が出そうだぞ…茜ちゃんには何度か俺が素に戻った姿を見られてるし…

あまりそんな姿を見られると俺が綾香じゃないんじゃないのかわつて疑われる可能性があるぞ…気をつけよう。

「あ！そうだ！茜ちゃん」

絵理沙が茜ちゃんに声をかけた。言葉に反応した茜ちゃんは絵理沙の方へと顔を向ける。

絵理沙？これって俺が困っていそうだから茜ちゃんに声をかけたのだろうか…

俺は絵理沙の方をちらりと見た。俺は絵理沙と一瞬目が合った。しかし絵理沙はすぐに視線を外した。

「どうしたの？野木さん？」

「えっと、そうだ！私を絵理沙って呼んでいいからね？野木さんだとあれでしょ？輝星花きせいけと私の区別がつかなくなっちゃうしね。あと姉の事も輝星花きせいけって呼んでいいからね」

「え？いいの？でもお姉さんを流石に呼び捨てには出来ないよ…」

「大丈夫だって！いいよね？お姉ちゃん」

「はい、私は名前でもらってかまいませんよ？輝星花きせいけって呼んで下さい。私も茜さんって呼びますから」

「そ、そうですか？じゃあ…輝星花きせいけさんって呼びますね」

「私も茜ちゃんって呼んでいいかな？」

絵理沙は笑顔でそう言った。

「うんいいよ！茜って呼び捨てでもいいんだよ野木さん。でもよかった…私ってどういう風に野木さんとお姉さんを呼べばいいのか迷ってたんだ」

「ほらほら！また野木さんって呼んでるよ」

「あー！ごめんなさい、つい…」

何という光景だろうか…茜ちゃんと絵理沙と輝星花きせいが仲良く話している…

茜ちゃんと絵理沙と一緒に出かけだけでも十分すごいシチュエーションかと思っていたのに…これは予想を遙かに超えた事態になったな…

しかし…大丈夫なのか？絵理沙と輝星花きせいは…本当に茜ちゃんとお出かけとかしてもいいのか？人間と関係を持つのは駄目なんじゃないのか？

何かあってからじゃ遅いんだぞ？まったく…

って何で俺がこんな心配をしてやらなきゃいけないんだよ…  
だいたいお前らが…

「…香」

ん？茜ちゃんの声？

「綾香！早くー！行くよー」

俺は茜ちゃんの声が聞こえてはっと我に返るとすでに三人は駅へと向かって歩いていった。

え？何時の間に！俺は慌てて三人を追っかけた。

「こら綾香！もう電車が来る時間だよ、何ぼーとしてるのー早くー」

「早く、ごめーんー！」

くそ…絵理沙も輝星花も俺の心配もどこへやらかよ…

俺達は改札機を通りホームへと出た。

大宮に向かう電車の中…

絵理沙と茜ちゃんはというと…：…丁度席が二つ空いたらしく仲良く並んで座っている。

それにしても楽しそうに話をしているな。

俺はというと…：ドアの横で窓から流れる景色を見ていた。

「どうしたんですか？綾香さん」

後ろを振り返るとそのには輝星花が立っていた。

「どうしたんですかって…：見たまんまだよ…：外を見てるんだよ…：お前こそどうしたんだよ…：その格好とか…：」

輝星花はちらりと絵理沙と茜ちゃんを確認すると俺の真横に立ち少し声を抑えて俺に話しかけてきた。

「悟君、君は何でお前がそんな格好でここに居るんだよって思っているだろ？」

輝星花は俺の目をじっと見た。



やっと何時もの口調に戻りやがった…

「何だよ、お前：俺の心を読んだのかよ？」

俺がそう言つと輝星花は首を横に振つた。

「いや：実はまだ魔力があまり戻ってないんだよ：だからなのか僕は君の心は読めない状態なんだ」

「おい？もうそろそろ一週間経つぞ？魔力が戻らないって大丈夫なのか？」

「正直言つとあまり良い状況ではない。でも多分大丈夫だと思う」

「そうか…お前が大丈夫つて言うのならいいんだけど…あと、確かにお前の言う通りに俺は何で輝星花がそんな格好でここに居るんだよつて思つてた」

輝星花は「ふう」と大きな溜息をついた。

「正直に言つと僕はこんな場所にこんな格好で居たくなんでないんだよ…」

「何だよそれ…どういふ事だよ？」

「聞いてくれ、絵理沙がどうしても君達と一緒に大宮に行くつて聞かなくつて、僕はやめると言つたんだ：だけど絵理沙はクラスメイ卜の子と悟君と一緒に遊びに行つて何が悪いの！とか激怒してしまつたんだ。僕は絵理沙とあまり離れると遠隔監視も出来ないから絵

理沙だけで外出させるのは無理だと言ったんだよ。そしてら余計に怒ってしまったって…」

何だそれ？そんな事を俺に言われても俺の知ったこっちゃないん

だが…

輝星花は話を続ける。

「結局最後まで絵理沙は折れなくて、それで結局僕は絵理沙の監視の為に一緒について行く事になったんだが…」

「ふーん…それでわざわざ俺達と一緒に買い物に行く事になったのか？」

輝星花は自分の格好を見ながら言った。

「いや、僕は魔力が回復していたら他人に変身して付いて行くかと思っただんだ。でも絵理沙が先走って越谷茜に僕と一緒に行くと言ってしまったらしくてね…」

「なるほどね」

「どちらにせよ魔力の回復が著しくないので変身も難しかったのだが…仕方ないから僕は君達と一緒に買い物に行くのに絵理沙の制服を借りようかと思ってたんだ。そうしたら絵理沙が制服じゃ駄目だよ！ちゃんと女らしい服を着なさい！って怒るんだよ…それで僕は女らしい服なんて無い！って言ったらこれを勝手に用意されたんだ…あと…化粧までされたんだ…僕は化粧なんてしたこと無いのに…」

「

輝星花は悲しそうにそう言った。

こいつ…本当に男として育ったんだな…

「悟君、見てくれよ…この変な格好…やっぱり僕にはこんな格好は似合わないと思うんだ…」

「そんなに嫌なら無理にそんな格好しなきゃいいじゃないか。絵理沙に言えよ…姉なんだろ」

「そうなんだ…そうなんだが…無理だったんだ…昨日の絵理沙には…僕は逆らえなかったんだよ」

輝星花きせいけは先程よりももつと悲しそうに言った。

「そんなの俺のせいじゃないだろ…それで？口調も女っぽくって言われたのか？」

「そう！そうなんだ。絵理沙は僕に女口調で話せて言うんだよ？酷いと思わないか？僕は女口調なんて慣れてないのに」

酷いとは思わないけどな…まず制服で来ようと思う方がおかしいと思っぞ…

それに女の格好でお前の普段の口調は絶対におかしい…一緒について来るのなら絵理沙の意見の方が正しいな。

「ああ…僕ともあろうものが絵理沙の言いなりになってしまっなんて情けない」

そう言った輝星花きせいけはがっくりと肩を落とし相当落ち込んでいた。

ふむ…輝星花は相当にこの格好が嫌なんだろうな…でもそこまで落ち込む事じゃないだろ？

輝星花だって女なんだから女の子っぽい格好をしても別に良いんじゃないのか？

現に今の格好だって俺は似合ってると思うが…

「悟君、絵理沙はこんな僕を見て可愛いなんて言うんだ…君は今日の僕の格好はおかしいって思わないのかい？ハッキリ言ってくれ！」

輝星花は同意を求めるかの様に俺に向かって言った。

何だ？絵理沙にその格好は可愛いって言われたのか？さっきも思ってたが今日の輝星花の格好はとても似合っているし、可愛いと思う。

普段の輝星花（野木一郎）を知っていればおかしいと思うだろうが、知らない人間が見れば微塵にもおかしいなんて思わないだろう。それにその姿がお前の本来の姿だろ…

「正直に言っぞぞ？」

「あ、ああ…言ってくれ」

「今日の輝星花は…」

「今日の僕は？やっぱりおかしいのか？」

「いや…まったくおかしくない。その服もすごく似合ってるぞ」

俺がそう言つと輝星花は驚いた表情で俺を見た。

「え！？悟君？別に無理にそんな事を言わなくってもいいんだよ？」

輝星花はどうしても今の格好が似合っていないと言って欲しいのか？

「無理なんかしてない。輝星花にその服はすごく似合ってると思うし、化粧だっておかしくない。何時もの輝星花を知ってる俺とすれば正直今日のお前は可愛くてムカつくくらいだよ…口調だって…あれだよ、あれだよ…俺はその声に違和感があるんだぞ？でも周囲の人にとっては気にならないだろうし、絵理沙と違ってお前の声は落ちていくからすごくお淑やかで可愛い声に聞こえる…傍から見ればお嬢さんにすら見えるな…マジに可愛いぞ？」

俺が話していると話の途中から輝星花の顔が見る見るうちに赤くなっていた。

うわ！何で輝星花は赤面してるんだ。こいつにも恥かしいって感情があったのか？いつも冷静で「そうですか？僕はそう思っていない」とか言いそうなのにな。

もしかすると輝星花は今まで女として扱われた事が無いからなのか？

「さ、悟君、君まで何を言ってるんだ！？僕が可愛いなんてあるはず無いだろ！き、君の見解は間違ってるぞ！だいたいこんな格好が僕に似合うなんておかしい！」

輝星花はムキになって反論してきた。

そんなに自分が可愛いと認めたくないのか？

でも俺は間違ってる。今日の輝星花は誰がどう見ても可愛い女の子だろ？

しかし…こんなに赤面して女らしい輝星花は初めて見たが…何だろつか？

本当に女にしか見えないじゃないか…

………あ…そうか、こいつは元々から女だったんだ…

「俺は別に間違っと思ってないと思うけど？あと、声が大きいぞ？ほら、乗客が皆こつちを見てるじゃないか…」

輝星花は周囲を見渡すと一際顔を赤らめた。そして小声で言った。

「す、すまない…つい…」

「輝星花、ハッキリと言うけどお前は女なんだぞ？その格好が悪いとかその口調が似合わないとか化粧しちや駄目とか無いんだぞ？さつきも同じような事を言ったじゃないか」

「でも…僕は…」

「何度も言うが、お前は元から女なんだ！本来そういう格好をすべきなんだ。絵理沙も可愛いって言うてくれたんだろ？いいじゃないかよ」

「………僕はただ…今までの人生をほとんど男として生活してきたから…やっぱり今更…」

「解るよ…言いたい事は…でも…そうだよ…その格好は今日一日だけなんだろ？」

「そうだった…今日一日の我慢なんだ………悟君…もう一度聞くが…本当におかしくないか？」

輝星花きせいけはそう言つて俺の事をじつと見つめている。その赤い澄んだ瞳を見ていると吸い込まれそうな感じさえ受ける。

それに…そんなに見つめられると俺の方が照れるじゃないか…

「そんなに俺を見つめるな！お、おかしくないと言つてるだろ！」

「そうか…でも…僕が君を見る事に何か問題でもあるのかい？今までもずっと君を見ていたじゃないか？普通の事だろ？」

絵理沙といいこいつといい…鈍感というか…頭は良いのに俺の気持ちを理解出来ない奴だな…

俺は外見こそ女だが俺の中身は男なんだ！女にジロジロ見られたら照れるに決まつてるだろうが！俺は女に見つめられる事に慣れてないんだ…

つて…あれ？俺つて輝星花きせいけを女だつて完全に認めてる…

ま、まあ…女なんだ…仕方無いよな…

注 別に女性に見つめられたからつて全ての男性が照れるなんて事はありえません。by 作者

「俺は男なんだ！お前が男の時、そうだよ！野木一郎の時になら見られても何も感じないんだよ！でもな…今の輝星花きせいけ…女のお前にジロジロ見られると俺は恥ずかしいんだよ！」

「恥ずかしい…この姿の僕に見られると恥ずかしいのかい？そ、そうなのか？」

「そうだつて言ってるじゃないか…」

「それつて…どういう事なんだい？もしかして悟君は…僕に好意を

抱いてしまったとか…」

どうしてそうなるんだよ…

「お、俺は女に見つめられるのに慣れてないだけだ！…あ、あと何で俺がお前に好意を抱くんだ！ありえねーだろ！」

「え？なるほど…別に好意を抱いていなくても照れるものなのか…そうか…なるほど…男とはそういう生き物なのか…」

やっと理解してくれたのかは解らないが、輝星花は俺の目から視線を外した。

俺は横目で輝星花の格好を再度確認してみた。悔しいがやっぱり可愛かった。

俺はさつきこいつに好意を抱いていないと否定した。でも正直…最近の輝星花を見ていて少しだが気持ちが変わったような気がしていた…俺はこいつが嫌いじゃない…

「悟君…」

「何だよ…」

「君は…兄弟でお出かけなんてしてたのか？」

な、何を突然変な質問してくるんだ…

「あ…ああ…してた…」

「それは…楽しかったかい？」



何だ？何でこんな事を？さっきまで話していた事とまったく違うじゃないか？

「ああ…楽しかったし、早く綾香を見つけて…もう一度一緒に買い物に行きたいよ」

「なるほど…そうか…早く叶うといいね…僕も協力するよ」

「どうしたんだ？いきなり変な質問してきやがって…」

輝星花ほしほなの視線が一瞬絵理沙の方を向いた。

何だ？絵理沙と何かあるのか？

「いや、聞いて見たかっただけだよ」

「そ、そうか…」

「ふう…取りあえずは今日が無事に終わる事を僕は祈っている事にするよ」

「ああ…そうだな…俺もマジでそう思うよ…」

本当に無事に終わって欲しいよ。マジでもうすっげー疲れたし…

ふと絵理沙と茜ちゃんを見た。二人はずっと楽しげに会話を続けていた。

それにしても絵理沙の奴…どうなってるんだよ…

絵理沙を見るとすぐに思い出してしまう…あの時の事を…

俺は何度もあの告白を忘れようと思っっているが忘れられない。

……本当にあの告白は…嘘だったのか？それとも…

あー！やめた…やっぱりあまり考えるのはやめよう。

そして電車は大宮駅に到着した。

続く

**第16話 大宮バトル！？救世主は俺だ！前編（後書き）**

大宮編はまだ1〜2話続きます。

突然設定変更しました。

姫宮綾香の身長148 142になりました。理由：148は普通かもしれないと最近思ったので…以上です。内容に変更はありませんが、小説内での身長は変わっています。

第17話 大宮バトル！？救世主は俺だ！中編（前書き）

更新遅くなりました。申し訳ありませんでした。

## 第17話 大宮バトル!? 救世主は俺だ! 中編

大宮駅に到着。俺達は電車を降りた。

久々の大宮駅のホームは相変わらず人で溢れていて上りのエスカレーターが長蛇の列になっている。

「絵理沙さん、輝星花さん、こっちですよ! 綾香も早く!」

茜ちゃんは号令とも聞こえる口調でそう言うと、小走りで長蛇の列になっているエスカレーターの最後尾に真っ先に並んだ。

絵理沙と輝星花も茜ちゃんに言われるがままにエスカレーターの順番に並ぶ。

「それにしてもこの駅って人がいっぱいだね」

絵理沙が物珍しそうに周囲を見渡しながら言った。

「ここは大きな駅だからね。でも今日は休日だからこれでも人は少ない方だと思うよ?」

茜ちゃんは笑顔でそう答えた。

「へえ…これで少ないんだ?」

「うん」

絵理沙は茜ちゃんとそんな会話をしながら駅の構内をキョロキョロと見渡している。

輝星花はそんな絵理沙を少し呆れた表情で見ていた。

「あのさ、絵理沙さんって…もしかしてあまり電車とか使った事がないの？」

茜ちゃんは物珍しそうに構内を見わたしていた絵理沙にそう質問をした。

「え？私？えっと…」

絵理沙は突然の質問に言葉に詰まらせた。

そしてちらりと輝星花の表情を伺った。

輝星花は絵理沙の目を見て小さく首を横に振る。絵理沙はそれを確認して小さく頷くと茜ちゃんの質問に答えた。

「えっと…茜ちゃんの推測通りだよ。私は電車ってあんまりは使った事がないの」

「本当にそうだったんだ。それってやっぱり外国で暮らしてたから？」

「あ、うん、そうなの」

「へえー…そっか。だからそんなにキョロキョロしてるんだ。じゃあ絵理沙さんがいた国って電車がなかったの？」

「え？…えっと…そ、そうなの」

「そっか、ふーん…ごめんね、つまらない質問しちゃって」

「ううん、いいよ別に」

茜ちゃんは絵理沙は帰国子女だという認識だからだろう。絵理沙が電車を使った事が無いという事に関しては得に驚きは見せなかった。

しかし、俺はそんな事よりも絵理沙と輝星花とのアイコンタクトが気になった。

さっきのアイコンタクトは絵理沙は輝星花に茜ちゃんの質問に対してどう答えればいいのか？とでも聞いたのだろうか？まあそうとしか考えられないのだが…

それに対して輝星花は「電車を使った事が無い」って答えるようにサインを送ったのだろうか？

絵理沙の答えがそういう感じだったのだからそうなんだろ。

しかし、相手の目を見るだけで本当にそれだけでお互いの考えが事が伝わるものなのか？

そうだとするとすごい事だ…流石双子の魔法使いと言った所だろうか。

しかし、そんなすごい奴らならもっと早く俺を元に戻せるんじゃないか？つと言っても無駄か。

例え戻れたとしても綾香がまだ見つかってないしな。

ちなみにだが、読者の皆様は知っているとは思いますが、絵理沙と輝星花の二人は茜ちゃんが帰国子女だと理解しているように海外に住んでいたという設定だ。しかし実際は二人とも魔法世界の人間なんだ。ようするにこの二人は魔法使いなんだ。

ってなんで俺がこんな説明を…

うーん…魔法世界…か…

しかし、この世の中で魔法の存在を信じてる人間って何人くらいいるんだ？

そういって俺もこんな状況に追い込まれなかったら魔法を信じる事

なんてなかった。

そう言えば魔法世界っていうのはどんな場所なんだ？考えてみれば俺はこいつ等が住んでる魔法世界の事を詳しく聞いた事が無いぞ…

「ねえねえ、絵理沙さん、もう一つ聞いてもいいかな？」

「え？何？」

「絵理沙さんと輝星花きせいけってなんて国に住んでたの？私も知ってる国？」

お？なかなか面白い質問が茜から出たぞ？さて、絵理沙は何て答えるんだ？

「え？えつと…」

絵理沙は再び言葉に詰まった。そして輝星花きせいけの方をちらりと見た。輝星花は先程と同じようにまた小さく頷いた。しかし今度は絵理沙をフォローするかのように茜ちゃんに向かって話を始める。

「茜さん、その質問なんですけど…すみません…実は色々あって今は言えないんです。隠す訳じゃないのですが…」

輝星花きせいけがそう言うと茜ちゃんが慌てている。余計な事をきいちゃった！とでも思ったのだろうか。

「あ、いいです！いいです！ごめんなさい。また変な質問しちゃった」

「いえ、茜さんの質問は別におかしくありませんよ。私達の事に興味



を持って下さっているのですから。逆に私達が答えられない方が本来はおかしいのですから…本当にすみません茜さん。そしてご理解頂いてありがとうございます」

「ごめんね、茜ちゃん、本当に別に茜ちゃんは変な質問をした訳ではないんだよ？気にしないでね。また時期を見つけて…教えてあげるからね」

絵理沙も輝星花きせいに続けて茜ちゃんに謝った。

「あ、うん、わかった」

結局、輝星花きせいの奴がうまく逃げやがった…

と言うか、ああいうふうに言われてしまうと『それでも聞きたい！』って茜ちゃんも流石に言えないだろ…

しかし、まったくもってつまらない…

そうこうしているうちに俺達はエスカレーターを上りきった。

そしてエスカレーターから降りると再び茜ちゃんが先導をきり中央改札口へと向かう。

少し歩いた時、先頭を歩いていた茜ちゃんがいきなり立ち止まった。そして俺達の方を振り返る。どうしたんだろ？

「どうしたの？茜ちゃん？」

「え…えつとね…ちょっとお手洗い行ってもいいかな？」

何だ、何かと思えばトイレか…

もちろん俺達に茜ちゃんがトイレに行くのを拒む理由はない。

「別にいいよ？行って来れば？待ってるから」

「ありがとう！すぐ行ってくるから！改札の横で待ってて」

そう言つと茜ちゃんは小走りでお手洗いに向かった。

中央改札の前…

絵理沙は相変わらず物珍しそうに駅の構内を見渡している。

おいおい絵理沙…そんなにキョロキョロしていると「私は田舎者です！」ってアピールしてるようなもんだぞ…って言ってるやうな気がしたが、とりあえず放置しておく事にした。

「すごいね輝星花…人がいっぱい…」

絵理沙は構内を見渡しながらそう言った。

すると輝星花はすこし不満そうな顔になる。

「ちよつと絵理沙、あまりキョロキョロしないでくれる？」

輝星花は絵理沙があまりにも落ち着きが無いのが不満なのか。

「あ、ごめん…」

絵理沙は咄嗟に謝つたが輝星花は相変わらず不満そうな表情をして  
いる。

しかし、この程度の人ごみで「人がいっぱい」とか。それともこいつの住んでいる世界ってそんなに人が居ないのか？ 何だかすごく気になってきたぞ。

……よし…気になれば聞けばいいじゃないか…聞いてやる。

「おい、絵理沙」

「え？な、何よ？」

「絵理沙の住んでる世界ってどんな所なんだよ」

「え？何？私の住んでる世界？えっと…わ、私達の世界は…えっと…」

絵理沙は俺からそんな質問が来るなんて思ってもいなかったのだから？オドオドしながら中途半端に答え始めた。

しかし、茜ちゃんの時もそうだが、今日の絵理沙は質問されると常に答えられていない。何かおかしい。

一応こいつだって先生をやってたんだし、今までこんな感じじゃなかった…と思う。

と思っていると輝星花が会話に割り込んできた。

「絵理沙、それは答えなくていいから…綾香さん。綾香さんは別に私達の世界の事を知らなくても何の弊害もないはずでしょ？」

輝星花は他人行儀な話方でそう言った。

何だその言い方は？絵理沙達の住んでいる世界の事は俺には秘密

なのか？

確かに機密情報なのかもしれない。だけど俺はもう関係者なんだぞ？というより被害者なんだぞ！？

少しくらい教えてくれても罰はあたらないだろ。

「確かに弊害なんてない！けどな、俺はお前達の事がもつと知りたいんだよ！少しくらいお前達の世界の事とか教えてくれてもいいだろ？」

「そうですね…しかし、その件については必要性が出たらお話します」

輝<sup>キラ</sup>星花は真面目な顔でそう言った。ムカツク！

まるで野木一郎と話しているみたいにムカツクぞ！ってこいつ野木一郎だった…

しかし俺的にはすごく納得いかない。俺にも知る権利はあるはずだ。

こいつら俺の事を何だとおもってやがるんだ。

「おい！！お前らは俺の事を何だと…」

俺が話を始めた瞬間、「綾香ちゃん！」と絵理沙が小声で叫んだ。そして俺の後ろを小さく指差す。

「思ってた…え？」

俺は慌てて振り返る…するとそこには茜ちゃんが立っているじゃないか！

茜ちゃんトイレ早い！ってそういう問題じゃないぞ！？もしかして…

「ねえ…綾香…」

何だ…茜ちゃんが疑心暗鬼な表情で俺を見ているぞ…

「あ。茜ちゃんおかえり。どうしたの？そんな顔しちゃって」

やば…俺とか言ってたの聞かれたか！？

「今さ…俺とか…言ってたなかった？」

うわ！やっぱり！取り敢えず否定だ！否定！

「え？えつと…そんな事は、い、言っていないよ？」

油断してた…茜ちゃんがまさかこんなに早く戻ってくるなんて予想してなかった…

「ねえ…綾香？前も『俺』とか言ってた時あったよね？」

「そ、そうだったけ？」

「うん、夏休みに私を助けてくれた時と…体育祭のバレーの試合の時」

正解…よく覚えていらっしやいますね…

「えつと…そうだったかな？」

「あの時は…綾香の感情が高ぶってたし、記憶喪失の後遺症かなに

かで『俺』とか無意識に出たのかと思ってた。そうだと信じてた。  
だけど…今のは…」

「えっと…さっきのは…」

どう答える…誤魔化すしかないのだが…

「あの…何だか私が綾香さんと話していた内容と異なってるような  
…」

突然輝星花が苦笑しながらそう言ってきた。

茜ちゃんは「え？」という表情で輝星花を見た。

「あ…話に割り込んでしまってますみません。あの…それで綾香さん、  
さっき言っていた『俺のタルト』ってそんなにおいしいのですか？」

輝星花が俺に向かって笑顔でそう言ってきた。

「え？」

何それ…輝星花、何だよその『俺のタルト』って…

「おいしいって言ってたじゃないですか」

しかしここはおいしいと答えるべきだろう。

「あ、うん！そうなんだ、『俺のタルト』っておいしいんだよ！」

「綾香さん、私も一度食べてみたいです」

「あ、うん、今度みんな食べようね」

輝星花きせいけの振りに乗ってはみたがかなり無理やりすぎる気がする…  
こんな事で茜ちゃんを騙せるのか？疑いが晴れるのか？

「え？『俺のタルト』の話してたの？綾香ちゃんって『俺のタルト』好きなの？」

茜ちゃんは『俺のタルト』に反応した！

「え！？あ、うん」

「あれっておいしいよね！私も好きなんだ！」

あれ？茜ちゃん？既に信じてる？

「あ、そ、そうなんだ…」

「そっか…ごめんね…私すっごく勘違いしてたかも…えへへ。そうだよ、綾香がこんな場所で『俺』とか言うはずないよね…私ったら何考えてるんだろ」

茜ちゃんはそう言って苦笑した。

あれ？うまく誤魔化したのか！？なんと言う事だ…って…これは輝星花きせいけのおかげか…

俺がちらりと輝星花きせいけを見ると視線が合った。そして輝星花きせいけは「うまくいったでしょ」という感じに笑みを浮かべている。

冷静だな…流石、魔法管理局の野木一郎ってどこか…

しかし…茜ちゃんって佳奈ちゃんと同じ位に素直な子だな…

いや待てよ？これは素直っていつのか？単純に騙されやすいって事じゃないのか？

「どうしたの綾香？そんなに私の顔を見ないでよ、私が『俺のタルト』が好きなんて意外だった？」

「え？あ、うん、意外だった…」

いや…本当はすぐに人を信じる茜ちゃんが心配で見てただけ…ま…まあいいか…俺の危機は脱した訳だし…

「私も綾香があれば好きなんて意外だったよ。綾香ってあまり甘いものが好きじゃなかったでしょ？」

え？そうなのか？そういえば綾香はあまり甘い物を食べてなかった様な気も…

「え、えっと…本当はあまり好きじゃないけど、あれはお母さんが買ってきてくれておいしかったから好きになったの」

「ふーん…そうなんだ？綾香が甘い物かあ」

そう言っただけ俺を見る茜ちゃん表情が少し疑ってる様にも見える。

「ダ、ダメかな？」

「ううん、実は私もあまり甘い物は好きじゃないんだよねーでもあれは美味しいよね」

「うん…」



「じゃあ今度一緒に食べようよ！もちろん絵理沙さん、輝星花さん  
も一緒にね！」

「はい、絵理沙共々、是非今度ご一緒させて下さい」

ふう…良かった！？どうにかなった！？

しかし何だろう…どうにかなったはずなのに…とても痛い視線を  
感じるぞ…

俺は絵理沙と輝星花の方を見た。すると二人が俺を睨んでいる…  
俺は咄嗟に視線を外した。

うわ…やばい…二人ともすっごく怒ってる…

もう一度二人の方を見る。まだ睨んでいる…

わ、わかったよ…注意するよ…まったく…そんなに睨むな…  
俺が心の中でそう言つと、二人が睨むのをやめた。  
あれ？何だ？心を読まれた？え？それはないよな…ま、まあいい  
か…

「綾香、何をぼーとしてるの？行くよ？」

「あ、うん、いこっか」

しかし…茜ちゃんって本当に素直でいい子で助かった…  
俺達は改札口から出た。

「よし！まずは服を見に行こうよ！大丈夫、私が案内するから」

改札を出た瞬間に茜ちゃんがくるりと振り返りそう言った。  
今日の茜ちゃんはやけに張り切っているな…

佳奈ちゃんがいないと茜ちゃんってこんなに活発でリーダーシップを発揮する子だったんだな。

「うん、行くところ行くところ！」

絵理沙もいつもとは違うテンションの高さでそう答えている。

しかし、絵理沙…そんなにハイテンションになるほど楽しいのか？  
俺には多少無理をしている様にも見えるけど…気のせいかな…

その横にいる輝星花は…相変わらずというか、たまに愛想笑いはするが、俺にすればまったく楽しそうな表情には見せない。

おいおい…そんな顔をしてたらそのうちお前まで茜ちゃんに心配されてしまうぞ？無理にでも楽しそうにしろよ…

俺がそんな事を考えていると茜ちゃんが輝星花の方を見た。

「あ…えっと…輝星花さんは何処か行きたい場所がありますか？」

ほら見る！お前がそんな顔をしてるから茜ちゃんが気を使ってるじゃないか。

「え？私ですか？私は別に…何処か行きたい場所って言われても…私は茜さんのお勧めのお店とかあればそこでもいいですよ？あと…多少疲れやすい体質ですので休憩が出来る場所がある所がいいですね

…」

「それじゃあ、えっと…私がお店とか決めちゃっていいんですか？

私…輝星花にも楽しんで欲しいし…」

「あはは、大丈夫ですよ？私は皆さんと一緒にいるだけで楽しいのですから」

輝星花きせいけはそう言つと茜ちゃんにニコリと微笑みかけた。

「はい、わかりました！でも行きたい場所とか、入りたいお店とかあつたら言つて下さいね」

「はい」

茜ちゃんは輝星花きせいけとの会話を終えると俺の方を見る。

「綾香は何処か行きたい所はあるの？」

「え？私？私は別に…茜ちゃんについて行くよ」

「OK！わかった！じゃあ私に任せて！」

茜ちゃんは意見を纏めおえると楽しそうに歩き出した。

絵理沙は茜ちゃんが歩き出すとすぐに小走りで茜ちゃんの横へ行き楽しそうに話を始める。

どうした事か…この数日でこの二人は急接近だ…

先日まで話しも殆どしていなかったのにすごく仲良しになっちゃったな…

そのせいか絵理沙は俺にはあまり話しかけてこなくなった。

何だ…このなんとも言えない複雑な気持ちは…

原因はわかってる…あの告白だ…

くそ…冗談でも告白とかすんなよな…もしも俺が本気で受け止めたらどうするつもりだったんだ。

まあ…結果的に何もなかった訳だし…良かったのかもしいけないけどな。

しかし、なんで冗談にしても告白されたのが今だに意味不明だな。絵理沙の表情とかかなりリアルだったし…

こいつはかなりの演技派なのだろうか…

まああれは冗談だったとして…じゃあなんで最近俺とあまり話をしてくれなくなったんだ？

……………

っておい待て！結局また複雑な気持ちになってんじゃねーかよ！  
ないない！忘れる！あれは無かった事！そして今の状態でOKなんだよ！…ふう…

と思いつつも頭に浮かぶ絵理沙の告白シーン…

やば…俺ってダメすぎるかも…自分で掘り返してしまった…

まさか…俺はあいつを…絵理沙を意識してるのか？

あの告白が冗談ではなく本当であってほしかったのか？

おいおい…俺には茜ちゃんがいるじゃないか…そんな浮気心を抱くなよ…

……………ああ…もうわかんねえ…自分が何を求めているのか、考えているのか…

あー！やめやめ！よし！忘れるぞ！よし！忘れた！リセット！

俺は目を閉じて一度深呼吸をした。

俺がゆっくと目をあけると…

「うわぁ！」

俺の目の前に輝星花きせいけがいてびっくりした！

しかし相変わらず楽しそうな表情じゃないな。

まあこいつはこういう笑顔ではない表情の方が似合ってるのだが。

「綾香さん、ちょっと驚きすぎですよ。それに何をしてるのですか？そんな場所で突然立ち止まって考え耽ったかと思ったら、目を閉じて深呼吸？ほら、二人とももう先に行っちゃいましたよ？」

輝星花きせいけは言いたい事だけ言つと俺を置いて歩き出した。

何故だろうか。前を歩いている輝星花きせいけの後ろ姿がなにか妙に寂しそうに見える。

俺は小走りで輝星花きせいけに駆け寄り追いついた。

輝星花きせいけと前を歩く絵理沙までの距離は十メートル位は離れているだろうか。

だいぶ置いて行かれたな…まあ目視出来るから大丈夫だろ。

よし、このくらいの距離であれば輝星花きせいけに普通に話しかけても茜ちゃんには聞こえないだろ。

俺はそう思つて何の躊躇ためらいも無く、普通に輝星花きせいけに話かけた。

「おい輝星花きせいけ」

俺がそう言つと輝星花きせいけはいきなり俺を睨んだ。

「綾香さん、その口調はもう止めた方が良いですよ？」

そして男口調を注意されてしまった…

「何だよ、お前だって電車の中であんなに普通に話していたじゃないか」

「ここは先程の電車の中とは違います。不特定多数の人間がこんなにいるんですよ？それに先程は貴方の油断で茜さんに疑われたんじゃないですか。私もちょっと油断しました。これからは冷静に対応します」

確かに…さつきは俺の油断で茜ちゃんにまた俺の男言葉を聞かれてしまい疑われたかもしれない。

「わかった…ごめん、注意する」

輝星花はすこし笑みを浮かべた。そして周囲を確認する。

「しかし、綾香さん」

輝星花はかなりトーンを落として俺の耳元で話した。

「え？何？」

「越谷茜さんだけど…綾香さんの事を…本当の綾香さんじゃないんじゃないかって完全に疑っていますね」

え？まさか？俺はずっと普通に茜ちゃんと普通に付き合っているし…あの時はそうだったけど、ずっと疑っているとかそんな事は無いだろ。

「まさか？さつきはたまたまでしょ？」

「……今は心を読めないので絶対とは言い切れません。しかし私の考えでは茜さんは表面上は疑ってはいないと思います。しかし心の奥では綾香さんの事を疑っています。先程も『俺』という言葉に過剰に反応しました」

「確かに…過敏に反応してたかも」

「注意してくださいね。何があるかわかりませんから…もしもばれたら大変です」

「あ、うん…」

輝星花ほしひなの言う通り、茜ちゃんは俺の事を本当は綾香じゃないんじゃないのか？って疑っているのだろうか？

俺はあの夏の日、茜ちゃんが居たから真理子ちゃんからの疑いが晴れたんだぞ？

タイエ で大二郎が絡んで来た日…俺がブチ切れてしまって…俺の行動と言葉を聞いた真理子ちゃんが本当の綾香じゃないんじゃないかって疑った…

でもあの時に言ってくれたんだよな…『…だって見てよ！どうみても綾香だよ！もしかして真理子はこの綾香が偽者だって疑ってるの？ほら見てよ！綾香だよ！私達の友達の綾香だよ！』ってな…

それでそれからは皆が俺が綾香だって信じてくれるようになった。

あ…そうだ…その後に茜ちゃんが言った言葉…

『綾香ちゃん…私ね…さっきの綾香を見て、綾香のお兄さんの姫宮先輩を思い出しちゃったよ…』

まさか…あの時から？

表の茜ちゃんは今の俺を本当の綾香だと一番信用してくれている。しかし…裏の茜ちゃんは無意識に俺を『悟』じゃないのかって疑っているのか？

これは俺らしくないすばらしい推理だ。しかし喜べないよな…事実だとすると。

とりあえずは、ここまでがんばって生活してきたんだ。本当の事がばれないように注意しないとな…

「理解して貰えたのならいいのです。で、何ですか？私に何か言いたい事でも？」

輝星花は先程までとは打って変わり、すごく優しげな口調でそう言った。

こいつも絵理沙と同じ、かなりの演技派だな…  
笑顔でこの口調の輝星花はマジで女っぽくて困る。  
っぽいじゃないな、元から女だった。

「そうだ！言いたかったのは、あれです、あの…そんなに露骨に楽しくない！って顔はしない方がいいと思うよって事」

輝星花は首を傾げた。

「え？私がそんな表情をしていますか？そんな表情をしているつもりは無いのですけど。ほらこんなに笑顔ですし」

こいつ…その笑顔は寂しさが漂ってるんだよ…  
人にはあれこれ言う割りには自分の事がわかってないのかよ…

「楽しそうには見えません」



「そうですか？そうですね…私の本当の気持ちが無意識にそういう表情になって現れてしまっているのでしょうか。それで…綾香さんは私にどうしろと言うのですか？」

「だから…もつすこし楽しそうにしたほうが…」

「なるほど…で、どうすれば楽しい表情が出来るのでしょうか？」

何か冷静に言い返される度に野木一郎っぱさが出てきてむかついてくる…

「知りません！輝星花きうせいさんが楽しい事でも想像すればいいじゃないか！」

「あらあら？そんなに感情的に言わなくてもいいでしょ？」

輝星花きうせいは微笑ながらそう言った。

「…」

くそー！ムカツク！電車の中では女っぽくてかわいいと思ったけど、違う！やっぱりこいつは野木一郎だ！俺がこんなに心配してやってるのに…こいつは！

え？あれ？輝星花きうせい？なんだその沈んだ表情は？

「でも…そうですね…綾香さんの言う通りですね…笑顔でいれば楽しいって事ではないのですよね。本当に楽しそうにしなければダメですよ。こんな事しているとまた茜さんに心配されてしまい

ます…人の意見を素直に聞けない私なんて、綾香さんに意見を言える立場じゃないですよね」

そう言つと輝星花は右手をおでこにあてて考え始めた。

何だ急に…なんかごちゃごちゃ言いまくっていたが…結論的には俺の意見を聞き取ったって事なのか？

まあこいつは元々馬鹿じゃない。今の状況を冷静に判断して俺の言っている事が正しいと思ってくれたんだろう。

「中々の難題ですね…楽しい事ですか…」

難題つて…こいつは何も楽しい事が思い浮かばないのか？無いのか？

「そんな難しく考え無くつてもいいんじゃないのかな？楽しかった事とかの一つや二つは思い浮かぶでしょ？最近でもいいし過去でもいいんだよ？絵理沙との思い出とかないの？」

輝星花は俺の顔をちらりと見るとこんどは腕組みをして考え込んだ。表情は更に険しくなっている。

こいつにとつて楽しい事を思い出すってそんなに難し事なのか？楽しい事が思い出せないなんてどういう人生を歩んできてるんだよ…

…まあ…前に聞いた話からすると結構ハードな人生を歩んできてるんだらうけど…

なんて俺が思っていると、緊張の糸か切れたかのように急に輝星花が柔らかく優しい表情になった。

そして輝星花は俺の瞳を覗き込む。

ドキ！

やばい、また輝<sup>きいり</sup>星花にドキ！とした。  
でも何でそんな笑顔で俺を見る！？

「な、何だよ！じゃない……何ですか？私の顔に何かついてますか？」

やばい、俺：動揺してるかも。

「解ったのです。私にとっての楽しい事が」

「ああ、それはよかったですね」

ふう…：そういう事が…まあよかったんじゃないか？楽しい事が見つかって。

「綾香さん…私が楽しいと思ってる事は…それはね」

輝<sup>きいり</sup>星花は透き通るような紅い瞳でじつと俺を見つめている…  
それに引き寄せられるように俺も輝<sup>きいり</sup>星花を見つめています。

「それは貴方と一緒にいる事」

輝<sup>きいり</sup>星花は満面の笑みを浮かべて本当に嬉しそうな声でそう言った。

「ぶふ！え！？待って！じよ、冗談だろ！？」

「冗談？冗談ではないですよ？私は貴方と一緒にいるのが本当に楽

しいのですから…あと口調に注意して下さい」

「あ…ごめん…って待て！待ってよ、それって、私といると？あれ？えっと…」

俺は周囲を見渡して人が居ないのを確認すると声のトーンを落として言った。

「それって、私を弄るとか…いじめるとか…文句を言うとか…む、胸を触るとか…そういう事が楽しいって事じゃないの？」

「え？違いますよ。確かにそれも楽しいかもしれないですけど、こうして貴方と一緒にいて普通に話をする。これだけでも楽しいですよ？あまりに身近すぎて私も気がついていませんでした」

輝<sup>ほ</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>は俺を見ながら微笑んでいる。

「そ、そうですね。それは光栄です。あは…あはは…」

何だこれは…

「私は貴方の事、好きですから」

「げふ！」

何だそれはあああああ！

「あ！危ない！綾香さん！前！前！」

ドスン！！

脳内に鈍く響く重低音  
そして激しい痛みと同時に目の前が真っ白に…

「ふ…」

ドザリ…

俺は駅の構内の支柱に正面からおもいつきりぶつかって床に倒れた。

朦朧とする意識の中で輝星花が慌てて俺を抱えあげるのが見える。

「あ、綾香さん！？大丈夫ですか！？」

やばい…人が集まってきてる…だけど直ぐには起き上がれそうもない…

…何だろう…俺の左肩に何かやわらかな感触が…

朦朧とする意識の中でふと左肩を見ると輝星花の胸がおもいつきりあたっているじゃないか！

「き、輝星花、だ、大丈夫だから」

俺は朦朧とする意識の中で、それでもふらふらしながらも慌てて立ち上がった。

「あ、綾香さん？本当に大丈夫ですか？ふらふらしてますけど…」

かなり目眩がする…真正面からぶつかってしまったからか…

「やっぱり…だ、大丈夫…じゃないかも…」

おでこが痛い…かなり痛い…

「それにしても何で直線で支柱に向かって突っ込んだのですか？避けなければならないに…」

「いや…それは…」

「注意した方がいいですよ？あれは流石に痛かったでしょ？おでこが真っ赤ですよ…」

「かなり痛かったです…」

お前のせだろ…あんなに唐突に好きとか言いやがって…

こいつは何も考えないで『好き』なんて言ったと思うが、俺は本当は男なんだぞ？外見こそ女だが中身は男なんだぞ！

男に対してあんな見つめて好きとか…下手をすると告白に捉えかねないじゃないか！

って…まさか…告白なのか？いや、待て…こいつが俺に告白する理由がない…

いやしかしもしかして…いや、無い！それは無い！でも俺に実は…いや無い無い！

あー！くそ！また変な考えてしまった！うわー！俺の馬鹿！

「綾香さん？何を頭を抱えて顔を真っ赤にしているのですか？…

…あ！」

『あ！』と言った瞬間に輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>の顔がみるみる赤くなってゆく。

「あ、綾香さん！何を考えているんですか！別に変な意味で『好き』とか言った訳じゃないですからね！勝手に勘違いしないで下さい！」  
今更、気がついたのかよ…『好き』という言葉の重要度に…  
しかし、この反応を見ると告白ではなかったという事は理解できた。ふう…

「大丈夫…勘違いはしてないから…」

しそつになつてたかもしれないけどな。

「と、当然ですよね…私は貴方を客観的に見て私自身がどう思っているかを分析して、一つの言葉として貴方に対して『好き』と発しただけですから。あれですよ？『好き』の意味合いとしては『心がひかれること』『気に入ること』等がありますが、私の場合は後者であり、えっと…だから…」

「もういいです…説明もくどいし長い…」

「誤解をしないようによく説明をしておかないと…」

「いい、不要です」

輝星花しひなは野木の時もそうだが、普段は冷静でそういう時の言動はムカツク。

しかし今日わかった事がある。こいつは動揺すると少し心慌意乱しんこういらんな状況になる。

あと、話がくどい…

あれ？そういえば茜ちゃんと絵理沙の姿が見えないな。

俺がキヨロキヨロと構内を見渡していると目の前でいきなり輝星花が笑い始めた。

「はは…あはは！」

「な、何？」

「え？あはははは…なんだかわからないのだけど、無性におかしくなつて…あははは！」

そんなに大きな声で笑うなよ…周囲の人が注目してるじゃないか…俺は慌てて輝星花の両肩を持ちながら言った。

「おい！恥ずかしいから笑うのストップして！」

輝星花は俺の言葉は聞こえているらしく笑いながらも数回頷くとかんばつて声を殺す。

しかし笑いは止まらずに俺の目の前で右手で口を押さえながら小さく肩を振るわせて笑っている。

くそ…こいつ…本気で笑ってやがるし…何が面白かったんだよ…

つて、あれ？俺はこいつがこんな楽しそうに笑う姿って始めて見るような気がするな…

こいつ…もしかしてマジで俺と居ると楽しいのか？

「綾香あ！どうしたのよ？遅いから来てみたら輝星花さんが笑ってるし、綾香も顔が真っ赤だし」

ふと気がつくと先程まで行方不明だった絵理沙と茜ちゃんが真横にいるじゃないか！？



っていつか！まだ顔が赤いのかよ！？くそー！この赤面症め！

「えっと…な、何も無いよ」

「えー？輝星<sup>じゆんせい</sup>花さんがそんなに笑ってるのに何も無いとか？そんな事は無いでしょ？何か面白い事でもあったの？」

「いや、無いよ？何も無いよ？」

「綾香…嘘ついてるでしょ…顔に嘘って書いてあるよ？」

「え？？」

俺は慌てて自分の顔を触った。

「馬鹿じゃなの？書いてあるはずないじゃないのよ…」

絵理沙が小声でぼそりと呟いた。

「綾香…何をそんなに動揺してるのよ？何かあったんでしょ？何かしでかした？」

「えっと…」

「ふう…ごめんなさい、やっと落ち着きました」

輝星<sup>じゆんせい</sup>花はそう言って数回深呼吸をした。やっと落ち着いた様子だ。

「で、結局何があったのよ！教えてよ綾香」

茜ちゃん、それ以上聞かないでくれ！答えられないんだよ！

「え。いや別に大した事じゃないよ。ね、輝星花さん」

「え？私の目の前で綾香さんがその支柱に向かって直進で突っ込んで激しくぶつかって倒れた。という事意外は別に何もありませんでした」

茜ちゃんは輝星花の話の聞くと俺の横にきて体を見まわした。

「だからこんなに埃がついてるのか…あとおでこが赤いし…綾香…まったく、何をしてるのよ…」

茜ちゃんがそう言いながら俺のワンピースについた汚れを叩いてくれている。

「え…ちよつとぼーと…」

「ぼーとじゃないよ…でも大丈夫そうだし、輝星花さんが笑ってた理由もわかったからいいや」

違う…それが笑いの原因じゃない…が…まあいいか…

「茜さん、すみませんでした。もう落ち着きましたから、行きましょうか」

「うん、いごつか。綾香、今度はぼーとしないようにね」

「あ、うん」

俺が輝星花と茜ちゃんと会話をしている時、誰かの視線を感じた。俺は咄嗟に絵理沙の方を見る。すると絵理沙と一瞬目が合った…。絵理沙は唇を噛んで俺を睨んでいた…。な、何だその表情は…俺がそう思った瞬間に絵理沙は視線を外した。

そして輝星花の横へと歩いてゆく。

「輝星花、楽しそうね！一緒に来てよかったでしょ？」

絵理沙が輝星花に向かってそう言った。

すると絵理沙の顔を見た輝星花から一瞬笑顔が消えた…

「あ…うん…一緒に来てよかった…」

「そっか！輝星花お姉ちゃんが喜んでくれて私とても嬉しいよ。さあ、茜ちゃん、行こうか！」

絵理沙そう言うとはくるりと反転して一人で歩き始めた。

「あ、待って！絵理沙さん！」

茜ちゃんは慌てて絵理沙の後を追って行った。そして再び楽しそうに会話を始める。

俺は輝星花を見た。すると先程まであんなに笑っていた輝星花から、完全に笑顔が消えていた。そして絵理沙の方をじっと見ている。

「ねえ…輝星花さん」

俺の声に反応した輝星花が俺の方を見る。

「何ですか？」

「絵理沙さん…どうしたのかな？あの態度…」

「……………」

輝星花は俺をじっと見て無言のまま答えようとはしない。

「何ですか？何かあるんですか？知ってるなら答えて貰えませんか？」

俺は輝星花に強めの口調でそう言った。すると輝星花は小さな声で何か口ずさんだ。

「……………好意を持った異性が他の異性と楽しそうにしていれば…ああいう態度になってしまうのかもしれない…」

しかし、タイミングが悪くすれ違った男子高校生の声が大きすぎて俺は輝星花の声が聞き取れなかった。

「え？よく聞こえなかったからもう一度言っただけじゃないんですか？」

輝星花は俺の顔を見る。そして前を歩く絵理沙へ視線を移す。

「私は絵理沙じゃないからわかりませんって言ったんです」

輝星花はそう言つと、絵理沙を見ながら唇を噛んでいた。

違つ…さっき言った事はそんな言葉じゃなかった。何を言ったん

だよ…

「さっき言った事と違つてでしょ？」

「綾香さん、早く二人の所へ行きましょう。また置いて行かれますよ」

輝<sup>きいじ</sup>星花は俺の言葉を無視して二人を追っかけて行った。

くそ…何だよ！意味わかんねーし！

続く

## 第18話 大宮バトル！？救世主は俺だ！後編

俺は先ほどの輝星花きせいとの一件があり、何とも言えないもやもやした気持ちのまま色々なお店を巡っている。

しかし、どういう事だろうか？俺の予想を反して絵理沙はともあれ、あの輝星花きせいが面白い物を楽しんでいる。

おかげで先ほど俺に聞こえなかった言葉を聞き出せないでいた。とは言いつつ正直もうどうでも良くなっていたりもするのだが。

俺はというと…女性物のブランドとか、流行とか、可愛い基準とか、化粧品とか、根本的な物の考え方とか…その他の女性が興味を持つと思われ事についての知識が未だに無いに等しい。というか興味が無い。

余程、大宮と言えば某大手カメラ屋や某大手パソコンショップ等があるし、そっちで最新ゲームをチェックする方が楽しい。

まあ、あれだ、基本的には彼女達の話にはついて行けず、なるべく距離を置き話をしないように努力をしているという状況だ。

話しかけられた場合？そんな場合はその場凌ぎでごまかしている。ちなみに学校ではこういう話題は専門的にはなりづらい、すぐに会話も終わる傾向にあるし、あと重要なのが動くラジオの佳奈ちゃんだ！殆どの場合佳奈ちゃんがいればどうにでもなる！よって毎回すごく助かる。

しかし、これで再び確信出来たぞ。俺はやっぱり男なのだ！

…でも今は女なんだよな…それも『綾香』なんだよな…

俺もこのままじゃダメなんだよな。少しは女の気持ち理解出来るようにならなければ、この先いつかボロが出るかわかんねー。

とは考えてはみるが、いくら俺が懸命に理解しようとしても一生

理解出来ないような気がしてならない。考えるだけでも鬱になりそうだ。

やはり早く魔法力を貯めて、綾香を探し出して元の俺に戻らないといけないという事か。

しかし疲れたな…早く帰りたい…

「どうしたの？綾香？そんな深刻な顔しちゃって。疲れちゃったの？」

「わ！」

いきなり茜ちゃんが俺に声をかけてきた。

俺は驚いて思わず声を出してしまった。

「何を驚いてるの？またぼーとしちゃって…大丈夫？」

茜ちゃんはそう言うのと心配そうに俺を見ている。

「あ、うん…大丈夫だよ」

俺は心配させてはダメだろうと思いきや返事をした。

しかし、茜ちゃんは心配そうな表情のまま変化しない。

「でも、いつも一緒に買い物に来ている時と違って今日はあまり楽しそうじゃないじゃないよ…本当にどうしたの？」

なるほど…そうか…綾香は茜ちゃんと一緒に何度か大宮にお買い物にも行ってんだ。

そうなる的今天の俺はとてじゃないがか楽しそうには見えないだろう。

だからいつもの綾香と違うし、おかしいと感じているのだろう。心配になるのもわかる。

やばいな…さっきの件もあるし、こんな調子だとまた疑われかねない。

輝星花きせいに注意しろとか言っておいてまた俺が心配されるとか…何やってんだろっ。

ここは何か自分をフォローしておかないと…

「えっと…それは…そう、さっきぶつけたオデコが痛くって！ごめんね。別に楽しくない訳じゃないんだよ？でも今日は絵理沙さんや輝星花きせいさんが主役なんだから。茜ちゃんも二人に優先的に付き合っ

てあげてよ。私はこんな調子だし、ちょっと無理そうだから」

俺は見繕みつくるうように言った。

「わかった、でも…調子が悪いのなら休んだ方がいいよ？私、綾香が心配だよ」

茜ちゃんは更に心配そうな顔でそう言った。

なんて優しいんだろっ…茜ちゃん…本当にこの子は良い子すぎるよな…

「あ、大丈夫！本当に大丈夫だから。ほら見て、オデコも大分よくなったし。茜ちゃんは絵理沙さんと輝星花きせいさんの買い物続きにつきあってあげて！」

茜ちゃん。その優しい気持ちはありがたいし嬉しい。

だけど取り合えず今は俺をほっておいて欲しいんだ！茜ちゃんを騙しているという罪悪感がああ！

と心の中で叫んだ。



「でも…私は綾香にも楽しんで欲しいし」

俺の心の叫びなど聞こえている訳でもなく、心配そうに俺を見る茜ちゃんは中々絵理沙達の所には戻ろうとしない。

やばい、相当に心配されているらしい。これ以上心配されるのもあれだし、ここは休憩すると言って少し離れよう…

「えっと…じゃあ私はこの近くにあるコーヒーストックで休んでいいかな？私は特に買い物もないし」

「休んでる？そうね、私も綾香はちょっと休んでた方がいいと思う。あ！そうだ…」

茜ちゃんは携帯を取り出すと時間を確認した。そしてバックから何か紙切れを取り出す。

「綾香、お昼まであと三十分くらいあるから、休憩するのならこのクーポンの使えるコーヒーストックに行くといいよ」

茜ちゃんはそう言って俺にクーポン券を手渡した。

俺はクーポン券を確認した、どうやらこの券はコーヒータダ券の様だ。

行きつけのコーヒーストックなのだろうか？発効日がそんなに昔ではない。

「ほら、そのお店はここから少しだけ歩くけど、その近くのお店でランチしようかと思ってるから…それにその券を持って行けばタダだしね」

茜ちゃんは笑顔でそう言った。

そうだな…まあここを離れるには丁度いいし、タダというのも財布に優しくっていい。

ここは茜ちゃんの提案を受けよう。

「そうね、私そのお店で待ってようかな…少し休めば良くなるだし…タダ券もいいしね！」

「うん！私も絵理沙さん達とお買い物をしてからすぐに行くから」

茜ちゃんにやっと笑顔が戻った。

「あ、うん、でも別にゆっくりして来ていいからね？まったり待ってるから」

俺はそう言いながらクーポンをお財布に入れた。

そして俺は「じゃあ行ってるね」と言っただけで歩き出した。

すると茜ちゃんの声が俺の背中越しに聞こえる。

「綾香！伝えたい事はちゃんと言うんだよ？私は綾香じゃないんだし、綾香の体調までわかんないんだからね！あとあまり人に気を使いきすぎちゃだめだよ？」

茜ちゃんは両手を腰に添えてまるで体育教師の様な格好で俺に向かってそう言った。

しかし、その表情は笑顔だった。

「うん、ありがとう」

俺は振り返り笑顔でそう返事をした。茜ちゃんは俺の返事を聞く

と小さく頷き、絵理沙達の居る所へとやっと戻って行く。

こんな良い子が将来は本当に俺の彼女になるのかな…俺はふとそんな事を思った。

俺は茜ちゃんが好きだし、茜ちゃんも俺が好きはずだ。相思相愛なのだからそうなるのかもしれない。

ただけど…何故だろう…俺と茜ちゃんと付き合つという想像がつかない。

俺は茜ちゃんの事を考えているはずなのに、そう思う俺の頭の隅に絵理沙の顔が思い浮かんでいた…

何で絵理沙の事も考えてるんだよ…そう思うと何故か今度は大二郎や正雄、そして真理子ちゃんや佳奈ちゃん、輝<sup>きいっ</sup>星花、まさかの野木一郎まで思う浮かんでしまう。

おいおい！何だ？何で次々と…俺は結局は誰でもいいのか？いや違うだろ？

ふう…疲れるから今は考えるのはやめよう。

俺は茜ちゃんが戻って行った事を確認してクーポン券に書いてあるコーヒーショップに向かった。

クーポンの裏に書いてある地図を見る。

どうやらコーヒーショップは駅から多少離れた場所にあるみたいだ。

俺は茜ちゃん達と買い物をしていたお店の入っている雑居ビルから外に出て大通りの歩道を歩き出した。

ここから真つ直ぐコーヒーショップに向かう為には人気の無い裏

通りに行く事になる。大回りをすれば大きな通りしか通らない。

普通の女性であれば後者を選ぶ所だろうが、俺はどちらにするか迷う事も無く早く着く直線で行く事にした。

裏通りには古びたゲームセンターなんかもあって、変な奴らが居るかもしれないような通りだ。でも流石にこんな午前中からはいないだろ。

いたとしても俺は小さいし、どうせ小学生か中学生だと思って相手をしないだろうし。

まあ、あれだ、危ないロリコンおじさんなら狙ってくる危険もあるが…取り敢えずは何かあればダッシュで逃げれば大丈夫だろう。と考えていた。

俺は歩道から幅二メートル程度しかない脇道を覗き込む。人気はない。俺はその通りに入って行った。

ちなみに裏通りと言えどもそんなに真っ暗という訳では無いし、開店しているお店もある。一般人だって普通に通っている。別に危険な道という訳ではない。

単に俺が考えすぎているだけなんだ。

裏路地をしばらく進むと後ろから人の気配を感じた。俺はふと後ろを振り返る。

するとそこには輝星花の姿があるじゃないか！

「き、輝星花！？」

俺が驚きながら名前を呼ぶと輝星花は笑みを浮かべて俺の横へ並んだ。

「輝星花何でここに！？」

おかしい。こいつは絵理沙達と一緒に買い物をしていたはずなのに？

ま、まさか！こいつ俺をストーキングしてたのか？

「私？私も綾香さんと一緒に休憩しようかと思いましたが」

そう言いつつも本当はストーキングじゃないのか？俺と一緒に休憩？絵理沙は？茜ちゃんは？二人は知っているのか？

俺がおどしていると輝星花はふうと小さく溜息をついた。

「綾香さん、大丈夫ですよ。二人にはちゃんと断って来てますし、ほらこれ」

輝星花はそう言いながらコーヒーマーのクーポン券を俺に見せた。

「あ…それって？」

「そうです。茜さんに貰いました。休憩するのなら綾香さんと一緒にコーヒーマーでも飲んで下さい。って言われました」

輝星花はそう言うとクーポン券を仕舞い込んだ。

「へえ…そうなんだ…」

うーん…なんだ？ちゃんと断って来ていると言われても何か安心が出来ない。何でだ？

「そうなんだ…って？あれ？私と一緒に何か不都合なのですか？」

あれ？もしかして…口調が少し野木一郎に戻ってきている？って

「いつか違う！今のこいつのイメージが野木一郎っぽくなってるのか！  
やばい、野木一郎のイメージ…こいつに何かされそうな嫌な予感がする…」

「ちよつと不服かも…」

「おやおや？私は今は輝星花きせいけですよ？もう一人の私じゃない」

輝星花きせいけは微笑みながらそう言う。

「え！？」

「え！？まだ心が読めないんじゃない？この俺の心を読んだかのような答えは何なんだ！？」

「驚かないで下さい。私は別に綾香さんの心を読んでませんよ？私は綾香さんの考えを予想しているだけです」

「予想？という事は何だ？俺の考えは予想出来る程に単純って事なのか？」

「あれです、作り笑顔って疲れますし、この表情が一番楽なんです」

「こいつ…マジですっげーな…だが残念なのは可愛いし綺麗けど変態だという所だ。」

「お前、よく俺の考えている事がそこまでわかるよな…」

「綾香さん、口調、気をつけて下さい」

「あ……」

「まあここでは大丈夫でしょうけど、一応気にかけて下さいね」

しかし、まさか輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>が来るとは思ってもいなかったな……

まあいつか……今は野木一郎の姿じゃないんだし、こいつに襲われ  
たりしないだろう。

待てよ……考えてみればこいつは容姿端麗で美人で可愛いぞ？変な  
奴がいたらこいつが真っ先に狙われるんじゃないのか！？

ほら、あそこにもいかにも怪しげな三人の男が立っている……もしも  
奴らに絡まれたらどうする？

いや待て悟。あれだ、もし絡んで来たとしてもこいつは魔法使い  
だ。自分で何とかするはずだ！

いやいや待てよ、今は魔法が使えないんじゃないのか？というか  
人前で魔法は使わないかもしれないぞ……でも逃げる事は出来るだろ……

……

ちょっと考えすぎか？普通に考えてもそうそう絡んで来ないだろ。

つと……俺が輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>を見るとすでに怪しい三人の男達に絡まれてい  
るじゃないか！

おい待て！早速絡まれてるじゃん！

輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>に声をかけて来たのは赤いリストバンドの男。身長は17  
0センチ

くらいか？ちょっと痩せている。その横には茶色いジャンパーの体  
格の良い大柄な男がいる。身長は180はありそうだな。そしてそ  
の後ろに金髪の男が立っている。体の線が細くってこいつが一番弱  
そうだ。

こいつら……どうみても年上だよな……大学生か？

「彼女？何してるの？こんな所を一人で歩いちゃってさー」

赤いリストバンドをつけた男が輝星花きせいの真横に立ちそう言った。

くそ、気安く声をかけてきやがって！空気読めよ！このままじゃ面倒な展開になるだろうが！

あとな、一人じゃない！二人だ！お前は算数も出来ないのか！俺はそう思いながら男を睨んだ。

「一人じゃないです、二人ですよ？」

輝星花きせいはそう言いながら俺を指差す。

「あれ？もう一人いたんだ？小さすぎて見えなかった」

茶色いジャンパーを着た男がそう言いながら馬鹿にした笑みを浮かべると、俺を指差した。

「あれれ？こいつ小学生？もしかして君が保護者？いいじゃん！こんなのほっておいて俺達と遊ぼうよ」

赤いリストバンドの男が俺を見ながら言った。

こんなのだと！？俺は物じゃねーぞ！

何だこいつら…輝星花きせいをナンパなんかしやがって…

それに綾香の可愛さがわかんねーとかありえねーし！

「申し訳ないのですが、私達は忙しいので貴方達とは遊べません。それに人に対して『こんなの』とか見下すような言葉は失礼だとは思わないのですか？今後は言い方に気をつけた方が良いでしょう。それでは失礼します」



輝星花はズバリとそう言い切ると三人の男を無視して歩き出した。しかし金髪の男が先回りして行く手を塞いだ。

「待ってよ、いいじゃん？どうせ暇なんでしょ？」

何だよこいつら、しつこい奴らだな。性根が腐ってるな。

俺一人なら蹴りでも入れて逃げるんだが…輝星花も一緒だしな…

「前に立たれると邪魔です。私達は急いるのでほっておいて頂けないですか？」

輝星花は行く手を塞いだ金髪の男を睨みながらそう言った。

しかし男は平然とその場に立ったままだ。

本当に生意気な奴らだし俺も何か言つてやろう。

「ちょっと！そこを通して貰えませんか？本当に邪魔なんですけど？」

俺がそう言つと茶色いジャンパーの男がいきなり俺の頭の上に手を置いた。

「え？何だつて？チビ、お前は一人で行けよ！俺はお子様に用事は無いんだよ！俺達はこの子にだけ用事があるの」

男は俺にそう言いつと俺の頭から手を離し輝星花を囲んだ。

その瞬間！『ドゴ！』つという鈍い音がしたと思つと輝星花の前に立っていた金髪の男が「げげげ…」と咳込みながら膝をつく。そして男は苦しそうに胸を押さえた。

「ほう…ミゾオチという部位はそれほど力を入れなくてもかなりのダメージを入れられるんですね」

輝星花きせいけはそう言つと膝をついた男を避けて再び歩き始めた。

な、何だ？輝星花きせいけは何をやつてるんだ！？いきなり殴るとかこいつらに喧嘩を売つてるのか！？

それにミゾオチに拳を食らわせるとか、女の行動じゃねーぞーやばい怒るか！？

「くら！何すんだよ！女！」

赤いリストバンドの男がかなり怒っている。

ほら見る！やっぱろ怒つたじゃないか！仲間が殴られれば怒るつて予想出来ないのか？

しかしどうする？こつちが先に手をだして…正当防衛になるのか？これは？

「何でしょうか？貴方達が綾香さんに暴言を吐いたのが悪いのでしよう？人に対して差別的な用語を使わない。そんな事すら理解出来ないのですか？」

え？俺に対しての暴言？まさか俺を気にしてくれたのか？

でもその言い方は火に油を注ぐようなものだぞ！？

膝をついていた男が輝星花きせいけを睨みながらゆっくりと立ち上がった。そして赤いリストバンドの男が無理矢理に輝星花きせいけの右手首を掴んだ。

「おい女！お前が先に仲間に手を出しグフェ！」

赤いリストバンドの男が話を始めたと思ったら『ボス！』と言う重い音が聞こえた。

見れば輝星花の左ストレートが赤いリストバンドの男の左頬を捉えている！

しかし男はふらつきはしたが倒れない。

輝星花の奴は何やってるんだ。そんな踏み込んでない、それに体重も乗ってないパンチで威力が出るはずもないじゃないかよ…

「おや？やはり力の無い私のパンチではそんなにダメージはありませんね」

輝星花は左拳を見ながらそう言った。

「ごら！女！もう許さねえからな！」

先ほど殴られた男が激怒している。

これ以上こいつらに喧嘩を売るな！危険になったらまず逃げるんだよ！

そう思っていると茶色いジャンパーの男が輝星花をいきなり羽交い絞めにした！

「何をする！離しなさい！」

輝星花はそう言ってジタバタと暴れている。

やばい！早く逃げろ！って叫ぶべきだったか！

「おい！輝星花を離せ！」

俺は男達に怒鳴った。

「あー？ガキは黙ってる！」

金髪の男が俺に向かって怒鳴り返してきた。

くそ…もう売ってしまった喧嘩だ。いまさら引ける筈も無い！こ  
うなったら！

俺は助走をつけると輝星花きせいを羽交い絞めにした男の背中上段に跳  
び蹴りを食らわせた。

『ドガ！』とヒットした音は聞こえた。しかし、男はまるでアメ  
フトをしているかのような体格の良さで、俺の蹴りをまともに受けた  
のにびくりともしていない。

それ所か全体重を乗せて跳び蹴りを放ったせいでバランスを崩し  
て俺が倒れてしまった。

「おいおい！こいつ空手技つかいやがったぞ！？こんなにちっこい  
のに跳び蹴りしやがった！」

茶色いジャンパーの男は輝星花きせいを羽交い絞めにしたまま俺の方を  
見て言った。

くそ…こいつ…マジでアメフトやっていたのか？体重をかけるバ  
ランスが良すぎる…

俺の攻撃を受けた瞬間、バランスを取りやがった…

「お、おい！女の子に暴力なんて男のする事じゃないだろ！」

俺は倒れたまま怒鳴った。

「おいおい？何を言ってるんだ？こいつが先に俺達に手を出したん  
だぞ？それにお前も跳び蹴りしたじゃねーか！言えるのかよ？」

金髪の男がそう言った。  
確かに…輝星花が先に手を出したのは事実だ。俺も跳び蹴りした。  
しかし、先にちよっかいを出したのはこいつらだ！

「お前らがナンパして来たんだろ！」

俺はパンパンとワンピースについた汚れを叩きながら立ちあがった。

くそ…どうする…輝星花は羽交い絞めされたまま…しかしあの男は今のままじゃ倒せない。

輝星花の表情がだんだんと焦りの表情に変化しているな。

やばいな…どうする？本当に面倒な事になりやがって！くそ…

「くら！離しなさい！何をするんだ！」

輝星花の口調が変化している…やっぱり輝星花も焦ってる。

「お前が生意気だからお仕置きするんだよ。それとも何だ？泣いて謝って俺達と付き合うか？」

金髪の髪の男は輝星花の顎を右手で持ち上げてそう言った。

「誰が君達みたいなの道な人間に謝るものか！」

輝星花は金髪の男に向かってそう怒鳴った。

何だ？今の台詞…すっげー男らしいじゃねーか。って関心してる場合じゃないな。

「それじゃあ仕方ねーな」

輝星花ひびなに先程攻撃を食らった金髪の髪の男が右手に拳を作った。その男の視線は輝星花ひびなのミゾオチに。やばい！こいつマジで輝星花ひびなに手を出す気か！

「おい！やめろ！手を出すな！」

俺はもう一度怒鳴ってみた。

「やめないね、俺達はこの女にお仕置きをするんだよ！もしかしてお前もお仕置きされたいのか？」

くそ…今のままだと戦っても勝ち目がほぼ無い。厳しいぞ…どうする…

「ほらいくぞ？歯を食いしばれよ？」

「」のー！」

輝星花ひびなは咄嗟とつなに羽交い絞めにした茶色いジャンパーの男の脛すねを踵かかとで蹴った。

「痛てえ！」

茶色いジャンパーの男がかなり痛がっている。さすがに脛すねは鍛えような無い。だから相当痛いはずだ。

しかし羽交い絞めは取れない！そして金髪の男の拳が輝星花ひびなに迫る！

「おら！俺にした事をそのままお返しだ！」

俺の今の位置は今の輝星花<sup>きせい</sup>の位置よりよりすこし後方、茶色いジヤンパーの男のすこし後ろだ。

この位置からだと輝星花<sup>きせい</sup>を殴ろうとしている金髪の男には、蹴りやパンチはとてもしゃないが届かない。

羽交い絞めの男には攻撃出来るが、結果はさっきと同じになるだろう。

こうなったら俺の瞬発力を生かして輝星花<sup>きせい</sup>を羽交い絞めにした男の横を抜け、輝星花<sup>きせい</sup>と金髪の男との間に突っ込んで奴のパンチをガードするしか無い…

思ったら即行動！俺は勢いをつけて輝星花<sup>きせい</sup>と金髪の男との間に頭部をガードしながら飛び込む！

その瞬間！頭部に激しい衝撃が走った！瞬間目の前が真っ白に…そして気が付くと俺は地面に横たわっていた。

やべ…頭がすげー痛い…ガードし損ねたんだな…

「な、何だこいつ？俺のパンチに自分から突っ込んできやがったぞ？」

「あ、綾香さん！大丈夫ですか！おい君達！何をするんだ！暴力は問題解決の手段にはならないんだぞ！」

くそ…意識が朦朧とする…今日は最悪の日だ…ろくな事が無い。

しかし…俺とした事がちゃんとガードしたはずだったのに…甘かった…

地面に叩きつけられてしまって倒れているが倒れるまでの記憶にない…意識が飛んだか…

体まで動かない…まだ輝星花<sup>きせい</sup>が危険なままなのに…

「お、おい、どうする？こいつ動かないぞ？もしかして死んだんじ

「や？」

先ほど俺を殴った金髪の男の声だろうか？かなり焦りながらそう言っている声が聞こえた…

どうやら俺が倒れたおかげで輝星花きせいけに対する攻撃は止んだようだ。

「君達！早く私を離しなさい！綾香さんにもしもの事があつたら責任を取れるんですか！」

輝星花きせいけの怒鳴り声も聞こえる。

「何を言つてやがる！元はと言えばお前が悪いんじゃないか！」

赤いリストバンドの音が頭に響く…まあそれは正しい…

その瞬間、『ドゴン！』という重低音が響いた。

ドゴン？何かすごい音が聞こえたぞ？これは輝星花きせいけのパンチの音じゃない…何だ？

俺が薄っすらと目を開けると、俺の目の前には先ほど輝星花きせいけを羽交い絞めにしていたあの体格の良い男が白目を剥いて倒れているじゃないか。

な、何だ！？何があつたんだ！？この男が白目を剥いて倒れた！？俺は驚きのおかげか、すこし動けるようになった。

そして懸命に顔を上げる…まだ目が良く見えない…しかし誰かがいるのがわかる…

「綾香さん！大丈夫ですか！？」



そう言って輝き星せい花かが俺を柔らかく抱え上げてくれた。  
薄うすっすらと目をあけると本当に心配そうに俺を見る輝き星せい花かの顔が  
目の前まへにある。

「馬鹿…お前と絡むと…今日はろくな事がない…」

俺は何とか小さな声でそう言った。

「ごめん…悟君…」

輝き星せい花かはとても小さな声で、唇を噛みながら目に涙を浮かべて言  
った。

何だよ輝き星せい花か、そんな顔が出来るのかよ…

それじゃまるで本物の女みたいじゃないか…あれ？そっか、こい  
っ本当の女だ…

しかし、誰だ？誰が俺達を助けてくれたんだ？

「おい！お前ら！俺の姫宮綾香に手を出してただで済むと思っなよ  
！」

何処か聞いたような声が聞こる。というか…この台詞を吐く人物  
は俺の知る限り一人しかいない。

『ボグ！ボガ！』激しい打撃音が頭に響く。

俺は目の前で繰り広げられている光景を見ようと視線を声のする  
方向に向けた。

薄うすっすらとだが見える…体格の良い男が、一人で二人の男を相手  
に喧嘩けんかしている姿が…

「…大二郎？」

そう、それはやはり大二郎だった…見間違っはすもない。

大二郎が何でここに…

「おら！ヘタレ！女に手を出せても、俺には手を出せないのかよ」

「くそ！なめやがって！」

大二郎の挑発にのつた赤いリストバンドをした男が大二郎に突っ込んでゆく！

大二郎は男の拳を素早く左にかわすとその男の脇腹に右手刀を入れた！

『ドス！』という鈍い音がすると男は苦痛で顔をしかめる。そして体が右へ傾むき動きが止まった！

大二郎はすかさず体を反転させて今度は男の背中に右肘を連続で叩き込む！

『ガゴ！』という音と共に男は苦痛の表情を浮かべ前のめりに地面に倒れた。

「お、おい、な、何だよお前は！」

一人残った金髪の男は相当に焦っている。

「さっきも言っただろ？俺の姫宮綾香に手を出したらタダで済むと思っなよってな！」

大二郎は腕組みをしながら金髪の男に向かって言った。

「え？な、何だ？もしかしてこの女、お前の女なのか！？」

金髪の男はそう言いながら輝星<sup>しひせ</sup>花を指差す。

「え？違う！その子じゃない！その子に抱きかかえられてる方だ！」

大二郎は俺達方を見ながらそう言った。

「え？まさかこのちびなのか？」

金髪の男はあっけにとられている。

「え？ちよつと待て、こいつ中学生じゃないのか？」

「いや、俺と同じ高校の後輩で一年だ」

「こ、高校生？こんなちびなのにか？」

「チビは関係ないだろ」

「待てよ、すっげー童顔じゃないか」

「それがどうした？」

「どう見ても幼児体型っていうやつだろ！？」

「それのどこが悪い？」

「胸もねーぞ！」

「お前は胸で人を判断するのか？」

「待てよ！もう一人の女の方がどう見てもいいだろ？」

大二郎の顔がだんだんと引きつってきている。

「おい、お前：姫宮綾香の良さが何もわかってねーだろ」

「わ、わかるはずねーじゃねーか！何でこんなのが…」

大二郎は金髪の男に向かって歩き始める。

金髪の男はジリジリと後退する。

「お前に姫宮綾香の良さをわかって欲しくもないわ！！」

大二郎は目に見えない凄まじいオーラを放ちながら金髪の男と距離を一気に詰める！

金髪の男は地面に転がった二人を横目で見ながらどんと後ろへ後退してゆく。

地面には男が二人横たわったままだ。

「おい、そろそろファイナーレだ」

なんといい格好いい台詞だ…というか大二郎に似合っていない…

「待て！ちょっとタイム！」

金髪の男はそう言うのと両手を懸命に振りながら大二郎の前進を止めようとした。

しかし大二郎は躊躇する事も無く渾身の力前蹴りを放った！金髪の男は避ける事も出来ず正面から蹴り受ける！

「うわぁああ！」

『ドフ！』という鈍い音と共に男は叫びながらぶっとんだ！

大二郎の奴…強い…流石というか…すさまじい破壊力だ。

それに以前よりも動きがかなり素早くなって…

こいつ…マジですごく練習がんばったんだな…男の時の俺でも勝てないかもしれない…

「大二郎…」

俺は小さな声で大二郎の名前を呼んだ。

意識も先ほどよりもすっかりしてきた。だが、まだ思うようには体が動かない…

しかし、体にダメージ感はもうなくなっただけ…この回復力は魔法の影響なのか？

「姫宮！大丈夫か！？くそ…俺がもつと早く来てれば…」

大二郎は慌てて俺達に駆け寄ると悔しそうな表情で言った。

そんな顔すんなよ…来てくれただけでも助かったのに…こいつも真面目だよな…

「大二郎…助けてくれてありがとう」

俺は大二郎に向かって素直にお礼を言った。

何でここに大二郎がいるのかわからないが、大二郎が来なかったらどうなってたかもわからなかったな…

「姫宮、大丈夫か？」

「うん、ありがとう。もう大丈夫だから」

俺がそう言うのと大二郎は少しほっとした表情を浮かべた。

「よかった…お前に何かあったらどうしようかと思っただぞ？で…えつと？あの…あんた、姫宮綾香の友達か？」

大二郎は俺を抱きかかえている輝星花にそう聞いた。

そつだよな。大二郎は輝星花の変身した野木一郎との接点はあるが、輝星花本人とは接点が無い。

「私は綾香さんのお友達です。今日は危ない所を助けて頂いてありがとうございます」

輝星花はいかにも作った笑顔でそう言った。

「そつか、友達か！それにしても危なかったな？最近の不良は暴力に訴えるのか」

「うーん…とてもじゃないが元の原因が輝星花だなんて言えないな…」

俺がふと周囲を見渡すと何時の間にか男達は居なくなっている。

謝りもせずに逃げるなんて男らしくない奴らだが、逆にこれで喧嘩の原因が大二郎にばれる事は無くなった…

「しかし！俺がたまたま通りかかったからよかったが…本当に危なかったな」

確かに…俺一人じゃ三人には勝てなかったのは事実だ…  
それどころか、だれ一人として倒せなかった…俺は自分で勝手に突っ込んで勝手にダウンしてしまった…何てダメな男なんだろう。自分の無力さに涙がでそうだ…

しかし何だ？よく見れば大二郎は学生服じゃないか。大宮に学生服で何をしに来たというんだろう？

「綾香さん、もう頭は大丈夫ですか？」

輝星花の優しいげな言葉が聞こえる。そして何だろうか？さっきまで感じていなかった柔らかい感触が全身に…

ふと視線を輝星花の顔から胸へと移すると…こいつ！自分の胸を俺におもいつきり押し付けてやがる！

って待て？何だか俺の胸も変な感触が…そう思い俺の胸を見ると胸の上には輝星花の右手が胸を包むかのような形でのっているじゃないか！

「うわぁー！」

俺は咄嗟に胸の上の手を叩き落とすと慌てて立ち上がった。

「え？お？な、何だ？姫宮、具合よくなったのか？」

俺が突然声を出して立ち上がったので大二郎はかなり動揺している。

輝星花は野木一郎っぽい怪しい笑みを浮かべて俺を見ている。

「おい！輝星花！お前！な、何するんだよー！」

「姫宮？ど、どうした？大丈夫か？顔が真っ赤だぞ？あと言葉遣いが…」

大二郎はオドオドと俺を見ている。

し、しまった！思いっきり男言葉で話してしまったああああ！誤魔化さないと！

「え、いや、ごめんなさい、ちょっと動揺しちゃって…」

「え？動揺って？でもまあ…言葉は…俺は男っぽい姫宮綾香も…す、好きだぞ？」

大二郎は何故か顔を赤くしながらそう言った。

「えー？いや、あの！えっと…わ、私は女の子だし、やっぱり男っぽいのはダメだと思うの。」

俺は何を言っているんだ…

「俺はそういうのは気にしないぞ！」

うーん…まあいいか…

「あ、ありがとう…あはは」

大二郎だから俺が本当は悟だっと思って思ってもいないだろうし、疑いもしないだろう。大丈夫かな？

俺は大二郎と話ながらふと視線を輝星花きせいに向ける。すると輝星花きせい



が笑みを浮かべて俺を見ていた。

くそーこいつ…今まで大人しくしていたと思ったら…見た目は女でもやつぱり中身は野木一郎だったのか！

俺が動けないのを良い事に俺の胸を散々触った拳句、俺に対女性抵抗力が無いのを知っていてそののでかい胸まで押しつけやがって！さっきのあの女らしい仕草や表情は嘘だったのか！？つて…待てよ…よく見ればさっきまで感じていた野木一郎のイメージが無くなってる様な…逆に今の方が女っぽい？

あー！待て待て！何だ？それじゃあ何で俺にあんな事を？ま、まさかやつぱり趣味！？俺を弄るのが趣味なんじゃ…

輝星花はそんな事を考えている俺から視線を外すと大二郎に声をかけた。

「あの、お取り込み中すみません、私、野木輝星花と言います。お名前を教えて頂けますか？」

大二郎ははつとした表情になりそして慌てて輝星花の質問に返事をする。

「え、えっと、俺の名前は清水です。清水大二郎。姫宮と同じ高校の三年です」

大二郎は緊張した声でそう言った。

「清水大二郎さんですか、本当に助けて頂いてありがとうございます」

「え、いや、トンでもない。男として当たり前前の事をしただけです」

何だよ、大二郎が何かかつこよさげな事を言ってるじゃないか。

「いえ、誰にでも出来る事じゃないです。正義感とそして勇氣、賞賛に値します。まさに私達の救世主でしたよ」

輝星花も大二郎にヨイシヨをしているかの如く褒めている。

「あ、いやまあ…こう言うといけないかもしれないけど、本当は姫宮綾香を助けたくって夢中でやった事なんだ」

大二郎はそう言うと言った方を見た。

「おいおい、俺を助けたくってとか言われると何かすっぱー恥かしい…お、お礼でも言うか…」

「あ、ありがとう大二郎」

輝星花が俺をちらりと見た。そして笑みを浮かべる。

「清水さん、それって愛ですね！綾香さんへの愛情ではないでしょうか？」

輝星花にそう言われて、大二郎は顔を真っ赤に染めた。

「え、いや、あ、あ、あの、っていうか…俺が…一方的に姫宮を好きただけで」

「うっん、きっとその愛情があれば綾香さんもきっと振り向いてくれますよ、ね、綾香さん」

輝星花はそう言うと微笑ながら俺を見た。

ね！って何だよ！お前は何を考えているんだ？俺と大二郎を引っ付けたいのか？

俺は悟だぞ？それを知っていてそういう行動をしているのか？

俺はどうやってても大二郎とは付き合えないんだぞ。それは俺が男だという事と、本当の綾香が戻って来た時の事を考えると…しかし…

「私は…えっと…」

大二郎に対して何て言えばいいんだよ。傷つけたくないし…

『嫌い』これは言えない。別に嫌いじゃないし…

『好きだけど今は…』これを言っていると超勘違いされる！

『まだちよつと考えたいから…』期待させちゃダメだろ！

『嫌いじゃないけど色々あって付き合えない…』これは？普通か？

「私、大二郎の事は嫌いじゃないよ…だけど付き合うとか…そういうのは出来ない」

よし！言った！言ったぞ！

俺は大二郎の顔色を伺った。きっと残念な表情をするかと思っただら大二郎は柔らかい笑みを浮かべた。

「よかった…」

え？よかった？

「俺、姫宮に嫌われてなくなっただけで良かった…俺は…お前に嫌われてないだけでも嬉しいぞ」

え？何だよ！大二郎！俺が考えた反応と違うじゃないか！それじゃすごくいい奴じゃないか！

助けてもらって、それでも付き合えないと言つ俺が一番ダメじゃないかよ！

「清水さん。愛は育んでゆくものですよ。ですから慌てないでもいいと思いますよ。清水さんの愛はきつといつか綾香さんに届きます。私も応援してます」

輝<sup>ホイ</sup>星<sup>セイ</sup>花<sup>カ</sup>は笑顔で大二郎に向かってそう言った。大二郎も小さく頷く。

「ありがとう…野木さん。俺の願いが本当に叶うかなんてわからない…だけど、やれるだけがんばるよ」

おい！輝<sup>ホイ</sup>星<sup>セイ</sup>花<sup>カ</sup>は何で大二郎を応援してるんだ！っていつか待て！俺がここに居るのに何故そういう話をする！

普通は俺が居ない時にそういう話をするんじゃないのか！？聞いているこっちが恥かしいじゃないか。

「清水さん！がんばって下さいね！」

輝<sup>ホイ</sup>星<sup>セイ</sup>花<sup>カ</sup>…何が『がんばって下さい！』だ…

「おう！」

大二郎も『おう！』とか元気に返事するなよ…

あーもう…頭が痛い…

何だこれは？何かおかしい事になってしまった気がするぞ。

やっぱりこいつらと一緒にいると絶対に何かがある…

しかし…この後どうなるんだ？どうなるんだよ…

大宮から戻る電車の中…

俺の横には何故か緊張した顔の大二郎が座っている…

茜ちゃんも絵理沙も輝星花も居ない。

大二郎と二人つきり…

傍から見れば初心なカップルに……は見えなにか？俺は小さいからな。

ガタンガタンと電車が揺れる。

もうすぐ久喜駅…大宮からずっと無言の大二郎…

何て言えばいいんだろうか…すごく気まずい…

っていつか、何で俺が大二郎と同じ電車で、それも二人で一緒に帰っているんだ？

くそ…輝星花め…まさか茜ちゃんまで…

続く

## 第19話 予想不可能暴走した俺！？

裏通りバトルの一件の後…

輝星花は何を考えているのか大二郎をコーヒーショップに誘いやがった。

大二郎も嫌なら断ればいいのに、輝星花の押しに負けて結局ついて来た。

そして三人でたいした会話も無くコーヒーを飲んだ。まあそこで終わればまだ良かったんだ…

その後だ、なんと輝星花は茜ちゃん達と合流した後に一緒に食事まで誘いやがった！

後から合流した茜ちゃんはまさかの大二郎の登場にかなりびっくりしていたにも関わらず輝星花が食事まで誘うから更に動揺していた。

しかし茜ちゃんは良い子だ。驚きはしたが、嫌な顔もせずに大二郎との食事もすぐにOKしてくれた。

ちなみに絵理沙なんて何の意見も出さないうで見てただけだ。もはや輝星花を中心に物事が進んでいた。

茜ちゃんの選んだお店はイタリアンレストランで、ランチタイムには結構割安のセットメニューがある洒落た感じのお店だった。

雰囲気は完全に女性向けで、店内は女性客でゴった返している。制服の大二郎は結構というかかなり浮いていた。

食事が始まるとあの輝星花が真っ先に話を始める。

あの一件から何故か一人で盛り上がる輝星花。

大二郎は終始押され気味…茜ちゃんは輝星花に波長を合わせて話しをしているだけ。

しかしだ、普通一般的にはあんな事があつたのに盛り上がるとかおかしいだろ？痕を引いて気持ちも滅入る方が多いんじゃないのか？まったく輝星花は何者なんだよ……魔法使いか……

途中の話の中で解つた事がある。

大二郎が制服だつた理由は大宮で空手地区大会の決勝戦があつたからという事。

試合の結果は輝星花や茜ちゃんが何度聞いても大二郎は話してくれなかつた。

茜ちゃんにしてみれば、もし大二郎が空手地区大会で優勝をしたら俺と大二郎がデートをしないとイケなくなる。だからだろう、相当に気にしているのが見えているとよくわかつた。

俺も結果を知りたかつたが、大二郎がこれほどに話したくない様子をみると決して良い結果では無かつたのではないかと勝手に予想した。

結局最後まで大二郎は結果を話す事も無く食事も終了した。

今日の買い物は食事が終わつたら終了解散の予定だつた。

そして大二郎ともここでお別れ出来るものだと思つていた。しかし！俺の考えは甘かつた……

食事が終わつて駅まで歩いている途中、輝星花は俺と大二郎に向かつてよんでも無い事を言い出した。

「綾香さん、清水さんと一緒に帰ればいいのではないですか？」

「え！？」

思いもよらない言葉に俺は思わず声を出して驚いてしまった。

ちよつと待て……茜ちゃんや絵理沙と買い物に来たはずなのに、何で俺が大二郎と一緒に帰らないといけなんだ？そんな疑問が俺の脳

裏に浮かぶ。

「待って、私は茜ちゃん達と一緒に帰りたよ」

俺は大二郎と一緒に帰る事に対して否定的な意見を言った。しかし…

俺の予想を覆す事が起こった。それは…絵理沙や茜ちゃんまで賛成に回ったのだ！

「綾香、清水先輩と一緒に帰ってもいいよ？」

茜ちゃんは俺の方をちらりと見るとそう言った。

「え？茜ちゃん？」

俺が茜ちゃんの方を見ていると後ろから絵理沙の声が…

「綾香ちゃんが一緒に帰ってもいいと思ってるのなら…一緒に帰ればいいんじゃないのかな…」

「絵理沙さん!？」

俺は慌てて絵理沙の方を向いた。

二人は賛成しているかのようにそう言ったが二人の表情は本気で賛成している様には見えなかった。

がしかし！会話だけを聞くと賛成としか聞こえない。

「清水さんはどうなのですか？」

輝星花が大二郎にそう聞くと、大二郎は返答に困っている。



「俺は…別に無理してまで一緒に帰りたいたいなんて思っていない…」

大二郎はしばらく考えてから体格に似合わない小さい声でそう言った。

「綾香さん、いいじゃないですか。清水さんには先ほど助けて頂いたのですし」

輝星花（きせい）は笑顔でそう言った。

こいつ…お前だって助けてもらっただろうが。お前が一緒に帰れよ。

そして…

結論から言うと結局は一緒に帰らないとダメな空気にされてしまった…

という事で大二郎と俺と一緒に電車の中にいるという事だ…

しかし何も言わずにただ横で固まって座っている大二郎。

こいつ、かなり緊張しているのだろうか？

もしこれで今の綾香の自身が実は俺『悟』だって知ったらかなりショックを受けるんだろうな…

そうならない為には正体がばれる前に絶対に俺を諦めてもらわないといけない。

というか…もし俺が今から大二郎と付き合ったとすると、将来は妹の綾香が大二郎と付き合わないといけないという事になってしまう。

妹の綾香は今まで起こった事実も知らない訳だし、俺と入れ替わるのすら大変そうなのにそれよりも複雑な状況を作りたくない。

もしかする綾香をもう一度記憶喪失だったという状況にしないと

ダメかもしれない。

そうだったとしても大二郎と付き合っているという事実は邪魔なだけだ…

俺がそんな事をずっと考えている間に東鷲宮駅に到着した。

結局大二郎は最後まで無言だった。

あまり人気のない駅の構内を俺と大二郎の二人で歩く。そして改札を出てるとお互い顔を見合わせた。

大二郎と目が合った…思わず俺は目をそらしてしまった…

やばいな…まともに大二郎の顔を見れないぞ…

今日はここでとっと別れるべきだな。

「地下道の向こうの駐輪場に自転車置いてあるから…ここで…」

俺がそう言っても大二郎は無言だった。

大二郎は笑顔が無く何かを考えているような表情をしている。

「じゃあ、大二郎、今日はありがとう。またね」

そう言っただけ俺は大二郎から逃げる様に地下道に向かう。

大二郎の家は確か、駅の西口を出て右手に行った温泉施設の方向だったはず。

という事はここでお別れという事だな。

俺は地下道に入る間際、つくり笑顔で大二郎に向かって手を振った。

しかし大二郎は俺をじつと見て返事を返して来ない。何か気まずい…

「じゃ、じゃあ私行きますね！また学校で」

大二郎に聞こえるような大きな声でそう言った。  
しかしやはり大二郎の反応は無く、ただ俺の方を見ているだけだ。  
そんな大二郎を横目に俺は薄暗い地下道へ降りて行く。

何だあいつ…何をそんなに思いつめているんだ？

やっぱり大会で優勝出来なかった事が相当ショックだったのかな

…

俺がそんな事を考えながら地下道を歩いていると、地下道に『ダ  
ツダツダツ！』と凄まじい足音が響いた。

俺は何が起こったのかと慌てて後ろを振り向く。すると大二郎が  
怒涛のダツシュで俺の方へ走って来ているじゃないか！

「だ、大二郎！？」

俺は思わず声を出して立ち止まった。

そして大二郎は俺に追いつくといきなり右手をぐっと握り無言  
で地下道を西口の方へと走り出す。

大二郎は俺を引つ張ったまま地下道を出ると左に折れて線路沿い  
の道へ出た。

「ちよっと！大二郎！痛い！手が痛い！」

俺がそう言っても大二郎は手を離さないし振り返る様子も無い。

そして数十メートルは走っただろうか、気が付けば西口駐輪場ま  
で引つ張られて来ていた。

「大二郎！痛いって言ってるだろ！」

俺が思わず男口調で怒鳴ると大二郎はやっと手を離した。

そして俺の方に振り返ると真剣な顔で俺を見る。

何だこの空気は…その表情は…もしかして俺にまた告白とかするつもりなのか!?

周囲を見渡すが駐輪場に人気は無い…告白するなら絶好のチャンスという所だ…

しかし告白なんかされても俺は困る…

試合で優勝できなかったのなら、これ以上関わる必要も無い…

一瞬俺の脳裏に大宮で大二郎に助けてもらったシーンが浮かびあがった。

いや、無いとは言えないかもしれないけど…

でも付き合うのは無理だ!よし、先に言っておこう…

「えっと…私は大宮でも言ったと思うけど…」

俺は先手を打つべく先に話を始めた。すると大二郎がそれに割り込むように話出す。

「待て姫宮、お前の言いたい事はわかってる。でも俺も姫宮に伝えたい事がある。先に話をさせて欲しい!」

真剣な眼差し。そして男らしい覇気のある低い声。

「は、はい」

俺は思わずそう返事をした。

大二郎のやつ何を伝えたいんだ?今日の試合で優勝は出来なかったけど、やっぱり俺と付き合いたいとかそついう事なのか?

「今日…俺、空手の大会で…」

空手大会…やっぱりその話題なのか？

「はい…」

「優勝したんだ」

大二郎は笑顔も無く、俺にそう報告をした。

「え！？」

俺は思わず驚きの声をあげてしまった。

「えつと…『優勝』って『無料』じゃないって事かな？」

俺は何を言っているんだ…くだらない冗談でその場を誤魔化そう  
としていうのか？

今のこの真面目な大二郎に、それに『優勝』の報告を真面目にし  
ているのに、こんな冗談を言っても答えてくれるはずないじゃ  
ないか…それどころか普通は怒るだろ。

「姫宮…それは『有償』だ。俺の言ってるのは試合の決勝戦に勝っ  
た方の『優勝』」

「へ…あ、あーそっか！そうだよね！『優勝』の方が」

予想外だ…ベタなジョークについて来られてしまった…  
しかし優勝したって…優勝？という事は俺とデート！？茜ちゃん  
と約束してたし。

だったら何で？何で大宮で食事をした時に優勝したって言わなか

つたんだ？

あそこで言えば茜ちゃんだったって訳だし、デートの約束まで簡単に取り付ける事だつて出来たんじゃないのか？

……

待てよ、ここで結果を知ったとしても結局は俺は大二郎とデートしないといけないんじゃないのか？俺がその約束を知らない訳じゃないんだしな……

「おい姫宮、そんなに深刻な顔をするな。お前のそんな顔を見てると俺……ちよつと寂しいじゃないか」

大二郎はらしくない悲しそうな表情でそう言った。

えつと……どうするんだよ俺……どうすればいいんだ……

デートなんてしちゃダメだろ……大二郎に好かれてはダメなんだぞ……でも約束だろ……優勝したのに約束を守らないっていうのもダメだろ……

俺が考え込んでいると大二郎は俺から顔を背けた。そして小さく溜息をつくとも元気の無い声で再び話を始める。

「姫宮、俺はな……大会で優勝したらお前とデートだつて浮かれてた。でもな、俺……お前が望まないのに俺だけが浮かれてても仕方ないつて事に気が付いた。だから……大会の優勝報告はする……だがお前が望まないのなら俺は別にデートしなくつてもいいからな……」

大二郎はそう言う一人で納得したかのように頷いていた。

何だよ……優勝したのなら『姫宮！デートだ！デートだぞ！』つて言うのが大二郎じゃないのかよ……何でそんなに悲しそうな顔でそんな事を言うんだよ。

そりゃデートしなくてもいいのは嬉しいかもしれないでもな……くそ……こつなつたら……

「でも約束でしょ？大二郎は約束したから練習だってがんばって優勝を目指したんじゃないの？」

「ああ、約束はした。でもそれはお前とじゃない。越谷とだ」

確かに…約束したのは茜ちゃんであって俺じゃない。だけどいいのかよ？大二郎はそれでいいのか？

「それって…それでいいの？本当にいいの？」

「俺はお前が好きだし、デートだってしたい。ただな、俺はお前に認めて貰えないのに…約束だから仕方ないからデートとか…そういうのは嫌なんだよ！」

な…大二郎…

「で、でも…」

「もういい！それ以上言うな！俺は言いたい事は言った。だから俺は帰る。さっきはいきなり手をひっぱってすまん、痛かっただろ…今の俺じゃまだまだ姫宮には釣り合わないと自覚してる。だから俺はお前に認めてもらえるようにがんばるからな！って事でまた学校でな！」

大二郎はそう言うつくると向きを変えて駅の方へと歩きだした。

そして数歩進んだ所でこちらを振り返る。

「そつだ姫宮、今日は俺の事をずっと大二郎って言うてくれてたよ

な…俺、すつげー嬉しかったから」

大二郎は笑顔でそう言うのと小走りで駅ほ方向へと消えて行った。  
そうだ…俺は癖で今日ずっと大二郎って名前で呼んでた…清水先輩って言うのをすっかり忘れてた。

……

っていつかさ…何か違わないか？これじゃ俺、すつげー格好悪くないか？

今日は大ピンチだった所を大二郎に助けてもらった。

そして大二郎は茜ちゃんの約束通り、真面目に空手の練習をして遂に地区大会で優勝した。

俺は自分の事しか考えずにどうやって大二郎に諦めさせるかってずっと考えていた。

困った表情を見せて大二郎を精神的に追い込んだ。

本当に付き合えないのならもつと早く言えばいいじゃないか…

付き合えないとも言わずに、結局はやらせるだけやらせて最後にこれか？

俺は人を、大二郎を傷つけたくないからって…結局は大二郎を傷つけてるじゃないかよ！

いいのかよ…悟！それでいいのかよ！

俺は自分に無性に腹が立った。

そりゃ付き合えないよ。俺は『悟』だし綾香じゃない。綾香の事を考えても大二郎とは付き合えない。

でも見た目は女でも、中身は男なら約束は守るべきだろ！守らなきゃダメだろ！

デートが無くなっても大二郎は俺を嫌いになった訳じゃない！



好きだけど…受け入れてくれない俺に…ただ傷ついただけなんだ…

「姫宮悟！男になれよ！」

俺は大声でそう叫ぶと駅に向かって全力で走った！

息を切らしながら駅まで戻ったが、そこには大二郎の姿はない。

俺は駅を出て大二郎の家の方向へと全力で走った！

俺は約束は守る！そして…そこでちゃんと伝える！ハッキリと！

俺は大二郎とは付き合えないって…

お互いが傷つかないようになんて甘いんだ！言うべき事はちゃんと言っ！どうせ傷つくなら早く治る、早く癒える傷じゃないとダメだ！

きっと大二郎ならわかってくれるはずだ。

それに…今のあいつなら…本当にいい彼女が見つかるはずだ。

「はあはあ…大二郎…」

全力で走る俺の前に大きな背中が小さく見えた。大二郎だ！

俺は走るスピードを上げる！大二郎の背中がどんどん近くになっ！  
つてゆく！

俺は両手を広げた。そして大二郎の背中に思いつきり飛び込んだ。

「待て！大二郎！」

ドン！という音と共に俺は勢い余って大二郎の背中に抱きついてしまった！

し、しまった！勢いが良すぎて抱きついてしまったあああ！

大二郎は前のめりに倒れそうになる！

「な、何だ！？」

大二郎はなんとか踏ん張ると後ろを振り返った。

「ひ、姫宮！？」

大二郎は俺に思いっきり背中から抱きつかれて目が点になっている。

な、何やってんだ！？俺は大二郎の背中から慌てて飛び降りた。

「だ、大二郎！」

「な、何だ？どうしたんだ？」

「え、えっと…」

くそ！顔が熱い。赤面してるのか！？赤面なんてしてる場合じゃないだろ悟！言え！早く言え！

「大二郎！わ、私は約束を守りたい！大二郎は…大二郎はがんばって優勝した！茜ちゃん、ううん！私との約束を守って地区大会で優勝したんだよ！」

大二郎はキョトンとした表情で俺を見ている。そして動揺しながら言った。

「で、でもお前は俺の事が嫌なんじゃないのか？」

「私は…大二郎が嫌いなんじゃない！ただ私には大二郎とは絶対に

付き合えない理由があるの！だから何があっても大二郎とは付き合えない！だから私…大二郎には変な約束しちやっつてずつと悪いと思つてた…」

大二郎は唇を噛みながら俺の話の話を聞いている。

「私の心の中には大二郎はきつと優勝なんてしない。そういう気持ちがあつた。だから別に断らないでもいいかなって思った。私は大二郎を傷つけたく無いって思つてたから。でも…大二郎は約束を守つて優勝した」

大二郎は少し顔を俯いた。ショックを受けているのだろうか？

そりや当たり前だよな…頑張つても報われないのだから…だからこそ俺は約束を守るんだ！

「大二郎、お願い！約束だけは守らせて欲しい！デートしようよ…こんな我がままな私を嫌な奴だと思わないのなら…私は…」

そこまで言つて俺は言葉に詰まつた。

そして大二郎の顔がまともに見られなくなり思わず俯いてしまつた。

大二郎は俯いている俺の左肩に大きな右手を置いた。左肩に伝わる大二郎の手のぬくもり…

おれはゆつくりと顔を上げた。でもまだ大二郎の顔は直視出来ない。

「姫宮、俺な…お前が、姫宮綾香が大好きだ。俺はな、二学期始めに勢いで告白してからずつと姫宮に嫌われてるんじゃないかって思い込んでた。今日、大宮で俺を嫌っていないつていうのが解つてすぐ嬉しかった。でもな、俺も弱い…そうは思いつつも心の奥では

まだ姫宮に嫌われているんじゃないかって思っていた…そしてさっき俺は自分が傷つかない為に自分から逃げた」

「大二郎…」

「でもな、姫宮がハッキリと言ってくれて…俺、よかったと思ってる」

俺はゆっくりと大二郎の顔を見上げた。大二郎は俺と目が合うと俺に聞いてきた。

「姫宮…女々しいかもしれない。さっきのお前の言葉でお前を諦めるべきなのかもしれない。だけどな…絶対に付き合えないって言うさっきの言葉、信じたくないんだ…本当に絶対なのか？絶対に付き合えないのか？」

大二郎の顔は真剣だ。でも付き合えないのは絶対だ。

「うん、絶対に無理なんだ…」

俺がそう言うとき少しだけ大二郎は寂しそうな顔をした。しかし、すぐに笑みを作る。

「……………そうか…わかった」

大二郎は優しい笑顔でそう言った。

そんな大二郎を見ていると何だかすごく申し訳ない気持ちになる。

「大二郎…ごめん…」

思わず謝ってしまった…

「いや、いい…ありがとう。ハッキリと言ってくれてな」

今の俺の目の前にいる大二郎は…とても優しくって…とても逞たくましくって…とても男らしくって…

……

え？何だこれ…何を俺は考えてるんだ！？

大二郎が今度は俺の右肩にも左手を置いた。両肩に大二郎の温もりが伝わる。

ドキ！今俺の胸の鼓動が一瞬高まった。ドキ！つてした！？あ、あれ？何だこれ…

「姫宮、俺と本当にデートしてくれるのか？」

ドキ！ドキ！ドキ！ドキ…

な、なんだ？ドキドキと胸の鼓動が高鳴り今まで経験した事の無い胸の苦しみが伝わる。

何でこんな変な気持ちに…お、俺は男だぞ…何で男にドキドキしてるんだよ！

それも相手は大二郎だぞ！？自分にそう言い聞かせた。しかし鼓動は鳴り止まない。

茜ちゃんを目の前にしても、絵理沙を目の前にしても、あの輝星ほひ花を目の前にしてもここまですんなり変な気持ちにならなかった。

あ！は、早く返事してあげないと！

「あ、うん」

「ありがとうな、姫宮」

ドキ！って…何だ？また…もしかして…俺はこいつが…大二郎が好きに…

な、無い！無い！！そんな事は無い！！危ない！危険だ！でも…じゃあ何だよ…この感覚は…俺がおかしくなったのか？それともやっぱり…無い！また何を考えてるんだよ！悟しっかりしろ！そんなアブノーマルな事はあるにえないだろ！男同士だぞ！男に戻ったら男同士の…うわぁ！想像するだけでも気持ち悪い！

「おい、姫宮？顔が赤いぞ？大丈夫か？デート…別に無理しなくっていいぞ？」

「え、えっと…無理はしてないよ！約束は守る！」

俺の返事を聞くと大二郎はとても嬉しそうに笑みを浮かべた。

今日の大二郎って何だかいつもと違う…いや、俺が勝手にそういうふうに思い込んでるだけなのか…

でも…もしも俺が本当の女なら、今日の大二郎なら…俺は付き合ってもいいと思ったかもしれないよな…

な、なんて事を俺は考えているんだ！

やばい…女の体になった影響なのか？変な事を考えてしまったぞ…

「姫宮？更に顔が赤いぞ？本当に大丈夫か？」

「え！？あ、ちょ、ちょっと緊張しちゃったから」

「そうか。そうだよな、俺も緊張してるしな」

「う、うん」

「よし、俺も男だ。ちゃんと言い直させてくれるか？」

「え？」

大二郎はくるりと体を反転して俺に背を向けた。  
そして数回深呼吸をすともう一度俺の方へと向いた。

「姫宮綾香！」

「は、はい！」

「俺は約束通りに地区大会に優勝した！俺とデートしてくれ！」

ドス！今の言葉と共に何かが胸に突き刺さった。  
胸が苦しい……

「あれ？どうした？姫宮……やっぱり嫌なのか？」

え、あ、えつと……へ、返事！

「あ！？え？いや、OKだよ……」

「や、やった！姫宮、ありがとう」

ドキ！え？まただああああ！うわあああああ！  
危険だ……このままここにいと危険だ！  
今日の俺は普通じゃない！何の呪いだ？

「姫宮、それじゃあ…デートの約束だけ…」

「あ、あの…またそれは今度決めない？今日は…私…」

「こ、ここから早く逃げ出さないと！」

「え？あ、わかった。また今度にしようか？」

「う、うん、ごめんね」

「いや、別にいいよ、姫宮とデートが出来るだけでもすごく嬉しいから」

大二郎は満面の笑みを浮かべた。

俺は…大二郎の顔がまた直視できない…

「ま、またね大二郎！」

「お、おい！姫宮！？」

俺は慌ててその場から走り去った。

……

家に早く帰ろう…

俺はゆっくりと地下道を歩いていた。



さっきのは変な気持ちは何だったんだろうか…  
俺はやつと精神的に落ち着いてきていた。

俺は確か約束を守らない自分が情けなくって、それで大二郎との約束を果す為に大二郎をおっかけて…

それで大二郎と…デートの約束を取り付けようと思って…  
そうしたら…胸がドキドキして…大二郎の顔がまともに見れなくなつて…

それでもつてもしも女だったら大二郎と付き合ってもいいかななんて思つてたりも…

え！？また変な考えが加わってしまったじゃないかあああ！

「うわああああ！」

「な、何あの子いきなり叫んだよ？」

「優ちゃん、見ちゃだめよ！」

周囲から女子高生や親子づれの俺が危ない人的な声が聞こえた。

あし、…しまった…地下道で大声で吼えてしまった…

何やつてるんだ俺は…はあ…溜息が出る。

俺には茜ちゃんが居るんだぞ…男にドキドキしてどーするんだよ…  
危険街道まっしぐらじゃねーか…

俺は地下道を通り階段を上がった。そして駐輪場へと入って行く。

昼間でも薄暗い駐輪場…見渡してみたが人気は無い。

俺は自分の自転車を見つけて鍵を外そうとしていた。

カランカランカラン…

鍵が地面に落ちた。

俺がそれを拾おうかと思ったたら誰かの手が鍵に伸びる。

「ほらよ、悟の妹」

俺がふと顔をあげるとそこには正雄がいた。

「さ、桜井先輩!？」

何でこんな場所に正雄が!？それも制服で？

「鍵…早く受け取れよ」

「あ…ありがとうございます」

俺は正雄から鍵を受け取った。

何だろうか。正雄は不機嫌とまではいかないが、あまり機嫌がよくなさそうな顔で俺を見ている。

「えっと…ここで何を？」

俺はそう質問を試してみた。

「ん？俺が何でここにいるのか知りたいのか？」

「あ…別に…嫌ならいいです」

「別に…嫌じゃない」

正雄はそう言つと俺の方をじっと見た。

「あの…そんなにじっと見ないで下さい」

「ん？俺が見るのはダメなのか？」

「え？」

正雄はそう言つと一気に不機嫌そうな顔になる。

「姫宮の妹」

「は、はい？」

「お前、大二郎の事が好きなのか？」

え！？ええええ！？何だそれは！

「な、何ですかそれは」

「さつき…大二郎と一緒にいただろ」

見られてた！？正雄に！？何時の間にこいつ俺達の近くにいたんだ！？

でもいいじゃないか。俺は悪い事なんてしない。ただ大二郎との約束を守る為に話をしていただけ…だよ…な？そ、そうだ！そうだよ！

「い、いましたよ？それが何か問題もであるのですか？」

「別に…問題なんか無い」

「それじゃ、何でそんな不機嫌そうな顔をしているんですか？私は大二郎が…し、清水先輩が地区大会で優勝したからデートの約束を守ろうと思っただけです」

「やばい、もう少しで大二郎を呼び捨てにするとところだった…正雄の前で大二郎とか言うとか言われかねない。」

「お前、その優勝って証拠を何か見せてもらったのかよ？」

「え？しょ、証拠？え！？」

「お人よしだよな。優勝したなんて自分で言っただけで信じたのかよ」

「どういう事だ？さっきの大二郎の優勝したって俺に報告したのは嘘だったのか？」

「おい姫宮、何を焦ってるんだよ。もしかして騙されたのかもって思ってるのか？」

「正雄は後ろに置いてある自転車に座ると俺をじっと見た。そして俺の様子を伺っている。」

「大二郎が嘘を？俺に？でもあの表情は…あの態度は…嘘じゃない…あの大二郎が俺に嘘をつくはずなんて無い！俺は信じる！大二郎を！」

「私、信じます。清水先輩の言った事を信じます。清水先輩は嘘なんてつきません。私は…先輩を信じてます」

俺がそう言うと正雄はいきなり声を出して笑い出した。

「ははははははー！」

「何がおかしいんですか！」

俺は正雄の態度に腹が立って怒鳴った。

「いや…すまん。まああれだよ…大二郎をよろしくな」

「え？」

正雄！？何だそれは？よろしくって？

「あいつお前の為にすごく頑張って優勝したんだぞ」

「や、やっぱり優勝は本当なんじゃないですか！」

こいつ…何がしたいんだよ。俺と大二郎とのやりとりをこっさり覗いてただけかと思ったら何を言い出すのやら。

っていうか…おい、なんでこいつが大二郎が優勝したって知っているんだよ？

制服：優勝を知っている…俺と大二郎のやりとりを見ていた。

こいつ大宮に大二郎の応援か何かに行ったのか！？

「さ、桜井先輩！」

「ん？何だよ」

「もしかして…清水先輩の応援に行ってたんですか？」

「……………」

「そうじゃなきゃ優勝したなんて知ってる訳が無いですよね？」

「お前、結構するどいな？」

「やっぱり………」

「お前が不良に絡まれた時も俺は近くにいたんだが…大二郎が一人で全員倒しやがって俺の出番を無くしやがった。おまけにお前らと一緒にどっかに消えるしな」

「え！？？」

「こいつ…あの時から？じゃあずっと俺の後をついてきていたのか？」

「悟の妹！」

「な、何ですか」

「マジで大二郎をよろしくな」

「何でよろしくなんですか！」

「ん？だつてお前、大二郎の事が好きだろ？」

「え！？な、な、何でそうなるんですか」

「やばい！こいつやっぱり全部見てた！っていうか何で俺が大二郎

を好きって事になってるんだよ！

「悟の妹、俺にはすぐわかった。お前、さっき大二郎と一緒にだった時、恋する乙女って顔してたもんな」

俺は乙女じゃねえええええ！男だああ！

「ま、まった！無いです！それは無いです！」

正雄やめろ！否定してくれ！俺は悟だ！男なんだ！男に興味なんて無いはずなんだ！

…はず？はず！？おい悟…はずじゃなくって絶対に興味無いんだろ…

「ムキになるなよ、大丈夫だよ、誰にも言わないから」

「し、清水先輩！」

こいつ！しつこい！

「よし！じゃあ俺は帰るぞ？お前も早く帰れよ？」

そう言っつて正雄は自転車からひょいと飛び降りた。

と思ったらハンドルが正雄の右腰にあたり自転車が倒れる！

ガシャーンという音とともに俺に向かって自転車が倒れてきた。

「うわー！」

俺は自転車にぶつかってコンクリートの床に倒れ込んだ。

「だ、大丈夫かよ？」

正雄は慌てて俺に右手を差し出した。

俺は左手で正雄の手を握る。すると正雄は「よいしょ」と掛け声をかけて俺を起した。

「桜井先輩、危ないから自転車から飛び降りなてください！」

俺がそう言って手を離そうとしたが正雄は手を離さない。

正雄が俺の左手の甲をじっと見ている。

「あの、離してもらえませんか？」

「おい、悟の妹」

「え？」

何だ？声が…声のトーンがおかしいぞ？

「お前…確か…左手の甲にほくろがあったよな…」

「え!？」

ほ、ほくろ？え？そんなのあったっけ…

そう言えば…確か…高校に入学してからだったっけな…



「お兄ちゃん！手の甲見せて！」

「ん？甲？」

「いいから見せて」

「あ、ああ……」

綾香はじつと俺の手の甲を見る。

「お兄ちゃんは手の甲にほくろ無いんだね」

「無いな……何でそんな事を聞くんだよ？」

綾香はニコニコしながら自分の左手の甲を俺に見せた。

「ほら！ここにほくろあるでしょ？手の甲のほくろって器用な証拠なんだって！」

「そんなの迷信だろ？占いなんて信じるなよ」

「えー…お兄ちゃんって夢が無いなあ……」

「あーはいはい。夢は無いですっつと」

「あーつまんない！そんな事だから彼女の一人も出来ないんだからね！」

「お、おい！それは関係ねーだろ！」

「わーい怒った！」

ほくろ…あつたかも…って！？な、何で正雄がそんな事を知ってるんだ！？

正雄は俺を疑うような眼差しでじっと見ている。

「悟の妹、お前、入学早々俺と自転車でぶつかったの覚えてるか？」

え！？何だそれ！そんな事を綾香から聞いてねーぞ！

「え…えっと…記憶が残ってないかも…」

ここは記憶喪失のせいにしておこう。

「…記憶喪失か…そうか…」

「じ、ごめんなさい…」

正雄はやっと手を離した。

「俺はお前と自転車でぶつかって、そしてお前がぶっこけたんだ。それで俺はお前を起こしてやったんだぞ？」

「そつなんですか…」

何だよ！こいつ綾香と面識あったのかよ！？  
っていうか、起こしただけで左手の甲のほくろがあったとかよく  
覚えてるな…

「まああの時はまさか悟の妹だとは知らなかったんだがな…」

「え？あ、そうなんですか」

「それからしばらく経ってたからお前が悟の妹だって知ったんだ」

「そうなんですか」

やばい…まったく知らない事すぎてあまり会話していると墓穴を掘  
りそうだぞ…

左手の甲のほくろだって実際には妹の左手の甲にあったんだよ…

俺は自分の左手の甲を見た。

確かにそこにはほくろは無い…

っていつかあれだよな…写真で蘇生したんだし、細かい部分まで  
完全に再現されてる訳はない。

という事は…俺の知らない部分で綾香と違う所があるかもしれな  
いのか？

危険だな…注意しないと…

「お前…本当に悟の妹か？」

正雄が俺の全身を見ながらそう言った。

な！な！な！なんだ！？なんて言う事を聞くんだ！

こゝ、ここはごまかなさいと！

「な、何を言い出すんですか！私、そんな事を言つと怒りますよ！」

「…そうだよな？どう見ても悟の妹だよな…すまんすまん」

乗り切つた！？しかし！長居は無用！

「私はもう帰りますから！」

「あ、おう…」

俺は慌てて自転車の鍵を外すと駐輪場から外に出た。  
そして思いっきり自転車を漕いで家へと向かう。

今日は色々な事がありすぎだよ…

輝星花きせいが急に買い物に来るし…

茜ちゃんに疑われそうになるし…

不良に絡まれるし…大二郎に助けられるし…

おまけに大二郎が地区大会で優勝するし…

そして…大二郎に対して怪しい気持ちになるし…

とどめには正雄の登場。そして正雄も俺が本物の綾香じゃないつて疑いやがった…

やばいな…明後日学校に行ったら…輝星花きせいに…じゃない…野木一郎に相談しよう…

俺一人じゃどうしようも無い気がする…

それにしても何だ…体が重い…

そしてドタバタの土曜日は終わった。

続く

第19話 予想不可能暴走した俺！？（後書き）

何だかんだと19話です。当初は20話位で完結させようかと企んでいましたが、ハイ無理です。当分続きそうですが宜しくお願いします。

第20話 ココロもカラダも？ 前編

雲ひとつ無い青い空が広がる秋晴れの日…広い平原にそよ風が吹いている。

私は大きな木の下で大二郎の二人つきり…大二郎は私にそつと微笑みかけてくれる。

『綾香…俺はお前を愛してる』

そして私は大二郎から愛の告白を受ける。

真っ白なタキシードに身を包んだ大二郎は微笑みながら私を見ていた。

『大二郎…私も大二郎を愛してる…』

私も大二郎に少し照れながらそう返事をした。

『綾香、ずっと俺と一緒にいてくれないか』

大二郎はそう言うと私の手をぎゅっと握る。私も大二郎の手をぎゅっと握り返した。

『うん…私、大二郎とずっと一緒にいるよ…』

大平原の中にある大きな木の下で私は愛を誓った…

幸せ…こんなに幸せで私…いいのかな…

そう思いながら私は風に揺れる草原の草を眺める。

『じらー！ちょっと待った！』

突然大きな声が聞こえたかと思うと空は急激に曇り始め、雷鳴が轟く。

『え！？な、何が起こったの！？』

私は慌てて周囲を見渡す。すると段々と周囲の風景が消えてゆく。そしい何時のまにか周囲は真っ暗になっていた。

『ズガガガン』と激しい音と雷光。真っ暗な空間に稲妻が真横に走る！

先程まで周囲にあつた草原も木々も何も無くただ真っ暗な闇。

私は恐怖に襲われて大二郎の手をぎゅっと握った。

大きな雷鳴が聞こえた瞬間、目の前に真っ黒なロープを纏った人間が現れた！

『だ！誰だ！俺達の恋路を邪魔しようとしているのは！』

大二郎は私を庇いながらその人間に向かって叫んだ！

『おい大二郎…お前そいつと一緒になれると本当に思ってるのか？』

何処かで聞き覚えのある男の声…

ロープの男は私達の前まで歩いてくると、目の前でバサ！とフールドを取った。

その瞬間、大二郎の顔が驚きの表情へと変化する。

『ま、正雄！』

そう、聞き覚えのある声の正体は、ロープの男の正体は正雄だったのだ。

『ま、正雄！いくら親友のお前だからって、綾香と俺との仲を引き裂くなんてゆるさねーぞ！』

大二郎は動揺を隠せない表情でそう怒鳴ると右の拳を振りあげて正雄に殴りかかる！

しかし正雄は大二郎の拳をいとも簡単に左手で受け止めた。そして私の方を見る。

『やめる大二郎、そいつは悟なんだぞ？』

正雄はそう言いながら私を指差す。

『え？な、何だと？』

大二郎は先程以上の驚きの表情を浮かべると拳を下げた。

『ば、馬鹿な！綾香が悟！？そんな訳…』

大二郎は信じられないという表情でふらふらとしている。

『馬鹿じゃない、ほらよく見るよ、今は悟に戻ってるじゃないか』

正雄は不気味な笑みを浮かべてそう言った。

私は慌てて自分を見た。すると…

『あ！あれ！？男に戻ってる！？』

俺は何時の間にか悟に戻っていた。な、何だ？何で男に！？俺がおどしていると正雄と大二郎が俺を囲んでいる。



『おい悟…お前…綾香に化けて俺を騙していたのかよ』

大二郎がそう言っただけ俺を睨んだ！

その瞬間、今度は周囲がふわっと明るくなり俺は一瞬視界を失った。

視界が戻り気がつくとき何時のまにか俺達は学校の屋上に立っている。

そして制服姿の正雄と大二郎が厳しい表情で俺を睨んでいる。

『お、俺は…何も悪い事はしてないぞ…だ、大二郎が勝手に俺を好きになったんだろうが！』

俺が怒鳴った瞬間、いきなり大二郎と正雄が目の前から消えた。

『あれ？大二郎！？正雄！？』

俺は周囲をキョロキョロと見渡して二人の姿を探し始めた時、『ダン！』という激しい音と共に突然目の前に制服の女子生徒が現れた！というか上から降って来た！

その女子生徒は着地した姿勢で前屈みのままで表情を伺えないが見覚えのある茶色い髪が風に揺らいている…まさか…

女子生徒はゆっくりと顔を上げながら立ち上がる。

絵理沙…そう、その女性は絵理沙だった。絵理沙は立ち上がると俺をジロリと睨む。

『男なのに男を好きになるなんて最悪…私からの告白を受け入れないで男に走るとか…悟の馬鹿！』

そう言った絵理沙の目には涙が溢れている。俺は慌てて絵理沙の

方へと走ると絵理沙は涙を浮かべたまま屋上の柵の方向を見た。

『ま、待て！絵理沙！誤解だ！俺は別に男なんて好きになってない』！』

絵理沙は涙をこぼしながらいきなり柵へ向かって走り出す。

『おい！待てよ！』

絵理沙はそのまま勢いをつけて柵を飛び越え、屋上から飛び降りた！

俺は慌てて屋上の金網越しに飛び降りた絵理沙を探す。しかし絵理沙の姿が見えない。

すると今度は後ろから違う女性の声がある。これも聞き覚えのある声…

『ひどい！綾香が姫宮先輩だったなんて…』

え？この声は茜ちゃん！？俺は慌てて後ろを振り返った。

すると屋上の出入口の前で茜ちゃんが泣き崩れている。

そして横には佳奈ちゃんと真理子ちゃん…

『本物の綾香に化けてたなんて…最悪ですね』

真理子ちゃんが怒った表情で俺を指差して言った。

『茜の気持ちを踏みにじるとか！男じゃないよね！』

佳奈ちゃんも怒った表情で俺を睨みながらそう言った。

しかしその時、佳奈ちゃんの表情がいきなりキョトンとした表情

へと変化する。

『あれ？姫宮先輩じゃないじゃん。知らない女子生徒だよ？』

佳奈ちゃんが俺を指差したまま訳のわからない事を言いだした。知らない女子生徒？俺は男に戻ってるはずだろ？

俺は自分の姿を確認する。女子生徒の制服。膨らんだ胸。俺は本当に女になっていた！

容姿は確認出来ないが、長いストレートな髪が風になびいているのもわかる。

『あれ！？俺は誰になったんだ？』

その時、また周囲がふわっと明るくなった。気がつくと周囲が真っ白になって茜ちゃん達の姿が消えている。

『何だよ？ど、どうなってるんだよ？』

『お兄ちゃん…』

俺が長い髪を触っていると後ろから綾香の声が聞こえた！あ、綾香！？俺は慌てて後ろを振り返った。

『綾香！？』

俺の真後ろには行方不明だったはずの綾香が立っている。綾香は俺がお気に入りだった薄い緑のワンピース…

『お兄ちゃんは私になったんだ…』

俺は慌てて自分の姿を確認しなおした。すると俺はまた綾香の姿に戻っている。

『こ、これには訳があるんだ！綾香聞いてくれ！』

『もういいよ…そつか…お兄ちゃんが私の代わりに生きてくれるんだ。私はもう必要ない人間なんだね…もう戻らなくてもいいよね…お兄ちゃん…』

綾香は寂しそうな顔でそう言うと天を仰いだ。

『待って！待ってくれ！俺には綾香が必要なんだよ！戻って来て欲しいんだ！』

俺が綾香へ向かって一生懸命に走った。しかし一步も動いてないはずの綾香に全く追いつけない。

『さようなら…お兄ちゃん…』

綾香は笑顔でさういうと目の前から消えた。

『綾香！綾香あ！』

俺はがくりと両膝を地面についた。一体どうなってるんだ？これは何なんだ？

魔法か？夢か？幻か？夢であつたら覚めてくれ…

『夢？これは夢じゃないよ、悟君はもう綾香さんとしても悟君としても生きて行けないんだよ』

野木の声！？俺の後ろから野木の声が聞こえた。  
おれは慌てて後ろを振り返った。しかしそこには誰もいない…  
そして真っ白な世界の中に真っ白なドアが一つ…

『何がどうなってるんだよ！』

俺は叫びながら急いで白いドアに駆け寄る。そしてドアのノブを  
掴もうとした。が掴めない！

右手を見ると俺の右手が消えている！？そしてどこともなく見知  
らぬ声が聞こえる…

『さようなら、悟君』

『え？何だよ！助けてくれよ！俺は何も悪い事なんてしてないじゃ  
ないか！』

俺はそこではっとして目を覚ました。

ゆ…夢か…

俺は大きなベットの所で横になっていた。って…俺…裸…なんだ  
けど…なんで裸なんだ？そしてここは何処なんだ？

ピンクに飾った部屋の中。ガラス張りの浴室…まるでそっち系の  
ホテル？

ゆっくりと俺は自分の体を確認する。見覚えのある裸だ…綾香の  
姿なのか…

しかし問題は何で裸なのかと言う事となんでこんな場所に居るの  
かっていう事…

俺が考え込んでいるといきなり先程まで人気の無かった俺の右横  
に人の気配がした！

『おはよう、綾香』

こ、この声は!?!?俺が恐る恐る顔を声のする方を見るとそこには再び大二郎が!?!?

『だ、大二郎!?!?』

『どうした?すごくうなされていたぞ?怖い夢でも見たのか?綾香、綾香って叫んでいたけど、お前が綾香じゃないか?夢の中で何かあったのか?』

大二郎は俺のおでこに自分のおでこをつけてそう言った。

俺は何故だか体が硬直して動けない。ゆっくりと視線だけを動かしてみると…

大二郎まで裸じゃないか!?!大二郎まで裸だという事に気がついた!

思わず絶句する……………

……………  
な、何が…??

『どうした綾香?顔が真っ青だぞ?』

大二郎は心配そうにそう言った。

『え、えっと…俺は…何でここにいるのかな?』

『え?覚えてないのかい?俺達は昨日やっと…×××××たんだ』

「ぎゃああああああ!」

俺は衝撃の一言で目の前が真っ暗になった。

ドザ!

体に衝撃が走ったかと思うと背中に痛みが…

あれ?何だろう?ここは何処だろう?さっきのは夢だったのか?俺はゆっくりと目を開いた。

すると見慣れた天井が…ここは部屋の中?ここは?綾香の部屋なのか?で…

慌てて自分の格好を確認する。パジャマ!?着てる…よ、よかつた…

よく見れば俺はベットから落ちている。

待て?俺は綾香のままなのか?自分の胸とあの部分を確認してみる。

ふにやりとした柔らかい感触と男の証拠が存在していないあの部分…やっぱり女のままだ…

というか…さっきまで見ていたのはやっぱり夢だったのか?夢…だよな?それにしてもリアルな夢だったな…

俺は体がべたべたな事に気がついた。

うわ…すっげー汗かいてるよ…べちよべちよだ…

それにしても危険な夢すぎたよな…特に最後が最悪だったぞ…まさに悪夢ってやつだな…

………

まさか綾香まで夢に出るなんて…それもあんな事を言っなんて…

綾香…

………

待てよ…これも夢っていう落ちは無いやな…

俺は立ち上がると自分のほっぺをつねった。

「あれ?痛くないぞ…こゝ、これも夢か!」

今度は俺は右手でおもいつきり自分の右頬を叩いた！  
バシン！という音が室内に響いたと思うとすさまじい痛みが頬に！

「痛あああい！」

すつげー痛かった！さっきは綾香の頬が柔らかすぎてつねつても痛くなかっただけなのか…

しかし…さっきの夢、思い出すだけでも背筋がぞつとする…マジでありえない夢だったよな…

忘れたいのに何故か鮮明に脳裏に焼き付いている。特に大二郎の裸が…

うわあああああ！はあはあ…わ、忘れよう…

俺は学校へ行く支度を終わらせて部屋で休んでいる。

どうも調子が悪い…きつと精神的なものだろうけど…

…俺は先程の夢を思い出す。

そう言えば夢で俺の正体が正雄にばれてたよな…確かに正雄は俺の事を疑っている…

絵理沙だって前に屋上で俺に告白をしたよな…今の感じからすると嘘だったのかもしれないが…

茜ちゃん達も騙してないとは言えないよな…いや、騙しているよな…

綾香だってこのままの俺の姿を見ると夢のような事を言いそうな気もするし…

…… 大二郎との事は…考えないでおこう…

という事は全てがありえないとも言えないか…うーん…

考えれば考える程に頭が痛くなる…

でも一人で悩んでても解決出来ないよな。今日学校に行ったら野



木に相談しよう…

俺は鞆を持つと部屋を出た。

「痛っ…」

階段を下りている途中で下腹部に痛みが走った。

くそ…またこの痛みだ…昨日の日曜日あまり調子よくなかったけど、今日も調子良くないな…

体も重くてだるい…あーもう…俺は完全に精神的に病んでるかも…

そして教室へ到着…

ふう…なんとか学校へは着いたものの…やっぱり体調不良だ…あー

あー…土曜日の一件もあるし…頭も痛い。

「おはよう、綾香」

気がつくと目の前に真理子ちゃんが立っている。

何だか真理子ちゃんに逢うのが久々なような気がするな。

「おはよう、真理子ちゃん」

俺はとりあえず挨拶を返した。

「あれ？どうしたの綾香？顔色が悪いよ？」

流石真理子ちゃんだ。俺の体調不良に即気がついた。

「えっと、ちょっと色々あつて疲れちゃって」

「そっか：土曜日も茜と一緒に出かけたんでしょう？疲れが溜まってるじゃないの？綾香は前からあまり体が強い方じゃないんだから、無理しないようにね」

「あ、うん、ありがとう」

真理子ちゃんはニコリと微笑むと自分の机へと戻って行った。  
優しいな真理子ちゃん：良い子だよなあ：茜ちゃんの次くらいに  
という茜ちゃんがまだ来てない。

俺はクラスを見渡したが、茜ちゃんも佳奈ちゃんも、あと絵理沙もまだ来てない。

何時も早く来てる絵理沙が来てないとか珍しいな。

「おっはよー！！」

元気の良い声が後ろの出入口から聞こえる。

この声は佳奈ちゃんかな？俺は椅子に座ったまま後ろを振り返った。

その瞬間！

「あーやーかあああああ！ボンバー！」

振り向いた目の前にいきなり佳奈ちゃんの右腕が！？  
やばい！いつもの攻撃だ！？避けないと！  
俺は体を反らそうとしたが、その瞬間に体に痛みが走る。  
こ、こんな時に…やば！避けれない！

首根つこに佳奈ちゃんの右腕がクリーンヒット！  
ドシャーン！という凄まじい音が教室中に響き渡ると同時に俺は椅子から転げ落ち机をなぎ倒し床へと転がった。

「きゃあああ！あ、綾香！？」

佳奈ちゃんは悲鳴を上げると青い顔をして俺を見て震えている。いつも強気な佳奈ちゃんだが、動揺して動けない様子だ。

「佳奈！何やってるのよ！綾香！綾香！？ちよつと大丈夫？頭うつてない？」

先程席に戻って行った真理子ちゃんが慌てて俺の所に走ってきてくれた。

俺はというと少し頭がくらくらしたが、特に体の痛みもない。取り合えずは大丈夫そうだ。運が良かったのか俺の頑丈な体のお陰か…

「うん、大丈夫だよ」

俺は真理子ちゃんの手に乗まってゆっくりと起き上がった。立つと多少は体に痛みを感じたがたいした事は無さそうだ。

「佳奈！本当に何やってるのよ！綾香は今日調子が悪いって見てわかんないの？顔色を見ればわかるでしょ！いつも相手にしてくれるからって、この所やりすぎじゃないの！？ねえ！佳奈！」

あの真理子ちゃんが教室中に聞こえる程の大声で激怒している。

俺はそんな真理子ちゃんを見て思った。普段怒らない子が怒ると怖い…

そして考える。茜ちゃんも怒ると怖いのだろうか…  
でも怒らせなきゃいいんじゃないのか？そうだ、そうだよ…俺  
は自分で自分を納得させた。

「謝りなさいよ！佳奈！綾香に！」

真理子ちゃんは佳奈ちゃんを睨みつけて怒鳴っている。

佳奈ちゃんの顔を見ると、真理子ちゃんに怒鳴られてなのか、動  
揺してなのか、今にも泣きそうな顔になっている。

「ま、真理子ちゃん、もういいよ…私は怪我也なかつたんだし」

俺がそう言っていると真理子ちゃんは俺をジロリと睨んだ。

「綾香も甘い！今回は何もなかったからいいけど、どうするのよ！  
もしも子供が産めない体にならたら！」

「え？」

俺は思わず動揺する。 いや、あの…俺は子供を産む体にはなり  
たくないんだけど…

っていうか男だし…って言っても今は女。

もしかして…俺って子供も生めるのか？…って無いよな…元は俺  
の体なんだし。

「佳奈！」

「っ…」

「綾香に早く謝りなさい！」

その瞬間、佳奈ちゃんの目から涙がぼろぼろとこぼれ落ちました。

「本当にいいから！真理子ちゃん、佳奈ちゃん泣いちゃってる」

「佳奈！泣いてもダメだよ！前だって茜を怪我させた事があるでしょ！もう忘れたの？」

え？何それ？初耳…

「おはようー」

今度は前の出入口から茜ちゃんの声が聞こえた。

「あ、茜ちゃんおはよう…」

俺は咄嗟に茜ちゃんに挨拶した。

「綾香、おはよう、あれ？佳奈！？何で泣いてるの？真理子？何その怒った顔…」

茜ちゃんは鞆を自分の席に置くと俺達のいる場所へと歩いてくる。

「えつくえつく…じゅ、じゅめ…ん…えつく…あ…綾香…じゅめん…じゅめん…んない」

佳奈ちゃんはぼろぼろと涙をこぼしながら小さい声でそう言った。なんか見ただけでも可愛そうになってきた…もついい加減いいよって言いたい。

「真理子、佳奈が何かやったの？」

茜ちゃんが真理子ちゃんにそう聞くと真理子ちゃんは先程あった出来事を茜ちゃんに話した。

「そっか…佳奈、今回は佳奈が悪いよ？佳奈もわかってるんでしょ？」

佳奈ちゃんは茜ちゃんにそう言われて泣きながら小さく頷いた。

「真理子も佳奈がこんなに泣くまで怒鳴らなくっても、佳奈だって子供じゃないんだよ？普通に言えばわかるんじゃないの？」

茜ちゃんは真理子ちゃんにそう言った。

「でも、中学校の時、佳奈がふざけて茜の背中押した時…茜はそのまま階段から落ちて額をぶつけて数針縫ったでしょ…」

真理子ちゃんはそう言うと茜ちゃんの額を見る。

茜ちゃんが階段から落ちた？額を縫ったって…そんな大げがしたのか？

「あれは私も悪かったんだから。あんな場所でふざけあつて。佳奈だってすごく反省してくれたし。私は何とも思っていないんだから」

茜ちゃんはおでこの右眉毛の上辺りを右手で触りながらそう言った。

よく見れば小さくだが傷が残っている。

「茜も甘いよね…私は…佳奈の事を思ってた言ってるだけなのに…」  
そういう真理子ちゃんまで泣きそうな顔になっている。

「真理子、真理子がすっごく真面目で正義感が強いのは私はよく知ってるし、佳奈の事だって誰よりも心配してるって知ってるよ。佳奈？佳奈も今回はよく反省して、ちゃんと綾香に謝って、今度はちゃんと考えてから行動しなよ？」

茜ちゃん…すごいな…冷静沉着でちゃんとまとめる。  
こんなにすごい子だったのか…

「あ…綾香…本当に…ご、ごめん…ね。私…いつも綾香が避けてくれるから…今日も避けるって勝手に思ってた…だから…本当に…ごめん…ひつく…ぐす」

佳奈ちゃんは泣きながら頭を下げ俺に謝った。

何だろつか、俺はこんな佳奈ちゃん見たくない…そう思った。

「佳奈ちゃん、いいよ、私もいつも避けてたから悪いんだし…あれ？悪くはないか？でもまあ…今日はたまたま私の調子が悪かったからこんな事になっちゃっただけだし、あまり気にしないで。私も気にしない」

「うん…ありがとう…綾香…」

「佳奈、ちゃんと反省してね」

茜ちゃんは優しくそう言った。

「うん…」

佳奈ちゃんは両手で今だに溢れ出る涙を拭った。  
そこに真理子ちゃんがハンカチを差し出した。

「佳奈…ほら涙…」

佳奈ちゃんは「ありがとう」と小さな声で言ってハンカチを受け取った。

「佳奈…佳奈も女の子なんだし、ハンカチくらい持ったほうがいいよ?」

真理子ちゃんも佳奈ちゃんに優しくそう言った。

「あ…うん…努力する」

努力って…佳奈ちゃんってハンカチ持っていない人だったのか。  
そっか…女の子は全員ハンカチを持っているものと勝手に思い込んでいた…

という俺も持って無いけど…今度から持とうかな…

「佳奈、思い切り泣いた! って顔になってるよ。そんな顔じゃダメだから一緒にお手洗いにいこ」

「うん…」

佳奈ちゃんと真理子ちゃんは教室から出て行った。

「茜ちゃん、ごめんね…朝から」



「ううん…私は別に何もしてないし…それより綾香、体は大丈夫？  
真理子の言うとおり顔色が悪いよ？」

「あ、うん、大丈夫」

「そっか、よかった…それにしても…真理子ちゃんがあんなに怒つ  
てるのって久々に見たね。やっぱり真理子ちゃんって怒ると怖いね」

茜ちゃんは笑顔でそう言った。という事で気になるのが茜ちゃん  
は怒るとどうなのか…

「あ、茜ちゃんは…ど…どうなの？」

俺は思わず聞いてしまった。

「え？私が怒るとって事かな？あれ？私…綾香の前で怒った事って  
無かったっけ？」

ぐああああ！墓穴を掘ってしまった！

「あ、えっと、いや、ほら、本気で怒ったら真理子ちゃんみたいにな  
るのかなって」

「え？うーん…どうなんだろう…自分の事って自分じゃよくわから  
ないし…」

「あ、ごめんね！変な事を聞いちゃって！もういいし、気にしない  
で」

やばいかった…自ら墓穴を掘ってどうするんだよ…

「綾香、そういえば綾香って最近は怒ると男みたいになるよね」

「え!？」

キタコレ!やばい!やはり墓穴を掘って自ら落ちてしまったのか!  
!?

早くどうにかごまかなさないと。俺が慌てていると俺の後ろから  
声が…

「記憶喪失になると精神的に不安定になるから、ある程度の記憶が  
戻ったとしても前と同じ人格を保てる場合もあればそうじゃない場  
合だってある。突発的に別の人格が現れる場合だってある。だから  
綾香ちゃんに男っぽさが出てもおかしくは無いかもしれない。でも  
綾香ちゃんは女の子だから男っぽいのとは別の意味でおかしいけどね」

俺が声の方を見ると何時の間にか絵理沙が机についていた。

「あ、絵理沙さん、おはよう」

茜ちゃんは絵理沙に気がつくやうと慌てて挨拶をした。

「おはよう、茜ちゃん」

絵理沙も笑顔で挨拶を返した。

「そうか、そうなんだ…じゃあ記憶が完全に戻れば前の綾香に戻る  
のかな？」

え？茜ちゃん？その質問って今の俺が前の綾香と違っつていう意味か？

「そうね、その可能性は大きいかもしれない。でも結果は戻ってみたいと解らないわね」

絵理沙は真面目にそう答えた。

「そっか…でも私、今の綾香も好きだし…今のままでいいけどね！ね、綾香」

やっぱり俺は前の綾香とは違つと茜ちゃんには認識されているみたいだ。

でもそれは記憶喪失のせいって事になってるんだよな…今は…

「え？あ、うん…」

「あ！そろそろ先生来る！じゃあまた後で！」

茜ちゃんは自分の席へと戻って行った。

そして佳奈ちゃんと真理子ちゃんも教室に戻ってきた。

俺は自分の席に着くとちらりと絵理沙の様子を伺う。

絵理沙はまったくこちらを見る気配も見せずに椅子に座っている。

「絵理沙？」

俺は小さな声で絵理沙を呼んでみた。

絵理沙は一瞬俺の方を見たが、すぐに視線を元に戻した。

な、何だ…その冷たい対応は…さっきは茜ちゃんの質問に俺が困っていたら助けてくれたのに…

わかんねー！こいつの考えてる事がわかんねー！

そして、俺の体調が戻らないまま放課後を迎える。

続く

## 第21話 ココロもカラダも？ 後編

放課後：

「綾香、本当に今日の朝の件、ごめんね…」

佳奈ちゃんが俺に向かって深々と頭を下げた。今日一日佳奈ちゃんは元気が無い。

俺は元気の無い佳奈ちゃんはやはり佳奈ちゃんらしくないと思っている。

だから大丈夫だと言う事と気にしないでほしいという事を再度念入りに佳奈ちゃんへ伝えた。

そして佳奈ちゃんはやっと元気になってくれた。

「私、今度から綾香への攻撃は当分控えるね。それじゃ今日は用事あるからもう帰っちゃうね。また明日ね！」

「うん！また明日ね！」

佳奈ちゃんはぶるんぶるんと両手を振りながら廊下へと出て行った。

よかった…元の明るい佳奈ちゃんに戻って…

しかし攻撃は当分とは言わずにずっと控えていいんだけどなあ…俺はふと教室を見渡した…絵理沙はもちろん速攻で居ないのだが、真理子ちゃんまで居ない。

でも鞆はあるから校内にはいるのだろう。生徒会の用事かな？

茜ちゃんはというと部活の集まりとかで早くに出て行った。

さて…さてさて…俺は野木か…今日は来てるのかな…

俺は鞆を持つてから教室を出た。  
廊下を歩いているとまた痛みが…精神疲労もピークかも知れない…  
この心配事の塊を何とかしないと体も精神力ももたない…

そして特別実験室前…

俺は勢い良く扉を開いた！っていう事も出来るはずもなく、ゆっ  
くりとこつそりと扉を開く…

ギギ…という音と共に扉が少し開いた。

「開いてる…って事は…野木は…」

ガラガラガラ…

俺は扉を開けて部屋の中を見渡した。

野木一郎が居ない…まだ学校へ来てないのだろうか？  
でもこの部屋に入れるって事は来てるって事だよな？  
俺は部屋の中に入ると野木一郎の机の横まで行った。

机の上は綺麗に片づけられていた。

今日は居ないのかな…うーん…どうしたものか…  
でも居ないんじゃ仕方ないよな…また来るか…  
俺が小さく溜息をついて教室を出ようとした時！

ガタ…ガタガタ！開かない…扉が開かない！

「ハハハハハ！その扉はもう死んでいる！」

な！？こ、この声は…

俺はゆっくりと後ろを振り返った。っと思ったら真後ろに野木が！

「これはこれは綾香君じゃないか。久しぶりだね」

野木一郎はそう言いながら俺の顔まで三十センチの所まで自分の顔を近寄らせた。

「何が久しぶりだ！二日ぶりだろうが！ええい！離れる！気持ち悪い！」

俺はおもいつきり野木一郎を突き飛ばした。はずだったのだが……  
ドン！という音はしたが野木一郎はまったく微動だりしない。

「おや？疲れてますか？綾香君」

何だよ……力まではいらねーし……っていうか疲れさせたのはお前だろ！

って怒鳴っても嬉しがりそうだし……もいい……

「はい、疲れてます」

「ふむ……じゃあやめましょうかね」

野木はそう言って俺の目の前からいきなり椅子まで瞬間移動した。

「お、おい！」

「何でしょう？」

「学校内で瞬間移動とかまじいだろ」

「え？この部屋は魔法結界が張ってありますし、気にしないで下さ

い  
「

まったく…魔法力が戻った途端にこうなるか…

「で？今日はどんな用事ですか？まさか僕にもう一度、綺麗で可愛かった女になって！とかそういう要望を言いに来た訳じゃないですよね？」

「馬鹿！なんで俺がお前の女姿なんか…」

まあ確かに…<sup>ほい</sup>輝星花は綺麗で可愛かったけどさ…  
って違う！そんな事じゃない！

「俺は別の用事で来たんだよ！」

「ほう…で？どんな要件でしょうか？」

まずはあれだ…大二郎と正雄の件を話さないと。

「最初にだけどな…」

俺が話を始めたと同時に野木は右手をパチンと鳴らした。  
すると俺の体がいきなりソファアの上に！

「うわぁぁー！」

ドサ！という音とともに俺はソファアに落ちた。

「お！成功！」



「痛ててて…成功じゃない！直線距離で2メートルなのに魔法で移動させるな！」

俺が怒鳴ると野木はちよつとむっとした表情になった。

「やってみたかった…それだけですが。悪いですか？」

「悪い…」

というか話の途中だったんだぞ…断ち切るような事をするなよな！

「おい、続きを話すぞ？いいか？」

「はい、どうぞ」

野木は両肘を机につき顎の下で両手を結んだ。  
そして不気味な笑みで俺を見ている。

「えつと…まず俺の正体が正雄にばれそうになった」

「おや？ばれそうに？と言うと？」

「えつと…」

「あ、そうだった。ちよつと待って下さい」

野木はまた俺の話を断ち切ると今度は俺の目の前まで歩いて来た。

「な、何だよ」

そして野木は真面目な顔で俺を睨むと右手をゆつくりと俺の胸に…え？胸に！？  
胸に野木の手の感触が伝わってくる。

「お、おい！お前！何するんだよ！こんな場所で！」

俺は慌てて野木の手を振り払おうとしたが、振り払えない！  
まるで粘着テープで貼り付けたかのように野木の手は俺の胸に張り付いている。

「まあ…黙って見てて下さい」

野木はそう言って目を閉じると訳のわからない呪文を唱える…  
十秒くらいだろうか？野木は呪文を唱え終わった。すると俺の胸がいきなり光り輝き始める！

「な、何だ！？どうなってるんだよ」

野木は何かを確認するとゆつくりと手を離す。すると光もだんだんと消えていった。

「今のは何だよ？何で光ったんだよ？俺に何をしたんだよ？おいおい！」

俺は矢継ぎ早に質問をした。

すると野木は一度深く深呼吸をして話を始めた。

「綾香君、君、やっぱり胸が大きくなってますよ。下着のサイズ合  
って無いでしょ？」

俺は咄嗟に両手で自分の胸を隠した。

「そ、そんな事はお前に関係ないだろうが！」

「ですが、下着のサイズはきちんと合わせないと今後……」

「わかった！わかったからさっきの質問に答える！」

野木は仕方ないなという表情で話しを始めた。

「綾香君、いいや今は悟君でいいですかね。悟君の体の中に入れたカードの事を覚えていますか？」

カード……そう言えば……そんなもんを入れたような気もする……

「ああ、覚えてる」

「そのカードには魔力を貯めるだけでは無く、別の色々な事に利用出来るんです」

え？それは初耳かもしれない……

「例えば……人の行動を魔法力によって記憶させて、後日その記憶を辿って見るとかね……まあそういう事をする場合には前提魔法も必要になるんですが」

何を言ってるんだ……記憶させる？そして前提魔法？よくわかんねえ……

「で、野木がさっき使った魔法は結局は何なんだ？」

野木はニヤリと不気味に微笑えんだ。

「今の魔法は君の行動記憶を見る魔法ですよ」

「え？行動記録…って何だよ？もしかして俺が大宮でお前から別れてからの今までの俺の行動を見る魔法…とか言わないよな？」

「いや、正解ですね…その通りです」

野木はそう言いながら数度頷いた。

「っていうか何だ？ていう事はだぞ…俺から野木に話をしなくっても、昨日の俺と大二郎の駆け引きとか、正雄に疑われた事とか、今日の朝の出来事とか全てばればれって事なのか！？」

「ああ…そういう事ですね」

「うわああ！心まで読まれてる！」

「いや、読んでないですよ…自然に入ってくるだけです」

「同じだろ！離れる！離れるよ！」

野木は残念そうに自分の机に戻った。

「それで実はですね、大宮であの清水大二郎とかいう男が現れた時、僕は君に記憶メモリーの前提魔法を唱えておいたのです」

「え？お前、あの時は魔法力が無かったんだろ？前提魔法なんて使えないんじゃないのか？」

「そうですね、確かに魔法力が殆ど無かった。だけど全く無いという訳ではありません。以前屋上で君に僕の素性を明かした時、僕は女のままで魔法を使った事を覚えていませんか？」

「そう言えば…確かに絵理沙が突進してきたのを魔法で避けたようにな…」

「それじゃあ…いつ俺に前提魔法を？」

俺は大宮での出来事を思い出していた。大宮で俺は…あの三人組に…

何かこいつに触られたとか…あ！俺が輝<sup>キラリ</sup>星花に抱え上げられた時か！？こいつ俺に胸を押しつけて、おまけに俺の胸に手をあてていた！まさかあの時！？」

「正解ですね」

「え？ま、待て！その距離でも俺の考えが自然に入るのか！？」

「まさか、今のは読みに行ったのですが？問題ありましたか？」

「ある！大いにある！つていうか人のプライバシーを覗くな！不可抗力は仕方ないとして！わかったか！」

「うぐ…怒鳴ると更に体調が悪化する…」

「悟君、顔色悪いですね。体調不良なのですか？」

「そつだよ！もう精神的にもぼろぼろだよ…俺の記憶を見たのなら

解ってるだろ…」

「まだそれほどちゃんと君の記憶を辿ってないんですが…ちょっと待ってて貰えますか？」

野木はそついうと目を閉じた。

そして二、三分が経過したくらいだっただろうが、ゆっくりと目を開いた。

「なるほど…まさか悟君が男性に対して恋愛感情を抱くとはね…そうですよ…女の子としての生活の時間も長いですし」

野木は何か納得するかのようには頷いた。

「そこ！勝手に納得するな！俺は困ってるんだよ！大二郎に…あんな変な気持ちになるし…正雄には俺が綾香じゃないんじゃないかって疑われるし…そうだ、おい、そう言えば何で俺と大二郎と一緒に帰らざる得ない状況に追い込んだんだよ」

野木はニヤリと不気味に微笑んだ。

「ふふふ…君を清水君と一緒に帰らせた理由かい？理由はですね…あの清水大二郎という男子は君にかなり好意があります。だからです」

「な、何だよそれは！俺に気があるって解つたら、普通は俺との仲を引き裂こうとか思わないのか？」

「僕が引き裂いても無意味が無いじゃないですか？関係を断ち切りたいのならば、悟君、君が自ら断ち切る必要があるんじゃないです」

か？僕はその場を提供しようとしただけです」

「何だこいつ…要するに俺から大二郎に付き合えないと言えっ言うのか？」

「でも俺はちゃんと付き合えないって言った。けど…」

「まあ君は君なりに付き合えないって言った様子ですが…しかし…」

「どうなってんだよ…俺は男なのに…あ、あれだぞ？元々そういう趣味はないからな！」

野木は呆れた表情で俺を見ている。

「そんな事はわかってますよ。あ、そうだ、桜井正雄君の件も厄介そうですね」

「そ、そうなんだよ！正雄の奴、何でか綾香のほくろの位置とか覚えててすごくピンチに追い込まれたんだ。それで昨日、俺は風呂に入って自分の体を色々調べたんだよ…」

と言った所で何だかすっごく冷たい視線を感じる…

野木を見ると蔑んだ目で俺を見ているじゃないか！

「それは女体の神秘についてですか？」

野木はそう言って俺の全身を舐めるように見た。

「見るな変態！違う！そうじゃない！俺の体の特徴についてだよ！」

「ほほう…で？何かわかったのですか？」

「すごい事実がわかったんだよ！俺の体にはほくろが無いんだ！これっておかしいだろ？一つもなんて…やばくないか？それだけじゃない！綾香が小さい時に火傷した時の左太ももの傷も、転けて傷が残ったはずの右足の傷まで無いんだぞ？綾香の特長を知ってる人間だと多分気が付くレベルだぞ！？」

俺はそう言うてはだけている部分だけを野木に見せた。

「なるほど…綺麗な体ですね…本当に傷一つない…ある意味まじいかもしれないですね…しかし、今更特徴を考慮した体にする訳にもいかないのです。何かあってもどうにか誤魔化すしかないですね」

誤魔化すって…何処まで誤魔化せるって言うんだ…

俺は野木が俺にカードを入れる時に言った言葉を思い出した。

『もし、このカードを体に入れている状態で蘇生魔法の事がばれたら、君の存在は消え去る』

そ、そうだよ…すっかり忘れてた…大二郎に変な気持ちになったのも問題だけど、よく考えたらこっちは俺の存在に関わる問題じゃないか！

「悟君、そんなに不安そうな顔をしなくてもいいですよ？」

俺が真剣に考えているのに野木の表情はいつもと変わらない。

「この状況で不安になるなって言う方がおかしいだろ！」

俺は思わず怒鳴った。



しかし野木は先程と同じで焦る表情も見せずに冷静に俺を見ている。

「野木！お前が言ったんじゃないか！蘇生魔法がばれたら俺の存在は消えるって…」

そう言つと野木から予測もしない返事が返つてきた。

「大丈夫ですよ、あれは嘘ですから」

「へ？」

俺は目が点になった。

「あれは悟君が蘇生魔法の事をばらさないようにわざと言つた嘘なんですよ」

「え？じゃ、じゃあ…ここにいる『綾香』が本当は俺『悟』だつてばれても？」

「ああ、消えませんか。しかしですね…人に知れ渡るといふのは本来はまずい事です。最悪の場合は君を何処か違う世界にでも連れて行かないといけなくなる可能性もあります」

違う世界って何だ？魔法世界にでも連れて行かれるのか？これは本当の事なのか？

野木の表情からして決して嘘では無いのだろう…ここで俺に嘘を ついても野木に何のメリットも無いしな。

しかしばれても消えないというのは少しは良かったのか？

「消えないと解ったからと言って、自ら話すなんていうのは止めてくださいな」

「ああ…自分からなんて絶対に言わない」

取り敢えずは正雄にはれないように努力して、もしもばれそうになったら再び野木に相談すればいいか…うん…そうだな…

という事で…もう一つの問題、大二郎に対するあの気持ちがどうして沸き起こったのかの原因が究明出来てないな…

俺が考え込んでいると野木が立ち上がり俺の横までまた歩いて来た。

「悟君？」

「え？な、何だよ。また心を読むつもりかよ」

「いや、そんなつもりでは無いですが…」

「じゃあ何だよ！痛っつ…くそ…」

俺がお腹を押さえて顔を歪めていると、野木はいきなり俺を右手一本で抱え上げた。

「ば、馬鹿！下ろせ！何すんだよ！」

しかし野木は下ろす気配などまったく見せない。

「やっぱりそうですね…最初に出会った時に比べると体つきもかなり女性っぽくなっている…それに…」

そう言いながら野木は俺の胸を凝視している。

「や、やめる変人！胸に触るなよ！」

俺は思わずそう叫びながら落ちないように何故か野木にしがみ付いてしまった。

「おやおや？僕に抱かれるのも満更じゃない様子ですね」

「ば、馬鹿！落ちないようにだよ！というか下ろせよ！」

野木は俺の話をまったく聞かずに空いている左手を俺の体の上に持ってくる。

「やめろ！触るな！」

「ふふふ…女同士じゃないですか？別にいいでしょ？」

「今お前は男だ…あれ？」

女声？あれ？抱えられていた位置がさっきよりもちょっと下がったような…

というか俺の左脇腹にふにゃふにゃと当たる柔らかい感触は？

俺は野木の顔を見た。すると！？

「悟君、これなら文句ないですよね？」

野木が輝星花けいせいになった！？

っていつか何時の間に輝星花けいせいになったんだよ！

じゃないな…戻ったんだよ！それもこの学校の制服！？絵理沙のか？

「え？いいえ、これは僕用に新しく作って貰った物ですよ」

こいつまた心を読みやがった！

「ええい！心を読むな！もう離せ！とつとと下ろせ！」

ジタバタと暴れてみたが、女になった力のそんなに無い輝星花きせいじからすら逃げ出せない。

「ちよつと魔法で君の体を調べます」

「へ？調べるって？」

野木は、じゃない輝星花きせいじはそう言うといきなり俺のスカートをばさりと捲りあげた！

「きゃあああ！何をするんだ！どこを触ってるんだよ変人！女だからって許されると思ってるのかよ！そ、そんな事をする俺は許さないぞ！だ、ダメ…あああああ…」

ここは略します

「俺、もうお嫁に行けないかも…」

「ふむ…やっぱりそうでしたか…もう始まっている様子ですし急いで

行きましよう」

「え？始まる？」

輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>は俺を抱えたまま特別実験室を出て何処かへと向かって行った。

「嫌だ…そんなの…嫌だ…」

「何が嫌なのですか？仕方ないじゃないか、悟君は女の子なんだし…」

俺は今保険室のベッドの上にいる。

小説ではわかりずらいと思うが、一緒にいるのは野木一郎では無く今も輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>だ。

今はそんな事を説明している余裕は無かったんだ…

そう、俺は困惑の最中で頭を抱えている。俺はあのあとにお手洗いに連れて行かれて…

それから何が起こったのか？それは俺から話したくない…

「でもこれで悟君も子供が産めるって事が解りましたし、悟君は女のままでも生きて行けるし子孫も残せるという事ですよ」

輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>はつくり笑顔でそう言った。

「馬鹿！そういう問題じゃないだろ！なんで男の俺に…せ、せ…せ

い……」

「生理ですよ？ハッキリ言えばいいじゃないですか？別に恥ずかしい事でも何でもありません」

「俺は男だ！十分に恥ずかしいわ！何で男なのに……俺は綾香と体が入れ替わった訳じゃないんだぞ？これは俺の体だろ？何でせ……生理とか……来るんだよ……」

「前兆はあつたのではないのですか？体調不良とか？悟君の記憶を辿った時にもそういう傾向は見えましたよ？」

俺の体調がここの所優れなかつた理由はどうやら生理の兆候だったらしい……

野木は今日の俺の雰囲気と記憶を辿って見てそうかなとすぐに思つたらしいが……

まあ……こいつも一応は女だしな……解るのかな？

「それにしても……いくら原子レベルからの蘇生とは言え、染色体まで女性として再構築されていたとは……絵理沙はすさまじいレベルの高度魔法を使いますね……正直ここだけの話、私じゃ到底この魔法を使うのは無理です。というよりも、このレベルの魔法を使える魔法使いを捜すの自体が無理に近いですね」

「そんなにすごいのかよ……俺にかかつてる魔法って……」

「ええ……思つた以上にね……」

輝星花は腕を組みながら俺をじつと見た。

「な、何だよ…」

「本当に元に戻せるのかちょっと不安になってきました…」

「ちょっと待った！何だそれ？おいおい！魔法力が貯まれば元に戻れるんじゃないのかよ！？」

「うーん…悟君にかかった魔法は先程も言った様に相当に高レベルな魔法です。あの絵理沙がもう一度同じ魔法を使えるかどうか…そこが問題なんです…」

「な、何だよそれ！？じゃあ何か？俺はもしかすると魔法力が戻ってもこのままなのか？綾香が見つかったらどうするんだよ！？綾香が二人になるじゃないか！おいおい…」

「本当の綾香さんが見つかった時には…そうですね、表面組織レベルであれば整形魔法でなんとかします」

「整形魔法？」

「ええ、性別転換魔法は高度魔法です。ただの性転換魔法ならまだしも、今回の様な原子レベルから再構築するような高度魔法、ましてや染色体まで再構築するような魔法は無理をして使って失敗すると悟君の命に関わります。ですから、もしも絵理沙が使えないと判断した場合は、本当の綾香さんが見つかったと同時に悟君の表面組織レベルだけを構成しなおして悟君を別の女性にします」

「って何だよ…輝星花は普通に淡々と話しているが…それって…俺は男にすら戻れないって事なのか！？」

「まったく別人？それも女として生きる！？有り得ない！そんなの」

無理だ！

「さて！その高度魔法を使わなくても男には戻れるんじゃないの？」

「そうですね、外見だけを男には出来ません。しかし結局は染色体は女性のまま。要するに女性が男のふりをするっていうレベルです。まあ今時点で悟君の染色体が男性のままだったらその程度の魔法でも十分元に戻れたですが…」

輝星花きせいけはふうと溜息をついた。

そんなに深刻な顔をするほどに難しい事なのか！？おいおい…

「い、一度は使えた魔法なんだぞ？普通に考えても使えるだろ！？」

「それは絵理沙に確認しないといけないね…でも絵理沙は現時点では魔法が封印されています。ですから今は確認のしようも無いのですが…」

「待った！ダメじゃないかそれじゃ！どうにかしろよ！責任持をつとか前に言ったじゃないかよ！」

「責任は最大限に果たせる様に努力はします。僕だつてちゃんと考えておきますよ。それはそうと大丈夫ですか？顔が真っ青ですが？」

輝星花きせいけにそう言われると下腹部がずんと重く感じてまた痛みが走った。

「折角…気が…散つてたのに…思い出させるんじゃないー！」



「今日は赤飯ですか？」

輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花<sup>か</sup>は笑顔でそう言った。

「何が赤飯だ！」

「だって、初めての生理じゃないですか。お祝いしないと」

まったく…気を散らしてくれてるのか冗談なのか馬鹿にしているのか…

「しなくていい…っていうかさ…話題がずれて何だけど、こんなのが毎月来るのかよ？」

「そうですね。毎月かどうかは個人差がありますが」

「お、お前にも来てるのか？」

「僕も一応は女ですし」

「でも男に化けてるじゃないか」

「化けていても、結局は女ですから。だからこそ君の症状を見てすぐに解ったのです」

「うーむ…」

「悟君、今日はもうここまでにしましよつか？体調だって悪い訳ですし」

「お、おい、まだ俺が大二郎に起こしたあの変な気持ちについても解決してないぞ？」

「悟君が清水大二郎に恋心を抱いた理由ですよね？それはなんとなく予測できました」

「え？な、何だ？どついう事だ？」

「生理前は精神的に落ち込んだりイライラしたりするものです。悟君の場合は情緒不安定な状況になって感情が高ぶった状態になった事によりああいう事が起こった。後は……」

「あ、後は？」

「体がそこまで完全に女性体になっている事を考えると、君は少しずつですが感情、そして心までが女性化してきているのかもしれませんが」

「え？何？お、俺が心まで女になる！？待て！待てよ！それは無いだろ？嘘だろ？」

輝星花（きせい）はまた小さく溜息をついた。

「まああとは悟君の自己管理ですね。自分でしか自分の意思をコントロール出来ません。女性としての感情が芽生えるのも君の隠れた意識なのですから」

「俺次第って事が……」

「今の状況だと男に戻る事をずっと考え続けるのであれば、常に男

としての自我を保つ努力は必要になりますね…」

「なるほどな…じゃああれか？俺が大二郎に対して感じたあの感情は、俺の奥底にある女としての感情なのか？」

「そうですね…しかし男としての感情、同性愛もありますし、本当に女性としての感情なのかは解りませんが、悟君の感情でそうなたという事実は変わりないですね」

「ど、同性愛！？無い無い！俺はそんなに変人じゃない！」

「え？でも君は越谷茜を好きなのでしょ？今の君にとっては同性愛では？」

輝星花は笑いが出そうなのか口を左手で押さえながら言った。

「そうやって揚げ足を取るな！くそ！それは男としての感情だ！だいたいこの姿で茜ちゃんには告白してねーだろうが！」

「はいはい、ムキにならないでいいですよ」

「お前がムキにさせたんだろ！」

「あはははは！」

輝星花はお腹を抱えて笑いだした。

「笑うな！おい！う…痛っ…ちょ、ちよっと…タイム」

輝星花は下っ腹を押さえて塞ぎこんだ俺を見て慌てて椅子を立つ

た。

そして先程とは打って変わるような心配そうな表情で俺を見る。

「悟君？辛いですか？思ったよりも重いのですかね…」

俺は男なのに生理痛と戦うはめになるとは…

保健室から出る時…

「綾香さん、これ差し上げますので」

野木一郎に戻った輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花は紙袋を差し出した。

「え？何だよこれ？」

「僕からのささやかなプレゼントですよ」

「え？プレゼント？って何だよ…」

「生理用品です」

「ぐふ！」

「今回は無料で差し上げますが、次回の分からは自分で買ってくださいね？」

生理用品… って… そっか… 必要なのか… って嫌だああ！

「ほら、そんなに嫌そうな顔をしないで、あと今日はもう帰ったほうがいいですよ」

「うう… わ、わかった…」

俺は紙袋を片手に下駄箱へと向かった。

その後、絶対にはれたく無いと思った俺にとっての重大事件は…  
ばったり下駄箱で茜ちゃんに出会ってしまい、紙袋が見つかり茜ちゃんにばれて…  
そして必要ない！って言ったのに家まで付き添ってくれた茜ちゃんから家族にもばれて…

結果

夜は赤飯でした…

男なのに赤飯…

悲しい…

続く

## 第22話 軽拳妄動ある意味記念日！？ 前編

男として経験の出来ないあの人生最大のイベントは無事に終わり、あつと言つ間に十一月に突入した。

そう！俺は無事にあの苦難の日々【生理の事らしい】を乗り切つたんだ！そして女としての一步を確実に歩き出したのだ！

………待った…歩き出してどうするんだよ！？男に戻るのに女になつてどうするんだよ！

とは思つたものの今の俺は人格以外の部分では男の部分が一切ない…考えればかなり危険な状況なんだよな。

そう言えば野木が言つてたな…女性ホルモンが大量に分泌され、女子に囲まれた環境で、そして自ら女として生活をしている。

こんな環境だとかかなり注意していないと完全な女として覚醒してしまうかもしれない。

しかし！俺は心まで女になりたいなんてまったく思つてない！

なのになあ…最近は自分で自分がおかしいって思う事もあるし…うーん…野木の言つ通りに男だという自覚を持つてがんばるしかないのか…

あ、そうだ！俺がこういうのもあれだけど、大二郎とのデートは未だに実行はされていないからな。

理由としては下記の二点が挙げられる。

その？、大二郎が地区大会で優勝したので、今度は県大会の練習や試合もあつて忙しい為に時間が作れない。

その？、大二郎の事を意識しない努力をしているが、そう思うえば思う程逆に意識をしてしまう為になかなか日取りを決定出来ない。

その？つて男としてはやばい理由だよな…まあそうなんだよな…

でもあれだ、あれだよ、この前の昼休みに少しだけ大二郎と話しをした時はドキドキ感は多少あったが、この前の時みたいに胸が苦しいという程ではなかったんだ。

だから精神的に落ち着いた時にデートを実行に移そうと思っっている。決して言い訳じゃないぞ！

さて…それはそれでいいとして…今日は何日だ？そう、十一月一日だ…

という事は…読者の皆様はご存じだと思いが、そう…毎月一日はラブレターの日だ…

前の一日も結構手紙が入っていたし【ほとんどというか一通以外は女性から】、今回も入っている可能性が大きいな。

と考えているうちに学校の自転車置き場に到着した。

実は今日は早起きして、他の生徒が登校前にラブレターの確認をする為に学校に早めに来たのだ。

予測通りこんなに早い時間だと生徒もまばらで自転車置き場もガラガラだ。

しかし…昔の俺はこんなに早起きなんてする事なんてなかったよな…

普段の日からゲームで徹夜なんて普通だったし…朝まで漫画も読んでたしなあ…

すっかり変わったな俺も…と…それはいいとして…

俺は少し緊張しながら下駄箱へと向かって歩く。すると下駄箱の前に女子生徒が居るのが見えた。

あれは誰だ？と思いつながら近くに寄ると、そこには真理子ちゃんが立っていた。

あれ？真理子ちゃん？腕に黄色い腕章をつけてこんな朝早くから何をやっているんだ？

「おはよー真理子ちゃん」

俺は挨拶しながら右手を振った。すると真理子ちゃんも直ぐに俺に気がついた様子で手を振りながら挨拶を返してくれた。

「おはよう、綾香！今日は早いね？」

「真理子ちゃんこそ、今日は何かあるの？」

「え？今日はね、生徒会の仕事で…」

真理子ちゃんがそう言ったと同時に真理子ちゃんの横を一人の女子生徒が通過した。

そしてその女子生徒は男子生徒の下駄箱の前に立ち止まると鞆から手紙を取り出した。

あれはラブレターかな？今日はラブレターの日だしな…たぶんそうだろうな。

俺がそう思っていると真理子ちゃんはその女子生徒の手を掴む。

「あなた、昨日の校内放送を聞いていなかったの？月末にもプリントを配ったんだけど見ていなかった？」

真理子ちゃんがそう言うとその女子生徒は「あっ」と声を上げた。

昨日の校内放送？プリント？俺には何の話だがさっぱりわからない…

そういえば、昨日の帰りのホームルームの時間に何かプリントを配っていた気もするな…

確か…そのプリントの裏に俺が綾香になってからプレイ出来てい



ないゲームソフトを書き出して…えっと…

そうだ！それを茜ちゃんに見られそうになったから速攻でゴミ箱に捨てた気がする…

何だ？それって重要なプリントだったのか？

「今月から一日に手紙を入れる風習は禁止になったのよ？男の子へのお手紙ならば直接ご本人に渡して下さい」

真理子ちゃんがそう言うと、女の子は顔を赤くしてそそくさとその場から居なくなった。

なるほど…今月からラブレターの日は無くなるのか？そうか、なるほどね…

確かに変な風習だよな…それも俺が三年間気がつかなかったというイベント…

まあいいか…無くっても俺は困らないし。いや、無い方が助かる！

「ねえ真理子ちゃん、ラブレターの日ってこれから先は無くなるの？」

困らないしと言いつつも確認してしまう俺…

「あ、うん、ちょっと色々なクレームとか問題があってね」

なるほど…クレームとか問題があって無くなるんだ。

「クレームとか問題って何？」

真理子ちゃんは俺をちらりと見ると、少し声のトーンを落として話しを始めた。

「えつとね…ここで男子生徒が大声で女子生徒に告白したとか…体育祭の後に大量の手紙が床にばらまかれたとか…」

…何だろう…未に覚えがあるぞ…それ…

「えつと…真理子ちゃん…それってまさか…」

まさかというか…どう考えても俺の事だよな…

「で、でもね、それだけが要因じゃないのよ？あと、こんな風習は無くっても支障ないと思うし！あれだよ？綾香の責任じゃないよ？本当に本当だからね」

真理子ちゃんはあわふたと懸命にフォローしてくれている。

しかし俺が原因だとハッキリ言ってる様にしか聞こえない。

「ごめんね真理子ちゃん、どう聞いても私の事だよね？でも大丈夫だよ？私はそんな事で凹む程弱くはないから」

俺はそう言つと真理子ちゃんは少し安心したような素振りを見せた。

「でも本当に綾香だけが原因じゃないんだよ？だいたい大声で告白した生徒と大量に手紙を入れた生徒に問題がある訳だし。だからそつちを禁止にしようとしているの」

「なるほど…なんか大変そうだけどがんばってね」

俺はそう言いながら下駄箱を開けた。

パサ…

何か白い封筒の様な物が床へと落ちる…

「え？」

俺は床に落ちた白い封筒を見て思わず声を出してしまった。

真理子ちゃんもその封筒を見てびっくりした表情になっている。

「ま、真理子ちゃん…」

「何で？何で綾香の下駄箱に封筒が？私は今日の校門が開いた六時からここに居るのに…何時の間に誰が封筒を入れたの！？」

真理子ちゃんは驚きながら、そして不思議そうな顔で言った。

「でも入っていたのは事実だよね…という事は…入れたのは今日じゃないって事かな？」

「さっぱり解らないわ…昨日の夕方なのかな？それとも真夜中？」

「と…とりあえず内容を見てみる…」

俺はそう言って封筒を拾うと開封して中に入っている白い紙を取り出した。

そして内容を見る…それはやはりラブレターだった。それも見たことのある字体…

姫宮綾香様

僕は姫宮綾香さんに告白をする準備が万端になりました。

つきましては今日の放課後にマミーストアの裏まで来て下さい。  
約束しましたので宜しくお願いしました。

うーん…これはいつも俺にラブレターをよこすあの子だよな…この字と文章の特徴を見たら即わかる…

今回は告白が告発になっていないのはいいんだが、何時のまにこいつと逢う約束とお願いをされたんだ？っていつか待て！いきなり今日なのか！俺の都合はどうなるんだ！

……

まあ…予定はないけど…行くか…行かざるべきか…どうするかな…

「綾香、どうしたの？そんなに考えこんじゃって？」

「あ！えっと、あはは…何でも無いよ」

俺はラブレターを鞆の隙間から中に押し込んだ。

「ねえ、それってラブレターじゃないの？」

「あ、うん、なんか塾の勧誘みたい」

「え？塾の勧誘？」

「あ！いや、大丈夫だよ！きっと私の下駄箱しか入ってないはずだし！」

「?????綾香にだけ？塾？」

し、しまった！言い訳にはあまりにも無理があるぞ…  
だがしかし！ここまで言ったからには強行突破だ！

「う、うん！多分そう！ほら見て！」

バン！バン！バン！バン！

俺は自分の上下左右隣の下駄箱の蓋を開けた。

「ほら！入ってないでしょ！」

「確かに…入ってないね…って…本当に塾の勧誘なの？おかしくない？綾香にだけって？」

やばい…すっげー疑われてる！当たり前だよな…言い訳に無理がありすぎる。

という事は…逃げるが勝ちだ！

「あ！時間が！えっと！教室先に行っておくねー！」

「え！？ちよっと！綾香！まだ時間って余裕すぎるでしょ！？」

俺は真理子ちゃんの台詞に聞く耳も持たずに慌てて下駄箱から立ち去った。

ふう…やばかった…

教室に到着。やはりというか教室には生徒は一人もいない。

人気の無い教室に入ると、俺は自分の机に付いてふと考えた。

何でだろう…本当に何でだろう…

何で俺は真理子ちゃんに封筒の中身がラブレターだったって教え

なかつたんだ？

別に教えたつていいじゃないか…

あれか？きつと真理子ちゃんにラブレターだって言うつとすごく心配されそうな予感がしたから？

それとも…俺は純粹にラブレターを貰ったつて事を秘密にしたか  
つたのか？

……………  
それつてどういう事だよ…

……………  
ラブレター…貰つて…嬉しい？のか？

違う！違う！單純に迷惑をかけたくなかつたからだ！

そうだ…そうなんだ！ま、まあ…深く考えない事だな…

しかし…この手紙の差出人もついに俺に告白するのか…

まあ…とつととケリを付けておく方が絶対に俺の為だし…良かつたのかもしれないな。

……………  
でも…どんな男子かなあ…

格好いいのかな？体格は大二郎よりもいいのかな？

スポーツはしてるのかな？頭いいのかなあ？

年上かな？何年生だろ？  
でも…年齢なんか関係ないよな…やっぱり優しい人がいいよなあ…

……………  
待て…何だこの思考は…違う！違うだろ！俺は告白を断るんだろ

？断るのに何を考えてるんだよ！

…ああ…俺の思考が壊れてるよ…

がんばれ悟！お前は男だ！気合いで乗り切れ！

俺は目を閉じて心の中で言い聞かせた。

そして目を開けて鞆からノートを取り出すと間にさっきのラブレ

ターが…

しかし…本当に何時この手紙を俺の下駄箱に入れたんだ？  
待てよ…それに何で放課後にこの学校内では無くて近くのスーパーの裏で待ち合わせなんだ？そんな訳の解らない場所を指定するんだ？謎だな…

そんなこんなで放課後になった。

右の席を見ると超特急帰宅の絵理沙が瞬間的に姿を消している。

早い…早すぎる…最近はその速さに極みすら感じる…

つと…俺も早く行かなきゃ…

「綾香あ！」

俺が鞆に教科書を仕舞い込んでいると横に佳奈ちゃんが声を掛け  
てきた。

「ねえねえ！今日さ、今から時間ない？一緒にマックでもいかない  
？」

佳奈ちゃんは笑顔で俺をマックに誘ってくれている。

しかし俺には重要な任務？があるのだ！

「ごめんね…今日は予定があつて…」

「えー？そうなの？綾香でも予定あるんだ…」

でも…って…何か素そっ気けなく失礼な言い方をされた気がする…

「ま、まあ…たまにはね」

「ふーん…誰かに放課後に呼び出されたとか？」

ギク！な？何だこのニュータイプ女子は！冗談にでもそんな台詞はなかなか言えないだろ？

やばい…すこし動揺してしまった…顔に出たかな…

「え？いや、そんな事ないよ？うん、じゃあ私行くから」

「わかった！また今度ね！」

ふう…大丈夫そうだな…よし…

それにしても今日の佳奈ちゃんは素直だなあ？

「うん、佳奈ちゃんまたね」

俺は教室から急いで廊下に出た時、後ろから誰かの視線を感じた。後ろを振り返ると、教室から出た所で佳奈ちゃんがじっと俺を見ている。

俺は佳奈ちゃんに手を振るとそのまま急いで下駄箱に向かった。

マミーストアか…ここから自転車で二分くらいか…

マミーストアの裏に到着。



裏といつても道路を四方向に囲まれているこのスーパーは裏に簡単に来る事が出来る。

近くにはスーパーの駐輪場もあるし、道路も目の前にあるので決して人気が無い場所では無い。何が言いたいかというと…ここは告白には不向きだ！

呼び出す場所が最悪すぎる…

しかし、よく考えてみれば俺も律儀な奴だよな…

差出人も書いていないような手紙なのに何でわざわざ約束を守っているんだ…

…違った…約束なんてしてねえし…

別に無視したってよかつたんだよな…俺も本当に人がいいというか…何というか…って…今になって考えたら時間指定も無かつたぞ？

俺はもう一度手紙の内容を確認するが、表にも裏にも時間の指定が無い。

うーん…呼び出すなら時間の指定くらいしろよ…考えてみれば放課後ってこの先の真夜中までずっとじゃないか…

この差出人の考えている待ち合わせ時間っていつたい何時なんだ？五時か？六時か？七時か？まつたくもって詰めが甘い差出人だよ…まあいいか…三十分経つても誰も来なかつたら帰ろう。

そんな事を考えながらスーパーの裏に一人で立っているとそこに一人の男の子が自転車であつて来た。ヘルメットを被っている所を見ると中学生かな？

その子は俺をちらりと横目で見ながら俺の横を通過してゆく。

ん？まあまさかこの子じゃないだろうな…

俺がそんな事を考えていると、その中学生は十五メートルくらい先の駐輪場に自転車を止めた。

え？もしかしてこの中学生がまさか俺に手紙を出したのか？ま、まさか？無い無い…

俺は横目でその男の子を見た。するとその男の子は自転車のカゴにヘルメットを置くと俺の方へと歩いてくる。

男の子は身長が165センチ位で黒縁の眼鏡をしており、すごく真面目そうな子だ。

すこし華奢きゃしゃなイメージさえ持つてしまうような体型だが、体のラインが綺麗で、何かスポーツをしているのdarou。見た感じだととても知的で大人しそうな子だ。

という観察はいいとして…やっぱりこの子が差出人なのか？

「あの…」

「はい？」

「僕です！姫宮先輩！」

男の子は右手を自分の胸の前でぐっと握りながら力を込めてそう言った。

「え！？」

誰だよ…何だか知らないけど、いきなり僕ですよ【知り合いなんだよ】宣言されたぞ！？

それもかなりの力の入れじゃないか！？

「僕ですよ！覚えていないんですか？」

「え、えつと…」

いや…覚えていないのかって言われても覚えていない所か君を見た事すら無いんだけど…

しかし綾香を知っているという事は間違い無く綾香とは知り合いなんだよな…

うーん…でも綾香の後輩に仲の良い男の子がいるとか聞いた記憶はないし…

「そんな…冗談ですよ？本当に覚えていないんですか？」

その男の子はかなりのショックを受けたような顔でそう言った。

うーん…そんなに残念そうな顔をされても困るな…とりあえずは記憶喪失と言いつくすか…

「ごめんなさい…私…記憶喪失で…」

「それは知ってます…でも…全然…まったく覚えはないなんて…思っていますでした…」

何だ？こいつ、何で綾香が記憶喪失だって知ってるんだ？という事は…家族が知り合いに俺の事を知っている奴がいるのか？

「う、ごめんなさい…本当に記憶が無くて…」

そう言うとその男の子はガツクリと肩を落とした。  
しかしすぐに笑顔になると俺に話しかけてくる。

「あはは…仕方ないですね…だって姫宮先輩が悪い訳じゃないですから…」

しかしその子の笑顔の瞳の奥にはかなりのショックを受けている様子が見える。

そりゃそつだよな…綾香に告白をしようとしてたのに、綾香が自分の事を覚えていないなんて…かなりショックだよな…

「あの…あの手紙は貴方が？」

「あ、はい…」

やっぱりこの子なのか…でもどうやって下駄箱に入れたんだ？

「あの…君は中学生でしょ？どうやって下駄箱に手紙を？」

その子は言っていていいものかどうなのか迷ったのか、直ぐには返事をせずに考えていた。

しかし、考えが纏まったのか、小さく頷くと経緯を話してくれた。俺はその事実を聞いて驚いた。実はこの子は桜井正雄の親戚【いとこ】らしい。だから今までずっと正雄に頼んで手紙を入れて貰っていたという事だ。それも綾香が高校に入学してから毎月…

という事は綾香はこの子からずっとラブレターを貰っていたという事になる。

今回の手紙は三日前に正雄に渡したらしく、予測では昨日の夕方に正雄が下駄箱に入れたのであろう。

「先輩？」

「え？あ、何？」

そう言えばこの子の名前…まだ聞いてないな…何ていう名前だろ

う。

話の合間に聞いてみるか。

「今日…実は先輩に告白しようと思って来ました」

まあそうだろうな。それしか無いだろ。手紙にも告白するって書いてあったしな。

「うん」

「でも…何だか告白っていう感じじゃ無くなっちゃいましたね」

確かに…

「じゅめんね…」

「でも！僕はやっぱり先輩の事が好きだし、こんな事くらいじゃ諦められません！だから…今までの事が全てリセットされてもいいです！僕の事をもう一度覚えてください！」

男の子は大きな声でかなり力説している。

いくらスーパールの裏でもこれほど大きな声で力説されると人目が気になる。

ちよつと音量くらいは抑えて貰わないと…

「あ…えつと…それはいいけど、少しだけ声を…」

俺がそう言うと男の子は周囲の視線を集めているとわかったらしく、顔を真っ赤にして俺に謝って来た。

「う、ごめんなさい…」

うわぁ…何この子…なんかかわゆいよ…

………かわゆい？

え？な…何だ？かわゆいって…

あ、相手は男だぞ！それも年下！今日が初対面！

悟！お前だって男だろうが！自覚！自覚！あと名前！

「えっと…あ、そうだ…名前…教えてもらっていい？」

俺がそう言った瞬間に、男の子の目が点になる。

「え？…名前って…もしかして僕の事…本気でまったく覚えてないのですか？」

覚えているもなにも、今日が初対面だしな。

しかし…これはこの子にはかなりのダメージか！？

「あ…本当にごめんなさい！忘れない様にするから教えて！」

俺は両手を合わせ男の子に謝った。

「謝らなくってもいいですよ先輩…仕方ないです。先輩のせいじゃないし」

うわ…なんていい子なんだろう…なんかぎゅってしてあげ…

たくない！何だそれは！

「僕は桜井一彦です。ちゃんと覚えておいて下さいね」

桜井…正雄と苗字も同じなんだ…なるほど…

「桜井一彦君ね。うん！覚えてたよ」

「ありがとうございます！」

さて…これからどうするか…とりあえずはこの子からの告白も無いし…名前も教えてもらったし…

「あの…先輩…」

「え？何？」

「少しだけ話をさせてもらってもいいですか？」

話？話か…まあいいか…時間もあるしな。このままさようならだ  
とこの子も可愛そうだしな。

「うん、いいよ」

俺と一彦君は近くにあった店員が休憩に使っているのか、座り心地のよさそうな小さなコンクリートブロックに座った。

そこで一彦君は俺に色々な話をしてくれた。

中学一年の時にこの町へ引っ越して来た事。小学校から空手をやっている事。

そして俺を綾香だと思っ少しでも記憶が戻るようにと中学時代の綾香の事や、一彦君の綾香に対する思いなんかも話をしてくれた。

一彦君はすごく真面目で、そしていい子だ。話をしているだけでもそれが伝わってくる。

綾香もこんな子に好かれて幸せだとは思っ。

しかし！綾香の彼氏として認めるかは別の問題だ！って俺が口を出すような問題じゃないんだけどな。

そして話題が別の方向へと変わった。

「姫宮先輩…こんな事を姫宮先輩に聞いても仕方ない事かもしれないのですが…何でまーくん【正雄の事】は空手を辞めたんでしょうか…」

一彦君の顔は先ほどとは打って変わって暗い沈んだ表情になる。

正雄が空手を辞めた理由か…俺は知っている…俺もそれが理由で空手を辞めたんだからな…でも…その理由は俺と正雄しか知らない…そう簡単には話せない…

「僕はまーくんが目標だったんです…ああいう風な強くて優しい男になりたかったんです。そうすれば姫宮先輩にだって釣り合う男になれるかと思ってたのに…」

何か正雄が憧れだという台詞の中でさり気なく綾香の彼氏候補をアピール気がしてる。

「ごめんなさい。こんな事を先輩に聞いても知ってる訳は無いですよね？でも…僕はまーくんが空手を辞めたのが納得出来ません。理由も言ってくれないし…」

正雄の奴…この子には理由を言っていないのか…まあ俺も綾香に言っていないけどな。

「まーくん…空手が嫌いになって辞めたのかな…僕も…もう辞めようかな…頑張ってるけど強くなれないし…姫宮先輩に釣り合う男に



なれそうもないし…」

一彦君は大きなため息をつくのがつくりと肩を落とした。  
何だよ…男の癖にくよくよしやがって…そんな言い方しやがって…  
さっきまで綾香【俺】にこんな状況になっても好きだし、諦められないって言うてたじゃないか！

俺は一彦君の台詞に霧鐘に腹が立った。そして一彦君を見ているとほって置けない気分になる。

くそ…ここはこの子に空手を辞めた理由を話すべきか？

でも…本物の綾香が正雄が空手を辞めた理由なんて知っているはずもない…

ここで話すと俺にとってメリットは無い…ただリスクがあるだけだ…

でも…この子がここで空手を辞めるのは勿体ないしきつと理由を聞けば辞めないだろうし…妹の綾香を強く思っているその気持ちを…捨てて欲しくない…

よし…俺は周囲を見渡して誰も居ないのを確認すると一彦君へ話しを始めた。

「一彦君、聞いて！正雄は…いや、桜井先輩はね、嫌いで空手を辞めたんじゃないの！」

「え？」

一彦君はきよとんとした表情で俺を見た。

「桜井先輩は今でも空手はやりたはずだよ！」

「じゃ、じゃあ何で…」

「私の通っている高校の空手部は正直そんなに品行の良い部じゃなかった。桜井先輩が一年の時もいじめに近いような仕打ちも結構されて…でも大二郎も、じゃない、清水先輩も、桜井先輩もそれに耐えてがんばったの」

「そんな話…まーくんからは全然聞いてないです」

「そうだろうね、桜井先輩の性格からして話さないだろうね。一彦君や周囲の人には心配をかけたくなかったんだと思うよ」

「そうかもしれないですね…あの…で、それでどうなったのですか？」

「えっと、それでね…私達が二年に上がった時、下級生が新入部員として入ってきたの」

「え？私達って？先輩は空手部なんですか？それにまだ一年ですよね？」

あ！しまった…リアルな俺の話を混ぜてしまった！っていつかよく気が付くな…

ここは修正をしなければ…

「ごめん、えつと言い方を間違っただけ、私達じゃなくて【私の兄】と清水先輩と桜井先輩って事」

「ああ…そういう意味ですか」

ふっ…大丈夫そうだな。

「あ、それで…新入部員に対する上級生のいじめが酷くって…桜井先輩と私の兄は上級生相手に喧嘩をしてみましたの…結果的にはいじめをしていた先輩はそれが原因で部活を辞めたのだけど、私の兄と桜井先輩は部には居られなくなっちゃって…」

「そうだったんですか…そんな事が…」

「うん…」

「でも良かったです。まーくんは空手が嫌いになった訳じゃなかったんですよね？」

「あ、うん、桜井先輩は今でも空手が好きだよ」

「そうですか！ありがとうございます！」

「ううん…一彦君が桜井先輩の事を誤解してたら嫌だし、それに…一彦君には空手を辞めてほしくないから」

「え？だ、大丈夫です！今のお話を聞いて僕は空手を続ける事を決めました！姫宮先輩に釣り合う男になる為に！」

よし…何とかなつたみたいだな…一彦君も元気を出してくれたし！まあ…最後の一言は必要ないけどな。

よし！俺が話したい事は話したし、そろそろ行くかな！

俺はコンクリートブロックから立ち上がって一彦君の方をちらりと見た。

「一彦君、がんばってね！君なら強くなれるよ」

「は、はい！」

うん、いい子だ。真面目だし、きつと強くなれる！  
さて…そろそろ本気で帰るかな。

「じゃあ、私はそろそろ帰るから」

俺はそう言っで一彦君に手を振ると自分の自転車の方へと歩き出した。

すると後ろから一彦君が大きな声で俺を呼び止めた。俺はその大きな声に驚いて一彦君の方へ振り返る。

「僕！先輩のいる高校に入ります！きつと入学するまでに強くなります！だから！だから！先輩が認めてくれる位に強くなったら…僕と付き合ってください！」

一彦君の大きな声は辺りに響き渡り、周囲に居た人々が一斉に俺と一彦君を見る。

「先輩！約束ですよ！」

や、やばい！すっげー注目の的じゃないか！

青春ドラマじゃないんだぞ！？そんな大声で変な宣言をしないでくれよ…

「わ、わかったから、声！声が大きいよ！」

俺が思わず言ってしまったその一言で一彦君が満面の笑みを浮かべる。

え？何その嬉しそうな顔：あ！し、しまった！俺が「わかったから」とか言ったらOKだつて意味に捉えたのか！？

何やってんだよ俺：早く言い直さないと！

あーくそ！顔が熱い！きつと俺の顔は真っ赤なんだ：

「か、一彦君！で、でも！入試に失敗したら付き合えないからね！」

「は！はい！勉強して絶対に受かります！今日は本当にありがとうございました！」

一彦君は俺に一礼すると自転車の方向へと走って行った。

ふう：これで何とか：って：待てよ：

え？ち、違うだろ：何か違うだろ：何を言ってるんだよ！？「入試に失敗したら付き合えないからね」って、あれじゃ入試に受かったら付き合うつて言ってるようなものじゃないか！

や、やばさが百倍になった！早く付き合えないって言わないと！！

俺は一彦君のいる駐輪場へ向かって走る。

一彦君はヘルメットを被ると自転車に跨って俺とは反対方向へと進み始めた。

やばい！このままじゃ追いつかねー！逃げ！

俺は懸命に走る！そして十二メートル位走った所で「ガシャーン！」と目の前の自転車が俺の方向へと倒れた。

「うわー！」

俺は慌てて自転車を避けると自転車の倒れて来た方向を見るとその物陰には：

「か、佳奈ちゃん！？」

そこには何と佳奈ちゃんがいた！

「い、いつからそこに！？」

佳奈ちゃんはぺろりと舌を出すと、ばれたかという表情で俺の顔を見る。

「ばれちゃった！っていうかさ、綾香は一彦君を追ってたんじゃないの？」

そ、そうだ！一彦君は…

俺が一彦君の居た方向を見るとそこには既に一彦君の姿は無かった…

「あーあー…行っちゃったねー残念」

うー…佳奈ちゃんが邪魔したからじゃないか…

それに何でここに佳奈ちゃんが居るんだよ…

って待てよ…さっきの会話…全て聞かれたとか？

「あ…あの…佳奈ちゃん…」

「え？何？」

「ここで何をしてたの？」

「え？別に物陰に隠れて綾香と一彦君とのラブラブ会話を聞いてた訳じゃないよ？」

うがぁ！やっぱり聞かれてた！それもラブラブとかすっげー勘違

いされてるし！

「聞ってるじゃん！百パーセント聞ってるじゃん！」

「あれ？ばれた？まあいいか…でも事実でしょ？ラブラブ会話とかさー？いいねー綾香はモテモテだねー」

なーんーだーよー！佳奈ちゃんああん！

「え、えつと、ラブラブ会話なんてしてないし！普通の会話だったでしょ？ねえ！あれって普通でしょ？」

「えー？一彦君に告白されて、空手を辞めようとするのを留めさせて、最後には高校に入学したら付き合っただけってあげるといふ会話の何処が普通なの？」

ふ…普通じゃねえええええ！

く…くそ…ここは…取り合えずは佳奈ちゃんが他言しないように言うのが先決か…

一彦君にも佳奈ちゃんにも誤解は後日解くとして…  
今は動くラジオ、音速で広がる噂の源、歩く広報部隊の佳奈ちゃんに釘を刺しておかねば！

「えつと…佳奈ちゃん…」

「大丈夫だよ！私は他言しないから！それじゃ帰るね！」

「え？」

佳奈ちゃんはそう言つと倒れた自分の自転車をおこすとそれに跨

った。

「ちょ、ちよつと！佳奈ちゃん！待って！」

「モテモテ綾香！まったねー！」

佳奈ちゃんは俺の制止も聞かずにすごい勢いで自転車を漕いで消えて行った。

うーむ…他言はしないって言ってたけど…

あの佳奈ちゃんだとてもじやないが信用出来ない…

でももう行っちゃったし！俺は携帯を持ってないし…

あー！もう！くそー！仕方ないな…明日学校に行ってから直ぐに佳奈ちゃんを捕まえて再度釘を刺そう…

ふう…俺は小さくため息をついてから自分の自転車のある場所へと歩き出した。

くそ…色々と失敗したなあ…

一彦君はいい子だけど…まさか付き合つとか無理だし…

よりによって佳奈ちゃんに聞かれてしまったし…

あ…もしかして…俺が教室を出る時に素直に送り出したのは…最初から俺の跡をつけようとしていたのか！？やけに素直に引き下がったと思っただんだよな…

俺がそんな事を考えながら歩いていると「ドン！」と誰かにぶつかった。

「あ、す、すみません！」



俺は咄嗟に謝り、そのぶつかった相手を見た。

「えー!? な、何で!? さ、桜井先輩がここに! ?」

俺がぶつかった相手は正雄だった。

正雄は真剣な顔で俺を見ている。俺は慌てて正雄から目を逸らした。

俺の手を正雄はいきなりギュツと握るとぐいつと引つ張る。そしてスーパ―の物陰へと引つ張り込んだ。

「な、何ですか! ? 何するんですか!」

俺は正雄とは顔を合わさないようにしてそう言った。

目を合わさなくてもわかる…正雄の只ならぬこの感じ…何かやばい気がする…

まさか…さっきの会話…正雄にも聞かれてたのか?

だとすると…かなりやばいだろ…どうする…どうするんだよ…

くそ…こうなったらどうにかして誤魔化す! ?

いや…もしかするとさっきの会話を聞いてないかもしれないんだ

ぞ…自ら墓穴を掘る事にも成りかねないだろ…

…でもこの現状は! ? 何でここに正雄が居て、何で俺をこんな物陰に引き込むんだ! ?

俺はゆっくりと顔を上げて正雄の目を見た。

すると正雄も俺の目をジッと見る。それと同時に正雄が口を開いた。

「姫宮、お前…」

俺の心臓は緊張でドキドキと激しく鼓動していた…

続く

## 第23話 軽拳妄動ある意味記念日！？ 後編

正雄の台詞が止まったまま時間だけが流れる。

この瞬間、ほんの数秒だったはずだったが俺にはすごく長く感じた。

正雄は無言のまま俺の全身を足元からゆっくりと流すように見る。「ごくり」……唾を飲み込む音がかすかに聞こえた。

緊張しているのか……正雄の奴も……

それは俺に対して言いたい台詞に重みがあるからなのか？

正雄の緊張した表情を見てそう思った。

ここまでできて改めて思う……やっぱり俺は綾香じゃないって正雄に疑われている。

この前の自転車置き場で本当の綾香との決定的な違いを指摘された。

そして今日、俺は綾香が知りえない事を一彦君へ話してしまった。

正雄はそれを聞かれたのかもしれない。いや聞いていたのだろう。

聞かれていたとすれば……確実に綾香じゃないと疑うはずだ……

……

だけど……俺は認める訳にはゆかないんだ。

俺の今のこの存在。これは大きな嘘かもしれない。

だけど綾香の為にも俺は綾香でないと駄目なんだ。

いくら輝星花（まひかり）が正体がばれても大丈夫だって言っても、一人にばれたら皆にばれるのも時間の問題になるはずだ。

だからこそ、それが例え正雄であっても正体がばれたら駄目なんだ。

せめて綾香が戻ってくるまでは……

正雄は何かを言い出したい表情をしているが言い出せないでいる。まだ大丈夫かもしれない……今のうちに逃げよう、ここから早く

逃げよう。

「桜井先輩、用事が無いのなら私は帰りますね」

俺は冷静さを装い正雄にそう言うとその場から立ち去ろうとした。正雄から目を逸らしてくるりと方向転換をした時、俺の右手を再び正雄がぐっと掴む。

「待てよ、悟の妹」

振りほどこうとしたが振りほどけない程に強く手を握られている。

「離して下さい！何をするんですか！」

俺は振り返ると同時に正雄に向かって怒鳴った。

正雄は怒鳴られているのに表情ひとつ変えずに俺の目をじっと見ている。

「何ですか？そんなに見ないで下さいよ」

俺はそう言って正雄を睨みつけた。

「おい、お前……こんな事はない俺も思っているんだが……」

「な、何ですか」

緊張で俺の心臓はドキドキと高鳴る。

「もしかして……お前……悟の妹じゃなくなって【悟】なんじゃないのか？」

「え!？」

『ガン!』と鉄のハンマーで頭を殴られたような衝撃が体中に走った。

そして心臓の鼓動は一気に高まり、頭に血が上り、体中が熱くなる。

な、何だと!？まさか直球ストレートで言い当てるとか!？

普通だと「綾香じゃないんじゃないのか?」とか「お前は誰なんだ?」とか聞くんじゃないのか?

何でストレートに「【悟】んじゃないのか?」とか言えるんだ!？

そこまで確信してるのか?何か証拠があるのか!？

し、しかし俺はまだ悟だと認めた訳じゃない!ここは冷静に!冷静に対応しないと!

落ち着け……落ち着いて返事をするんだ……でないと悟だと認めているようなものだぞ。

っていつかきつと顔は真っ赤だろっし、この額の脂汗……じつと見られてるしやばい気もする……

そ、そうだよ、早く否定しないと!

「な、何を馬鹿な事を言ってるんですか?何で私がお兄ちゃんなんですか?意味がわかりませんけど?」

俺がそう言っていると正雄はぐいっとな俺を引き寄せた。

そしていきなりぐつと俺を抱きしめた。密着する俺と正雄。

な、な、な、何をするんだ!？いきなり抱きつくとかありえねー!

「な、何をするんですか!は、離してください!」

俺が怒鳴ると正雄はゆつくりと抱きしめた腕の力を緩めた。  
しかし抱いた腕は離そうとはしない。

正雄の顔を見上げると正雄を俺の目を見ながら話を始める。

「お前はやっぱり悟の妹じゃないだろ？この前の自転車置き場の件もそうだが、今日のその動揺具合や今までの出来事を総合的に見てもお前は姫宮綾香だとは思えない。それに俺に抱きつかれたのに動揺こそしても暴れたりしないしな」

「な、何を馬鹿な事を言ってるんですか？いきなり抱きつかれて驚いてしまっただけじゃないですか」

「驚いた？普通の女ならそういう場合は驚く前に悲鳴でもあげるんじゃないのか？」

「く……それは…悲鳴なんてあげたら人が来るじゃないですか……」

悲鳴か、そうか……女なら悲鳴を上げるかもしれないよな……  
くそ…なんか口では勝てる気がしねえ。

「本当に誰だ？しかし赤の他人でもないんだよな……お前は俺を知っているだろ？悟の妹の事も知ってる。そう考えるとやっぱり悟なんじゃないのかって思っただ」

何だよその確信したような言い方は！？お前は名探偵か？

というか、俺は綾香じゃない事は確定なのか！？

頭は良い奴だとは知っていたが、ここまで頭の切れる奴だとは思わなかった。

「普通に考えて下さいよ！ありえない話でしょ？私がお兄ちゃんだから？」

「普通だと…俺も正直いえば確信してた訳じゃない…でもさっきの彦との会話を聞いてお前が悟としか思えなくなっただ…どうしてこうなったのかの理由は説明つかないけどな」

やっぱり聞かれてた！

やばい！これ以上突っ込んで質問されると対応しきれないぞ！？絶対やばい！逃げないと！

「わ、私は姫宮綾香ですから！」

俺はそう言いながら勢い良く身を屈めた。力を抜いて抱いていた正雄の両手を俺はスルリと抜ける。

そして俺は慌てて自転車に飛び乗ると勢い良く走りだした。

「お、おい！待てよ！逃げなくつても俺はただ……」

俺は正雄の台詞を最後まで聞かず、自転車を懸命に漕いで一気に正雄から距離を取った。

これで逃げ切ったかと思った。しかし、後ろを振り向くとすごい勢いで正雄が追っかけてくるのが見えた。

え！？走って追っかけてくるのか！？なんだよあいつ足が早いじゃないか！やばい追いつかれる！

数百メートルを全力で漕いだにもかからず正雄は息を切らさずに追っかけてくる。

くそが、あいつ自主練習でもやってやがったな！息が切れる様子が見えないじゃないかよ！

その時、学校の正門前に差し掛かった俺は咄嗟に学校に逃げ込ん

だ。

「輝星花…助けてくれ…」

自転車を玄関の前にある水飲み場に放り投げると正面玄関から構内へ入る。

一年の下駄箱で靴を脱ぎ捨てて、上履きも履かずに俺は走り出した。体は自然と特別実験室へと向かっている。

いくら強がっていても、あそこまでの確に悟だと言いつてられた俺は冷静でいられるはずもなかった。

もしばれたら……その後の悪いイメージがどんどんと脳裏に浮かんでは消える。

輝星花はばれても命の危険は無いと言っていた。

確かに命の危険は無いかもしれない。でも下手をすると俺は……いや、綾香ももうこの学校に居られなくなるかもしれないんだ。そんなのは嫌だ！

俺は息を切らしながら廊下を懸命に走る。

おかしい……何時もは近く感じる特別実験室が妙に遠くに感じる。俺に後ろを振り返る余裕なんてなくなっていた。

そしてしばらく走るとやっと特別実験室の扉が見えた！俺は躊躇もせず扉を開くと中に飛び込む！

「輝星花！助けてくれ！はあはあはあ……」

俺がそう叫んで室内を見るとそこには……

「あれ？綾香ちゃん？輝星花に何か用事？」

夕暮れになり、薄暗くなった部屋の中には輝星花の姿は無く、その代わりに絵理沙が中央のソファの前に立っていた。どうしてこ



ここに絵理沙が！？

「え、絵理沙？輝星花、輝星花は何処なんだ？はあはあ……」

「え？いきなり何？お兄ちゃんじゃなくなつて輝星花？輝星花に何の用事なのよ」

絵理沙はすこしむっとした表情でそう言った。

しまった……そうか、ここでは野木と言つべきだった……つい輝星花が頭に浮かんだから……

「え、あつと、野木、そう野木に用事があるんだよ。ちよつと助けたい事があつてね。はあはあ……」

「助けて欲しい？それってどういう事？そつといえは綾香ちゃん、そんなに息を切らして、おまけに汗いっぱいいかいちゃつて？何かあつたの？」

「そ、それは……だから急用があるんだよ……え、えつと……だから野木は何処なんだ？」

「知らない……私もさつきここに来たばかりだから。私がここに来た時には居なかつた」

くそ、何処に行つたんだよ……こんな時に……

奥の窓際に見える机の上には白い薬の容器があるだけで、それ以外の物は片付けられている。

片付けたという事は、この部屋には居ないという事なのか？何処に行つたんだよ。

「ねえ、それって私には相談は出来ない事なのかな？」

絵理沙は優しげにそう言った。

「え？絵理沙にか？」

「そう、もしかしてさ……私じゃ綾香ちゃんの力にはなれないって事なのかな？お兄ちゃん、いいえ、輝星花あきほしじゃないと駄目って事なのかな？」

絵理沙は少し不機嫌そうに、そして寂しそうな表情で俺に向かって言った。

どうしたんだ？急に絵理沙の奴……

「いや……そういう訳じゃないけど」

「あのね……私を……頼ってもいいんだからね……」

絵理沙はそう言つと俺の目の前にゆっくりと歩いて来た。

頼つてもって言われても……最近の絵理沙は俺に対して冷たいじゃないか。

とてもじゃないがああ感じじゃ何かを頼める雰囲気では無かったんだ。

うーん……でも今の絵理沙は何か違う。教室での絵理沙とは違うよなあ……

ちょっと優しげな感じというか、棘が無いというか。

その時！『ガタン！ガタン！』とこの部屋の扉を開けようとする音が聞こえた。

俺はその音で体をビクリと震わせた。

やばい、正雄の奴、この部屋の俺が居るって気がついたのか？

「え？何この音？誰かこの部屋に入ろうとしてる？」

絵理沙は扉へ視線を移す。

「おい、悟の妹！この中にいるんだろ？開けてくれよ」

正雄の声が扉越しに聞こえた。やっぱりバレたらしい。

うーん…この状況では俺だけではどうしようも無いよな。

本当は輝<sup>ほい</sup>星花に相談したかったけど居ないのなら仕方ない、ここは絵理沙に相談をすべきだろう。

このまま逃げるだけじゃ結局は何の解決にもならない訳だし。

「絵理沙……俺の話を聞いてくれるか？」

「あ、うん」

俺は絵理沙に今日あった出来事をすべて話した。

絵理沙は俺の話を聞いてすごく深刻な表情になる。

俺が話しをしている間にも『ガタガタ！ガタガタ！』と正雄が扉を開けようとする音が部屋に響いていた。

「おい！マジで開けるよ」

正雄も少し怒り気味なのか、声が大きくなっている。

「絵理沙、俺はどうすればいいんだ？どう対応すればいいと思う？」

その時、絵理沙は俺の言葉以外の何かに反応した。

ハツとした表情になると誰も居ない窓際の野木の机の方を向く。

「おい、聞いてるのかよ？そっちに何かあるのか？」

「あ、え？ああ、聞いてるよ。ごめんね、何でもないから」

「じゃあどうすればいいんだ？こういう場合は」

俺がそう言つと絵理沙は話をしながらゆっくりと出入口へと歩いて行く。

「そうね……今は……」

そして何を思ったのか出入口の扉に手を伸ばす。

「え？お、おい！まさか正雄を中に入れる気なのか？」

ここの部屋、特別実験室には通常普通の人間は入れない。この部屋に特別な結界がかかっているからだ。

その結界を解除出来るのは絵理沙や輝<sup>き</sup>星<sup>せい</sup>花の二人。

二人のどちらかが開閉した場合のみ一般の人間がここに入れる。

俺は出入りは可能だが、結界の解除は出来ない。

要するには二人が開けない限りはこの部屋には正雄は入れないという事だ。

それなのに扉を開けるといふ事は……

「そつだよ……中に入ってもらつたの」

「いいのかよ！？まだ解決方法も話しあつてないじゃないか」

俺の話は絵理沙に聞こえたのか聞こえなかったのか……絵理沙は躊躇も無く取っ手に手を掛けた。

『ガラガラガラ』と音を立てて特別実験室の扉が開く。

その先には当たり前だが正雄が居た。

いきなり扉が開き正雄は「え？」という表情で絵理沙の顔を見る。

「桜井先輩ですよ？入って下さい」

「え？あ、ああ……」

絵理沙の誘いに正雄はゆっくりと部屋の中へと入ってきた。

正雄が部屋へ入ったのを確認すると絵理沙は扉を閉める。

部屋に入ると先ほどまであんなに叫んでいたはずの正雄が言葉も無く無言で周囲を見渡す。そんな正雄に絵理沙が問いかけた。

「桜井先輩は何で綾香ちゃんを綾香ちゃんじゃないって疑っているのですか？」

正雄は「こいつに話したのか？」という驚きの表情で俺の方を見る。

「というか、俺もまさか絵理沙が突然そんな質問をするなんて予測もしていなかった。」

「ほら、余所見しないで下さい。なんで綾香を綾香では無いんじゃないかって疑ったのかを聞いているのです」

正雄も予想もしなかった絵理沙の質問だったのだろう。いつもは見せないくらいに緊張した表情を浮かべる。そして二・三度深呼吸をしようとやっとなら口を開いた。

「冗談だよ冗談……」

正雄は絵理沙と視線を合わせないように明後日の方向を向いてそう言った。

「あれ？冗談？冗談なのですか？」

「ああ、冗談だ……ちょっと悟の妹をからかってみただけだ。魔法じゃあるまいし、悟の妹が悟に替わるなんてあるはずないだろ」

正雄の奴……さっきはあんなに俺を悟じゃないのかって疑っていたのに、絵理沙にしては逆にそんな事はないとか言い出している。

何故だ？

……

これは……もしかすると正雄の奴……

「へえ……なるほどねえ……そうだよな？ここにいる綾香ちゃんが本当は綾香ちゃんのお兄さんだなんてあるはず無いよね？」

「ああ、そう思うだろ？俺はちょっと悟の妹をからかっただけなんだ」

「ふーん……からかっただけなんだ？つてさ……ここまでそんなに懸命に追っかけてきて扉まで強引にでも開けようとしてたのに、それを「冗談だった」とかで済まされるとでも思っているのですか？」

絵理沙はそう言つと正雄の睨みつけた。

「何だよ？本当に冗談は冗談なんだ。俺がここまで来たのは話の途

中で悟の妹が逃げ出したからだ。「冗談だったと伝えたかったんだ」

「へえ…そうなんだ……」

絵理沙は納得のゆかないという表情で正雄を見た。

正雄はそんな絵理沙から視線を外すと出入口へと方向を変えて歩き出す。

「それじゃそういう事だから俺はもう帰る。おい、悟の妹、変な事を言っつて悪かったな」

「あ、はい……」

やはりそうなのか……

ここで俺はある事に気がついた。

正雄は俺を悟だとは疑っている。しかしその事は正雄以外の人間、他人に知られたくないんだ。

要するに……絵理沙に対して今、綾香の姿をした俺は本物の綾香であつて悟ではないと庇かばつてくれているんだ……でもどうして？正雄の目的はなんなんだ？

正雄は出入口の取っ手に手をかけた。そして開けようとするが扉がびくともしない。

「何だこれ！？開かねえぞ？どうなつてんだよ!？」

正雄は少し慌てた表情で俺達の方へ振り返つた。

それを見ていた絵理沙は不気味な笑みを浮かべる。

「先輩……人間なんて単純な生き物ですよ？嘘をついているとす

ぐにわかる。桜井先輩が思っている事を正直に言わない限りこの部屋からは出してあげませんからね」

また俺の予想していなかった事態が起こった。しかし絵理沙の奴、何を考えてるんだよ!?

確実に解った事は、正雄は俺の正体を暴いて不特定多数の人間に暴露をしようとしている訳じゃないという事。

それならここでわざわざ正雄を引き止める事の方がまずいんじゃないのか?

「おい、何だその言い方は？俺が嘘だと？お前おかしいんじゃないのか？どうせ鍵でも閉めたんだろ？早く開けるよ」

「ふふふ……あははははは」

絵理沙は突然大声で笑い出した。

笑いながら少しずつ俯き、額を右手で押さえると肩を震わせた。

その仕草から何か不気味なものを感じる。

「何だよ気持ち悪いな」

冷静に対応しているつもりだろうが、正雄は完全に動揺している。俺にはわかる。

そしていつもの絵理沙からはとてもじゃないが想像のつかないこの態度と表情……

一体何を考えてこんな事をしているんだ？俺が疑われた事を誤魔化す為にやらなければいけない事なのか？

「おい、悟の妹。こいつおかしいだろ？どうにかしてくれよ」



正雄は冷静さを装い俺にむかって話をする。

「え、絵理沙？どうしたの？」

俺が声をかけても絵理沙は反応しない。

絵理沙の奴……こんな事で誤魔化してくれているつもりなのか？俺がそう思っていると絵理沙は突然笑うのを止めた。そしていきなり笑顔になる。

「つと……まあ冗談はこの位にしておいて」

「え？な、何だそれ？おい悟の妹！こいつやっぱおかしいだろ！？」

正雄は先ほどとは別の意味で動揺している。

というか今の絵理沙の急な態度の入れ替わりには俺もかなり驚いた。

絵理沙は笑顔のまま正雄の横へツカツカと歩み寄る。

「桜井先輩、まあそのソファーにでも座って下さいよ」

「いや、俺はもういいから、この部屋から出たいんだよ」

「駄目ですよ？だってまだ綾香ちゃんを疑ったままでしょ？」

「だからそれは冗談だって言っただろ……」

この後、絵理沙から予想もしなかった一言が発せられた。

「冗談？何を言ってるんですか？桜井先輩の予想通りここに居る綾香ちゃんは本当は悟君なんですけど？」

「「え！？」」

俺と正雄は同時に驚きの声を上げた。

まさかの笑顔で暴露！それも絵理沙が！？

「え、絵理沙！？な、な、何を言ってるんだ！」

俺は動揺してつい男言葉を使ってしまった。

「大丈夫よ悟君、桜井先輩にだったらばれても大丈夫だから」

何の確信があるのだろうか？絵理沙は笑顔でそう言った。

「おいおい……冗談だろ？悟の妹が本当に悟だと？そんな事ありえないだろ」

先ほどまで俺を疑っていた正雄が信じられないという表情で俺の顔を見る。

綾香が悟【俺】じゃないかって疑ってはいたが、実際にそれが事実だと言われてしまい、その事実を逆に信じたく無い状態になっているのだろうか。

「あれ？桜井先輩どうしたんですか？そんなにおどおどしちゃってらしくないですよ？」

「いや……待ってくれよ、さっきお前はこいつは【悟】だって言ったよな？それって本当に本当なのか？冗談じゃないのか？俺を騙してる訳じゃないのか？」

正雄は絵理沙に向かって質問をどんとぶつける。

「私が桜井先輩を騙すと何かメリットでもありますか？私は本当の事を言ったのです」

「そ、そうか……」

ここで数秒の沈黙……

誰も何も言わない時間……

俺も何を言えればいいのかわからない……

認めればいいのか？今ここに存在する綾香は俺【悟】だと。

だが俺の心の中で何かがそれをさせようとしな。正雄に真実を教えたくないからか？

「悟君、そんなに深刻にならなくても大丈夫だよ？桜井先輩は悟君の味方だから……」

絵理沙は不安そうな表情を浮かべているだろう俺に、笑顔でそう言った。

しかし何だろう？落ち着いて絵理沙を見ると何かが違う。いつもの絵理沙じゃない気がする。

そうか！俺は気がついた。今の絵理沙の笑顔は本当の笑顔じゃない。

どこか不自然さがある。本当の絵理沙の笑顔は……もっとかわいい……と思うし……だよな……

頭の中に絵理沙の満面の笑みを思い浮かべる俺。

……うが！って待て！何で俺は絵理沙の笑顔を妄想してんだよ！  
……ってなると……そうかもしかして！輝<sup>ひかり</sup>星花に！

『君もなかなか洞察力があるね。関心しました』

俺の頭の中に直接語りかけてくるこの声は輝星花！？  
やっぱり絵理沙は輝星花に指示されて動いていたのか！

俺はその瞬間絵理沙を見た。

すると絵理沙にも輝星花から思念がいったのだろうか、俺の方を  
向くと今度は自分の意思でやさしくニコリと微笑んだ。  
というか……絵理沙の笑顔はやっぱり可愛いよな……

『そんなに絵理沙の笑顔が好きですか？』

うわ！そうだ！こいつ俺の思考を読むんだった！

『勝手に人の思考を読み取るな！』

俺は頭の中で怒鳴った。怒鳴ったていうのかなこれ……

『お兄ちゃん、もう出てきていいよ……っっていうか出て来いよ！』

絵理沙がそう言うと奥にある野木の机の下から野木一郎が登場し  
た！

待て！なんで机の下から出てくる！？っっていうかそこに最初から  
いたのかよ！

『こんにちは、野木一郎です』

そして出てきて一言目がそれかよ！この状況で返事をする奴がい  
ると思うのか！？

「あ、こんにちは、三年の桜井です…」

正雄……お前って奴は……

ってというか普通は驚かないか？なんでそんなに冷静なんだよ……

「さて、桜井君にはこれから色々と秘密を共有して貰わなければいけません。ちょっとお付き合い頂きますがいいですか？」

野木はそう言つと椅子に座り腕を組んだ。

「野木先生、ちょっと質問してもいいですか？」

「ん？何でしょうか？桜井君」

「野木先生はさっきまでのやり取りを全て聞いていたんですか？」

「もちろん」

「じゃあ先生もここにいる悟の妹が悟だと言いつつ切れるという事ですか？」

「もちろん。今そこにいる姫宮綾香さんは姫宮悟君です」

「……………」

正雄は無言で俺を見た。

言葉に出さなくつてもわかった。「本当に悟なのか…」って言い  
たいのだと。

もう野木の登場の仕方なんてどうでもいい、正雄に俺からも一言  
いっておくべきだろうな。

「正雄、ごめんな……俺はお前をずっと騙してた。俺はこんな外見だけど、本当はお前の言う通りで【悟】なんだ」

「……マジか……でも何でだよ？どうしてだよ？わかんねえ……な  
んでお前がそんな姿になってるんだよ？今更かもしれないが信じられねえよ」

正雄は頭を抱え込んで俯いた。

「桜井君、こうなった経緯いきさつを説明する前に……見てもらいたいものがあります」

野木はそう言うのと俺に向かって手招きをしている。

俺はゆっくりと野木の横まで歩いてゆく。すると野木は俺の肩に手を置いた。

「桜井君、よく見ていなさい」

その瞬間、俺の姿は【姫宮悟】へと変化した。

それを目の当たりにした正雄は目を点にしている。

「え！？さ、悟！？な、何だ？どうなってるんだ！？なんで悟がここに？何だ？悟が悟の妹に化けてたのか？悟の妹と悟の精神が入れ替わってた訳じゃなかったのか？」

流石の正雄もこれにはかなり驚いた様子だ。

先ほどまでの落ち着いた口調が嘘の様にしどろもどろしている。

あと、正雄は俺と綾香が精神の入れ替えで替わっていると思っ  
ていたらしい。

「桜井君、まあ落ち着きなさい。僕がちゃんと説明をしてあげますから」

「これが落ちて着いていられるか！目の前で人が、悟の妹が悟に変化したんだぞ！？」

「そうだね、桜井君を納得させる為には実際には実際に魔法を見せるべきだと思ったから今君の目の前で使ってみただ」

「ま、魔法？魔法だと！？」

「はい、魔法です。ちなみにこの魔法は人物の見た目だけを変化させる魔法です」

その後、野木は正雄に今までの経緯をすべて説明した。

そしてその途中で野木は俺に思念を送ってきた。

『桜井正雄は君の味方になってくれる。秘密を他人に暴露するような人間じゃない。だから安心していいから』と。

ここに俺の秘密を知る人間が初めて誕生した。

放課後の屋上で正雄と二人……

日は西の山並みへ沈み空は暗くなりかけている。

「……お前も大変だったんだな」

「ああ…マジで大変だったよ…本気でだぞ？」

「わかってるよ。普通に考えてもありえない事だもんな……」

特別実験室で野木と絵理沙の二人で正雄に今までの経緯けいゐを説明し終わった後、俺と正雄は二人で屋上へ来て話をしていた。

正雄も流石に納得せざる得なかった様子で、俺が一度死んで妹と間違っまちがって生き返ったと知った時にはかなりショックも受けていた。

でも最後には綾香の姿をした今の俺が悟ださとという事実をちゃんと受け入れてくれたんだ。

その時に絵理沙と野木も魔法使いだまほうつかいという事実を正雄に教えた。

ただ、もしも他言した場合には野木が正雄にかけた魔法が発動して正雄の記憶から野木と絵理沙と俺に関わる事が消えるという条件付きでだ。

しかし一つだけ話さなかった事がある。それは野木が本当は女だめという事だ。

野木が本当は輝星花きせいかだだという事実は伏せたまま話が終わった。

「正雄、あのさ、流石に悟って呼ばれている所を誰かに聞かれるとヤバイからさ、【綾香】って呼んでくれないか？」

俺がそう言うと正雄の顔が少し赤くなった。

「ちょっと待てよ、それはマズイだろ？」

正雄の赤い顔を見て何故か俺の顔まで熱あつくなってきた。

「何がマズイんだよ？俺は今【綾香】なんだぞ？だから名前で呼べよって言ったただけだろ！何で顔を赤くしてんだよ！」



「待てよ！だから何で名前で呼ばなきゃいけないんだって？普通に【姫宮】でいいだろ？それとも名前で呼んで欲しいのか？」

「え？あ、そっか…いや…俺はどっちでもいいんだけど」

「だったら【姫宮】って呼ぶよ。綾香なんて呼んだら下手をすると周囲の奴らに俺とお前は付き合ってるとか思われるだろ？」

そう言って話す正雄の顔は相変わらず少し赤い。

照れてる正雄の姿なんて今までの付き合い見たことなかった。

こいつ女にモテるから結構すれてるんだって思ってたけどもしかして……

「正雄」

「何だよ」

「彼女とかいないのか？」

「……いると思うか？というか……お前知ってるだろ？」

「……いや、でもあれだよ、いっぱい告白とかされてたんじゃないのか？」

「馬鹿、告白はされた事はある！しかしOKした記憶は一度たりとも無い」

それってそんなに威張って言える事なのか？

「勿体無い。俺なんて告白された事なんて一度も無いのに」

俺がそう言っていると正雄は楽しげな顔で俺を見る。

「な、何だよ？」

「あるだろ？告白された事」

その一言で思い出した！俺はこの姿で大二郎に告白されてるじゃないか！

「あ、あれは違う！あくまでも男の時！男の時だよ！」

「あははは！そうか？でもまあ告白には違いなidarる？」

「それはそうだが……初めて告白されたのが男で、それでもって大二郎とか……ありえねえよ」

「まあそう言っな。大二郎だって本気で……ってお前、大二郎の事、どうするんだよ？」

そうなんだよな……それも問題なんだ。

俺は正雄にこの前あった事を正雄にすべて話してみた。

デートはするけど付き合えないという事も含めて全て。

「そうか……でもなあ……あいつはお前に惚れてるし、本当に諦めるかどうか」

「あーもういいよ！正雄、もうその話題には触れるな！大二郎の件は何かあったら相談するから！それより何で正雄は告白されてるの

「OKしないんだよ？」

「ん？俺か？俺はどうも女っていうのが苦手なんだよ。どう対処すればいいのかわかんねーし。デートとか面倒なだけだろ？」

「そんなもんか？俺は彼女が欲しかったけどな……」

「俺はいいんだよ。お前が気にする事じゃないだろ」

何かこれ以上こんな話をしてても仕方ない気がするな……

下手に話すとまた大二郎の話題をふられそうだし……

あ、そうだ。こいつ何で俺が【悟】だって思ったんだ？やっぱりあの自転車置き場の件か？

「あのさ、そういえば何で俺が【悟】だって解ったんだよ？」

「あ、ああ…それは…」

「それは？」

「あまりの矛盾で……かな？」

「矛盾！？」

「まず、姫宮は記憶喪失なはずなのに覚えている事と忘れている事があまりにも極端すぎるんだよ。ましてやさっきの一彦との会話みたいにまるで【悟】本人かのように説明まで出来るって、まあお前は悟だから説明できて当たり前なんだけどな」

「なるほど……まあ俺も一彦君のあれはちょっとヤバイ気もしてた

んだよな……」

「でも……おかげで一彦は空手を辞めないって言ったんだ。ここはお礼を言うべきだな。ありがとう」

「あ、いや、いいってそんな事……」

「あとは、性格や運動神経や学力があまりに違いすぎる」

「え？あつと……それは？綾香と違っつて事だよな？」

「それ以外に誰と比較するんだよ！」

「あはは……ってそんなに違うのか？」

「お前は自分の妹の事も知らないのか？お前の妹はやさしくって明るくっしてお淑やかな性格なんだよ。今のお前は明るく元気なだけだ。それと運動は普通には出来ていたが今のお前は運動神経が良すぎなんだよ。記憶喪失で運動神経が良くなつたなんて聞いた事もない。あとな、お前の妹は一年でも上位ランクでいつも掲示板に掲示されるレベルだったのに今は一切掲示されない。っていうかお前……中間は何位だったんだよ」

「え？えつと……百位かな？」

俺がそう言っていると正雄は頭を抱えた。

「馬鹿すぎだろ……」

「仕方ないだろ！俺が勉強なんて出来るはず無いじゃないか！それ

に勉強が出来なくつても疑われたりしないぞ？」

「それは記憶喪失で学力が落ちるっていう事がありえるからだ。まあともかく本当のお前の妹と今のお前はあまりにも違いがありすぎる。俺みたいにホク口まで覚えてなくつても十分に疑われる余地を持っている。気をつけるよ」

確かに…正雄の言う通りかもしれない。

今回ばれたのが正雄だったからまだ助かった。これが他の人間だったら……

そうだ、茜ちゃんだって少し疑っているんだ……気をつけないと  
な。

「これからは俺も気をつけるから……正雄も何か指摘があったら言う  
つてくれ」

俺がそう言ったため息をつくとき正雄が俺の肩にぽんと手を乗せた。

「わかった。お前が元の姿に戻るまで俺もお前を手助けするよ。あ、  
あと……」

「ん？あと？」

「例え俺と話す時であっても口調は女にしておいた方がいいぞ？誰  
かに聞かれるとまずい。それも違和感を覚える行為のひとつだから  
な」

うわ……輝星花と同じような指摘をされてしまった。

「う、うん……わかった。私も気をつける」

「よしOKだな。おい、日も暮れて暗くなってきたしもう帰ろう」  
確かに話に夢中になっている間に周囲はかなり暗くなっていた。  
何時の間にかグラウンドから聞こえていた運動部の掛け声も聞こえなくなっている。

しかし、こうして改めて正雄を見るとあれだな……  
こいつって見た目はカツコイイのに本当はすれてなくて純粹な男なんだな。

実はこいつすっげーかわいい性格なのかも……  
俺が正雄の彼女になってやったらなんか面白そうだな。

……あれ？  
なんか…今……

やばい！俺は男らしからぬ思考をしていた！  
何がかわいい性格なんだよ！？何で俺が正雄の彼女なんだよ！  
やばいぞー油断してた！俺は男だ、俺は男なんだぞ……

男と付き合うなんてありえないだろ……っていうよりそういう妄想する時点でアウトだろ。

ああ、神様お願いです。俺から男の気持ちを奪わないで下さい！

「おい姫宮、何やってんだ？なんで両手を組んでお祈りみたいな事をしてるんだ？」

「あ、いや、べ、別に何も無い！気にしないでいいから！」

「それってかなりオカシイ奴に見えるからやめとけ」

「な！？お…わ、私はおかしくないよ！ちょっと色々な事情あるだけだから！」

「色々な事情？」

「あー！聞かなくていい！また話すから今は聞かないで下さい」

「そうか？それじゃまあいいか……」

「それじゃあ正雄、帰ろう！」

「ああ、帰ろう」

俺は正雄と二人で屋上を後にした。そして下駄箱に到着。

「またな、姫宮」

正雄はそういつと三年の下駄箱へと歩いてゆく。

俺はその背中を見ながら無意識にある言葉が出てきた。

「正雄、本当にありがとう……」

正雄はその言葉に反応して後ろを振り向く。  
そして笑顔で言ってくれた。

「俺とお前は友達だろ？」

「うん……そうだね……」

「今日はある意味俺達の記念日になったな」

「うん！そうだね！」

「じゃあな！姫宮！」

「うん、じゃあね！正雄！」

正雄は小恥ずかしそう少し顔を赤らたまま三年の下駄箱へと消えて行った。

私は心から思ってる。私の事を心配してくれて……本当にありがとうって…

### 特別実験室

明かりを点けていない真っ暗な部屋の中に声がする。

「ねえ輝<sup>きりし</sup>星花、本当にあれで良かったの？」

「ああ、あれでいいんだよ」

暗い部屋の中で野木と絵里沙が二人が中央のソファーに座り話をしていた。

「でも……あの桜井正雄とかいう人間は本当に私達や悟君の秘密を話さないっていう確信はないんだよ？」

「大丈夫だよ。桜井君は悟君の事を考えてくれている。確かに真っ先に綾香が悟じゃないかって疑ってかかってきたが、それはもしも綾香が悟君だった場合、その秘密が他人にばれるのを守ってあげたっていう考えがあったからだ」



「そうかな？」

「なんだい？絵理沙はそうは思わないのかい？いくら魔法が使えないといつても桜井君が純粋な心の持ち主だってわかっただろ？」

「まあ……それはそうんだけど……」

「大丈夫だよ。あの二人ならね」

「……………」

「悟君も桜井君と秘密を共有出来た事によってきつと今よりも生活が楽になるはずだよ」

「……………そうかもね」

「もちろん僕たちも今まで以上にちゃんと手だすけを……………う……………ぐ……………く……………こんな……………時に……………」

突然野木は胸を左手で押さえながら前かがみになり悶え苦しみました。

「何？どうしたの？胸なんて押さえて」

絵理沙は慌てて立ち上がると野木の側に寄る。

「お願いが……………ある……………え……………絵理沙……………そ……………そこの……………薬を……………取って……………」

野木は右手を震わせながら自分の机の上を指差した。  
絵理沙は慌てて机の横へ駆け寄る。机の上には白い薬の容器が置いてある。

「え？こ、これ？」

絵理沙は野木の机の上にある白い薬の容器を手を取った。

「あ、ああ……それ……早く……」

絵理沙が白い容器を持って近寄ると野木の様子がおかしい事に気がつく。

「ねえ、輝星花きせいけに戻ってる！変化が解けてるよ！ねえ！大丈夫なの？」

「だ、大丈夫だから……薬を……」

輝星花きせいけは絵理沙から薬を受け取ると蓋を開けて青い錠剤を何錠か取り出した。

そしてそれを水も無しで一気に飲み込む。

「き、輝星花？」

「大丈夫……落ち着いたから……」

こんな所で魔法力が……絵理沙に見られてしまったのは失敗だな

……  
悟君だけじゃない。僕自身も早くどうにかしないといけないな……

続  
く

第23話 軽拳妄動ある意味記念日！？ 後編（後書き）

少し長くなってしまい申し訳ありません！なんと13000文字超えでした…

そして続きもがんばって執筆中です！これからも宜しくお願いします。

**番外編？ 悩み多き乙女です！（前書き）**

杉戸佳奈がメインの小説です。メインストーリーと関連はありますが番外編であり、読まなくても支障はありません。ご興味がある方のみ読んでみて下さい。これは第23話の次の日の話です。

番外編？ 悩み多き乙女です！

十一月二日・AM六時・私は普通よりも早く目が覚めた。  
窓からは朝日が差し込みとても爽やかな朝。  
でも私の気持ちはもやもやしていた。

理由はわかってる。

昨日、私は見ちゃいけないものをいっぱい見ちゃったから。

綾香の秘密をいっぱい知ってしまった。

いつの間にあんな事になっちゃってたんだらう？

綾香って…あの事故で記憶喪失から本当に変わったよね……

私の友達の綾香は、夏休みに飛行機事故にあった。

無事に家へは戻ってきたけどその代償として記憶喪失になっていた。  
た。

最初は私の事すら殆ど忘れててびっくりしちゃった。

そして記憶喪失の後遺症なのか性格もかなり変わっちゃった。

それは新学期に入ってからクラスの全員が周知するまでになる。

まず、前まであんなにモテモテナ子じゃなかったのに男子にも女子にもモテるようになってしまった。

私を知り合ってから高校一年になるまで男の気配すらなかったのに、空手部の清水先輩に告白され、昨日は中学校の後輩だった一彦君にも告白された…

それだけじゃなかった…綾香は……

脳裏には昨日の綾香が思い浮かぶ。マミーストアの裏で桜井先輩と……

そう…あの時、一彦君との会話を隠れて話を聞いてたのがばれちゃったから私は一旦はその場から立ち去った。

でも何となく綾香が気になって私はあの場所に戻る事にした。  
自転車を漕ぎながら遠目で綾香の姿を確認してみた。するとお店  
の裏の物影に綾香の姿が見えた。

私は手を振りながら綾香の名前を呼ぼうかと思っして右手を上げよ  
うとした。

その時だった…綾香が急に物陰に引つ張り込まれたんだよね…  
私は慌ててその場で自転車を止めてると遠めでその場所を覗いた  
んだ…

その光景を見て信じられなかった…

だって桜井先輩と綾香が抱き合ってたんだよ…

まさか綾香が桜井先輩とそんな関係だったなんて知らなかったし…

私…綾香の秘密を知っちゃった…

どうすればいいんだろう？って思っても私にはどうしようも無い  
事だよね。

いや違うよ、どうにかしちゃダメなんだよね？

綾香が誰が好きだろうが私には関係ないもん。って…そんな事は  
半分どうでもいいんだよね…

私が一番気になってる事は別にあるから…

それは二学期に入ってから綾香が私にあまり付き合ってくれなく  
なった事なんだ。

一学期はあんなに仲良くしてくれたし、一緒に帰ってくれていた  
のに…

最近は私って綾香に避けられてる気がするし…

この前なんか綾香が生理なの知らなくて、すっごく酷い事をし  
ちゃった…

やばいよね…このままじゃ余計に嫌われちゃうよ…

別に桜井先輩と付き合っても私はいいの。

他の誰と付き合おうがいいの。でも綾香には嫌われたくない。

私って見た目の友達が多いけど…

でも本当に親友って言えるのは茜と綾香と真理子くらいなんだよね…

っと…考え事をしながら無意識に階段を降りてたし！

すっごーい私！もしかして超能力者！？階段を無意識に降りる能力！？

ってそんな能力ちつとも嬉しくないよ…

「いつてきます…」

私はリビングにいたママに声をかけると下駄箱から靴を取り出した。

「あら？佳奈どうしたの？今日はやけに早いわね？」

玄関にしゃがみ込んで靴を履いている私の後ろに何時の間にかエプロン姿のママが立っていた。そして少し驚いた表情を浮かべている。

何よその顔…いつもよりも三十分早く学校に行くのがそんなに驚く事なの？

私は後ろを振り返りママの顔を一瞬見たが、すぐに視線を外した。

「ママ、娘が早く学校に行くのがそんなに驚くような事なの？」

私は少し感情的にそう言って立ち上がった。

「十分に驚く事でしょ？佳奈っていつつも遅刻ギリギリなのに、そんなに早く学校に行くなんて…どうしたの？もしかして恋でもしたの？」



「ばつかじゃないの！？早く学校に行くのと恋とどっちという関係があるのよ」

「あら？関係あるわよ？彼氏を待ち伏せするとか？」

「待つてよ、佳奈はストーカーじゃないし！それに彼氏もないし！恋愛もしてない！」

「ちょっとちょっと、そんなにムキにならなくってもいいじゃないのよ…」

ママはシユンとした表情で私を見ている。

「もう行くからね！」

私は『ボタン』と玄関を閉めると車庫から自転車を出した。

まったく…ママは朝から何をいつてんだか！

私は少々ご立腹状態で学校へ向かった。

なんだかんだで学校に到着う！

私は勢い良く駐輪場へ自転車を止めた。

すると運動部の早朝練習の音が校庭の方向から聞こえる。

そっか、駐輪場から校庭は目と鼻の先だから声がよく聞こえるんだ。

今日は朝練やってる時間に学校に来たんだ。すっごいね私って。

私は自転車を指定場所に置くと校庭を横目の下駄箱へ向かった。

駐輪場から少し歩いた所で『ザッザッザ』と足音をたてて私の横を体育着の女子生徒が数人通過してゆく。その中に同じクラスのバスケ部の子が見えた。

そっか、バスケ部か…私はその子達を振り返ってみた。

そして無意識に視線が自分の左足のアキレス腱へ移っている。ソックス越しに見た私の左足。見た目はいたって普通にしか見えない。

私……もうバスケ出来るのかな……でも……私……  
色々な考えが私の頭を駆け巡る。

あー！考えるのやめたー！佳奈、考えすぎはよくないからね！  
そう自分に言い聞かせると私は小走りで下駄箱へと向かった。

教室に入るとまだ数人の生徒しか来ていない。

綾香も真理子も茜も来てないのかな？

あ！違う、真理子は吹奏楽の練習だし茜はきつとバレー部の朝練だ。

来てないのは綾香だけか。

席についてぼーと黒板を見る。

何だろう…朝早くに学校に来たのにちっとも楽しい事が無い。

私は何となく教室を出た。

廊下を歩き、そして渡り廊下を通過して知らないうちに体育館入口の横へ。

「あれ？何でこんな場所に？」

教室に戻ろうかと思っていると体育館の中から女子生徒の音が聞こえる。

「朝練かな？」

私は体育館の扉を少しだけ開けて体育館の中をこっそりと覗いて

みた。

中にはパスの練習をしているバスケット部のメンバーが見える。  
楽しそうにバスケットをする生徒……

「……私も……バスケットしたいな……」

知らず知らずになんとなく出た台詞。私はその台詞を言ってハツとした。

何を今更……佳奈はもうバスケットしないって決めたじゃん……

そうだよ仕方ないんだよ。どうせ無理なんだから。

私は自分のそう言い聞かせると扉をゆっくりと閉める。

そう……私は小学校四年から中学校三年までずっとバスケットをやっていたんだよね。

うまいとは言えないけれど、それでも楽しかった。

きつとずっとずっとバスケットをやり続けるんだなーってその時には思っていた。

でも……無理だった……

中学三年の時だった。

練習試合中に『バチーン』と何かが激しく切れる音が体育館に木霊たました。

その瞬間、私の左足は動かなくなり、そして体は床に転がった。

堪え切れない程の激しい痛みが私を襲った……

アキレス腱断裂……最悪の出来事だった……

手術は成功した。リハビリもした……そして今は普通に歩けるようになった……

そしてお医者さんに言われた事。

『がんばればバスケットだって出来るようになるからね』って。

でも何故かな……私はバスケットをやりたいって思っているのに……

…出来ない……

バスケをするのが怖い……きつと大丈夫なんだと思うのに怖い……

私は「ふう」と溜息をついて教室に戻ると思った。

そしてくりりと方向転換をすると目の前には茜ちゃんがいる。

何時の間にそこに！？

しかし今日はよく背後を取られる…私ってゴ　ゴ　ゴになれないみたい。

そんな下らない事を考えていると茜ちゃんは笑顔で私に話しかけてきた。

「おはよう佳奈、どうしたの？こんなに朝早くからこんな所で」

私の前にいる茜は今はバレー部。でも中学までは私と一緒にバスケットをしていた。

本当は高校でも一緒にバスケット部に入る予定だった。

だけど……私が高校に入学してすぐに茜に言った一言で茜はバスケット部に入るのを辞めた…

『どうせ私はもうバスケなんて出来ないし！左足の感覚だって前と違うんだよ？茜は私の気持ちなんて何もわかってないんでしょ！私はもうバスケなんてしたくない！』

茜はきつと私の事を考えてくれていたのに…それを私が感情的になって…

些細な言い合いで始まった口げんかはその一言で決着したんだ。

その時の茜の表情を今でも思い出す。目に涙を浮かばせて言葉に詰まったあの表情。

その後、茜は優しいから私の酷い言葉も許してくれて、結果的に

友達関係には戻れた。

けど…私のせいで…茜もバスケットをやめちゃったんだ…  
そっか…だから私はバスケットをやりたくないんだ…

「え？いや、茜がいるかなーって思ってたね！」

「私が？バレー部は今日は体育館を使ってないよ？」

ナンテコツタイ…

「あ、あはは…そっか！だから居なかったのね！まあいいや！私は教室戻るから！」

私はそう言って茜の横を過ぎようとした。その瞬間に茜が言った。

「バスケット…やりたいのならやればいいんじゃないかな？」

私はその台詞が聞こえていたのにも関わらず、聞こえないふりをしてその場を通りすぎた。

渡り廊下が切れる所で私が振り返ると茜は振り返る事も無くそのまま更衣室へと消えていった。

教室に戻ると綾香が来ていた。

綾香は私は教室に入ると同時にすごい形相で近寄ってくる。

「佳奈ちゃん！ちょっといいかな？」

何だろう？昨日の事かな？

もしかして桜井先輩と抱き合った姿を見ていたのもばれちゃったとか？

「え？何？」

「ちょっと…話たい事があって」

「えっと…もしかして昨日の事かな？」

「うん…」

やっぱりそうだ、昨日の事だ。これって話を聞いたほうがいいよね。

私は綾香と一緒に教室を出た。綾香は無言で階段を上がる。どうやら屋上へ向かってるみたい。屋上で話をするのかな？

でもホームルームまであと十五分しかないし…そんなにいっぱい話しは出来ないと思うんだけど、何を言われるのかな…

『佳奈ちゃんってひどいよね！勝手に人のプライベートを覗くなんて！』

って怒られちゃうのかな…

まさ『もう佳奈ちゃんとは絶交だから！』なんて言われないよね？そんな事を考えているうちに屋上へ到着していた。

屋上の風はもう十一月なものもあり少し寒さを感じる。

少し身震いして綾香を見ると、私の横ですごく深刻な表情で考え込んでいた。

何だろう…何か嫌な予感しかしないんだけど…

こういう場合って私が先に謝るべきなのかな？だって私の方が悪い事をしてたんだし…

……

そうだよね、先に謝った方がいいよね。だって絶交なんてやだもん。

私は『ごくり』と唾を飲み込むと綾香に先制攻撃を仕掛けた。

「ごめん綾香！昨日は本当にごめん！」

私は頭を下げて綾香に謝った。すると綾香はきよんとした表情で私を見る。

「何で佳奈ちゃんが謝るの？私はちょっとお願いがあっただけなんだけど？」

「え？だって私、昨日、一彦君の告白から綾香が一彦君に逃げられるまでの現場とかみちゃったし」

「あ、ああ！そうなの！私が言いたいのはその事なの！」

やっぱりその話じゃん。

でも『何で佳奈ちゃんが謝るの』とか言っつて事はそんなに怒ってないって事なのかな？

「佳奈ちゃん、その事なだけどさ、一彦君とは本当に何もなかったらー！」

一彦君とは何も無い？つて事は昨日の状況から考えても無いと思うんだけど…

でも桜井先輩が本命だから一彦君とは何もやましい事はしないって事なのかな？

「あ、そうなの？そうなんだ」

「うん、そうなの。だから…こつこつお願いをするのもあれなんだ

けど、人には言わないで欲しいなって…」

なるほどね…お願いって私に黙ってて欲しいって事なんだ。

そうよね、そりゃ桜井先輩の耳に入ったらやだろうし、話して欲しくないよね。

それにここで私がきちんと約束を守れば綾香との仲がよくなるかもしれないし、ここは綾香に話さないからって約束しておこつと。もちろん桜井先輩との関係も含めてね。

「綾香、大丈夫だよ！私は誰にも言わないから」

私がそう言うのと綾香は笑顔になった。

「ありがとう、佳奈ちゃん！」

やっぱり綾香の笑顔っていいな…。なんか癒されるし。

もっと綾香と一緒にいたいよね…って思ってるだけじゃ駄目だよ  
ね。

これもいい機会かもしれないし、言ってみようかな。

「ねえ、綾香…お願いがあるんだ」

「え？お願い？何？」

「前みたいに学校の帰りに綾香とどっか行きたいな」

「え？私と？私って前はそんなに佳奈ちゃんと一緒に帰ってたんだっけ？」

綾香は少しオドオドしながらそう言った。



すっかり忘れてるの？私達つてすつごく仲良しだったのに…

その言い方つてまるで記憶喪失みたいじゃん！

あ……記憶喪失じゃん…

そっかあ…だから一緒にいっばい帰つてたのを覚えてないんだ。

だから一緒に帰つてくれなくなつたのか。

つて…もつと早く気がつくよね…私つて結構お馬鹿なのかな…シ

ヨック…

「どうしたの佳奈ちゃん？何かすつごく落ち込んでるけど？」

「あ、な、何でもないよ！そう、綾香とは今よりも、もつと一緒に帰つてたんだよ？」

「そ、そっか、うん、わかった。私も時間があればもつと佳奈ちゃんと一緒に帰るようにするね」

あれ……何だか綾香が少し困つたような表情をしたように見えたよ。うーん……やっぱり私つて嫌われてるのかなあ…

「綾香、やっぱりこんなお願いつて迷惑かな？」

「ううん！違うよ！迷惑なんかじゃないよ！でもね、私つて放課後に学校に残つてたりするし…佳奈ちゃんが期待するほど一緒に帰れないかもしれないし…だから…」

なるほど、そついう事なんだ。

そつえば綾香つて最近学校に残つてる事も多いかもしれない。もしかして放課後に桜井先輩と愛を育んでるのかも？つてありえ

る！

そっかー、私も流石に綾香の恋路の邪魔は出来ないもんね。

「大丈夫だよ、綾香の予定を優先でいいから」

「ありがとう。じゃあ今度また一緒に帰ろうね」

「うん！」

「あ、佳奈ちゃん！もう時間だよ。早く教室に戻る」

綾香にそう言われて私は携帯の時計を見た。

確かにホームルームが始まる時間になってる。

「あ！本当だ！綾香、やばいよ！もどろ！」

私と綾香は屋上から急いで移動した。

『ダンダンダン』と階段ホールに二人の足音が響く。

「誰ももついないよ！佳奈ちゃん、早くー」

綾香は私の目の前でその小さな体からは想像出来ない程にダイナミックに階段を降りている。

駆け降りるといふより飛び降りてるし……

稀にスカートが捲れて白い下着が見えているのはご愛嬌なのかな？

まあ見てる人がいないからいいけどね……

でも綾香のには今度からスパッツでも履いたほうがいいんじゃないかな  
いって言ってみよつと。

それにしてもよかった。私は綾香に嫌われてた訳じゃないみたい。  
綾香の恋の秘密も知ったから余計に親密になれたかもしれないし。

「待ってよ綾香！はっやーい！」

私の心にあつたもやもや感は何時の間にか消え去っていた。

あと私は解決しないといけない問題は…

あれか……あれも考えないとだめだよね……

終わり

番外編？ 悩み多き乙女です！（後書き）

杉戸佳奈という女の子がどんな子なのかを少しでもご理解頂けましたでしょうか？『ぷれしす』に登場するキャラクター個々には全て設定があります。佳奈ちゃんもその設定があり、今回の小説にそれを反映してみました。

他のキャラクターも機会があれば書きたいと思っています。本編も現在執筆中ですのでしばらくお待ちください。

## 第24話 弱い心と強い気持 前編

一彦君の告白、そして正雄に俺の正体をばらしてから二日が経過した祝日の朝。

俺が心配していた一彦君とのやりとりを佳奈ちゃんに見られた件は、昨日学校で佳奈ちゃんと話をして内緒にしてもらえる事になった。

何故か佳奈ちゃんの方から謝って来た時はすこしびっくりしたがとりあえずよかった。

佳奈ちゃんはマジで動くラジオな子だから一時はどうなる事やらと心配したんだよな。

ちなみに今日は祝日だからもちろん学校はお休みだ。

しかしこういう日に限っていつもよりも早く目が覚めてしまう。目覚まし時計を見るとまだ朝の六時だ。

「早すぎる……」

俺は布団を頭まで被り二度寝を試みた。しかし眠くないものは眠くない。

ベッドの布団の中で考える。俺って綾香になってからゲームもやらないし漫画も読まなくなったよな……だから夜にはやる事が無くてすぐ寝てしまう……

でもそのお陰もあって朝は早い時間に目が覚めるようにはなった。まあ健全な事だし良いといえば良い事なんだが……何か物足りない……

俺は布団を足で蹴りベッドの下へと落とす。そしてベッドから起

き上がり窓際へと歩み寄ると窓を開けて顔を出した。

丁度夜明けの時刻も重なり、空を見上げると夜と昼とが混じったような不思議な茜色の空が広がっている。

窓から吹き込む外気は肌寒く、冬が近づいているのだなと実感するには十分だった。

「今日もすごく良い天気になりそうだな……」

俺はなんとなくパジャマ姿のままで玄関から外に出た。

多少肌寒いがすくなくなんか爽やかな気分だ。

俺は「うーん！」と声を出しながら大きく背伸びをして軽く柔軟体操をした。

すると『ガチャン』と自転車を動かす音がどこからともなく聞こえる。

俺は背伸びをしたまま体を音のした方向へ向けた。するとそこには学生服姿の【くるみ】が立っている。

あれ？今日は休みなのにこんな時間からお出かけ？学校に用事なのかな？

そんな事を考えながらくるみを見てみると、俺に気がついたのか自転車を押して俺の横までやって来た。

「綾香ちゃん、おはよう！早起きだね」

くるみは笑顔で俺に挨拶をしてきた。

「あ、おはようございます」

「でも久々だね、朝にこうやって挨拶するのって」

確かにくるみとこうやって挨拶するのは久々だ。確かに二学期の

初めの朝に挨拶をしたような記憶があるが、その程度しか俺の記憶には無い。

基本的にはくるみは朝早くに学校に行くし、今の俺とは学年も違っている。

生活のリズムが違うから接点も無い。挨拶なんて皆無になるのはあたりまえだな。

「うん…そうですね」

俺の今目の前にいる【くるみ】は二歳から隣家に住んでいて、幼稚園、小学校、中学校、高校とすべて同じ学校に通う完全なる幼馴染だ。

それにも関わらず接点は殆ど無い。いや、無くなったといったほうが正しいか。

俺は何時からくるみと会話をしなくなったんだろう？ふとそんな事を考えた。

確か…記憶にあるのは中学の時に修学旅行が終わった位から…確かあの時からだんだんと会話が減った。そして気がついたら話す機会もほとんどなくなっていた。

「ねえ綾香ちゃん、お兄ちゃんはまだ戻って来ないのかな？」

くるみは唐突にそんな質問をしてきた。

え？お兄ちゃんって俺の事か？そうだよな？

「え？えっと…私もいつ戻るかは聞いていないので……でもそのうち戻ってくると思いますけど」

「ふーん…そっか…」

見間違いなのか、今くるみの表情が少し寂しそうに見えたけど。もしかして俺が居ないと寂しいのか？心配してくれてるとか？まさかな…別に付き合いがある訳じゃないし、ありえないよな。

「ねえ綾香ちゃん、お兄ちゃんが戻ってくる時期がわかったら教えてね」

「……うーむ…何だろうか…やっぱりくるみは俺の事を気に掛けるのかな？」

「じゃないとこんな事を聞いて来ないだろうし…」

「綾香ちゃん？」

「あ、あ！ごめんなさい！わかりました、戻って来る時は教えます」

「うん、ありがとう」

「いえいえ」

「あ！そうそう！綾香ちゃん！駄目じゃないの！もう高校生なんだからパジャマ姿で家の外に出ちゃうとか！」

「え？あ、はい…って駄目ですか？」

「駄目だよー！綾香ちゃんって自分で気がついてないかもだけど、ここ最近はずっごく女性らしくなってきたんだよ？」

「え？何それ、ここ最近って…いつの間に俺の事を見てたんだ？俺が気がついてなかっただけか？」



「え！？そ、そうですか？」

「そうなの！だから駄目だよ？変な人に目を付けられちゃうよ？」

「あ、はい…：気をつけます」

「それでよし！それじゃ、私そろそろ行くから。またね！」

くるみはそう言い残し自転車を漕いで走って行った。

俺はくるみの後姿を見ながらくるみの事を考えた。まだ仲の良かった昔の事も…

【くるみ】の本名は【八木崎くるみ】四月三日生まれ。

北彩高校の生徒会長で頭も抜群に良く常に上位。  
身長168センチ、体重はしらないが胸はでかい。

スタイルも良くて美人というよりは可愛い。悟ビジョン

中学校で短かった髪も高校で伸ばして今は後ろでふわっと纏めている。

しかし、くるみは実は中学校までは【綾香】と同じで幼児体型だった。

ちっこくておまけにメガネをかけていて見た目も冴えない女の子だった。

だが高校に入った途端にくるみは急成長を始めて身長は16センチも伸びて俺の身長を逆転しやがった。

胸なんてぺたんこだったのに脅威のHカップまで成長。どうしたらそんなに成長するんだと聞きたい。というか綾香に教えてやってくれ。俺じゃないぞ？本物の綾香にだ。

そして元々素材が良かったのか、メガネをコンタクトにして、軽

メイクをしただけイメージが一新した。すごく可愛くなった。  
今のくるみは悔しいが俺のストライクゾーンど真ん中だ。

幼馴染なのに好意が無かったのか？と聞かれれば『あつた』というのが正しい。

というか昔はくるみが『好き』だった。

なんだかんだで一番身近にいた女子だったし、くるみを中学校くらいから異性として意識をしていた。

何かの切欠でもあれば俺とくるみは付き合ってたのかもしれない。

中学の修学旅行が終わった位から急にアイツと俺はぎこちない関係になった。

今考えるとその時に関係を修復しようなんて努力すらしていなかった。

原因もわからないし、幼馴染だからそのうち関係も戻るだろうと思っていた。

でも違った…関係は戻らず、そしてくるみは昔のくるみじゃなくなった。

今では学校の人気者で誰からも慕われる存在。近くて遠い存在の女の子になった。

でもいい、俺にくるみは不釣り合いだし、俺を想ってくれている子もいるからな。

俺は茜ちゃんの事を考えた。優しい茜ちゃんを…

すると茜ちゃんの顔と同時に絵理沙の顔が…そして輝星<sup>きせい</sup>花の顔もくるみの顔も、おまけに大二郎や正雄の顔まで思い浮かぶ。

ちよつと待て！何だこのいっぱい思い浮かぶ奴らは…男も入ってるぞ！

待てよ…おかしいだろ…何か俺はおかしいだろ…

俺は小さく溜息をついて家へと戻った。

「しかしやる事が無いな……」

午前九時。俺はパジャマのベットに横たわってずっと天井を見ている。

昔なら休みの日は一日中ゲームをプレイするか漫画を読んでいた。しかし綾香はそういう系の趣味を持っていない。

綾香の部屋にはゲーム機もパソコンも携帯電話も何も無い。

本棚には綾香が小学校時代に集めていた少しの漫画と、中学の時に読んでいたちよつと硬い小説が並んでいる。あ…参考書はいつばいある…

少女マンガに小説……両方とも俺の趣味じゃない…参考書なんて見る気も無い。

まさか俺の部屋からゲーム機とディスプレイを持って来てここでゲームをやりまくるとか、俺の趣味に合う漫画を買って読みまくるとかまず出来ないし……

「仕方ないなあ……」

俺は本棚にある少女向けの漫画を手を取った。

気持ちが女になりかけてるのならこれの漫画も面白く感じるかもしれないな。

そしてぱらぱらと読んでみるがすごく面白くない。いかにも少女向けの漫画なんだぞ！というこの絵が、このタッチが、この内容が俺には受け付けられない！

何でこんなに瞳がきらきらしてんだよ！それに現実の男はそんな

に優しくねーよ！

男はな、もつとワイルドでいやらしい生き物なんだよ！

くそ…俺の趣味に合ったまともな漫画がよみてー！

という事で趣味は女になってなかった。よかった…

「そうだ！」

俺は良い事が閃いた。

確か中古本屋が隣町に出来たはずだ。そこで漫画を立ち読みすればOKじゃないか。

隣町だし知り合いだって居ないだろう。それに少年漫画を読む女子だって少なくはない！別に買うわけじゃないから見られたって大丈夫だろ！

よし！早速実行に移るぞ！

俺は颯爽さつそうとおでかけの準備を始めた。

まずは綾香のかわいらしさを維持するのにナチュラルメイクだ！よし、最初に洗顔してことつよ…あつというまに洗顔完了！

最初に化粧水を手にとってペタペタ…そして日焼け止め…その上にベビーパウダーを軽くつと…アイライナーはやめところかな…俺は下手だし。

でもピューラーには今回チャレンジしよう！最近これは出来るようになったんだよね。

よし…そしてクリアカラーのマスカラを…あとはクリアのグロス…よし！完成！

俺は鏡で自分の化粧の完成度を確認した。

おお！結構いい感じね！

次は服装だね！

私はクローゼットから何着かのお気に入りの服を出すとベットの

上へ並べた。

うーんと…今日は秋を意識してこのベージュのワンピースにオレンジのニットカーディガンを羽織るのかな？あまり派手すぎないこのイメージが私は好きなんだよね。

うん！やっぱりこれにしよう。

あとは…やっぱり自転車で移動になるから濃い目のタイツを履いて…

足元はカジュアルロングブーツかな？でも汚れたらやだし自転車の油がつかないようにしなきゃね…

まずはブーツ以外のコーディネート完了！姿見で確認！

「わ！やっぱり綾香ってかわいい！やっぱり似合ってるよね！」

まるで女の子の様にはしやぎながら後ろも確認。

「うんOK！」

その時、『ガチャリ』と音がしたと思うと母さんが部屋に入ってきた。

「ちょっと綾ちゃん、返事してよ」

「え？わ、わわわ！」

母さんのいきなりの部屋への侵入に俺は少し動揺してしまった。

「さつきから何度も呼んでるのに」

「え？あ、ごめんね」

どつやら母さんは俺を呼んでいたらしい。しかし俺が化粧や着替えに夢中で呼ばれていた事に気がついていなかったみたいだ。

「あら？綾ちゃんおでかけするの？」

母さんは俺の格好を見て笑顔でそう言った。

「あ、うん、そうだけど？それで、何？何の用事だったの？」

「あ、おでかけならいいわよ？それにしても綾ちゃん……」

母さんは俺をじっと見ながら嬉しそうな笑みを浮かべている。

「な、何？」

「綾ちゃんも最近はずっかり女の子らしくなってくれて……お母さんは嬉しいわ」

「え？」

「うん、今日の綾ちゃんすごく可愛いわよ。もしかして今日はデートなの？」

「で、デートじゃないよ！」

俺は顔が熱くなるのがわかる程に動揺した。

「あら？顔を真っ赤にしちゃって、照れてる綾ちゃんもかわいいわね」

「だからデートじゃないって！もー！お母さんやめてよー」

母さんはとても楽しそうに俺をからかっている。

「はいはい、ごめんごめん」

「で、本当に何の用事だったのよ？」

「いいのいいの。じゃあお母さんもお出かけするから気をつけてデートに行って来るのよ？」

「あ、うん……て違う！今日は本当にデートじゃないんだよ？」

「あら？大丈夫よ。お母さんは気にしないから」

「だからデートなんかしないって言ってるじゃん！」

つと……話の途中で母さんはご機嫌なままで部屋を出て行ってしまった。

まったく……なんでデートとかそういう考えになるんだよ？あと、人の話はちゃんと聞いてほしい……

つて……待てよ……

そこで俺は冷静になって考えた。

化粧とか服選びとか前よりも楽しくなっていないか？

もしかしてマジで俺って今すぐく女の子っぽくなってるのか！？

そうだよ……それだけじゃないぞ……最近化粧品を買うのも服を買うのも抵抗が無くなってる……

そして真理子ちゃんや茜ちゃん達にナチュラルメイクのご指導なんかしてもらって……

あれ？化粧中に私とか言ってた気もする……やばい、女の子っぽいかもしれない…

いや待て、これは綾香として生活する為に必要な事なんだよな？  
タブン…

決して俺は女の子になりたい訳じゃないんだ！まあ見た目は女の子だが…

でも考えてみれば別に服だって買わなくてもいいくらいにあるし、化粧だって無理にする必要だってないんじゃないのか？

もしかして俺って女としての生活に慣れていつてるのかな？

気持ちだけじゃなくってこういう所までもが女性化してるのか！？

……

いや、大丈夫だ。こういう事を考えれる時点で女にはなってるじゃない。

男だからこそそう考えるだけなんだ。そうだ！深く考えるのはやめだ！

まずは漫画だ！漫画はタブン男っばい！これなら女らしさも相殺出来るはずだ！

そんな事で相殺にはなりません。女性漫画もあります。

よし、お出掛けするぞ！

俺は家を出ると自転車を漕いで隣町へ向かった。

しかし…やっぱりワンピースだと自転車が漕ぎずらいな…

隣町の古本屋へ到着！

このお店は全国に多数のチェーン店を持つかなり大手の古本屋で、最近この町にも店舗をオープンしたんだ。



特徴としては漫画を中心とした数多くの本を扱い、規模的には中規模だが品揃えも良いという噂だ。

しかしなんかすつごくワクワクするな！これって久々に漫画が読めるからか！？

ここ数ヶ月の間に発刊され、俺が以前から購入していたけど綾香になってから読めていない漫画がいくつもある。

それが中古で並んでいるかは解らないが、並んでいたらラッキーだ。

俺はワクワクしながら早速店内へと入った。

『いらっしやいませ』と店員の掛け声が店内にこだまする。

店内は明るくとっても良い感じで、店内を見渡すと早朝でオープンしたばかりなのに結構な人が既に漫画を漁っている。

「結構人気あるお店なんだな……」

そんな独り言を言いつつ俺は目的の本があるコーナーへと向かった。

えっと……マシンガンコミックスと……ここだな……あるかな……

ずらりと並んだ中古本を端から順番に見てゆくと俺の読みたかった漫画を発見！

二十七巻と二十八巻が両方あるぞ！あれ？知らない間に二冊も新刊が出たのか。

最近は新刊チェックもしてなかったからなあ……っとそれは良いとして……俺は二十七巻を手に取ると早速読み始める。

久々の漫画はすごく面白い！今日は来て正解だった！

俺は漫画を食い入るように読んだ。

うお！この巻は面白いぞ！この展開は神だ……やっぱこの漫画は面

白いな！って何だ！？ここで終わり？いいところなのに！

っと普通だと思う所だが…実は二十八巻がそこにあるのだ！

俺は二十七巻を本棚に戻し二十八巻へ手を伸ばした。

すると同時に誰かの手が同じ本へと伸びてきて俺はその手に触れてしまった。

「あ、すみません！」

俺はそう言っただけで慌てて手を引つ込めると触れた相手の顔を見る。するとそこには見たことのある顔があった。

「あれ？姫宮じゃないか？」

なんとそいつは正雄だった…

「正雄！？何で正雄がここに？」

「姫宮こそ何でここにいるんだよ？」

「え？そ、そりゃ漫画を読む為に決まってるじゃないか」

「漫画？そうか…それにしても姫宮、お前…」

正雄は俺の全身を下から上へと流すように見た。

「何だよ、そんなにジロジロ見るなよ」

「お前、今日はやけに女の子っぽい可愛らしい格好してんな……それって化粧までしてんだろ？」

こいつ、洞察力がすっげー！このナチュラルメイクを見抜くとはよく見てやがる。

しかし俺が可愛らしいとか……言ってるで恥ずかしくないのか？可愛いのか？俺？

そんな事を考えていると、無意識に顔がかーと熱くなってゆくの  
がわかった。

や、やべ……また顔が赤くなってるのか！？って正雄に可愛いって  
言われたから！？アホか俺は！何で男に可愛いとか言われて毎度毎  
度のように赤くならなきゃいけないーんだよ……

と、取り合えずは何か言わないとな……

「し、仕方ないだろ！俺は今……女なんだから……」

「ふーん……女ね……まあいいか。そのくらいうまく化粧も出来りや、  
これからの生活にもこまんねーだろうしな。しかし、今の照れた表  
情もマジ女っぽかったぞ」

「お、女っぽいって！好きで女をやってる訳じゃないんだよ！」

正雄が冗談で言っているのは見てわかったが、それでも恥ずかし  
さもあってつい大きな声を出してしまった。

流石の正雄も俺の声の大きさを気にしたのか、周囲をちらりと見  
ると俺に小声で言う。

「おい姫宮、声がでかすぎるぞ」

「あ……」

俺も慌てて周囲を見渡した。

知らないうちに周囲のお客や店員の視線が俺達に集まっているじゃ

ないか。

やばい…ちょっと冷静さを失ってた…

ここは冷静になって対応しないと目立つだけじゃないか。  
もしもこんな所を誰かに見られたりしたらやばいしな……

「姫宮、本当に落ち着け。それと言葉使いも直せ」

グググ…ム力つく…冷静に対応しやがって…

でもまあ言ってる事は間違ってるないんだよな…

よし、俺も落ち着こう…口調も直そうか…

「それじゃまたな、姫宮」

正雄は俺の読みたかった漫画を右手に持つと、レジの方向へと歩き始めた。

「え？」

待て！俺が落ち着こうとしている最中に帰る気か！？  
っていうか！それ！その漫画を俺も読みたいんだが！

「ま…じゃない…桜井先輩、ちょっと待って下さい！その漫画を私も読みたいんです！読ませて貰えませんか？」

正雄は振り返り冷たく言った。

「今は駄目だ」

なんて冷たい一言だ……そしてなんてケチな奴なんだ……

「ケチ…」

「ケチじゃない。この本はまだ発売したばかりで中古に出てるのが珍しいんだ。だからこれは先購入しておく。という事だ」

正雄は再びレジの方へと歩き出した。

だが俺は諦めない！あの中途半端な所で終わった漫画を読まずに  
いられるか！

「ちよつと待つて下さい！どうしても続きが気になるんです！それ  
を読みたいんです！」

俺はそう言つて正雄の右袖をぎゅつと持った。すると正雄は呆れ  
た表情で俺の方を振り返つた。

「仕方ないな、来いよ、読ませてやるから」

「え？何処で？ここでじゃなくって？」

「違う、一旦はこれは買つて言つただろ？横にファミレスあるか  
らそこで読ませてやるよ」

「ファミレス？つて私はそんなにお金持つて来てないよ？」

「仕方ないな……ドリアくらいなら奢つてやるよ……」

正雄はそう言つと頭を右手でポリポリとかいた。

奢りだど！？それつて無料ただつて事だよな！？これは行くしかない  
んじゃないか！？

いや、その漫画に執着すべきなのか？ここで違う漫画を読むのも

手だぞ？

でもあの漫画の続きは気になるし……」

「どうするんだ？」

「行く！行く行く！」

俺は正雄と一緒に古本屋を後にした。

ここは古本屋の近くにあるイタリアン系のファミレス。

店内にはまだ朝も早いせいもあって、お客さんも数人しかいない。

「悪いですね、奢ってもらった上に漫画まで読ませてもらっちゃって」

「まったくだよ、姫宮は昔から遠慮っていうものを知らないよな」

正雄はアイスコーヒーを飲みながら呆れた顔でそう言った。

「え？そうですか？私はそんな事は無いと思うけど？でさ、桜井先輩はこの漫画の展開どう思う？私はこの展開は……」

「待て！話すな！いいから早く読め！俺はまだ読んでなんだぞ？絶対に内容は言うなよ。話したらもう二度とお前には漫画を読ませてやんねーからな」

あ、そうだ…俺の方が先に読んでるのか…

「あ、ごめん！OK！わかりました」

俺は漫画を読み始めた。そして二十分が経過…

「姫宮…」

「何ですか？」

「まだかよ？」

「今、読み直し中です」

俺がそう言うのと正雄は眉間にしわを寄せて顔を引きつらせている。

「おい…俺も読みたいんだよ…何でお前の方が先に読んだ上に読み直してるんだよ…」

「やばい…正雄が怒ってる…これって考えなくてもこれは俺が悪いよな。」

「まさ…桜井先輩ごめん、ありがとう、これ返す」

俺は謝りながら両手で漫画を正雄に差し出した。しかし正雄は何故か受け取らない。

「いいよ…お前の今の境遇を考えてみたら好きなだけ漫画とか読めないんだよな。だから読みたいだけ読めよ…俺はいいからさ」

「正雄はそう言うのとドリンクを取りに席を立った。

俺の胸の中で何かが『きゅん』とした。

「やばい…なんだこれ…なんでこいつはこんなに優しいんだよ…前からこんなに優しい奴だったっけ？」

「そんな事を考えながら無意識に正雄の背中を目で追っていた。

「な、何で俺は正雄を見てるんだよ…漫画、そう！漫画を読むぞ…」

「俺は再び貸してもらった漫画を再び読み始めた。

「正雄がコーラをコップに入れてゆっくりと席へ戻って来る。

「俺がチラリと正雄を見ると視線が合った。俺は思わず視線を外す。

「姫宮？どうした？」

「正雄はそう言いながら席に座った。

「どうもしてないよ…」

「そうか…」

「沈黙の時間…正雄はぼーと外を…じゃなくって俺を見ている。え？俺を！？」

「な、何で私を見てるんですか？」

「ん？いや…本当にすげーなと思ってさ」

「すげー？って？何がですか？」

「本当に姫宮は女になったんだなってな……」

「何を今更…これが現実だよ。信じられないかもしれないけど」



「世の中には不可思議な事ってあるもんだな……」

「不可思議っていうよりも、ありえない事っていう方が……」

「そうだな、まったくだ……ってこんな話はここでするべきじゃなかった……またにしよう」

「あ、そうだね」

「漫画を早く読め」

「あ、うん」

それから十分後……

「はいこれ、ありがとう」

俺は漫画を正雄に差し出した。すると正雄は漫画を受け取ると鞆に仕舞い込んだ。

「あれ？読まないの？」

「ああ、俺は家で読むから」

「え？じゃあ何でここに？」

「ん……ちよつと休憩だよ」

休憩って嘘だ……まだ十一時だぞ……

もしかして俺の為に態々《わざわざ》ここに寄ってくれたのか？  
…くそー…マジで良い奴すぎるだろ…

「ごめんね……」

「ん？どうした？」

「私の為に……」

「いいんだよ。気にすんな。俺が勝手にお前を誘っただけだ」

「ありがとう……」

「よし、それじゃあ出るか？」

「うん…あーちょっと待ってーリップクリームだけいいかな」

「え？あ、ああ……」

俺は慌てて洗面室に行き、鏡を見ながらリップクリームを塗りなおした。

「ごめん、お待たせ」

「あ、おう…出るか……」

「うん……」

正雄は食事代金を払うとレジの後ろで待っていた俺よりも先に店を出た。

「姫宮、この後はどうするんだ？」

お店をでた正雄はおもむろにそう言った。

俺は別に予定がある訳じゃない。あるとすればさっきの古本屋で漫画をもっと読むくらいか？

「別に用事は無いけど？古本屋に戻るかなーって思ってるけど？何かあるの？」

「いや…お前に時間があるならさっきの古本屋の裏で話でもしないかなって思ってな」

正雄は何か考えている様子で俺にそう言った。

何だろう…何だか言いたい事がありそうな表情…これは行くしかないか？

「え？別にいいけど？」

「すまん、ちょっとだけ付き合ってくれ」

そして俺は正雄と一緒に古本屋の裏へと移動した。

続く

第24話 弱い心と強い気持 前編（後書き）

後編執筆中です！しばしお待ち下さい。

しかしここに来ての新キャラ！？というのが設定はあったのですがなかなか出て来なかったという子です。

これからも宜しくお願いします。

## 設定資料 24話までの主要登場【女の子】の紹介（前書き）

一周年！早いものでこの小説を公開してからもう一年が経ちました。というか一年経っても小説が終わっておりません…

とりあえずは記念で何か小説を書こうと思ったのですが、そういう時間も無く、設定資料を九月に纏め直してあったのでそれを手直して公開します。

ネタバレ要素もあります。あとで消す内容もあるかもしれませんが、新しい小説では無く申し訳ありませんが、隠し設定なども入っておりますので気になる方は見て下さい。

ここまでの挨拶文は一周年用ですので後日消します。ここから本文。

今までに出た人物の紹介です！正直見る必要性はありません！ご興味のある方は見てください。

但し今回の人物は要するに女性だけです！それも厳選された七人です！

私のホームページにも紹介がありますが、ここでの紹介はまたこの為だけに書いたものです。

紹介人物：姫宮綾香【本物】・宮代真理子・越谷茜・杉戸佳奈・野木絵理沙・野木輝星花・八木崎くるみ

最初は普通の紹介ですが、後半は各人物のネタバレ要素の紹介をしております。

まだ小説では出ていない内容や小説で公開予定の無い隠し要素も含まれていますので、見る場合はそこもご了承お願いします。

## 設定資料 24話までの主要登場【女の子】の紹介

### 通常の紹介

名前 ひめみや 姫宮 あやか 綾香  
年齢 15歳  
身長 142センチ  
体重 39キロ  
その他 幼児体型  
誕生日 11月20日  
髪の色 ストレートの黒髪（肩までである）  
部活 まだ入っていない。  
趣味 読書

主人公である姫宮悟の妹。

よく本当に悟の妹かよ！と友人に言われるほど小さくてかわいかった。

スタイルはというと高校生とは思えないくらいの幼児体型で、本人はその事を一番気にしていた。

制服時はまだましで、私服の時には小学生と間違われる時すらあった。

昔からそのかわいい容姿で男子よりも女子には人気があった。

兄の悟が小さい時から大好きで一緒に大宮まで買い物にも行く程に仲良し。軽いプラコン状態。

大人しくって純情で成績も優秀で身長の関係無いスポーツであればそこそこ出来る子。

この春に兄【悟】と同じ彩北高校へ入学して楽しい高校生活をエ

ンジョイするはずだった。

しかし夏休みに山口へ帰省する為に乗った飛行機が墜落事故にあっ  
つてしまい本人は消息不明になる。

事故後の調査打ち切りで死んだ事になってしまったが、命の灯火  
により生きている事は確認されている。しかし何処にいてどういう  
状態なのかが不明。

学校では綾香【悟】が綾香にそっくりで蘇生した関係で誰も本人  
が行方不明だとは思っていない状況。

名前 宮代 真理子

年齢 16歳

身長 165センチ

体重 内緒

その他 高校一年には見えない位に大人っぽい

誕生日 7月14日

髪の色 黒色の腰まであるストレートヘア

部活 吹奏楽部・生徒会執行部

趣味 ネットサーフィン

知らない人の前では大人しめだが、茜や佳奈等の友達の前では普  
通に話をする。

多少の人見知りな感じがあるのだが、クラス委員長などは率先し  
てやるというちょっと変わった子である。但し推薦があつた場合で  
あり、自分から手は上げない。

高校に入ってからもクラスの委員長を務めており、正義感は強く、  
礼儀正しい。そしてすこし理屈っぽい。

成績は綾香【本物】よりも上で常に学年首位争いをしているレベ  
ル。

今は成績の落ちた綾香【悟】へ宿題を見せてくれたりするようになった。

綾香とは兄つながりで小学生の頃からの知り合い。但し、中学は部活動の為に私立中学校へ行っていた為にそこまで仲良しでは無かった。

茜、佳奈、真理子の三人中では悟と一緒にいた時間が一番多いかもしれない女の子。

真理子は悟を良く知っている。特に好意は無かったが話しも普通にしていた。

現在、綾香の事を一番心配してくれているのは実はこの真理子である。

綾香の成長は止まっているが、真理子は絶賛成長中！本人は胸が邪魔らしい。

スタイルは抜群で男子からも隠れて人気がある。しかし本人に彼は作る気はないらしい。

運動も出来るのですが万能なうらやましい子。

名前 越谷 茜 こしがや あかね

年齢 16歳

身長 156センチ

体重 内緒

その他 普通の女の子

誕生日 5月22日

髪の色 黒色でショートカット・少しふわりとした感じ

部活 バレー部

趣味 お菓子作り・買い物・映画鑑賞・カラオケ

買い物とか映画とかカラオケが大好きないかにも青春エンジョイ



中な普通の子。

佳奈とは中学校からの友達で娯楽面ではかなり気が合っていたらしく、高校に入っても仲が良い。しかし佳奈のようなイケイケな子と一緒に自分を出せなくなるような性格で、綾香【本物】と2人の時には素の自分が出しやすかったみたいである。

綾香【本物】には高校に入学前から心を開いており、3人の中でも一番仲がよく相談もする。以前は佳奈が一番仲良しであったが、ある日から少し距離を置く。

自分の自転車を直してくれた悟の事が何時のまにか好きになってしまい、夏休みの前に綾香【本物】にその事を打ち明けていた。

綾香【本物】もその恋を応援すると言ってくれていたが、悟が行方不明になってしまった為に告白は出来なくなってしまうた。

しかし、夏休みの途中で綾香【悟】と話をする事によって元気を取り戻す。

運動は大好きだけど勉強は結構苦手で英語と数学は絶望的である。佳奈・真理子・綾香と比べると周囲から見れば特徴が一番無いが、いわゆる普通にかわいい女の子である。

ちなみに高校になるまで男性から告白された経験は無く、また異性と付き合った経験も無い。

名前 杉戸<sup>すぎと</sup> 佳奈<sup>かな</sup>

年齢 15歳

身長 158センチ

体重 内緒

その他 成長して欲しい部分がなかなか成長しない！

誕生日 12月11日

髪の色 生まれた時から色素が薄く全体が茶色がかっている。

セミロングで綾香よりも長い髪だが、学校ではサイドに纏めてい

る。

部活 なし（中学時代は運動部だった）  
趣味 人と話す・買い物・カラオケ

明るくて思いやりがあるが時々強引なところがあり扱いにくい子。  
買い物が好きで、休みの日には間違いないとお買い物に行っている。

高校の帰りもまず100%寄り道をする。

すこし強気な性格で正義感が強く、自分が正しいと思うとなかなか折れない強情っぱり。

喜怒哀楽が激しく、すぐ笑い、すぐ怒り、すぐ泣く。

何故か男には負けたくないという意地がある。理由はわからない。  
佳奈の悩みはスタイル。身長こそ伸びているが、その他の部分の成長がまったく無い。

本人は中学時代には胸なんていらな！と言っていたが、今は少しは成長して欲しいと願い毎日を送る。

スタイルが良くない自分を女の子らしく見せる為にファッションだけはかなり勉強しており、私服で大人っぽくしてる。

以前はバスケットをやっていたが中学の時に怪我をした為に辞めた。

ちなみに恋愛に関しては積極的だが、彼氏が出来る気配は無い。

名前 野木のぎ 絵理沙えりさ

年齢 16歳？

身長 165センチ

体重 内緒

その他 単純に美少女・瞳の色は茶色（濃い茶色）

誕生日 不明

髪の色 茶色のストレートロングヘア（明るめの茶）

部活 なし

趣味 ????

姫宮悟を実験の失敗で殺して蘇生させた北本絵理という歴史の先生の本当の姿。

そして野木一郎【輝星花】の実の妹。

両親の都合で三年間アメリカで過ごしていたという設定で野木一郎【野木輝星花】の妹という事で学校へ編入する。

野木輝星花の双子の妹で本物の魔法使い。

魔法は封印されてしまったが、魔法を使えなくても人の心を感じる能力を備えている。

その能力で悟の綺麗な心に気がつき、ある事件を切欠に悟を本当に好きになってしまった。

綾香【悟】に野木一郎【輝星花】がちよっかいを出すと怒るのは最初は野木一郎の行動が嫌だからだったが、後半は輝星花に対する嫉妬心によるものである。

ある時、（14話参照）姉である輝星花が魔法力が尽きてしまい元に戻れなくなり、悟に輝星花の姿を報告しようとした時、その行動を輝星花が悟に告白しようとしていると勘違いしてしまい自分も悟の事を好きだと勢いで告白してしまう。

しかし悟には絵理沙の告白は本気だと思われていない。

絵理沙は魔法使いと人間は一緒になれないのを自覚しており、告白以降は自分の気持ちを抑えて綾香【悟】と接する。とうか綾香【悟】を避けるようになった。

避ける為に早く帰宅するが、それがあまりに早く超特急帰宅女子高生としてクラスでも有名になる。

昔から人付き合いが下手で、告白以降は悟とも極端に距離を置いてしまった為に悟との関係も次第にギクシャクしてしまった。

綾香達、仲良し四人組の会話等にもあまり参加はしない。

しかし唯一茜とだけはかなり親密な関係になっており、大宮と一緒に買い物に行つてからは更に仲良くなった。(16話以降を参照) 姉の輝星花(きせいか)を昔から大嫌いだったが、今回一緒に生活する事によつて自分の事を考えてくれている姉だと知り関係が改善している。

(15・5話参照)

悟に対する恋心はずっと続いている。

名前 野木<sup>ノキ</sup> 輝星花<sup>きせいか</sup>

年齢 16歳?

身長 165センチ

体重 内緒

その他 絵理沙と同じく美少女・瞳の色は紅色(絵理沙とは瞳の色だけ違う)

誕生日 不明

髪の色 茶色のストレートロングヘア(明るめの茶)

部活 なし

趣味 ????

野木一郎の本当の姿。野木絵理沙は双子の妹。

両親に幼くして男(変身して男の姿で)として育てられた。

また、絵理沙とは殆ど一緒の時間は過ごしておらず、姉妹なのに他人のような関係だった。幼くして英才教育をされ、幼い時期から変身能力を含めた高度な魔法が使えるようになり、そして最年少で魔法管理局に勤める事になる。(14話参照)

輝星花<sup>きせいか</sup>という自分の名前が嫌いであり、それは自分が名前のように輝く星ではないからという理由だから。

常に冷静で落ち着いて行動しよと心がけているが、悟に対してだ

けは冷静さを失なう時がある。そして悟に対しては少しだが気を許してしまう事もある。

妹の絵理沙との関係はかなりぎくしゃくしていたが、お互いの気持を話合う事によって関係も改善した。(15・5話参照)

絵理沙の特殊能力【自己自然強化魔法等】や無意識に使う高等魔法【染色体変化・原子レベル蘇生魔法】に対して危機感を覚えており、いつか絵理沙は自分を抜く魔法使いになると思っている。

絵理沙の悟に対する恋愛感情は認めてはいるが、応援しようという気持ちは無い。

そして、絵理沙に自分も悟に恋をするはずだと言われたが強く否定した。

しかし、無意識に輝星<sup>きせい</sup>花の気持ち<sup>きもち</sup>が悟に向いている事を絵理沙は最初から感じとっていた。(18話以降)

名前 八木崎くるみ(やぎさき くるみ)

年齢 18歳

身長 168センチ

体重 内緒

その他 少しだけぽっちゃり系だが脅威のHカップ

誕生日 4月3日

髪の色 黒色でセミロングだが学校では後ろでふわりと纏めている。

部活 吹奏楽部・九月までは生徒会長

趣味 読書

北彩高校の元生徒会長で頭が抜群に良く学年の上位の常連。運動も平均以上に出て苦手な種別も無い。

実は悟の実質的な幼馴染で幼稚園から高校までずっと一緒だった。

昔はかなり仲良しだったが中学二年の修学旅行の後からだんだんと疎遠になってしまい、今では殆ど会話もしなくなってしまうている。

高校入学から身体が成長を شدしたという特異体質。

身長は入学から16センチ伸びて、バストもAからHまで一気に成長。

めがねをコンタクトにして髪を伸ばした為に中学時代の友人が今くるみに会っても本人だとはわからない位の変貌を遂げた。声だけは変わっていないのでそこが判断材料。

元々の素材も良かったのか、軽いお化粧をするだけですごく可愛くなる。

絵理沙や輝星花のように美人系では無いが男子に人気がある。

少し突っ込んだ各女の子の紹介

ここから先は多少ネタバレ関係もあります。

姫宮 綾香

綾香は何等かの形で生きている事が判明（第7話参照）しているが連絡の取れない位に精神が不安定な状況にある。  
予想では事故の影響で記憶喪失か、又は事故の影響で現在も意識がない。

体型は綾香が一番気にしているポイントで、小学校六年生で身長がほぼ止まってしまい、高校に入学するまでに三ミリしか伸びていない。

全てにおいて成長が遅くこのまま大人になっちゃうのかと本人はかなり心配をしている。

高校一年生だが初潮もまだ。

中学校時代は美術部に所属しており、三年では部長を務めていた。優しく、後輩からも慕われており、実は中学時代には何度か告白された経験を持つ。

恋人をつくるという事に対してはかなりの抵抗を持っており、まだいいやと何時も逃げ腰だが告白されてもキツパリと断らない為に告白相手が諦めない事も多々あった。

自分は彼氏なんていらなそうと思いつつ、兄である悟には彼女が早く出来て欲しいと思っている。自分は妹だからお兄ちゃんの彼女にはなれないのだという想いがあった。

友達がたくさんいたのだが、家には茜や佳奈すら滅多に連れて来ない。

それは悟に彼女が出来てもいいと思いつつも女の子を合わせたく無いという綾香の無意識な考えからである。よって高校入学までは悟は綾香の友達では真里子以外に知っている子が居なかった。

一学期の六月末に茜から悟が好きだという相談を受けて、茜ちゃんなら…茜と悟を引っ付けようと努力し始める。

しかし茜が悟に告白をする前に事故にあってしまった。

宮代 みやしろ  
真理子 まじこ

宮代貴裕の妹で、悟は兄である貴裕と小学校時代から一緒の空手道場へと通っていた関係で面識があった。又、綾香とも昔から面識

がある。

桜井正雄・宮代貴裕・姫宮悟・清水大二郎は同じ空手道場へ通っていた。

高校入学当時から綾香で初めて一緒の学校に通う事になった。真理子は綾香とは友達というよりも保護者的な立場で現在まで付き合っていた。

それは綾香は少し抜けてて同じ年なのに妹みたいに見えるので真理子は綾香がドジをしたら守ってあげようと思っていたからである。要するには綾香が可愛いのだ。

実際に綾香【悟】が佳奈に怪我をさせそうになった時（20話参照）にはすぐに綾香の元に来て、そして佳奈に対して激怒した。

とは言っても仲良し四人の中では一番綾香には話かけて来ない。これは必要以上に話をしないという真理子の性格から。

男性に対しての恋愛感情がまったく芽生えておらず、友人や兄の知らない所でネットに嵌っている。

そこで見つけた空想恋愛サイト（GL・BL・純愛なんでもあり）にはまり、現実よりも空想世界へと移行しつつある女の子。

もう少しで隠れ腐女子になる予備軍ともいえる。

越谷 こしがや  
茜 あかね

中学時代は実は佳奈と一緒にバスケット部に所属していた。

高校に入学してから佳奈と喧嘩をしましバスケットを続ける事を辞める。そして前から興味があったバレエ部に入った。

しかし本当は今でも佳奈とバスケットをしたいと思っている。

人と話すのは大好きだが、自分よりも話しをする人間がいる場合はあまり話さないようにしている。



信用・信頼という言葉が好きで、出来る限り人を疑う事はしたくないと思っっている。

だから綾香【本物】が事故にあって、悟が綾香【本物】の代わりに綾香【悟】になってからの綾香の変化に誰よりも気がついていて、実は心の奥では綾香【悟】を本人では無いのでは？と疑っている。しかし茜はどんなに変わったとしても本物の綾香だと信じるようにして、自分の奥に秘めた気持ちを表に出さないようにしている。

恋愛は悟が純粹な意味での初恋の相手である。一目ぼれでは無く悟に一年前に自転車を修理してもらったお礼が言いたいと思っっているうちにだんだんと意識するようになってきた。

ずっと捜してはいたが、人には相談などしていなかった。

高校に入り悟を校内で見つける。そして悟が綾香の兄だと知りも of 凄く驚く。

悟の事を綾香からも話を聞くようになってから以前にも増して意識するようになる。そしてそれが恋だと気がついた。

現在は他の男子生徒からも告白された事もあるが、悟への想いを断ち切れずに悟が自宅に戻るのを待っている。

杉戸 すぎと 佳奈 かな

生まれた時から髪の色が茶色く、幼稚園・小学校時代にはそれが原因で何度もいじめにあっている。特に小学校低学年の時に男子生徒から受けたいじめが原因で一時は不登校になった時期もあった。それは小学校を転校する事によって解決する。そしてこの街へやって来た。

佳奈は嫌な事を忘れる為にバスケットを始める。

運動センスは元々良くすごい勢いで上達してゆく。

その後は中学校三年までずっと続けていた。

中学校三年の時にバスケットの試合中にアキレス腱を切つてしまい手術をする。

リハビリをして歩けるようにはなったが、再びバスケットをする自信が無くすごく弱気になっていた。

その時に茜にすごく励まされて精神的には立ち直ったが、やはりバスケットをやる事に対しては抵抗があり、それが原因で茜と大喧嘩をしてしまう。

しかしその後茜とは仲直りをした。但し、その喧嘩が原因で茜はバスケットを辞めた。

本当はバスケットを茜と一緒にやりたいと思っている。

綾香とは高校に入ってから急激に仲良くなった。

それは綾香も部活に入っておらず、一緒に帰る事も多くなったからだ。

そこですごく波長が合つて、又、茜が綾香と中学時代から仲良しだったのもあって親友の関係になった。

佳奈は友達こそ多いが、本当に親身に話せるのは綾香と茜しかない。どこかで他の人とは壁を作っている。

実は明るく振る舞っているが、一番精神的にも身体的にも苦痛を味わって来た女の子。

野木のぎ 絵理沙えりさ

絵理沙は悟を魔法実験の失敗によって殺し、そして蘇生をさせてしまった罰として素顔のまま人間界に留まった。

というのは絵理沙の口実である。実際はそんな罰は存在していない。

絵理沙の自分の意思によって人間界に残っている。

輝星花きせいりは絵理沙が魔法が封印されてから何度も魔法世界へ戻るよ

うに言っているが戻る気配を見せない。そして悟への告白事件の以降も輝星花に魔法世界へ戻る様に言ったが結局は人間界に居座っている。

理由は自分が悟と一緒にになりたい訳でも悟と茜がカップルになるのが嫌な訳では無い。

姉である輝星花が悟に恋をしてしまうのではという焦りからだった。

輝星花の気持ちは野木輝星花をご参照ください。

魔法を封印された絵理沙だが、実は特殊な能力があり魔法を使わなくても魔法を使ったかのような力を出す事が可能だ。

代表としては【自己自然強化魔法】である。

これは魔法力を使わずして自分自身を強化出来る魔法で、絵理沙もこの能力には気がついていて。だからこそ屋上から飛び降りたりした。

又、習ってもいない高度な魔法を無意識に唱える事なども出来る。代表としては【染色体変化・原子レベル蘇生魔法】である。

これは高等魔術よりさらに上を行く魔法で、死者をほぼ他人として生き返らせる事が可能な、扱い方によってはかなり危険な魔法である。

現在の悟は記憶が残っているので自分を悟だと認識しているが、現代の人間が持つレベルでの判定、DNA鑑定や指紋鑑定、血液検査、染色体検査等では姫宮悟だったと判断は不可能である。

そういう驚異の魔法を無意識に唱えたのである。

輝星花はそんな絵理沙がさらに別の魔法が覚醒するのを恐れている。

野木 輝星花

綾香と絵理沙の監視役として魔法世界からやって来た。

本当は輝星花が派遣される予定では無かったが、高等魔法である蘇生魔法を絵理沙が使った為に輝星花が派遣された。

その当時は単純な性転換魔法と蘇生魔法を組み合わせたものであり、【染色体変化・原子レベル蘇生魔法】とは思われていなかった。

現在は絵理沙の監視も重要な任務。

悟とは特別な感情等はまったく無かったが、絵理沙の悟に対する気持が知らず知らずに双子である輝星花に音叉のように伝わり、本人の意志とは別になんだかんだと悟が気になる存在になっていた。男に変身をしている時に悟の胸を掴んだりするのは、悟に興味があつたから。

別に綾香【悟】の胸に興味があつた訳ではない。

綾香【悟】とうまくコミュニケーションが取れるようになってからはそういう事は一切やらなくなった。

最初は絵理沙を早く魔法世界に戻す為に悟君を元の姿に戻したいと思っていたはずが、何時の間にか悟君を守ってあげたい、助けてあげたいと思いついてる。

絵理沙と違い、通常の魔法使いよりも魔法力がある輝星花が本当の自分の姿を他人にはらすという事はありえない。

しかし魔法力が一時的に切れた輝星花は悟の前へ現れ、そして自ら自分が野木一郎の正体だと明かした。

悟へは自分の全てを知ってもらっても良いと心の奥で思っており、絶対に話さなかった男として育てられたの理由までも悟には明かした。

女性としての恋愛の経験がまったく無く、恋愛が何かをわかっていない。

絵理沙には輝星花は悟に対して恋をすと言われて否定したが、  
事実、本人が気がつかない間に輝星花の心には悟が入り込んでき  
いた。

本人の自覚は本当になかった。

輝星花には特殊な能力があり、魔法を使わなくても近くにいる人  
間の考えがわかる。

但し、持続的に魔法力を消費しており魔法力がつきるとこの能力  
は使えなくなる。

この能力によって無意味に近くの人と考えが解ってしまい、幼少  
時代にはそれが輝星花自身を苦しめていた。現在は思考を読む能力  
を止める事が可能にはなったが、輝星花はあまり人とは接触したく  
ないと思っている。

一つポイントがあり、自分よりも能力の高い魔法使いの思考は読  
めない。

輝星花は絵理沙がいつか自分を越えるすごい魔法使いになり、そ  
して危険な魔法を覚醒して覚えるのではと危惧している。

それは以前まで読めたはずの絵理沙の思考が、魔法を封印されて  
いるのに読めなくなってしまうからだ。

輝星花は近い未来に何かすごく危険な何かが起こるのではとずつ  
と考えている。

八木崎くるみ（やぎさき　くるみ）

幼稚園・小学校・中学校と悟とずっと一緒の学校であり、隣同士

に住む幼なじみだった為にくるみは小学校高学年の時には悟を好きになっっていた。

中学校では同じ学校になった悟の親友であり、くるみの友達でもある正雄に恋愛相談して、中学校の修学旅行の時に悟について告白を決行する。

しかし、その時に悟の妄想癖のせいであるくるみの告白を聞いておらず、くるみも悟の反応でふられたと誤解してしまい告白は大失敗に終わった。

当時は悟もくるみに好意があったが、余計な妄想しており、考え中に告白されてその話を聞いていなかった。

ここは小説の中でも出て来ますので詳しくは書きません。

告白失敗：しかし、その後もくるみは悟が好きな事は変わり無く、疎遠そえんにはなったものの少しだけ交わす会話でも満足していた。

そして悟に彼女がずっと居ないのも知っており、私が悟に認められる女の子になったらもう一度告白する！という意気込みで悟と同じ高校に意図的に進学する。

高校三年になり、自分に自信がついたくるみは生徒会も落ち着いた夏休みに告白をしようと思っていた。

しかし悟が行方不明になってしまい告白出来ずに困惑。

十一月のある日、正雄に悟に告白したいに行方不明になって戻って来ないからどうしようかと相談をする。

桜井正雄はくるみが好きで、高校一年の時に正雄に『まだ悟が好きなのか』と聞いた。くるみは『うん、まだ悟が好きだよ』と返事をした。

ここからは今後の小説で色々出てくる要素だと思えますので以上とします。

絵理沙と輝きりつ星花についてもこれからの小説で色々出てくるかと思

います。

その上で色々書いてゆきたいと思っています。

**設定資料 24話までの主要登場【女の子】の紹介（後書き）**

現在後編は執筆中です！十月初旬には公開したいと思います。  
しばしお待ち下さい。



第25話 弱い心と強い気持ち 後編(前書き)

お待たせしました！後編です！今回はおまけ付きです！って本当に  
おまけですけどね。

## 第25話 弱い心と強い気持ち 後編

俺はファミレスを出て、正雄の後を無言で歩いて付いて行った。正雄はファミレスを出てからずっと何かを考えているのか、ずっと無口で俺には何も話しかけて来ない。

しかし俺になんの話があるというのだろうか？お店の裏で話したという事は人気を気にしているという事だよな。やっぱり内緒の話っていう事なんだろうか？

そんな事を考えながら歩いてみると古本屋の裏に到着した。

この古本屋の裏には一応道路が通っているが、抜け道に使える訳でも駐車場へ入れる訳でも無く、交通量はまったく無いに等しい。その結果人通りも無く人気も無い。

確かにここは内緒話をするには丁度いいかもしれない。

俺の額から一筋の汗が流れた。しかし日差しが暑いな。

家を出る時に今日は陽気は良いと予測してそんなに厚着をしたつもりは無かった。それでも額に汗が滲むのがわかる程に日差しが暑く感じる。

俺は右手で日差しを遮りながら空を見上げた。

朝の肌寒さが嘘のように太陽が俺達を照りつける。そしてぐんぐんと気温も上がっている。

この日差しの下で話すのはちょっときついな……

立ち止まりそんな事を考えていると俺を呼ぶ正雄の声が聞こえた。

「おい姫宮、こつちだ」

声の方を見ると正雄は十メートルへ進み先で俺を呼んでいる。

「あ…」

俺は小走りで正雄の元へ向かった。

「姫宮、ほら、こっちだ」

俺が横まで来ると正雄は店舗の裏口にある社員用の駐輪場らしき場所へと入って行く。

「よし、ここならそんなに暑く無いな」

正雄は俺の考えた事が解っているかの様に日差しを遮る場所へと俺を誘導してくれた。

「あ、うん、そうだね」

確かに、この場所は時間的に日陰になっているし屋根もついている。ここであれば日差しも暑さもそれ程は気ならない。ただ座ってゆっくり話しが出来るような場所では無い。俺が周囲をキョロキョロと見渡していると、正雄も周囲を見渡している。

そして人が無いのを確認すると話しを始めた。

「よし、誰もいないな」

「はい」

「姫宮、あのな…」

「はい…」

「ちょっと聞きたい事があったんだ」

「…はい…でもその前にちょっといいですか？」

駄目だ！何と云うか、正雄と二人きりで人気も無いのに女口調で話す必要はあるのか？すつごく話しづらいし！

ここは正雄に今だけでも普通に話していいか言ってみるか。

「桜井先輩、人気も無いのにこんな口調で話さない駄目ですか？普通に話してもいいですか？」

「あ……そうだな」

正雄は腕組みをして少しだけ首を傾けて考えた。しかし悩む事無くすぐに返事が来た。

「お前も普通に話したいだろうし、ここならいいぞ。実は俺もお前の女言葉は違和感あるんだよな」

よし！正雄の普通にOKを貰った。これで心置きなく悟として話しが出来るぞ。

「そうだろ？俺も女言葉はあまり話したくないんだよな。特に正雄とはな」

俺がそう言つと正雄は笑みを浮かべた。

「で、正雄、話って何だよ」

そう聞くと正雄は先ほどまで浮かべていた笑みが消え真面目な表情になる。

「悟……お前はこの先の事をちゃんと考えてるのか？」

「え？この先の事って何だよ」

この時、正雄の質問の意図がまったく理解出来ていなかった。

「そのままだ。これからの生活、妹が見つかった時の事、男に戻った時に事、色々と考えておくべき事はあるだろ？お前は何も考えてないのか？」

俺は何か答えようと思ったが何も答えられない。

あまり深く考えずに生活をしてきた俺に突然そんな事を聞かれても何も答えられるはずもなかった。

「ええと……」

懸命にこれから先の事を考えてみる……これからの生活？現状維持？妹が見つかったら？あれ？どうすればいいんだ？ええと、綾香が見つかったら戻って来てもらって……来年の七月位には魔法力が溜まって、俺が元の男に戻る……それじゃ駄目なのか？

俺が考えているとそれを見かねてなのか、正雄が話を始めた。

「どうせお前の事だ。今の生活は現状維持で、妹が見つければ戻って来てもらえばいい。そして時期が来たら元の男に戻ればいいやなんて軽く考えてるんだろ」

正雄はまたもや俺の考えをほぼ正確に当てて来た。

「な、何で俺の考えがわかるんだよ!？」

「まったく……やっぱ悟だよな」

正雄は呆れた顔で俺を見る。そして笑みが少し戻った。

「何だよそれ?それじゃ悪いのかよ?」

「いや、悪くない。お前の思考レベルだと考えもそんなもんかなって最初から思ってたからな」

「ちよつと待てよ!お前の思考レベルだと考えもそんなもんかなって何だよ!俺を馬鹿にしてるのか?」

「まあまあ怒るなって。逆に変な事を考えていないから良かったと思ってるよ」

「はあ?変な事?正雄が言ってる意味わかんねー」

俺はその時は正雄の言っている意味が本当にわからなかった。

しかしその後の会話で正雄が俺の事をすごく考えてくれていた事がわかる。

「悟、お前は優柔不断の癖にその場凌ぎな性格だ」

「今度は性格!?俺の性格なんてお前に関係ないだろ?」

「ああ、無いよ。でもお前にはすごく関係のある事だ。どうなんだ?お前の性格は優柔不断でその場凌ぎじゃないのか?」

正雄に真面目な顔でそう言われると否定出来ない。確かに俺はあまり考えて行動するタイプじゃない。

「まあ…そうかもしれないけど…」

「だろ？だからこそ予想の出来る事であればきちんと考えて行動する事が大切なんだ」

「でも考えて行動ってどうするんだよ？」

俺がそう質問をすると正雄は既に考えが纏まっているかのようにすぐに答えて来る。

「まずは妹が見つかったら。見つかってもすぐにこっちへ戻って貰うのは得策じゃない。お前が男に戻るまでは妹にはまだ戻らないようにしてもらおう方が良い。それが出来ない場合には事前にあの魔法使い、絵理沙っていう女と野木先生に相談をするべきだ」

「そ、そうだな…」

「そしてお前が男に戻るべき時期が来れば妹に戻って来てもらう。これがベストだ」

「確かに…」

「そしてこれからの生活において重要なのは交友関係だ。お前の妹の為を考えるのであれば変な交友関係は持つべきじゃない。現状の知人や友人関係は最低限維持して、その他の関係はなるべく作らない。関係が多くなればなるほど後が面倒だ」

「あ、ああ…俺もそう思うし、なるべくそうしてる」

「よし、お前でもそこは考えてると思ってたよ」

「そして異性との関係。そう、今だと一彦とか大二郎とかとの関係だな」

「えっと…それもちゃんと考えてるぞ？だから一彦君にも付き合い合えないって言ったし、大二郎にもちゃんと付き合い合えないって言った」

「ほう…でも一彦は高校に入ればお前と、いや姫宮綾香と付き合い合えるって今でも思っているぞ？」

「あ…あれは一彦君が勝手に勘違いをしただけで…今度ちゃんと誤解を解こうと思ってるし」

「馬鹿！何が今度だ！お前はそうやって物事をすぐ後回しにするだろ。一彦には即日断るべきだったんだ。勘違ってお前が思っているだけで一彦は思っていないんだぞ？」

俺は久々に正雄に怒鳴られた。

「……俺だってあの時に一彦君に勘違いだって知らせようって思ってた……」

「思ってた？思ってた何をした？結果的には何もしてない。そうだろ？」

返せない…正雄の意見に対して俺は何も言えなかった。

確かに正雄の言う通りで、俺は考えはするが行動が後回しになる



事が多い。

それが駄目だとわかってても結果的にそうなるケースが多い。現にあの日、佳奈ちゃんとのアクシデントで一彦君の誤解を解くのに一度失敗した。だけどあの後で正雄が俺が悟だって知ってくれた。その時に正雄にすぐに一彦君の誤解を解くようにお願いだって出来た。

自分で行動が出来なくても頼む事だって出来たんだ。だが俺は何もしなかった。

そして最悪なのはその後もずっと何もしていない事だ……だから一彦君は今だに勘違いしたまま……

そうだよ、結局は俺はどうにかなるなんて甘い考えを持っている……正雄の言う通りだな……

「おい、そんなに落ち込むな。もう終わった事だ」

「でも……やっぱり正雄の言う通りだし、一彦君の誤解は今でも解けてないし……」

俺はそれ以上言葉が続かなかった。

「悟、大丈夫だ。これからは俺がちゃんとフォローしてやる。お前に言っただけ無かったが一彦にはあの日のおうちに俺から電話でお前の勘違いだって伝えた。あいつはかなり残念がってたが仕方ないよな」

俺はその言葉に驚いた。

「え？じゃあ一彦君の誤解はもう？」

「ああ、完全に諦めたかは知らないが、お前が、いや、姫宮綾香が一彦に対して特別な感情は持って無い。あれは一彦の勘違いだって

伝わってる」

知らなかった…俺の知らない所で正雄は俺を助けてくれていた。

「正雄…」

「今までの事はもういい、これから先の事を一緒に考えて行こう」

「…」

くそ、何も言葉が出ない……正雄に何か言わないと駄目だろ……ぶっちゃけお礼とか言うのがとても恥ずかしい。俺のキャラでも無い。

でも今回はちゃんと感謝を伝えなきゃ駄目だろ！

「正雄、ありがとう…」

俺は小さな声でそう言った。

「いや…お礼なんていいよ」

正雄は少し照れた表情でそう言った。

そんな正雄を見ていると緊張でなのか、俺の心臓が『バクバク』と強く鼓動し始める。

あれ…俺は正雄に対して緊張してるのか？落ち着けよ悟……

そう思っても俺の心臓の鼓動はさらに強さを増す。そして胸が締め付けられるような感覚…この感情ってもしかしてまた…くそ！顔が熱い！

俺は思わず俯いた。

「おい悟？どうしたんだ？」

正雄は心配そうに俺の顔を覗き込む。

俺は俯いたまま上目づかいで正雄は俺の目をじっと見た。すると正雄と視線が合った。

思わず首を横に向けて視線を反らす。『ドキドキ』と俺の心臓音は更に高鳴る。そして顔は火照るように熱くなる。

駄目だ…意識してる…このままじゃ…

「おい？お前変だぞ？どうした！？」

くそ…何でお前はこんなに優しいんだよ…何で俺の事をこんなに考えてくれるんだよ…何でこんなにも頼りになるんだよ…

そして…何よりも俺の事を想ってくれている正雄…やばい…俺は正雄の事が…

待て！な、何を考えてるんだよ！俺は男だぞ！？強く意識を持ってっついても思ってるじゃないか！

男なんだ！男なんだよ！俺は男なんだ…でも…今は…女…なんだよ…そう…女だ…

そつだよな…今の俺は女で正雄は男なんだ…だからこんな気持ちになるのも当たり前なんだ…

いいんじゃないのかな…正雄なら私が元男だっけ知ってるし…うん…正雄ならきつと私を受け入れてくれるよね…

私はゆっくりと顔を上げて正雄の目をじっと見た。

あれ？何だろう『ドキドキ』しているのに『フワフワ』と酔っているような気分になってきちゃった…

「悟？おい！」

ちゃんと伝えよう…正雄に…私の今の気持ちを…

「正雄……私は……正雄の事が……」

正雄の表情が一気に険しくなる！そして正雄は俺の台詞に割り込むように怒鳴った！

「悟！やめろ！」

そしてそれと同時に左手で俺の右手首をぎゅっと強く掴む。

「痛い！」

強く握られた手首に痛みが走る。

「悟！正気になれ！」

そして俺は正雄の怒鳴り声と手首の痛みで我に返った。

「あ……あれ？お、俺は何を……」

「ふう」

正雄は大きな溜息をついた。

俺は何をしてるんだ！あれほど男だって言い聞かせてたのに……  
やばかった！俺はとんでもない一言を口走りそうになっていた。  
何してんだ！俺は男で正雄も男だぞ……なんで変な気持ちになるんだよ……

そう、さっきもそう念じたんだ、俺は男だって。でも……くそ……やっぱ俺は女になって来てるんだ。このままじゃ完全に女になっちゃう

まっ。

俺は頭を抱えてしゃがみ込んだ。すると正雄の音が頭上から聞こえる。

「悟、すっかりしろ。お前は男だ。姫宮悟なんだ」

正雄の音が俺の頭に響いた。そして俺はゆっくりと頭を上げる。

俺の視界に真剣な表情の正雄が映る…

「悟、気持ちを強く持て」

正雄のその言葉は俺の心に響く。そして正雄は言葉を続ける。

「お前は妹の代わりに妹らしく、そして女らしく生活が出来るようにがんばった」

「妹の友人関係も壊したくないと、友達の前でも妹になりきるようにがんばった」

「でもな、お前はがんばりすぎたんだよ」

「お前は昔からゲームでも何でもキャラクターに対する思い入れが強すぎた。すぐに感情移入しすぎていた。そのキャラになりきってっていた。だから今回も自分が女として生活をする為に自分を本当の女だと、そう、まるで催眠術の様に自分に対して念じて女になりきるうとしていたんだ」

「待てよ、俺は女になりきるつもりなんて…」

「無意識だろうな……さっきのお前の変化を見たら完全に男から女に変化していた。お前は女になりきっていた。でもそれは本当のお前じゃない。偽物だ」

「でも正雄、聞いてくれよ！確かに俺は女じゃない、元は男だ！でもこの体の全てが完全に女になってるんだよ！生理だって来たんだ……俺の体は女なんだ！そして心まで女になりかけてるんだよ！俺の意志じゃどうしようも無いんだよ！」

「それは違うぞ悟、俺の話聞いてくれ」

正雄はそう言つと俺の目をじつと見た。

「あ、ああ……」

「今日は久々に男のお前を見たよ……古本屋で漫画を読んで大笑いしてさ……そしてファミレスじゃあ何時もの遠慮をしないお前を見た……俺は思ったよ。やっぱりお前は悟なんだってな。格好こそ女になったけどやっぱり俺の親友の悟なんだってな」

「正雄……」

「さっきお前が話してくれた事は全て野木に聞いてた。体も、染身体も、そして生理も。お前は完全な女の体になってるってな。それでもお前は姫宮悟なんだ。男なんだ。今日のお前を見て俺はそれを確信した」

「……」

「大丈夫、お前は悟だ。今日のお前は昔の悟と同じだった。女なんかじゃ無い」

「……」

「負けるな。お前は本当の女になる必要なんてない。必要以上に女らしくする必要もない。女の格好をしているが男。お前は生きて十七年も男だったんだぞ。それがたかが数ヶ月ほど女だった位で女になりきるなんて無い。お前の心まで女にする魔法なんて存在しない」

正雄の最後の一言がすごく俺の心に響いた。心までは女になってるはずはない。そりゃそうだ…蘇生したのは肉体だけなんだ…

「そつか…そうだよな」

「もっと悟らしく生活してもいいんじゃないのか？もし漫画が読みたいなら俺が貸してやる。ゲームがやりたいのなら俺の家に来ればいい。貸してやってもいい。男らしい話がしたかったら俺がいくらでも相手になる。買い物だって付き合っつてやる。何でも言え！出来る事ならやってやる！だから悟は悟でいろよ！解ったな！」

正雄はそつ言つと顔を上に向けた。

「正雄…」

「大丈夫…これからは俺が…いる…」

俺は初めて見た。正雄の頬を僅かに伝わるものを…

「やべ…俺ともあろう者が…ちょっと感情的になりすぎた」

正雄は上を向いたまますこし籠った声で言った。

そうだよ、俺は姫宮悟なんだ。俺は綾香の真似をすればいいだけ

なんだ。

フリをしていればよかっただけなんだ。体がどうであつても心まで女になる必要なんてこれっぽっちも無い！

俺はゆっくりと立ち上がる。

「正雄、ごめん……俺は男だよ、姫宮悟だよ！なのに何してんだろうな……馬鹿だよな」

「お前は馬鹿なんかじゃない……」

「でもな、こういう風に言つとまた正雄に怒られるかもしれない、ただと言つておくよ。俺にまた変な感情が沸くかもしれない……正直いつとそうならないという自信が無い……」

正雄は右手で何かを拭う。そして顔ゆっくりと俺の方へと向けた。

「その時は俺を殴つてでもいいから目を覚まさせてくれ！お願いだ！」

「ああ……解つた。これからは俺がお前を出来る限り監視してやるよ」

少しだけ目を赤くした正雄は本当に満面の笑みでそう言ってくれた。

「サンキュ！頼んだぞ正雄。でもまあそれほどずっと監視はしなくつていいぞ？」

「いや任せておけ、何ならお風呂とかも監視してやるつか？」



「へ？風呂！？」

「男同士だし、別に問題無いだろ？」

「ば、馬鹿！中身は男でも体は女なんだ！？そんなの監視しなくっていい！っていつかもしかして俺の体に興味あんのか！？」

「馬鹿か？冗談に決まってるだろ？だいたいそんな貧弱な体に興味なんて無い」

「だ、だよな……っていつか貧弱は余計だろ！」

「あははは」

正雄は目の前で声を出して笑いだした。

俺の目の前で目を真っ赤にした正雄が大声で笑っている。

そんな正雄を見てたら俺の目から何かが溢れてきた。

やばい……くそ……涙が…男になるって言ったばかりなのに…でもこれは…

「おい悟？お前…」

「馬鹿！これは男泣きだ！」

目から涙がどんどん溢れてくる。

「そうか、男泣きか、そうだな、俺も人の事は言えないしな」

俺は思わず正雄に抱きついた。そして声を出して思いっきり泣い

た。

「さ、悟！？な、何やってるんだ」

「だ…黙れ…ちょっとくらい…いいじゃないかよ…男だつて…涙は出るんだよ…親友の胸で泣きたい時だつて…あるんだ…く…」

正雄はゆっくりと俺の背中に手を廻した。

「…仕方ねーな…今回だけだぞ…」

俺の正体を知ってくれたのが正雄でよかった…

正雄が親友でよかった…もっと早く教えればよかった…

俺はこんなに想ってくれる最高の親友に何で相談もしなかったんだ…

後悔と感謝と入り乱れた感情で俺は涙が止まらなかった。

何故か成り行きで正雄が俺の自宅へと遊びに来る事になった。

正雄が今までにあった事なんかの話をしよつと言ってきたからだ。

しかし、ファミレスなんかじゃ話せないような内容も多々ある。

それで家で話をしようという事になったのだ。

本当は正雄の家に行こうかとしたのだが、今日は親戚が、もしかすると一彦君も来てるかもしれないという事で俺の家という事になった。

うちの親は今はい買い物に行っているので家には誰も居ないはずだし、あぁもしも見つかってももはやどうでもいい。正雄は俺の親

友なんだからな。

自転車を漕いでやっと家に到着。  
俺は自転車を駐車場へ置くと玄関まで行きドアを確認すと予測どおりしつかりと鍵がかかっている。

よし、誰も居ないみたいだな。俺は鍵を開けて家へ入った。

家の中には誰も居ない。そのまま俺は正雄を引き連れて階段を駆け上がった。

そして俺は綾香の部屋に入る。

その時、正雄が一瞬『あれ？』という表情に変わった。しかしすぐに理由がわかったらしく、横で勝手に納得をしている。

そして綾香の部屋の中

正雄は部屋を見渡し不満そうな顔をしている。

「おい悟」

「何だよ」

「なんか女の子の部屋みたいだな」

正雄はそう言うとき々な場所を漁り始めた。

「仕方ないだろ？俺は今は綾香なんだしここは元々綾香の部屋なんだ。って正雄、あんまり弄るなよ？俺のマジで部屋じゃないんだからな」

「解ってるよ。でも何だ？部屋は綺麗だし、化粧道具とかはあるのに漫画もゲームも何も無いじゃないか」

「だから仕方ないだろって言ってるじゃないか。綾香はそういう趣味を持ってないんだよ」

正雄は大きな溜息をついた。

「こういう事をしてるから悟は女になったとか勘違いするんだ」

「俺は俺なりに綾香になろうと努力した結果なんだよ！別に女になりたいって思った訳じゃないんだ」

正雄は再び溜息をつくくとベタンと床に座り込んだ。そして俺を見上げながら言った。

「もう一度ハッキリ言っておくぞ？お前は姫宮綾香になってるつもりだろうが全然違うからな？前にも言ったが口調から性格から成績まで全然違う。お前は妹の真似なんかしなくともいいんだ。そりゃ部屋をグチャグチャに汚せとは言わないがやりたい事くらいやれよ」

「まあ…そうかもしれないが…」

確かに正雄の言う通りで俺は綾香じゃない。だから色々な面で綾香とは違う。

でも俺は真似が可能な部分だけでも真似ようとしていた。

しかし勉強なんて俺が出来ない部分は真似しなかった。いや出来なかった。

そうだよな、真似が出来る所だけするとかやっぱ無意味だよな。

「でもな、別に男らしく振舞えって事じゃないぞ。ようするには要領よくやれって事だ。漫画でもお前の部屋から数冊ほど持って来て

ここで読む。それを元の場所に戻す。これでいいんじゃないのか？」

「でも綾香は少年漫画なんて読まないぞ」

「親に見られても『興味があつたから読んで』でいいんじゃないのか？ゲームだって同じだろ。興味があるからやる。飽きたら辞める。それが普通じゃないのか？」

何だか正雄の言ってる事が半分説教じみてきてる気がする。  
言い返せない分ちよつとムカついてきた。

「あー解つたよ！どうせ俺は要領が悪いよ！正雄みたいに頭よくねーからな！」

「何だよその言い方は。俺はお前の事を考えて話しをしてるだけだぞ」

「解ってるよ！」

「だったら何でそんなに怒ってるんだよ」

「お前が説教じみた言い方するからムカツクんだよ！よし！こうなつたら！」

俺は座った正雄に向かって思いっきり抱きついてやった！

「うお！悟！何するんだ！」

「今の俺の超必殺技！女体攻撃だ！」

「何だよそれ、意味わかんねー！」

俺が抱きつくのと冷静だった正雄は顔を真っ赤にして取り乱した。  
た。

こいつって何気に女に対する抵抗が無いみたいだな。

俺の腕の中で正雄がジタバタと暴れている。よし！更に追い打ちだ！

「さらにコンボ攻撃だ！」

「悟、待った！離せ！やめろ！」

「謝ったら許してやるよ！いくぞ！悟必殺！胸押し当て！」

俺は自分の胸をぎゅっと正雄の顔に当てた。

すると正雄は『うわ！』と驚きの声を上げて俺を突き飛ばすと、後ろに向かって飛んで下がった。

「痛いだろ！突き飛ばすなよ！」

「お前が変な事するからだろ！」

あれ？何だろう？前はこうやって男に触れるとすっごく緊張してドキドキしたのに…さっきは正雄にもすっごくドキドキしたのに…今は全然ドキドキしないぞ？それ所がすっげー面白いし楽しい！何か吹っ切れたかも！？

という事で全てにおいて俺より上な正雄を今日の俺は追い詰めている！

更に追加攻撃をして謝らせてやる！

「正雄、逃げるな！せつかくこんなに可愛い子が抱きついてやってるんだぞ？」

「何が可愛いだ！お前は悟だろうが！中身は男だろうが！」

あの正雄が顔を赤くしてオドオドしてる！

これって俺の圧倒的勝利か！？

「だから謝れば許すって言ってるだろ？」

「俺は何も間違った事は言っていないだろ？何で俺が謝るんだ？お前こそイキナリ抱きつきやがって！俺に謝れよ！」

「フフフ…どうやらもう一度おしおきが必要な様ですね」

俺はそう言って再び正雄に向かって飛びついた！

「正雄！覚悟！」

俺は避けようとする正雄を予測して抱きつく事に成功！

しかしその瞬間！部屋の扉が開き母さんと佳奈ちゃんの声が聞こえた。

「綾ちゃん、佳奈ちゃんが遊びに来てくれ…たわ…よ…」

「綾香！今日さ、古本屋に行ってたで…え…ええええ」

俺は正雄に抱きついたままゆっくりと後ろを振り返った。

するとそこには母さんと佳奈ちゃんの姿が！

や、やばい！思いつきり正雄に抱きついているのを見事に母さん

と佳奈ちゃんに見られてしまった！っていつかノックくらいしてくれよ…

正雄を見ると顔が俺の胸の辺りにしっかりと埋まっている。

いや埋まる程の胸は俺には無かった…ってそんな問題じゃない！俺は慌てて正雄から離れた。正雄は目の前で硬直してる…

再びゆっくりと後ろを振り向くと、後ろでは母さんと佳奈ちゃんまでもが硬直してる。

そして二人とも顔を赤らめて口を大きく開けていた。まるで金魚だな…

っていつかさ…これってかなりヤバイ感じか？いや、ヤバイだろ。

「何だ、ま、正雄君が遊びにきてたのね…お、お邪魔しちゃったね、ごめんね」

「お母さん！違うの！正雄は遊びに来てただけで…」

と俺の説明も聞かずに母親の姿は既に消えていた。

「ええと…綾香、ごめんね…まさかここまでの仲になってたとか知らなかったんだ。私もお邪魔だったみたいだし帰るね」

「佳奈ちゃん？違うの！これは違うから！さっきのは事故なの！正雄からも何か言え…じゃない…言ってよ！」

しかし正雄は無言で佳奈ちゃんをじっと見ている。

「エへへ！お邪魔しましたーっとなー！それじゃバイバイキーン！」

「バ、バイバイキーン…って佳奈ちゃん！」



佳奈ちゃんは部屋から廊下へと後ずさりをして出て行く。  
そして部屋を出た所で俺達に向かって敬礼をした。

「杉戸佳奈は姫宮綾香と桜井先輩の幸せを願っております！」

「え！？ちよつと何それ！」

そう言つて佳奈ちゃんは『バタン』と扉を閉めるとすごい勢いで階段を下りて行った。

何だよあれ！幸せなんか願わなくつていいし！つていうか最悪だー！予想外の展開すぎる！正雄はなんで何も言ってくれねーんだよ…俺は慌てて窓際まで走つた。そして外を覗くとすごい勢いで自転車を漕いで去つて行く佳奈ちゃんが見えた。

ああ…佳奈ちゃんが行つてしまった…

俺は壁に寄りかかつて座り込む正雄を睨んだ。

「おい正雄！何でだ！何で何も言ってくれねーんだよ！変な誤解を生んだじゃないか！」

俺がそう怒鳴ると正雄は冷静に言い返してきた。

「その原因を作つたのはお前だろ？」

「く…た、確かにそうだけど…でもあれだろ！少しはフォローしてくれてもいいんじゃないのか？」

「フォロー？いいじゃないのか別に？きつと俺とお前が付き合つてるとでも思われたんだろ？」

正雄は平然とした顔でそう言った。

「な、何を言ってるんだ！？解ってるのか？お前が言ったんじゃないか！交友関係には気をつけるって！なのに何が別にいいんだよ？意味わかんねー」

「俺はお前が悟だつて知っている。だから俺はお前とは正式には付き合うつて事はない。しかし、俺とお前が付き合っているって事になれば一彦を含む男達はお前には近寄らなくなるだろ？」

「え？それって？」

「偽装カップルでいいじゃないか。妹が戻ってきたら事情を説明して別れた事にすればいい」

「待て！妹に説明とか……出来ると思ってるのか？」

「出来るも何も、お前はこんなに妹の代わりに生活をしてきているのに、逆に妹にこの事を隠し通せるとでも思ってるのか？」

確かに…妹が戻ってきて俺と入れ替わったとしても茜ちゃん達の記憶を消すなんて出来ない。要するには今のこの生活、俺のやって来た事はどちらにせよ妹にはばれるんだ…

そうか…戻つて来たら説明しないと駄目なんだな…俺が死んで生き返った事も、綾香として生活をした事も…

「どうやら悟も理解したようだな」

「ああ、そうだな…正雄の言う通りだ…」

「だからいいだろ？俺とお前が偽装カップルになれば俺はこの家に

も普通に遊びに来れる。お前も俺の家に遊びに行ける。外にも一緒に遊びにも行ける。漫画もゲームも俺の趣味に興味があるから読んでもとかプレイしてるとか言い訳も出来るんだぞ？」

なるほど、そうか！流石正雄だ！俺はそんな事はこれっぽっちも思いつかなかった。

正雄はしっかりと先の事を考えていたんだな…すげー…

「よし、正雄、今日から俺達は恋人同士だ！但し偽りのな<sup>い</sup>な！」

「ああ、俺はお前の彼氏だ。妹が戻るまでのな。っとそうだ、一言だけいいか？」

「え？何だよ」

「今度俺に抱きついたりして来たら…ただじゃ済まないからな？二度とするなよ？」

そう言う正雄の目は本気だった…怖ええ…

「わ、わかったよ…」

こうして姫宮綾香・桜井正雄の偽装カップルが誕生した。

続く

おまけ

偽装カップル誕生前の出来事

私の名前は杉戸佳奈。今日私はまた見てしまったの！

そう、古本屋で桜井先輩と待ち合わせをしていた綾香を！

私は朝から暇だったので隣の古本屋で少女漫画を読んでいた。

するとそこになんとお出かけモードの綾香が登場！古本屋にお出  
かけ洋服、化粧バツチリ、本気モードで登場したの！

そうして私は思ったわ、何かあるって…そう！何も無いのにあんな  
格好で来るはず無い！

そうしたら当たった！その後に桜井先輩が登場！やっぱり待ち合  
わせだったみたい。

でも…何であそこで桜井先輩と待ち合わせするかな？古本屋なん  
てなんて渋い…

まあ私にはどこで待ち合わせしようと関係ないけどね。っと結局は  
二人で出て行ってしまったんだけどね。

流石にその後は追わなかったよ？だってストーカーじゃないし、  
読みたい漫画もあったしね。

っていう事で私はお昼になったので家へ戻ってる最中なんだよね。  
家に帰るついでに綾香の家の前を通ってみよっと！

そんなこんなで綾香の家の前までやって来てしまった。

あれ？綾香の家には綾香の自転車ともう一台自転車が…

これって桜井先輩のかな？たぶんそうだよな？って何？家に一緒に  
居るの？え？じゃあなんで古本屋で待ち合わせ？うわ…意味不明  
…何でだろ…

「あれ？佳奈ちゃんじゃないの？」

と声を掛けてくれたのは綾香のお母さんだ。

「あ、こんにちは」

「こんにちは」

つと挨拶は済ませて…帰ろうつと。

「遊びに来てくれたの？綾ちゃんはもしかしすると居ないかもしれないけど…ちよつと待ってね」

「あ、いいです！私はもう帰りま…つてもう家に入ってる…早い」  
このまま無視して帰る事も出来ずに玄関の前にいると、綾香のお母さんが出て来た。

「綾ちゃん居るみたいよ？誰かお友達も来てる見たいけど、寄っていく？」

お母さん、それってお友達じゃなくって彼氏だと思つのです。  
寄っていくつて言つちゃ駄目だと思ひます。

「いや、私は…」

「さあ、どうぞどうぞ！」

つて…何で手を引っぱられて中に入れられてるのかな…

「上がつて」

「いや、やっぱり…」

「綾ちゃん！綾ちゃん！もうあの子つたら…佳奈ちゃん来てるのに」  
何でお母さんは私の話を聞いてくれないかなーお邪魔なだけだし  
帰りたいのにい！

「早く上がつて、どうぞ」

あーもういい！上がつてやる！それで綾香に挨拶だけして帰る！  
桜井先輩が居てもいいや！『あ、こんにちは先輩、あ…お邪魔でしたね。ごめんなさい』よし！これだ！これでOKだわ。

私はお母さんと一緒に階段を上がった。

お母さんは軽くノックをした。しかし返事は無い…つていうか中から騒ぎ声が聞こえますが…

「もう、綾ちゃんつたら…入るわよ」

ああ！お母さん！もう少し確認してからの方が…つて遅いみたい！

こつなつたらシミュレーション通りに行くしか！  
お母さんは綾香の部屋のドアを躊躇もなく開けた。  
よし！仕方無い！入って速攻で一言だ！

「綾ちゃん、佳奈ちゃんが遊びに来てくれ…たわ…よ…」  
お母さんが固まった。

「綾香！今日さ、古本屋に行ってたで…え…えええ」  
私も固まった。

ダツテ…目の前で綾香が桜井先輩に抱きついていたんですもの…  
ああ…見ては駄目な物を見てしまった…ごめんね綾香…

「何だ、ま、正雄君が遊びにきてたのね…お、お邪魔しちゃったね、  
ごめんね」

お母さん、それは入る前から私は解ってました！…っていうか靴の  
サイズで理解して下さいよ。どうみても男ものじゃないですか…

「お母さん！違つもの！正雄は遊びに来てただけで…」

うわ！綾香が動揺してる…桜井先輩が固まってる…

…  
っていかお母さんいない！もう居ないし！わ、私も撤退しない  
と…

「ええと…綾香、ごめんね…まさかここまでの仲になってたとか知  
らなかつたんだ。私も邪魔だったみたいだし帰るね」

全然駄目だ！何を言ってるのよ私は…

「佳奈ちゃん？違つもの！これは違つから！さっきのは事故なの！正

雄からも何か言え…じゃない…言つてよ！」

ほら…綾香がすつごく動揺してるじゃん…

桜井先輩も私を無言でじっと見てるし！

に、逃げよう…早く逃げよう…何か言つて逃げよう…

「エへへ！お邪魔しましたーっとねー！それじゃバイバイキーン！」

「バ、バイバイキーン…って佳奈ちゃん！」

ギヤアア！何よ！何を言ってるのよ…もういい…終わった事…

ゆっくりと後ろに下がつて…出てから…きゃあ！また桜井先輩と目が合った！

こ、ここは敬礼しかない！パニック中

「杉戸佳奈は姫宮綾香と桜井先輩の幸せを願っております！」

え？ええええ！何だこれー！何をまた言ってるのよ！もうやだー！

私は勢いよくドアを閉めた。そして階段を夢中で下りた。

そしてお母さんにも挨拶せずに玄関を飛び出した。

「ごめんよ綾香…この事は絶対に秘密にするから許して…

私のがむしやらに自転車を漕いで家へと戻った。

終わり

第25話 弱い心と強い気持ち 後編(後書き)

次回更新は今月中とだけ…あと次回からはちょっとコメディィーに傾くかも？佳奈ちゃんには既に面白キヤラっぽくなってますけどね…



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0772o/>

---

ぷれしす

2011年10月10日03時25分発行